第5巻 第2号 1989年1月24日発行 1985年9月10日 第三種郵便物認可
SPECIAL ISSUE
おもしろ元気ヤング・ミュージック・マガジン・パチ・パチ
PATI PATI
PRESENTS
YEAR BOOK
1988→1989
STYLE
PRICE=980YEN
S89
TM NETWORK
BARBEE BOYS
THE CHECKERS
H. MATSUOKA
KOME KOME CLUB
K. HIMURO
YUTAKA OZAKI
UNICORN
MISATO W
BUCK-TICK
HOUND DOG / UP-BEAT / RED WARRIORS
BAKUFU SLUMP / SENRI OE / C-C-B / PRINCESS²
BUHI BUHI / PATI² DOKUHON / M. SEKIGUCHI
Y. OKAMURA / SOMETHIN'S ROUGH ETC...
PS S89
PATI PATI

ともかく、次の依頼人が、とびきりの事件をもってきてくれりゃ、ステキな仕事おさめになるってもんだ

ダーリン愛してるわ

フン！ ナイト・クラブの連中ときたら……

Sometimes I feel as though I'm dreaming…

First of all, we have to find a client

How about playing pool for a while?

Sounds good!

まず依頼人を捜す必要がありそうだな…

ねえ、どこかで少し玉をついてかないか?

いいね！

Wow! Did you see that No.5?!

It's my day today

時々、夢を見てるような気がするんだ

ヤッホー！
今の5番ボール見たかい?

今日はボクがいただきだな

メリークリスマス、ハニー
全てはうまくいってる?

ハロー?

きっとね

あしたになればきっとステキな未亡人が失踪した子ネコの捜索に手を貸せっていってくる

来年度の航空宇宙局の予算は…

そりゃホントの話かい?

パリでスポック氏に逢ったわ
ベンガル湾で大昔の独裁者
も見かけたし……

やあキミか./ 旅行はどうだった?

たぶんね、だからぐっすりおやすみなさい

来年になったら逢えるかな?

もちろん、あなたの好き
なおとぎ話に決まってる
でしょ?

COMIX●MIEKO HARA　TRANSLATION●NORIKO

SPECIAL▸ISSUE

PATI▸PATI PRESENTS STYLE

YEAR▸BOOK 1988→1989

S63

PRICE=980YEN

1年間のごぶさたでしたっ!! 年末恒例『パチ▸パチ・スタイル』が、今年もドド〜ンッとやってきたっ!! 今年も大活躍だった掲載アーティストを『ぜ〜んぶ大特集!!』でお送りする他、業界初の試み『パチ▸パチ読本』のオマケつきっ!! 内容だってバッチリ保証しちゃうってなもんや三度笠。'88年音楽界の総決算は、この『パチ▸パチ・スタイル』1冊でOKさ!!

TM NETWORK

SPECIAL ISSUE
PATi-PATi PRESENTS STYLE
YEAR BOOK 1988→1989
PRICE=900YEN
目次 CONTENTS

●'88年。TM NETWORKが当然のように世界を舞台にし始めた年。3人のTM NETWORKとも、ひとりひとりのTM NETWORKも、ますます魅力的になってきてしまった。LONDONに行ってるからって、NEW YORKに行ってるからって、うっかり目を離すことなんてできなかった3人。PATi▶PATiでは初の2号連続表紙＋巻頭特集にひき続き、STYLEでも30ページの巻頭特集。だからここ2ヶ月の合計ページ数なんてすごいぞ。インタビュー、Q&A、"彼女"の内緒うちあけ話、そしてライブこぼれ話と、超多忙スケジュール表（のほんの一部）etc欲張りなT−MUE−NEEDSも満足してくれるハズの構成。

［F･C］タイムマシンカフェ　〒153目黒区大橋1−9−20　マンションみつばさ103　㈱T−MUE−NEEDS内

小室哲哉

●S33年11月27日生、射手座。血液型はO型。東京都出身。167cm、47kg。　(key)

宇都宮隆

●S32年10月25日生、蠍座。血液型はO型。東京都出身。179cm、60kg。(vo)

木根尚登

●S32年9月26日生、天秤座。血液型はB型。東京都出身。174cm、59kg。(g)

◀宇都宮隆にスポットをあてた巻頭特集、"彼女"の発売にちなんで写真のほうは名場面の再現でした。ウツの演技力が微妙な表情に表れていて、一見の価値有り。また違った一面を見せてくれた"彼"。帰国したての2人の声もキャッチ。

◀アルバム「CAROL」の発売日と「CAROL」ツアーの初日、そしてPATi▶PATiの発売日が同じだった12月9日。この記念すべき日の特集は、DISC編、STAGE編という構成。今後の活動への予習ができるページ。

◀『彼女』──宇都宮隆を主人公とした架空小説。森田恭子と福岡久美子著で、パチ▶パチで話題を呼び続けた連載が単行本に。ニューヨーク、ロンドンでの撮りおろし写真に加えてその後の彼女たちのお話も載っている豪華な本。

YUTAKA OZAKI

●1988、それは、尾崎豊にとって、そして、彼を見つめているすべての人々にとって、忘れることができない年となった。

瞬間、彼を知る誰もが、彼の"引退"という2文字を思い浮かべ、そしてその言葉のもつリアリティをなかなか感じることができず、気持ちが、ただひとつ、ぽつんととり残されていた。

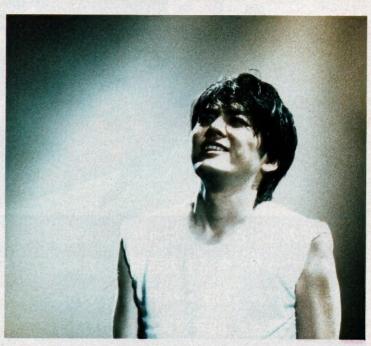
そして、突然のアルバムの発売、さらにそのアルバムが話題を呼んでいる最中の、いきなりの、しかもたった一度のBIG EGGでのコンサート。その後は何もない。

1988OZAKI　RECORDS。

◀PATi▶PATi7月号。この時の尾崎くんは積極的でした。ああもしたい、こうもしたいと、企画に前のめり。彼のその姿勢の前傾ぶりにスタッフもたじたじといったところ。元気になってほんとによかった。そう思いました。

◀PATI▶PATi10月号巻頭特集。お花畑の尾崎が話題を呼びましたねー。また中味も、いつものイメージっぽいモノクロの写真ではなく、カラーのパッチリとした尾崎豊でしたね。次はどんなふうに撮るか、考えておこうっと。

◀尾崎豊写真集"WORKS"1983年デビューから、88年まで。彼の5年間のきせきがこの中にあります。ハガキをいっぱい頂いてますが、皆の大事な一冊になっているようで、とても嬉しいです。ずうっと大切にしてあげて下さい。

●S40年11月29日生、射手座。東京都出身。バックバンドは「HEART OF Claxion」

KYOSUKE HIMURO

●彼にとって'88年は、もっともドラスティックな年だったに違いない。そして、彼は、'88年が終えんを迎え、'89年が来た瞬間、早くもスパートをかけようとしている。そこに、時代を駆け抜ける男が1人いる。

●S35年10月7日、群馬県高崎市に生まれる。天秤座。血液型はO型。身長は174cm。

◀"DON'T KNOCK THE ROCK"——このツアーブックの中で、ただひたすら高みを極めんとする彼と素顔の繊細な笑顔をもった彼の両局面が見れた。ちなみにツアーブック第2弾が'89年2月中旬に出るのでお楽しみに!

◀PATi▶PATi 4月号。しかし、なんて素敵なんでしょうねー。写真をとっていてこれほど、観る側を興奮させてくれるアーチストはいません。さらに素敵にエキサイティングで、それでいてクールなHIMUROが見たい。

◀絶頂の時だというのに、解散してしまったBOØWY。しかし、一歩さがってみて、BOØWYの写真集"RENDEZVOUS"をみると、その輝やかしき瞬間が、より鮮明に、せまってくる。確かにBOØWYは一番だった。

●日本のロック史上、最高のユニットBOØWY。彼等が我々に投げかた伝説は、あまりにも巨大である。今年、4月4日、5日、の東京ドーム公演を最後に、BOØWYは永遠に、我々の心の中だけの存在となってしまった。今後は、4人それぞれが築きあげる伝説に注目をしていきたい。

BUHi♥BUHi

●うわぁ〜!! BUHi♡BUHiもスペシャル化してしまったもんだ。キミたちのどわ〜い好きなクイズもあるしィ、そぼくなギモンスペシャルはあるしィ、ちと涙と汗の結晶モンねっ! 最近よくもらうお手紙の中で"BUHi♡BUHiって気が抜けるページで好きっ"とか"まっ先に読むページなの"なんて書いてくれる子もかなりいるワケ。ま、力を入れずに読めるというジジツはあるわいな。一番身近で一番ハチャメチャなページなんだからして。他のページはみィんな、カッチョイイけど"BUHi♡BUHi"はまた、ひと味ちがった味わいがあるワケだね。(と自分で書いてりゃセワないって)

ハッキリ言って文字もいっぱーいあるからココロして読んでおくれ! スミからスミまで読んでくれるPATi▶PATi読者ならキット苦ではないと思うがひとつヨロシク。ウ〜ンと考え抜いたあげくの企画。楽しんでやってちょうだい。

HOUND DOG

●HOUND DOGの88年は、またしてもツアーづけの毎月で終わり。そして89年もその姿勢に変わりはなく、あくまで彼ら6人は走り続ける。

ところで突然ですが、お知らせです。ハウンド・ドッグの本がでます。'89年1月下旬発売です。くわしくは、258ページを見て! タイトルは『GOLD』!

◀いやー、なんだかといっても懐しい表紙。福島、仙台、盛岡と、ハウンド・ドッグの後を追いかけまわして、作った表紙巻頭ページ。とてもコンサートの合間のわずかな時間で取材したとは思えないグレートなできでしょ?

蓑輪単志

●S34年12月17日生まれの射手座。血液型はO型。キーボード。

鮫島秀樹

●S30年4月19日生まれの牡牛座。血液型はB型。ベース。

西山毅

●S37年1月7日生まれの山羊座。血液型はA型。ギター。

大友康平

●S31年1月1日生まれの山羊座。血液型はA型。ボーカル。

八島順一

●S31年2月19日生まれの魚座。血液型はO型。ギター。

橋本章司

●S31年10月11日生まれの天秤座。血液型はA型。ドラムス。

BARBEE BOYS

●ニューアルバム『√5』の発売を間近かに控えたバービー。今年は、ビッグエッグ、代々木体育館、甲子園球場など、ドデカイコンサートをビシバシこなしてくれたね。今回も恒例の10大ニュースさ。

[F.C]キティーサークル内「負けるもん会」〒153目黒区大橋1-7-4 久保ビル4F ☎03(770)5033

◀BARBEE BOYS・BIG GAMEと題した5月号です。レコーディングも、ツアーも、TVも、ラジオも、インタビューも、みーんな、みーんなゲームとして楽しんじゃう彼等のウラ側を、バッチ取材したのだっ!!

◀ウエルカム・バービーボーイズ!! メンバー5人、それぞれの大クローズアップ他、サスが、パチ▶パチならではの写真を満載っ!! この1冊でバービーボーイズの全てがわかる決定版!!(ホントだょ)企画だって盛りだくさんっ!!

近藤敦

●S35年7月25日生まれの獅子座。血液型はO型。東京都出身。サイズは不明とのこと(!?)(Vo sax)

杏子

●S35年8月10日生まれの獅子座。血液型はA型。長野県松本市出身。身長157cm。ボーカル。

いまみちともたか

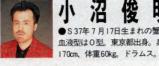
●S34年10月12日生まれの天秤座。血液型はAB型。東京都出身。身長175cm、56kg。ギター。

エンリケ

●S39年2月3日生まれの水瓶座。血液型はA型。コロンビア出身。身長180cm、体重62kg。ベース。

小沼俊明

●S37年7月17日生まれの蟹座。血液型はO型。東京都出身。身長170cm、体重60kg。ドラムス。

HIDEAKI MATSUOKA

●飛躍的な成長をみせた、我等がサイバーボーイ、松岡英明であります。なんだか人の何年分をもいっきにすごした1988年を、つぶさにふり返ってもらったよ。

［F･C］EVE EVE 〒106 港区麻布台1－8－10 偕成ビル6F NONSTOP ☎03-582-6506

●S42年12月23日生まれ。山羊座。血液型はO型。神奈川県横浜市出身。170cm、45kg。

◀初の表紙＆巻頭大特集号！何をやるかと思いきや、いきなり力コブ作って"ウソ"を表現するだなんて、なんておちゃめ。発売日には、まつぼ一自ら上野駅で購入したんだそうです。そういう人です。まつぽーって。

THE CHECKERS

藤井郁弥
●S37年7月11日生まれの蟹座。血液型はA型。福岡県久留米市出身。163cm、53kg。ボーカル。

藤井尚之
●S39年12月27日生まれの山羊座。血液型はA型。福岡県久留米市出身。170cm、60kg。サックス。

武内享
●S37年7月21日生まれの蟹座。血液型はA型。福岡県田川市出身。166cm、54kg。ギター。

鶴久政治
●S39年3月31日生まれの牡羊座。血液型はA型。福岡県久留米市出身。172cm、66kg。ボーカル。

徳永善也
●S39年6月7日生まれの双子座。血液型はA型。福岡県久留米市出身。174cm、59kg。ドラムス。

高杢禎彦
●S37年9月9日生まれの乙女座。血液型はA型。福岡県久留米市出身。171cm、60kg。ボーカル。

大土井裕二
●S37年11月2日生まれの蟹座。血液型はB型。福岡県田川市出身。176cm、60kg。ベース。

●この人達ほど、1年間の話題が豊富なバンドはいない。この人達ほど、1年前の写真をそ知らぬ顔して載せようとしてもバレてしまうバンドはいない。(笑)今年もいろいろありました。お馴染みのパーソナルライターによる"今年の話"をお楽しみにね。ひさびさの解剖学も、みなさんからの手紙を頼りにメンバーを直撃しているので、早く見てくれいっ。

［FC］CUTE BEAT CLUB 〒103 中央区日本橋浜町2-15-5 ビラ浜町8F ☎03-668-4000

◀人間クリスマスツリーと化したチェッカーズ。この号のパーソナルインタビューを読むと、みんなが漠然とやりたがっていた事が、今年1つづつ実現していってるってことがよーくわかる。ちゃんと歩き続けているんだなぁーっ。

◀アルバム「SCREW」完成時の興奮をお届けしました。「7つの舌を出せ！ タングアウト!!」ってやってますね。大人っぽいモノクロームの写真に、意外な魅力も発見。尚ちゃんのハトを、うらやましげに見てた人もいたのだよ。

MISATO WATANABE

●今年の彼女は、バンドとのからみが、ステージでの一番のポイントになっていたけれど、標準的なラインは、あっという間にクリアーしてしまって、いまや、バンドとのコラボレーションは最高の状態にきている。このままツアーを消化していった時に、果たしてどんな音と歌をこちらに届けてくれるのか、と思うと、なんだか、とても空恐しく感じてしまうくらいだ。

が、でも、渡辺美里に会って、「こんにちは」と言うと、彼女は、デビューしたての時とまったくかわらない笑顔と、そして、ほんのちょっぴりの"はにかみ"をもって「あっ、こんにちは」と返してくれる。その"はにかみ"がいつもとても彼女をキュートにしている、と思う。

それは、渡辺美里の何に対してもとても真剣な気持ちで立ち向かっている姿勢の、ほんの一瞬のインターミッションであり、とても素敵に可愛い君の心の奥底の軽いいたみでもある。

そんな渡辺美里だから、今までも、今も、そしてこれからも、信じてられるんだ。

●S41年7月12日生まれの蟹座。血液型はO型。京都府出身。視力は極めて良いほう。バックバンドは「Lover Soul」。

◀「私、カンガルーといっしょに撮ってみたい!!」

彼女は、開口一番そうのたまわった。困って、慌てて、走りまわって、札幌と神戸とフランスまで、カンガルーのぬいぐるみを追いかけた。冷汗のパチ▶パチ6月号撮影。

KOME KOME CLUB

●今年はメンバーに変動があったりして、コメコメにとってポイントになった年だったと思います。「KOME KOME WAR」でTVにも出演。お茶の間のお米になりましたが、相変わらずの身勝手な活動ぶりに、拍手パチパチ、です。思わず悪のりしたラジオ企画を誌上掲載。

◀「車輪の上」をテーマに、石井さんの絵と写真を合体させて絵本にしました。忙しい中を徹夜で絵に取り組んでくれた石井さんに感謝！ それにねぇ、今だから言うけど、あの石井さんが下敷きになった車輪、すっげー重かったの。

◀人知れぬ孤島でおきた、いきなりの殺人事件。朝早くから陽が落ちるまで、どっぷり取材につかっていただいてしまいました。最後に小道具のグラスに本物のシャンパンをついで、ホントの乾杯。しかし真犯人はいったい誰だ？

◀「罪と罪」に続く単行本第2弾！ 好評の「石井兄妹物語」もますます筆がさえ、ついにはキャラクターがTシャツになって発売されましたね。それだけじゃないっ。ツアーで売られてる貯金箱「ザ・石井兄妹」は見もの、ですっ。

J.小野田

●S33年11年8日生まれの蠍座。血液型はA型。神奈川県川崎市の出身。175cm、85kg。ボーカル。

ボン

●S35年3月5日生まれの魚座。血液型はA型。神奈川県川崎市出身。181cm、69kg。ベース。

J.得能

●S34年8月10日生まれの獅子座。血液型はO型。東京都出身。身長は162cm、体重は？kg。ギター。

F.金子

●S39年3月22日、牡牛座。血液型はA型。千葉県出身。178cm、60kg。サックス。

H.下神

●本名：下神竜也。S39年7月15日生まれ。A型。オルゲスタ・デ・ラ・ル・ス在籍。

G.Iジョー

●本名：多田暁。S35年11月23日生まれ。A型。NAMBY-PAMBY在籍。

C.S.石井

●S34年9月22日生まれの乙女座。血液型はB型。茨城県出身。身長㊅114cm、㊮5cm、体重2t。Vo。

リョージ

●S34年4月25日生まれの牡牛座。血液型はA型。福岡県大牟田市出身。170cm、60kg。ドラムス。

ミナコ

●S36年12月18日生まれの射手座。血液型はB型。茨城県出身。161cm。体重？kg。

マリ

●S41年11月20日生まれの蠍座。血液型はA型。茨城県出身。身長164cm、体重？kg。

河合わかば

●年齢、性別、出身、全て不明。さすらいのトロンボーン野郎。

Wドリブル

●ウマイよ、安いよ、大きいよ。CFには石井一家も登場した、幻の名菓。Wトリプル饅頭。

PRINCESS PRINCESS

●'88年、最も成長の度合が大きかったのは彼女たちに違いない。成長の記録です。

奥居香

●S42年2月17日生まれ。東京都出身。血液型はO型。ボーカル&ギター。

中山加奈子

●S39年11月2日生まれ。横浜出身。血液型はB型。ギター&コーラス。

富田京子

●S40年6月2日生まれ横浜出身。血液型はB型。ドラムス。

今野登茂子

●S40年7月18日生まれ。埼玉県生まれ。血液型はO型。キーボード。

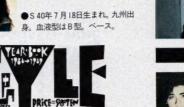
渡辺敦子

●S40年7月18日生まれ。九州出身。血液型はB型。ベース。

BUCK-TICK

●ハッキリ言って、今年のBUCK-TICKは凄まじかった。アルバムチャート初登場1位にはじまり、全国どこへ言ってもコンサートホールは超満員。CMには出るワ、レコード大賞新人賞はとるワ、とにかく破竹のバクチク現象だった。

［F・C］BUCK-TICK CLUB
〒150渋谷区渋1−10−7グローリア宮益坂III1203号☎03(498)9041

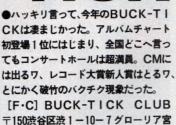
星野英彦

●S41年6月16日生まれ。双子座。A型。群馬県藤岡市出身。（ギター、コーラス）

樋口豊

●S42年1月24日生まれ。水瓶座。A型。群馬県高崎市出身。（ベース）

桜井敦司

●S41年3月7日生まれ。魚座。O型。群馬県藤岡市出身。（ボーカル）

今井寿

●S40年10月21日生まれ。天秤座。O型。群馬県藤岡市出身。（ギター、コーラス）

ヤガミトール

●S37年8月19日生まれ。獅子座。A型。群馬県高崎市出身。（ドラムス）

MAKOTO SEKIGUCHI

●たくさんの才能を持つ人が、自分をコントロールできるようになった時は怖い。
［F・C］ メイクラブ 〒150渋谷区神山町11－17 日興パレス206号 ☎03-465-5740

◀単行本第2弾「青春ちゃん」…青春ちゃんは、バナナの絵、でござんす。今や全国の高校指定図書となって、図書館に飾られる日も近いと言われている。続く第3弾「君の名を呼びたい（仮題）」もお楽しみに。関口は書いてます。

UP－BEAT

広石武彦
●S40年1月24日生まれの水瓶座。血液型はAorB型。福岡県出身。身長、175cm。ボーカル。

岩永凡
●S40年10月20日生まれの天秤座。血液型は不明。福岡県出身。身長178cm。ギター。

東川真二
●S39年7月24日生まれの獅子座。血液型はO型。福岡県出身。身長175cm。ギター。

水江慎一郎
●S40年7月2日生まれの蟹座。血液型はO型。福岡県出身。身長180cm。ベース。

嶋田祐一
●S39年11月17日生まれの蠍座。血液型はO型。福岡県出身。身長170cm。ドラムス。

●UP－BEATのメンバー4人は、長崎に入り、ラジオ番組出演とコンサートリハを順調にこなしていた。あと残るはパチ▶パチの撮影を残すのみ。
が、しかし、編集者の脳裏をとても、いやな予感がよぎった。UP－BEATのメンバーが、なんと撮影中に海に落ちてしまうというのだった。『そんなバカな、海に行かなきゃいいんだ』と言いきかせたのだが、またしてもなんと、結局海に行ってしまうことになってしまう。そして、夢は正夢に向かって爆進したのだ！

BAKUFU-SLUMP

●PATｉ▶PATｉとBAKUFU-SLUMPのこの1年はBAKU・PATｉ大運動会に明け暮れたといっても過言ではないでしょう。感動の全国7ヶ所での大運動会への行程を、ついに暴露！じゃなくて発表する全会場でのメンバーチームの成績発表。BAKUFUのでかさをもう一度確認してくれたらサイワイ。

パッパラー河合
●S35年9月14日生まれの乙女座。血液型はB型。千葉県出身。身長、171cm、59kg。ギター。

サンプラザ中野
●S35年8月15日生まれの獅子座。血液型はB型。山梨県出身。身長181cm、65kg。ボーカル。

ファンキー末吉
●S34年7月13日生まれの蟹座。血液型はA型。香川県坂出市出身。166cm、67kg。ドラムス。

江川ほーじん
●S36年6月15日生まれの双子座。血液型はA型。大阪府出身。身長、160cm、52kg。ベース。

SENRI OE

●名作と呼ばれたアルバム、「1234」。'88年の千里くんはますますたくましく、骨太なことばを毎月毎月語ってくれた。PATｉ▶PATｉ・STYLEの定番とも言うべき千里くんの特集にこの1年のインタビューと取材の記録。そして'88年を振り返るロング・インタビュー。創刊号から皆勤賞の彼ならではの特集です。
［F・C］SENRI STATIONKIDS 〒160 新宿区南元町1-6信濃町スタジオB1CSアーティスツSDKグループ内

●本名：大江千里。S35年9月6日生まれ。乙女座。血液型O型。大阪府出身。デビュー曲：ワラビーをぬぎすてて（'83年5月21日）

UNICORN

●もんのすごぉく人気ものになってしまったUNICORN。ま、当然といえば当然だよね。その実力の(?)10大NEWS。
[F･C] 〒107 港区六本木3－17－7 四明ビル6F ☎03(585)1392

奥田民生
●S40年5月12日生まれ。牡牛座。広島県広島市出身。(ボーカル、ギター)

堀内一史
●S40年10月2日生まれ。天秤座。B型。広島県広島市出身。(ベース)

手島いさむ
●S38年8月27日生まれ。乙女座。B型。広島県呉市出身。(リードギター)

阿部義晴
●S41年7月30日生まれ。獅子座。A型。山形県出身。(新加入のキーボード)

川西幸一
●S35年10月20日生まれ。天秤座。O型。広島県呉市出身。(ドラムス)

NEXT SCENE

●バンドブームと言われて久しいけど、今年もでました、イカシタバンドたちが。
やっぱし、バンドがオモシロイよね。なんたって、ロック本来の持つ強さと、もろさを感じるじゃない。あのキンチョー感がたまらないんだよね。観る側、聴く側をグイグイ引き込むパワーは、やっぱりバンドならではのもの。
きごころしれた仲間が、せーのっで出す音は、言いようのない魅力であふれてるよね。
そんなトビッキリのニューフェイスを、パチ▶パチ・スタイルで紹介しちゃおう。
来年の今頃、「あたし、このバンド、前から目ぇつけてたんだ」ってな具合に自慢して欲しいな。

グラスバレー
●7月リリースのアルバム「STYLE」も大好評。ライブの実力も、ツアーで実証されている。

J (S) W
●メッチャクチャ僕らを楽しませてくれたジュンスカ。その明るく、元気なビートは永遠に不滅である。

FABIENNE
●美しいメロディーと、ナチュラルなサウンドが魅力のフェビアン。中心人物、古賀森男の動向に㊟

KATZE
●'88年最後のエリート・バンド。インディーズ出身でも、オーディション出身でもないがパワフルだ。

レピッシュ
●その名も、キング・オブ・ポコチンロック!! スーパー・エキセントリックなゴキゲンバンド。

エレファントカシマシ
●みょう、だよ……みょう。宮本のボーカルセンスは、'88年ロック界最大の目玉と言えるだろう。

ROLLIE
●広島出身の4人組。シンプルな中にも、キラリとポップなセンスが光る。

THE TOYS
●本田恭章とTENSAWの合体!! といえば、そのサウンドクオリティは想像がつくね!!

YASUYUKI OKAMURA

●いつもいつもセンセーショナルなメロディーと歌詞で話題をふりまきまくってくれた我らがオカムラ、そのあまりにも愛すべきヘンな天才ぶりをヨロシク。
[F･C] DATE 〒150－91 渋谷郵便局私書箱76号 オフステーション内

●本名:岡村靖幸。S40年生まれ。兵庫県神戸市出身。ボーカルのみならず、ギター、ベースもこなす。デビュー曲:OUT OF BLUE('86年12月1日)

C－C－B

●"俺達のやっているのはロックじゃないんじゃないか?"——それでもいい。自分が信じる音楽があって、それを皆が欲っしてくれていれば。'88年の物想いが89年のC－C－Bに確かにNEW YEARをもたらそうとしている。

渡辺英樹
●S35年2月1日生まれ。血液型AB型。東京都出身。身長167cm、50kg。ボーカル+ベース。

田口智治
●S35年10月27日生まれの[illegible]座。血液型はB型。東京都出身。身長169cm、50kg。キーボード。

笠浩二
●S37年11月8日生まれの[illegible]座。血液型はAB型。東京都出身。165cm、56kg。ボーカル+ドラムス。

米川英之
●S39年3月3日生まれの魚座。血液型はB型。東京都出身。身長170cm、56kg。ボーカル+ギター。

●[illegible]界初!! パチ▶パチならではの企画。

RED WARRIORS

●いろーんなことやってくれた。あれだけの音楽性をもっていて、これだけハメをはずしてくれるなんてやはりKINGS。藤沢女史とのバトルで'88の笑いを収めを。
[F･C] RED'S BASE 〒150渋谷区渋谷1丁目－20－28 ミタケビル3F

田所豊
●S37年3月12日生まれの魚座。血液型はB型。埼玉県出身。通称、ユカイ。ボーカル。

木暮武彦
●S35年3月[illegible]日生まれの魚座。血液型はB型。埼玉県出身。通称、シャケ。ギター。

小川清史
●S39年4月25日生まれの牡牛座。血液型はO型。埼玉県出身。通称、キヨシ。ベース。

小沼達也
●S34年3月29日生まれの牡羊座。血液型はB型。埼玉県出身。通称、コンマ。ドラムス。

◀[illegible]の洋書コーナーに並んでしまうというこのカッコイイ表紙に、メンバー4人の文字通り、涙と笑いの[illegible]の生いたちからバンド結成までのストーリー。再三の発売延期にもめげず、完成しました王[illegible]の書。写真もいいぜ。

TWORK
●TM NETWORKがくれた、音と、光と言葉。TM NETWORKがくれた、とてつもない心ときめくものたち。それらをかき集めて、何度も心を震わせ、何度も瞳を輝かせた人たちへ贈ります。それらを作り出した彼ら3人のインタビューやQ&Aや、いろんなこと。地球サイズで動き回り、地球サイズでいろんなものを作り出してくれた'88年の3人。何だか遠いところに行ってしまったように錯覚しそうだったけれど、彼らは今年、こんな所に居ました。
PHOTO●HIDEO KANNO COPY●KYOKO MORITA(TAKASHI UTSUNOMIYA) MIHO UTSUNOMIYA(NAOTO KINE) TAKAO NAKAGAWA(TETSUYA KOMURO)
STYLING●AKEMI IWASE HAIR&MAKE-UP●YOSHIO YOKOHARA

TM NET

TM NETWORK

INTERVIEW '88-'89

TETSUYA KOMURO

ここ何年かで最も鍵盤にさわっていた年。

●ロンドンの住人になってしまった小室哲哉。ロンドンに行くのではなくロンドンに帰る人である。もちろん"小室哲哉がロンドンに住む"という意味を、嬉しいくらいにカタチにしてくれている人だ。

——この1年というと、転機というか、大きな動きがあった年ということになりますよね。まず"KISS JAPAN"ツアーの後半が年明けから続いていて、すぐにアリーナ・ツアーにつながっていく。それが終わるとロンドンに——。

「むこうの学校みたいな進み方ですね。夏休みが長くて、秋から新学期が始まるみたいな（笑）。昔のローテーションというのは必ず春に向けて出発してたんですけどねェ。デビュー・アルバムも4月で、その次も春にアルバムが出てそれからツアーという形だったんだけど、いつの頃からか、秋にアルバムが出て春にツアーが終わるというローテーションになってしまいましたね。

今年なんか、表面的には、夏は休んでたというイメージがありますよね」

——ロンドンでいっしょうけんめい働いていたのに。（笑）

「水面下では。（笑）でも、忙しかったけど、ここ何年かの中では、音楽に集中できた年でしたね、今振り返ると。音楽がいちばんメインになったんじゃないかな……。11月ぐらいからまた日本に帰ってきて、いろんなことをやらなきゃいけなくなったけど」

——音楽がメインになったというのは、具体的にいうと？

「具体的にいえば、ここ何年かで、いちばん鍵盤にさわってた年じゃないかな」

——年頭のツアーから順番にきいていこうと思うんですけど、やはりツアーの後半というのは、慣れがいちばん怖いと。

「そうですね。それの解消法というのは、次に向けての何かが頭の中にあることなんです。そういう意味では、次にアリーナ・ツアーというのがひかえてたので"KISS JAPAN"のツアーは後半もテンションを落とさずにやれたといえるかもしれないですね。

慣れというのは、ツアーをやってるうちに次々とやりたいことが出てくるのにコンサートのメニューは変えられない、というところからくるものだから」

——不満なところをアリーナ・ツアーで解消できるだろうから、後半の慣れを振り切ることができた。

「だから、アリーナ・ツアーの完成度もかなり高くなったと思うんです」

——"FANKS"以後の流れのピリオドのような意味もあったんですね。

「そうです。そういう気はすごくしてます。それに、やる側としてもいちばん余裕のあるコンサートでした。今までのノウハウをすべて生かしたものだったし、逆のいい方をすれば、無謀なことはひとつもやらなかったし。出来うることをやったから、どうしてもあそこがうまくいかなかったという不満もなかった。

それから、前にもいったかもしれないけど、デビュー当時に描いていた形というのはああいうものだったような気がする」

——シアトリカルという言葉でくくることの出来るコンサート。

「ウン。やっと出来たかなって気がする」

——4月にツアーが終って、すぐに小室さんはロンドン永住に……。

「永住というのはちょっと大ゲサですけど。（笑）とりあえず行くという」

——実際に半年間暮らしてみて、実現としては良いものだったというわけですね。

「今思ってるのは、やっぱり日本とロンドン半年交代というのが自分の体質にもいちばんいいということですね。春から夏にかけてロンドンでゆっくり腰をすえて、秋から冬にかけて日本で……もまれるというか。来年もこのペースでいければいいなという感じです」

——ロンドンに1年住んじゃうとニブッてしまいますか？

「ウン、ゼッタイ退化するというか、（笑）日本に戻ったときに、ウラシマ現象が起こってしまうのではないかと。そういうこともあるし、今の時代をアーティストとして生きようとすると、ロンドンでは情報量が少ないということもある。英語が、一般の会話で困るようなことはないんだけど、専門的な話になってくるとわからないということがあるから。そういうトータルした情報が、自分にとっては少ないからね」

——しかし、日本にいるときの余分な部分をロンドンにいればわずらわされずにすむ。

「そうです。短所と長所があって、トータルすると今年のペースはプラスだなということ。半年というのがその条件ですね」

——ロンドンでいちばん変わるというのは普段の生活のリズムでしょ。

「そうでしょうね」

——理想に近いパターンですか？

「音を創るってことに関しては理想に近いですね」

——食生活とかは？

「まあ、そんなに問題はない。元々味にはこだわらないから、マズイ、オイシイはあまり感じなかった。グルメじゃないからその点は気にならないですね」

——8月に日本に帰ってきたときは、ズレというか違和感のようなものを感じましたか？

「8月のときは、ホントに来日気分で遊んじゃったから（笑）、観光に来たみたいな感じで。そういう気持ちをチェックするヒマもなかったですね。僕の中では、アッという間に、夢のように過ぎてしまいましたね。BIG EGGも"真夏の夜の夢"そのものだったし。11月に帰ってきてやっと細かいとこまで目が行くようになったんですよね。確かに8月の2週間は日本に帰ってきてたんだけど、気分としては4月からずっと帰ってなかったという感じです」

——日本からロンドンに帰ったときは？

「やっぱり自分の家に帰ってきたなという感じでしたよ。他のメンバーやスタッフはホテルにチェック・インだけど、僕は家に帰れるわけですからね」

——考えてみれば、'88年は小室さんにとって、ツアー、ロンドン、レコーディングという風に単純に割ってしまえるんですね。

「そう、それだけですね。で、おみやげがニュー・アルバムということになりますね」

——ロンドンではそれでもレコーディング作業という時間が最も大きい割合でしょ。

「確かに毎日のスケジュールというとレコーディングなんだけど、単純に時間を計算すると"生活"の方が大きいですね。東京にいるときと比べると、ロンドンでの"生活"の割合はずいぶん違う」

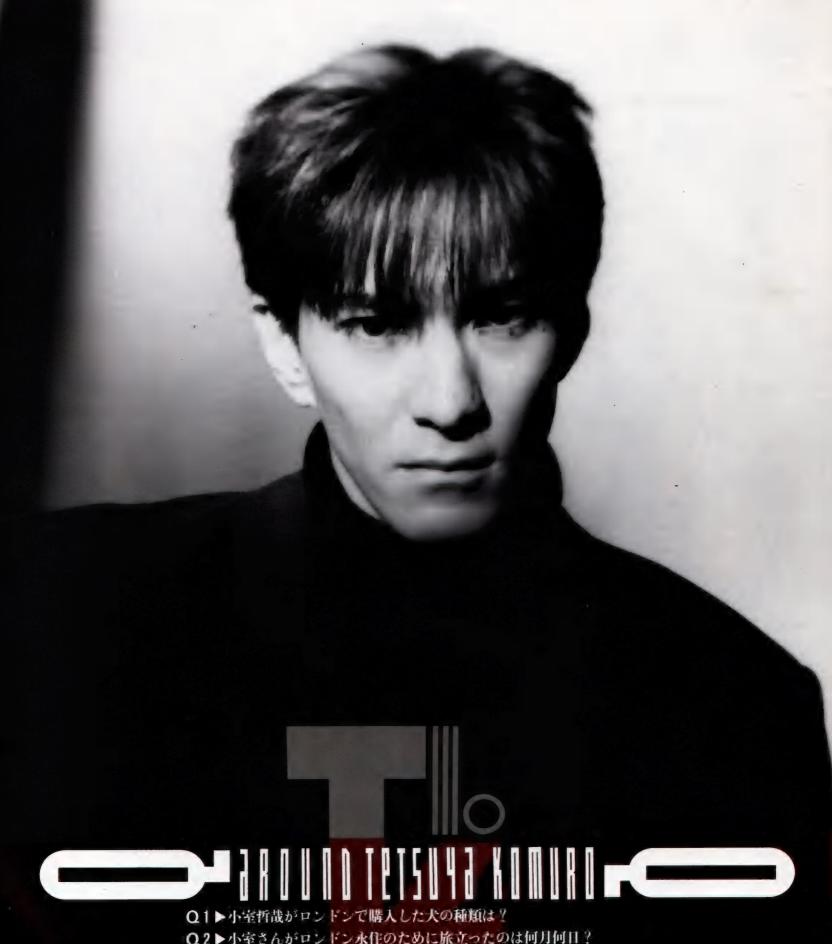
——東京で公園を歩くなんてことはないけど、ロンドンでは毎日、スタジオへ行くのに公園を横切ったりできるし。

「むこうでは犬の散歩をやってましたからね。ペット・ショップ・ボーイズが犬を買うというペット・ショップで僕も犬を買ったんです（笑）」

——ロンドンで観光はしないもんですか？

「普通のロンドン人が観光しないように、僕もしてないですね。半年間はむこうの労働者ですから。でも、このペースで何年かいけたらホントに理想的ですね。クリエイティブな面に専念できますから」

AROUND TETSUYA KOMURO

Q1▶小室哲哉がロンドンで購入した犬の種類は？

Q2▶小室さんがロンドン永住のために旅立ったのは何月何日？

Q3▶『CAROL』で小室さんが詞を書いている曲は何曲？

Q4▶『CAROL』をレコーディングしたスタジオの名前は？

Q5▶小室さんが音楽をてがけた映画『ぼくらの七日間戦争』の監督は？

▶TM NETWORKのパーソナルクイズ（P.18、P.22、P.26）計15問の答えをハガキに書いてパチ▶パチ編集部に送って下さい。全問正解者の中から10名様にプレゼントがあります。

Q for TETSUYA KOMURO

TM NETWORK

Q　今日の朝食は?

A　ここ（撮影スタジオ）で取ったハムサンド。昨日もここで同じものを食べて、おいしかったんで今日もそれに。そうです。少食ですね。これはサラダ付きで330円ですから非常に安い（笑）。

Q　1日の中でいちばん好きな時間。

A　とにかく落ち着ける時間ですね。だから、家に帰ってから寝るまでかな。

Q　よく使う遅刻の言い訳は？　――これはさきほど聞きました。"今日は何時だっけ?"でしたね。

A　そうでしたね。事務所から連絡がないとわざと放っとくという。念押しがなかったら、時間がよくわからなかったのでテキトウに来ましたとか。

Q　動物園に言って最初に見る動物。

A　動物園にもしいたらラッコですね。でもラッコは水族館にしかいないですから……。僕は水族館に行けないんですよ、魚がいるから。見るのもダメなんです。特に、赤系とか銀系の体をしているのがダメだから、それをかいくぐってラッコがいるところまで行けない。一度だけ鳥羽の水族館に行ってラッコを見たことはあるんですよ、もちろん魚は見ないようにして。

Q　遊園地に行って最初に乗る乗り物。

A　やっぱりアドベンチャーものですね。スピードとそれにプラスαのあるものが好きです。スピードですか？　好きですよ。僕のスピード狂には意外と定評がある。いっしょの車には乗りたくないってみんなにいわれてます。

Q　TVを見て泣いたことがありますか?

A　あると思います。最近では、ビデオですけど、ロンドンで『ハチ公物語』を見て泣きました。

Q　口グセは?

A　自分ではわからないけど、きっとあると思う。あえてコレだって人にいわれたこともないけど……僕の場合は口グセというより口調に特徴があるらしくて、よくマネされます。

Q　生まれて初めて聞いた音楽。

A　記憶にあるものではやっぱりクラシックですね。チャイコフスキー。4歳ぐらいだったと思う。とにかく幼稚園に行く前だった。17センチで33回転のレコードに1曲入ってたのをよくかけて聞いてた。チャイコフスキーの有名な協奏曲だったと思うんだけど、頭にSEで汽車の音が入っててそれが好きでよく聞いてた。

Q　好きな花。

A　あんまりくわしくないんですけど、線が細いからカスミ草とか。ちょっと弱々しいですね（笑）。見るのは色合いですけど、基本的に、ひとつポンッとあるものよりカスミ草とかあじさいのように、寄り集まってやっとひとつの花として認められるようなものが好き。

Q　自分を"カッコイイ"と思うとき。

A　ウ～ン。実像じゃなくてたとえば写真に撮ってもらって、虚像が入ったときかな。撮られるときの角度ですか？　これはもう雑誌を見てもらえばわかるんですけど、右側しかダメです。

Q　自分を"カッコワルイ"と思うとき。

A　半年ロンドンにいて、カッコワルイと思ってました。特別背が高いわけじゃないけどカッコイイという人がいる。そういうのを見るとやっぱり西洋人に生まれたかったと思いますけど。

Q　今、気になっているアーティスト。

A　誰というわけじゃないけど、日本のアーティストですね。それはまあ、ロンドンにいてこっちのことがわからなかったから、今どんな人が流行ってんのという程度ですけど。

Q　好きな風景。

A　なんといっても今はロンドンの方が好きです。ひとことでいっちゃうと、公園の中に街があるという感じだから。

Q　好きな音。

A　ノイズを含めてですか？　そうですね、日本の踏切りの音がなつかしいって感じですかね。

Q　ゆうべ見た夢をおしえてください。

A　最近見ないというか、忘れちゃうんですね。夢で多いのは、追われてるような夢。あんまりいい夢はないですね。

Q　いちばん好きなファースト・フードは。

A　（笑）ファースト・フードしか食べない人ですからね。ただ、これも半年間ごぶさただったから、新製品とかはよく知らない。ちなみにロンドンのファースト・フードでは、アートガーファンクルというチェーン店のバーガーグリルというセットがオススメです。

Q　好きなTV番組。

A　ファンの人にロンドンまで送ってもらったものの中では『パパは年中苦労する』が意外と良かった。田村正和というよりも、単純に子供たちのドタバタがおもしろかった。

Q　今、いちばん欲しいもの。

A　自分の（日本の）家です。帰ってきてずっとホテル暮らしですから。

Q　今、いちばん捨てたいもの。

A　そうですねェ、ゴミも溜ってきましたが（笑）。ロンドンを発つときに、日本のツアーが終わるまで帰れないっていうので、その間他人に貸すことにして、ひと部屋分のゴミをそのとき捨てましたから。もう捨ててきたと書いといてください。

Q　最後にひとこと!!

A　ファンレターの意見に振り廻された1年でした。

TM NETWORK

interview '88-'89

DAISUKE KINE

今年がいちばん充実してた。

●空を飛んだり。とてもノッポになったり。驚かされたかと思うと美しいメロディーに思わず心うたれたり。小説まで読ませてくれて、魔術師の本領を充分に発揮してくれた'88年の木根さんでした。

―今年一年を振り返ってということなんですが。

「なんかデビューしてから毎年毎年、やることがだんだん大きくなってきて……それだけ責任感も強くなってきたし、すごい大事な年だったと思いますね。なんかプロジェクトにしても頂点に来たなっていう感じで。今までだともっと先を見て細かいこともいろいろやってきたんだけど、今年はそのひとつひとつがすごく大きくて……まあ、やり甲斐があるっていったら、ものすごくやり甲斐がありました。」

―デビューしてからのTMを今年集大成したような?

「そうですね。そういう意味でも今年がいちばん充実してたんじゃないかな」

―活動の目立って大きいところというと小室君がロンドンに行ってしまって、みんな個々に仕事をしたっていうのがありますよね。

「それがいちばん大きかったですね。やっぱりロンドンに3ケ月もいたことは自分にとってもすごいことだったし。メンバーそれぞれがロンドン、N.Y.、東京と離れて活動するっていうのはTMの今後を示唆するものでもあったし」

―木根君がロンドンに滞在してたのは7月くらいからですよね?

「そうです。7月の中旬から8月の中旬までまず一ケ月と、それから8月の終わりから10月の初旬まで2ケ月半、で、その前にシングルのために2週間行ってるんで合計すると3ケ月です」

―こんなに海外に長くいたのは初めて?

「初めてです」

―ホームシックにかかったりはしませんでしたか?

「うーん……ホームシックっていうのかなあ。それはどうかわからないけど、最初の一週間ていうのは長かったような気がするなあ。なんか日本のTVとか見たくてね、帰りたかった」

―ロンドンで特に印象に残ったことは?

「結構、最後の方なんですけど、『CAROL』というイメージの女の子が住んでる街がバースという設定なんですよ。で、そのバースをどうしても設定しちゃった手前ね、見に行きたくて。それでレコーディング中にちょっと時間をさいて行ったんです。車で2、3時間くらいかかるのかな? ロンドンから200kmほど離れたところなんですけどね。その街は大昔にローマ人が初めてお風呂を作ったっていう、ローマ風呂があるところなんで、その街だけイギリスとちょっと違ってローマの匂いがするんですけども」

―それはイメージ通りでしたか?

「そうですね。すごく静かでいい街でしたよ。僕が『CAROL』の話を考えたときに、CAROLは普通の女の子で素朴な感じのする子っていう設定だったんですね。だからたとえばロンドンのにぎやかでシャキシャキしてる、みたいな街よりはちょっと田舎の方がいいなって思ってて。ヒッタリでしたよね、だから」

―へぇー。あと、三人がバラバラになってたときっていうのは木根君は東京に居たんですよね。

「そうです、僕は一応東京担当っていうことで。東京に残っていろいろTMのラジオ番組やったり、あとはファンの子たちとのパイプ役になってね。やっぱりテッちゃんがロンドン行っちゃって、ウツはN.Y.行っちゃって、ファンレターとか読んでても淋しがってる子たちが多かったんで、そんななかで今、テッちゃんはこうだよ、ウツはこうだよって僕が教えてあげてて……なんかね、いつも3人で動いてたでしょ。その3人分を東京で背負ってたから、いい体験だったと思います」

―誰にも甘えられないしね。

「そうそう。いつもは委ね合っちゃってどっか気ラクっていうか、そういうのが3人ともおのおのあったと思うんですよ。それが3人ともバラバラになることで自分のポジションていうものがよりハッキリして、またそれをまっとうしなきゃいけなかったから」

―ラジオを一人でやったときの感触っていうのはどんなもの?

「最初はちょっと慣れなかったんですけどもね。でもだんだんやる方も聞く方も慣れてって。僕はそんな話し上手じゃないんだけども、たとえば一言、何気なく言った言葉でもリスナーはものすごい想いで聞いてるわけだから、あんまりいい加減なことも言えないなって思ったし、本当にみんな貪欲にTMのことを知りたがってるっていうのをすごく感じましたね」

―ラジオは東海ラジオのSFロック・ステーションですよね?

「そうです。名古屋地区で聞ける番組なんですけど、もう雑音の中でね、北海道から九州から聞いてる人達っていうのがたくさんいて、実際ハガキも来るんですよ。みんな真剣で……だからいろんな意味で勉強になりましたよ一人で何かをするっていうのは。3人で動いていると意外と見えない部分が一人でやってみて初めて見えたりね」

―BIG EGGでのコンサートについてはどんな感想がありますか?

「うん……だからなかなかできるところじゃないんでね、今まで単発でいろんな……EASTだとか、武道館だとかやってきましたけど、やっぱりいちばん思い出に残るんじゃないかなぁ」

―それはどういう理由で?

「やってるときはね、すごくなんていうのかな……必死だったっていうか、そんなに余裕がなかったんでよくわかんなかったんだけども。NHKさんで放映してもらったのを見てみるとああいう5万人のファンが踊ってる姿とか改めて見ることができて、ああすごいところでやったんだなぁ、みたいな。うん、TVを見て初めて実感がわいたんですよね、僕(笑)」

―結構あわただしかったからね。

「そうそう。ロンドンから帰ってワーッとやって、かみしめる余裕もなくまたロンドンに行ってって状況だったから」

―でもそういうコンサートひとつとってもTMは頂点に立ちつつありますよね。

「やっぱりね、言い方を変えればアイドル化してるとか、ビジネス化してるとか……ま、売れてくればくるほどそういうふうに言われると思うんですよね。本人達にしてみりゃ何も変わってないんですけど、その本人達を取り巻く組織が大きくなればなるほど欲っていうの出てくるし……それがみんなの目にどう映ってるのかなっていうのはあるんです。むづかしいですね。そのへんは」

TMネットワークの名前が大きくなるにつれ、誇らしい気持ちと複雑な気持ちが一緒に大きくなると僕は言っていた。同時にプレッシャーも育つだろう。が、そのプレッシャーがあってこそ、明日どうしようという想いも生まれてくるのだと思う。'89年への期待も大きく育つだろう。

AROUND NAOTO KINE

TM NETWORK

Q 今日の朝食は?

A えーっと(しばし考える)あ、目玉焼きとウインナーとパンでした。オーソドックスな朝食です。

Q 一日のうちでいちばん好きな時間は?

A それはやっぱり、(笑)仕事から家へ帰ってきて寝るまでの時間です。自分の時間がどんどん減ってきてるんで。

Q よく使う遅刻の言い訳は?

A 遅刻の言い訳……"渋滞"です。僕、都心からちょっと離れたところに住んでるんで、いつも車に乗って高速を走らせて東京に(笑)出てくるんですよ。だけど3人のうちじゃ遅刻は少ない方かな。

Q 動物園に行って最初に見る動物は?

A お猿さんですね。でも「よし、お猿さんを見るぞー!」って、そういうふうには歩いたことなくて(笑)、僕がたまたま行った動物園にはお猿さんが最初にいたんですよね。あ、違う、象かな? (笑)でもお猿さんが好きですからお猿さんにしといて下さい。

Q 遊園地に行って最初に乗る乗り物は?

A それはね……観覧車。僕、高いところ好きなんです。

Q TVを見て泣いたことはありますか?

A あります……けど、なんのTVだったかな。けっこう涙もろいんで(笑)悲しいお話しだとすぐ泣いちゃうんで、それがなんの番組だったかはちょっと思い出せません。いっぱい泣いてます(笑)

Q ログセはありますか?

A ログセですか……ログセはね、「どーのこーの」。なんか、何かにたとえるときにすぐに「どーのこーの」って言ってしまうんです。いい加減な感じがしますね、「どーのこーの」って(笑)

Q 生まれて初めて聞いた音楽は?

A ………(悩んでいる)……童謡……だと思う、きっと。

Q 好きな花は何ですか?

A えー、桜。

Q 自分をカッコいいと思うときはどんなときですか?

A ……………(悩んでいる)……それは、それは(笑)、カッコつけてないときです。

Q 自分をカッコわるいと思うときはどんなときですか?

A (即答して)カッコつけてるとき。

Q 今、あなたが気になっているアーチストは誰ですか?

A ……………(悩んでいる)……最近のっていうことだったら……じゃあ、U2のいちばん新しいアルバム。(注・『魂の叫び』です)ハーモニカがいっぱい入ってるヤツ。(注・『CAROL』で木根君がハーモニカを吹き、それをスティーブ・ナイに「アルバムの中でいちばんいいテイクだ」と絶賛されたので、そのへんの影響があるのではないでしょーか。違うか(笑)ちなみにプロデューサーの小室哲哉氏は、スティーブ・ナイのこの大胆発言に非常に複雑な表情をしていた(笑)といいます)

Q 好きな風景は?

A 水彩画、の世界。(笑)ふわーっとした感じが好きなので。

Q 好きな音は?

A ピアノの音。(注・木根君はギターとピアノで作曲をします。ロンドン・レコーディングでかのエアー・スタジオを使ったとき、おそらくポール・マッカートニーも使ったであろうピアノに触れて、非常に感動をしたそうです。ビートルズの、特にポール・ファンの木根君らしいエピソードです)

Q いちばん好きなファースト・フードは何ですか?

A マクドナルドかなぁ。あそこのフィレオ・フィッシュが好きです。

Q 好きなTV番組は?

A うーん……(悩んでいる)………プロ野球ニュース。毎日家に帰ったらダイジェストをチェックしてっていう。好きなチームはもちろんジャイアンツだったんですけども(笑)来年にまた期待してってことで。

Q 今いちばん欲しい物は何ですか?

A 今は車が欲しいです。一応、新しく買い替える予定でいるんですけどねぇ。(注・マネージャーのT氏にメルセデス・ベ〜〜〜〜〜ンツを強力に推められて木根君はそれをカタクカタク拒否しております。T氏によれば「安全性の高さと木根君の現在のキャリアの高さにベンツはピッタリ」、ということのようでしたが、木根君自身は「車はやっぱし日本車さっ♥」てなノリでありました。この地位と人柄のギャップが素晴しいんですね。愛されてます、木根君)

Q 今いちばん捨てたいものは?

A えっ……(なぜか言葉につまってしまう)……意外とケチだからなぁ(笑)うーん……プライド。そんなことないなぁ、そんなものないし、もともと。(笑)じゃあ、思い出……うわぁ(笑)そんなことないよね、わかんない、物で捨てたいものはみつかんないし。その質問すごくむづかしいです(笑)

Q 最後に一言。

A えっ、これ質問ですかぁ!?(笑)最後に一言……えー、そうですね、これからも初心の気持ちで頑張ります。って、なんかスポーツ選手みたいになっちゃいました。(笑)

TAKASHI UTSUNOMIYA

自信がついたってことがいちばん大きい

●'88年。いくつものステージで、鮮やかに私たちの視線をとらえたのち、ニューヨーク、ロンドンと活動の場を移しながらも、追いかけるのをやめさせてくれなかった宇都宮隆。長く広く見える1年は…

interview '88-'89

TM NETWORK

誰でもが思うことかもしれないけれど、1年という月日は、長いようで短い。でも逆に、1年という月日は、長くも短くもできる。ということだ……学校の先生みたいなことを言ってますけども。

'88年、TM NETWORKは、たった365日を、その何倍分もの時間にして過ごしていた。中でも〝彼〟は、ロンドン→ニューヨーク→東京と、走りぬけ、めまぐるしかった1年を、今、やっと振り返ろうとしている頃だろう。

それとも。今でも彼のカラダとココロの中に息づいている疾走感を、彼が何よりも待ち望んでいたライブ・ステージの上で、見せつけているところだろうか。

——'88年はどんな年でしたか?

「そうですねー。やっぱり、小室がロンドンに移ったっていうのが、すごい大きいでしょうね」

——それはありますよね。

「で、TM NETWORKの基盤が、ロンドンになったということが、僕にとって重大なことですよね」

——年明けはツアー中でしたよね。

「ウン。'87年から始まった〝KISS JAPAN TOUR〟が3月に終わって、すぐ〝アリーナ・ツアー〟が4月から始まって。それもかなり規模が大きかった」

——そうですね。

「ひとつの、区切りがついたというか」

——宇都宮クンは、そこでかなりの自信をつけたんじゃないですか?

「そうですね。レコードもそうだけど、ライブにもすごく力を入れるようになったしね、TM自体が」

——ライブで表現のしかた、というか、意識的なところも含めて、変わってきましたか?

「ウン……。結局。自信がついたっていうことが、いちばん大きいだろうけどね」

——それを自覚できたのは、いつ頃?

「……〝BANG THE GONG〟が変わった頃ですね。ま、それまでにも徐々に、っていう感じで(笑)」

——手応え、みたいな。

「そうですね。〝KISS JAPAN〟にも、そういう感じで、いい状態で入れたしね」

——ステージに女性のダンサーがふたり登場したのは…。

「アリーナ・ツアーですね」

——あれは宇都宮クンのアイデアですよね。

「そうです。遊び心、っていうんでしょうかね(笑)」

——でも、けっこう罪な遊び心でしたよね。(笑)

「シー、あれはちょっと、なんかいろいろ問題があったみたいですね(笑)」

——すごかったもん、まわりの女のコ達。とにかくTMのファンの人達もすごく増えましたけど、お客さんが変わった、とかって感じますか?

「やっぱり多少はありますよね、それは。広がった分ね。それが悪いとは言わないけど、まぁ……、中には(バラードで)手拍子する人とかね。(笑)そのへんは、変わったっていえばすごく変わった気がする」

——それによって、宇都宮クンのライブ・パフォーマンスが変わることは?

「それはないですね(キッパリ)」

——TVにも、いっぱい出ましたね。

「TMって、ツアーも年に1回、まぁあっても ギリギリになって2回目、っていう感じだから、あんまりみんなの前に出る機会が少ないから。ま、せめてテレビに出て、ちょっとでも、TMの旬のものをね、見てもらえればいいな、と思うけど……」

——思うけど……?

「思うけど、実際にはやりにくいですね。(笑)特に、スタジオで生放送っていうのはね。そこの雰囲気と、あと他の出演者とか結果が、いっぱいいるでしょ。そういう、知らないスタッフとかが大勢いるという状況の中でやるのは……あんまり、[illegible]じゃないですね。だからかえって、中継とかの方がいいです」

——でも、もう何回も何回も出てるでしょ。慣れる、ということはないですか?

「あんまり慣れないみたいですね(笑)」

——TVを見ている限りでは、他の、たとえばアイドルの人とかと並んでいても、けっこうとハマッてるというか。

「ハマッテます? 自分達は、いっつも浮いてるんじゃないかなー、と思ってるけどね(笑)」

——そうですか。自分自身の生活が変わったということはありますか?

「そうですねー。……歩きづらいですよねー(笑)」

——声をかけられたり?

「ハイ。声をかけてきて確認するパターンがあって、〝宇都宮サンですかー〟とか。あと、何も言わないで確認する人と。(笑)あんまり近くには来ないけど、ちょっとこう……」

——(笑)じゃあ、なかなか遊べないね?

「ねー。みんな、どうしてるんでしょうねー(笑)」

——性格とかは? 友達に〝変わった〟とか言われませんか?(笑)

「〝ホーントに変わんないね〟って言われる方が多いかもしれない」

——あ、そうですか。

「これ、ですか?(と言って、ソファにもたれてイバるマネをする)」

——(笑)外国生活も長かったですけど。

「それがね、辛かった。(笑)でも、なかなかそういう機会ってないしね。だから今は行ってよかったな、っていう考えもあるけど。ウン」

——本当はどっちが好きですか? ロンドンとニューヨークと。

「やっぱり、ニューヨーク。ロンドンはあんまりにも刺激が足りなさすぎるね。だからテッちゃんと言ってたんだけど、ロンドンから帰って来て〝東京は刺激がある街だねって。〝もしかしたら東京がいちばん刺激があるかもしれない〟って言ってたくらいだから。僕もそう思うな……」

——情報もたくさんあるしね。

「そうですね」

レコーディングを終えるとすぐロンドンを離れた彼は、ひとりニューヨークへと渡った。たぶんそこで、彼は1日も早くステージに立つことを夢見ていたと思う。

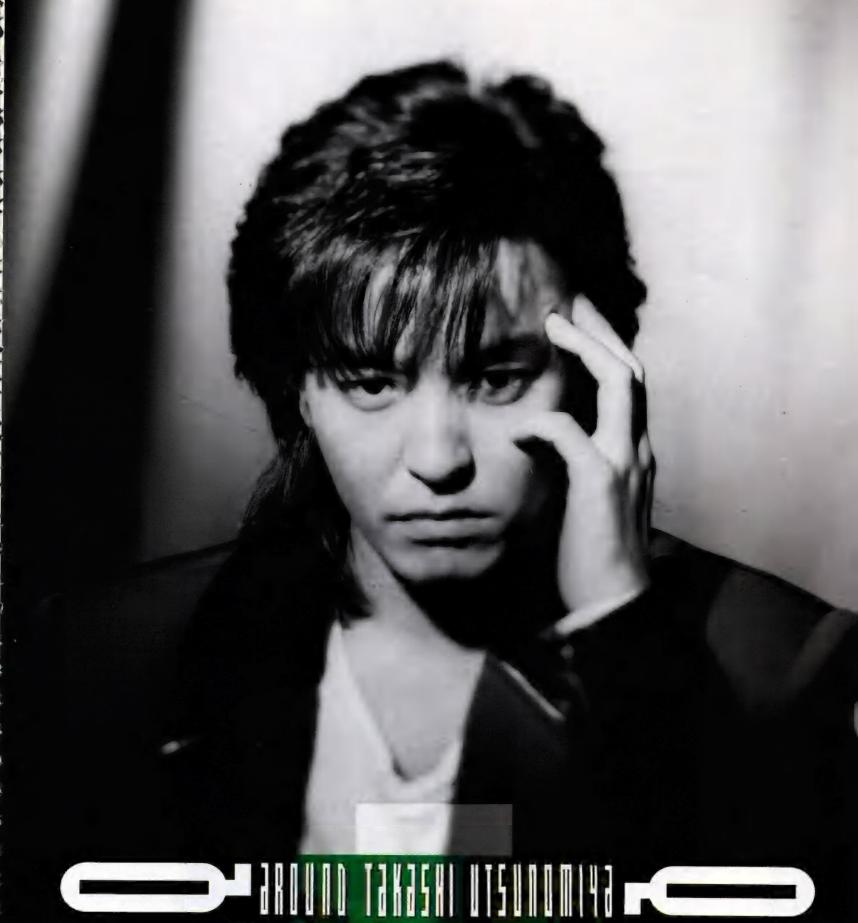
そして、私達の目にも映るくらいの早さで彼らはライブ・スペースに戻って来た。現在では、待望のツアー中である。

——今年いちばん嬉しかったことは?

「東京ドームでキャッチ・ボールできたことかなぁ。(笑)山田亘と僕と、一緒に遊んでたんですよ。もう、(ライブが)始まる前までやってたもん」

——エ、本当に!?

「もちろん、コンサートがメインですけど。(笑)ウーン……今年いちばんよかったと思うのは、あのコンサートかな」

AROUND TAKASHI UTSUNOMIYA

Q1▶まず基本。宇都宮隆の誕生日は？

Q2▶ではその日に発売された単行本『彼女』の作者のペンネームは？

Q3▶ウツがNYで購入したグリーンのコンタクトレンズの値段は？

Q4▶ツアー"KISS JAPAN"でウツが衣装を替えた回数は？

Q5▶NYでウツが2回観たミュージカルのタイトルは？

Q for TAKASHI UTSUNOMIYA

TM NETWORK

Q 今日の朝食は?

A **コーンフレーク。……ウソ。(笑)ハムエッグとトーストですね。**

Q 1日の中でいちばん好きな時間は?

A **ウーン……。今は、睡眠かな。**

Q よく使う遅刻の言い訳は?

A **ンー、これ言っちゃうとさー。(笑)今度から使えないよね。ン、まぁ、車が混んでた、っていうのはよく言いますよね。**

Q 動物園に行って最初に見たい動物は?

A **……キリン、かな。(笑)**

Q 遊園地に言って最初に乗りたい物は?

A **……遊園地って、どんなのがあったっけなぁ……。エーットねー、そこのメインのジェットコースターかな。恐いんだけど、乗ってみたい。**(ディズニーランドは最近行きました?)**行ってないです。前に、1回だけ行ったけど。**(じゃあ、ビックサンダー・マウンテン乗ったことないでしょ)**乗ってないです。(笑)**

Q テレビを見て泣いたことがありますか?

A **ウン。**(どんなテレビですか?)**どういうテレビ?(笑)**(……どんな番組ですか?)**けっこう、今までにたくさんありますよ。**(ジーンと、きやすい方?)**きやすい方。**(涙は流れますか?)**ガマンしますけど。涙がこう……たまってるところで、ガマンします(笑)**

Q 口癖は?

A **……それは木根の方が知ってるんじゃないかなー、だって。(笑)……何だろう、口癖……。"だよーん"かなぁ。**(ン?)**"だす"かなぁ。(笑)**(エー、ソンナコト言います?)**"ギョエ"かなぁ。(笑)……自分ではわかんないかもしれないですよね。あ、でも、ないですね、口癖。**

Q 生まれて初めて聞いた音楽は?

A **ンー、普通は……幼稚園のあの音楽じゃないですか?**(お遊戯とかの?)**とか、あと寝るときの。**(子守り唄?)**♬タリラリラリラ〜♬っていう。**(注)アマリリスの唄かな)**いちばん最初っていったら、それしか覚えてない。もうちょっと音楽的なもので言ったら、ビートルズだね。小学校1年くらいの時だったと思う。**

Q 好きな花は?

A **そう……ですね……。あんまりそんな、花に興味ないから。ンー、赤いバラは、でも、好きですね。**

Q 自分を"カッコイイ"と思うときは、どんなときですか?

A **……ゲッ。……あ、この"ゲッ"っていうのが口癖かもしれないね。……ウソ。(笑)エーット、カッコイイと思うときは、やっぱりステージに立ってるときだと思うな、きっと。あんまり覚えてないけどー。(笑)すんごいカッコツケテルと思いますね。自分はすーごいカッコイイんだろうな、っていう感じで、やってるんじゃないかな。何万人を相手にしてますからね。**

Q 自分を"カッコワルイ"と思うときはどんなときですか?

A **きっと、寝てるときだと思う。**(寝相がワルイとか?)**いろいろ、ね。赤ちゃんのようですね。寝汗とかさー。(笑)**

Q 今、気になっているアーティストは?

A **すっごい気になってるっていうのはないですね……。**

Q 好きな風景は?

A **紅葉って、キレイですね。……秋ってわりと好きなんです。**

Q 好きな音は?

A **ちょっと漠然としてるね。ンー、電話の音かな。……なんて。(笑)**(それはかかってきたときの音? それともかけるときの音?)**それはヒミツということで。(笑)……あと、猫の鳴き声。……音に入るかな。**

Q ゆうべ見た夢は?

A **僕、夢見ない。たまーに、夢を見る位置が起きるギリギリにくるときもあるんだけど。滅多にないです。……1年に1、2回くらいしか見ない。**

Q 一番好きなファースト・フード?

A **(わざわざ小室クンに聞きに行って)バーガーキング!**

Q 好きなテレビ番組は?

A **野球ですね。**(どのチームのファンですか?)**弱いジャイアンツ。(笑)**

Q 今、いちばんほしいものは?

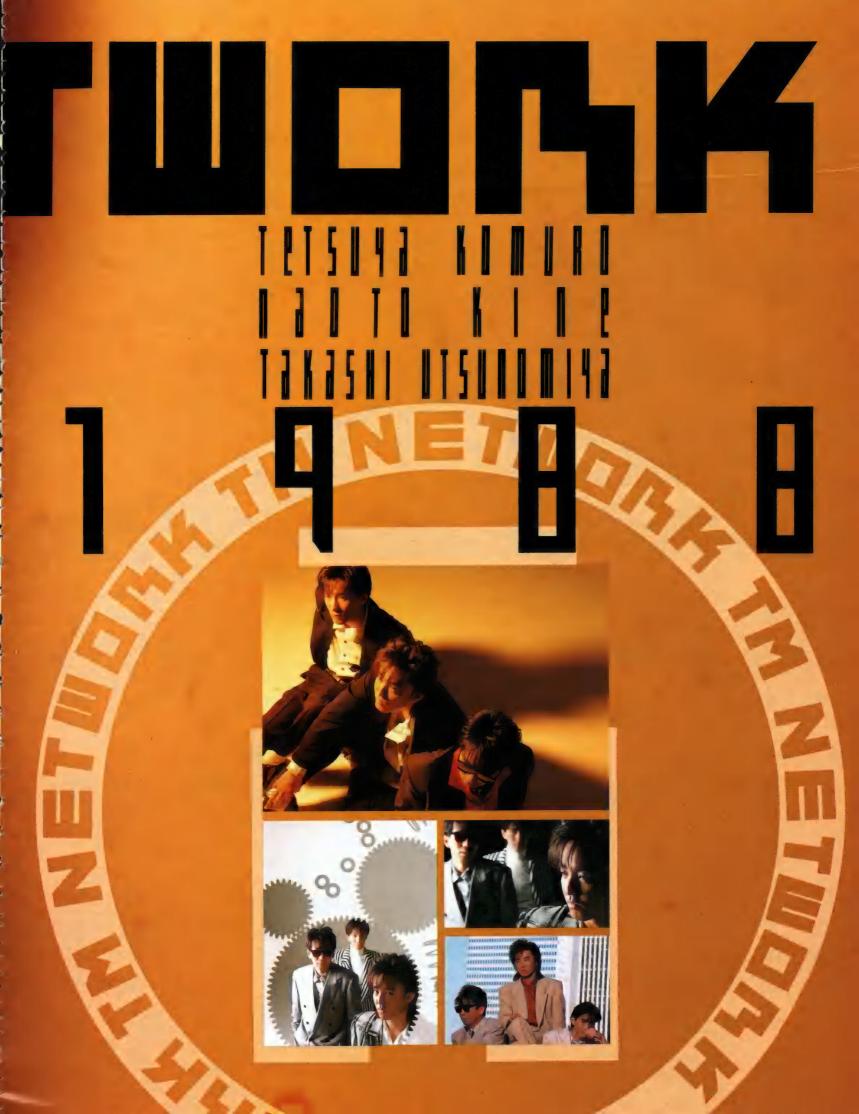
A **………恋ですね。なんて。(笑)**

Q 今、いちばん捨てたいものは?

A **………ゴメンナサイ。今、危うくヘンなこと言いそうになっちゃった。……捨てたいものねぇ……難しいなぁ、それ。**(カルーイ気持ちで、ドーゾ)**軽い気持ちでいいの?**(ハイ。いってください)**軽い気持ちで言うととんでもないこと言うかもしれないよ。(笑)あの……、本当はもう自分が着ないだろうとか、もうはかないだろうとか、もう使わないだろうとか、思ってるものでも、まず捨てないのね。なかなか……、ホント、捨てたいんだけどね。**(じゃ、答えは"着なくなった洋服"でいいですか?)**ウーン。なかなか自分でこう、思い切って捨てられない。**(そういうとこは万事そうですか? 他のものに対しても)**………(笑)それって危ないンじゃない? ……なかなかね。捨てられないです。(笑)**

Q では最後に、ひと言!!

A **一体これを読んで、みんながどこまで信じるか、っていうのが楽しみですよね。(笑)**(オトナッぽーい!!)

TWORK
TETSUYA KOMURO
NAOTO KINE
TAKASHI UTSUNOMIYA
1988
TM NETWORK

(KISS JAPAN ARENA TOUR [KISS JAPAN DANCING DYNA MIX] STAR CAMP TOKYO)

●'88年、TM NETWORKが見せてくれた3つの世界――KISS JAPAN TOUR、ARENA TOUR、そしてSTAR CAMP TOKYOでのステージ。待ちこがれずにはいられない、踊らずにはいられない、夢見ずにはいられない、完璧でしかも暖い光と音のショウ。――その舞台裏、秘密のエピソード、少しだけ教えましょうか…

PHOTO●YORIHITO YAMAUCHI(P.30～P.32)FUJI TOGAWA(P.33)

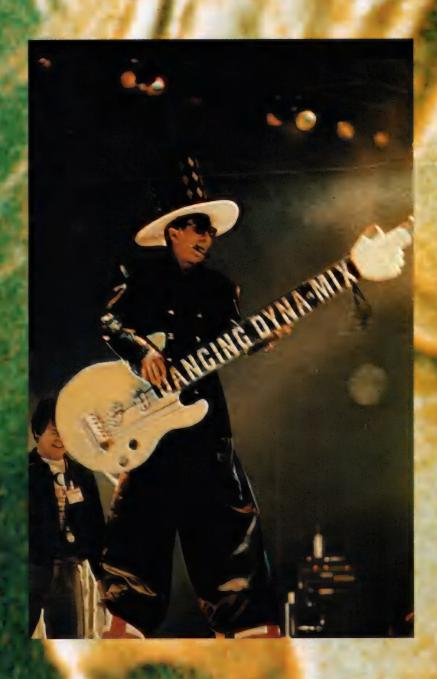
KISS JAPAN

'87・11・9～'88・2・25

これまでのツアーでいちばん長い、合計53本のツアー。従来のTMworldがより確立されたようなステージングだった。宇宙を感じさせる衣装のデザインを手がけたのは有名なアート・ディレクターの奥平イラ氏。(プロモーションビデオや、写真集でもTM NETWORKにかかわってきた人)ハプニングでは熊本での宇都宮隆のケガ。なんと、野球をしていて指を傷つけてしまったのでした。それから木根尚登の発熱。これは前日のVTR（アリーナツアーのオープニングビデオ）録りが原因。このVTRロケ、極寒の2月10日、新宿KDDビルの屋上にて、なんと早朝5時から行われたそう。このため富山県民会館のライブでは竹馬のパフォーマンスができず、TBSのベストテン中継にも出演できなかった木根氏でした。青森ではマイナス11Cを記録したいと、凍りつくような空気の中行われてきたライブツアー。エンディングのミラーボールの美しさが印象的でした。

ARENA TOUR
[KISS JAPAN DANCING DYNA MIX]
'88・3・14〜'88・4・6

●初めての体育館ツアー、計13本。広さを充分利用したスケール感のあるセット、木根尚登の飛翔、宇都宮隆のダンスetc.何度も何度も驚かせてくれるビックリ箱のようなステージでした。このツアーのために作られたジャケットは5着あったそう。しかし使用したのは宇都宮氏が気に入った2着のみ。宇都宮氏は代々木体育館での2日めのライブ中に足をねんざ。痛みをこらえながらのステージとなりました。この日はライブ終了後、「human system」のプラチナディスク授与式がありました。
神戸でのエピソードを2つ。その①サポートメンバー含め全員が、木根氏と同じようにワイヤーで吊られ空中遊泳を体験。全員そのあまりの恐怖感に「キネってやっぱりスゴイ」と驚嘆。その②趣味の8ミリビデオ撮影のためこっそり遊園地へ出かけた小室氏と木根氏。ファンに取り囲まれ喫茶店に監禁状態となる。

LIVE'88
TM NETWORK

LIVE'88 TM NETWORK

STAR CAMP TOKYO

'88・8・25

●まさに"真夏の夜の夢"のようたったSTAR CAMP TOKYO。BIG EGGで5万人を集めて行われたライブでした。メンバーはリハーサルのため訪れていたロンドンから"一時帰国"。たった15日間の滞在中連日連夜のラジオ、テレビ出演をこなし、ライブのリハーサルとゲネプロを行った、まさに秒刻みのスケジュール。"わしらの15日間戦争"と呼ばれた日々でした。ライブ当日、宇都宮隆と木根尚登が念願かなってドームで野球をした（グランドの隅でのキャッチボールだけど）のは有名な話。(愛用のグローブをわさわさ用意したそうです）開演直前の17時30分からは激しい土砂降り。終了後も記念グッズを買い求めるファンの行列が激しい雨の中でいつまでも途切れず、ついに機動隊が出動するという逸話を残しました。
この1日のために2ヶ月以上かけて用意された"悪魔をイメージさせる"巨大な老木のあるステージの上の一夜の夢はしかし、次のCAROLツアーへ壮大なる予告編だったのです。

INSIDE

●数々の波紋を呼んだ、単行本『彼女』。その著者である、森田恭子、福岡久美子のお2人に、小説『彼女』の内幕を語ってもらった。さて、あなたの〝彼女〟は、この中に居るでしょうか?

さて、『彼女』がめでたく単行本になり、発売され、ベストセラーの呼び声も高い今日この頃ですが、引っ張るとこまで引っ張る、つーことで、Inside of 彼女をやることになりました。

ここで、CHImangnenこと、福岡久美子と森田恭子がお届けする〝ヒミツヒミツヒミツヒミツ、ヒミツの『彼女』〟と、ここまでホントでどこからウソか、あなたの知りたい舞台裏を、グググッと、お見せしちゃいましょう。(私たちは、ふざけているわけではありません。念のため)

森田(以下M)「あ、ドーモ」
福岡(以下F)「ドーモ、ドーモ」
M「遅れちゃって……ドーモ」
F「いえいえ、ドーモ」
M「復活、福岡久美子ッ、オケ!!」
F「これがホントの最後なの。イコカッ」
M「ふーん。君、生意気な話し方をするんだね」
F「まだゴアイサツをしていないからそう思うの? 失礼だった?」
M「あんのんねぇーん。『彼女』の単行本22ページのセリフを言ってんじゃないわよ。そしてその前に18ページのセリフをお互いにやりとりしてんじゃないわよ。わかる人だけわかればいいと思ったけど、一応言っとくわよ(親切)」
F「私はすぐにわかったわ」
M「おめーがわかんなくてどーするっ。(と言ってツッコム。いわば浜チャン的にリーダーシップをとる森田だったの)」
F「………(とツッコマレル。いわばマッちゃん的に切り返すこともできない、しかしそれもヒトツの芸風と自負する福岡だった)」
M「ところでさ。本題に入ろうぜ、シェキナベイビー、カモン・エブリバデー!!」
F「思い出すわねぇ。いろいろと。楽しくもツラクも楽しくも面白くもあった撮影の時のさまざまなエピソード。ホントにいろんなことがあったから、それを私達だけの胸にしまっておくのはもったいないから、話しましょうよ。ホレ行け、森田!」
M「最初はなんと言ってもやっぱり、去年の春のはじめての取材の時よねぇ。青山の某カフェ・バー(ヒント▼かっこいいジュークボックスが置いてある。スウェンセンズの近くのお店。今はもうありません)で

[どこまで本当で、どこまでウソか。ヒミツ。]

撮影をする予定だったのに、お店の人が来なくて、しょうがなくて、そばにある歩道橋の上で撮ったんだよね」

F「そのときお茶を飲んだスウェンセンズでの会話は、ちゃんと原稿にも生かされたよね」

M「あのとき、ウツがメイク道具忘れてきちゃって、立岡さん（注・小説の中では立野さん）が怒ったの」

F「後にも先にも、立岡さんが怒ったところを見たのはそのときだけ（笑）」

M「いつもおもしろいもんね、立岡さん」

F「それからさ、2回目の撮影で行った渋谷。雪が降っちゃって、さぶかったねー。ホカロンいっぱい買ってきたのに、全然効き目がなかったね。歯はカチカチ」

M「小説の中で、ウツが〝コノコ、カワイソー〟っていうシーン。あれは、本当にあったことなんだよね」

F「ウツのやさしい態度に感動して、そのまま使わせてもらったのね。そういった意味では前半は特に本当のことがけっこう出てくる」

M「そうね。自宅のマンションの玄関ホールで、ガラスのドアに自分を写してダンスのレッスンをするってとこも、ちゃんとウツに話を聞いたんだよね」

F「コンサートの楽屋で順子さんがウツにインタビューするシーンも、ほとんどそのまま。〝淋しい気持ちになる？〟〝……なりますね〟も、そのまんまなのよね」

M「もちろんMCの〝自らセクシーと名乗っている、宇都宮隆です〟もステージでウツが言った言葉だし」

F「けっこう本当のこと多いよねー」

M「ねー」

F「じゃあ、〝わたしの宇都宮隆〟と題して、取材中のウツのことで印象に残っていることを、発表し合いましょうよ」

M「そーね……。私はやっぱり、ウツが4回目ぐらいのときかな、〝この次はどうなるの？〟って、ちょっとだけ楽しみそうな顔をしてくれたとき。初め、すんごーくイヤがってたもん、なんか」

F「なんでイヤがってたの？」

M「やめてほしいって手紙がいっぱい来たからじゃない？ 私たちのとこにも来たけどね」

F「あー、そうそう。木根クンと小室クンに、次にこのシリーズの主人公になってく

[ニューヨークの撮影は大変だったけれど…]

れる？」って聞いたら、木根クンは〝時代劇にしよう〟ってオチャメに言ってくれたけど、小室クンては、〝絶対にイヤ!!〟なんて言って。あれはショックだったなー」

M「今では、ドラマ化しよう、なんて無責任なことを言ってるくせに。そういえば、ドラマ化するとしたら、主役はもちろんウツだけど、佐久間俊クンは、沢向要士クンにやってほしいんだ、私」

F「いきなりね。今、関係ないと思うけど。それにイメージを限定するのは、良くないわ。きっと読者の人もそれぞれ自分の好きな俳優さんをあてはめたり、自分をあてはめたりして、読んでくれてると思うの」

M「そりゃそうよ。決まってるじゃない。だから、(気が強い) 私の佐久間俊のイメージが沢向クンなんじゃない！」

F「そりゃ勝手だわ」

M「でも、モデルは違うんだー」

F「私知ってる！」

M「でも内緒ね♡」

F「うん、内緒にしといてあげる。でもこれは書く者の強みじゃないけど、それぞれ自分自身の思い入れがけっこう入ってる。それは内緒よね、トーゼン。でもそういうエッセンスがないと小説なんて書けない。登場人物は架空の人でも、そこに私達の、もうなんとも言えないウンヌンカンヌンしたせつない思いが込もっているんだあ。書いてて泣きそうになったこともあるし、読み返してみて笑っちゃったことはもっとあるんだから」

M「エーッ、泣きそうになったことがあるのーッ。エーッ、ウソーッ、アンビリーヴアブルッ!! ㊟マイケル富岡の英語教室参照) 久美子ちゃーん、泣いたのォー!!」

F「あら、森田さんだって泣いたと思うわ。私は出来上がった原稿を読んで、森田さんの心情がよーくわかったりも、した」

M「よせよぉ。テレるちゃねーか。……まあ、私たちのことはいいじゃない、ウツの話にしようよ。聞いてよ、あの麗しいロンドン、ニューヨークの旅のことを」

F「大変だったらしいよね。私は行かなかったから知らないけど。おウワサはかねがねよ」

M「もう他人事なんだから。……とにかくさ、ロンドン1日半、ニューヨーク5日間というスケジュールで、私はほとんどロンドンのことは覚えてないんです(笑)」

F「あっちでのウッツの様子を教えてよ」

M「村上マリさんがビッグベンの前で、ウッツにアイスクリームを買ってあげるとこあったでしょ。実際に、ビッグベンをバックに撮影してたとき、アイスクリーム売りのバンが止まってたの。それを一早く見つけたのは、ウッツよ。"ねー、アイスクリーム売ってるよ"って。カメラマンの大川さんやアシスタントの数井クンや、マネージャーの青木サン（小説では、赤木さん）たちとみんなで、アイスクリームを1コずつ買って食べたの。けっこう寒かったんだけど、ウッツは、ホットドッグ屋さんとか見つけるのすごく上手なのよ」

F「ほらほら、空港でバゲッジ・トラブルに合うシーンがあったじゃない？」

M「あ、あれはアタシアタシ。（笑）数井クンのと私のと、スーツケースが2つ出て来なかったのよ」

F「ホントのことだったんだよね。他にもいろいろ、『彼女』ご一行サマがたどったスケジュールが生かされてるところ多いよね。たとえばさ、ほら」

M「ニューヨークではね、『オペラ座の怪人』のあと、ジャズ・バンドが出てるライブハウスに行くでしょ、あれもホント。まー細かいことを言うと、ウッツが猫のポストカードを買ってたのもそうだし、ルームサービスのサンドイッチが冷めてるのも、私は見たの」

F「雨が降って大変だったんだって？」

M「そ!! でも誰れが悪いわけでもないんだよね、大川サン、怒ってたけど。（笑）ウォール街（単行本93ページ）のときはピークだったなー。寒くて寒くて、濡れちゃうし、みんなでスープをズーズーすすりながら撮影したの。とにかくね、ニューヨークでは摂氏8度の日の翌日が30度、で、次の日が7度。この気候の変化だけでも、もう体調が悪くなっちゃうよね。撮影隊が帰ったあと、ニューヨークに残ったウッツは、1週間も熱が下がらないまんまだったんだって。本当に、お疲れ様でしたーッてことで、久美子ちゃんも来れたらよかったのに」

F「これだけツラカッた思い出を言いまくられたら、いくら私でも行かなくて良かったって思うわー。でも、いいこともあったでしょ？ とにかく写真を見れば、苦心の甲斐あり、っていう成果はわかるけどね」

M「そのとおりよ。もう本当にツラくて、

TAKASHI UTSUNOMIYA
TM NETWORK
Kanojo 彼女

やっと晴れたニューヨークの街で、足早に撮影は進行中。単行本の何ページにこの写真が載ってるか、わかりますか！

「ウツ。あそこらへんから歩いてきて」注文をつける大川氏。

マンハッタンを背景に、ロンドンで買ったスーツでポーズ。

こちらはブルックリン。リラックスした撮影風景!?

向こうに見えるのは、ロンドン・ブリッジ。数井クンに注目！

ここはロンドン。真剣な撮影隊を尻目に[illegible]く編集者。

ロンドンからニューヨークに向かう飛行機の中で原稿3本（注『彼女』じゃありません）書いたり……あ、これは自分が悪かったんデシタ。（笑）でもホントに、100カット以上の写真はどれも素晴らしくて、あらためて大川直人の偉大さに驚いたわ。ずぶ濡れになって、まるでホームレスのようになって機材を運んでいた数井クンにも、心から拍手を送りたいッ。パチパチパチ……!! それでもうひとり、アシスタントの尾崎クンていう人がいるんだけど、彼も敢闘賞なの。東京での最後のロケも、またまた雨だったという……」

F「単行本1冊作るには、それなりの大変さがあるってことですね。でもいい本ができて本当に良かった。ウツも喜んでくれたらしいしね」

M「ウン。やっぱりそれが何よりも嬉しかったよね。単行本の『あとがき』まで誉めてくれたんだヨ。（笑）それに、読者の人もすごくよかった、って手紙くれたりして」

F「ね、森田さん。ここで告白して欲しいんだけど、登場人物の中で誰にいちばん感情移入した？」

M「うーん……。書いてるときはやっぱり書いてるその人に感情移入してるわけだけど……。でも書いてるうちに、久美子ちゃんの担当と、私の担当に分かれてきたじゃない？」

F「なんとなくね、やっぱり、すべてのキャラクターをひとりで網羅することは無理だし。どこでもいちばん人気の立花順子さんは、きっと森田さんに近いものがあるかもね。職業とかそういうことじゃなくてさ、彼女が持つ恋愛観とか、女らしさとか。私は正直に言うと、小森さやかとか村上マリの気持ちがわかる。男の人にはたいてい評判悪いけど。彼女たちを書く時には思いっきり本気出させてもらいました」

M「久美子ちゃんが作った名場面いっぱいあるよね。"ね、このオサカナ、誰れと食べたい？" のシーンとかさ。その後、実はウツはオサカナが嫌いだってことがわかっちゃったんだけど。（笑）私もあのシーンはすごく好き。……でもさ、立花順子さんって私と近いっていうんじゃなくて、（そんなこと言ったら、みんなオコルヨー）自分がそうありたいな、っていう人だと思う。憧れの形だと思う。やさしくて、強くて。でも最後は、ウツに……オット、この先は単行

ロケバスの運転手のオジサンは、なかなかハンサムだったヨ。

さり気なく背後のカメラに気を配るオチャメな大川直人氏。

なーんかOHKAWAばっかり目立ってますけど……。ま、いいか。

ポーズ指導をする大川氏。

[好評発売中]

だからもういーってば、ポーズは。

ロンドンでの撮影が全部終わった瞬間の、喜びのポーズ！

ウツがアイスクリームを買った……。

ここが！ あのっ！ メイフラワー・ホテル801号室だよん。

本を買った人だけがわかる結末だから言えないけど、本当に好きな人を好きだって自分で実感できたでしょ。そこは、私が自分で書いててけっこうジンとしてたの(笑)」

F「ジンとしながらも笑わないでよ」

M「テレ笑いってヤツよ……」

F「そうか、順子さんが理想の形かぁ。私にも当然それはわかる。でもさ、出てくる女の子たちみんなウツを好きになるけど、そのときの感情の表わし方とかがそれぞれで、みんな悩むじゃない。誰もが恋するけど、みんな何かが欠けててなかなかうまくいかなくて。深い……。深くてなんだか自分で言いたかったことがわかんなくなっちゃったわよ。ん……。私の憧れの形は、村上さんかな。これ、半は本気」

M「へぇ。久美子ちゃんは、沢口麻子ちゃんかと思ってた。立岡さんも麻子ちゃんがいちばん好き、って言ってたよね。(笑)ウツは誰でしょう」

F「誰がいちばん“タイプ”かな」

M「そういう質問をいっぱい、あちこちでされてるらしいよ」

F「誰だろうね」

M「ま、これはみんなの想像にまかせるのが、やっぱりいいんじゃない？ なんか、みんなそれぞれの『彼女』があって嬉しいね。立岡さんには立岡さんの『彼女』があって、吾郷さんには吾郷さんの『彼女』がある。ね、なんか、いーじゃん」

F「そうだね。そう考えると特に、いつまでも終わらない小説『彼女』って気がする。単行本の帯にもそう書いてあったし(笑)、ホントにそうなの？」

M「な、なんつーことを。……そう。“だけど彼女はまだ終わらない”って書いてあるんだよね。私はもうこのままでいい、って気がしてる。このまま、美しいまま……」

F「私も私も、そう思うそう思う。でも、森田さんがひとりで書く『彼女』を読んでみたい気もする」

M「だめ。やっぱりさ、ひとりのたかがライターが小説書くなんて恐れ多いわよ。ふたりだから書けたんだよ、きっと。それに“SPECIAL THANKS TO”の人がいっぱいいるじゃない。ファンの人も含めて、ね。本当に本当に、皆さん、とうもありがとう!! 『彼女』はこれで終わりでーす!! サヨウナラ!!」

F「ウッ……(また泣いちゃった)」

TETSUYA KOMURO

MONTH / DATE

1: 21 22 27 / 2: 1 10 11 24 / 3: 1〜5 31 / 4: 8 9 10 / 5: 22 30 1〜

- TBS「ザ・ベストテン」中継（仙台）
- コンサート・グッズ用ポスター撮影（宮城県民会館）
- 「大阪SFX'88」用コメント撮り
- 日本テレビ「歌のトップテン」出演
- アリーナツアーオープニングビデオ撮影
- TBS「ザ・ベストテン」中継（富山）
- フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
- アリーナツアー・リハーサル
- TBS「ザ・ベストテン」中継（大阪）
- シンプジャーナル、明星、B-PASS他3誌取材
- パチ▼パチ、GB、NON・NO取材
- NHK「別冊ミュートマジャパン」出演（日比谷）
- コンサート・グッズ用撮影
- 「テレビジョン」他 取材
- 小室哲哉、ロンドンへの壮行会（六本木）
- ロンドンへ出発
- 『SEVEN DAYS WAR』レコーディング（ロンドン・MARCUS St）

NAOTO KINE

MONTH / DATE

1: 21 22 / 2: 1 10 20 25 / 3: 1〜5 31 / 4: 8 9 10 22 / 5: 2 8 9〜19

- TBS「ザ・ベストテン」中継（仙台）
- コンサート・グッズ用ポスター撮影（宮城県民会館）
- 日本テレビ「歌のトップテン」出演
- アリーナツアーオープニングビデオ撮影（新宿）
- フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
- TBS「ザ・ベストテン」中継（千葉）
- アリーナツアー・リハーサル
- TBS「ザ・ベストテン」中継（大阪）
- シンプジャーナル、明星、B-PASS他3誌取材
- パチ▼パチ、GB、NON・NO取材
- コンサート・グッズ用撮影
- 小室哲哉、ロンドンへの壮行会（六本木）
- ニッポン放送「ファンファントゥディ」出演
- ロンドンへ出発
- 『SEVEN DAYS WAR』レコーディング（ロンドン・MARCUS St）

TAKASHI UTSUNOMIYA

MONTH / DATE

1: 12 22 / 2: 1 10 11 24 25 / 3: 1〜5 31 / 4: 8 9 10 22 25 / 5: 2 8 9

- TBS「ザ・ベストテン」中継（仙台）
- コンサート・グッズ用ポスター撮影（宮城県民会館）
- 日本テレビ"歌のトップテン"出演
- アリーナツアーオープニングビデオ撮影（新宿）
- TBS「ザ・ベストテン」中継（富山）
- フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
- TBS「ザ・ベストテン」中継（千葉）
- アリーナツアー・リハーサル
- OBC「ミュージックING」インタビュー
- TBS「ザ・ベストテン」中継（大阪）
- シンプジャーナル、明星、B・PASS他3誌取材
- パチ▼パチ、GB、NON・NO取材
- コンサート・グッズ用撮影
- 小室哲哉ロンドンへの壮行会（六本木）
- ラジオ日本「早見優マンディスペシャル」電話ゲスト
- パチ▼パチ撮影
- ロンドンへ出発
- 『SEVEN DAYS WAR』レコーディング

▶ここに掲載したスケジュールはもちろん全てのスケジュールではありません。誌面の都合上割愛した部分もあります。

6月 4 15〜19 20〜30 7月 1〜12 14〜 8月 1 11 13 17 18 19 20 25 27 29〜 9月 1〜 10月 5〜 6 19 29〜 11月 2 13 16 27 28 29 12月 1 5 8 11 12 19 27 28 31

『SEVEN DAYS WAR』レコーディング
FM東京「ラジカルナイト」三元中継（ロンドン）
単行本「VIS—AGE」用写真撮影
〜
『CAROL』レコーディング
（ロンドン PREPRODUCTION st）
『CAROL』レコーディング
（ロンドン・Comfortsplacest）
STAR CAMP TOKYOリハーサル
（ロンドン・NOMIS COMPLEX St）
TBS「ザ・ベストテン」電話出演
FMフジ「THE ROCK」電話出演
ロンドンから東京へ
フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
TBS「ザ・ベストテン」中継
TBS「サーフ&スノー」出演
TV朝日「ミュージックステーション」出演
フジテレビ「オールナイトフジ」出演
STAR CAMP TOKYO
ロンドンへ出発
『CAROL』レコーディング
（ロンドン・AIR St）
TBS「ザ・ベストテン」LONDON生中継
ヤマハEOS VTR録り
ロンドンから東京へ
『CAROL』ツアーデータ作成（合歓の郷）
『CAROL』ツアーリハーサル（合歓の郷）
フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
タマゴ FM山口コメント録り
ニッポン放送「ファンファントゥディ」録り
NHK「JUST POP UP」収録
ez収録
TBS「ザ・ベストテン」出演
日本テレビ「ザ・トップテン」出演
『CAROL』ツアーゲネプロ
YAMAHA EOS DAYゲスト
マリ・クレール取材
『CAROL』ツアースタート
ニッポン放送「ファン・ファン・トゥディ」収録
フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
NHK「紅白歌合戦」出演

6月 20 22 24 30 7月 5 6 12 8月 1〜11 13 17 23 25 27 9月 1〜 10月 5 6 11 18 22 25 29 2〜6 11月 16 27 28 29 12月 1 5 6 8 12 28 31

日本に帰国
"TMF関東大会"選考委員（日比谷野音）
SFロックステーション録り
SFロックステーション録り
FM東京「ラジカルナイト」三元中継（東京）
SFロックステーション録り
ニッポン放送「ファンファントゥディ」「ポップン王国」
SFロックステーション録り
STARCAMPTOKYOパンフレット撮影
SFロックステーション録り
テレビ朝日ビデオジャム収録
B-PASSインタビュー
ニッポン放送「ファンファントゥディ」「ぽっぷん王国」
ロンドンへ
STAR CAMP TOKYOリハーサル
TBS「ザ・ベストテン」中継（ロンドン）
ロンドンより帰国
フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
TBS「ザ・ベストテン」出演
ニッポン放送「ファンファントゥディ」出演
（渡米中の上柳氏に代わってパーソナリティー）
STAR CAMP TOKYO（BIG EGG）
ロンドンへ出発
TBS「ザ・ベストテン」LONDON生中継
CAROL レコーディング
（ロンドン AIR STUDIO）
ロンドンより帰国
SFロックステーション録り
SFロックステーション録り
GB、FMステーション取材
パチパチ取材、JUNON取材
FM埼玉「鉛筆をけずって」録り
『CAROLツアー』リハーサル
（合歓の郷）
フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
タマゴ コメント録り、FM山口 コメント録り
中2コースインタビュー
ニッポン放送「ファンファントゥディ」出演
NHK「JUST POP UP」収録
ez収録
TBS「ザ・ベストテン」出演
日本テレビ「ザ・トップテン」出演
FM埼玉「鉛筆をけずって」録り
『CAROL』ツアーゲネプロ
『CAROL』ツアースタート
アリーナ37℃取材
フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
NHK「紅白歌合戦」出演

6月 19 22 23 26 16 29 30 7月 4 5 7 8月 1〜11 17 18 19 20 25 27 9月 1〜30 10月 7 15 22 25 11月 2〜15 16 28 29 12月 1 5 8 28 31

（ロンドン・MARCUS St）
ロンドンからニューヨークへ。
パチ▼パチ「彼女」撮影（ニューヨーク）
〜
TBS「サーフ&スノウ」電話ゲスト
FM東京「ラジカルナイト」三元中継（ニューヨーク）
ニューヨークから東京へ
パンフレット撮影
FM東京「歌謡バラエティ」ゲスト
OBC「ミュージックING」録り
テレビ朝日「ビデオジャム」収録
TBS「サーフ&スノウ」出演
文化放送「スクールズアウト」ゲスト
B・PASSインタビュー
SFロックステーション録り
パチ▼パチ取材
SFロックステーション録り
ロンドンへ
STAR CAMP TOKYOリハーサル
TBS「ザ・ベストテン」電話出演
フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
TBS「ザ・ベストテン」中継
TV朝日「ミュージックステーション」中継
フジテレビ「オールナイトフジ」出演
STAR CAMP TOKYOライブ（東京ドーム）
ロンドンへ出発
『CAROL』レコーディング
TBS「ザ・ベストテン」LONDON生中継
（ロンドンAir Studio）
ロンドンより帰国
パチ▼パチ取材
GB、FMステーション取材
パチパチ取材
『CAROL』ツアーリハーサル（合歓の郷）
FM東京「歌謡バラエティ」出演
フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
タマゴ FM山口コメント録り
中二コースインタビュー
ニッポン放送「ファンファントゥデイ」収録
NHK「JUST POP UP」収録
ez 収録
TBS「ザ・ベストテン」収録
『CAROL』ツアーゲネプロ
日本テレビ「ザ・トップテン」出演
『CAROL』ツアーゲネプロ（名古屋市民会館）
『CAROL』ツアースタート
フジテレビ「夜のヒットスタジオDELUX」出演
NHK「紅白歌合戦」出演

TM NET

NAOYUKi FUJii

NEW ALBUM

BLOW SESSION

All Songs Arranged by MASAMI TSUCHIYA

CD D32A0415 ¥3,200/CT 28P6867 ¥2,800/LP C28A0685 ¥2,800

NEW SINGLE

クローム▶メタリック

CDSg 10DA0227 ¥1,000/SgCT 10P13318 ¥1,000/Sg 7A0937 ¥700

NAOYUKI FUJII '89 CONCERT SCHEDULE

Date	OPen	Start	Place	Information
1/24(Tue)	17:30	18:30	NAGOYA RAINBOW HALL	SUNDAY FOLK 052-320-9100
1/26(Thu)	17:30	18:30	OSAKAJO HALL	SŌGŌ OSAKA 06-344-3326
1/30(Mon)	17:30	18:30	NIHON BUDOKAN	SŌGŌ TOKYO 03-479-9999
1/31(Tue)	17:30	18:30	NIHON BUDOKAN	SŌGŌ TOKYO 03-479-9999
2/13(Mon)	18:00	18:30	FUKUOKA SUN-PALACE	BEA 092-712-4221
2/14(Tue)	18:30	18:30	FUKUOKA SUN-PALACE	BEA 092-712-4221

12▶27

NEW ALBUM・NEW SINGLE ON SALE

STANDING ON THE RAINBOW

THE CHECKERS

これがなくちゃあ１年が終わらない。パチ▶パチSTYLE　ザ・チェッカーズSPECIAL。「SCREW」した1988年を、7人のポートレイトと共におさらいしてみようではないのっ。これでもか、これでもかッの充実ページぞいっ!

PHOTO by HISAKO OKUBO NAOTO OHKAWA MASANORI KATO STYLING by HIRONO TSUJITA

(衣装協力)GRASS MEN'S LONDON DREAMING A STOREROBOT(タカモクのパンツ¥13,800)

THE RAINBOW

STANDING ON

PERSONAL CLOSE UP
歌ってるときのオレには勝てない

'88年の藤井郁弥を回想して、ということですが、ちょっと簡単に思い浮かばなくて困ってしまった。というのは、あまりにも順風満帆で、波乱万丈っぽいこととはほど遠い一年を彼が送っているからです。確か昨年の暮れあたりに「チェッカーズのフミヤでなく、藤井郁弥個人をやる」と発言していたのを覚えていますが、彼の'88年をあえて総括すると〝藤井郁弥の一人歩き〟ということになるでしょうか。

もちろん、チェッカーズの活動も例年どうりにあって、それはそれで成立させながら、一方でソロ活動もきっちり成立させたと。ハッキリ言って余裕の藤井郁弥だったかもしれません。今年で26歳になり、デビュー5周年も迎え、普通だとこのへんでひと息ついて、みたいなムードが漂ってもおかしくないのですが、彼、及びチェッカーズにはそういった気配がまったくありません。5年前の、あのがむしゃらだった時期は過ぎたものの、相変わらずのポジティブな姿勢でもって、バリバリと仕事をこなしているわけです。

さて、ここではバチ▼バチの取材を通しての彼の'88年を回想してみたいのですが、自分のスケジュール帳をパラパラとめくってみると、やっぱりその取材の内容も多岐にわたっていて、今やミュージシャンとしてだけの扱いでは、藤井郁弥を語るに片手落ちなんだなと改めて納得した次第。正直言って、私個人としてはミュージシャンの藤井郁弥に憧れてたりしますから、たとえば俳優をやったりすることには複雑な気持ちもあるのですが、でもそれはしょうがない。俳優としての彼にも魅力があり、ニーズがあることも確かだからです。皆さんのなかにも、ソロ活動の方の彼を好きになった人もたくさんいるでしょう。

ま、その話はさておいて、今年最初の取材は「ONE NIGHT GIGOLO」のシングル・リリースに合わせたパーソナル・インタビューでした。渋谷にあるラブ・ホテル（!?）を借りての撮影で、なにやらいかがわしい風景のなか、居心地悪く取材をしたのを覚えています。

話は「ONE NIGHT GIGOLO」の詞の内容から、チェッカーズのシングル・ヒットの必要性、さらにTVというメディアの大切さに及んだのでした。

「(芸能界は)好きだよ、なんでもリッチじゃない。ロック界みたいに一ケ所に向かってやってるんじゃないからさ、枠が広い。TVって物を魚眼レンズの感覚で見てるもん」

「ああいうことを言うヤツは自信がないのよ、裏は。3分間で自分を表現するってことほどむつかしいものないもん。コンサートで一時間あったらさ、泣かせの部分も偽りの部分も作れるわけ。どっかでコケたとしても次で、なんかでキメてしまえばもうチャラになっちゃうじゃん。それは3分間じゃできないもん。ダサいヤツは完璧にダサいまま映るからね。3分間ですべてを判断されたくないって言っても、その3分間ですべてを出すことほどむつかしいことはないと思う、オレは」

こうした発言の裏には、芸能界という場所で戦ってきた人の自信とプライドが強く感じられます。ちょうどこの時期、ロッキン・オン・ジャパンという硬派の音楽誌に彼のインタビューが載っていて、そこには「クールな観察眼を持ったアイドル」と形容されていました。

次に取材をしたのは、これは忘れもしないキャンペーン。7人が全国各地に飛ぶこのキャンペーン、彼は名古屋に行ったのでした。偶然、同じ新幹線に乗り合わせていたらしく、ホームに降りたとたん悲鳴が上がり、千人ほどのファンが走るその現場をみて呆然。新幹線に乗ったのがデビューの年以来というのも驚きでしたが、行く先々を追いかけてくるファンのエネルギーはもっと驚きでした。なにしろ彼ひとりのために、東海ラジオの前の通りは閉鎖されてしまいましたから。なんというか、やっぱり現役のアイドルなのです。普段、取材などで会ってるぶんには、彼は十分に大人だし、十分に人間らしい人なので、そんな特別な存在だということをふと忘れてしまう瞬間があるのですが、彼と、彼を取り巻く人との関係を見たときにハタと気づかされるわけです。

ところで彼にアイドルの自覚はあるのでしょうか。そこのところは私は少々疑問です。たとえばマイケル・ジャクソンという人がいて、彼はアイドルとしてのマイケル・ジャクソンにすべてを投入しているような気がします。そこが素晴らしいところであり、同時に不幸なところなのかもしれませんが、ではと藤井郁弥を見たときに、アイドル＝藤井郁弥というより、アイドルを藤井郁弥がやっているという図式を私は見出します。つまり、完全にアイドルになりきるには、彼にはナチュラルな部分があり過ぎるということ。アイドルの前に生身の人間であることをきっと大事にしているということではないでしょうか。ジャニーズ系のアイドルが好きな人から見れば中途半端といえば中途半端なのでしょうが、私は彼のそうしたところが好きだし、魅力だと思っています。

その後、アルバム『SCREW』のレコーディング取材があり、その合い間にリリースになった「Jim&Janeの伝説」のシングルの取材がありましたが、このあたりの彼の印象はひどくぼんやりしています。創作期間中で頭があさっての方向に行ってしまっているのか、いつもの覇気が感じられず、かといってダウンな状態でもない、不思議な印象。

「毎回詞を書くときに必ず思うことがあるのは〝オレもう書けねぇ〟って。なんで今まで詞ができたのかなって思う。でも前のレコード見直して〝ああ、やっぱりオレが書いた〟とか思って……」などというあたりに彼の心境がうかがえます。

とはいえ『SCREW』が完成した時点での取材ではすっかり抜けて、いつもの彼に復活。16ビートを主流にしたサウンドはこれまでのチェッカーズという観点で見ると新鮮でしたが、ファンにとってはやはりラストに収められた「Standing On The Rainbow」が感動でした。全10曲中9曲が彼の手による詞で、「Rolling My Stone」「鳥になった少年」など、内省的な内容が目立ちました。

7月になり、26歳の誕生日を迎えた彼の特集をした記事もありました。赤の傘などさしてもらって、キュート路線を狙ったのですが、話の方は結構ナーバス。「歌やめちゃおうかな」なんて発言もあって、この記事はファンの皆さんをお騒がせしたようでした。スタジオじゃなく外で撮影するのはめずらしいのですが、小雨まじりの天気に彼の気分も晴れない感じ。あんまりお天気屋さんじゃないんですけどねぇ、ホントに。

その一方でやったのが例の「意外とシングルガール」。琢也役がスッポリとハマって、なかなかの好評を得ました。私なんか「俳優はあんまり」などと言いながらかなり力入れて見ちゃって、毎週コーフンしてましたけど。そういえば緑山スタジオまで取材に行って、台本覚えるのに必死になっている様子を見てとっとと退散したこともありました。

話は前後しますが、骨折事件もありましたね。『SCREW TOUR』も始まったばかりというときの事故で、一時はどうなることかと心配しましたが、BIG EGGでのコンサートのときにはちゃんと治してるあたりがさすが。BIG EGGはコンサート会場としてあんまり良い場所じゃないとずっと思っていたのに、チェッカーズのときはなぜかよかった。メンバーも、それから集まった5万人のファンも、みんなが感動した忘れられない一夜です。

そして、またもやシングル、「素直にI'm Sorry」のパーソナル・インタビュー。このときは同時に〝NINETEEN〟の取材もやって、お互いクタクタ。そりゃそうです。たて続けに2時間も喋ってれば疲れます。

「BIG EGGって当然だけど広くてさぁ。リハーサルのときはそれほど感じなかったんだけど、いざ本番でステージ立ったときは鳥肌立っちゃったの。で、3階の席のヤツなんて見えないくらいでさ、それでもすごい歓声がオレのところまで届くわけ。そのときにね、思った。いろんな努力して無駄な空回りするのはもうやめようって。さんざんアガいたけどさ、男の客ふやそうとか、もっと年令層上げようとか。でも結局はコイツらのパワーがいちばんあるんだって痛感してね。そしてらコイツらのために、コイツらが喜ぶものをちゃんとやった方がいいんじゃないかと思ったの」

「だって……オレがどれだけ俳優やっても、歌を歌ってるときのオレには勝てないからね。ドラマやって、CM出て……どれも面白いし刺激にはなるけど絶対に歌を歌ってるオレは超えられないもん」

印象に残ったふたつの発言です。すでに例のCMがオンエアになっていた時期で、チェッカーズ以外の活動があたりまえのこととして世間に受け入れられていた頃でしたから、私は特に後者の発言は嬉しかった。

このあと、彼がひとり、完全なプライベートでスペインへ行ったことは報告ずみですが、帰ってきてからのちゃんとした取材はとりあえずないです。ソロ・シングルとしてCM曲の「Mother's Touch」がリリースになって、オフも束の間、今頃年末の忙しさに追われていることでしょうが、なにしろ'88年の藤井郁弥はよく仕事をしています。なんといってもお疲れさまという感じ。すり減らず、消耗せず、ゼヒゼヒ'89も頑張って欲しいなぁと思いつつ、来年もまた、こんなにたくさんの取材をしてしまう私なのでしょうか。思いきり不安。

文●宇都宮[illegible]

FUMIYA

NAOYUKI

STANDING ON THE RAINBOW

PERSONAL CLOSE UP
・・・・・・仕事やんないッ（笑）

'88年。藤井尚之は休む暇もなく、身を粉にして音楽と取り組んでいた。——という書き出しは気に入っていただけるでしょうか、尚ちゃん？

ある日、ラジオ番組で"オレは飽きた……もうミュージシャンと呼ばれたくない、タレントと呼んでくれ！"と暴言を吐いた尚ちゃん。そのときは、ラジオ特有の軽いノリと勢いゆえの発言かと思いきや、後になって、いろぉんな人との会話でそぉんなことを言っていることが判明した。

レコーディングが終わったと思えばツアーが始まり、そのさ中に曲作り、そしてまたレコーディング……という音楽三昧、どこに出しても恥ずかしくないミュージシャン・ライフを送っていた彼が、とうとう発してしまった言葉"もうミュージシャンと呼ばれたくない"は、その後、『とんねるずのみなさんのおかげです』で、いきいきとコントに参加していた尚ちゃんの姿に裏付けられていた、と言えるだろう。

だがしかし。その数日後には、河口湖スタジオで、ソロ・アルバムのレコーディングにいそしむ彼がいたのだった。

「音楽ものに関しては、他のメンバーよりも忙しかったですね。来年早々にライブも決まってますから、そこまでとりあえずスケジュールが詰っているという。（笑）やっぱり、休みもほしいですね。そのぉ……いっぱいじゃなくてもいいですから。せめて5日ぐらい（笑）」

'88年に作った曲はというと、実に30曲余り。それでも'87年はもっと多かった、と尚ちゃんは余裕の微笑みさえ浮かべている。

「他の人にも（曲を）書いたりしてましたからね。今年は、そういうのはなかったですね。話は来てるみたいですけど、自分のことが忙しくて。ちょっと……お断りいたしました。やっぱり、作る以上は、ちゃんとしたものを作りたいですからね。もちろん、自分の名前も出ますし。まぁ、当然のことかもしれませんけど。（その曲を）歌う本人にも気に入ってもらいたいですからね、やっぱり」

いつのまにか"プロ"の2文字が何の異和感もなく、彼の横顔にピタリとはまってしまっている。曲を提供することに関しては消極的だったけれど、MODSや南佳孝さんのアルバムに参加したり、CF曲を演奏したり、と、サックス・プレイヤーとしての活躍も、やはりここには書いておきたい。作曲家としてもプレイヤーとしても外注が後を絶たない、というわけである。

「とにかくスタジオ・ワークが多かったですからね。だから……まぁ、正直なところを言うと、もう少し外の空気が吸いたかったですね。（笑）そういう意味で、飽きた、とか言ってますけど。正直なとこ、ホンットにそうですよ（笑）」

河口湖でおいしい空気を吸いながらレコーディングを進めていたのもつかの間、東京は六本木のスタジオに拠点を移して、再びナーバスな日々に突入。しかし、そのスタジオの近くにある"二杯飲み屋"でしばし心なごませた、とか。ここらへんは、尚ちゃんにとって重要なポイントと言えるかもしれない。

結果、ノリの良いロックンロール・ナンバーが満載された、しかも、ナンカチョットせつない"ナオ・バラ"ありのアルバム『BLOW SESSION』が誕生したのである。とうとう"音が好きだ"なんて尚ちゃんに歌わせちゃって、どーすんの、もう。

「今はもう、マーさんの（ソロ・アルバム）が楽しみですね。（笑）がんばってもらいたいです。まだ、聞いてないんですけど。聞かせて、って言えば今でも聞けますけどね、完璧な形になってひとつの"商品"として聞こうかなって。いちばん最初に、自分が（ソロを）やったときも、みんなは、完璧にできあがったものを聞いたと思うんですよ。だから、そういう聞き方をしたいですね、自分も」

まるで高校生が技術家庭の作品コンクールで[illegible]の出来を気にしているような、そんなかわいいシチュエーションを、日本全国規模で楽しんでしまうチェッカーズのスケール感は、やはりスゴイ。と、指をくわえて感心しているばかりではイケナイ。参加しなくちゃ。せめてライブにでも。[illegible]ても。

「マーさんも、当然、ライブどうぞ、みたいな話はイベンターから来てますけど。そしたらマーさんが、尚ちゃんの前座でいい"とか言ったらしいです（笑）」

やっぱり、か、かわいい。

と言うよりも、この楽しくも清らかなメンバー愛（ヘンなコトバ）こそが、チェッカーズのいつまでも褪せることのない音楽性を支えている、と言っても過言ではないだろう。（イヤ、ホントに）

彼らはこの1年間、たくさんの新しい音楽を生み出し、同時に、その曲たちを携えて、全国をライブ・ツアーで回っている。

彼らのステージでは、新鮮なロックンロールと、かつて彼らを過酷なスケジュールの中に巻き込んだビッグ・ヒット・ナンバーとが共存している。「愛と夢のファースト」が歌われたと思えば今度は「哀しくてジェラシー」、という具合に。

「やっぱり、なんていうか、ヘンな例なんですけれども。ミック・ジャガーを観に行ったんですけど、やっぱりストーンズの曲をやると、みんな喜ぶし。スティングを観に行ったら、やっぱりポリスの曲で会場は盛り上がる、みたいな。だから、過去にヒットした曲っていうのは、誰が何と言おうと、聞いたときには、この曲あってのこのバンドなんだ、っていうのがあると思うんですよ。オレたちが作った曲じゃなくても、オレたちの曲なんですよね。そういうふうな考えに変わりつつあるみたいです。かと言って、どんどん作っていかなきゃなりませんからね、曲は」

そこには、チェッカーズの歴史がたしかにある。こだわりは捨てた、と尚ちゃんはそのとき、ちょっと風邪気味の充血した目をしばたかせながら、言ったのだった。

もうとっくに、TVでウケるバンドはロクじゃない、という時代は終わっている。チェッカーズはもちろん、その先頭を走ってきたバンドだ。ほんの少しも息切れせずに、彼らはタフにここまでやって来た。

なんか、ムキになっちゃったけど。

今"こだわり"を軽く捨てて、コントに出て嬉しがっている尚ちゃんが、なんだか大きくて、なんだか眩しく見えてしょうがない。んでもって『BLOW SESSION』がピカピカにできあがってしまったのだもの。

〈ある日のインタビュー〉

——チェッカーズの藤井尚之と、ソロのときの藤井尚之と、自分の中で、別々に存在しているんですか？

「……自分の中では、ないでしょうけど。やっぱり……意識は違いますね。ソロの仕事をしてるときは」

——チェッカーズに戻って来るとホッとする、とかってあります？

「どうなんですかねぇ……。最初は、メンバーが個人個人で仕事し始めたときは、集まると"しっかりやってるかな"とか、そういうのがきっとあったんでしょうね。お互い、ホッとするものはありましたね。今は、それはないような気がしますね」

——へぇ、そうなんだ。

「集まったら集まったで、バカ笑いして、ワイワイやって、とか（笑）」

——ウン。ひとりになったら……。

「ウン」

——おとなしくしてる？

「ウン（笑）」

——でも、すごく自然な感じで、もうつながってるんですね。

「もう、安心できるというか。それで、ソロに関しては、恥じないようには絶対やらないと。成功させないと、それはチェッカーズの方にも響きますし。そこが、いちばん大きな問題ですね」

——ナルホドネ。

「だから、作る段階では、そんなにリキまなくてもいいんですよ。それをいい方向でレコードで生かせればいいし、それで表に出るとき……たとえばライブとか、絶対に成功させたいです」

——やっぱり、どこかにはチェッカーズをしょってる、という……。

「ウン。それは絶対ありますね」

たしか、デビューしたばかりの頃、目立つのが嫌で、TVに出てもいつも誰かメンバーの後ろに隠れるようにしてた、尚ちゃん。東京には友達がひとりもいない、なんて言ってたこともあったよね。

そんな頃から考えると、今の、彼の存在感は、目を見はるものがある。

ひとりのミュージシャンとして、認められようとしている。ネーム・バリューの大きさも、ひとつの才能の結果であることも充分に彼は理解して、次を見ている。ひとりのタレントとして、というのは少し抵抗があるけれど、彼の新境地を発見できるのも、時間の問題かもしれない。そして、ひとりのアーティストとして、本当の意味のアーティストとして、彼が私たちのシーンに君臨する日が、とても待ちどおしい。

「'89年の抱負ですか？　まずやっぱり、（ソロの）ライブの成功ですね。で、もちろんチェッカーズも。でも、そうですね、あとは……仕事やんないッ（笑）」

尚ちゃんが言うからこそオモシロイ、そして尚ちゃんが言うからこそ説得力もある、その"抱負"が、'89年に、どんな形で広がるのか、まったく想像もつかない。だからこそ、彼には迷惑かもしれないくらいの期待をかけてみたい。

PS…24歳のお誕生日オメデトウ。まだ24歳だなんて……!!

文●森田恭子

PERSONAL CLOSE UP

流れる川のごとくね。

チェッカーズとの、トオルくんとのこの1年の出会いをボーッと考えていた。

「あんまり熱心なファンじゃなかったな」

と、後悔ばかりが頭をよぎる。

アルバムやツアーに関するインタビューで何度か出会ったけれど、1度もライブへ足を運ばなかったと……。8月26日、午後5時。仕事で訪れていた東京プリンス・ホテルの玄関先。もうすぐビッグ・エッグでは"SCREW TOUR"の東京公演が始まる。けど、突然の大雨にみまわれてちゅうちょしてしまった自分の姿が、とても鮮明に甦ってくる。

でも、私はチェッカーズが大好きだ。こうして今日も1日中『SCREW』が耳元で鳴り響きっぱなしだ。「GIPSY DANCE」のギターのカッティング、カッコイイなあ、なんて思いながら聞き進めていくと、少しずつ、トオルくんとの会話が思い出されてくる。

「これからアルバム・レコーディングのリハーサルに入るんだけど、楽曲はたくさんあるのよ。でも、その中で、たとえば印象が似てる曲があったら、今回はこっちをとっといて、あれをやめよう、みたいなディスカッションはたくさんあった。今回は、メロディがいい曲は先行させるっていうのと同時に、アップテンポの曲が多いから、今度はスローなのを作ろうとか、レゲエっぽいの欲しいな、とか、全体をみながら作ってるんだ」

2月18日のアルバム・インタビューで語っていたトオルくん。この時に制作していた『SCREW』より一足早くリリースされたシングル「ONE NIGHT GIGOLO」は、シングルA面に初めて登場したトオルくんの曲だった。

「"トオルのあの曲、Aメロはよかったけど、サビはちょっと飛んないね"みたいな1曲ごとの話し合いしちゃうからね。やっぱりメロディー・ラインって大事だから。で『ジゴロ』もそうだったんだ[illegible]。最初、曲出しん時、煮つまって曲できなかった。で、ゲーッと思ってさ"できねえなあ"とかいいながやっとAメロができたんだ。♪ヘイ ユー・ダンダダーンダン[illegible]っていうとこができて、"いいじゃん"と思ってそこだけテープに入れてみんなのところに持ってったんだ。レコーディングの時に1曲も持っていかないよりいいだろうと思って……。で、みんなで聞いて"あのAメロはいいね"って話になって。"あ、そう、そうね"みたいな感じで"じゃ続き作ってこよう、ちゃんと"って（笑）」

今までのチェッカーズでは考えられなかったイントロの長さといわしめた「ONE NIGHT GIGOLO」。テレビやラジオでオン・エアされる場合、時間制限があってイントロの長い曲は敬遠される。でも、「～ジゴロ」は、このイントロが曲のイメージをかなり強調していただけに、絶対に外せない部分だった。都会的なサックスのメロディと、"ギャッ、ギャッ"とスリリングなギターのカッティングが生むクールな世界は、また別のチェッカーズの魅力を見せてくれた。昨年から少しずつ感じてた"別の魅力"は、『SCREW』で顕著に現われ始めたように思う。

「最近、テレビ見てて発見したんだ。今の歌謡曲には、すぐ"何風アレンジ"って片付けちゃう無理な曲作りがあってガックリきちゃうけど、昔のはね、そうじゃないのよ。昔の歌謡曲って、アレンジなんかすごいの、オレから言わせると。特にピンク・レディとかフィンガー5。たとえばピンク・レディの「カルメン」なんて"オペラみたいな世界を"スタンタタンタタラタ……"ってバックが動いて、歌は"カルメーン"ってダーッで音を伸ばしっぱなし。ウラメロ対位法。これ、すごいよ、アレンジ的には素晴らしいと思ったな[illegible]。そのカッコよさを一番引き出す[illegible]てきたのがシブガキ隊って思った。『スシ食いね[illegible]』の[illegible]なんか絶品よ。もうシングル買ったもん」

「一時、マニアックな[illegible]歌謡曲[illegible]に捕えられがちな発言だけど、[illegible]す。[illegible]歌謡曲は本当にジャンルを超えて、様々なところになるなってこと。それはもう、たくさんの人に言いつくされていることだけど、まだまだ形式に束縛され[illegible]てる人もいるから・

本当の意味でロックに近付こうって人たちとか、そう、[illegible]世界もすごい好きなんだけど、それをやるにはオレなんか限界を感じるわけ。ア・ルイスさんが、[illegible]持て[illegible]たことで共感したことがあるんだけど……ホラ、アンさんって英語上手いし、バリバリ英語で歌えるでしょう。[illegible]あの人は日本語でシングル出して、『あたいは日本語でやってるんだ、歌謡曲だと思ってる』って発言してるんだよね。オレも、それは絶対そう思うわけよ。やっぱり言葉の違いって大っきいの。はっぴいえんどの出現で日本のロックができたっていうあったけど、それは向こうのロックに近付いたんじゃないんだもん。"日本のロック"っていう表現ならできると思うけど。"日本のレゲエ"とか"日本のナントカ"っていうのはできる。でも、もっと大きく考えてみると、結局、歌謡曲になっちゃう。"ベーン!""ギャーン!"ってやってる人は、そういわれると絶対[illegible]かるだろうってわかるけど。オレは歌謡曲じゃないとか、オレはロックなんだとかさ、やっぱ言えないよね。外人じゃないんだもん。向こうからきたもんなんだよ、結局」

だから。"ロックだぜ"みたいな方向じゃなくて何かできないかな、と、トオルくんは試行錯誤を続けている。

今のティーンの人たちは、もしかしたら音楽に対してとても素直で、すでにそんな分け隔てなんかせずに好きな曲をどんどん吸収しているかもしれないけど。

トオルくんのそんな曲作りへのアプローチは、音楽に対する愛情の現れだ。ロックも民族音楽も歌謡曲も、同じ愛情のフィルターで見聞きしている愛情。メロディーがよくて、リズムやリフもカッコよくて、耳になじんで踊りたくなったり切なくなったり。今までのチェッカーズの曲たちも大好きなんだけど、そこに、いえもしれぬ深みを必要以上に感じてしまう私。

「『SCREW』は大きな節目になってると思う。オレが第3者で、こういうアルバム出すバンドがあったら買うと思う、自分で。そんな気持ちになったの、これが初めてかもしれない。今までのだったら"まあ、日本のバンドもなかなかやってるじゃん"みたいな感じだったかもしれない。でも、これはなんかね、あ、コピーしてみたいな"とか思いそうなんだ」

血の通ったサウンド。そんなあたたかさを感じるのが『SCREW』だ。サウンドの指向性からいえばチェッカーズと並ぶバンドは他にもいくつもいるかもしれない。でも、その中で唯一チェッカーズに魅かれるのは、1人1人のセンスのよさやステージでみせる実力の高さはもちろんのことだけど、あの人格に代表される血の通った愛情がにじみでているからだ。音楽や芸術によい人格なんて必要ない。才能さえあればと語る人もいるけれど、私はイヤな奴の作ったサウンドはどんなにグレイドが高くても好きになれない。

トオルくんの担当になったものの、この1年間、インタビュー取材するたびに"トオルくんはやさしい"と人格的な面ばかりクローズ・アップしてしまった私の弁明になってしまったけど、イヤな奴は嘘をつく。そんな奴のサウンドに心動かされるのは悲しすぎる。

「ロス・ロボスが来日してさ、『ラ・バンバ』のヒットで昔と変わっちゃったかな、と思ったら、もう全然変わってなかったわけよー。で、えーらいうれしくってさー。で、ホラ、野音やない？ だからビール飲んでもうそのへんの女の子とか男の子と一緒になって踊りよったら"あ、チェッカーズの人やない？"みたいなノリでさ。なんか楽しかったなあ」

「『GOOD NIGHT』っていう曲、タイトル通り、眠たくなれば正解……」

「例の趣味、ドイツとアメリカのサバイバル・ゲーム。この1月で1年目だったんだ。だから記念にね、ちゃんとビデオ録ったんだ、お金払って。（笑）いま、少しずつスケジュールの合い間を縫って編集してるところ」

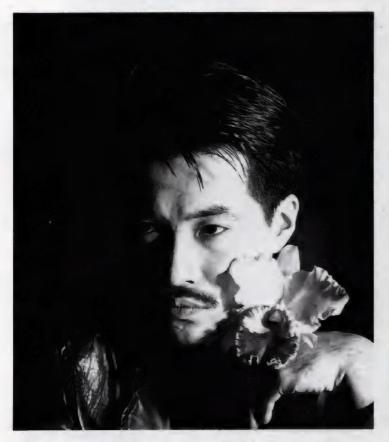
「今回のアルバムはオレたちにとってすっごく大きいと思う。それも冒険っていうんじゃないんだ。流れる川のごとくね。すっごい自然に"いいな"っていうメロディを主体にして1曲1曲アレンジやってくんだ」

興味も曲作りも、お互いに作用して、"好きだ"っていう感性にひっかかったものに無邪気に一生懸命なトオルくんの姿が、わたしのチェッカーズとの大きな接点だった。

バンドの命ともいえるべきライブに足を運ばなくても、十分チェッカーズが大好きなのは、きっとそんなトオルくんの力が大きいと思う。(言い訳ではないよ)

そして、みんなも。レコードやライブで触れるチェッカーズのサウンドの中に、そんな愛情を見い出せるから、今でも、ずっとこれからも彼らのことを好きでいられるんだと思う。この1年を代表する『SCREW』は、そんな魅力を浮き彫りにした、私にとっても節目となるアルバムだった。

文●安達明子

TOHRU

夢は、もう見ない。夢は、自分 たち。

シャッターに切り取られたその表情に、88年のチェッカーズの輝きが映し込まれている。まっすぐな瞳と、きつく結んだ口元。これからの希望と、過去の自信がそこには映っている。

STANDING ON THE RAINBOW
THE CHECKERS

PERSONAL CLOSE UP なんか忘れてたもんが甦るよね

政治くんの人柄を説明するとしたら、私は"会えばいつもホッとさせてくれる人"と言うかもしれない。でも、それだけじゃ説明不足だ。彼の内面には、とても激しいものがあるような気がするから。

チェッカーズのパーソナル担当が変わってから、政治くんと向かい合うようになって1年たつ。多分、数回はインタビューしたと思うけれど、私がいつも思い出すのはポカポカとした小春日和の陽気だ。いつかスタジオのあるビルの非常階段に坐って、話したことがあった。気持ち良く晴れた日の午後、コーヒーを飲みながら政治くんと話していると、なぜか幸せな気持ちになったことを憶えている。見晴らしの良い階段から見える都会の景色は、これといって特徴のないありきたりな顔をしているのに不思議と恋しい気分にさえなった。

「チェッカーズにずっと憧れていたんです」

と、政治くんは言った。

「だから、いまでもチェッカーズが一番だって言える」と。

あくまでも平静に、力むことなくその言い切ることができる政治くんとチェッカーズが素敵だと私は思う。ヘンに突っ張っているわけじゃない。サラリと、素っ気ないほど淡々とチェッカーズを語る彼の態度は、そのメンバーであることを誇りに思っている証拠だ。そこがえらく男っぽい。

ティーン・エイジャーだったときから、24歳のいままで、政治くんはチェッカーズに賭けてきたという自信があるのだろう。多分、私達が知らないところでは、大変なことや数々の辛苦をなめてきたであろうチェッカーズが、いまなおデビュー時と変わらない新鮮さを保っているのはハッキリ言って凄いことだ。時間の流れに風化することなく、彼らの根底に波打っているものが私達の心を動かすのだろう。

アルバム『SCREW』は、彼らにとって"冒険作"といえる、画期的な内容のものだった。50〜60年代のオールディーズをルーツとしながらも、そこに留まることなく、さらにアップ・トウ・デイトに前進しようとするその姿勢が非常に良く出ていた。政治くん作の曲が多かったのも、パーソナル担当としては嬉しかったし、アルバムのプロデュースを務めた彼の力量を、どんなもんだッ"と自慢したくなったりもした。

私事で恐縮だが、出来たばかりのテープを我が家でダンナと聴いて、「スゴイ、ヤルじゃん」などと、感嘆しながらチェックしたのを覚えている。

「スクリュー」で一廻りも二廻りもデッカくなったチェッカーズではあるが、こんな話にはホロッとしたものだ。

夏のツアーのためにリハーサルしていたとき、誰かがフッと昔の曲をやってみようよと言い出した。しばらくライブでも御無沙汰していた初期のヒット・ナンバーを遊び半分で演奏しているうちに、メンバー全員言葉が詰まってしまったというのだ。その後、約束していたわけでもないのに、皆が懐じみの店に集まって来たという。長い間、同じバンドで活動してきて、なおかつこんな感激が生まれてしまうところがとっても彼らしいと思う。アイドルとして人気が爆発して、3曲同時にチャート・インしていた頃の思い出や数々の記憶がそのとき皆の脳裏に甦ったのかもしれない。

そんなエピソードを聞いていたせいで、東京ドームのコンサートは、いつになく胸を熱くしてくれた。あの名曲「星屑のステージ」を披露してくれたときは、思わず涙の奥がツーンとしてしまったほどだ。そこにいた大観衆も同じ想いだったようで、あのドームでありながら、妙にジーンとした空気が漂っていたのだった。

それと同じような気分になったのが、鶴久政治作曲の「Jim&Janeの伝説」を聴いたときだ。過ぎ去った青春の一コマ、一コマがモノトーンの映画のように描かれていたこの曲は、センチメンタルな感情を思う存分引き出してくれた。そして、チェッカーズの成長とその軌跡に思いを馳せる[illegible]といえる。

3月に「ONE NIGHT GIGOLO」のキャンペーンで福岡を訪れた政治くんの同行取材をした。「ロンドンに似ている」と政治くんが言っていたように、伝統的建物と高い空のコントラストが印象に残っている。人なつっこい博多弁と[illegible]ングな街の人達の様子に、チェッカーズが生まれた土壌を感じたりもした。放送局出演のイベントで、政治くんと握手をして泣き出してしまう女の子もいた。

「女の子に泣かれちゃうと、やっぱ……。なんか忘れてたもんが甦るよね」

ファンと直に接するチャンスが少なくなってきただけに、政治くんも感激が大きかったらしい。

「ファンの女の子、一生忘れませんもんね」

という政治くんの言葉は優しくて、温かい彼の人柄のままだと思った。何十万人もの人々に支持されている日本を代表するバンドのメンバーが、である。人気や有名であることに溺れることなく、ありのままの自分でいる政治くんの人としての姿勢がそんなところによく表れている。

その上、彼は努力家だ。アルバムのために何十曲も曲を作り、それでも「まだまだ」だとさらに磨きをかける

「ちょっとで油断するとストンと落ちてしまうって危機感持ってますから」

シビアな数字になって結果が出てきてしまう世界だからこそ、頑張り甲斐もあるしイイ曲作ろうという気にもなる。それは想像以上に苛酷な作業に違いない。デビュー以来、常にトップ・セラーとして走り続けてきた自負心もあるだろう。

「売れる曲っていうのは、沢山の人がイイと感じる曲でしょ。僕らはそういう曲を作っていきたいし、持って生まれたメジャー志向がそうさせているんでしょうね」

チェッカーズの方向性がその道を踏みはずさないのは、基本的に沢山の人に聴いてもらいたい"というメジャー志向に他ならない。しかし、そのために売れセンに迎合することはない。自分達のテイストをちゃんと曲に反映させることにかけては、どんなバンドにも負けない個性がある。

「昔から、一緒に遊んで、楽しいときも悪さするときもつるんでたから、自然とバンドのカラーが出てきてしまうんでしょうね」

つまり、チェッカーズは根っこがシッカリしているのだ。バンドの成り立ちも、影響された音楽も、ちゃんとルーツがある。そこが彼らの強みでもある。流行りに惑わされずに自分達の足元を固めてきたバンドだけが持ち得る強味だ。

エルビス・コステロを聴く前に、バディホリーを愛聴していた政治くんだけあって、相当な音楽通ではあるのだが、彼の書く曲はマニアぶったところがない。親しみやすく、イキのイイメロディが彼の真骨頂だ。

「アレンジが今風でも、メロディはちゃんと50〜60年代なんです。古いR&R聴いてきてホント、ラッキーです」

政治くん自身も、メロディが良い曲だったら、アイドルでも歌謡曲でもわけへだてなく聴くそうだ。根っからの"楽曲志向"であるところに、政治くんならではのセンスがプラスされて、チェッカーズはさらにレベル・アップした曲を提供するようになってきた。

「これからは、頑張った人が勝ちでしょうね。ジャンルに関係なくね」

コブシを振りかざすのがガッツじゃない。イイ曲を作って、イイステージを見せて、人気者でいるためには、それ相当のパワーが必要なはずだ。なのに、チェッカーズときたら、「努力してます」なんて顔をチラリとも見せない。そこがトッポイ。カッコイイ。そして、さわやかだ。

飄々とした政治くんのキャラクターを見るにつけ、そう思う。

「自分がさぼれば、自分に振りかかってくるというパターンですね。責任感が出てきたのかもしれません」

政治くんは、きっと素敵な大人の男になると、密かに私は確信している。23万円もするベネチアン・ミラーを買ったという話がオリーブに出ていたけれど、そういう目立たないところでの美意識が彼をどんどん素敵な大人にしていくのだろうし、いまもすでになりつつある。

家にいることが好きで、育てているグリーンに名前を付けているという政治くん。自分の時間をとても大切にしているからこそ、人を感動させる中身の濃い曲が生まれてくるのかもしれない。

「高校のときから好きでやってることですから、あんまり仕事っていう意識ないんですよね。曲が沢山できるのも、単にオレが家にいる時間が長いだけですよ」

自称、"インドア人"の政治くんは、一人でボーッと好きな音楽を聴いているときが一番幸せなんだとか。

「自分にとって居心地の良いスタイルを保つことが精神的安定につながってるんです」

年令のわりには落ち着いているように見えるけれど、その分、中身はホット。それは、もうすぐリリースされるファースト・ソロ・アルバムに見え隠れしている。

「ストレスを発散するには、家で曲でも書いているのが一番。それなら誰にも迷惑かかりませんしね」

と、笑っていたけれど、音楽に対する情熱が溢れんばかりの政治くんに、私は清らかなものを感じてしまう。

メンバーの個人活動に関しても

「皆が外で受けた刺激をチェッカーズに持って帰ってきてくれるともっと大きくなれますから。自信がつくと音楽にちゃんとはね返ってくるんですよね」

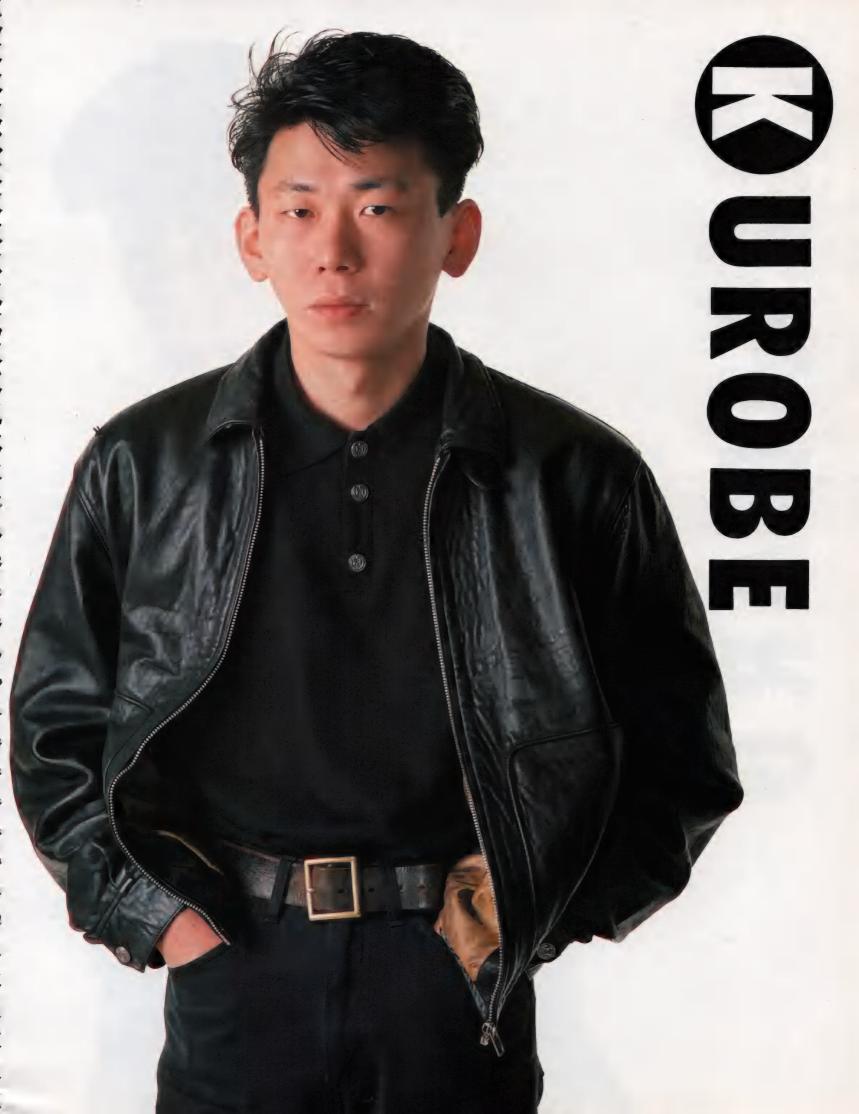
まるで大舟に乗ったように、安心していられる発言ではないか。それも、これも、政治くんがチェッカーズをこよなく愛しているからだと私は思う。そんなメンバーがいるバンドが私は好きだ。

文●佐野郷子

MASAHARU

KUROBE

STANDING ON THE RAINBOW

PERSONAL CLOSE UP
子供にやればいいって思っている

クロベエという人の中に「男の子っぽさ」を見つけることは、たやすいと思う。

ライブのビデオを見れば、両手に持ったスティックと一緒に頭ごとドラムセットの中へ突っ込んでしまうんじゃないかと思わせる程メリハリのきいたパワーでプレイするクロベエを確かめることができる。そして何度も何度も快活な笑顔。目も口も心も開け放ってニカッと爽快に笑う彼は、人を幸せな気持ちにさせてしまう。

クロベエは多趣味だし、そしてその趣味というのがたとえばオーディオセットだったり機関車の写真だったりプラモデルだったり、いかにも男の子の趣味らしい趣味なのが面白い。きっと子供の頃には、メンコやベーゴマ集めに夢中になってたんだろうと簡単に想像がつくし、実際本人も、「普通の男の子が面白がりそうなものは、ほとんどぜんぶ趣味だった」と認めているし、いかにもと思わせることに夢中になることも、そしてそれに飽きてしまうことも、なんだか小さな頃近所に住んでいた男の子と似ている気がして嬉しいような気持ちにさせられる。

話し声が大きいことも、時々小さな声になってしまって、照れているんだと知らせる様子も、ひょうきんぶりもシャイなところも、私にはそれら全てがクロベエをすごく男の子っぽいなぁと感じさせる出来事になっている。

クロベエの今年一年を総括して、といっても、彼は常に自分の中にマイペースの標準器を持っていて、それが示すままのスピードとテンポで歩いている人だから、クロベエの今年は、きっと今年一年分のことでしかないんだと思う。

インタビューをしていても、彼は、いわゆるオイシイことを言ってくれる人ではなかったように思う。いかにも原稿に書きやすい新鮮なニュースやショッキングな事実、自分の中に見つけた小さな結論……、そういうもののかわりに、いつでも、「まだまだこれから」と言い続けて、結果めいたことはなかなか話さない。なにしろ自分やチェッカーズを誉めようとさえしない人だから。特に自分自身のことに関しては、長所のひとつも答えてくれなかった。何回か話しをすれば、それが彼の持つ美意識なんだということがわかる。

「自分のこと誉めたりするのは、なんか変なかんじやけん」

「では、まわりの人からはどう見られてると思う?」

「誉めてくれる人もたまにはいるけん、でもやっぱそれをオレの口から言うのは、なんか変と思わん?」

「そーか。そーかな」

そんなやりとりは何度もあった。そのへん、クロベエはなかなかガンコな人だった。

そういう雰囲気につい負けてしまうクセのある私は、彼の「それよかこの間カメラかついで夜中にね……」と最近のビデオ作品の話をしましょうよと気配さし向ける（ように私には感じられてしまう、いつでも）甘いワナにはまりがちで、インタビュー時間をそうした趣味の話題に費してしまい、あとでいざ原稿という時に困ってしまうことが何度もあった。でも実際、そんな話をする時のクロベエはとてもイキイキしているし、私のような無知な者にとっても、8ミリと16ミリと35ミリの画像の違いや、車のメカに関するいろいろな話は楽しいものだった。

男の子の領域に属する趣味の話は、女の子にとってはちょっと聞いてみたい質問が終わらないって感じになってしまう。特にクロベエは、そういう時とても先生的になって親切だから、「車のギヤってなぁに」などという質問にも楽し気に答えてくれていた。

そんなわけで、今年一年クロベエをインタビューして盛り上がった話題を思い出そうとすれば、どうしてもビデオのことや高速道路や夜景やオーディオセット関係になってしまう。

——その78万円のテレビ、買物っていうのはやっぱり電化製品?

クロベエ　そ。ベータのビデオ。

——あ、いいねぇ。

クロベエ　うん。それはハイバンドベータって、高画質ビデオやけん。

——VHSじゃないの?

クロベエ　ん、ベータ!

——最近はほとんどVが主流なんじゃないの。レンタルビデオにもベータはない。

クロベエ　いや、ベータのほうが画質がいいけん。

——え? 一般的にVのほうがいいって言われてない?

クロベエ　Vはね、テープの長さが、いっぱい入るけん、家庭用に受け入れられた、と。マニアは、ベータしか買わん。

——ふぅん。

クロベエ　だから、何で録っても、ベータのほうがきれいよ。

——そうなんだぁ……。

と以上は当然原稿には書かれなかったただの雑談ですが、今改めてテープ起こしを読んでみると、このテの話題がエンエンと続くこと続くこと

——今欲しい物って何ですか?

クロベエ　やっぱ電化製品やね。

——だってほとんど全部揃えてるんでしょ。

クロベエ　そう。

——それなのに?

クロベエ　グレードアップをはかりたい。

——たとえば、トースターとか電子レンジも欲しかったりするの?

クロベエ　んなバカな。

——やっぱりカメラとかオーディオ機器関係?

クロベエ　そ。もちろん。今の興味はそれやけん。

——ふぅん。

クロベエ　壁一面スピーカーにしてもいいね。

——オーディオルームのすごいやつね。

クロベエ　ゆくゆくはね。夢、ね。

——前にも同じこと確か言ってたね。

クロベエ　今も結構実現しとる。壁一面がそういう機器で埋まっとって。

——へぇ。

クロベエ　それでまたさらにあれが欲しいとか、あれを揃えたいとか、壁を見ながらお金のことも計算しながら、ひとりでニヤニヤ考え事する。(笑)

——ひょえ。

クロベエ　自分でも時々思う。オレはいったい何を考えてる少年だろうって。(笑) ひとつの壁はそんなかんじでしょ、もうひとつの壁は一面がカセットテープとビデオテープになっとるけん。

——テープ壁!

クロベエ　子供の頃から持っとった物もずっととってあるけん、人にやるのはイヤだし。たまる一方。

——凝り性ですね。

クロベエ　そ。でも、子供にやればいいって思ってる。

——自分の子供?

クロベエ　そう。

こういう話は何度もした。クロベエの実家には、彼がほんの小さな頃から趣味として夢中になった物がほとんど全てとってあると聞いた。いつか自分がオジイチャンになった日には、子供や孫に欲しい物はあげて、その他の物、お気に入りの思い出の品物を部屋一面に並べ、それをニコニコと渋茶すすりながらながめていたい、とかそういう話。その時メインになるのは、レールの上を走る鉄道模型だと聞いて、輪っかにつなげられたレールの真ん中で座っているクロベエの様子が妙に思い浮かびやすかった。

今まで陽の目を見なかった雑談編趣味の話を今回特別に少しだけ書いてみたけれど、クロベエのあの声のトーンと独特の間と照らし合わせて読んでもらえば、雑談をおすそ分けしたくなった私の気持ちもわかってもらえるかな。

もちろん、楽しいままにウダウダと続けてしまった雑談の中からも、晴れて原稿の上で展開された話もあるわけで、真夜中にビデオカメラをかついで新宿高層ビル群を撮影しに行ったことや、北海道へSLの写真を撮りに行きたくて仕方がないという話は確か書いたはず。クロベエの夜景好きの話はとってもロマンチックで楽しくて、真夜中、都心の空地で、チェッカーズのドラマーが、柵を乗り越えたり地ベタに這いずったりしながらビルの灯りをファインダー越しに見上げている図を想像すると、私はちょっと幸せになれた。

今年をしめくくるパチ▼パチSTYLEで、私はクロベエの原稿を書くこともこれが最後なので、番外編っぽく思いっきりリラックスした彼をお届けしてみました。チェッカーズの話がぜんぜん出てこなかったね。念のため書くけれど、クロベエとてインタビューで雑談ばかりしているわけでは、もちろんありません。シングルの話、LPのことツアーのこと、今現在のチェッカーズ……、ちゃんと取材っぽく話してくれます。そして、ついつい他の話に花が咲いちゃった後は、「これじゃ原稿にならんとね。何かちゃんとしたこと話さんと。えーと、えーと、うーん……」と、気を使いまくる、そんな彼でした。

私はやはり、ライブでのクロベエがいちばんカッコイイと思っているから、来年やさ来年のステージやライブビデオでも、ぜひぜひ爽快な笑顔イッパツを期待している。そのためには地道に凝り性を磨いて、趣味の世界での確かな一歩、一年分の進歩が絶対に必要だとも思う。今頃彼は、どんな景色を写しているのか。ちょっと知りたい気にさせる、男の子っぽいクロベエでいて欲しい。

文●福岡久美子

STANDING ON THE RAINBOW

PERSONAL CLOSE UP
メンバーが笑ってる時が好きです

高杢禎彦という人間と初めてゆっくり話をしたのは、87年の終わりだった。その年の事を振り返ってください、という質問がその時の内容だった。モクは二日酔いの眠たそうな眼を、秋の眩しい日射しに細めながら「もうそんな時期なんだっけ」と言った。そして「忙しい年だった」と、シンプルな答えを出した。

その時から、彼の印象はほとんど変わっていない。何度か会って話を交すうちに見つかる事は多かったけれど、何かが引っくり返ったり裏切られたり、という事はなかった。高杢禎彦という人間は、最初からガラス張りのようにその内に抱えているものを露わにしてくれる、そんな印象だった。

広げてみせてくれたものはそんなに簡単に割り切れるものばかりでもない。多くの人間が同じように抱える矛盾や、瞬時な印象のものもある。けれどいつでも彼は迷っている風でもなく彼なりの答えを持っている。最初に会った時に彼にハッキリ感じた侠気(おとこぎ)の印象はそれ以来消える事がない。

●

87年を「忙しかった」と言い、そして88年のことをこの時モクは同じように「忙しくなるような気がする」と言った。「嬉しい事に」と付け加えて。

「流れを止めちゃイケナイと思うし、流れの中でイイもの見つけりゃまたそっちの流れを増やせばいいしね。その中で"高杢禎彦"というのを築き上げたいですね。"藤井郁弥以上に"」

"藤井郁弥以上に"というのは、「ただ、別の意味で」だと彼は言った。なぜなら、モクの中では永遠に「郁弥の横に立たせたら一番」の高杢もいるのだ。それはそれで、時を経る毎にハッキリしていく事だという。

それとは別に、高杢禎彦という1個のキャラクターを磨こうとする彼がいる。そして88年という年の中で、彼は確実にそれをハッキリとした形にしていった。

今年、TVやラジオに一人で登場した彼はすでにもう"チェッカーズのヒゲ"ではなかった。高杢禎彦、という一人の人間として笑い、喋り、芝居をした。

チェッカーズというバンド自体が、自分達なりの方法論とペースで活動できたという気がする88年。"帰る場所"のその安心感がよりモクを、充実した個人の活動へと促したものだと思う。

「コイツはコイツなんだ」

彼が目指すそんなキャラクターを、モクは少しずつ回りの眼にも見えるように築き上げていきつつある。自分の事を「そんなに器用じゃない」という彼は、1つ1つTVに、そして楽しみながらバンド以外の活動にも挑戦していった。そんな自分の事を「タフだと思うよ」と言う。

確かに、タフな男だと思う。特に動いている時の高杢禎彦は。

ラジオやTVのパーソナリティーを務めながら彼は、その場の空気を活発で和やかな雰囲気にしていく。時には[illegible]い突っこみで、そこにピリッと毒の効いた刺激も織り込ませながら、ブラウン管の中で自分を出しながら、決して堅くはな[illegible]び伸びと呼吸している彼を目に[illegible]

「楽しんでるから。要するに、楽しまなきゃバカだなっていうのに気づいたんです。やってて面白くないなぁと思うよりは、これもこうすりゃ楽しいなぁ"っていうのを最初に見つけよう、みたいな」

彼は同じようにして、チェッカーズのメンバーを笑わせるのも好きだと言った。

「メンバーが笑ってる時が一番いい、好きなんです」

●

モクが持つ独特のパワーとエネルギーは、3月、メンバー7人がそれぞれ地方へ飛びメディア・ジャック(!)しまくるという、「ONE NIGHT GIGOLO」キャンペーンで眼のあたりにした。

彼はくるくるとよく回転するその頭の中と、間髪入れずにJokeを発するその話術で、幾つかの番組やイベントへと飛び込ん[illegible]サーやDJのタイプ、表情に合わせて、彼のキャラクターが持つ表情も少しずつ変わっていった。まるで、人が発散する何かを微妙に捉えては、素早く自分のパワーへと変換していっているようだった。きっと彼はすごく人が好きなんだと思う。…女性だけではなくて、全般というコトで…。

そんな彼が分刻みで移動するそのマイクロ・バスの中でポツンと洩らした言葉が印象的だった。少し疲れた横顔で、「…気持ちがDOWNになってきたから、HIGHに持ってかなきゃな」と呟いた。

そしてそのすぐ後の、多くのファンを招いての公開録音番組ではそのコントロール[illegible]多くの人の熱気を確実に[illegible]で彼はまたいつもの雰囲気でオシャレでスケベ(笑)なモクになっていった。

その慌ただしかった一日の最後のインタビューでアナウンサーに"ファイトのもとは?"と訊かれてモクは「ファンの皆サン。裏をかえせばオンナ、だったりして」と笑った。

その時に、彼はきっとラブ・ソングをとても上手く歌う人だ"と思ったものだ。

夏、チェッカーズはオリジナルアルバム『SCREW』をリリースする。モクはこのレコーディングと完成したアルバムで"成長したバンドを感じていた。チェッカーズは、7人が和気あいあいと楽しく音で遊んでいるだけではなくて、互いにいいバランスの中で磨きあって遊んでいっているのだと思う。

アルバムのインタビューの際にモクは、「俺にとって他の6人は宝物」と言った。こんな言葉をサラリと言ってのけて、聴いている方もそれを自然に受け止められる。モクはそんな風な人間だった。6人とモクは、糸でつながって、[illegible]その糸をポンっと切られたらさ、オレはもうそのまま一人で飛んで行けると思うわけ、自力でね」

これは、すでに自分のキャラクターを築きつつあるモクの、自信が表われている言葉でもあると思う。けれどその糸を切るわけがない、しっかりと握りしめながら自由にフワフワと飛んでいるモクがいる。

彼は、連続ドラマの主演という、大きな"場所"を手に入れる事で、またひとつ新鮮な風を自分の中に吹き込み始めてもいた。

●

ひとつの何かが終わって安心して、僅かの間動きが止まる。そうすると彼は、疲れがきたり風邪をひいたりするという。気が張っている時は、緊張感の中で、そういった"のものを跳ね返す強さを持っている。事実、オフと同時に風邪をこじらせていた彼が、つらそうな状態で取材場所に現われた事もあった。

8月の[illegible]まで続いたドラマの収録。そ[illegible]でのバンドのコンサート。"忙しい[illegible]がいい[illegible]もしれない。モクにとっては、[illegible]ライしながらも絶好調の時期だったのかもしれない。

武道館、ステージに立つモクは、多くの「天城サン」(ドラマの主人公の名前)という声を受けながら、マイクに向かっていた。

「不思議な気分じゃない?」と訊くと「どう呼ばれようが全然意識しない」と、彼。

「チェッカーズの時はどうやったって高杢だし"あそびにおいでヨ"の時は天城竹夫だから」と割り切る、と言うよりは自然に受け止めている[illegible]だった。けれど、コンサートでそう呼ばせてしまうインパクトがドラマの中の彼にあったという事が、またひとつ、役者としての彼はキャラクターを創り上げるのに成功したという事になる。ドラマを離れた彼に思わずそのキャラクターを重ね合わせている人がいるとしたら、それは彼=高杢禎彦にとって「いい仕事をしたな」という実感にさえつながるのだ。

「芝居に関してはプロではないけど…だからこそ、素人だから何でも挑戦できるってとこはあると思うんだよね。役だからクサイ事も言えるっていうのもあるしね」

すべてを強みに変えていく事のできる人間。モクは、すごくポジティブなタイプの人間だと思う。

10月。88年も終わり近くになってリリースされたチェッカーズの新曲は「素直にI'm Sorry」。高杢禎彦はすごく素直な人間だけれどそれより、ストレートに近いと思う、と言うと彼も「そうかもしれない」と答えた。すぐに熱くなるところも、たまには言わないで言葉を閉じ込めてしまうようなシャイな気分も含めて、ストレート。

それは彼の生き方に通じる部分だ。

そしてチェッカーズというバンド自体が、より自分達のやりたい事に素直になってきているのを、モク自身も感じている。とても伝わりやすいこの新曲は、バンドの動きの中で自然なものだった。

「そんなムズカシイ事してもね、自分達のマスターベーションじゃしょうがないし。聴いて感動するもの…聴いて涙が出てくるもの、いつも言ってるんだけど、それがすごい出てると思うよ。それって表現力だからさ、違う人が演れば出てこないと思うしね。伝わるもんも伝わらないっていうか…それチェッカーズだからこそできる事ってあると思うしね」

ステージ自体も確実に昔と今とで変わってきているのを演っている本人が感じている。"泣かせられるバンドになったよね"とモクは言った。

●

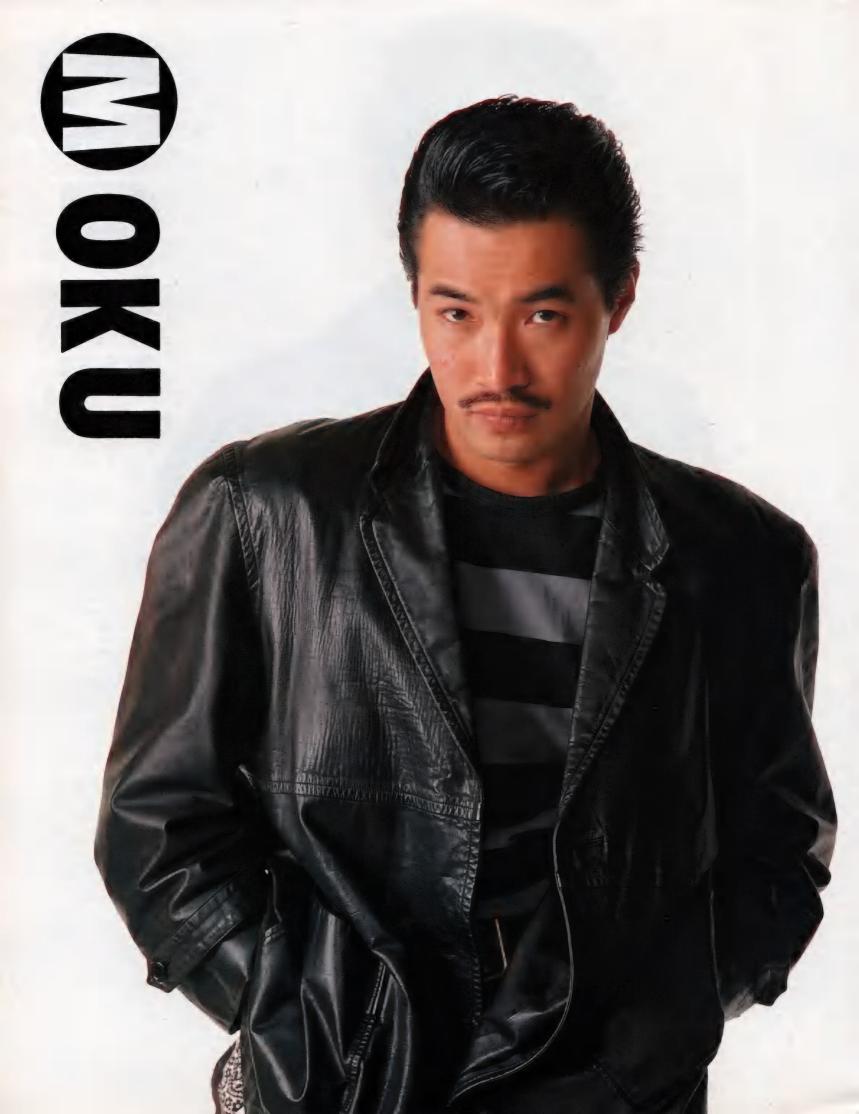
88年。そんな風にバンドが大好きなモクが、それとは別に自分のキャラクターという杭(くい)をガン!と地面に打ち立てた年だ。ラジオのパーソナリティとして個人の名が新聞に載り、TVの視聴率もいい記録を残した。自分の中で"いい仕事"ができた感触もある。89年。きっと彼は楽しく自由な気持ちでその杭(くい)をもっと深く強く、地面に打ち込んでいくのだと思う。

文●野中ともえ

MOKU

YUJI

STANDING ON THE RAINBOW

PERSONAL CLOSE UP
キッカケっていうのは絶対ある

ユーちゃんと私が、共通の知人である自動車販売会社の若手課長である鈴木君の紹介で結婚してから早や一年が過ぎました。(☆モチロン大嘘なんだからネ。でも、この後の展開がおもしろそうだからユーちゃん、みなさん、この作り話を許して!)

早や1年が過ぎました。この人ってばホノボノしてて良いワ。そう思って嫁に来た私ですが、なにしろお見合いドーゼンで結婚した二人、365日も過ぎ行く頃には、いろいろと新しい発見が出てきたり、なかなか楽しい時間を共有できたり、時にはお互いにアゼンとしていたりしているみたい。では、いまだ新婚気分さめやらぬ大土井家の日常を追ってみましょう。

――日曜日の朝――

妻「あなた、オハヨー。今朝は塩ジャケにする？ それともアジのひらきがいいかしら？」

ユーちゃん「モグモグ…」

妻「ホラ、寝ボケてないで、シャンと!」

ユーちゃん「ウ〜ン、今朝もいいお天気だ。そうだ、ちょっとシャレたお弁当を持ってジープでどこかへ行こう!」

妻「キャッ、スキテ。でも誰がお弁当作るの？ 私だって毎日仕事してて疲れてるのよ。今日はキレイなレストランでゆったりとお食事したいワ」

ユーチャン「ウ〜ン…デニーズはどう？」

妻「……ユーちゃんのバカ!」(注※ちなみに大土井家は二人とも働き者なので、共稼ぎなの)

ユーちゃん「ん〜、わかったわかった。奥さん気嫌直してくださいよぉ」

妻「……」

ユーちゃん「ホラ、アジのひらきがコゲちゃうぞ。ええと、ええと、そそそーだ! 春になったら海外旅行をしようって話、どこに行きたいか決まったかあ？」

妻「ウン。ハリウッドに行きたいウットリ」

ユーちゃん「ロサンゼルスねぇ。まあ、ディズニーランドもあるし、LAの竹下通りと呼ばれるメルローズ通りとかもあるし、ビバリーヒルズだってあるし、とにかく、やたら広大だよ。メルローズ通りだってハシからハシまで回るとなるとたいへんすヨ。全部は回れないもん。ブワーッて道があって、ポツンポツンみたいに店があって。そういうとこ日本と違うよ」

妻「じゃあ、ただ広いだけなの？ カリフォルニアの青い空っていいと思うけどなあ。ロンドンにも行きたいけど」

ユーちゃん「ロンドンはね、ヨーロッパだね。というか、自分の中にあるヨーロッパのイメージどおり。街並みや家の作りがおとぎ話に出てくるようにかわいかったり、レンガ作りの家もあって、他の国とはやっぱり違うね。男の子だって古着とかでさりげないオシャレしてるのに、靴と髪型ではもうバッチリキメててカッコイイんだ。それに女の子は、もうカワイイ。ミニスカートが似合って、それぞれに個性的なファッションしてるし。ロンドンは、いいよ。そういえばねぇディスコで……(ハッと妻の顔を見る)。いやあ、ロンドン娘なんてブスばっかでさあ、やっぱり二人でポナペに行こう。いいぞ、ミクロネシア諸島は。空と海と僕たちの愛だけがあるんだ!」

妻「結局いっつも、ユーちゃんの行きたいとこばっかり!!」

――ツアーがあけた翌日の午後――

なにやら不穏な空気の日曜日の朝ですがそこはそれ若い二人のこと(外野「高山の年いくつだ？」。筆者「まあまあ、嘘ですから、あしからず」)、じゃれ合って楽しんでいるように見えなくもありません。で、忙しかったツアーを終えて無事にお家に帰って来てユーちゃんと二人、MJBのブルマンブレンドのシールを切って、ブーンとコーヒーの匂いが香るリビングで、二人は生活関係のお話をひさしぶりにゆっくりするのです。なにしろ毎日の暮らしは現実なのですから。

妻「ユーちゃん、最近流行の芸能人のサイドビジネスを、たとえば洋服屋さんとかやりたいって思ったことはある？」

ユーちゃん「そうだなぁ、流行だから俺もっていうのはないよ、ぜんぜん。それよりもそういうのは、一緒に何かをやりたいっていう仲間ができれば始めるかもしれないし。だって、素人が勝手に手を出しまくった、とかっていってもしょうがないじゃん」

妻「先のこととか考えることある？」

ユーちゃん「うん、それなりにね。いずれは何かやりたいって思うかもしれないけど、まだ今は……やれることがあればいろいろやりたいな、と思って」

妻「私、ユーちゃんに役者をやって欲しいなぁ。だって、こんなに小林薫に似ているんだもの」

ユーちゃん「……(静かに笑っている)」

妻「ユーちゃんには、まだたくさんの可能性があると思うの」

ユーちゃん「そうねぇ、ドラマもやってみたいし、ラジオでもTVでもいい。曲を書くんでもいいし、やっぱりそういうことをやりたいね」

妻「うんうん」

ユーちゃん「そろそろやらないといけない時期だな、と思う」

妻「うんうん」

ユーちゃん「チャンスっていうか、キッカケっていうのは絶対あると思うしね。そういうチャンスがあれば、めいっぱいやりたいしね」

ちょっと気持ちが盛り上がってきたユーちゃんは、コーヒーをビールに取り換えました。「これはウマイよ!」と言いながら5ドア冷蔵庫から取り出したのは、サン・ミゲル。妻である私は、その懐しい形のビンを手に取ってながめます。

妻「……最近、周りで刺激になる友達とかっている？(サン・ミゲルの空きビンをもて遊びながら)」

ユーちゃん「俺の？ ウ〜ン、いろいろオモシロイ奴いるよ」

妻「ふぅん。どんなことしている人たち？」

ユーちゃん「フフ。(笑)ケッコウ、そうねえ、いろんなことしてるよ。コレ、という特定の仕事じゃなくていろんなことやってる。お店のプロデュースしたり、洋服関係を手広くやったり、大学生集めて会社やってたりとか、おもしろい人がいる。……今度、ウチに呼んでいいかな？」

妻「もちろん」

ユーちゃん「ナーイス」

妻「でも、ユーちゃんがゴハン作るのよ、ウチは共稼ぎなんだからネ。」

ユーちゃん「ホヒョ」

――平日の夜――

ユーちゃんは、ひたすらファミコンに熱中している。

妻「ファミコンばっかりやってないで、遊ぼーよ(と、手を引っぱる)」

ユーちゃん「ウン(といいながら、ファミコンから手を離さない)」

妻「それ、何のゲームなの？」

ユーちゃん「これは株のシュミレーションゲームなんだよ。昨日トールに負けてるから今日はやめられないんだ」

妻「それ、お金持ちになるの？」(と、目を輝かせる)

ユーちゃん「社会情勢にも強くなる」

妻「どいて、私がやる!」

今日は一年目の結婚記念日。二人は夜景の美しい、ホテルの高層階にあるバーで乾杯を交すのです。

二人で「おめでとー」(と、シャブリのグラスをカチンと合わせる)

ユーちゃん「なんか、でも照れるなぁ」

妻「ふふっ」

ユーちゃん「その服、すんげぇ似合うね」

妻「ユーちゃんも素敵。なんだかティーンエイジャーだった頃のデートを思い出してしまう」

ユーちゃん「そうね。俺なんてちょっとデートする時に、兄キからスーツを借りてビシバシにキメていくわけよ。〝借して〟なんて言ったりして(笑)」

妻「見たかったなぁ、それ。キマった？」

ユーちゃん「キマったキマった。ヤクザみたいだった。(笑)どっから見てもチンピラみたいな格好。だいたい想像つくでしょ？」

妻「ウン。(笑)…ねぇ、昔は良かったなって思う？」

ユーちゃん「べつにそういうふうに、昔は良かったな、とかいうのはないけど、今は今でいいよお、ホント。けど、昔は、なんつーかなぁ。懐しいよね」

ユーちゃん「そりゃあ学生の頃にはね。遊びたい放題だから。そりゃあいいとこいっぱいありますよ。でも、学生の頃には早く年を取りたいっていうのもあったしね。まあ、勝手なもんですけど。未だにこういうカッコウしてると、気持ちだけは若いです」

妻「ねぇ、どんな大学生だったの？」

ユーちゃん「ま、いいかげんな大学生でしたから。2年までしか行かなかったし。でもある意味で、大学なんつうのはバイトして、それで金かせいで、自分の好きなことをやれる、みたいのもあったし、社会勉強と言えば社会勉強にもなるしね。ただ許せんのは、親のスネかじって遊び回ってる学生は、やっぱり〝この学生が〟って感じになるね」

妻「ふぅん」

ユーちゃん「自分でバイトしてちゃんと金ためて買うんだったら何でも買う。それはやっぱり自分がバイトしてそうしたから、一応言えるんじゃないかな」

妻「ユーちゃん…私、ユーちゃんみたいな人と結婚して良かったワ」

ユーちゃん「なにを今さら!」

《以上ユーちゃんとの一年間のインタビューから、ピック・アップした会話と創作をミックスしてマトメたものです。ユーちゃん、勝手に、人夫にしてしまってゴメンナサイ。》

文●高山真由美

NOTE OF 1988

THE CHECKERS SCHEDULE

●チェッカーズの365日はとても忙しい。ここに出ているスケジュールは、彼らの表に出ている主な出来事の一部ですが、いやーさすがです。みなさんは日記をつけていますか？　つけてる人もつけてない人も、これを見てあの日の自分をありありと思い出し、暮れゆく1988年をかみしめましょう。みんなのノート・オブ1988。

1月1日 TV
元旦ヤングスペシャル「正月早々寝てんじゃねぇよ」(テレビ朝日)出演・チェッカーズ

1月21日 レーザー・ディスク発売
「NOT CHECKERS This is THE CUTE BEAT CLUB BAND SHOW」

1月21日～3月23日 TV
録影館(フジTV第2、第4水曜日25：30～26：30)出演・武内享→アダルトビデオ紹介のコーナー担当

2月26日 TV
ミュージックステーション(テレビ朝日)出演・チェッカーズ

2月28日 TV
ミュージックフェア(フジTV)出演・チェッカーズ

3月5日 TV
ねるとん紅鯨団(フジTV)出演・藤井尚之

3月10日 ビデオ発売
「THE CHECKERS GO TOUR I」
「THE CHECKERS GO TOUR II」

3月11日 TV
ニュースステーション(テレビ朝日)出演・藤井郁弥

3月13日 TV
ヤングスタジオ101(NHK)出演・チェッカーズ

3月15日
第2回ゴールドディスク大賞受賞
・The Best Airtist of the year賞 チェッカーズ
・The Best Album of the yearポップス部門
(グループ)「GO」チェッカーズ
(ソロ)「NATURALLY」藤井尚之

3月16日 TV
夜のヒットスタジオ(フジTV)出演・チェッカーズ

3月16日 TV
さんまのまんま(フジTV)出演・藤井郁弥

3月17日
「ONE NIGHT GIGOLO」全国7大都市キャンペーン
札幌→大土井裕二　仙台→高杢禎彦　東京→武内享　名古屋→藤井郁弥　大阪→藤井尚之　広島→徳永善也　福岡→鶴久政治

3月18日 TV
ミュージックステーション(テレビ朝日)出演・チェッカーズ

3月19日 TV
ねるとん紅鯨団(フジTV)出演・高杢禎彦

3月21日 シングル発売
「ONE NIGHT GIGOLO」
作詞・藤井郁弥　作曲・武内享　編曲・THE CHECKERS FAM.

3月25日 TV
だっもありがと！(TBS)出演・チェッカーズ

3月27日 TV
天才たけしの元気がでるテレビ(日本テレビ)出演・藤井郁弥／高杢禎彦

3月31日 TV
OZU(フジTV毎週木曜26：00～26：30)終了　出演・高杢禎彦

4月2日
藤井尚之・THE MODS日比谷野音コンサートにSAXでゲスト出演

4月2日 TV
ねるとん紅鯨団(フジTV)出演・藤井郁弥

4月3日 TV
TVジョッキー(日本テレビ)出演・チェッカーズ

4月4日 TV
だいじょぶだぁ(フジTV)出演・チェッカーズ

4月7日 TV
ザ・ベストテン(TBS)出演・チェッカーズ

4月8日 TV
華麗にAh-SO　出演・チェッカーズ

4月8日 TV
ミュージックステーションスペシャル(テレビ朝日)出演・チェッカーズ

4月8日～9月23日 TV
SELECTIONII(フジTV毎週金曜26：00～26：30)出演・高杢禎彦

4月10日～ ラジオ
高杢禎彦のスーパー電リクサンデーヒットパラダイス(ニッポン放送毎週日曜7：00～12：00)出演・高杢禎彦→司会担当

4月11日 TV
歌のトップ10(日本テレビ)出演・チェッカーズ

4月14日 TV

NOTE OF 1988［チェッカーズの報道ミス。］

ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

4月18日 TV
歌のトップ10（日本テレビ）出演・チェッカーズ

4月19日 チェッカーズ TV
サウンドスコール（フジTV）出演・藤井尚之

4月21日 12インチシングル発売
「Manhattan」藤井尚之 作詞・松本隆 作曲・藤井尚之 編曲・井上鑑

尚之SPECIAL…
●CM・NCAAサントリースポーツドリンク 曲・井上鑑（SAXで参加）
●とんねるずアルバム『428』の、「TEACH ME」にSAXで参加。
●南佳孝アルバム『DAILY NEWS』にSAXで参加。

4月21日 レーザー・ディスク発売
「THE CHECKERS GO TOUR」

4月21日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

4月23日 TV
オールナイトフジ（フジTV）出演・藤井尚之

4月25日 TV
歌のトップ10（日本テレビ）出演・チェッカーズ

4月28日 TV
キャッチ アップ（TBS）出演・大土井裕二

4月28日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

4月29日 TV
華麗にAH-SO（テレビ朝日）出演・藤井尚之

5月2日 TV
歌のトップ10（日本テレビ）出演・チェッカーズ

5月6日 ビデオ発売（ファンクラブのみ）
「素顔／徳永善也」監督・徳永善也

5月8日 TV
いつみ・加トちゃんのWAと集まれ（フジTV）出演・チェッカーズ

5月11日 TV

夜のヒットスタジオ（フジTV）出演・チェッカーズ

5月13日
武内享 ビデオマガジン〝VINBO〟記者会見（東京プリンスホテル）

5月13日・14日・15日、23・24日
藤井尚之ソロコンサートツアー〝CORONA〟中野サンプラザホール＋大阪厚生年金会館大ホール

5月14日 TV
ジャストポップアップ（NHK）出演・藤井尚之

5月20日 TV
ミュージックステーション（テレビ朝日）出演・藤井尚之

5月27日 TV
ミュージックステーション（テレビ朝日）出演・チェッカーズ

5月30日
ビデオマガジン〝VINBO〟発売。作曲・アレンジ・ボーカル 武内享 曲名「Do it with Vinbo」「Somebody」

5月31日 TV
歌謡パレード'88（NHK）出演・チェッカーズ

6月8日
高杢禎彦 フジTVドラマ〝あそびにおいでヨ!〟記者会見（川崎さいか屋）

6月22日 TV
夜のヒットスタジオ（フジTV）出演・チェッカーズ

6月27日 TV
笑っていいとも（フジTV）出演・藤井郁弥

6月28日 TV
サウンドスコール（フジTV）出演・チェッカーズ

6月29日 シングル発売
「Jim&Janeの伝説」作詞・藤井郁弥 作曲・鶴久政治 編曲・THE CHECKERS FAM.

7月3日 TV
花王名人劇場（フジTV）出演・藤井郁弥

7月4日〜9月19日 TV
あそびにおいでヨ!（フジTV毎週月曜21：00〜22：00）出演・高杢禎彦

7月5日 TV
歌謡パレード'88（NHK）出演・チェッカーズ

7月8日 TV
スタードッキリ㊙報告（フジTV）出演・チェッカーズ

7月14日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

7月15日 TV
ミュージックステーション（テレビ朝日）出演・チェッカーズ

7月15日 TV
金曜気分で（TBS）出演・チェッカーズ

7月18日 TV
歌のトップ10（日本テレビ）出演・チェッカーズ

7月21日 アルバム発売
『SCREW』

7月21日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

7月22日 TV
華麗にAH-SO（テレビ朝日）出演・チェッカーズ

7月25日 TV
歌のトップ10（日本テレビ）出演・チェッカーズ

7月28日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

7月29日〜8月26日
〝SCREW〟TOUR
7月29日 愛媛県民文化会館
7月30日 愛媛県民文化会館
8月2日 福岡サンパレス
8月3日 福岡サンパレス
8月4日 九州厚生年金会館
8月6日 広島郵便貯金会館ホール
8月7日 広島郵便貯金ホール
8月8日 広島郵便貯金ホール
8月13日 愛知小牧市民球場
8月14日 愛知小牧市民球場
8月17日 大阪球場
8月18日 大阪球場
8月19日 大阪球場
8月22日 日本武道館
8月23日 日本武道館
8月24日 日本武道館
8月26日 東京ドーム（BIG EGG）

7月30日 TV
ジャストポップアップ（NHK）出演・チェッカーズ

NOTE OF 1988［チェッカーズの報道ミス。］

8月4日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ 九州より中継

8月5日
藤井郁弥 TBSドラマ〝意外とシングルガール〟記者会見（TBS緑山スタジオ）

8月8日 TV
歌のトップ10（日本テレビ）出演・チェッカーズ 広島より中継

8月10日 TV
夜のヒットスタジオ（フジTV）出演・チェッカーズ

8月11日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

8月18日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ 大阪より中継

8月24日〜9月28日
意外とシングルガール（TBS毎週水曜21：00〜22：00）出演・藤井郁弥

8月25日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

9月7日
藤井尚之・原田知世の中野サンプラザコンサートにSAXでゲスト出演

郁弥SPECIAL…
●ラジオ「藤井郁弥のキュートしようよ」（ニッポン放送）毎週土曜22：00〜22：30
●CM・LIFIX育毛剤 歌及びキャラクター出演。TVCF、雑誌広告等に登場。10月1日より。

10月7日
アーティストNOW（ABCラジオ 毎週金曜21：15〜22：40）終了 出演・徳永善也

10月7日 TV
サウンドプラザ（NHK）毎週金曜22：50〜23：20 出演・武内享→進行役

10月7日 TV
ミュージックステーション（テレビ朝日）出演・チェッカーズ

10月20日 TV
とんねるずのみなさんのおかげです（フジTV）出演・チェッカーズ

10月21日 シングル発売
「素直にI'm Sorry」作詞・藤井郁弥 作曲・藤井尚之 編曲・THE CHECKERS FAM.

10月29日 TV
田代まさしのオイシイじゃん！（フジTV）出演・チェッカーズ

10月30日 TV
ミュージックフェア（フジTV）出演・チェッカーズ

11月3日〜 ラジオ
ミッドナイトスペシャル・木曜日 武内享のGOGO BOYS！（FM埼玉）毎週木曜25：00〜29：00 出演・武内享

11月3日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

11月6日 TV
歌えヒットヒット（テレビ東京）出演・チェッカーズ

11月7日 TV
歌のトップ10（日本テレビ）出演・チェッカーズ

11月10日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

11月11日 TV
素直にAH!SO（テレビ朝日）出演・チェッカーズ

11月14日 TV
歌のトップ10（日本テレビ）出演・チェッカーズ

11月17日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

11月19日 TV
ねるとん紅鯨団（フジTV）出演・高杢禎彦

11月20日 TV
スーパージョッキー（日本テレビ）出演・チェッカーズ

11月21日 TV
歌のトップ10（日本テレビ）出演・チェッカーズ

11月21日 ビデオ発売
「THE CHECKERS BACK STAGE 1988CONCERT TOUR〝SCREW〟」

11月23日 TV
夜のヒットスタジオ（フジTV）出演・チェッカーズ

11月25日 TV
ミュージックステーション（テレビ朝日）出演・チェッカーズ

11月30日〜12月29日
〝SCREW〟WINTER TOUR

11月30日 横浜文化体育館
12月1日 横浜文化体育館
12月3日 札幌月寒グリーンドーム
12月4日 札幌月寒グリーンドーム
12月10日 仙台市体育館
12月13日 大阪城ホール
12月14日 大阪城ホール
12月15日 大阪城ホール
12月16日 大阪城ホール
12月18日 広島サンプラザ
12月19日 福岡国際センター
12月20日 福岡国際センター
12月22日 名古屋レインボーホール
12月23日 名古屋レインボーホール
12月24日 名古屋レインボーホール
12月26日 日本武道館
12月27日 日本武道館
12月28日 日本武道館
12月29日 日本武道館

12月5日 TV
歌のトップ10（日本テレビ）出演・チェッカーズ

12月7日 シングル発売
「Mother's Touch」藤井郁弥 作詞・松本隆 作曲・宇崎竜童 編曲・久石譲 ライフィックスCF SONG

12月8日 TV
ザ・ベストテン（TBS）出演・チェッカーズ

12月11日 TV
天才たけしの元気が出るテレビ（日本テレビ）出演・チェッカーズ（コメント）

12月17日 TV
ねるとん紅鯨団（フジTV）出演・藤井尚之

12月27日 シングル、アルバム発売
シングル「クローム・メタリック」藤井尚之 作詞・松本隆 作曲・藤井尚之 編曲・土屋昌巳
アルバム『BLOW SESSION』

12月29日 TV
とんねるずのみなさんのおかげですSPECIAL（フジTV）出演・チェッカーズ

12月31日 TV
紅白歌合戦（NHK）出演・チェッカーズ

THE CHECKERS↔LOVERS
1988解剖学。
THE チェッカーズ
すっげぇひさびさのナツメロ企画、「チェッカーズ解剖学1988」だよん。みんなたっくさんの質問ありがと、チェッカーズもお答えあんがと。紛失して2回も回答しなくちゃなんなかったマサハルくん、お疲れさま。みんなとチェッカーズの会話です。

一番古いだろうと思う記憶は？・ベビーベッドで寝ているナオユキを見ている自分

A Q

THE CHECKERS⟷LOVERS

Q 九州男児のみなさんは、素直に「I'm Sorry」が言えますか？（大阪府 児島敬子）

フミヤ 言えません

ナオユキ 本当に自分が悪かったらちゃんとあやまる

トオル なかなか言えない

マサハル 言えます

クロベエ NO！

モク もちろん

ユージ 言えません

Q 100万円を今日中に使えれば全部やる！と言われたら何に使いますか（兵庫県 前田みき）

フミヤ 服買えばいいじゃん

ナオユキ 金を買う

トオル パチンコ

マサハル 洋服とレコードぐらいかなぁ…あとはギャンブルでしょう。

クロベエ 秋葉原のヤマギワ電気に行って、電化製品を楽しく買う

モク あとでお金にかえられる物に替えとく

ユージ ゴールドを買う

Q 生活信条があったら教えてください（大阪府 楢崎里佐）

フミヤ なし、本当になし。チャイニーズティを飲む。

ナオユキ 腕立て伏せ10回

トオル 笑う

マサハル よく寝て、ちゃんと食事をして風呂に入る。ひとりの時間をつくる。

クロベエ 別にない

モク 早起き、早寝

ユージ 幸せ

Q ピアスをしている女性をどう思いますか（京都府 永石知美）

フミヤ かわいいと思う

ナオユキ いいんじゃないっすか

トオル 似合っていればいい

マサハル 似合ってればよし

クロベエ 女の人はいいでしょう

モク 似合ってればいいじゃない

ユージ 痛そう

Q 今や幻のメンバー「タケダ氏」について何か教えてください（大阪府 田澄恵）

フミヤ おもしろいやつだった。身長が俺よりも低かった。幻では、「うちほり」という人もいました。

ナオユキ マンボなヤツ

トオル 武田は今八百屋さんだ。

マサハル ちっちゃくて、毛濃いくて、弟がゴジラ

クロベエ 僕が入ったと思ったら、やめた。

モク 僕にも教えて、トール。

ユージ 「てし」といいます。

Q この世にお酒が無くなったら何を飲みますか（大阪府 池上由利子）

フミヤ チャイニーズティ（ポーレイ茶）チェッカーズが飲んでいるやつは日本では売っていません

ナオユキ 牛乳

トオル メチルアルコール

マサハル 中国茶

クロベエ ウーロン茶

モク お茶

ユージ お茶

Q デビューしてから一番変わったナァと思うのは、どんなこと（時）ですか（大阪府 そりゃもう大騒ぎさー！）

フミヤ 頭とセンスがよくなった。考え方がまるっきり変わった。

ナオユキ 髪の毛

トオル 自分自身

マサハル 自分の知らない人が、自分のことを知っている。

クロベエ 目つき、シワが増えた。

モク 僕の知らない人が僕を知ってる!!

ユージ みため

Q 看護婦さん、セーラー服の女学生、人妻、どれにそそられるでょう（福島県 加藤[illegible]子）

フミヤ セーラー服。俺も年だなー、つくづく…

ナオユキ 女学生

トオル セーラー服

マサハル わからないが看護婦さんとか、清潔そうでイイデスね。

クロベエ みんな女です。

モク どれも魅力あるが、セーラー服はダメ。

ユージ 看護婦さん

Q 理想のデートコースって何ですか（大阪府 永野美子）

フミヤ ディズニーランド→食事→映画→バー→ホテル

ナオユキ ディズニーランド→食事→ホテル

トオル のり弁を買って公園

マサハル 起きる時から寝る時まで一緒

クロベエ 最初は明るく、最後はロマンティックなところ

モク コースというより、誰の目も気にしないで、ディズニーランドに行きたい

ユージ 誰もいない海か山へ行って一日中ふたりだけでボーッとする。

Q お酒、たばこは1日にどのくらい飲みますか？（兵庫県 尋ね人）

フミヤ 酒はその日で違う。たばこは1箱

ナオユキ たばこ2箱 酒、わからん

トオル たばこ1箱 酒適当

マサハル 酒、たばこはやらないが、年間にすると酒はコップ1杯くらいにはなる。

クロベエ たばこ1箱、ビールは毎日。

モク お酒 平均ロック4、5杯。たばこ、平均4箱

ユージ 酒は飲む時は飲むが、飲まない時は1週間ぐらい飲まない。タバコは1日1箱ぐらい。

Q 高校時代は、月にどのくらいのお金を使っていましたか（東京都 吉田愛）

フミヤ 多くて3万ぐらいだと思う。

ナオユキ 2万位

トオル 3万位？

マサハル 貧乏だったので、あまり使ってない。

クロベエ 知らない！

モク 1、2万の他、単車のガソリン代。

ユージ 5000円〜1万円位

Q 自分が出演してみたい外国映画ってなんですか？（千葉県 二宮美保）

フミヤ SF映画。IQの高い少年、コンピューターのような頭脳を持った東洋人。たったひとりでアメリカを経済的に破壊していく役。

ナオユキ ゴッドファーザー

トオル スピルバーグもの

マサハル 監督が有名でスゴイもの。

クロベエ エイリアン

モク ギャングもの

ユージ 英語がしゃべれないので、外国映画には出たくない。

Q コンサート中に、40代のおじさんがのってのってノリまくっているのを見つけた時、みなさんはどんなふうに思いますか？（東京都 金のピアス）

フミヤ そりゃーうれしいにきまっとる

ナオユキ ほお〜〜〜

トオル 嬉しいがおかしい

マサハル ほほえましい

クロベエ すごいなアーと思った

モク ナウイ

ユージ ありがたい事です

Q 生きていくうえでの大事なことを誰（どこ）から学んだと思いますか？（長野県 牧友紀子）

THE CHECKERS

THE CHECKERS↔LOVERS

Q 親や兄弟に何と呼ばれていますか?
A ジロウ

フミヤ　自分で悟った。
ナオユキ　まだまだ学んでない。
トオル　自分自身の生活
マサハル　まわりの人全て。
クロベエ　先生、親、友達
モク　友達、親、メンバー、全ての出会った人
ユージ　自然に覚えた。くう、ねる、あそぶ。

Q　夢とはずばり何でしょう。(京都府　岩前智美)
フミヤ　山に住みたい
ナオユキ　やる気
トオル　信じる事
マサハル　現実に返ること
クロベエ　挑戦
モク　目下のところ、土地と家、そしていっしょに生きてくれる女
ユージ　死ぬまで楽しくすごす事

Q　自分の顔or体でどこが一番好きですか(静岡県　菊地聡美)
フミヤ　なし
ナオユキ　手
トオル　ホクロ、目
マサハル　内蔵
クロベエ　目
モク　ないなァー
ユージ　小指のつめ

Q　もし、つきあっている女の子が寝言で他の男の人の名前を呟いたらどうしますか?(岐阜県　ドラムこぞう)
フミヤ　呼んだ男の名前によるが、愛情はなくなる。つまり別れると思う。でもそういうつもりで呼んだかどうかは、日頃の態度でわかる。呼んでもやっぱ別れないかな。
ナオユキ　聞いてみる
トオル　殴る
マサハル　背中をむけてとりあえず寝る。
クロベエ　その人はどこの人と聞く。
モク　泣く
ユージ　とりあえず、尋ねてみる。

Q　親から言われた言葉の中で、一番印象に残っている言葉はどんなのですか?(埼玉県　結所裕子)
フミヤ　酒は飲むもの　酒に飲まれるな。金銭の揉め事は一番汚いから、金を貸す時はあげるつもりで貸しなさい
ナオユキ　1.仕事にほれろ　2.土地にほれろ　3.かみさんにほれろ
トオル　あんたA型よ
マサハル　このバカ息子が!!　死ねッ!!
クロベエ　出ていかんかァ!
モク　人にやさしく、自分に厳しく。
ユージ　「す」を飲みなさい

Q　生まれ変わったら男と女、どちらがいいですか?(大阪府　加納恵美)
フミヤ　男さ
ナオユキ　男
トオル　男
マサハル　男
クロベエ　男
モク　男
ユージ　男

Q　ファンの女の子から言われた言葉で、一番心に残っているのは何ですか?(愛知県　市吉洋子)
フミヤ　30まで結婚しないでください。
ナオユキ　尚之様
トオル　ありがとう
マサハル　いい人と結婚して幸せになってください(福岡にキャンペーンに行った時に)
クロベエ　髪の毛触っていいですか、耳触っていいですかァ〜〜
モク　チェッカーズだけの公開特別番組で、一番前の女の子に一生懸命仕事をしてるボクに向かって「この人何やってんの」と言われ、激怒した。そんな事言うくらいなら、最初から見にくるな。
ユージ　ギャーッ、

Q　皆さんはディスコに行くと踊るのですか?(京都府　徳田百美)
フミヤ　踊るよ
ナオユキ　踊る時もあるが、あまりディスコに行かない
トオル　YES
マサハル　盛りあがれば踊ります
クロベエ　踊らない
モク　TPO
ユージ　たまに踊ります

Q　子供の頃の記憶で"これが一番古いだろう"と思うものは、何歳の時のどんな記憶ですか?(宮城県　門脇順子)
フミヤ　ベビーベットで寝ているナオユキを、よじ登って上から見てる自分
ナオユキ　3歳でまめ電球
トオル　ウルトラマンを見て怖かった
マサハル　幼稚園の時。いじめられて閉じ込められた。かくれんぼして逃げられた。
クロベエ　3歳位、川でおぼれた時の事
モク　基地を作った事。保育園の頃
ユージ　2、3歳だと思う。隣の警察学校のラジオ体操

Q　待つ女をどう思いますか。(神奈川県　寺崎こずえ)
フミヤ　基本的には好きですが、すごく重い時もある。
ナオユキ　いい
トオル　男にプレッシャーを与えてはいけない
マサハル　あみん
クロベエ　本当に好きなんだなぁと思う
モク　あみん
ユージ　かわいくもあり、辛くもある。

Q　今使っているハブラシの色は?(新潟県　鈴木有紀)
フミヤ　透明
ナオユキ　赤
トオル　[illegible]
マサハル　黄色
クロベエ　赤
モク　レッド(秋吉久美子さんに貰ったヤツ)
ユージ　ブルー

Q　コーヒーにお砂糖とミルクをどの位入れますか?(埼玉県　松永律子)
フミヤ　ブラックです
ナオユキ　ブラックなんですよ
トオル　ブラック
マサハル　入れる時と入れない時があります。入れても少量。
クロベエ　ブラック
モク　たっぷり
ユージ　入れません

Q　久留米弁でいちばん好きな言葉を教えてください。(福岡県　川崎亜弥)
フミヤ　別にない。なんか不思議と思い出せない
ナオユキ　あそぼい(遊びましょう)
トオル　ようら
マサハル　ボボ
クロベエ　がば!
モク　にゃ
ユージ　にやけぼたくり

Q　親や兄弟から何と呼ばれていますか?(京都府　村田佳恵)
フミヤ　親→フミヤ　弟→やっしゃん、あんちゃん、やすおさん、ねぇ——。
ナオユキ　ナオユキ
トオル　トオルクン
マサハル　ジロウ
クロベエ　よしや
モク　よっちゃん
ユージ　ゆーじ、ゆーちゃん

Q　メンバーの中で誰が最初に結婚すると思いますか?(愛媛県　片山由香里)
フミヤ　わからんなっ
ナオユキ　俺
トオル　年上組の誰か
マサハル　わかりません
クロベエ　わからない
モク　俺(相手いない。募集中)
ユージ　想像がつきませんが、意外なところでクロベエかな

Q　今までリリースした曲の中で、この曲はいつ聞いても新鮮だとか、思い出がいっぱいの曲ってどの曲ですか?(大阪府　井上美和)
フミヤ　ギザギザはやっぱいろんな事思い出すな。
ナオユキ　涙りく
トオル　フラワーのLP
マサハル　思い出はギザギザ、好きなのはロングロード
クロベエ　ギザギザハートの子守唄
モク　ブルーレイン
ユージ　やっぱり「ギザギザハートの子守唄」です。

Q　あ、かわいい、抱きしめたい…って思うタイプの女の子は?(兵庫県　児玉良恵)
フミヤ　かわいくて小さくて、なんかギュッとしたくなるような子
ナオユキ　泣いてる時
トオル　恥ずかしがりや
マサハル　幼稚園ぐらいのかわいい女の子
クロベエ　犬のような人?
モク　タイプじゃなく、その雰囲気がある女
ユージ　健気な子

Q　今度お芝居で男役をやることになりました。チェッカーズの皆さんから「ここに気をつけて!」という細かいアドバイスをください。(神奈川県　都弥くんあそぼ!)
フミヤ　手の動き、指の動き
ナオユキ　ポーズにする
トオル　ちょっとした仕草
マサハル　まずは、鼻毛が出てるかどうか気にする。以上。
クロベエ　セリフは大きい声でテレを忘れてなりきる
モク　思いっきりやれ!!
ユージ　男になりきる

Q　親から自分への遺伝ってどういう所に表われていると思いますか?(岡山県　逸見典恵)
フミヤ　全部
ナオユキ　性格
トオル　性格、しわ
マサハル　頭の大きいところ、色のないところ、ギャンブル好きなところ
クロベエ　酒
モク　目が悪い
ユージ　つめの形

Q　部屋のカーペットは何色ですか　それとどんな部屋ですか?(京都府　森田恭子)
フミヤ　ないしょ
ナオユキ　クリーム色、普通の部屋
トオル　クリーム、きたない部屋
マサハル　板バリです。
クロベエ　グレー
モク　グレーできれいな部屋です。
ユージ　ベージュ。テレビとステレオと本がある部屋

Q　中学時代の一番良かった思い出を教えてください。(愛知県　野村幸代)
フミヤ　ファーストキス
ナオユキ　ケンカ。他の学校の奴と
トオル　学校が楽しかった
マサハル　友達とのびのび毎日バカ騒ぎしていたこと
クロベエ　文化祭
モク　彼女ができた思い出
ユージ　冬の夜遊び

THE CHECKERS

Q **「いーかげん」「わがまま」以外の性格は?**
A **甘えんぼ、不精、欲張り、飽きっぽい。**

FUMIYA↔LOVERS

Q 3年、5年、10年後はそれぞれ何をしてると思いますか? (埼玉県 野島祐子)
A 3年後、チェッカーズ。5年後、チェッカーズと個人の仕事。10年後、わからない。
Q アマチュア時代、一番楽しかった事は? (福島県 山崎由美)
A Xmas party
Q 女の子に、これだけは、やめてほしいというのは何ですか? (広島県 山本和可子)
A ゲヒンでバカで頭の悪そうな言葉使い
Q 好きなことわざは? (兵庫県 相生の郁弥)
A 明日は明日の風が吹く
Q 体の調子が悪い時に上手に断る方法って何ですか? (千葉県 岩下弥生)
A 体の調子が悪いのですみませんが……。
Q 今度ドラマをやるとしたらどんな役がいいですか? (栃木県 舘野千恵美)
A 死ぬ役
Q 作詞の時、苦手な内容はどんなものですか? (広島県 土本志保)
A ないです
Q ファンの人のプレゼントで迷惑な物ってありますか? (広島県 渡辺久美子)
A おまもり、動物
Q 新曲の「素直にI'm sorry」の2番の途中でいつもニコニコッとし始めますが、やっぱり照れるのでしょうか。(岐阜県 石木稔子)
A べつに照れているわけではないが、なんとなく笑顔で唄った方が似合う曲だと思うので素直にそうゆう感じになっています。
Q 郁弥くんは尚ちゃんとても仲がいいけど、その秘訣は何ですか? また、兄弟ゲンカをしたことはありますか。(兵庫県 米口[illegible])
A 兄弟ゲンカは、ナオユキが中学生の頃やったのが最後だと思います。仲良しの秘訣は、弟はひき、兄は思いやる。
Q 長い髪もステキだけど、短かい髪の方が、どちらかというと似合うと思うんですが、ずっと髪は切らないんですか? (大阪氏 谷ひろみ)
A 気が向くまで
Q 最近気に入っているTVのCMは何ですか? (広島市 小山千恵)
A ライフィックス胃腸薬
Q 郁弥さんはそれだけ料理が得意で工夫上手なのに何故料理番組に出ないのですか? (神戸市 のりちゃん)
A 材料を何gとかあと味つけに使う物をこと細かく書けない。味をみて、勝手に色々なものを入れてしまうからです。
Q "SCREWツアー"で戦争とかがおきたら、みんなでこの場所へ集まろうと言ってくれたのはいいのですが、いったいどこへ集まるのですか? (茨城県 有馬かおる)
A 戦争ではなく、地震の時です。そしてチェッカーズ村を作りそこでみんなで住めば俺は王様さ、へへへっ……。でも女王様は誰だろう。
Q 去年のインタビューでライバルはいないとおしゃっていましたが、今でも? (浜松市 小池泰子)
A 今もいませんね。
Q HOLIDAYの過ごし方は? (香川県 平田千佳)
A 寝てる。映画。料理。食事に行く。ビデオを見る。
Q CDとレコードとどちらがよいですか? (埼玉県・田[illegible])
A CDが簡単でいい
Q フミヤさんにとってのビタミン剤って何ですか? (町田市 磯部[illegible])
A 女の子達
Q 女性に交際を申し込む時、何と言って告白するんですか? (北海道 田中裕子)
A べつに言葉はないです。自然にそうなります。
Q 郁弥くんは女性のほっぺたをぶったことがありますか? (和歌山市 伊東正美)
A ありますよ。力いっぱいではないですが。
Q 何が何でも女の子を「その気」にさせる5時間デートの中身は? でももし彼女が「その気」にならなかったら? (鳥取県 平井千架子)
A 会話をして食事。その気がなければ軽く「それじゃまたね!!」と家まで送る。
Q 『意外とシングルガール』の最終回のサイコロの目は何が出たのか、教えてください。(大阪市 西谷真弓)
A 俺も知らない。
Q 英語の俗語をよく知っておられるようですが、どこで覚えるのですか? (京都府 マンビー)
A 外人から。あと本から。俗語辞典というものも本屋で売っているんですよ。
Q 好きな街はどこですか? 理由も教えて下さい。(埼玉県 野島祐子)
A 東京。今住んでいるから。
Q よく本を読んでいますが何か一冊おすすめの本を教えて下さい。(福岡県 福本洋子)
A 今は、なかなか本を読んでいないが、昨日読んだのは、いとうせいこうの「ノーライフキング」。
Q かめは今どうしていますか? かめの他に何か飼ってみたい動物はいますか? (佐賀県 青木麻美)
A カメは元気です。その他は植物だけです。
Q 今でも「ITS」のアップルを飲んでいますか? (東京都 河野彩香)
A ツアー中はそうですが、家では飲みません。
Q 尚くんのソロ活動についてはどう思いますか? (福島県 鈴木淳子)
A いいんじゃないですか。
Q 「あの娘とスキャンダル」と「スキャンダル東京」を今でもちゃんと歌い分けられますか? (千葉県 岡野浩美)
A 練習しないとふたつとも唄えません。
Q フミヤさんの音域はどのくらいですか? (栃木県 山口晴美)
A 上はファルセット抜きでAです。
Q 私は双子の姉妹でなにかと姉と比べられてイヤな思いをしているんですが、おふたりはどうですか。(山口県 小沢牧子)
A 双子は兄弟で比べられるより、もっとツラいね。藤井家では、兄も弟もたいしたことなかったので比べられてイヤな思いをしたことがない。
Q 自分で自分の性格を「いーかげん」と「わがまま」っていうことばですましちゃってますが、それ以外だったらどんな性格なんですか? (横浜市 笹本典子)
A 甘えんぼ、不精、欲張り、飽きっぽい。
Q どうして「TOY BOX」までが放送禁止になったのですか? (兵庫県 富田かおり)
A ちょうど発売の時、尾崎が捕まったので、「危ないおもちゃをオーラに買ってくれ トイレの隣にでも[illegible]しておくから」このあたりがまずかった。今は唄えるかもしれない。
Q 7大都市キャンペーンの時、7人がバラバラだと、マネージャーは誰と行くんですか? (埼玉県 小池美和)
A チェッカーズのマネージャーはひとりではありません。5人です。が、その他キャニオンレコード宣伝担当の人、またはSOGO企画のツアーマネージャーがつきます。
Q 「神様ヘルプ!」と「OH!! POPSTAR」は永遠にLPに入らないんですか (愛知県 熊谷恭子)
A わからんが、たぶん入らないと思う。
Q 車の免許を取ったのはいつですか? (兵庫県 中田雅子)
A 18歳、高3の夏
Q 学生時代の成績はどうでしたか? (東京都 山崎仁[illegible])
A ふつう
Q 最近ちょっと恐いというか不良っぽい歌詞があるのはどうして? (千葉県 笹木理恵)
A もともと不良だったと思います。
Q 個人的にCMに出たり、TVドラマやったり88年は勉強になった年だったと思いますが、89年これは絶対やりたい…というものがあったら教えてください。(愛知県 古日山朱里)
A 考えたない
Q 昔着ていたチェックの衣装やCHECKERSのブランドのトレーナー、今どうなっているのですか。(神奈川県 木野桃子)
A 衣装部屋でぐちゃぐちゃ
Q 自分の彼女or奥さんになるのに絶対イヤなタイプを教えてください。(埼玉県 あき)
A 下品
Q 一般的に化粧品と呼ばれているもので、何を使っていますか。(東京都 小野智子)
A クリニーク、クラランス
Q いつもどんなオーディコロンをつけていますか? (兵庫県 下雅[illegible]子)
A たまに、シャネルのアンティウスかタクティクス
Q 手軽にできるストレス解消法を教えてください。(大阪府 加藤知子)
A 寝る、食う
Q 最近気に入っている車、バイクの種類を教えてください。(東京都 白子[illegible])
A バイクはハーレー、車はポルシェかフェラリー

NAOYUKI.TOHRU⇔LOVERS

Q 落ち込んでる時、何と言ってもらいたい？ A 私をあげる

NAOYUKI

Q もしどこかのCMを作ってほしいと言われたら、どんな商品をどんなふうに作りたいと思いますか？（千葉県 平林葉子）

A 酒だな。ただ飲んでるだけ。

Q 高くて強いお酒をチビチビ飲むのと、安くて弱いお酒をガブガブ飲むのとどちらが好きですか。（東京都 長田亜樹）

A どちらでもよい

Q 今までにいじめられた経験はありますか？（愛知県 山田智子）

A あまりないね。いじめる方だった。

Q 結婚まで考えた位好きな人に「お酒をやめて」と言われたらどうしますか？（大阪府 栗林理恵）

A やめねェ――

Q オリンピックで尚之さんが一番印象に残ったのはどの種目ですか？（神奈川県 横前理香）

A 男子100メートル

Q ズバリ、人妻に興味はありますか？（福井県 LADY・M）

A ある、ある

Q 郁弥くんの服とかアクセサリーを使ったことはありますか？（大阪府 向井直子）

A あるよん

Q ちっちゃい頃の兄弟ゲンカのパターンを教えて下さい。（神奈川県 坂本冬味）

A 物の取り合い

Q フルートは元気ですか？（鎌倉市 青山百合）

A 死んだ

Q 髪型のこと、ボロくそに言われた時の気分はどうですか？（福岡県 河原真紀）

A ボロボロ

Q 郁弥さんは、ピアスをしていますが、尚之さんはしないのですか？（大阪府 三国雅樹）

A やろうと思ったケドやめた

Q 今までに読んだ本で印象の強かったものはどんな作品ですか？（長野県 青沼由美）

A コミックで、バタアシ金魚

Q 今のお仕事以外に何か職につけといわれたら何をやりますか？（茨城県 杉田一枝）

A バーテン

Q 自分がとても落ち込んでいるとき、悲しいときに女の子に言ってもらいたい言葉は？（三重県 船橋亜紀子）

A 私をあげる

Q ザ・モッズの新しいLPで尚ちゃんは2曲だけサックスを吹いたそうですが、それは何という曲ですか？（京都府 野間絢子）

A 聴けばわかる

Q 今もし好きな人が出来たら、どこにつれていってあげたいですか？（埼玉県 上原理絵）

A 温泉

Q 尚ちゃんは以前、TV番組などでよくガムをかんでいましたが、この頃はかみながら出るのをやめたんですか？ また一番好きなガムを教えて下さい。（横浜市 横田理香）

A やめた。トライデント。

Q 「笑っていいとも」はどうでしたか？（埼玉県 栗原貴代）

A 意外に緊張せず、楽に出れた

Q 「ONE NIGHT GIGOLO」のときにSAXがGOLDになってますね。今までTenorは銀だったのに。心境の変化ですか？（兵庫県 大谷景子）

A べつに。渋いかな、と思って。

Q デビューした18歳の頃、どんな希望と不安がありましたか？（兵庫県 前田みき）

A とりあえず、やるしかない。

Q 1ヵ月にどのくらい曲を作るのですか？（鳥取県 富里美子）

A 0曲

Q 今飲んでいるお酒とその友達を教えて。（三重県 武内ケン乙）

A 「いいちこ」以外の焼酎。友達はその辺の人。

Q 尚ちゃんの「水晶のブリッジ」の歌詞の「ボクの背中を渡ればいい」というところで、私は足で渡ると思うんだけれど、友達は手で渡ると言いはってます。本当はどうやって渡るんですか？（東京都 浜野加奈子）

A 渡れば、それでいい。

Q GOツアーの最終日に制服を着る事を提案したのは誰ですか？ またその理由は？（岐阜県 皆合夕美子）

A 私です。前の日、酒飲んで盛り上がってそのまま実行した。

Q 今、夢中になっている本はありますか？（福岡県 川崎亜紀）

A 自然関係の本

Q この頃、よくしている黒いひもで巻いてある透明なものは何ですか？（東京都 今井美紀）

A 水晶

Q 何本ぐらいアダルトビデオを持っているのですか？（千葉県 柴戸春）

A 200本ぐらい？

Q 自分が女の子だったら、どんな名前がいいですか？（神奈川県 川崎利絵）

A 枝理子

Q 初めてギターで弾けた曲を教えて下さい。（秋田県 樋口麻子）

A 沢田研二の「時の過ぎゆくままに」

TOHRU

Q リーダーというのはどういう事をするのですか？（大阪府 田中祥子）

A めんどうくさいこと

Q 使っているギターの名前を教えて下さい。（福島県 塩田千春）

A フェンダー、ストラト・キャスター、62'Sビンテージモデル

Q 中井美穂さんについて一言お願いします。（群馬県 由井玲子）

A 私の母さんです。かわいいと思う。

Q 忘れられない"あの時の味"ってありますか？（東京都 橋本靖子）

A 沖縄で食べた採ったばかりのウニ。

Q 結婚相手を一番最初に紹介するのは誰ですか？（東京都 五十嵐由美）

A メンバー

Q 人生における最上のエクスタシーって何だと思いますか？（大阪府 南千賀子）

A 自己愛

Q 将来子供にチェッカーズのビデオを見せますか？（愛知県 津田紀子）

A 見せる、見せる

Q おにぎりの中身は何が一番好きですか？（群馬県 坂下浩子）

A うめぼし

Q 子供の時の宝物を教えて下さい。（兵庫県 ぴあす）

A GIジョー

Q 自分の彼女の身長は何cmがいいですか？（新潟県 大谷美紗子）

A 156ぐらい

Q もし自分が女だったら、メンバーの誰とつき合ってみたいですか？（北海道 川村広美）

A マサハル。面白そうだから。

Q コンサート後の疲れを癒すものは何ですか？（愛知県 近藤久美子）

A 酒

Q 昔に比べて自由になったと思うことは何ですか？（兵庫県 佐久間まさ美）

A 生活すべて

Q BIG EGGの時、お母さんに自分達のコンサートを見られてどう思いましたか？（岡山県 山口亜朱美）

A あなたのムスコはこんなに立派になりましたよ、と思った。

Q 小さい頃習っていた稽古事があったら教えて下さい。（埼玉県 神田さおり）

A お茶

Q 享さんっ！ 今でもまあさんのあたまのにおいをかいでいるのですか？ 又まあさんはそれについてどう思っているのですか？（北海道 武田美枝子）

A たまにする。（まあさんは）喜こぶ。

Q 最近気づいたんですけど、トオルさんのファンになると"CRAZY"&"マンピニスト"になってしまう傾向がありますが、そのことをトオルさんはどう思っていますか？（札幌市 藤田恭子）

A 私がそうなのでしょうがない。

THE CHECKERS

13SEPTEMBER YOYOGI

17MARCH TOKYO

20JANUARY DAIKANYAMA STUDIO

3AUGUST FUKUOKA

20JANUARY DAIKANYAMA STUDIO

3AUGUST FUKUOKA

10APRIL HITOKUCHIZAKA STUDIO

11OCTOBER KAWAGUCHI-KO STUDIO

13SEPTEMBER YOYOGI

13SEPTEMBER YOYOGI

17MARCH OHSAKA

11OCTOBER KAWAGUCHI-KO STUDIO

10APRIL HITOKUCHIZAKA STUDIO

10APRIL HITOKUCHIZAKA STUDIO

10APRIL HITOKUCHIZAKA STUDIO

3AUGUST FUKUOKA

13SEPTEMBER YOYOGI

16JULY TOKYO

20JANUARY DAIKANYAMA STUDIO

20JANUARY DAIKANYAMA STUDIO

1988 THE

MASAHARU. KUROBE↔LOVERS

Q 幸福を感じる時は、どんな時ですか？
A 晩メシのとき

Q 幼い頃飼いたかったものって何ですか？（福岡県 佐藤仁子）
A 昔は、ハムスターとかモルモットとか犬とか鳥とかスズムシとかいっぱい居ましたが、事故とかで死んでしまいましたのでそれから生き物は飼わないようにしました。
Q 他人に自慢できることは何ですか？（札幌市 石原由美子）
A 頭のデカさ
Q どうしてそんなに面白いことばっかり言えるのですか？（岡山県 小倉和恵）
A わかりません。自分ではノーマルだと思ってますから。
Q 1年間、好きなだけライブをしていいと言われたら何本位やりたいですか？（北海道 釜沢真紀子）
A 年中やってりゃ気持ちイイでしょーが、そうもいかない。
Q 今、夢中なものは何ですか？（広島県 ステラ）
A チェッカーズ
Q もし100万円拾ったら何に使いますか？（大阪府 富田由紀）
A 別にナイ
Q 結婚して何年か過ぎ、奥さんが浮気をしたらどうしますか？
A 笑う
Q 彼女とデートに行くとしたら、どういう所に行きたいですか。
A 場所はどこでもいいです。パチンコ屋でも競技場でも2人一緒なら。
Q オフの日のカッコはどーいう感じですか？（京都府 徳田百美）
A 普通もオフもかわらない。
Q もし中学校の先生になったとしたら、どんな先生になりたいと思いますか？（福岡県 川崎亜紀）
A 校長先生。何もしないで朝礼の時のしゃべりを凝る。
Q どんな惚れ方をするのが一番嬉しい？（愛知県 杉田由起子）
A シロウ
Q 幸福を感じる時は、どんな時ですか？（愛知県 古田山朱里）
A 晩メシのとき
Q 好きな映画は？
A 「風の谷のナウシカ」「天空の城ラピュタ」「となりのトトロ」
Q 好きな人が、髪を切ってとかこうしてほしいとか言ったら努力しますか？（北海道 岡部真紀）
A せん
Q メンバーの中で今はやってること何？（岩手県 山本晴美）
A ボン
Q 今一番大切にしてるものは何ですか？（福岡県 川崎亜紀）
A 私と仲間とスタッフ
Q お部屋の中に置いてある物の中で一番気に入っている物は何ですか？（東京都 高田好江）
A 私
Q リクルート疑惑について一言。（埼玉県 島根貴子）
A 人間はそんなもんでしょう
Q 今までで最高のクリスマスの思い出は？（東京都 小澤真美子）
A 金のない時、チェッカーズのメンバーでやったクリスマス。
Q マーさんは何のおみそ汁が好きですか？（熊本県 宮崎佐知子）
A 具がたくさん入ってて白ミソ
Q 男の優しさを一言で表わすとしたら？（兵庫県 永井千恵子）
A 男も女も優しさは一緒ですけど、思いやりでしょうか。
Q 女は恐ろしいと思うのは、どんな時ですか？（大阪府 [illegible]）
A 裏切る時は簡単に裏切る。
Q 女の人になったら、何をしたいですか？（広島県 奥田弥生）
A なりたくないけど、なったら買い物ばっかりでしょう。
Q [illegible]はいくつ位になりましたか？（伊勢市 秋山了子）
A 18
Q どうして享さんをいじめてるのですか？（岐阜市 皆合夕美子）
A いじめがいがあるから。愛しているから。
Q 女の人の香水をどう思いますか？（埼玉県 菅原智美）
A しつこくない、その人に合っているヤツなら好きです。
Q 政治くんの最高スコアを教えてください。（東京都 鶴田有紀）
A 99
Q コンサートで変わったファンのコはいましたか？（東京都 金久保紀子）
A イカのような踊りをする人
Q 掃除、洗濯などは全部自分でやっているのですか？（大阪府 田崎清美）
A Yes
Q 子供の頃好きだった駄菓子を教えて下さい。（高知県 古賀恵子）
A イカのフライみたいなもの
Q 今、芸能界（メンバー以外）で一番仲の良い人は誰ですか？ 男女ひとりずつ教えて下さい。（大分県 押谷えり子）
A 女 いない。男の人→クォーター・バディーズ
Q すごくむかついた時は、どうやって気分を晴らしますか？（京都府 前田知可）
A 早く寝る
Q どんな人のコンサートに行きますか？（兵庫県 岸本江利子）
A 有名タレント
Q 一番大好きな童話は何ですか？（北海道 大槻[illegible]子）
A アルプスの少女ハイジ
Q チェッカーズが初めて出演したテレビは何ですか？（東京都 水野谷忍）
A ライブG
Q 男を磨くため何かやっていますか？（東京都 ストラト・ヨーコ）
A 女の人を意識する。
Q 「アーティスト・ナウ」のDJをやるようになってから、自分自身何か変わりましたか？（北海道 山沢知美）
A DJの難しさを知ってしまった。
Q 犬が好きだそうですが、自分を犬に例えるとどの種類ですか？（宮城県 坂田美奈）
A 今、飼っている犬（ヨークシャテリア）
Q 今でも寝起きが悪いのですか？（埼玉県 佐藤美奈子）
A そのとおり
Q 愛犬ヨシアくんは、ツアーの時はどうしてるんですか？（京都府 滝本なお）
A 鹿毛進君（友達）に預ける。
Q コンサートビデオを見てるとドラムを叩きながら何か言ってるけど何を言ってるの？（兵庫県 佐久間まさ美）
A ドラム（リズム）を口で言ってる

Q 腕がだんだん太ってきていますが、そんなにドラムを叩くのですか？（愛知県 [illegible]林みさと）
A そうなの
Q 愛犬「よしあくん」の一番かわいいと思う所はどこですか？（東京都 じゅんぴー）
A クンクンとなく時
Q 今ビデオで一番撮りたいなあと思っているものは何ですか？（奈良県 健康には牛乳）
A 自然。街を歩く女の人の仕草
Q ふと寂しくなった時、どこに行きたくなりますか？（尼崎市 [illegible]本和美）
A 飲み屋
Q 男の人が絶対してはならないことって何ですか？（京都府 井上久美子）
A あれを切ること
Q 西武ライオンズの選手に言いたいことは？（葛飾区 八巻尚美）
A がんばってね。
Q 学生時代にこれだけはやっておいた方がいい！ ということはありますか？（富山県 木下友紀）
A 恋人をつくる
Q 今一番好きでよく飲むお酒は何ですか？ また酔っぱらうとどうなりますか？（大分県 押谷えり子）
A バーボン（ハーパー）、歌いたくなる。
Q クロベエさんは8ミリビデオで㋠の生活を撮っているそうですが、今現在、クロベエさんの私服と8ミリビデオテープとどちらが多いですか？（埼玉県 勝野光子）
A ビデオテープ
Q 犬のヨシアくんの顔をぜひパチ▼パチで見せて下さい。（兵庫県 栗田ふくみ）
A 取材依頼がくれば。ただしカラーページ。

MOKU.YUJI↔LOVERS

M O K U

Q 日曜日の朝生番組をやることによって、土曜の夜に影響はありませんか？（東京都 大塚めぐみ）

A 大あり

Q 今でもコンサートの時に「この子だ」って決めて唄ってるんですか？（千葉県 きょうこちゃん）

A 昔の話。今はなし。

Q バイクと車を持っているそうですが、どんな時にバイクに乗るのですか？（兵庫県 佐久間まさ美）

A 晴天で、仕事に影響のない時は単車。あとは全て車。

Q これから先、おヒゲを全部剃ることがあると思いますか？（愛知県 近藤広子）

A 思います。

Q サングラスをかけている自分とかけていない自分とではどちらが好きですか？（宮城県 坂田美奈子）

A ない方かな。

Q どうして大事な大事なリーゼントを切ってしまったのですか？（北海道 名畑康子）

A 気分転換

Q 映画に出演決定！ でも役柄として絶対ヒゲをそらなくてはいけなくなりました。さあピーンチ！ どうしますか？（北九州市 長谷川町子）

A 台本しだいです

Q 「あそびにおいでヨ！」で天城サンを演じてましたが、高杢サンは天城サンのことをどんな男性だと思いましたか？（鹿児島県 細山田裕美）

A いい男だと思いました。

Q コンタクトレンズを仕事中に落とした事はありますか？（奈良県 松井万知）

A 芸能人水泳大会で飛び込んですぐ落とした。その1回だけ。失敗は2度と繰り返さない、タカモク。

Q 高杢さんは女性に対して待ちの体勢で行くというパターンに変えたそうですが、成功しましたか？（東京都 大塚めぐみ）

A まだです、さびしい。ヤッパリ俺は攻めるべきなのかな!! と最近切に思う!!

Q 結婚したら、奥さんに何と呼ばれたいですか？（北海道 山沢知[illegible]）

A 「ねー♡」

Q 東京にいてふと季節の変わり目を感じるのはどんな時？（兵庫県 新宅歩美）

A 夜の街、ネオン。

Q デュエットするとしたら、誰と何を唄いたいですか？（宮城県 T EA）

A ティナ・ターナと「銀恋」（銀座の恋の物語）。これで決りだ!!

Q 最近、誰かのライブに行きましたか？ 誰のライブが見たいですか？（富山県 森真樹子）

A スティング。シャナ・ナ。

Q 最近素直にあやまれなかったことはありますか？（富山県 森真樹子）

A ない。根が素直だから。

Q コーヒー、紅茶、日本茶のうち、どれが一番好きですか？（大阪府 梅沢[illegible]子）

A coffee

Q もしマジメな顔で弟子にしてくれと頼まれたら、どうしますか？（東京都 小西真樹子）

A 話し合う

Q 東京へ来て今までで一番怖い思いをしたことは何ですか？（横浜市 江波戸弘美）

A 超でかいねずみを陸橋の下で見た時。（渋谷）

Q 結婚して子供ができたら、はじめは男と女とどちらがいいですか？ また何人欲しいですか？（大阪市 神先由紀）

A 一姫二太郎（二人ぐらいかな）

Q 天城サンは好きですか？（福岡県 河原真紀）

A 大好き

Q 最近凝ってるものは何ですか？（埼玉県 深井栄子）

A オートバイ

Q この頃感動したことって何ですか？（世田谷区 井上英子）

A 友情

Q 8月8日の広島のコンサートの時、ゆうちゃんのベースがおかしくなってハプニングでしたけど、こんな時はものすごくあせるものですか？（広島市 光[illegible]美）

A すこしアセる

Q 今年のオフは何してましたか？（新潟県 野田知子）

A ニューヨーク、ハマへ行って来ました。

Q 家事などはしますか？ 洗濯は何日おきにするんですか？（兵庫県 野田幸子）

A 週に1、2度は自分でめしを作ります。洗濯はたまったらやります。

Q ひとりでいる時地震がきたとしたら、まず初めに何をしますか？（埼玉県 みっこ）

A し〜〜〜っとしてる

Q もしもう一度生まれてくるとしたら、また日本人で生まれたいですか。そしてまたチェッカーズのようにバンドをやると思いますか？（横浜市 林原睦子）

A アメリカ生まれで日本育ちのイギリス人。チェッカーズをやる。

Q 結婚したらどこに住みたいですか。（川崎市 新井マミ）

A 子供のために海や山が近い所

Q 最近、ゆうちゃんが急に若返ったような気がします。何かあったのでしょうか？（山口県 宮城千恵子）

A 髪を[illegible]ているからだと思います。

Q セーラー服・ブレザー・私服のうち、どれが好きですか？（東京都 辻よしこ）

A セーラー服

Q 大学ではどこの学部の学生だったのですか？（山口県 河村真弓）

A 経済学部

Q ゆうじくんは犬のどういうところが好きなんですか？（東京都 オンリーザチェッカーズ）

A にくきゅう

Q ゆーじchanは油性肌orカサカサ肌？（京都府 平井ちあき）

A 油性

Q 最近、TVや雑誌を見てると、享さんと裕二さんは、やたらと隣同志になって写ってる事が多いのですが、どうしてですか？（埼玉県 進藤美穂）

A 私は女が好きです

Y U J I

Q ラジオでサブリーダーと言ってましたが、どうやって決めたのですか？（三重県 ユウちゃんが好きなのに……）

A 多数決

Q 自分達のポスターを持っていますか？（滋賀県 西[illegible]夕水映）

A 持ってはいるが貼ってはいない。

Q 久留米でおすすめの場所はどこですか？（[illegible]子）

A 成田山

Q 酒・煙草・女のうちでどれが一番好きですか？（愛知県 吉広麻子）

A 女・酒・煙草の順番で好きです。

Q もし、今魔法使いがきて、「あなたを一度だけ過去に戻らせましょう」と言ったら、いつの時代に帰りたいですか？（東京都 土橋江里子）

A 小学生

Q 今までのLIVEで最大の失敗を教えて下さい。（神奈川県 [illegible]弥）

A コケた

Q 現在愛煙のタバコの銘柄は？（青森県 木村育子）

A ハイライト

Q 女の人の好きな表情、しぐさを教えて。（福岡県 中島弓子）

A 笑顔

Q 芸能人で尊敬している人はいますか？（横浜 林原睦子）

A クレージーキャッツ

Q ベース以外の楽器で得意なものはありますか？（東京都 まつだルーチェ）

A 得意なものはないけどギターを少々。

Q 好きなビールのメーカーは何ですか？（群馬県 坂下浩子）

A サッポロ

Q プライベートな質問をどう受けとめてますか（大阪府 広江章江）

A べつに

STANDING ON THE RAINBOW
THE CHECKERS

チェッカーズは、チェッカーズの歴史を築いている。それは子供の頃に憧れたビートルズではなく、ストーンズではなく、まして、キャロルではなく……。他の誰かと同じ道はもう歩まない。強い憧れはあったけど、今はチェッカーズ。チェッカーズに憧れながら、ここまでやってきた。自分たちの歴史を誇りに思ってStanding On The Rainbow。

MASAHARU

'89.2/8 ALBUM SINGLE FIRST RELEASE

ALBUM

LOVIN' SPOONFUL

1. Keep On Rolling 2. Winter Shadow 3. Dreamer's Alley 4. Funkaholic 5. GIN NO SAJI
6. Only Lonely Birthday 7. I LOVE YOU WA IMASARA IENAI
8. MIZU NO NAKA NO ANGELINA 9. NAITECHA WAKARANAI 10. YŪGUREDOKI WA HITORI DE ITAI

CD:D32A0418 ¥3,200／CT:28P6870 ¥2,800／LP:C28A0688 ¥2,800

SINGLE

貴 女 次 第

作詞:川村真澄／作曲:鶴久政治 編曲:西平 彰 SIDE-B:「粉雪のダイヤモンド」 CDSg:S10A0236 ¥1,000／SgCT:10P13327 ¥1,000／Sg:7A0945 ¥700

1988年の尾崎豊が通り過ぎていった。そして、"1988"は尾崎豊とそして皆の間において、特に記憶に残る1年となったに違いない。彼が旅を続け、そして皆が旅を続ける。彼の歩んで行く道の足跡が、1本の糸として、皆の糸とからんではほぐれ、ほぐれてはからむ。1988のOZAKIと君達の間にこの文章がある。

撮影●山内順仁　文●田家秀樹

CORE
YUTAKA OZAKI

CORE
YUTAKA OZAKI

CORE

YUTAKA OZAKI

CORE
YUTAKA OZAKI

YUTAKA OZAKI

対して、ひたすら"申し訳けありませんでした"とくり返すことだ。自分の犯ちを認め、許してもらうことだ。世間では、それを"自粛""謹慎"という言葉で表現する。

尾崎は、というより、彼のスタッフは、"戦った"のだと思う。

"戦い"というのは、守るべきものを守ることであり、言うべきことを言うということでもある。

尾崎自身が自分の行為を悔いている、ということと、活動を"自粛"して、人前から遠去けることとは、別のものだという判断。尾崎自身の気持を、逆に世間の人々の前で伝えること。それが彼らがとった選択だった。尾崎は、生れて初めて「夜のヒット・スタジオ」に出た。そして、自分の気持ちをブラウン管を通して茶の間に伝えた。その言葉と表情と歌声は、どんなニュース・キャスターの勿体つけた口調や、週刊誌の裏読みよりも説得力があった。

今、あらためて考えてみる。

もし、あの時、尾崎が"自粛""謹慎"でどこかにこもってしまっていたとしたらどうなっていただろうと。

ぼくらは、すでに、そうやってマスコミの目に添って謹慎したものの、そのことで結果的に、その後の音楽活動そのものまで奪いとられてしまった例を何人も見ている。一度そうやってゆずり渡してしまったものは、その何倍もの時間をかけてもとり戻すことはできない。

少なくとも尾崎と彼のスタッフたちは、自分たちの"守るべき何か"を貫いたといっていいのだろうと思う。自分の気持を聞き手に伝えること。そのことが、何よりも、次への"出発"になるということ。

制作が中断したままになっていたアルバムの完成、そして、発売。その後の"復活コンサート"。

東京ドームでのコンサートのチケットの発売は、7月12日だった。

その数日前、ぼくは、マザーの社長の福田信が「入ると思う？」とぶっとつぶやくのを聞いた。

あのコンサートのステージにあがったのは尾崎一人ではなかったのだろう。彼を"自粛"だの"謹慎"だのという名で抹殺されることから守り抜いたスタッフも、そして、そんなつまづきが、彼が歌ってきたことをけっして裏切るものではないと信じ続けた同世代の聞き手たち。誰もが、あの日のコンサートを祈るような気持で迎えていたはずだった。

88年の東京ドーム。

ミック・ジャガー、ハウンド・ドッグに始まり、BOØWY、TM、チェッカーズ、バービーボーイズ――さまざまなアーティストが自分たちなりのコンサートを展開していった。

でも、あれだけ、客席の全員が、身を乗りだすように、くいいるように待ち望んでいたコンサートは、この日をおいてなかったのではないかと思う。

9月12日、東京ドーム。

「COLD WIND」「ISM」「Driving All Night」「彼」「米軍キャンプ」「Teenage Blue」「群衆の中の猫」「Forget Me not」「LIFE」「時」「卒業」「遠い空」「Scrap Alley」「Scrambling Rock'n Roll」「紙切れとバイブル」「Freeze Moon」「十七歳の地図」「路上のルール」「愛の消えた街」「核(CORE)」「太陽の破片」「街路樹」そしてアンコール「シェリー」「I Love You」「理由」「僕が僕であるために」――全26曲が歌われた。

初めの数曲のぎこちない硬さは、緊張のためだったのだろう。[illegible]が緊張で押さえつけられるようになりつつ叫んでいたものが、「Driving All Night」あたりで、点火していくのがわかった。

一曲一曲ありたけの想いを込めて歌おうとしているのが伝わってきた。

尾崎はほとんど話さなかった。

――みやげ話は、たくさんあるが、ここで言うのは、やめておこう――

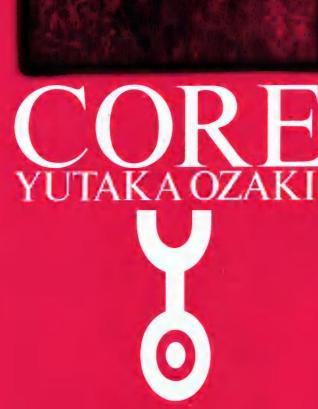
というのが前半で唯一のMCだった。

長い旅から帰ってきた――。

ぼくには、ステージの上の尾崎が、そんなふうに見えた。

それともあてのない一人旅から帰ってきたばかりの旅人のようだった。地球の果ての国からいくつもの国境線と、いくつもの国と大地と、いくつもの都市のアスファルトの上を通りすぎてきた旅人が連れてきた風のような静けさを見た。大声で叫ぶだけでは何一つ伝わらない砂漠のような孤独を内側に抱え込み、それでも自分の帰るべき

場所と、帰るべき人間たちの許にたどり着いたばかりのように見えた。
オレは、歌うために、帰ってきた。
ひたむきに歌い続ける彼の、真っ直ぐな視線が、そう言っているように見えた。
旅人、放浪者、さすらい人。

何かが俺と社会を不調和にしていく
前から少しずつ感じていた事なんだ
いつからかそれをささえきる
顔を持たない街の微笑み
少し疲れただけよって、君は身体すり寄せる。
抱きしめて　愛してる
抱きしめていたい、それだけなのに。
（「核（CORE）」）

たしかにステージの上の彼は以前とは変わっていた。やみくもに自分の中のもどかしさを発散している若さとは違うものを漂わせていた。客席と彼との間に、それまでの共有感とは違うものがあった。深みと静けさ。そして両者感、10代の走り続ける尾崎は、そこにはいなかった。代わりに、立ち尽くすことを知った20代の尾崎がいた。
9月1日発売のアルバムタイトルは「街路樹」だった。
立ち尽くしたまま、人々の通り過ぎる情景をながめている。声もかけられず、手をさしのべもせず、ただ、立ったままながめている。"街路樹"のやさしさと悲しみ。ステージの上の"旅人"は、そうやって旅をしてきたのだろうと思った。

＊

――自分だけが傷ついていると思っていた。
彼は、数少ないMCの中で、そう言った。
そして、三度目のアンコールで、生ギター一本で"僕が僕であるために"と歌った。
誇らし気なフィナーレだった。
一点の曇りもないフィナーレだった。
一生に一度しかない、そんな清々しさを感じさせていた。

――もう秋か。
それにしても何故、永遠の太陽を惜しむのか。俺たちはきよらかな光の発見に心ざす身ではないのか――季節の上に死滅する人々からは遠く離れて。

ランボーの「地獄の季節」の中の「別れ」という詩だ。
スタンドからは、ステージの上の尾崎の表情までは、見えなかった。でも、フィナーレの尾崎は、きっと、そんな眼をしていたのではないかという気がする。そう、きよらかな光の発見に心ざす者の眼に。
言葉には二通りあるのかもしれない。
ひとつは、季節とともに死んでしまう歌だ。そして、もうひとつは、季節の上に死んでしまう歌たちとは、遠く離れたところにある歌だ。尾崎の作ろうとしている歌がどちらにあるか、もう説明の必要もないだろう。

尾崎豊の[illegible]年。
来年以降、彼には、当分予定はないのだそうだ。レコードを作るのか、ステージに立つのか、今は白紙の状態なのだという。
彼は、また、旅に出たのだろう。
尾崎も、尾崎の歌を支えに自分の出発点にしている人たちも、それぞれ、自分の旅を続けていく。
23才の尾崎は、どんな旅をしていくのだろうと思う。26才になったランボーが、アフリカの大地に渡ったように、彼も、どこか、新天地を見つけるのかもしれない。
そして、世間が忘れかけてきた頃に、どこからか、秋の風を連れて、新しい季節の光とともに姿をみせるのかもしれない。
詩集「地獄の季節」の「別れ」には、こんな一節がある。

さて、行くのだ。
だが、友の手など握る術はない。
救いをどこに求めよう。
如何にも、新しい時というものは、
何はともあれ、厳しいものだ。

CORE
YUTAKA OZAKI

1988年から、1989年。1988の中で、とりあえず、1989のＯＺＡＫＩの"たより"を、あるいは、"風の噂"をきくことはなかった。だけど、彼の存在を日常の中の一部として自然にとらえていると、彼は、ひょっこりと笑顔であらわれたりする。

CORE
YUTAKA OZAKI

1988 BARBEE BOYS

PHOTO● NAOTO OHKAWA

KONTA

ニューアルバム、レコーディング。正に名盤。

①とりたててニュースがない

のっけから申し訳けないが、10大ニュースという名に値するような目さましい、あっと驚くような出来事はなかったのだ。

大体が、俺の周辺で起きたことで大きな事は、全て本誌上に暴露されてしまっている。

大病をしたわけでなし、怪我をしたわけでもない。まして危機一髪で、命を永らえたというような事があるわけがない。

無事息災。これに勝るニュースがあろうか……というのは、亡くなった祖父の口癖だった。

②15年ぶりに歯医者さんに行く

別にムシバがなかったのではないのだが、放置しておいて痛みにみまわれやむなく、というのでもない。かぶせていた歯がとれてしまって、3年放っておいたら穴に食べ物が詰まって不快になるようになったのだ。

ところが、その1本だけで済むのかと思いきや、他に治療可能な歯を見つけた、血も涙もない職業熱心な歯医者さんが、2週間に渡って俺を苦しめた。おかげで健康な歯を取り戻せて感謝している。

もしかすると、よく話のネタにされる俺の片眉あがりは、片一方の虫歯のせいだったのではないかとも思うのだが、6ヶ月たった今も、例の片上り眼が治るきざしはない。

③映画に出る

夏あたりの本誌に、華々しく書かれていたので、詳しくはそちらを参照されたい。

休みの間の片手間、と思っていたのだが、とんでもない。9 to 5ということは、朝の9時から、朝の5時(〆)まで仕事をしていた。

さいわい完成した作品は、併映作品のおかげで、興業的には成功したらしい。こっちが併映だって？　ごもっとも。

おかげで、2ヶ月間とあともう少し、どこに行っても、うたうたい扱いされず、タレントさんのように待遇されるのにはショックとは言わないまでも、とまどわされたが……。

④ユニット"RADIO K"のこと

これも同時期の本誌に詳しく載っているので、読んで分からなかったら聞いて欲しい。

バービーボーイズというのを考えないで、古い友達2人、イマサと能勢寛とで好き放題にやれてとても楽しかったのだ。

この時期、役者ごっこで音楽から遠ざかっていた俺にとって、音楽とは、なとどふりかぶった考えをもたらしてくれた、とても有意義なユニットである。

⑤夏のツアー

代々木競技場でやったコンサートの全国版と、数ヶ所のイベント。

俺としては、浅間でやったイベントと、甲子園でのコンサートが印象深い。

⑥ニューアルバム、レコーディング

ほんとは全部N.Y.でやりたかった.なんてもう言う必要がない。それぐらい、いいものが出来たのだ。曲がよくて、演奏がよくて、サンウドがいいなら、とりあえず文句はない。名盤とは、こういうものを言うのではないだろうか。

なに,プロモーションに聞こえるって？　いいじゃないか、ウソはないもの。

そうそうN.Y.にも1週間ほど行ってきた。初めて行く所はそういうのが多いのだが、楽しむほどではなかったけれど、面白そうな所だよ。

⑦友だちとの再会

思わぬところで、古い友だちと10年ぶりに再会するとゆうような事が続出した。もちろん、N.Y.に行って能勢寛と予想どおり会えたこともある。映画や、コマーシャルのおかげでもあろう。

嬉しかったのは、どの友だちとも思い出話をする必要もなく、今やってること、これからやりたい事で盛り上がったことだ。

おかげで、しばらくなりをひそめていたのだが、酔っぱらうことも多くなったのだが。

⑧あっという間に1年が過ぎる

これがニュースか？　と思うんだろうな。この1年に起こったできことは、どれもひとつ、ひとつ終わったことではないのだ。

事件というのが、原因で始まって、結果で終わるのなら、そんなニュースは、この1年ないに等しい。そのことは、とても喜ばしいことだと思うのだが。

⑨あと2つ、今年中に何かが起きる！

たぶん、10大ニュースに値するできことが年内中にあることになっている。まだ起きてないので書けない。

⑩……………………

……………………………………………

1988 BARBEE BOYS

1988
BARBEE BOYS

BB 1988

ENRIQUE

最初に認めてくれた関西のファンありがとう。

①1月11、12日、大阪府立体育館

バービー初の体育館concert。今年の大目標Big Eggへの確かな足がかりになった。俺達を最初に認めてくれた関西のファンのみんなのノリノリの歓声どうもありがとう。

②3月18日、東京水産大学退学

いやいや、とうとう退学ということになってしまった。バービー加入以来、休学、復学を繰り返しつつ、この4年間（通算6年間）にとった単位はわずかに2つ!! みごとというか、おそまつというか……。

とにかく、バービーにかけた青春が、勉学をブッとばした記念日として一生、心に残ることでしょう。

③あこがれのBAND、来日ラッシュ

今年は、いろんなコンサートに行った。ピンク・フロイドに始まって、イエス、ロン・ウッド、ミック・ジャガー、キッス、エアロスミス……。

といつもこいつも円高を利用して銭もうけに来やがって!! まー、俺としては、学生の頃に戻って楽しくROCKさせていただけたので文句は言えないけど……。

④FM大阪「負けるもんか」

俺とコイソが番組を持った!! これだけでも充分笑えるのに、'89年も番組続行が決定!! ホントに申し訳ない。大阪以外のヤツラにも、是非、この笑いを分けてやりたい。（と、言っても番組は真剣にやってるんだぜ）

⑤5月5日、ヒルビリーバップス日比谷野音

アンコールに友情出演させてもらったうえに、翌日からの温泉旅行まで同行させてもらった。ヒリビリーのメンバーに加えてレビッシュのマグミと俺。思い出すだけでも笑ってしまう楽しい旅行だった。裸のつき合いってのはいいもんですぜ。

⑥5月9日、歯医者さん

10何年振りに虫歯になっちまった。これを語らずして、今年の俺は語れない。痛かった。

⑦大沢誉志幸4 night stand

バービー以外のツアーに参加したというだけでも実に有意義だった。わずか4回公演だったんだけど、この時の盛り上がりは、とても文章では伝えきれやしない。よかった、よかった。大沢さんThank youでした。また、いつでも俺をよんでくれ〜い。

⑧10月8日、結婚式

楽しかった。こんなに楽しいのなら、またやってみたい。

レベッカのみんな、ザ・レッズのみんな、喜多めぐみちゃん、宮原学君、Teenage Newsのみんな、それからバービーのみんな、来てくれた人全員どうもありがとう。

⑨レコーディング

なんといっても、（忌野）清志郎さんにバイオリン・ベースを借りてしまったのが印象に残ってる。

ちなみに、エンリケ作曲、というヤツがそうなので、レコードを買ったら是非チェックしてみてくれ。

しかし、今回のレコーディングは、それだけではない。自分自身、成長しちまったかな、なんて思えるほど強力な2ヶ月間を過ごしてしまった。

⑩あえて書かなかったけど、New YorkのTDや、代々木、Big egg、甲子園……

実にデッカイ1年を過ごせたと思う。'89年も野望に燃えつつガンバリたい。

ファンのみんな、楽しい思い出作り、来年もよろしく!!

1988 BARBEE BOYS

1988
BARBEE
BOYS
1988

KYOKO

夏のイベントは、コンサート プラスリゾート感覚。

①BARBEE BOYS ON THE RUN TOUR終了

はじめての70本近いCONSERT TOURを体験。百聞は一見にしかず、でした。ハードだった分、精神的にも、肉体的にも充実。そして、生の人の前でLIVEできることの貴重さを体感。

みんな、どうもありがとうね。

②引っ越しした

雨の日に、フッと思いついて、3週間巣づくりばかり。カーテン縫いながらうたた寝したり、受験生型引っ越しでありました。

③虫歯を全部治療した

引っ越しに体力、知力を費し、弱りはじめたころ、奥歯に激痛が走り、こらえきれず歯医者さんへかけこんだ。今までの私なら、本命の歯の治療が終ったら、2度と足を運ばないのに、今回は、なんと虫歯を全滅させました。これだけは自分をほめてあげたいね。

④汐留PITの楽日"杏子のSuper Gang"ラジオライブを、the BANKERSと共に演った

ゲストは太平太一（The Red's）、玖保キリコ、白石公子、中田尚子などなど……。TALKあり、LIVE(絹のくつ下、マイムマイムのかえ歌バージョン）ありの、お祭り騒ぎであったが、気持ちよかった！ ラジオのリスナーとの初対面。おなじみのペンネームと顔を一致させて、おもしろさも2倍、2倍……。

⑤BARBEE BOYS STARS ON SPECIAL TOURをやった

夏のイベントは、コンサートプラスリゾートも楽しんで大満足。旅館で、the Red'sのフーさんと一緒の部屋になった時なんぞは、修学旅行のように盛り上がった。

⑥電話嫌いがなおりつつある

独り暮し、any time OKのところだけ、電話がかけられるようになった。留守電にメッセージを入れるのが得意。

⑦"Dance to X'mas"に参加した

はじめて自分で作詩、作曲（こちらは、荒木真樹彦くんに手伝ってもらった）し、カタチになった。

曲つくりの段階から、アレンジ、コーラス、etcにいるまで、一緒につき合ってくれた荒木くん、きっかけを下さった大沢誉志幸さんに感謝します。

⑧5th Album "V5" Recording終了

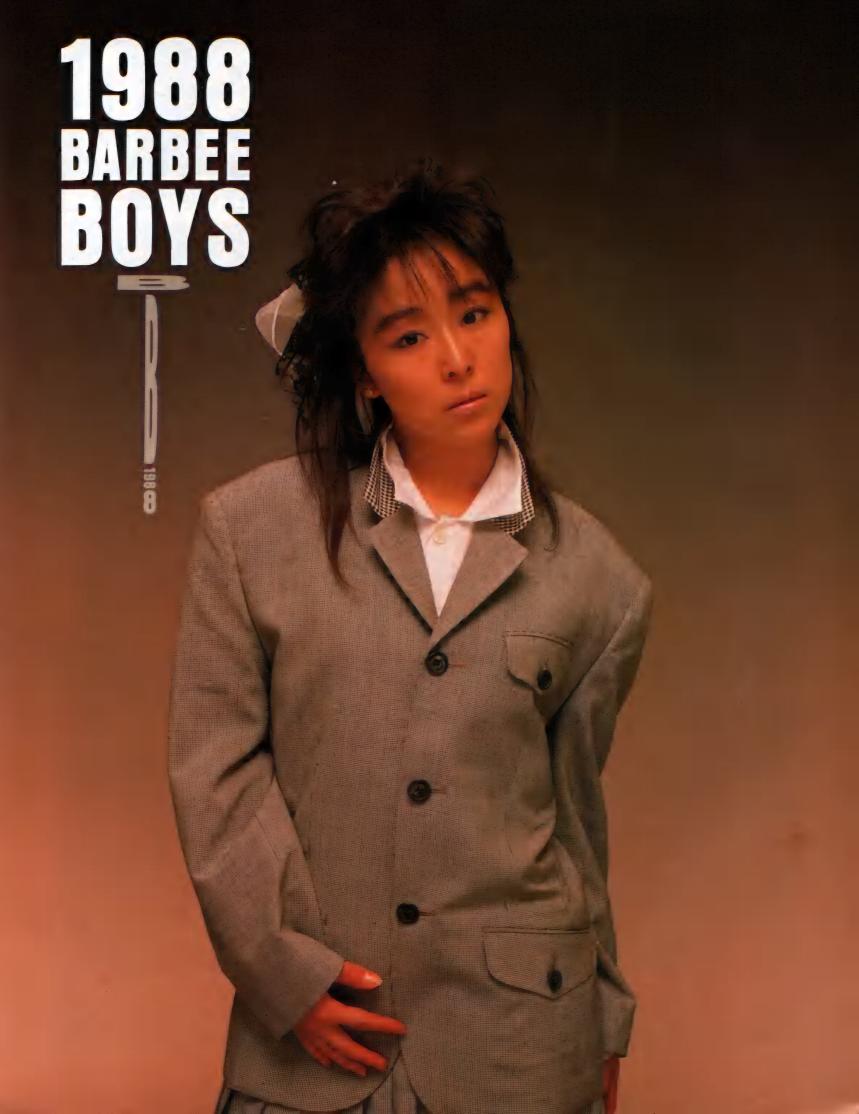
とにかく早くみんなに聴いて欲しいアルバムです。楽しみに待っててね。

⑨the BLACK & WHITE SHOW CONCERT TOURがはじまった

5人、ひとりひとりがよーく見えるセットにしました。手ごたえは十分。みんなのところへもおじゃまいたします。

⑩あと1週間あるので……特大級の何か良いコト……………………………………………。

1988 BARBEE BOYS

1988
BARBEE
BOYS
B
B
1988

KOISO

飛行機に乗ったら、そこにニューヨークがあった。

①BAND STAND
　毎年恒例です。ミュージシャンとして、LIVEをして年を越せるというのは幸せな事だと思います。
②Listen Tour終了
　長かったけど、短かかった。
③代々木体育館LIVE
　とりあえず、頂上に着いたかな。
④エンリケとラジオを始めた
　勉強させて頂いてます。
⑤長期休暇
　母艦を飛びたったゼロ戦は、ジェット戦闘機になって帰って来て欲しい。
⑥夏のTour
　でかい所でやるもよし。ある意味でお祭り。
⑦New Albumレコーディング
　１年振りのレコーディング。このレコードは純粋に多くの人に聞いてもらいたい。
⑧マネージャーの青ちゃんと、エンリケの結婚式
　レコーディングで忙しい最中だったけど、お陰様で気分転換になりました。それに、楽しいセッションもあったし……。
⑨ニューヨーク
　12時間飛行機に乗ったらニューヨークがあった。
⑩The Black & White showツアー開始
　今迄、会えた人達、元気ですか？　そして これから会う人達、期待しててね。

1988 BARBEE BOYS

1988 BARBEE BOYS

IMASA

業界人向けの非売品カセットをレコーディング。

①“BLACK LIST”の発売

最初の頃の作品に対するこだわりに落としまえをつけたかったが為のRemix オムニバス盤“BLACK LIST”が無事発売されたのは、非常にありがたいことだったし、多くの人が気に入ってくれたのも、とってもうれしいことだと思うわけだな。

②VIDEO“FAKE BAND”制作

ビデオ版、“BLACK LIST”的なコンセプトを持ってのそんたビデオクリップ集“FAKE BAND”は、インサート・ショットになかなか深いものがあるといま見ても思える作品なわけだが、実は収録されなかった約5分間のアルバム“BLACK LIST”用のプロモクリップが存在していて（TVでON AIRされたかも）、これが一番過激な思想を含んでいたりするのだね。

③PINK FLOYD公演

酔えた。

④代々木でのLIVE＆その後の休暇

代々木でのLIVEを終えて、1ヶ月のオフを勝ち取り、N.Y.とLONDONに音楽おのぼりさんしに行ったことで、いろんな要素が重なって、いろんなことをすることになったのだった。

⑤“JUST TWO OF US”の制作と発売

N.Y.で昔のギターパートナー、能勢寛に再会して、コーディネーターやプロデュースをやっているHiroと知りあったり、日本でコンタが映画にかかわったりといったことが重なり合って、RADIO Kというユニットが誕生したわけだね。

そのRADIO KとBARBEEを“いまみち”というキーワードでくくって出来たのが、アルバム“JUST TWO OF US”というサントラ盤だったのかもしれない。

⑥“警告どおり……”Session

夏のツアーで一緒にまわったRed'sの皆んなと、ほぼ一発のノリで佐野氏の作品にギターで参加したのは、まわりの人がさわいでいたメッセージがどうのこうのというのをまったく離れたところで、とってもうれしい経験だったと思う俺ではあった。

⑦“PICASO for Lovers Vol.2” Session

これは業界人向けの非売品カセットで、偽名で参加したのだけれど、これほど楽しく参加できたことがほこらしくて、なおかつ、出来上がりもとってもうれしいSessionというのは、そうめったには無いような気がする。……なんて書くと慌てて発売したりして……あはは……。

⑧√5の制作

いろいろ他でもこれから話す機会があると思うので、ここでは詳しく書かないけれど、BARBEEにとっての重大さと、サイズの松浦君が超多忙なスケジュールを無視してまで本気で関わってくれたという事だけで、やっぱり重大ニュースだと思う。

彼が4曲で参加してくれたあとに、彼のやっていたサントラ盤の仕事に参加できたことも、うれしみのひとつだったりもした。

⑨My Collections

√5のTDでN.Y.に行った際、リッケンバッカーの'60年製12弦ギターと、ほぼ実物大の子トラのぬいぐるみと、本物のシマウマ一頭分の毛皮（？）で出来たカーペットを買った。

ギター以外の2点は、ほとんど今までで初めての偉大なるムダ遣いと言える。

⑩その他の落としたこと全部

はっきり言って、本当の重大ニュースは、なかなか公の場所では書けなかったりすることもあると思いたくなる俺ではあった。重大ニュースが10コも1年のうちにあったら、なかなかに白髪的な人生になる気がしてしまう。小さなことにも感動できる自分でいれたらいいのだが。

うーん。'89年の目標ができたッ！

1988 BARBEE BOYS

1988
BARBEE
BOYS
B
B
1988

1988 BARBEE BOYS STAFF BIG 10 NEWS

●バービー・マネージャー　青沼隆郎氏

①何はともあれ、20代最後にしてひとつのケジメ（結婚）をつけました。

②お祝い続きで、エンリケが結婚した。初めて結婚式の司会を経験。

③70本という、ON THE RUN TOUR終了。長いようで、あっという間の出来事だった。

④結婚にともない、世田谷区民から、埼玉県民になってしまった。

⑤コンタの映画出演といっしょに、自分も映画に出た。

⑥9月に結婚をしたのに、12月には妊娠5か月になっていた……。

⑦この業界で多い、海外での仕事の為、6月にはシンガポール、12月にはハワイ、とすっかりインターナショナルになってしまった。

⑧浦田健志という、来年デビューの新人のライブが、大盛況に行われた。

⑨ビッグエッグ、代々木、甲子園球場と、でかいところでのコンサートが無事終了。

⑩クリスマス、年末と、何か重大なニュースが起こることを期待して、ひとつは残しておきたい。

●キティサークル　西岡理沙女史

①8月22日、バービーがビッグエッグを超満員に！

②マネージャー青沼氏の結婚劇。

③バービー、CMに初出演！

④エンリケのHAPPY WEDDING

⑤バービー海外進出！ ハワイNBCスタジアムでREOスピードワゴンと共演。

⑥メンバーの個人活動が盛んでありました。

⑦コンタに〝編集〟のダイゴ味を教えてもらった。

⑧私事ですが、10年ぶりにチープ・トリックが観れてシアワセ！

⑨これまた私事ですが、ナント！ 7か月もかけて引っ越しをしてしまった……。

⑩夏のツアーの間、バービーチームと同行していたThe Red'sチームとの間でトランプがブームに！

●写真家　大川直人氏

①事務所設立。

②バービーボーイズ「BLACK LIST」の内ジャケットに登場したが、今ひとつ評判呼ばず。（しかも、デビュー・アルバ

一見、華やかそうに見えるロック・シーン。そんな中で、バービーボーイズを、日夜、陰となり、日向となって、支えてくれるスタッフ4人に、バービーをとりまく10大ニュースをあげてもらった………。

ムからずっーと出てるのに……)
③今年もバービーのコンサートを1回も観なかった。(実は〝渋公〟以来、観てないのだ)
④スーパー・オーバー・ドライブ(エフェクター)購入。練習に励んでいる。イマミチ君にそのことを言ったらディレイを買うといいですよ、と言われたので、購入予定。やっぱりミュージシャンがいちばんいいな。
⑤外国帰りに熱を出す。それくらいのオーバー・ワークだった。(何の撮影かは敢えて言わない)外国はキライ。日本はしみじみいい。
⑥奥さんとは、相変わらず仲がいい。
⑦車も相変わらず調子がいい。
⑧早くスキーに行きたい。
⑨メガネを変えた。
⑩アシスタントの尾崎君は、相変わらず無口だ。

●EPICソニー販促部　西岡明芳氏

①NACK FIVEと、エピックの24時間FM特番で、コンタと1時間の〝ミッドナイト　コンタ　ショウ〟を制作。大ウケ。
②バービーのセレクションアルバム〝BLACK LIST〟のタイトルを、突然のひらめきで命名! とくいになる。
③杏子の誕生日に、紫の下着をプレゼント。その異様さに、本人を含めあきれられる。あまりウケず……。
④一粒種の遼平(3才4ヵ月)君、バービーのリハーサルへ連れていったところ、イマサに会うなり泣きだし、〝もう帰ろう〟を連発!
⑤甲子園、東京ドームの公演前に、野球の約束をコイソとするが、コイソ忙しくて、キャチボールもできず。
⑥西岡班(高橋、篠満の両美人プロモーター)を含むTV宣伝軍団)、EPICの売り上げに大いに貢献!
⑦徳永英明氏出演のTV〝徹子の部屋〟単行本〝未完成〟にて、デビュー前の話の中に、西岡…実名で登場。本人感動。
⑧CBSソニー・グループの野球チーム「ドナルドダック」の捕手として、打率4割、盗塁阻止率も4割をマーク。最高の年。
⑨去年ぐらいからたまっていた、ストレスの解消法を自力で発見。
⑩来年に向けて胸がはりさけるようなトキメク出逢いを体験する。(それは鈴木祥子、イエッツ、HIROKの3アーティスト)

ホントに、ホントに忙しいんですね、この人達は。それに加えて，特に今年は、５人が、５人、それぞれに色々あったみたいですね。１年なんて、あっという間。それでなくても、音楽シーンは時間の流れが早い。そんな中にあって、バービーボーイズが、トップバンドであり続けられるっていうのは、やっぱり彼等が、自分の足許をシッカリ見つめて、確実にステップアップを実行しているからなんですね。1989年のバービーボーイズも、きっと僕達を楽しませてくれるに違いない!! GO GO 1989!!

1988 BARBEE BOYS

SENRI OE '88 [1234]

●『1234』という傑作アルバムが世に出た。このアルバムを生み出した大江千里に、パチ▶パチでは今年も、毎月インタビューを行なってきた。創刊以来、ひと月たりとも書かさずに続いている千里くんの取材。ひと月たりとも力を抜くことなく、インタビューのたびに太い言葉を吐いてくれる彼。時には〝こんなふうに自分の一面を知ってもらえたら…〟と企画から参加してくれることもあった。真剣に向かい合った'88年の記録を、今年もパチ▶パチは掲載します。『1234』を幹に、さまざまな方面に枝を拡げ葉を繁らせてきたように見えるこの1年をふり返って。まず『1234』をきくことから始めたい。それから彼の吐いた言葉たちを拾い集めてみよう。

撮影●大川直人　文●宇都宮美穂　スタイリング●阿部いく子

衣装協力●エレディーキャリーニ原宿店　☎(03)[illegible]4047

M A Y. ▶ '88

MESSAGE

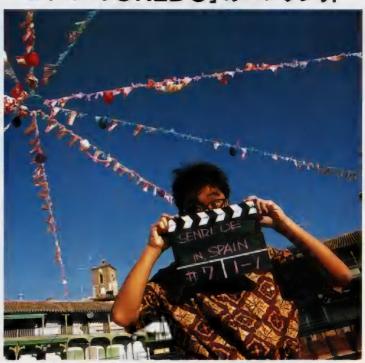
コンサート・ドキュメント

'87年９月１日から'88年２月７日までの"OLMPIC TORCH" ツアー。エッシャーのだまし絵をヒントに作られたステージセットの上で、ほんの少しのタイミングの狂いも許されない緊張感がある、それでいて華やかで思いきり楽しいライブが繰り広げられる。「緊張はするよ。ただ自分から信じるようになったの。人もセットも運もすべてを。信じられるとね、微妙なことまで上手くいく。目もすごいクリアに見えるし。だけど逆に体調や精神状態によってそうしようと無理に思っていると、なかなかみんなの顔が見えなかったりする」「飛び込むしかないのなら、いちばんカッコ良く、いちばん気持ちよく飛び込んでやろう」

DATE▶'88・1・13　PLACE▶札幌厚生年金会館
PHOTO▶NAOTO OHKAWA　COPY▶MIHO UTSUNOMIYA

F E B. ▶ '88

TOLEDO

ビデオ「TOREDO」のパンフレット

スペインを舞台に撮影された千里くんのビデオ、「TOLEDO」。夢と冒険をテーマとしたミュージック・ストーリー・ビデオ。プロデューサー兼主演男優の言葉。「僕は演技するとダメなんです。演技じゃない部分が一番いい。とにかく自然に、Be Natural。そして今年のモットーである、明るく強くたくましく……それが画面に出ればと思っています。でも、それって努力したからって出てくるもんじゃないですから。街と自分が一番接点があって、一緒に呼吸している感じが出ればいいかな。だから細かいとりきめよりも、その場の雰囲気を重視しながらストーリーに忠実に進めていきました」一枚の写真との出会いから作られたビデオだ。

DATE▶'87・12・4　PLACE▶EPIC・SONY
PHOTO▶SHINYA INOUE　COPY▶AKIKO ADACHI

取材のテーマは〝一年を振り返って〟だった。この時期になると必ず出てくるアレである。私がそういうインタビューを実はあんまりやりたくないなぁと思っていたせいかもしれない。そしてたまたま、その気分に千里君の波長があったのかもしれない。とにかく結果的に取材のテーマを外した内容のインタビューをしてしまった。加えてこれから読みすすんでもらう記事は、順当なインタビューにはなってない気もする。が、あえて手を加えたりしてキチンとしたまともな記事にするのを私は避けたい。粗野な会話だが、彼の一年を振り返るよりも、意味多い言葉がたくさん吐き出されているように思えるからだ。

――『1234』ってやっぱり千里君の本質みたいなものがすごく……

「出てますか?」

――うん……表われてる作品だと思う。そのへん、自分ではどう思ってるの?

「うーん……本質って言えるのかどうかは自分でもわかんないけど……ただストレートなアルバムですけどねぇ。メッキがないから、あんまり。そのぶんすごく気持ちを込めて歌えるときと、ちょっと歌うには力がいるな、少し重いときたいなっていうときと、「両極端」

――あ、それはわかる。

「ただ……あのアルバムを出したことで随分ふっ切れたことがたくさんあったし。もっとラクに書く曲もあっていいと思うし、もっととことん楽しむ曲も書きたいし。で、たとえば電車のドアが開いて、で、閉まって、そこに乗ってため息をついたっきり、なんかわかんないけどフーッとこう全身が熱くなるような、そういうちょっとしたことってあるじゃない。ちょっと歌になりにくいような。そういうのも、もっと克明に書いてみたいなって気持ちも初めて出てきたからね」

――じゃあ『1234』を出す前っていうのは全然気分が違ってた。

MAR. ▶ '88

OFF!

オフに千里くんが考えていたこと

"OLYMPIC TORCH" ツアーが終わり束の間のオフを過ごした千里くんが、オフの間に考えたことを言葉にしてもらった。「僕はポップス自体、音楽の究極の形だと思っているから」「忙しくって忙しくって、自分が見えない程に忙しい時って、意外と神経は休まってたりする。逆にバッと時間があくと、一体何をしたらいいのかわかんなくなる。やりたいことがないんじゃなくて、ありすぎてわかんなくなる。人間、欲張りじゃないと毎日がつまんないでしょ」「今は自分自身を見据えないと破る壁が見えない」「時間感覚もグシャグシャで、答も出ないまま普通の距離感を逸脱して右往左往暴れ回っているところ」

DATE▶'88・3・8　PLACE▶ART CENTER
PHOTO▶HAOTO OHKAWA　COPY▶AKIKO ADACHI

APR. ▶ '88

OH! SURPRISE

千里くんの"意外すぎる"エピソード

誰もが抱いている千里くんのイメージ。けれど千里くんには隠されたこんな驚くべき部分がある。意外なエピソードを暴露(?)してしまった。うっすら無精ひげに、犬（湯川クロベエくん）を抱いての撮影もこれまでには見られなかった千里くんの姿だった。「喉もすごく強くなったし、声も太くなったよ。やっぱり飲んで騒ぐ時は思いっきり騒ぐ。歌う時は歌う。笑う時は笑う。ストレートに生きたいよね。山口のふぐ屋さんで飲んだヒレ酒、おいしかったあ」「体力つけようと、結構、各地で走ってましたよ。ただ、なんでもとことんやっちゃう性格だから。ブッツン切れて倒れちゃうこともある。(笑) 食べすぎ、飲みすぎ、マラソンしすぎ。」

DATE▶'88・2・17　PLACE▶代官山スタジオ
PHOTO▶NAOTO OHKAWA　COPY▶AKIKO ADACHI

「うん……あれを書くにいたってはツアー先でいろんなものを見たりして、あと自分の周りの友達のこととか、家族のこととか、自分の好きな人とか、自分自身のことを意外とストレートに書いてないし、自分の街のこと環境のことをもっと克明に書きたいって思ったんだよね。で、それを書き始めて……普段だと何ケ所か関所があって、箱根の山を何度か超えるんだけど、そういう意味での関所はあんまりなかった。ダム全開って感じで。でもまだまだ関所はあるんだよね。見えないところで。だからそういうところはどんどん撤回して行きたい……ただ、やっぱり半年間もかかったことへの若干の反省もある」

――え、なんで？

「ンー……オレはもっと作れるし、そんなに半年間も……まぁ、スタジオの状況とか、あとプライベートなこととかかなりあったんで時間かかっちゃったんですね」

――ふーん。でもその半年間の中に、そのいろいろな状況が含まれてこそ、ああいう作品ができたんじゃないの？

「ああ……それはそう、かな⁉ 聞いてる人がね、そういうふうにとってくれるとまぁ」

――ていうか、もしもあのアルバムが「たった2ケ月間でできたんです」って言ったら、そっちの方がヘンだよね。

「ああ、そっかな……あれはね、やっぱり感情の趣くままに書いたから、だから自分でも好き嫌いがハッキリする。すげぇ聞かないときは聞かないし。……自分の書いた曲なのに不思議なことに、ま、当然か。(笑) 自分の見

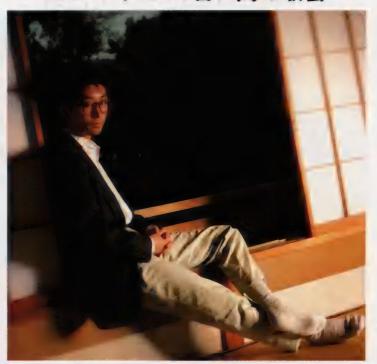
JULY ▶ '88

GLORY DAYS

ニュー・シングルのインタビュー

アルバムに先がけてリリースされたシングル、「GLORY　DAYS」。この後にリリースされるアルバム『１２３４』の名刺代りの曲だという。「ツアーの中で、体を使ってやってく中で確実に立証されたものがあるんですよ。そういった、自分自身の作品に対する自信っていう。……今度のアルバム『１２３４』では、もっと太い確固としたものを作りたいなと思ってたんです。その名刺代りのシングルがこの曲なんです」「音楽を初めとした情報とかが、本当に氾濫してたりする中で、僕自身が強く存在してる歌っていうか、大きくあるっていう、ね」「自分は自分だって胸をはって歩く時の歩幅みたいなのがわかるような作品にしたかった」

DATE▶'88・5・8　PLACE▶昭和記念公園
PHOTO▶ATSUSHI UEDA　COPY▶HIDEFUMI SAGAWA

JUNE ▶ '88

レコーディングの合い間の歌会

レコーディングの合い間の春の１日。千里くんを料亭に招いての歌会。静かな時と空気の中で、千里くんが詠んだ歌「畳の目、指で辿れば　リズムもしっくり」「畳から　臭い立つほど　ビートかな」――「作り手である僕の中で、最終的に"自分"が出てくるものってすごく日本人的な部分なんだよそね……すごく日本人的なフレーズやリズムがうまく出せるのが理想」「もう一度、決意新たにね、大江千里道を貫通しようと思ってます」「ピッと張る　この空気感　逃すものか」「トーチから　刻んだ想い　叶えるでぇ」「幾度の新芽のごとく　大江千里」「槍ほど　太い魂ここにあり」千里くんの気持ちの充実感が伝わってくるような歌ばかりだった。

DATE▶'88・4・11　PLACE▶愛宕山　醍醐
PHOTO▶FUMIO NAKAGAWA　COPY▶AKIKO ADACHI

たくない面もあるわけだし……見せつけられても否定したい部分っていうのも出てるからさ。普通ならいい部分ばっかり切り取ってアルバムにするじゃない。そういう保護本能みたいなものがあまり働かないうちに作っていったから。ただそれがだんだんカタチになって、露わになってくるとね、複雑な感情も自分の中であったけど。誰だって生きてくうちにいつの間にか恥を覚え、体裁を覚え、常識を覚え……そのまま何年間も過ぎちゃうよね。そこでいくら「固まりたくない」とか「壊したい」とか言ってもなかなか崩れないんだよね、だって自分で自分のこと崩せるわけないじゃん、ある意味じゃ。だからよっぽど文明開化の鐘が鳴るようなことを自分で誇示していかないと自分がダメになっちゃうし、守りになっちゃう」

――そのへんから察すると、やっぱり『１２３４』はすごく私的なアルバムだよね。

「そうです」

――そのアルバムが世の中に出してみるとすごく評価が高かったんだけど、そのことについては？なんか、大江千里は次にどうするんだろう、ここで答えを出してしまったんじゃないか、みたいな見方をされたでしょ。

「それはない。クオリティーが高いとか、それは本人も心酔しきってアピールして喋りまくったんだけど、ちょっと時間がたつとね"クオリティーがだんだん下がってきちゃうんだ、自分の中で。もっと何か違うね……さっきも言ってた、もっとホッとするようなね、言葉にもなんないような瞬間とか、好きなのか嫌いなのかハッキリしろよ、って、そんなわかんない感情っていうのがあるとすれば、そこにメスを入れて書きたいとかさ、やっぱり欲は出てくるよ」

――そういうのが新曲の「これから」に出てる？

「ンー……どう思った？」

――私はだから、その曖昧な気持ちとか、わ

S E P. ▸ '88

On!

活動まっ只中！

『１２３４』がリリースされたころ、千里くんの身辺はあわただしく、テレビで雑誌で見かける機会が多くなった。「ファンやスタッフを含めて、僕に関わってくれているたくさんの人たちへの御礼じゃないけれど、ぼくの気持ちを伝えたくて…「広告を出す時は、これまでは、コピーまでこだわっていたんだすけど今回はアルバムを作って、思い切り可能性が広がった気がするので、『モノクロでいきたい』『作為なしに正面きっていきたい』と基本的なところを言っただけ」「スピリットは変わらないけど、ぼくは永遠に変化し続けていきたい。いつも自分を壊して作って、ということをくりかえしていたい」取材日、撮影スタジオで髪を切りました。

DATE▶'88·7·13　PLACE▶ART CENTER
PHOTO▶ATSUSHI UEDA　COPY▶MASAKAZU KITANAKA

A U G. ▸ '88

1234

『１２３４』と『納涼千里天国』

名作アルバム、『１２３４』が完成した。「魂がロックン・ロールしてること。自分の歩幅で歩けるテンポをしていること。静かなデモクラシーがあること。せつないくらいユーモアがあること。それが僕なりの『１２３４』。今の僕の等身大が表現できること。僕が僕に飽きないオール・マンネリズム。とっても新鮮でいつもいられる「１２３４、１２３４とてもフレッシュな、ね」『１２３４』リリースの翌日は、野外のイベント『納涼千里天国』ライブの日だった。「キメがいくら細かくても、僕は日本一シンプルなことをやってると思ってるんだ。……僕がシンプルだと思うのは……直に物事が見てる側にどれだけストレートに伝わるかだと思うんだ」

DATE▶'88·6·9　PLACE▶浅間高原
PHOTO▶SHINYA INOUE　COPY▶HIDEFUMI SAGAWA

かんない感情、みたいのが出てると思ったし……うん、好きでした。

「僕も好きだ。（笑）あの、〝君と出会えてよかった〟って思える自分は大事だし、失くしたくないけど、出会いたくなかったたって思うこともあるわけよ。それはなんでもそうだと思うんだけど、ただその部分にメスを入れるのはちょっと反逆行為なんじゃないかとも思ってね。だけどそれは僕のすごく好きなアーチスト……カメラマンだったり、絵描きだったり、ボーカリストだったり……その人達ってのは両方あるんだよね。決してアートに走りすぎて「何だこりゃ!!」っていうんじゃないんだよ。「えっ!!」ていう事と、その事が持ってる明かり……元気に向かう窓口みたいなのと両方を持ってるんだよね」

——千里君て……結構、無防備かも。

「うん、そりゃそうだ」

——自分に対してだよ？

「えっ？　イメージとか？」

——ううん。そういうことじゃなくて、何かやりたいことをみつけたときとかの姿勢が。頑張ってやっちゃったら、やっちゃったぶん痛いこともいっぱいあるじゃない。そういうのをあんまり躊躇しないでしょ。

「そんなことないよ、躊躇してるよ」

——そうかなぁ。

「あれ？『1234』を聞いてそう思ったの？」

——いや、ずっとそう思ってんの。

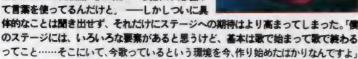
「ずっと——!?」（笑）

——うん。それで今、ドラマに出てるじゃない、それもそう思った。

SENRI '88 OE [1234]

N O V. ▸ '88

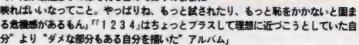
コンサート・リハーサル合宿訪問

『1 2 3 4』ツアーのリハーサルのため合宿中の千里くんを小渕沢にたずねた。「合宿では一緒にいることでバンドの士気を上げるのが目的」だという。半年ぶりにHIPSやFresh Sistersに囲まれて、これから始まるツアーの話をしてくれた千里くん。「"ハックルベリー・フィンの冒険"かな。"ナルニア国物語"とかね。……民族の大移動って言葉を使ってるんだけど」——しかしついに具体的なことは聞き出せず、それだけにステージへの期待はより高まってしまった。「僕のステージには、いろいろな要素があると思うけど、基本は歌で始まって歌で終わるってこと……そこにいて、今歌っているという環境を今、作り始めたばかりなんですよ」

DATE▶'88·9·5 PLACE▶STUDIO PEOPLE
PHOTO▶ATSUSHI UEDA COPY▶HIDEFUMI SAGAWA

O C T. ▸ '88

LΔTE SUMMER'88

'88年の夏の終わり、等身大の千里くん

夏のある日、28歳のほんの少し手前の千里くんを取材。『1 2 3 4』をリリースして、さまざまな反応が返ってきたころの彼の言葉。「正直に、リラックスして言葉を出すことっていうのを心掛けて最近は作ってるかな」「人間って、弱いというか、頑なというかさ。自分の唯一無二さばかりが表に立っちゃって硬直状態で人に映っちゃったりする。で、俺が最近思うのはそれも含めてありのままに映ればいいなってこと。やっぱりね、もっと試されたり、もっと恥をかかないと固まる危機感があるもん」「『1 2 3 4』はちょっとプラスして理想に近づこうとしていた自分"より"ダメな部分もある自分を描いた"アルバム」

DATE▶'88·8·13 PLACE▶AOYAMA STUDIO
PHOTO▶ATSUSHI UEDA COPY▶MIHO UTSUNOMIYA

「あぁ。フジTVの、よりによってあの枠のドラマに出て(笑)。たとえばちょっと外側にいる人が見たら"あれ、この間ああいう感じだと思ったら、全然違うんだね"っていうふうにとるんじゃないか、みたいなこと?」

——うーん……それもちょっとあるかもしれないけど、私が思うのはたとえばロック・ミュージシャンの人が「オレはロックだぜ」って言って、年中ツアーでTVには出ないって感じってあるじゃない。それって表面的にはロック的態度ってことになるのかもしれないけど、裏返して見るとすごい保守だよね!?

「保守、保守」

——で、千里君のやってることは、裏返してみれば過激なことだし、危険性も伴うことだと思うのね? そういうところが見えて無防備に思えるし、なんか危いなぁっていう。

「そうか。……で、また僕の音楽っていうのはロックって呼ばれんのか、ポップスって呼ばれんのか知らないけども、まぁジャンル的にはこういう雑誌に出たり、活動っていう意味じゃ日本のロックのカテゴリーに近い。だけどロックってホントはすごく過激なさ、収まりきらないものだったのが今はやっぱりどっか保守的だよね。みんな、だってオレの周り見ても普通だもん、すごく。こういう発言は不適当かもしれないけど(笑)ちゃんとやるべきことやるもん、人間としての。だけどオレはそこで収まりきらないっていうか、そういうところで歌ができるんだとおもうしさ、無防備っていえば無防備なんだろうけど、しかたないよ」

——不安にならない?

「あの……オレは他人(ヒト)が10年でできることが20年かかってしまうわけよ。でもそのぶんさ、深く行っちゃってる部分もあるわけ。だからそこは……何もそこまでほじくらなくてもっていうところで傷ができたり……そこらへんで曲を作ることも多々あるよね。それでやっててどうなるかっていうのは本能ではわか

JAN. ▸ '88

TALES WINTER

大江千里の冬物語

「年々歳を重ねるごとに冬が好きになってきた」という千里くんの冬物語。「僕の書く曲にクリスマスの曲が多いのは、そういう10代を取り戻さんがためのレクイエム(笑)のようなところがあって"もう一度クリスマス" なんてあれだけメジャーで、転調の応酬で、あのにぎやかさはやっぱり10代の切なさに対してだと思うよ。青春、青春していたところはなかったけれど、身体の中はちっとも静かじゃなくて、いろんな感情が渦巻いてた。……僕のツアーはなぜかいつも冬にあって、そういう十代の切なさに対してのクリスマスの曲を歌うたびに思うんだけど、人生の終始決算(笑)ていうのはどこでどういうふうにあってんのかなあってね」

DATE▶'88·11·5 PLACE▶DAIKANYAMA STUDIO
PHOTO▶NAOTO OHKAWA COPY▶MIHO UTSUNOMIYA

DEC. ▸ '88

千里が学校にやってきた!

千里くんの学園祭参加記

千里くんのある提案——普通のコンサートというカタチではなく、学園祭に飛び込み参加できれば——をもとにパチ▸パチで募集した「千里くんが訪問する学校」そして選ばれた1枚のハガキの学校、青森西高校へカラダひとつで、参加した。秘密のうちに進められていたはずの「千里くんの学校訪問」のはずだったが…… 学校に着いたとたん大パニックを引き起こしてしまった"訪問"。急きょ音楽室から体育館へとグランドピアノを運び出して実行されたコンサートだった。

「十代の頃の悔い、やり残したことっていうのが、今歌を書く時とかの力になっているって思うんです」「40、50、60、70になっても歌っていると思います」「青森西高サイコー」

DATE▶'88·10·16 PLACE▶青森西高校
PHOTO▶NAOTO OHKAWA COPY▶JIRO HAMADA

ってるのかもしれないけど……ただ逆にさ、世間が危いって気もするよ。波がすごく平均してそろいすぎてて危い気がするんだよね。それと同じで、自分の中でも平均的要素が上がってくる方に危険を感じたり、不安を感じたりする。そういうのって、ない?

——うーん……あんまり、ロックとかそういうのも一次元的すぎると危険だなぁとは思うよね。

「本を読むのもペーパーバックとして読むわけで、そこには何か立体的なものってなかなか見れないし、見る時間とかなくなっちゃうよね。オレだから一冊の本を十年間くらいかけて毎日1ページずつ読んでる人がいるとすれば会いたいね。そういう人と会いたいよ、あんまり友達いらないから。(笑)

僕の周りでも『もうロンドンに行ってしまいたい』とか『N.Y.に住居を構えたい』とか言う人がよくいるんだけど、(笑)僕も一時的にすごく外に出たかったんだよね。いろんなことを試したいっていうのあったし。だけどまだ日本で試せてないことがすごく自分にあって、なんかそれにいっぱい気づいたっていうか。あるんだよ、『もう消えてしまいたい』とか、『外に出たい』ってときも。でもそう思えば思うほど日本に居てしまう自分ていうのがあってね(笑)。ホントは3ケ月くらいポッと消えちゃうとカッコいいロックのストーリーなんだろうけど、ごうつくにごうつくに、東横線とか乗ってるわけよ」(笑)

千里が学校にやって来た'88

［体育館の千里くん体験］

●"その日""そのライブと千里くん"を体育館の床に座って体験した青森西高校の生徒たちから何通かの手紙が届きました。

▼千里くんが来るというウワサを聞いたのは、千里くんが来る2日前。隣の席の"新井美由紀（＝みみちゃん）"が、「いっちゃん（＝私）、あさってイイ人来るョ」と突然言い出したのです。私はそれをきいたとたん「あれ、もしかして千里くんのことかな」と思ったんです。私はパチ▼パチ見て、千里くんの企画のこと知ってましたから。その日を皮切りに千里くんのウワサは、たちまち学校内外に広く浅くひろまっていきました。そして当日、私をはじめ、まわりの人間は千里くんのことでもちきり。3時頃来ると聞いていた私は、のんびり廊下を歩いていました。この世には運のいい人と悪い人、まっぷたつに分かれるもんですねー。急に人の流れがあわただしく、恐ろしいほど変化していきました。なんせうちは女子高ですから、女の群れが一気に玄関へと進んでいき、まるで世紀末を迎えた地球のようでした…。私も負けまいと、"いのししどし"を生かして走った、走った。あっちこっちで「キャ〜〜〜!!」と黄色い声。私には何が起こったのかすぐ察知できました。千里くんです。千里くんが到着したのです。私は本能というのでしょうか？　千里くんを求めて、走りに走りました。……と、応接室ですか？　千里くんは隠れてしまったのです。先生も必死になって生徒を追い出します。一人の先生は千里くんを目の前にして「これは幻覚だっ！」と言いきりました。するとすかさず私たち、そうですねー、50人ほどいたでしょうか？　みんなは一気に幻覚を見たことになりますか？　いいえ、いいえこれは本物です。…中略…途中で千里くんが"体育教師の諏訪（＝すわっち）"の車で避難したと風の便りにききました。私たちは玄関で待つこと一時間半。すると校内放送が、「第一体育館に集まりなさい」、私たちはフェイントでは？　と思いながら向かいました…中略…　けれど待つこと20分。千里くんは来ました！　来たのです！　あの大川直人センセを引率して！　もお感動の嵐です。……中略…ありがとうございました。一生忘れません。心から感謝します。ありがとう。（市川亜紀子）

——長くて面白いお手紙をありがとう。

▼今回「千里くんの学校訪問」でたいへんお世話になりました。おかげで良い思い出作れました。たぶん高校生活のなかで、一番の思い出になると思います。たくさん来たハガキの中で私のハガキを選んでくださって本当に感謝しています。ありがとうございました。もう二度とこんなことはないと思います。私もよい経験になりました。これからもパチ▼パチ応援します。お仕事がんばってください。（小谷和香子）

——千里くんに選ばれたハガキ"と同様、シンプルな小谷和香子さんの手紙でした。

▼高校最後の文化祭に千里くんが来てくれるなんてほんとに夢のようでした。千里くんの乗っている帰りの汽車を見ていた時、出発する瞬間、カーテンをひいて手を振ってくれたこと、すごく印象的でした。もちろん歌もすごくすばらしかった。（田畑優子）

——笹森直子さんが青森西高のレポート用紙と共に送ってくれた寄せ書き手紙の中のひとつ。青葉哉子さんもありがとう

▼先月開催されました青森西高文化祭に際し、大江千里氏の学校訪問を企画いただき、本校生徒に二度とない感動と思い出を残していただきましたことを深く感謝申し上げます。

——達筆で縦書きのお手紙は生徒部長の角田先生。どうもありがとうございました。

●米米CLUBである。アルバムチャート初登場No.1に輝く、米米CLUBである。日本全国津々浦々、ライブをやれば満員御礼の米米CLUBである。かつて米米CLUBは、大人にウケの良い、いわゆる通好みのバンド、とのイメージがあった。しかし、そんな先入観は我々お馬鹿さん達の思い込みに過ぎなかったのだ。……そう、彼らは今や、押しも押されぬトップアイドルなのだ!! 見よっ!! このイキイキとした表情をっ!! 米米CLUBの生写真が、原宿・表参道をいろどる日も近いっ!!

PHOTO by GORO IWAOKA

KOME KOME CLUB
SUPERBEAUTY
SUPER B GRAND

JAMES ONODA

KOME KOME CLUB

SUPER BEAUTY

SUPER MARKET

CARL-SMOKEY ISHII

KOME KOME CLUB
SUPERBEAUTY
SUPER WARMLY

B O N

KOME KOME CLUB

SUPERBEAUTY

SUPER D R Y

JOPLIN TOKUNO

KOME KOME CLUB

SUPERBEAUTY

SUPER STUBBORN

RYO-J

KOME KOME CLUB
SUPER BEAUTY
SUPER CUTIE

MINAKO

KOME KOME CLUB

SUPERBEAUTY

SUPER COOLLY

FLASH KANEKO

KOME KOME CLUB
SUPERBEAUTY
SUPER SEXY

M A R I

PATi▸PATi PRESENTS

米米クラブ・スペシャル　ラジオメニュー［ごはんくうかい］

GO FUNK PARTY

企　画

CBS・ソニーレコード　パチ▶パチ編集部　米米クラブ

監　修

御領博(CBS・ソニーレコード)

脚　本

萩原健太　カールスモーキー石井（米米クラブ）

制　作

赤坂波雪

記　録

山崎恵理子（パチ▶パチ編集部）

演　出

萩原健太

出　演

(米米CLUB)　ボン　ジェームス小野田　カールスモーキー石井

ジョブリン得能　リョウジ　フラッシュ金子　ミナコ　マリ

挿　入　歌

「KOME KOME WAR」作詞・作曲・歌／米米CLUB　「OH／ 米GOD／」作詞・作曲・歌／米米CLUB

「SEXY POWER」作詞・作曲・歌／米米CLUB　「BEE BE BEAT」作詞・作曲・歌／米米CLUB

「TIME STOP」作詞・作曲・歌／米米CLUB

放　送

FM北海道　青森放送　山形放送　FM秋田　FM岩手　FM仙台　FM富士　FM群馬　FM新潟

FM長野　FM埼玉　FM静岡　FM三重　FM福井　FM富山　ラジオ大阪　FM香川　FM愛媛　FM山陰

FM山口　広島FM放送　FM福岡　FM中九州　FM宮崎　FM長崎　南日本放送　大分放送　琉球放送

著　作

CBS／SONY RECORDS

CBS SONY

▼「KOME KOME WAR」サビの部分、流れる

全員「米米クラブのッ」

J.O.「GO FUNK PARTY!」

宇都宮先輩(CS石井)「♪ぼぉくらはみんなぁ～生きているぅ～ヒッ! なぁ、磨いてやるから、おー、動くな動くなちっちゃくなれ、なー、気持ちいいだろぉ、な、ワサビぬってあげようか、おいちょ、細かい所…ツユがお前多いからな。おーし、磨いてやるからな。んーだんだんきれいになってきた。だんだん…」

(ノックの音、3回)

村田(ポン)「先輩! 先輩!」

先輩「おうっちょっと待ってろ!」

村田「先輩、入りますよ」

先輩「やめッ…」

(声と同時にドアの開く音)

村田「あれっ」

先輩「おっやめ…」

村田「せんぱいっ! 何ですかそれェ」

先輩「お…バカヤロオッ! きゅ、きゅ、急に入ってくんじゃないよ」

村田「なーんですかソレ先輩…」

先輩「おまえはなぁ」

村田「ヘッ!?」

先輩「人の部屋に入って来んのになぁ、急に入って来るんじゃないよバカ」

村田「イヤー、だ、だってなんか、だってなんかぁ…あれっ!? なん?」

先輩「あ、おまえ」

村田「えっ? なんか音しますよ」

先輩「あ? ちょっ、向う行けっ、向う行けっ! おまえ向う行けっ、行け――ッ!!」

村田「あ、あ――――っ!!」

(ドアの激しく閉まる音)

村田「先輩! せんぱーいっ!! 入れてくださいよ」

先輩「うるさいッ! おまえは向う行ってろよッ!」

村田「先輩! 先輩!!」

先輩「ヒヒヒッ。お前は、かわいいんだからあんな者には見せてあげられないよな[illegible]…ヒヒヒ…よーしよしよーし…ヒヒヒ……」

▼「OH! 米GOD!」にのせCS石井呼びかけ

「ハーイ、みんなお待たせ。米米CLUBの、ゴーファ～ンク・パーテーだ。1分間に1回のエクスタシーまとめて30回もイかせるぜぇ。今日、お届けするのはゴーファンク・パーテーB級編。C級編に続いてまた新たな[illegible]の世界を味あわせてあげよう。出演はもちろん、エブリバディ・ノーズ、コメコメクラーブ、他オールキャラクターでお送りするからね。さて、準備はいいかなぁ、それじゃあ、レッツ・ハブ・ゴーファンク・パーテーッ!」

(デパートの雑踏)

エレベーターガール「下へ参ります。4階2階1階へ参ります」

(くつ音)

「お待たせいたしました」

店員(石井)「ハイッ、いらっしゃいませ」

オオケツヒトコ(ミナコ)「いらっしゃいませじゃないでしょ、いただきます、よ」

店員「いただきます?」

オオケツ「いただきますの女優、おおけつひとこよ」

店員「あー!」

オオケツ「で、こちらが」

店員「ハイ」

オオケツ「付き人のマリィです」

マリ「マリって呼んでねぇ」

店員「あー、あ、どーもどーもいやいや。あの、どういった御関係の…」

マリ「…有名なんですよぉ…」

オオケツ「(せき払い)」

店員「あ、あー…」

マリ「ご存知ないんですかぁ?」

店員「あー、1度だけ、あ、なんかテレビ番組に…あのォ…見たことありますよ、昔、ねぇ」

オオケツ「そうなんですよ」

店員「あの、今日は、[illegible]靴を…」

オオケツ「そうね、ちょっとTBSって厳しいのね。だからね、上品で、かわいくて、誰が見てもいいって言う靴。聖子さんなんかよくはいてるタイプ、あるでしょ? あのかわいらしいやつね」

店員「…ハァ…ハイハイ」

オオケツ「それ欲しいんだけど、ちょっと探してくれない?」

店員「あー、ないです」

マリ「あのォ、とにかく高いものがいいんですけど…」

オオケツ「ええ」

店員「あー、高いものですか。ハア、いろいろございますけれども、えーっと、こちらになってるんですけどもぉ……サイズ…」

オオケツ「え、っとサイズ、ね、20センチあるかないか位かしら」

マリ「あ、もうちょっと…」

オオケツ「うるさい、だまってなさい」

店員「わかりました。あーじゃあ、これが小学校6年生のサイズなんですけどね、19なんですけど、入るか…」

オオケツ「あ、ちょうどいいみたいね、これ小さくて、はいてみましょう」

店員「あ、じゃ、ちょっとはいてみましょうか、はいどーぞ」

オオケツ「……あ」

店員「親指しか入んないスけどね」

オオケツ「ちょっとダメみたいね」

マリ「あ、じゃワンサイズ、もうちょっと、ねッ」

店員「あげましょうか。ハイ、わかりました。じゃあ、これがちょうど20…ですね、ハイ、これがちょうど20です」

オオケツ「じゃはいてみようかしら」

店員「ええ」

オオケツ「あ…ちょっと…」

店員「親指しかやっぱり入んないですねぇ」

オオケツ「普通だったら入るんですけどねぇ、むくんでんのかしら、足」

店員「…むくんでるというか…」

オオケツ「もうひとつくらい」

店員「あの足の形がちょっと違うみたいですねぇ……細長いというか、丸い…幅があるよねぇ、幅があるかんじ」

オオケツ「え、21ぐらいで」

店員「ハイ、わかりました。21…っていうと、ちょっとこれ…」

オオケツ「ちょうどいいみたいそれが」

店員「これがいいですか」

オオケツ「ええ」

店員「じゃ、ちょっとはいてみましょ。よいっしょっと……よいしょ、よいしょ…」

(突然の爆音)

店員「あー、こわれちゃった。すいません。すいません、ちょっとあの」

マリ「26ぐらいが…」

オオケツ「だまってなさい、うるさい」

マリ「あ、ごめんなさい」

オオケツ「でしゃばんなくていいから」

マリ「ハイ」

店員「すいません、もうちょっとあのぉ、大きい方がよろしいと思います」

オオケツ「そう…じゃ、にっじゅう…22ぐらいだったらだいたい入るんですけどいつも」

店員「いや…いや[illegible]たぶんね、22じゃちょーっとお客さん無理じゃないかなぁと」

オオケツ「22…」

店員「ええ」

オオケツ「ぐらいじゃ、ダメ…かしらね」

店員「23ぐらいならどうでしょう」

ね」
オオケツ「そ、23くらいで、はいてみようかしら」
店員「そうですね、ハイ」
オオケツ「あ、これなら」
店員「これ、ぴったりですよ」
オオケツ「でもちょっと大きいかしらねぇ、マリ、どうかしら」
マリ「ちょっと、はいてみて下さい」
オオケツ「あ、はいてみようかしら」
店員「ハイ、わかりました。ハイ、じゃあ、ちょっとまた、ふンぐっ…ぐっ…、お客さんすいません、あの、向うから押してください、マリイさんもちょっと、かかとをぐっと押して、んぐーーっ」
(再び爆音)
店員「まーたこわれちゃった」
オオケツ「あわないのね」
マリ「くつがかわいそ」
オオケツ「おかしいわね、だいたい23あったら入るのにね」
店員「あ、靴がなんか、ハンバーグみたいになっちゃいましたけど、すいません」
オオケツ「じゃ、もうひとサイズ上で」
店員「ええ。これがね…ちょっとマリィさん…」
マリ「(小声で)お店で、いちばん大きいサイズ」
店員「(小声で)27になっちゃうんですけどいいんですか?」
マリ「あ、お願いします」
店員「じゃこれ24ということで、ね、書き替えておきますからね」
マリ「ハイ」
店員「じゃあこれがねぇ、24なんですけどもぉ」
オオケツ「あら、ずいぶん大きくなっちゃうのね、24だと」
店員「ええ…」
オオケツ「ええ…ちょっと…でも、はいて、みるだけ、みるだけね、マリ。ね、ハイ」
店員「よいしょ」
オオケツ「ハイー……あら」
店員「まっ」
オオケツ「いいみたい、ちょうど」
店員「ぴったりですね」
オオケツ「ぴったりだわ、この靴」
店員「24で」
オオケツ「素敵だわぁ」
マリ「これ素晴しいじゃないですか」
店員「ぴったりですねっ、お似合いになりまわぁ」
オオケツ「マリ、マリ、いいかしら、あたし。どお?」
マリ「とても、素敵です」
店員「素敵ですね」
オオケツ「ちょっと足大きく見える?」
店員「そんなことないですよ」
オオケツ「じゃこれでいいわ、これいただきます」
店員「ハイハイ、ありがとうございました。どうもぉ……」
▼「SEXY POWER」
‖CM‖
(トイレの水が流れる音)
「流れろォ、流れろォ、流れろぉーーーっ!!」
‖CM‖
(ピンタの音)
上等兵「貴様!! 後ろに何を隠しておるかあっ!?」
二等兵「米米クラブの『GO FUNK』であります」
▼「KOME KOME WAR〜♪」
(ピンタの音)
上等兵「何を隠しているかと聞いているんだッ!!」
二等兵「米米クラブの4枚めのニューアルバム、『GO FUNK』であります」
▼「KOME KOME WAR」のサビ部分流れる
(ピンタの音2発)
上等兵「貴様、歯を喰いしばれェ、何を持っているかと聞いているんだ!!」
二等兵「米米クラブ4枚めのニューアルバム、ニューヨークトラックダウンの自信作『GO FUNK』であります」
上等兵「きさまぁ!」
(ピンタの音、3発)
▼「KOME KOME WAR」流れる
DJ「米米CLUB NEW ALBUM『GO FUNK』好評発売中!」
「ウン、最初から素直にそう言えばいいのに」
「シングル『KOME KOME WAR』もよろしく……エへへ」
(鐘の音、雑踏)
村田「そいじゃな、安斉、バイバイ」
女生徒「バイバイ」
女生徒「バイバイ、またね」
男生徒「バイバイ」
安斉「村田くん、バイバイ!」
村田「おう、明日クラブ出んだろ、クラブ」
安斉「おう、わかった」
村田「あ、ほんじゃな、バイバイ」
女生徒「バイバイ」
(効果音とともに先輩登場)
宇都宮先輩「おい村田、村田」
村田「あわっ、あ、先輩!先輩!」
先輩「ケ、ケ、ケ、村田、お前、こないだの、見たいと思わない?」
村田「こない…あ…」
先輩「へへへッ」
村田「先輩、こないだの!」
先輩「い、いいものが入ってんだよ」
村田「いいものってあれぽく、チラッと見たんですよ、見してください!」
先輩「ダメだよ」
村田「なぁんですか」
先輩「お前、でっけえ声だろ、でっけえ声の奴には見せねぇんだよ」
村田「なぁんですかぁ?」
先輩「でっけんだよ声が!」
村田「ハア」
先輩「人に言うんじゃねぇぞ」
村田「絶対言わないですよ」
先輩「じゃあな」
村田「エェ」
先輩「20分後にな」
村田「20分後に…」
先輩「体育館の裏に来い」
村田「エッ」
先輩「誰にも言うなよ!」
村田「み、み、みせてくれんですかっ!!」
先輩「オイッ!!」
村田「ハハハ…ハイ」
先輩「誰にも言うんじゃねぇぞ」
村田「いいい言わないですよ」
先輩「よオーし」
村田「先輩、絶対見せてくださいよ」
先輩「あたりめぇだ、俺がウソついたことがあるか…へへへへ。わかったな」
村田「ハイ」
先輩「よォし」
(ハープの効果音)
村田「先輩! せんぱぁい、どこですか、おかしいなぁ、20分後っつったのに。先輩〜!」
先輩「むむむ村田」
村田「せん……あっ」
先輩「村田」
村田「せんぱあい!!」
先輩「テメ、声がでけえんだよオ。何回言ったらわかんだよ、コレがビクつくだろ」
村田「えっ……び、びくつくんですかぁ」
先輩「そうなんだよ、コレがびくつくんだよ……なぁ……」
村田「せ、せんぱい、早く見してください」
先輩「お前、誰にも言わねぇか」
村田「言わないですよ」

先輩「誰かお前のことつけて来てんじゃねぇか」
村田「そんなことないですよ、みんな帰っちゃいましたもん」
先輩「とんでもないもんだからな」
村田「早く見してくださいよ」
先輩「どうしよーかなぁ」
村田「先輩、せんぱぁい」
先輩「ケケケ、冗談だよ、見してやるよ」
村田「なんかドキドキしてきちゃった」
先輩「ちょっとだけぞ」
村田「ちょ、ちょっとだけでいんです」
先輩「へへへ、ほぉら…」
(ハープの効果音)
村田「うわっ」
先輩「ケケケ」
村田「うわぁ――――っ!!」
先輩「おまえ、てめぇっ！」
(ぶつ音)
村田「あいたっ、痛ぇ」
先輩「でっけぇ声出すんじゃねぇよ」
村田「だってすごいんだもん、こんなの初めて…」
先輩「ここでおしまいだ、今日は」
村田「えっ、先輩そりゃあないですよ」
先輩「時間がくると青くなるんだ」
村田「ちょーっと先輩っ」
先輩「村田ッ!!」
村田「せんぱいっ、頼みますよ」
先輩「村田ッ！ 向う行けよッ!! …じゃあな、へへへッ」
村田「先輩！ 見たいよぉ……」

―CM―

上司(石井)「熊岡くんッ!! 来たまえ。エエ、キミなんだこの書類の書き方は。ああん？ いつもこんな書類の書き方してるから、なかなか出世できないんだよ!! ……」
熊岡(J.O.)「(心の声)……俺は青森で生まれ、雪の中で育ち、人一倍がまん強い男だ。そんな俺にも、でっかい野望がある。それは、それは、……世界征服だ。今、このオレ様をどなりつけているアホな上司。こいつに、いつの日か、俺の靴をなめさせてやる……ふわぁーっはっはっはっはっはっ」
上司「……ちゃんと聞いとんのか人の話を。ええっ、キミ、聞いてんのかッ」
熊岡「ハイ」

▼「ロッキーのテーマ」にのせ、CS石井ナレーション
「ラッキー、何故に君はそこまで自分の限界にチャレンジするのだ。闘志をむき出しにした瞳の奥に、明日に向ける希望と、勝利への熱い鼓動が見えてくる。走れラッキー、翔べラッキー、ラッキー、ラッキー、ラッキー!!」
(トレーニング息づかい)
トレーナー(ボン)「頑張れラッキー、もう少しだ。明日の世界を制覇するには、今の努力だッ、ソレッ、ソレッ、兵士だ、ソレッ兵士だッ!!」
ラッキー(J.O.)「もうかんべんしてくださいよ…」
トレーナー「何を言ってんだラッキー、バカヤロー!! 戸越銀座指相撲大会はもうあと一週間後だぞ！ な、お前は洗濯機が欲しくないのか」
ラッキー「ハイッ！ ソーリャソリャ、ソリャソリャソリャ」
トレーナー「頑張れ！ 全自動だぞ」
ラッキー「からまん棒もついてますか」
トレーナー「もちろんさ、脱水もな、それに…」
ラッキー「えっ、まだあるんですかぁ」
トレーナー「へへへ、節約コースダイヤル付きさぁ」
ラッキー「え〜っ!! ソリャー、ソリャソリャア〜」
トレーナー「よーしがんばれェ!!」

(CS石井ナレーション)
「栄光の影には、常に女の涙があるものだ。ラッキーの妻もまた、その例外ではなかった」
(ピアノの音)
ラッキーの妻(マリ)「あなた……頑張ってね。もう洗濯板はイヤ」
ラッキー「ハイ」
(効果音・会場の雑踏)
司会者「エーッ、華々しく幕をあけたこの戸越銀座指相撲大会。コバルトブルーの空に、ピンクのビニール桜のレイアウトが、なんとも言えない商店街情緒を醸し出しています。さあ、いよいよ、決勝の火ぶたが切って落とされようとしています。赤コーナーは、もう3年も連続優勝を続けておりますディフェンディング・チャンピオン魚政の政やん、フィッシャー政。そして対するは、エー、今年初めての挑戦なんですね、ラッキー柿沼さん。職業はマッサージ師。日頃指圧で鍛えたその指力をですね、思う存分発揮してもらいましょう。それでは、いよいよ始まります」
(ゴング、拍手、喚声…)
応援A「頑張れェ！」
ラッキー「す、すべる、すべる…」
応援A「すべるじゃない、頑張れ！」
ラッキーの妻「頑張って、洗濯機よ！」
政(石井)「ヘイ、らっしゃいらっしゃいらっしゃい」
ラッキー「…ひっ、ひとさし指はズルイぞ…」
政「らっしゃいらっしゃいらっしゃいらっしゃい……」
応援「頑張れラッキー何やってんだ」
政「ブリだブリだブリだぁ！」
応援「右へ回り込め！」
ラッキー「つめ、つめが痛い…あ、あ、あ、ああ――――っ!!」
(波の音)
ラッキー「ちきしょー、くやしいなぁ。お前に洗濯機を勝ち取ってやりたかったけど…(涙)」
ラッキーの妻「何言ってんの…あなたはやせても枯れても、ラッキー柿沼でしょう」
ラッキー「ハイ」
ラッキーの妻「いいの私は。洗濯機なんかいらない。あなたと私の愛がしみついた、この洗濯板があればいいの。元気を出して！ また明日からトレーニングよ、ファイト！」
ラッキー「ハイ。よぉ〜し、何か元気が出てきたぞぉっ!! やたら指がうずいてきたぜぇ、よしっ。指立て伏せ、100本だぁ、そぉれっ」
ラッキーの妻「い〜ち、にーい、さーん、しーい、ごー、ろーく……」

▼「ロッキーのテーマ」CS石井ナレーション
「ラッキーに、明日はあるのか。ふたりの背にはまっ赤な夕日が、まるであざ笑うかのように、燃えていた。頑張れラッキー、走れラッキー、指圧だラッキー、ラッキー、ラッキィ〜!!」

―CM―

吉田「ンゴーーッ」(いびき)
(ウォークマンからこぼれる音。「KOME KOME WAR」)
先生「吉田ッ！」
吉田「ングッ」
先生「授業中、何聞いて寝ているんだッ。そんなに退屈なら出て行きなさい。あーちょっと吉田待ちなさい、ちょっと貸し

なさい、ちょっと貸しなさいッ！」

D.J.　（イヤホーンがはずれ、曲が大きな音で流れる。「KOME KOME WAR」のサビ部分。曲にのせてMC）「米米CLUBニューアルバム『GO FUNK』好評発売中！」

先生　「先生も聞いているゾッ」

‖CM‖

（ピンタの音）

上等兵　「貴様！　後ろに何を隠しておるかあっ」

二等兵　「米米クラブの『GO FUNK』であります」

▼「KOME WAR〜♪」

（ピンタの音）

上等兵　「何を隠しているかと聞いているんだッ!!」

二等兵　「米米クラブの4枚めのニューアルバム『GO FUNK』であります」

▼「KOME KOME WAR」のサビ部分流れる

（ピンタの音2発）

上等兵　「貴様、歯を喰いしばれェ、何を持っているかと聞いているんだ」

二等兵　「米米クラブ4枚めのニューアルバム、ニューヨークトラックダウンの自信作『GO FUNK』であります」

上等兵　「きさまぁ！」

（ピンタの音3発）

▼「KOME KOME WAR」流れる

D.J.　「米米CLUB NEW ALBUM『GO FUNK』好評発売中！」

「ウン、最初から素直にそう言えばいいのに」

「シングル『KOME KOME WAR』もよろしく……エへへ」

村田　「アーー…ママア…」

母(ミナコ)　「大丈夫？」

村田　「もぉ具合悪いよぉ」

母さん　「そんな男の子でしょう、しっかりしなさいっ!!」

村田　「ほんとに具合悪いんだもん」

母さん　「どーしたのどこが痛いのっ？」

村田　「どこも痛くないんだけど、なんか具合悪いんだ…」

母さん　「もぉ本当にもう、男の子でしょう大丈夫だから、しっかりしなさい」

村田　「でもあれは…すご…」

（チャイムの音）

母さん　「あら、なんかお客さんみたいね。ハーイ!!」

（階段を駆け降り、ドアを開ける音）

母さん　「あら宇都宮さん、いらっしゃい、どうしたんですか?」

宇都宮先輩　「へへへ…どーも、なんか村田くん寝込んでるらしいじゃないですか」

母さん　「そうなんですよ、よしかずはなんか具合が悪いって言ってね…」

先輩　「大丈夫ですよ奥さん、私が来たからには…ヘッヘッヘ…」

母さん　「あ〜ら宇都宮さんったら、じゃ、ちょっとあがってよしかずに会って少し元気づけてあげてください」

先輩　「ハイ、わかりました。奥さん、地方出身ですね(笑)」

母さん　「(笑)奥さんなんて、宇都宮さん、やだわぁっ…(笑)」

先輩　「(笑)じゃちょっと、あがりますよ。よいしょっと、2階ですかぁ？」

母さん　「そうです」

（足音、2階へノックの音）

母さん　「よしかず」

村田　「アァ？　なあに?」

母さん　「宇都宮さんがいらっしゃったわよ」

（ドアを開ける音）

村田　「先輩があっ!?」

先輩　「ヘッへ、おう！」

村田　「せ、先輩！」

先輩　「村田！」

（包みのガサゴソという音）

村田　「あっ、持って来てんですかあ？」

先輩　「奥さん、ここは僕にまかしといてください」

母さん　「じゃ、よろしくお願いします」

先輩　「ハイ」

村田　「先輩ッ！」

（ドアの閉まる音）

村田　「も、あれ以来僕、具合悪くなっちゃって…」

先輩　「だまってろって言ってんだろッ！」

村田　「だーって…」

先輩　「今日は触らしてあげようと思って持って来たんだよ」

村田　「えぇーーっ！　ホントですか？」

先輩　「ヘッヘッヘ、ちょっとだけだぞぉ」

村田　「ちょっとだけでもいい」

先輩　「ヘッヘッヘッ…」

村田　「僕ね、先輩、聞いてください先輩、あの、あれ見て以来僕、具合悪くて…」

先輩　「お前の都合なんか、聞いちゃいねぇよ」

村田　「うわ〜っせんぷわぁ〜いっ…(涙声)」

先輩　「おい」

村田　「ハイッ！」

先輩　「村田…成長してるぜ…ヘッヘッヘッヘッ…」

村田　「えーーっ!!　だって、こないだ見た時、アレッ!?」

（ドアをノックする音）

村田　「マ、ママ、何だよママ」

母さん　「よしかずぅ」

（ドアの開く音）

母さん　「お茶持ってきたから」

村田　「あー、も、いーよそんな、あ、もう、あ、」

母さん　「何をふたりでコソコソしてるの」

先輩　「奥さん、ここは私にまかせてくださいって言ってるでしょ。トットと下に降りてってください」

母さん　「あっそう、じゃ、ママは退散、退散」

（ドアの閉まる音）

先輩　「おめえんちのおふくろ、ちょっとおせっかいだな」

村田　「ちょっとだけだけど…」

先輩　「ちょっといたぶってやるかな…へへへ…」

村田　「何言ってんですか先輩は」

先輩　「おい、村田ッ！」

村田　「ハハハ、ハイッ」

先輩　「でけえ声出すんじゃねぇぞ、す、すんごい形になってっからな……ちょっとだけだぞ」

村田　「う、うわ、見れるんですかぁ」

先輩　「今日は見せるんじゃねぇよ、触らせるんだ」

村田　「ホント、ホント……」

先輩　「手を入れてみろ、手を。そーっと手を入れてみろ」

村田　「そ、そっと…」

（効果音）

先輩　「ホラアッ！」

村田　「うわっうわっうわぁーーー」

先輩　「ハッハッハ、冗談だよ冗談、

冗談、冗談だよ…」
村田　「うわーっ、うわーっ、うわっ、うわーっ、(涙声)」
先輩　「アーッハッハッハッハッハッ…」
村田　「うわーっうわーっうわーっ」
先輩　「ハーッハッハハハハ…」
村田　「すごいっ、すごォい——ッ」

▼「BEE BE BEAT」
妻　「あんたッ!」
(赤ちゃんの泣き声)
妻　「ちょっとこっち来てちょうだいッ。なーんであんたはほんっとにグズグズしてんのよッ! エエッ! あたしの身にもなってちょうだいよ、あんたッ……」
夫　「(心の声)俺は、青森で生まれ、雪の中で育ち、人一倍我慢強い男だ。そんな俺にも、でっかい野望がある。それは、それは、世界征服だ。今、このオレ様を怒鳴りつけているアホな女房、こいつに、いつの日か、俺のパンツを、洗わしてやる。ハハハハハハ、ホホホホホホ……」
妻　「訴えてやるッ! 聞いてんのあんたッ!」
夫　「ハイ」

‖CM‖

先生　「みんなちょっと目をつぶれ、やってしまった事は仕方がない」
▼「KOME KOME WAR」フェイド・イン
先生　「この中で、米米クラブの『GO FUNK』買った者、正直に、だまって手をあげなさい」
▼「やめてやめてやめ…」
先生　「うるさいって、言ってるだろッ!」
▼「KOME KOME WAR」サビ部分流れる
D.J.　「米米CLUB NEW ALBUM『GO FUNK』好評発売中!!」
先生　「先生は、怒らんぞ」

‖CM‖

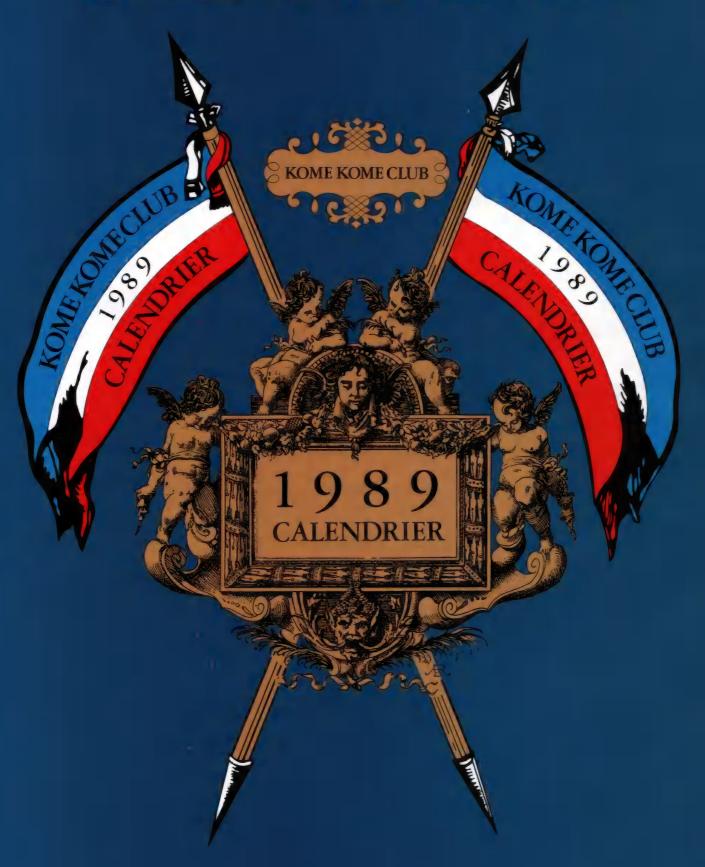
(爆発音)
二等兵　「隊長! 向うに、米米クラブ4枚めのアルバム『GO FUNK』が埋っております」
上等兵　「なにぃっ!?」
二等兵　「隊長、どーしますかッ」
上等兵　「そっとしとけ」
(爆発音)
▼「KOME KOME WAR」サビ部分流れる
D.J.　「米米CLUBニューアルバム『GO FUNK』好評発売中!」
上等兵　「…だからそっとしとけと言ったのに!!」

‖CM‖

吉田　「ンゴーッ」(いびき)
(ウォークマンからこぼれる音。「KOME KOME WAR」)
先生　「吉田ッ!」
吉田　「ングッ」
先生　「授業中、何聞いて寝ているんだッ。そんなに退屈なら出て行きなさい。あーちょっと吉田、待ちなさい、ちょっと貸しなさいッ!」
(イヤホンがはずれ、曲が大きな音で流れる。「KOME KOME WAR」のサビ部分。曲にのせてMC)
D.J.　「米米CLUBニューアルバム『GO FUNK』好評発売中!」
先生　「先生も聞いているゾッ」

‖スポット‖

▼「KOME KOME WAR」サビの部分、流れる
全員　「米米クラブのッ」
J.O.　「GO FUNK PARTY〜」
全員　「アーッハッハッハッハッハッ……」
(雨の降る音)
村田　「あーあ…あれ以来もう体の調子も悪いしなぁ…学校なんか行く気しないしな……こんなとこ居て、ほんとになぁ、先輩も全然もう会ってくれないし……」
(効果音と共に、宇都宮先輩登場)
先輩　「村田ッ、村田ッ!! ヒヒヒヒッ」
村田　「あ、先輩ッ!! …な、な」
先輩　「でけぇ声出すなっつってんだろ」
村田　「だって先輩なんでこんなとこにいンですか」
先輩　「いんだよォ」
村田　「いん…」
先輩　「俺はどこんでも居るんだ」
村田　「先輩…」
先輩　「お前の心の中に居るんだ…へへへへッ」
村田　「またそんなキザな事言って…もっ」
先輩　「冗談だけどよ」
村田　「先輩!」
先輩　「今日はな、白昼堂々と見せてやる」
村田　「えっ! 今日も持って来てくれてるんですかぁ!!」
(包みをとり出す音)
村田　「うわぁーっ! せんぱーいっ!! それだぁーっ!!」
先輩　「ハッハッハハハハ」
村田　「どーしよぉーっ!!」
先輩　「村田ッ!」
村田　「ハイッ!」
先輩　「今日は、全部、袋を…」
村田　「エッ!?」
先輩　「とるからな…」
村田　「どうしよ、アッ」
先輩　「結構でかくなってるんだよ」
村田　「そ、そうなんですか…大きくなるんですか…」
先輩　「こないだ見た時は、赤かったろ」
村田　「赤かったですよっ」
先輩　「黄色く熟してるんだ…へへへへッ」
村田　「エエーッ」
先輩　「いくぞぉ」
村田　「ハイッ」
先輩　「まず1枚めのパラフィン紙を…」
村田　「アーッ」
先輩　「よし、これは向うに捨てる、と。まだ次にあるんだ。これは…よいしょ、これを破いて…」
村田　「先輩、このパラフィン紙、僕にくれませんか?」
先輩　「それにお前、詩でもしたためて来い…ヒッヒッヒ…」
村田　「う、うわーーい、嬉しい…」
先輩　「これだ、次にこれを破くと…ホラァ…」
(ハープの効果音)
村田　「…カラス位の大きさだぁ…うわぁー……」
先輩　「ヒヒヒヒッヒヒヒヒヒッヒッヒーッヒヒヒヒヒヒ……」
(雨の音、フェイドアウト)
▼「TIME STOP」
(B級編▼約30分)

KOME KOME CLUB CALENDRIER

KOME KOME CLUB

JUILLET	AOÛT	SEPTEMBRE	OCTOBRE	NOVEMBRE	DÉCEMBRE
S 1	M 1	V 1	D 1	M 1	V 1
D 2	M 2	S 2	L 2	J 2	S 2
L 3	J 3	D 3	M 3	V 3	D 3
M 4	V 4	L 4	M 4	S 4	L 4
M 5	S 5	M 5	J 5	D 5	M 5
J 6	D 6 KAWAI WAKABA (BIG HORNS BEE)	M 6	V 6	L 6	M 6
V 7	L 7	J 7	S 7	M 7	J 7
S 8	M 8	V 8	D 8	M 8 JAMES ONODA	V 8
D 9	M 9	S 9	L 9	J 9	S 9
L 10	J 10 JOPLIN TOKUNO	D 10	M 10	V 10	D 10
M 11	V 11	L 11	M 11	S 11	L 11
M 12	S 12	M 12	J 12	D 12	M 12
J 13	D 13	M 13	V 13	L 13	M 13
V 14	L 14	J 14	S 14	M 14	J 14
S 15 HIMARAYAN SHIMOGAMI (BIG HORNS BEE)	M 15	V 15	D 15	M 15	V 15
D 16	M 16	S 16	L 16	J 16	S 16
L 17	J 17	D 17	M 17	V 17	D 17
M 18	V 18	L 18	M 18	S 18	L 18 MINAKO (SUE CREAM SUE)
M 19	S 19	M 19	J 19	D 19	M 19
J 20	D 20	M 20	V 20	L 20 MARI (SUE CREAM SUE)	M 20
V 21	L 21	J 21	S 21	M 21	J 21
S 22	M 22	V 22 CARL SMOKY ISHII	D 22	M 22	V 22
D 23	M 23	S 23	L 23	J 23 G-I GYO (BIG HORNS BEE)	S 23
L 24	J 24	D 24	M 24	V 24	D 24
M 25	V 25	L 25	M 25	S 25	L 25
M 26	S 26	M 26	J 26	D 26	M 26
J 27	D 27	M 27	V 27	L 27	M 27
V 28	L 28	J 28	S 28	M 28	J 28
S 29	M 29	V 29	D 29	M 29	V 29
D 30	M 30	S 30	L 30	J 30	S 30
L 31	J 31		M 31		D 31

1989

JANVIER	FÉVRIER	MARS	AVRIL	MAI	JUIN
D 1	M 1	M 1	S 1	L 1	J 1
L 2	J 2	J 2	D 2	M 2	V 2
M 3	V 3	V 3 BON	L 3	M 3	S 3
M 4	S 4	S 4	M 4	J 4	D 4
J 5	D 5	D 5	M 5	V 5	L 5
V 6	L 6	L 6	J 6	S 6	M 6
S 7	M 7	M 7	V 7	D 7	M 7
D 8	M 8	M 8	S 8	L 8	J 8
L 9	J 9	J 9	D 9	M 9	V 9
M 10	V 10	V 10	L 10	M 10	S 10
M 11	S 11	S 11	M 11	J 11	D 11
J 12	D 12	D 12	M 12	V 12	L 12
V 13	L 13	L 13	J 13	S 13	M 13
S 14	M 14	M 14	V 14	D 14	M 14
D 15	M 15	M 15	S 15	L 15	J 15
L 16	J 16	J 16	D 16	M 16	V 16
M 17	V 17	V 17	L 17	M 17	S 17
M 18	S 18	S 18	M 18	J 18	D 18
J 19	D 19	D 19	M 19	V 19	L 19
V 20	L 20	L 20	J 20	S 20	M 20
S 21	M 21	M 21	V 21	D 21	M 21
D 22	M 22	M 22 FLASH KANEKO	S 22	L 22	J 22
L 23	J 23	J 23	D 23	M 23	V 23
M 24	V 24	V 24	L 24	M 24	S 24
M 25	S 25	S 25	M 25 RYO-J	J 25	D 25
J 26	D 26	D 26	M 26	V 26	L 26
V 27	L 27	L 27	J 27	S 27	M 27
S 28	M 28	M 28	V 28	D 28	M 28
D 29		M 29	S 29	L 29	J 29
L 30		J 30	D 30	M 30	V 30
M 31		V 31		M 31	

〔1月の予言〕　「シャリシャリズムInc」創立記念月間。合言葉は、“目指せ、吉本興業、目標一部上場”

JANVIER 1989

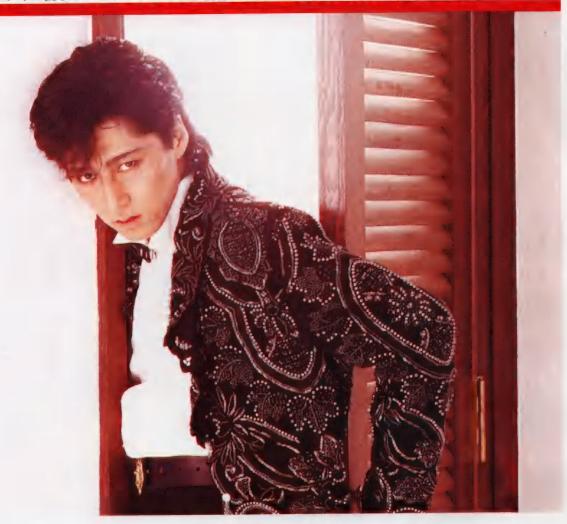
1

1	DIMANCHE	9	LUNDI	17	MARDI	25	MERCREDI
2	LUNDI	10	MARDI	18	MERCREDI	26	JEUDI
3	MARDI	11	MERCREDI	19	JEUDI	27	VENDREDI
4	MERCREDI	12	JEUDI	20	VENDREDI	28	SAMEDI
5	JEUDI	13	VENDREDI	21	SAMEDI	29	DIMANCHE
6	VENDREDI	14	SAMEDI	22	DIMANCHE	30	LUNDI
7	SAMEDI	15	DIMANCHE	23	LUNDI	31	MARDI
8	DIMANCHE	16	LUNDI	24	MARDI	1	MERCREDI

KOME KOME CLUB

〔2月の予言〕　バレンタイン・デイの衝撃！　3トントラック10台分のチョコレートでオフィスが茶色に染まる

FÉVRIER 1989

2

1	MERCREDI	9	JEUDI	17	VENDREDI	25	SAMEDI
2	JEUDI	10	VENDREDI	18	SAMEDI	26	DIMANCHE
3	VENDREDI	11	SAMEDI	19	DIMANCHE	27	LUNDI
4	SAMEDI	12	DIMANCHE	20	LUNDI	28	MARDI
5	DIMANCHE	13	LUNDI	21	MARDI	1	MERCREDI
6	LUNDI	14	MARDI	22	MERCREDI	2	JEUDI
7	MARDI	15	MERCREDI	23	JEUDI	3	VENDREDI
8	MERCREDI	16	JEUDI	24	VENDREDI	4	SAMEDI

KOME KOME CLUB

〔3月の予言〕　ボン、フラッシュ金子合同誕生パーティで、爆弾発言！　「ボク達のカンケイは終わりました」と涙で語る

MARS 1989

3

KOME KOME CLUB

1	MERCREDI	9	JEUDI	17	VENDREDI	25	SAMEDI
2	JEUDI	10	VENDREDI	18	SAMEDI	26	DIMANCHE
3	VENDREDI	11	SAMEDI	19	DIMANCHE	27	LUNDI
4	SAMEDI	12	DIMANCHE	20	LUNDI	28	MARDI
5	DIMANCHE	13	LUNDI	21	MARDI	29	MERCREDI
6	LUNDI	14	MARDI	22	MERCREDI	30	JEUDI
7	MARDI	15	MERCREDI	23	JEUDI	31	VENDREDI
8	MERCREDI	16	JEUDI	24	VENDREDI	1	SAMEDI

〔4月の予言〕 リョウジ、ついに大台に突入。著書「三十路は怖くない」を上梓し、ベストセラーになるが、間もなく絶版

AVRIL 1989

4

1	SAMEDI	9	DIMANCHE	17	LUNDI	25	MARDI
2	DIMANCHE	10	LUNDI	18	MARDI	26	MERCREDI
3	LUNDI	11	MARDI	19	MERCREDI	27	JEUDI
4	MARDI	12	MERCREDI	20	JEUDI	28	VENDREDI
5	MERCREDI	13	JEUDI	21	VENDREDI	29	SAMEDI
6	JEUDI	14	VENDREDI	22	SAMEDI	30	DIMANCHE
7	VENDREDI	15	SAMEDI	23	DIMANCHE	1	LUNDI
8	SAMEDI	16	DIMANCHE	24	LUNDI	2	MARDI

KOME KOME CLUB

〔5月の予言〕　トップ・ゴージャス、2年目のプロモーション開始。全国有線放送で続々チャート・イン。レコ大最優力候補

MAI 1989

5

1	LUNDI	9	MARDI	17	MERCREDI	25	JEUDI
2	MARDI	10	MERCREDI	18	JEUDI	26	VENDREDI
3	MERCREDI	11	JEUDI	19	VENDREDI	27	SAMEDI
4	JEUDI	12	VENDREDI	20	SAMEDI	28	DIMANCHE
5	VENDREDI	13	SAMEDI	21	DIMANCHE	29	LUNDI
6	SAMEDI	14	DIMANCHE	22	LUNDI	30	MARDI
7	DIMANCHE	15	LUNDI	23	MARDI	31	MERCREDI
8	LUNDI	16	MARDI	24	MERCREDI	1	JEUDI

KOME KOME CLUB

〔6月の予言〕　集中豪雨の影響で、米米CLUBの地固まる。土砂崩れを防いだ功績が認められ表彰される

JUIN 1989

6

1	JEUDI
2	VENDREDI
3	SAMEDI
4	DIMANCHE
5	LUNDI
6	MARDI
7	MERCREDI
8	JEUDI
9	VENDREDI
10	SAMEDI
11	DIMANCHE
12	LUNDI
13	MARDI
14	MERCREDI
15	JEUDI
16	VENDREDI
17	SAMEDI
18	DIMANCHE
19	LUNDI
20	MARDI
21	MERCREDI
22	JEUDI
23	VENDREDI
24	SAMEDI
25	DIMANCHE
26	LUNDI
27	MARDI
28	MERCREDI
29	JEUDI
30	VENDREDI
1	SAMEDI
2	DIMANCHE

KOME KOME CLUB

〔7月の予言〕　ハードワークの日々から生まれたメッセージ・ソング「私をプールに連れてって」が大ヒット

JUILLET 1989

7

1	SAMEDI	9	DIMANCHE	17	LUNDI	25	MARDI
2	DIMANCHE	10	LUNDI	18	MARDI	26	MERCREDI
3	LUNDI	11	MARDI	19	MERCREDI	27	JEUDI
4	MARDI	12	MERCREDI	20	JEUDI	28	VENDREDI
5	MERCREDI	13	JEUDI	21	VENDREDI	29	SAMEDI
6	JEUDI	14	VENDREDI	22	SAMEDI	30	DIMANCHE
7	VENDREDI	15	SAMEDI	23	DIMANCHE	31	LUNDI
8	SAMEDI	16	DIMANCHE	24	LUNDI	1	MARDI

KOME KOME CLUB

〔8月の予言〕　１ヶ月のオフ。幹部社員はオアフ島で作戦会議。「国内のバカンスが本モノのリッチマン」と石井豪語する

AOÛT 1989

8

KOME KOME CLUB

1	MARDI	9	MERCREDI	17	JEUDI	25	VENDREDI
2	MERCREDI	10	JEUDI	18	VENDREDI	26	SAMEDI
3	JEUDI	11	VENDREDI	19	SAMEDI	27	DIMANCHE
4	VENDREDI	12	SAMEDI	20	DIMANCHE	28	LUNDI
5	SAMEDI	13	DIMANCHE	21	LUNDI	29	MARDI
6	DIMANCHE	14	LUNDI	22	MARDI	30	MERCREDI
7	LUNDI	15	MARDI	23	MERCREDI	31	JEUDI
8	MARDI	16	MERCREDI	24	JEUDI	1	VENDREDI

〔9月の予言〕　石井竜也著「三十代を信用しなさい」発表。音楽界のふくろう博士の異名をとどろかせる

SEPTEMBRE 1989

9

1	VENDREDI	9	SAMEDI	17	DIMANCHE	25	LUNDI
2	SAMEDI	10	DIMANCHE	18	LUNDI	26	MARDI
3	DIMANCHE	11	LUNDI	19	MARDI	27	MERCREDI
4	LUNDI	12	MARDI	20	MERCREDI	28	JEUDI
5	MARDI	13	MERCREDI	21	JEUDI	29	VENDREDI
6	MERCREDI	14	JEUDI	22	VENDREDI	30	SAMEDI
7	JEUDI	15	VENDREDI	23	SAMEDI	1	DIMANCHE
8	VENDREDI	16	SAMEDI	24	DIMANCHE	2	LUNDI

KOME KOME CLUB

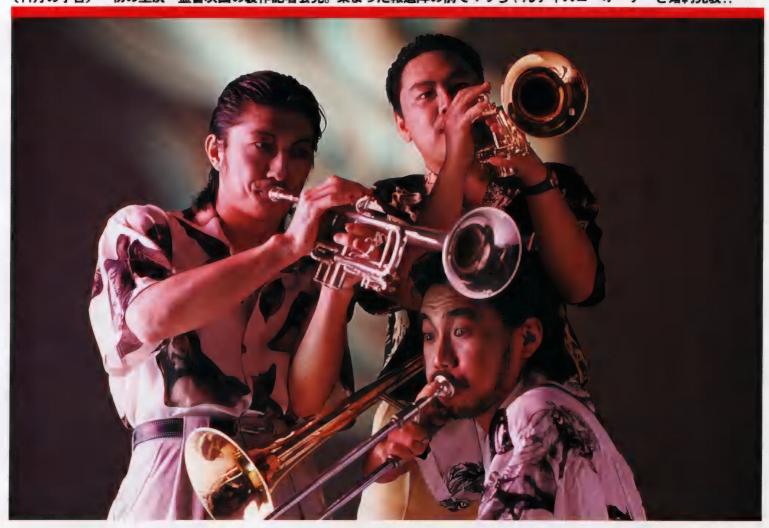
〔10月の予言〕　革命200年祭に招待され、フランス中の学園祭ツアーに旅立つ。Wドリブル・エクレア品切れ続出

OCTOBRE 1989

10

1	DIMANCHE	9	LUNDI	17	MARDI	25	MERCREDI
2	LUNDI	10	MARDI	18	MERCREDI	26	JEUDI
3	MARDI	11	MERCREDI	19	JEUDI	27	VENDREDI
4	MERCREDI	12	JEUDI	20	VENDREDI	28	SAMEDI
5	JEUDI	13	VENDREDI	21	SAMEDI	29	DIMANCHE
6	VENDREDI	14	SAMEDI	22	DIMANCHE	30	LUNDI
7	SAMEDI	15	DIMANCHE	23	LUNDI	31	MARDI
8	DIMANCHE	16	LUNDI	24	MARDI	1	MERCREDI

KOME KOME CLUB

〔11月の予言〕　初の主演　監督映画の製作記者会見。集まった報道陣の前でマリちゃんディスコ・オーナーと婚約発表!?

NOVEMBRE 1989

11

1	MERCREDI	9	JEUDI	17	VENDREDI	25	SAMEDI
2	JEUDI	10	VENDREDI	18	SAMEDI	26	DIMANCHE
3	VENDREDI	11	SAMEDI	19	DIMANCHE	27	LUNDI
4	SAMEDI	12	DIMANCHE	20	LUNDI	28	MARDI
5	DIMANCHE	13	LUNDI	21	MARDI	29	MERCREDI
6	LUNDI	14	MARDI	22	MERCREDI	30	JEUDI
7	MARDI	15	MERCREDI	23	JEUDI	1	VENDREDI
8	MERCREDI	16	JEUDI	24	VENDREDI	2	SAMEDI

KOME KOME CLUB

〔12月の予言〕 マリちゃんに続いてミナコちゃん婚約!? 「兄を大切にしてくれるヒトです」が波紋を呼ぶ！

DÉCEMBRE 1989

12

1	VENDREDI	9	SAMEDI	17	DIMANCHE	25	LUNDI
2	SAMEDI	10	DIMANCHE	18	LUNDI	26	MARDI
3	DIMANCHE	11	LUNDI	19	MARDI	27	MERCREDI
4	LUNDI	12	MARDI	20	MERCREDI	28	JEUDI
5	MARDI	13	MERCREDI	21	JEUDI	29	VENDREDI
6	MERCREDI	14	JEUDI	22	VENDREDI	30	SAMEDI
7	JEUDI	15	VENDREDI	23	SAMEDI	31	DIMANCHE
8	VENDREDI	16	SAMEDI	24	DIMANCHE	1	LUNDI

KOME KOME CLUB

〔1990年1月の予言〕　昨年の功績に対し、1ヶ月のハワイ島オフがレコード会社よりプレゼントされる

JANVIER 1990

1

1	LUNDI	9	MARDI	17	MERCREDI	25	JEUDI
2	MARDI	10	MERCREDI	18	JEUDI	26	VENDREDI
3	MERCREDI	11	JEUDI	19	VENDREDI	27	SAMEDI
4	JEUDI	12	VENDREDI	20	SAMEDI	28	DIMANCHE
5	VENDREDI	13	SAMEDI	21	DIMANCHE	29	LUNDI
6	SAMEDI	14	DIMANCHE	22	LUNDI	30	MARDI
7	DIMANCHE	15	LUNDI	23	MARDI	31	MERCREDI
8	LUNDI	16	MARDI	24	MERCREDI	1	JEUDI

KOME KOME CLUB

YASUYUKI OKAMURA

聖書(バイブル)'88

PHOTO●NAOTO OHKAWA　COPY●MIHO UTSUNOMIYA　STYLING●HIRONO TSUJITA　HAIR&MAKE-UP●YUKIO FUKAYA (COCONUTS)

岡村靖幸'88の行動と発言ダイジェスト版

名言ofオカムラ

ファミコン以上のパワーを持った音楽を作りたい。

家の中まで彼女が入るのを見届けてバイバイって手を振るような恋愛がしたい。

友だちにも電話したんだ。もしオレが人の悪口をみっつぐらい言ったら、君にコム・デ・ギャルソン・オムの上下のスーツをあげるっていって。

迎合っていうのはカッコ悪いもんだって、何回かやって気がついたんで、やめちゃった。

僕は典型的な普通の人

立派な人っていうと僕は神様を思い出すけどな

OK（オゲッ）

オレ青山学院に入ろうと思ったわけ。オレのこと知らないような普通のガールフレンドと出会いたくて、それで学校終わると実はスタジオ行ってレコーディングして「ピャーッ」とか言ってたりするミュージシャン界のジキルとハイドになろうと思ったんだけど……あのね、青山学院て入るのむずかしいんだよ。

オレは情けないジェネレーションの代表

オーゲーッ!! とか言いながら生きてて、才能ありまくりっっとか言って、天才っ、偉いぞオレはっっって、敬いなさい、みたいな感じで生きてる。……でも家に帰れば寂しいじゃん。

オレはね、巷では有名なの、私生活以外は完璧な男として。だって曲なんて神の教えでポンポン出ちゃうしさ。

1988，またも反省の色ナシ
オカムラ　イケナイコトダヨ　BEST10
1. 2月7日、セカンドアルバム『DATE』完成▶なんとデビュー2年目の新人にして、1年ぶりのアルバム。超大物のペースを守る。
2. 4月1日、エイプリルフールに嘘をつく▶親しらずの痛みが長びき、この日予定されていた'88年の初ライブを延期。文字通りの4月1日。
3. 7月31日、「オールナイト・フジ」出演▶岡村がインタビュー時に話題にするオールナイターズ。この日の感想はいったい……!?
4. 9月21日、シングル「聖書（バイブル）」リリース▶またしても発表してしまった話題作。サウンドはもとより、詞の内容が大反響を呼ぶ。
5. 11月2日、シングル「だいすき」リリース▶子供のコーラスがかわいい曲。自動車のCF曲となりましたが、こちらもかわいくて好評。
6. 5月29日、札幌ライブのアンコールでズボンを破る▶東京以外では札幌のみで行われたライブ。足をパシッと開いたとたんにビリリッ。
7. 4月8日、FM北海道"FM ROCK KIDS"スタート▶岡村靖幸パーソナリティー番組。初日の本番当日に内容変更事件発生。
8. 8月1日、パワーステーションライブ一時中断▶東京の月例ライブでスタンディングのファンがステージに押し寄せライブ一時中断。
9. 12月4日、ツアースタート。何と1年半振り▶本当に1年半ぶりのツアー。待たされきった全国の岡村ファン、久々に色めきたつ。
10. 11月3日、サードアルバムのレコーディング開始▶"誰もやらなかったことをやりたい"という。しかしまたしてもまたされる予感あり。

From「Out Of Blue」To「だいすき」

●'86年12月1日リリースの「Out Of Blue」から'88年11月2日リリースの「だいすき」まで。デビューからこれまで、8枚のシングルで追う岡村靖幸。タイトルだけ見てもとても彼らしい曲たち。さて歌詞にはどうオカムラが表現されているか…

Out Of Blue

――この当時の岡村君の生活がよく出てる詞かな。

「そうそう。だってオレその頃はまだ作曲家の先生でさ、ヒマがあるわけよとりあえず。夜中に夜ふかしして次の日に何時に起きようと自分の勝手だしさ。で、その頃いちばん六本木とか行っててさ、朝まで遊んで家に帰ってTVつけててさ、そうするともうニュースとかやってんだよね」

――夜はやっぱり好き?

「んー、好きっていうか、いちばん快適なのが夜。仕事もすごくするし頭もものすごく回転してて、それがよくなかったりするけど。だからヒマなときとかね、回転しすぎてどうしていいんだかわかんなくて困っちゃう」

――普通夜っていうとおとなしくなっちゃう感じなのに逆だね。

「でもホラ、六本木とか行くとバカな人がボンボンボンボン歩いてるじゃない」

――バカな人(笑)ボンボンボンボン(笑)

「バカな人じゃないや、ンー、いろんな人がボンボン歩いてるから人によっては違うんじゃないかな。夜は騒ぐ時間とか思ってる人もたくさんいるんじゃないかな。大学生なんかみんな夜光虫みたいに光のあるところに行くじゃない、コンパだなんだって毎日、毎日」

――そういう人もこの詞のように空しさや淋しさを抱えてるかもしれないと。

「そうかもね。ただ酒が好きだとかいろいろいるんだろうけど」

――ファースト・シングルが出た気分は?

「気分はねえ……んー、わかんないけど、あんまり覚えてないけど嬉しかったんじゃないかな、きっと」

Check Out Love

――この詞は岡村君の王道というか。

「そうだね、そうそう。オレね、『YELLOW』の中でこの詞は結構好きだよ。

――どういう理由で?

「まず言葉のノリが非常に楽しいっていうのと、あとここらへんから自分にしか書けない詞が少しずつ書けてきたかなって感じで」

――"友情なんか欲しくない"ってふうに言ってますが。

「うん、言ってますね。だから女の子が『ごめんなさい友達でいましょう』とか言うじゃない。そういうこと言う人はよくないなぁ、って思ってさ」

――ズルい感じがする?

「んー、ズルいっていうか友達なんてあり得ないんだからさ。恋愛感情を抱いてなくてホント人間的にいい人だなとか、面白い人だなっていう、初めからそういうところから入るんだったらOKだけど、いったん好きになったのにそっから友情なんかになれないでしょ」

――ああ。でもそれは女の子も一緒。

「絶対そうだと思う。女の子も一緒なのにそういうこと言うからさ、よくないこと言うじゃん、みたいなさ」

Young Oh! Oh!

――タイトルが素敵だよね。

「うん……これはね、仮タイトルっていうのがあってね、詞とかできてなくてそのときに『YOUNG OH OH』って自分で仮につけといたの。曲が若さがはちきれんばかりの曲だったからさ。でねぇ、ちゃんとしたタイトル考えようと思ったわけ。こんなタイトルつけたら笑われるって思ってさ。でも浮かばなくってウチのオジさんのディレクター達に聞いたらみんなも浮かばなくてさ、『YOUNG OH OH』でええんちゃうかぁ」って言って決まっちゃったの。『えー、笑われるよぉ』とか言ったんだけど決まっちゃったの」(注・関西のTV番組に"ヤング・オー・オー"というバラエティ番組があった)

Dog Days

「これはね、単品として出たシングルなんですね、これが。だからどのLPにも入ってないんですけど、いつ頃作ったかというとですね、『YELLOW』が出てですね、渋谷公会堂でコンサートが終ったあとディレクターのオジさん達がまたやってきてですね、『オカムラ、LPなかなか好調やでぇ、宣伝しないわりには』とか言うわけ。『こらシングルさっそく作らなあかんな』とか言うわけ」

――関西の人が周りに多いんですね(笑)

「んー、神戸ばっかりですね。それで『作らなあかんな』とか言うからOK、とか思って。それでもうすぐ夏だなぁとか思ってね、じゃあ解放的な明るい歌作ろうと思って作ったの」

――ふられたことを太陽のせいにするのはちょっといただけないですね。

「そそそそ。逃避ですか?」

――逃避的なところが岡村君にもある?

「そうね。オレなんか結構恋愛に関して……恋愛に関してだよ、もう逃避のオーソリティというか神様というか、もうすごいよ」

――(笑)やっぱり心を打ち明けようとすると歴史に残るほどの勇気が必要ですか?

「人によってじゃないのォ? オレは必要だな、オレはまず人に言ったことないからさ」

イケナイコトカイ

「当時はこの詞が評判悪くてね、スタッフの間で。最初は、全然誉められなくてね『あかん。あんまりよくない詞やなぁ』とか言われて。『週刊誌は僕らのことを知らない』ってお前そういう有名人とかとちゃうやろ」とか言われるわけ。それでその頃から僕は自分を通すようになって『いや、僕はこれで行くんです』みたいな感じになってね。さぁ、ここらへんからですね、岡村靖幸のビジネスにおける独裁的なあのシステムが少しずつ始まりつつあったのは」

――独裁なんだ(笑)

「そう。昔はいろいろゴタゴタあって、全部演奏とかアレンジしか自分でやりたいとか文句言って、スタッフとのけんけんがくがくの中で一人独立してですね、戦ってたわけなんですけど、この『イケナイコトカイ』が今のシステムになったきっかけの歌ではないかという、適当なことを言いつつ、えー、生きていきたいなと思いますけど」(笑)

――この"いけないことかい?"って問いかけが気弱で気になりますけど。

「だってオレ気弱な男の子だもん。気強な男の子だったら今頃こんな私生活送ってないでしょう、まったく」

SUPER GIRL

――これは具体的な意見が出てくるよね。

「もう完璧だから。僕のいわゆる"オールナイト・フジ"批判の集大成というか」

――あ、批判なの!?(笑)

「批判ですよ、もう。批判っていうか悔やしいっていうか、まぁなんちゅうんでしょうか、批判と悔やしいが入り混じって、てんてこまいみたいな感じかな?」

――"君はまだ知らない、本当の男というものを"っていうのは、これは岡村君の歌を聞いてれば男の子がどんなものかわかるってことでしょうか。

「ていうかね、オレの自己PRっていうか自己宣伝ていうか、オレにすればいいじゃん、っていうね」

――"ベン・ジョンソン"と"フェイ・ダナウエイ"の名前、これはどうしてこの名前が出たのかってよく質問されたでしょ。

「そうそう。そういうときはね、もう答えはいつも同じで……」

――なんだっけ。

「教えてあげなーいっていうの」(笑)

聖書(バイブル)

――これは超話題になりましたが、あんなふうに話題にされると思っていましたか?

「思って……いませんでした。これは書き終ったときは総スカン食うと思ったの。『オーゲー』つって、『天才!』つって、ピーッって書いちゃったらさ、書いたあと冷汗が出てさ、これはみんな怒るだろうな。ウチのディレクターから、宣伝スタッフから、もう事務所の社長から、レコード会社のエラい人から(笑)。もう総スカン食うだろうなって」

――そんなこと言っちゃっていいの?(笑)

「だから『こんな曲書くんじゃねえよバカヤロー』みたいなさ、『何言ってやがんだ』みたいなさ、絶対言われると思って書き終ったとき冷や汗でちゃって、どうしようかと思ったんだけど、結局時間がなくてさ、渡しちゃったんだよね」

だいすき

――最後の「だいすき」です。

「これはだからね、シングルでもLPのなかでもあんまりなかった……久しぶりに郊外に出たっていう歌ですね。いわゆる家から外、部屋から外、の」

――あと世界観がおだやかだよね。誰かを攻めてるわけでもなく。

「ポジティビティ……僕のポジな姿勢、ポジでなくちゃいけない、ポジティブでありたいって願望が出てる久々の、岡村靖幸の歌だと思っていたりしますけどね」

――明るい歌です。

「テーマは"ポジティブ"、そして"家から外、部屋から外"と」

――最初の頃のシングルとこの「だいすき」とではどこか変化がありますか?

「んー、それはとりあえずレコーディングのやり方っていうのがまったく変わったっていう、そんな感じじゃない? だからね、これはいい曲です。タイトルも好きなんだ、オレこの『だいすき』ってタイトル。いいな」

――自画自賛の嵐です。(笑)

YASUYUKI
OKAMURA
聖書
'88

YASUYUKI OKAMURA
聖書(バイブル)'88
オカムラになるにはこれだぜ。
HOW TO BE OKAMURA
1.神のお告げによって、曲を書く。
岡村君がこれまでに発表したほとんどの曲は、神のお告げによって生まれた。スタジオに一人こもり、静かに目を閉じて待っていると「靖幸や、こういう曲を書きなさい」と教えてくれるらしい。そもそも神の声が聞けるってあたりに天才の由縁があるわけ。
2.発音は「オーゲッ」。オーケーは×。
「オーゲーッ」。これは気弱な感じで発音してはいけません。あくまで強気に、オレがいちばんってノリでカッと言う。「オーゲッ」の他にも「まーいっちゃった」「…まくりっ」「問題山積みっ」等、ログセが多い人です。どれも岡村君の周辺で大流行。
3.世界史の教科書を持ち歩く。
けっこう読書は好きみたいです。ある日ツアー・バッグの中に入っていた本を挙げると、トパーズ／村上龍、料理小説集／村上龍、世界のブラック・ジョーク集／作者不明、タイトル不明／林真理子、倫理社会の教科書、世界史の教科書。岡村君ワールドしてます。
4.なにやらバスケが上手いらしい。
高校の時はバスケット・ボール部に入っていました。179cmの身長を武器にまんまと選手の座を獲得しましたが、「モテなかった」そうです。岡村君いわく「バスケはファンキーなスポーツ」だから「ダンスが上手くなりたかったらバスケやればいいよ」だって。
5.レンタル・ビデオにやたら詳しい。
"別れぬ理由"アレは見なきゃダメ、絶対にチェックだよってことで皆さん、ぜひ借りて見て下さい。三田佳子主演のアレです。カウチ・ポテトが流行りましたが、「オレなんか昔っからそうだったもん。パイオニアだよ」って、エバる岡村くんが私は悲しい。
6.私生活がつまらない。絶対条件。
「私生活以外は完璧な男」発言が世間で話題と笑いを呼んでしまったようですが、あの!キヨシローですら「なんで曲書くかって、そりゃ私生活がつまらないからでしょー!!」と言っているし、表現者の絶対条件なのかも。でもキヨシローにも彼女はいる。(笑)
7.やっぱりポジティブでなくっちゃ。
岡村君の考え方の基本は「常にポジティブであること」。現実の良い面も悪い面も含めてちゃんと認知したうえで行動を起こす。物事を否定的に取っちゃいけません。チェッカーズの…も「人間は前向いてしか歩けんもん。簡単なことだい」と申しておりました。
8.革命を起こす気でいるらしい。
岡村靖幸の革命。それは「具体的に言うと僕のアルバムが売れること」。売れることによって、岡村君の考え方に賛同する人が増えて革命が始まるわけです。紫のレースと宗教グッズを身につけた23歳の革命家の革命は、実はヒットすることだったりしてね。
衣装協力●VIVIENE WESTWOOD ☎(03)496-3251 LONDON DREAMING ☎(03)499-6355

NEW TOWN CHILD

LONG INTERVIEW

関口誠人。

MAKOTO SEKIGUCHI

『君の名を呼びたい』シリーズを好評連載中の関口誠人。パチ▼パチの中では極めておもしろいセンスを見せてくれてる彼は今、何を考え、何を見つめてるんだろう？　今年一年間ってどんな年だったんだろう!? さぁさぁ、お待ちかねのロングインタビューですョ!!

●撮影 中川文雄 ●文 森田恭子 ●衣装 佐藤慶明（コード）

（衣装協力）アイ・ティーズ☎(03)478-0430

[言葉の人かな僕は、って気がしてるんだ。]

MOKOTO SEKIGUCHI ▶LONG INTERVIEW

次から次へとページをめくり続ける彼にとって、ソロ・デビューを果たした年、'86年という"本"は、どんな大きさで、どのくらいの厚さだったろう。

それはもちろん、彼自身にしかわからないのだけれど、きっと、いろいろなタイトルの付いた背表紙が並ぶ棚の中でも、大切に大切にしまわれるのではないかと思う。

その中味を、もう一度少しだけ、彼に見せてもらおうと、インタビューを申し込んだ。そして彼はやって来た。映画に出演するため、髪を（かなり）短く切って、帽子を目深にかぶって。

久しぶりの、関口誠人のインタビューである。

——今年1年を振り返ってみて、どうでしたか？

「前半ゆるやか、後半急に忙しくなってきたっていう感じの年。レコードを作って、より自分のやりたいこと、っていうか、やるべきことが明確になった。去年からいろーんなことをやって、なんとなく自分ではどういう方向に行けばいいのかっていうのがね、確認できるようなところがあって。おそらく、これからどんどん、僕が思ってる方向に向かって、一生懸命やっていくんだと思うんだけどさ、ウン」

——一応、映画とか本とか、音楽以外のジャンルをやってみて、何か見えてきたって感じ？

「たとえば、あっちにも可能性があるな、こっちにも可能性があるな、っていう時代はもうとっくに終わってて。（笑）今はもう、"あ、僕はこういうことやる人なんだな"っていうのがよくわかってきてさ」

——やっぱりそれは、ひと言で言えば"音楽"ってこと？

「ま、もちろんそうなんだけど、たずさわり方もね、いろいろあると思うしさ、音楽に対してでも。で、やっぱり漠然としてあるのは"音楽"の人かな、僕は、って気がしてるんだよね」

'86年春、彼が発表したソロ・デビューアルバム『FOLK SONG』は、各方面から絶賛を浴びた。そのほとんどは、彼と同じか、ときにはそれ以上の世代だったかもしれない。

以前からの彼のファンは、彼の音楽をどうとらえたのだろうか。そして、彼の音楽を受け入れ始めた新たなファンは、彼自身をどう感じているのだろうか。

4月から5月にかけて、足のケガをおしながらツアーを敢行。3月に、アルバムより先行してリリースされたシングル「東京ラバーズマップ」に続いて、7月にはアルバム・タイトル・チューンをシングル・カット。夏は数々のイベントに参加した。特に、8月5日に行なわれた『HIROSHIMA』は印象に残っている。

「やってよかったな、と思いますね。参加したすべてのイベントに関して。全然（自分を）見たことのない人達に見せることができたり、前から応援してくれる人達にはさ、"あ、がんばってるな"っていう部分を感じてもらえるだろうし、それと他のバンドとかのノリも見れたし、で、今どんなバンドがパワーあるかっていうのも実感としてわかってさ。すごくやってよかったと思う」

——お客さんの反応は？

「すごく盛り上がったところもあるし、まったく盛り上がらなかったところもある。けっこう両極端だけど、どうして盛り上がったのか、どうして盛り上がらなかったのか、とかさ、すごく理由もよくわかった」

——理由って？

「たとえば広島でやった"FRESH SOUNDS CONTEST"っていうのは"UP-BEAT"と一緒にゲストで出たんだけど、とりあえずは彼らのファンと地元のアマチュア・バンドを見た来た人達っていうのがかなり多くて、その中でやったんだけど、"オッ、なかなかいいね"っていう感じはしたけどね。C-C-Bっていうのはなんかチャラチャラしたバンドだと思ってたけどけっこうやるじゃない"ってとこかな（笑）」

——逆のパターンは？

「全然ダメだったのは、つま恋。吉田拓郎さんのイベント」

——それは意外だね。

「もう、まるで。（笑）やっぱり拓郎さんのパワーっていうのは。圧倒的なものがあるわけよ。もう、想像以上に」

——なるほどね。自分自身のツアーについてはどうですか？ 本数はあまり多くないけど、もっとたくさんやりたいとか……

「レコードが先行するタイプだと思ってるから、自分は。だから、レコードが評価されないうちは、どれだけライブをやってもだめだと思ってるの、僕は。それは、理由って言われても困っちゃうんだけどさぁ、本当にライブっていうのは、肉体っていうとこが多くて、もちろんそれは精神に裏付けされた肉体なんだけど、自分はそういうタイプじゃないな、っていうところかな。やっぱりライブも大好きだけど。僕はよりいいレコードを着実に作っていきたいんだよね」

——ウン。それはわかるような気がする。ファースト・アルバムに関しては、どう？

「それなりに、納得してるんだよね。でも、もっといいものを常に作って、そのもっといいものをその次にまた作って、っていう積み重ねで、ま、アルバム5枚くらい出揃ったときにね、"あ、いいライブをやる人だな"っていうふうになっていけば、それがいちばんいいと思ってるし、ウン。アルバム5枚ってことはさ、相当先の話になるけど（笑）」

——5年くらい先、かな。

「だけどそのくらい、もう1回積み上げていかないとダメかな、っていう感じ。そういうのも今年1年でわかったことだし」

——ファンの人とかって変わった？

「どうだろ。……変わってないんじゃないかな、あんまり。ただね、なんか僕と、C-C-Bの、両方に行くっていう人は少なくなってるみたいね。どっちか、っていうパターンみたい。でね、決して僕のファンの年齢層が高いってことじゃないんだな、コレが。不思議なことに。（笑）すっごく若いコとか来るんだよね。中学生とか」

——でも、TVを見て"ライブに行こう"とか思ったコじゃないわけでしょ、とりあえず。

「ウン。（TVの音楽番組に）出てるわけじゃないからね。でもさ、なんでその中学生が、オレんとこに見に来るのかってことを考えたときにね、なんか来たい、と思うとこがあるんだろうな、だったらそれを自分で確認する方がより建設的だな、と思ったわけよ。それを分析して、そこをもっと伸ばしていいと思ってるし。ライブに関してはね」

——その分析の結果、というか、答えはまだ出てないの？

「なんて言うかさ……。ちょっとエッチな感じで、なーんかちょっと危ないムードを持ってる、っていうのが好きなんじゃない？ そういうコ達って」

——生理的な部分かな、けっこう。

「そうみたい。刺激がほしい、っていう」

——それって、すごいものがあるよね、その感性って。

「ウン。もうちょっとね、だからそこらへんのことを考えてみようかな、とは思ってるんだけどね」

——逆に、年齢層の高いファンの人は、増えたでしょ？

「ウン。そういう人達は、たぶんレコードを聞いてきてくれてる人達だと思うんだけど。若いコ達は"何だろう、ちょっと地味だな"って思っちゃってると思うの、きっと。で、そこらへんも、今度の音作りでは少し意識してるんだよね。「ニュー・タウン・チャイルド」を出したから、わりとこう、硬く、社会的な方にどんどん傾いていくのかな、っていうふうに思ってる人もいると思うんだけど、決してそういうんじゃなくてさ」

——思い入れみたいな部分を教えてもらえますか、「ニュータウン——」の。

「なんか、底にある"美しさ"みたいなものを感じてほしい、っていうとこがあってさ。"美しい"なんて言ったらいけないのかもしれないけど。その……朝、子供が淋しそうにポツンといる写真が1枚あったとしたら、"あー、なんか悲しいな"とかさ、心惹かれるところがあるんじゃないかなっていうイメージもあるんだよね。だからさ、"こういう現状がありますからみんなで何かしましょう"って言うよりは、その1枚の写真がきれいだな"とか"何か心惹かれるものがあるな"っていうようなイメージの方が強いわけ、僕にとって、あの曲は」

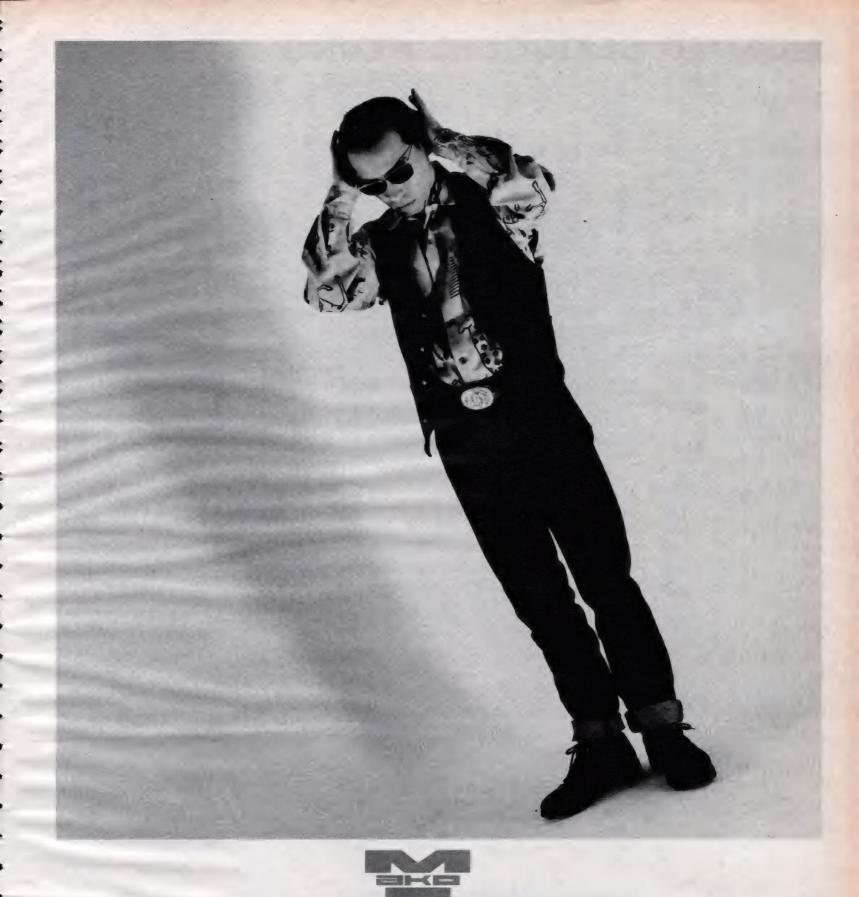
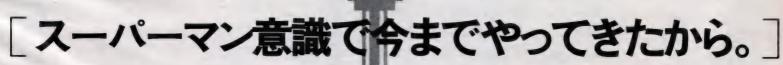
——関口君が感じたことを、ただ自然に、素直に歌ってるっていう……。

「そうそう。それは『FOLK SONG』もそうだし、"東京・LOVERS MAP"もそうだし。ソロになってから作ってきた曲ってみんなそうなんだけどさ、ある状況を描写しているに過ぎなくって、それがたまたま、そのちょっと不幸な家庭のことを歌ったら、ヘビーな歌になっちゃった、っていう、ただそれだけのことでさ」

——曲調とかは別として、関口誠君の歌は、

NEW TOWN CHILD

[スーパーマン意識で今までやってきたから。]

MOKOTO SEKIGUCHI ▶LONG INTERVIEW

淡々としてるのが多いよね。詞、というか、視点が……。
「けっこうクールでしょ」
――C－C－Bの頃って、わりとポジティブな"がんばれヨ"とか"元気出そうぜ"っていう感じが多かったじゃない？ そういうのが書きたくなるときはないの？
「ウン、あるよ。それが"雨の満塁ホームラン"って曲でさ、(『FOLK SONG』の)B面入れて出しちゃったけど"こんな軽薄な歌、よかったかな"とか思ったときもあったんだけど(笑)」
――あ、そう？
「ライブでやるときさ、盛り上がるわけよ。だから、形になったときと、頭の中で考えてるときだけとはさ、また違うんだよね、全然」
――そうだよね。人が聞いて、その人のフィルターを一回通ってきたものって、また違うんだよね。
「そうそうそう……。わりと僕はね、今後あんまり考え過ぎずに、ストレートにやろうと思ってるの。自分を見失わないようにね。だからね、それがわかったんだよね。今年いろんなとこに、こう、ぶつかるように……。たとえばイベントでも全然知らない吉田拓郎のファンの前でやるっていうことも、ひとつのぶつかりだったしさ。物を書くこともそうだし。インタビューとかでも"何がやりたいんだ"的な声もあるわけよ。そういうとこにぶつかってみたりさ」
――"一体、あなたは何がやりたいの？"って？
「そそそそ。だけど、またひとつ、そこで学べたりすることもあったんだよね。ウン……。そういう1年だったみたい、今年は」
――去年はバンドから独立して、ひとりで歩き出した年だったけど、今年は、その方向が見えてきた、っていう。
「"関口誠人"っていう名前が、すごく落ち着いてきたみたい。今まではね、どこかでやっぱり、フッ切れてなかったというか、自立しきれてなかったというか。……そういう意識はどっかであったんじゃないかなって気はする。ま、もうちょっと、素直にストレートにやろうと思ってるんだ」
――まだC－C－Bを引きずってた、っていうこと？
「ウン。そうだね。ま、何年間もやってたしね。……でもね、こーんなに忙しくてさ……。忙しいんだよ、今、本当に。(笑)ライブと映画とプロモーションと、原稿の締め切り。それとマンガの原作の方も締め切りに追いまくられてるんだよね。あと、曲の依頼が何曲かあってさ。……そういう中でもたとえば、同じような状況がC－C－Bのときもあったんだよね。そのときは、年齢的なものもあるのかもしれないけど、もう、不安定でさ。"あー困ったな、胃がイテェ"みたいな世界だったんだけど。今はね、すごく、精神的に安定してるんだよ」
――具体的に言うと？
「自分はどこに力をいちばん注げばいいか、ってところがわかってるというか。それはどこかで手を抜こうってことじゃなくて。自分の、気持ちの置き方っていうかさ。たとえば、作家としても作詞家としても認められたい、アーティストとして一線でやっていきたい、っていう、もうスーパーマン意識でずーっと今までやってきたから。……決してあきらめたっていうんじゃなくって。僕はね、何をやっても"関口誠人という人には変わりないんだ"っていう感じのことだよね」
――そう思うようになったのって、いつぐらい？
「イベントをやってからじゃないかな。……それでかなり思ったね」
――じゃあ、大きかったね。イベントに出たことは。
「大きかった。なにしろ、精神的に、今すごくいいよ。将来が楽しみでしょうがないっていうかね。前向きな姿勢だね」
――今、レコーディングはしてないの？
「本当はしなくちゃいけないんだけど。まだしてない。(笑)でね、ずーっと書きためてた曲もあるんだけど、それをもうちょっと考え直してみようかなって思っててさ。けっこう前に作った曲って、ムズカシイっていうイメージを与えちゃうらしくて」
――その曲が？
「ディレクターとかがさ、ヒジョーに難解だっていうわけよ。歌詞の内容もそうだし、メロディーとかも。……ってことは、考え過ぎたのかな、って」
――『FOLK SONG』も、わりと練られてる、っていう感じがするけど。そこがスゴイネ、とも思うけどね。
「今度は、もうちょっと、まっすぐ行こうかな、と思ってる」
――自然な感じで？
「うん」
――なんか、いい意味で力が抜けたっていう感じなのかもしれないね。
「ウン。……人に会うのも楽しいんだよね、だから。前は、自分の世界をいつも忘れたくないから、どっかで、人に会うのが怖かったんだ。なるたけ影響受けたくない、とか。なるたけ何も見たくなかったし、何も聞きたくなかったし。……そういうことがあったんだけどね」
――でも、前から、いろんな人と会って話したりするの、好きじゃなかったっけ？
「何か吸収しようとしちゃうんだよね。リラックスして会うっていう感じじゃなかった。会うこと自体が楽しいっていう感じじゃなかったような気がするんだよね。今は、とりあえず、そこにいることに自分が楽しくて、よく考えてみると、後で気がつくんだけどさ、そういう方がずっと、お互いに与え合うものが大きかったりするんだよね、ウン。構えて会うとやっぱりダメ」
――そうかもしれないね。……今、いちばん興味あることは何ですか？
「やっぱり人間ですね。いろーんな人」
――誰とでも？
「ウン」
――でも、実際に会ったりする時間がないでしょう？
「ないけど、会うよ。夜中とか(笑)」
――あ、そっか。
「東京も、なかなかおもしろくてさ、グチャグチャで(笑)」
――ちゃんと遊んでる。
「いいとこも見つけたんだ。言っちゃうとみんなが行くと嫌だから言わないけど(笑)」

気持ちとカラダのバランス。仕事と遊びのバランス。楽しみなことと時間のバランス。そういうことの全部をうまくいかせるには、やっぱりオトナになるまでに、いろんなことを経験して、いろんなことを感じていないと、無理なのかもしれない、と思った。だからこそ、オトナになる前の感性も、光り輝やいて見えるのではないだろうか……。
関口君と話していて、そんなことを考えていた。彼は今、20代最後のシーズンを謳歌しているところである。その楽しみ方はハンパじゃない。チャレンジとエクスペリエンスにあふれて、笑ったり泣いたり怒ったり、忙しい。そんな彼の中から生まれてくる音楽――彼に限って、まったくジャンル分け不可能な、音楽そのもの――は、どんな言葉を発し、どんな音で構成されているのか、今は、想像することが難かしい。しかも、いくつもの年を(まるで本のように)重ねてきた人だから。
彼の髪が伸びる頃、私達はたぶん、彼の新しい音を聞くことができるだろう。

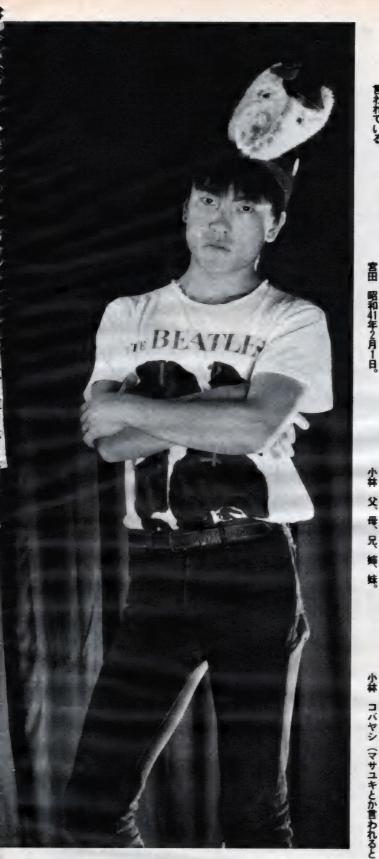
――'89年の抱負は？
「春ぐらいに、なんとか新しいアルバムを出したいと思ってるんですけど。それを期待してほしい、というのと、それに合わせてコンサートをやりたいし。で、パチ▼パチから出るニュー・ブックも期待してほしいですけどね(笑)」
――ですね。(笑)
「あと、ビデオ作ろうかなー、と思ってるでしょ……」
――また忙しくなりそうですね。
「ま、自分の中では、いろいろ企画が、たくさんある、と。でも基本的にはやっぱりいいレコードを作りたいね」
――でも、なんかこう"気が多い"みたいなイメージがあるじゃない？(笑)だからやっぱり音楽をやりつつ、それに付随していろんなことをやっていくんじゃないかと、予想はつくんですけど。
「それは全部、言葉が基本になってくるものだと思う。僕の言葉、みたいなのをね、確立したいっていうのが、けっこう目標なんだ、今の」
――音楽に関しても、詞の部分とか？
「そそそ。けっこう僕の独特のスタイルってあると思うんだよね……。だから、いろんなことをやっていくとは言っても、みんなそういうところから始まってることだから。まったく違うもの、っていうのは、だんだんやらなくなると思うんだよね」
――それが、いちばん初めに言ってた"見えてきた"っていうこと？
「そうです」

関口君からのウケウリだけれど、髪の長い人は、やさしい人が多いらしい。反対に、髪が短かくなればなるほど、性格は攻撃的になるそうだ。

昨年、突如勃発したバンド・ブーム。が、しかし、決してそんなブームを引っぱるでもない、期待のニューバンドが、今年も大暴れしてくれた。バンド——それは、そのユニットにしか演れない、独自の音世界を構築できる、唯一の形態である。"やっぱしバンドがオモシロイ"。1988年末、あえてパチ▲パチはそう呼びたい。そして、君たちも……。

NEXT SCENE

やっぱしバンドがオモシロイ! '89

- ▶ JUN SKY WALKER(S)
- ▶ GRASS VALLEY
- ▶ KATZE
- ▶ FABIENNE
- ▶ THE ELEPHANT KASHIMASHI
- ▶ LÄ-PPISCH
- ▶ THE TOYS
- ▶ ROLLIE

NEXT scene

JUN SKY WALKER(S)

ジュンスカイウォーカーズ

●まさに彼らは、新世代のロックンロール・バンド!! デビュー1年目にして、既にニコニコROCKの代表格と言っても過言ではないだろう。そのサウンドは、あくまでシンプル、そして鮮やかで、同世代の若者の胸を打つさわやかなメッセージにあふれている。
"ジュンスカ"は今、'89年のロックシーンへはばたこうとしている。
●デビュー＝［ミニアルバム］全部このままで（'88年5月21日）、［シングルビデオ］全部このままで（'88年6月21日）、［アルバム］ひとつ抱きしめて（'88年11月10日）。
●所属レコード会社＝VAPレコード（トイズ ファクトリー）
●所属事務所＝バッドミュージック
●ファンクラブ＝〒160東京都新宿区新宿1-29-5グランドメゾン新宿東501号 J(S)W FC入会係☎03(352)3779

TAPPASHI・BAND・GA・OMOSHIROI

やっぱしバンドがオモシロイ!

Q1 名前の由来は?

宮田 オヤジが和久で、僕が弥生時代に生まれたので、和弥となる。

寺岡 北海道にある駅の名前からとったらしい。

小林 よく分かんないんだけど、おじいちゃんがつけてくれた。うちの兄ちゃんも、○之だから、之(ユキ)のパートIIと言われている。

森 純はオヤジ、太はおじいちゃんからつけた。

Q2 バンド名の由来は?

宮田 ジュンタ。

寺岡 ジュンタ。

小林 ジュンタ。

森 オレが着いていた、Tシャツのロゴからとった。

Q3 生年月日&生まれた場所は?

宮田 昭和41年2月1日。

寺岡 昭和43年2月7日。岡山県、津山市。

小林 昭和40年5月13日。聖母病院午前4時頃。俺はシスターがうろうろしてる所で生まれた。キリストと言われている。

森 昭和40年3月10日。うお。

Q4 家族構成。

宮田 両親、弟、姉、祖母、犬、うさぎ。

寺岡 父、母、犬、サル、キジ、モク。

小林 父、母、兄、姉、妹。

森 サル、キジ、モク。

Q5 身長・体重・靴のサイズ・視力。

宮田 165cm、53kg、24・5cm、1.5、1.5。

寺岡 174cm、59kg、26・5cm、右0.5、左1.5。

小林 174cm、59～62kg、26cm、両目1.2。

森 177cm、62kg、27cm、2.0。

Q6 バンド内でなんと呼ばれますか?

宮田 ボール。

寺岡 よひと様。

小林 コバヤシ（マサユキとか言われると鳥肌が立つ）。

森 HEY! ジョニー! 冗談じゃないよ、ホントだよ。

Q7 小さい頃のあだ名。

宮田 ジミー。

寺岡 寺ちゃん。

小林 こばっち、コバ、ガークン、まーちゃん。

森 オバQ。

Q8 趣味。

宮田 パチンコ。

寺岡 旅行、映画、友達の家へ夜中の不法侵入。

小林 最近はパチンコ（するとしばらくやめ、出ると毎日やる）。

森 レコードを聞く。

Q9 特技。

宮田 パチンコ。

寺岡 ピンボー。（ムダ金使い）

小林 大声を出すこと、ギャー! 昼寝。夜にトマトを喰う。（今もこれを書きながら喰ってる）

森 バック。

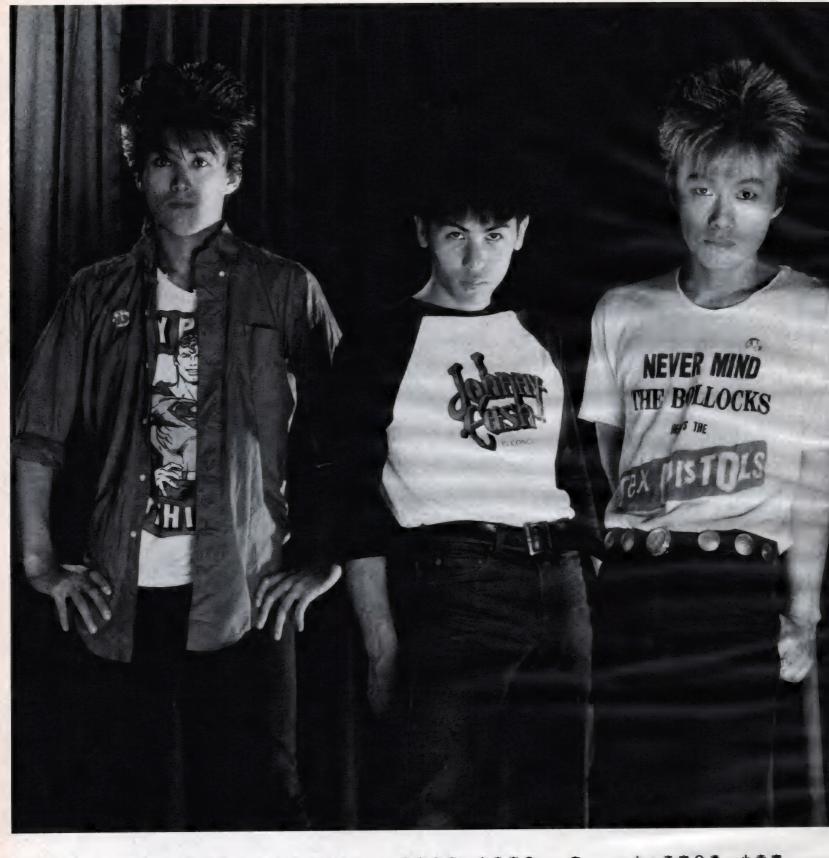
Q10 今、一番欲しい物。

宮田 愛。

寺岡 CDプレイヤー。

小林 ランボルギーニイオタ、リンプスターのドラムセット。

森 でっかい家とでっかい犬。

Q11 今、一番お金をかけているもの。

宮田　パチンコ。
寺岡　ボクの人生。（つまりパチンコ？）
小林　こりゃー、やっぱりパチンコでしょう。
森　CD。
Q12　好きな食べ物、嫌いな食べ物。
宮田　好・すし、嫌・グリンピースごはん。
寺岡　好・カレーライス、中村屋の月餅。嫌・ラッキョ。
小林　㊛刺し身、寿司、しゃぶしゃぶ、つけ物、赤だし。
　㊜牛舌、安いカレー、あんまりない、ホイコーロ。
森　サンマ、ブリのてりやき、ポテトサラダ、レバさし。きらいなものは、ほとんどない。
Q13　血液型&自己分析。
宮田　RHマイナス。
寺岡　血液？　のほほんとしている。
小林　Bだよ。単純、すぐ落ち込む。竹を割ったようなおじょうさん？
森　Aがた、日本一まとも。
Q14　尊敬している人物。
宮田　赤木先生。
寺岡　平賀源内。
小林　羽仁吉一、先祖、じいちゃん、ジョン・レノン。
森　グルーチョ。
Q15　最初に買ったレコード（それはいつ頃？）
宮田　ピンクレディー、小学時代。
寺岡　小学生の時（海のトリトン）
　中学生の時（井上陽水）
小林　ビートルズ、オールディーズ（中学2年）見つかったら怒られると思って隠していた。
森　小学校5年の時、B・C・R、二人だけのデート　EP。
Q16　最初に観たライブ（それはいつ頃？）
宮田　せんばいのバッドカンパニー。中一の時。
寺岡　中学3年の時RCサクセション。ちなみに小学4年の頃さだまさしというのもある。
小林　RCサクセション（中学2年の冬）
　サイコー！　一ッ橋大学学園祭にて。
森　「チャー」大分でみた。中学1年の時。
Q17　好きな女の子のタイプ。
宮田　ミポリン。
寺岡　特にないけどおとなしい人。

JUN SKY WALKER(S)

小林　デカパイ、Dカップ、渡辺満里奈。たかぎさや。
森　キョンキョン。
Q18　来年の今頃どうしてると思う?
宮田　パチプロ。
寺岡　バンドやってる。
小林　冬になってよろこんでる。
森　金持ちになって、サテンをひらいていると思う（笑）きっさ「おこりんぼ」って名前の
Q19　もしミュージシャンになってなかったら。
宮田　地あげ屋。
寺岡　わからない。
小林　AVに出てたい。
森　よっぱらい。
Q20　癖。
宮田　口をとがらせる。
寺岡　くせはわからないが、寝ぐせはいつもある。
小林　ゴミを投げる。ゴミ箱にちゃんと入ると、もしかして俺にはバスケット選手の血が流れているんじゃないかと思う。
森　よく分からない。
Q21　愛読書。
宮田　バイブル。
寺岡　エルマーのぼうけん。
小林　坊ちゃん。ドラエモン。彼こそストーンズ。週刊デカメロン（エロマンガ）。キースリチャード（ローリング・ストーンズ）
森　本も、マンガもくだらない。
Q22　よく見るテレビ番組。
宮田　CNN。
寺岡　見ない!!
小林　みなさんのおかげです、3時のあなた関係、11PM、MTV。
森　ひょーきんぞく、元気が出るTV。
Q23　夜、寝る前に必ずする事。
宮田　フッキン。
寺岡　テープを聞く。
小林　ハミガキ、ハナをかむ。
森　酒のむ。
Q24　今、財布の中身は?
宮田　O。
寺岡　ヒミツ♡
小林　23円くらい、びんぼ――――――!
森　ほこり。
Q25　ペットはいますか?　又、飼うとしたら何?
宮田　います。熱帯魚。池の上のKENで買う。
寺岡　いないし飼わない。
小林　家に犬がいる。なんでもかんで、ひじょうに困る。でも、俺は猫の方がいい。
森　昔、アンディという名の白いネコがいました。メチャクチャかわいかったけど逃げられた。ネコも、犬も、うさぎも欲しい。
Q26　行ってみたい所。
宮田　佐渡ヶ島。
寺岡　シカゴ。
小林　鴨川シーワールド再び。久米川ボール（ボーリング場）。
森　天国。
Q27　会ってみたい人物。（故人でも可）
宮田　エジソン。
寺岡　おだ信長（無理なら石橋りょうさんでもいい）。
小林　ジョン・レノン。幼児の頃の俺に会って自分の将来の姿を教えてやりたいと思う。
森　だれとも会いたくない。
Q28　衣装の中で一番好きな色。
宮田　白。
寺岡　全部いい。
小林　白地に黒。黒地に緑。
森　ピンク。
Q29　あなたのフェイバリット・ミュージシャン。
宮田　ラモーンズ。ローリング・ストーンズ。
寺岡　エルモア・ジェイムス。
小林　ビートルズ、ジョン・レノン。RCサクセション。ポリス。AC/DC。
森　シェーンとエルビス。
Q30　あなたのフェイバリット・アルバム。
宮田　1つだきしめて。
寺岡　「シングル・マン」RCサクセション。
小林　サージェントペパーズ・ロンリーハーツクラブバンド。
森　THE POGUES 2ND。
Q31　ライバル。
宮田　マイケル寺岡。大槻ケンジ。
寺岡　自分。
小林　西武ライオンズ。
森　パンチ君。
Q32　絶対に守りたいもの。
宮田　秘密。
寺岡　素直さ。
小林　体重。
森　カレー、ハンバーガー、牛丼、インスタントラーメンをぜったい食わないようにする
Q33　許せないタイプの人。
宮田　かるのり。
寺岡　タクシーけったりする人。
小林　俺の満かりに合わない奴。
森　人をだます。金でうごく。人を殺す奴ら。
Q34　最も感動した映画。
宮田　太陽がいっぱい。
寺岡　「ブルースブラザーズ」
小林　バック・トゥ・ザ・フューチャー、コンボイ。
森　忘れたけど、この前見た「ロジャーラビット」と「マルクス兄弟」とか好きです。
Q35　自分を動物に例えると?
宮田　ネコ。
寺岡　わかりません。
小林　オリの中を、何回も同じ動きをしている上野の熊。怒ってないのに怖いトラ。
森　カッパと言われてました。
Q36　パチ▼パチに対してひと言。
宮田　パチパチやってんじゃねー。
寺岡　ガンバッテ下さい。ボクが見てもおもしろい本にして下さい。
小林　サイコー世界一。
森　?
Q37　サインってもらったことありますか?（それは誰?）
宮田　このあいだ、ジューシーフルーツのイリヤにもらった。そして、極めつけはラモーンズ。
寺岡　宝歌劇団の木村さんのサイン（高一の時）。ジェイムス・コットン（高3の時）。エルビス・コステロ（88年来日時）。
小林　RCサクセション新井田耕造さん、チャボさん。ウィルコ・ジョンソン。DEDEで、ラモーンズ。
森　コステロとあさのあつ子とKISSのジーン・シモンズ。
Q38　今日、ウォークマンに入ってるテープは?
宮田　持ち歩かん。
寺岡　ライトニン・ホプキンス。（MOJO HAND）。
小林　今は持ってない。
森　セコセコ聞くのがキライなので、ウォークマンという製品じたい持ってません。
Q39　結婚するとしたらいつ頃?
宮田　30才。
寺岡　40才まで。
小林　全然分かんない。
森　♡17才♡
Q40　好きな数字とその理由。
宮田　㉑　わけは秘密。
寺岡　?
小林　5、13。生まれた日だから。
森　好きじゃない。
Q41　今年（88年）最大のニュース。
宮田　ラモーンズに会った事。
寺岡　おじいちゃんが亡くなってしまった事。
小林　雑誌に出るようになったこと。
森　キライなオリンピックが開催されてしまった事。
Q42　好きなスポーツ。
宮田　サッカー。
寺岡　野球、ラグビー。
小林　球技全般。
森　およぐ。
Q43　理想の女の子に、一番近いタレントは?
宮田　ミポリン。
寺岡　浅香唯と手塚理美と三田佳子をたして3で割った人。
小林　渡辺満里奈ちゃん。
森　キョンキョンとあさのあつ子。
Q44　ファンに是非やめてもらいたい事。
宮田　別になし。
寺岡　寺になし。
小林　顔で判断しないで欲しい。
森　大変すみませんが、あまい物は、ぜったい食べません。
Q45　好きな言葉。
宮田　パチパチ。
寺岡　Yeah!!
小林　七転八倒。失敗は成功の母。
森　いやーんやめてまんねんひつ。
Q46　将来の夢。
宮田　プラモデル屋さん。
寺岡　ぼくに未来はない、あるのは今だけさ!!
小林　ランボルギーニイオタから柄パンツにトッツアンシャツで出てきて周囲をアッと言わせる。
森　F1のレーサー。
Q47　生活信条。
宮田　時間厳守。
寺岡　早寝、遅起き。
小林　健康。
森　ジャンクフードは食わない。
Q48　デビューしてから変わった事。
宮田　昔の友達が増えた。
寺岡　プライベートな時間がへった。
小林　山崎さん、佐野さん、根田さん、小林さんと知り合った事。
森　光GENJIを知った。
Q49　最後にひと言。
宮田　パチパチやってるかい。
寺岡　ボクは雑誌のインタビューとかがあまり得意じゃないのでよろしくお願いします。
小林　はっはっは、みんなあしたも天気だよ。うっししし。
森　バイバイ。

ホンットに彼等ったら、素直にというか、朴というか、大胆というか…………。

まあ、そこがジュンスカの大きな魅力のひとつなんだろうけどね。

アルバム「ひとつ抱きしめて」も大好評のようだし、とにかく今のジュンスカは、向うところ敵なしって感じだよね。

現在、彼らはアルバムと同タイトルの全国ツアー中。編集部にも、あちらこちらから、その熱狂のレポートが届いている。このツアーは、来年春まで続くんだけど、その中でも大みそかは、名古屋と東京（TVK&パチ▼パチTOMATO SPECIAL）のダブル・ブッキングというパワフルさっ!!　いやー、まったくもって、彼らには脱帽だよね。

大盛況だった渋谷公会堂の翌日、おなじみの“ポコ天ライブ”をやったジュンスカ。なんと、そのとなりでは、ヨヒトの弟バンドがプレイしていたとか。

来年は、渋公追加2DAYSも決定してるし、目がはなせないね。

JUNTA　MORI

KAZYA　MIYATA

YOHITO　TERAOKA

MASAYUKI　KOBAYASHI

NEXT scene

GRASS VALLEY

グラスバレー

●憂いを帯びたサッドソングが多かった彼らだが、最近は、かなり前向きな姿勢でサウンドに関わるようになってきた。
その、バラエティーに富んだ作品群は、確実にグラスワールドを確立してるように見える。ハイセンスな彼等の"STYLE"に、要注目。
●デビュー＝〔アルバム〕GRASS VALLEY（'87年6月22日）、MOON VOICE（'87年9月21日）、STYLE（'88年7月1日）、〔シングル〕FREEZIN'（'87年2月26日）、MOON VOICE（'87年9月2日）、STYLE（'88年6月22日）、MY LOVER（'88年12月24日）。
●所属レコード会社＝CBSソニー・フィッツビート。
●所属事務所＝シンコー・ミュージック。
●ファンクラブ＝〒101東京都千代田区神田小川町2-1シンコー・ミュージック「グラス・モード・クラブ」係☎03(292)1232

Q1 バンド名の由来は？
出口 草原の谷を見たくて。
本田 草谷。
西田 知りません。
根本 草原の谷。
上領 出口がつけた。

Q2 生年月日&生まれた場所は？
出口 昭和38年9月22日。群馬県。
本田 昭和40年8月5日。埼玉県 熊谷市。
西田 昭和40年12月17日。埼玉県 熊谷市。
根本 昭和39年6月4日。神奈川県。
上領 昭和39年9月3日。東京都。

Q3 バンド内で何と呼ばれていますか？
出口 出口。
本田 ほんだorちゃら。
西田 しんや。
根本 いちろー。いちろーちゃん。
上領 わたる。

Q4 小さい頃のあだ名。
出口 なし。
本田 ちゃら。
西田 しんちゃん。
根本 いちろっぺ、ぺろぺろぺろ。
上領 わたる。

Q5 趣味。
出口 ニューアート。
本田 山歩き。
西田 すいみん。
根本 作曲。
上領 車（日本のクラシック）、バイク（これも古いの）、インテリア（オブジェ作り）、食器集め。

Q6 特技。
出口 唄。
本田 山歩き。
西田 なし。
根本 なし。
上領 洗車。そうじ。

Q7 今、一番欲しい物。
出口 もっと沢山、テレビ。
本田 ジュピター8
西田 バイク、HONDA・CBR250R。
根本 ほしい！ ほしい!!
上領 ロフト。

Q8 今、一番お金をかけている物。
出口 酒類。
本田 機材！ あたりまえだ!!
西田 服。
根本 楽器。
上領 ピアノ。

上領 バイク。

Q9 血液型&自己分析。
出口 AB型。そのまま。
本田 AB型。いけいけのぐりぐり。
西田 A型。熱しやすく、さめやすく、気まぐれ。
根本 B型。
上領 A型。ワガママで、しんけいしつ。神経質する。

Q10 好きな女の子のタイプ。
出口 わかってくれる人。
本田 あつかましくないこ。
西田 気がきく人。やさしい人。
根本 古風。
上領 やさしい娘。

Q11 もし、ミュージシャンになってなかったら？
出口 わからない。
本田 とにかく、ネクタイしめた一般サラリーマン以外なら。
西田 サラリーマン。
根本 建築家。
上領 わからない。

Q12 癖。
出口 屁理屈。
本田 すぐに酒が飲みたくなっちゃうんだよね。
西田 わからない。
根本 特にないそうです。
上領 特にないと思う。

Q13 愛読書。
出口 なし。
本田 森村誠一さんの本。あとマガジン（週刊のマンガ数誌）中毒です。
西田 フィッツジェラルド。
根本 OTHER ROOM OTHER VOICE。
上領 村上龍の小説は好きです。

Q14 会ってみたい人物（故人でも可）。
出口 パッツィ・マッケンジット。
本田 ひとみしりしてしまうので……。
西田 ジョン・レノン、シド・バレット。
根本 先祖。
上領 子供の頃の自分。

Q15 夜、寝る前に必ずする事。
出口 酒を飲む。
本田 あくび。
西田 歯をみがく。
根本 「あ～あ」と言う。
上領 はみがき。

Q16 あなたのフェイバリット・ミュージシャン。
出口 デビッド・シルビアン。
本田 トーマス・ドルビー大先生。
西田 スティング。
根本 トーマス・ドルビー。
上領 たくさんいるので答えられません。

Q17 あなたのフェイバリット・アルバム。
出口 アバロン／ロキシー・ミュージック。
本田 トーマス・ドルビー大先生のアルバ

GRASS VALLEY

西田　ムすべて。
根本　最新。
上領　たくさんいるので答えられません。

Q18　ライバル。
出口　自分。
本田　夜。
西田　いない。
根本　みんな。
上領　いろんな意味で、自分かな？

Q19　許せないタイプの人。
出口　ボーッとした人。
本田　あつかましい女の子。
西田　ハッキリしない人。
根本　自分にそっくりな人。
上領　無粋な人。

Q20　最も感動した映画。
出口　ディーバ。
本田　未知との遭遇。
西田　キリング・フィールド。
根本　1984。
上領　キリング・フィールド。

Q21　自分を動物にたとえると？
出口　カメレオン。
本田　巨大なワライカワセミ。
西田　ねこ。
根本　なまけもの。
上領　ネコだと思う。

Q22　好きな言葉。
出口　今は、「月影」。
本田　なにやらわけわからずう。
西田　ない。
根本　「ミトロン」。
上領　「人生楽しまずんばこれいかん」（独眼竜政宗）。

Q23　将来の夢。
出口　詩人になりたい。
本田　一生、元気でいたい。
西田　考えてない。
根本　日本を離れる。
上領　幸せな家庭を作りたい。

Q24　最後にひと言、どうぞ。
出口　'89は、もっときょくたんな事をやりたい。
本田　失礼しました。
西田　パチパチ。
根本　メリー・クリスマス！
上領　いつも、グラス・バレーを見守ってくれている皆さん。どうもありがとう。

NEXT scene

KATZE

カッツェ

●KATZEとは、ドイツ語で「猫」という意味である。その名のとおり、彼らのサウンドは、とてもしなやかで現実的だ。

ルーツといい、ビジュアルといい、まるでバラバラな印象を受ける彼らだが、4人が集まり、その音を奏でた瞬間、またたくまに「KATZE」というポジションを不動のものにしてしまう。

実に、多種多様な音楽的要素がカラミ合い、なんともたとえがたい彼らのサウンドに触れたとき、君もキットKATZEのとりこだ。

●デビュー＝[アルバム]BLIND（'88年10月21日）、[シングル]TEEN（'88年10月21日）。

●所属レコード会社＝テイチクレコード。

●所属事務所＝インターフェニックス。

●ファンクラブ＝〒107東京都港区赤坂9-6-28アルベルゴ乃木坂406号インターフェニックス内「ジェリーズ」係☎03(479)9391

Q1 名前の由来は？
教 おとなしい子って意味！
賢 賢い子に育つように、と。
靖彬 オヤジに聞いて下さい。
克彬 真っすぐな人間になるように（名前負け）。

Q2 生年月日&生まれた場所は？
教 昭和43年4月24日。北九州の戸畑。
賢 昭和42年8月1日。フランス。
靖彬 昭和42年1月20日。山形県、宇部市、マキノ産婦人科206号室。
克彬 昭和38年10月31日。大阪。

Q3 身長・体重・靴のサイズ・視力。
教 173cm、?、25.5cm、?
賢 170cm、49kg、24.5cm、左右0.2。
靖彬 175cm、0.1t、27.5cm、左右2.0。
克彬 175cm、66kg、26.5cm、左右2.0。

Q4 バンド内で何と呼ばれていますか？
教 アンガス。
賢 教祖様。
靖彬 やっちゃん。
克彬 カッちゃん、アニキ、バンマス。

Q5 小さな頃のあだ名。
教 あつし。
賢 おのさん。
靖彬 やっちゃん。
克彬 ヤン、カッちゃん。

Q6 趣味。
教 旅行。
賢 読書、部屋の模様変え。
靖彬 レコード鑑賞。
克彬 酒をのむこと、ねること。

Q7 特技。
教 ウソをつくこと。
賢 化粧。
靖彬 料理。
克彬 特になし。

Q8 今、一番欲しい物。
教 免許。
賢 ギター、レコード、CD、ビデオデッキ。
靖彬 オベーションのギター。
克彬 ベースギター。

Q9 血液型&自己分析。
教 O型！ かわいい奴。
賢 O型。優柔不断、お金にふしだら。
靖彬 B型。いい性格。
克彬 B型。自由型。

Q10 尊敬している人物。
教 母親。
賢 両親。
靖彬 父。
克彬 今まで僕の音楽人生の中で、好きになったアーティスト全て。

Q11 好きな女の子のタイプ。
教 やさしそうな娘。
賢 アイツ。
靖彬 ぽっちゃりした娘。
克彬 素顔のかわいい、おとなしい娘。

Q12 もしミュージシャンになってなかったら？
教 チンピラ。
賢 死んでる。
靖彬 肉体労働者。
克彬 ミュージシャンになろうと努力している。

Q13 癖。
教 かわいい娘を見ると大になる。
賢 まばたき。
靖彬 人をいじめること。
克彬 わからないです。

Q14 会ってみたい人物（故人でも可）。
教 おじいちゃん。
賢 フランシスコ・タルレガ。
靖彬 フランク・シナトラ。
克彬 ジョン・レノン、ポール・マッカートニー、フレディ・マーキュリー。

Q15 あなたのフェイバリット・ミュージシャン。
教 エディ・コクラン。
賢 山本恭司、マイケル・シェンカー、布袋寅泰、タルレガ、セゴビア、バッハ、モーツアルト、自分。
靖彬 ポール・マッカートニー。
克彬 ビートルズ、チープ・トリック、etc。

Q16 行ってみたい所。
教 世界中！
賢 オーストラリア、ノルウェー、火星。
靖彬 テキサス。
克彬 ALL OF THE WORLD。

Q17 理想の女の子に一番近いタレント。
教 とくにいない！
賢 理想の女の子がわからない。
靖彬 マリリン・モンロー。
克彬 坂口良子。

Q18 ファンに是非やめてもらいたい事。
教 とくになし！
賢 まじめな曲をやってる時に笑わないで下さい。
靖彬 ありません。
克彬 追っかけ。

Q19 バチバチに対してひと言。
教 がんばっ！
賢 気楽にやりましょう。
靖彬 よろしくね。
克彬 THANKS！

Q20 好きな言葉。
教 LET IT BE！
賢 男、根性。
靖彬 パワー。
克彬 I LOVE YOU HONEY。

Q21 ライバル。
教 いない。
賢 KATZE。
靖彬 たけし軍団様。
克彬 いません。

Q22 絶対、守りたい物。
教 貞操。
賢 愛する人、物、全て。

靖彬　自分の女。
克彬　MY PLIVATE TIME。
Q23　許せないタイプの人。
敦　人間じゃない奴。
賢　人の痛みが分からないヤツ。
靖彬　軽い奴。
克彬　いじわるな人。
Q24　最も感動した映画。
敦　題名を忘れた！
賢　たくさんあるけど、忘れた。
靖彬　十戒。
克彬　最近では、グッド・モーニング・ベトナム。
Q25　自分を動物に例えると？
敦　ハチ公。
賢　妖精、又は……キツネ、ふくろう、カモシカ。
靖彬　秋田犬。
克彬　FISH。
Q26　好きなスポーツ。
敦　BASE BALL。
賢　水泳、鉄棒、マット運動。
靖彬　アメフト、ラグビー。
克彬　FOOT BALL、BASE BALL。
Q27　夜、寝る前に必ずする事。
敦　タバコを吸う。
賢　守護霊様へあいさつ。
靖彬　酒をのむ。
克彬　酒をのむ。
Q28　将来の夢。
敦　すてきなおじさんになること！
賢　自分の想い描いている音楽を自由に表現できて、それをみんなに認めてもらう。
靖彬　ビバリーヒルズに住む事。
克彬　YES, I'M GONNA BE A STAR。
Q29　生活信条。
敦　風まかせ！
賢　やりたい時に、やりたい事をする。
靖彬　えらくなくとも、正しく生きる。
克彬　BE HAPPY。
Q30　デビューしてから変わった事。
敦　でんでんない！
賢　自分に厳しくするように心がけている（つもりである）。
靖彬　ミュージシャンと言われるようになった。
克彬　人のお金で旅ができる事。
Q31　好きな数字とその理由。
敦　3－5。初めて当てた舟券。
賢　3、7、11。あったかそうだから。
靖彬　69。書けませんよ。わかってるくせに、イヤだ、バカ。
Q32　来年の今頃どうしてると思う？
敦　でんでん変わってない！
賢　天才ギタリストとして、メキメキと頭角をあらわしている。
靖彬　BAND。
克彬　ツアー中。
Q33　今、財布の中身は？
敦　300円。
賢　領収書、名刺、○○の写真（金は入ってない）。
靖彬　2482円。
克彬　4000円位。
Q34　今日、ウォークマンの中に入ってるテープは？
敦　今日は持ってない。
賢　カッツェのライブ。
靖彬　スレイド（ベスト）。
克彬　オールディーズ・ソングス。
Q35　最後にひと言どうぞ。
敦　HAPPYになりたいね！
賢　末ながら、ひとつよろしくおねがいします。
靖彬　あさがおに、つるべとられて、もらいみず。
克彬　ウーララ、ウーララ、ウーラ、ウーラよ（山本リンダ風に）。

K　A　T　Z　E

NEXT SCENE

FABIENNE

フェビアン

●フェビアンは、デジタル機器の助けを借りながら、アコースティックの音色を生かす方法を[illegible]ていて、詞・曲を手掛ける古賀森男のビートルズ・フレイバーが、あちこちに散りばめれている。

フェビアンの活動歴は、すでに4年を越えているが、途中、古賀森男のレベッカ加入により、1年間の活動停止をしている。レベッカの中では、音楽性の違いがあり、退脱。以後、完全なアマチュアとしてフェビアンを再始動。今年11月21日にレコードデビューを果たした。自分の音楽に還った古賀森男の動向を、今後注目しよう。

●デビュー＝［アルバム］冒険クラブ（'88年11月21日）

●所属レコード会社＝CBSソニー

●所属事務所＝アミューズ

●ファンクラブ＝〒150東京都渋谷区代官山町[illegible]代官山5F [illegible]アリングハウス☎03（496）3963

Q1 趣味。
古賀 寝ころがること。
Q2 特技。
古賀 まつ毛にマッチ棒をのせる（3本位）。まぶたをひと重にする。
Q3 今、一番欲しい物。
古賀 家。
Q4 血液型&自己分析。
古賀 A型。二重人格。
Q5 尊敬している人物。
古賀 好きなアーティストは全部（ミュージシャンに限らず）。
Q6 バンド名の由来は？
古賀 サン・テグジュペリ作「夜間飛行」の登場人物で、パイロットの「フェビアン」を参考にしました。
Q7 身長・体重・靴のサイズ・視力。
古賀 168㎝、55㎏、25㎝、左右1.2。
Q8 好きな女の子のタイプ。
古賀 かわいい娘はみんな好きだ。
Q9 愛読書。
古賀 外国のミステリィをよく読みます。ディック・フランシスとか、エド・マクベインとか……。
Q10 あなたのフェイバリット・ミュージシャン。
古賀 ビートルズ、ツェッペリンをはじめとして山ほどいる。
Q11 絶対守りたい物。
古賀 ポリシー、愛する人。
Q12 許せないタイプの人。
古賀 人に対するやさしい気持ちのない人。
Q13 最も感動した映画。
古賀 とても、どれとは言えません、いっぱいあって。
Q14 よく見るテレビ番組。
古賀 洋画劇場。映画が好きです。
Q15 夜、寝る前に必ずする事。
古賀 たいがい酒を飲みます。
Q16 行ってみたいところ。
古賀 南太平洋とか、アラスカとか、あまり人のいないところ。
Q17 会ってみたい人物（故人でも可）。
古賀 ロザンヌ・アークェット（女優。好きなんです）。
Q18 パチパチに対してひと言。
古賀 がんばって下さい。
Q19 今日、ウォークマンに入ってるテープは？
古賀 ディーゼル・アンド・ダスト／ミッドナイト・オイル。
Q20 ファンに是非やめてもらいたい事。
古賀 うちに電話、手紙などは、やはり……。ごめんなさい。
Q21 生活条件。
古賀 いつも自分自身でいること（あたりまえか……）。
Q22 ペットはいますか？ 又、飼うとしたら何？
古賀 2年ほど前、猫を飼っていましたが、ケンカをして逃げられました。たぶんもう何も飼わない。
Q23 最初に買ったレコード。
古賀 ブルーコメッツのレコード（幼稚園のころ）、でも自分のお金では、ビートルズが最初だった。
Q24 最初に観たライブ。
古賀 友達のバンドのライブ（中学のころ）。
Q25 もしミュージシャンになってなかったら？
古賀 さっぱりわからん。
Q26 ライバル。
古賀 ？ 考えたことない。
Q27 衣装の中で一番好きな色。
古賀 黒。
Q28 今年（88年）最大のニュース。
古賀 デビューしたこと。
Q29 好きなスポーツ。
古賀 水泳。
Q30 将来の夢。
古賀 地方にひっこんで、毎日酒をのんで暮らしたい。
Q31 好きな言葉。
古賀 いやいや――……ほんとにもう、どうも、どうも……。
Q32 デビューしてから変わった事。
古賀 いそがしくなったこと。
Q33 結婚するとしたらいつ頃？
古賀 30才くらいかな、わからないが。
Q34 好きな数字とその理由。
古賀 べつに、好きな数字ってないです。
Q35 今、財布の中身は？
古賀 あんまり入ってない。
Q36 来年の今頃どうしてると思う？
古賀 さっぱりわからん。
Q37 癖。
古賀 自分ではわからない。
Q38 バンド内で何と呼ばれていますか？
古賀 古賀さん。
Q39 小さい頃のあだ名。
古賀 特になし。いつも「コガ」と呼ばれていた。
Q40 好きな食べ物、嫌いな食べ物。
古賀 高級な料理がダメ。そのかわり、オムライスとかお好み焼きとか安いものならなんでも好きだ。悪いか。
Q41 最後にひと言どうぞ。
古賀 フェビアンを楽しんで聴いてくれるみなさん、どうもありがとう。

NEXT scene

THE ELEPHANT KASHIMASHI

エレファント　カシマシ

●「ロックンロールバンドである前に人間達だ」……これが、ザ・エレファントカシマシを語るに、最もふさわしい言葉であろう。
'88年のロックシーンにおいて、最もセンセーショナルだった出来事は、おそらく彼ら、エレファントカシマシの登場ではないだろうか？　宮本の類稀れまる表現力が、我々の心を揺さぶってやまない。

●デビュー＝［アルバム］エレファントカシマシ（'88年3月21日）、エレファントカシマシII（'88年11月21日）、［シングル］デーデ（'88年3月21日）、ふわふわ（'88年7月21日）、おはようこんにちは（'88年11月2日）

●所属レコード会社＝EPICL・ソニー

●所属事務所＝双啓舎

●ファンクラブ＝〒東京都渋谷区宇田川町[illegible]（株）双啓舎　エレファントカシマシのお知らせ送って係☎03（770）5088

みよう。

Q1　バンド名の由来は？
宮本　みよう。
石森　みよう。
高緑　みよう。
冨永　みよう。

Q2　生年月日&生まれた場所は？
宮本　みよう。
石森　みよう。
高緑　みよう。
冨永　みよう。

Q3　趣味。
宮本　みよう。
石森　みよう。
高緑　みよう。
冨永　みよう。

……………………。

ぜっ、ぜっ、前代未聞の"みよう"攻撃っ!!
50の質問、全返答が「みよう」……。
エレカシは、ヤッパリ、みようだ。

NEXT scene

LÄ-PPISCH

レピッシュ

●彼らの友達ヒルビリーバップスのマネージャー小野さんいわく、「日本の音楽史上、最も社会性のないバンド」……それがレピッシュである。まったくもって、つかみどころがない。しかし、あの比類稀なるパワーは一体なんだっ!? 東京、大阪、九州という、3大ロック都市出身の5人が集まった人畜有害バンド、レピッシュは、必ずや1989年もひっかきまわしてくれるに違いない。チリパリ。
●デビュー＝［シングル］パヤパヤ（'87年9月21日）、リックサック（'88年7月21日）、［アルバム］LÄ-PPISCH（'87年11月21日）、WONDER BOOK（'88年9月21日）
●所属レコード会社＝ビクター・インビテーション
●所属事務所＝キティ・アーティスト
●ファンクラブ＝〒153東京都目黒区大橋1-7-4久保ビル4F 毒入り倶楽部☎03（770）9355

Q1 名前の由来を教えて下さい。
MAGUMI ギリシャ語で"神"という意味。
狂市 中学時代、先輩に悪口で、狂った一で、狂一と言われた。その後、RCのチャボのマネをして一を市に変えたが、人には熊本市の市だと言っている。
現 本名。
達 本名です。
雪好 明治天皇の名前。

Q2 バンド名の由来は?
MAGUMI 子供じみた、ばかげた、という意味のドイツ語。
狂市 同郷の秀才、大野たっちゃんにつけてもらった。
現 ゆきよしの本名。
達 独語で、子供じみたという意味。
雪好 アホ。

Q3 家族構成。
MAGUMI 愛人4人。
狂市 父、母、姉（熊本）。ゴミ、ゴキブリ、自分（東京）。
現 ムーミンと同じ。
達 典型的な核家族。
雪好 母子家庭。

Q4 身長・体重・靴のサイズ・視力。
MAGUMI 177cm、53kg、26cm、左右0.3。
狂市 175cm、60kg、26cm、左右1.2。
現 ジャミラと同じ。
達 175cm、60kg以下、25.5cm、極力無し。
雪好 180cm、63kg、26.5cm、右0.1、左0.2。

Q5 バンド内で何と呼ばれていますか?
MAGUMI バカ。
狂市 恭一。
現 ゾロアスター。
達 TATSU。
雪好 ゆきよし。

Q6 小さい頃のあだ名。
MAGUMI 天才。
狂市 陰ではゴリラと言われてた。
現 ミカエル。
達 トド。
雪好 ?

Q7 趣味。
MAGUMI レコードを買ったり、服買ったり、○×買ったり。
狂市 すいみん。
現 のぞき。
達 音楽鑑賞。
雪好 多種多彩凡庸。

Q8 特技。
MAGUMI いろんな奴の顔に似てる事。
狂市 ねぼう。
現 すもう。
達 なし。
雪好 書道2段。

Q9 今、一番欲しい物。
MAGUMI BIG HOUSE。
狂市 ファミスタ88。
現 やすみ。
達 パワーがあって、でかい音の出るベースアンプ。コンプレッサー。
雪好 金とヒマ。

Q10 尊敬してる人物。
MAGUMI アントニオ猪木、加藤茶、ちんぽール・ニューマン、ぽール・マッカートニー。
狂市 高部知子。
現 カダフィー。
達 なし。
雪好 カムイ。

Q11 もしミュージシャンになってなかったら?
MAGUMI フリーアルバイター。
狂市 そのままジンスタ（デザイン事務所）にいるか、プー太郎。
現 ムーミン。
達 なんかになっていたろうと思う。
雪好 人間。

Q12 癖。
MAGUMI ウソをつくと、足で頭をかくクセがある。
狂市 朝2回、出る出ないにかかわらずトイレにしゃがむ。
現 般若心経を唱える。
達 自分ではわからない。
雪好 指の関節を鳴らすこと。

Q13 夜、寝る前に必ずする事。
MAGUMI にわとりのマネをする。
狂市 小便。
現 由美かおる体操。
達 コンタクトをはずす。
雪好 小用。

Q14 好きな女の子のタイプ。
MAGUMI 美人。
狂市 わがままを笑顔でかわし、いじわるにも負けず、浮気にもたえる、容姿端麗な女……などいない。
現 美人。
達 会ってみないとわからない。
雪好 あき竹城。

Q15 理想の女の子に一番近いタレント。
MAGUMI カーネルサンダース。
狂市 そんなことは、どーでもいい。
現 岸田今日子。
達 実際、会ってみないとわからない。
雪好 あき竹城。

Q16 結婚するとしたらいつ頃?
MAGUMI みっちゅ。

LÄ-PPISCH

狂市　そんな相手が出てくりゃする。
現　だれかしてくれ。
連　死ぬまでに、1回位するかもしれない。
Q17　絶対、守りたい物。
雪好　知りません。
MAGUMI　ユーミン（守ってあげたい）。
狂市　プライベートや、友人、家族、自分の音楽。
現　てーそー。
連　内的精神世界。
雪好　皆さんといっしょです。
Q18　会ってみたい人物（故人でも可）。
MAGUMI　マリリン・モンロー。
狂市　田渕、掛布。
現　カストロの愛人。
連　内田百閒。
雪好　ヤマトタケルノミコト。
Q19　ライバル。
MAGUMI　花形みつる。
狂市　ファミコンでは幼一。三戸君はファミコンでは相手にならん。
現　ママはライバル。
連　時流。
雪好　梶井基次郎。
Q20　最も、感動した映画。
MAGUMI　花の応援団。
狂市　仁義シリーズ。
連　ノスタルジア。
雪好　カッコーの巣の上で、風の谷のナウシカ。
Q21　自分を動物にたとえると？
MAGUMI　オウム。
狂市　ゴリラ。
現　ミトコンドリア。
連　ネコ。
雪好　[illegible]。
Q22　パチパチに対してひと言。
MAGUMI　おめめパチパチ。
狂市　きょーしゅくっす。
現　なんかくれ。
連　あっどーも、いつもお世話になってます。
雪好　なーんにも言うことはありません。なんちゃって。
Q23　将来の夢。
MAGUMI　石油王。
狂市　ドーム球場付の家を建てる。
現　クーデター。
連　夢は常に見つづけるものであり、現実逃避にはなりえない。
雪好　なにわの夢の、夢のまた夢。
Q24　あなたのフェバリット・ミュージシャン。
MAGUMI　BEATLES。
狂市　17～20歳の時に聴いたNEW WAVE ARTIST。
現　小鍋。
連　細野晴臣。
雪好　僕の好きな音楽。

Q25　生活信条。
MAGUMI　人生、楽ばかり。
狂市　わがよかごつ。
現　ファーマーのように。
連　安穏と生きる。
雪好　日々是決戦。
Q26　ファンに是非やめてもらいたい事。
MAGUMI　MC中に、きさくに話しかけるな。
狂市　マグミのMCの時、俺にしゃべりかけるのは、本当に恥かしいのでゆるして下さい。
現　無言電話。
連　今、自分が何をすべきかを考えたら、おのずと見えてくる答。その上での答ならば、それもよし。
雪好　表打ちの手拍子。
Q27　デビューしてから変わった事。
MAGUMI　[illegible]。
狂市　バイトをしなくてよくなった。
現　びんぼーになった。
連　変わらない事象など存在しない。
雪好　たくさんあってわからない。
Q28　最後にひと言どうぞ。
MAGUMI　リラックス、リラックス。
狂市　今日はギャグが浮かばず、たいした返答が出来ず、くやしい。
現　NTTはゆるさん。
連　おつかれさまでした。
雪好　パブーシュカ。

NEXT scene

THE TOYS

ザ・トイズ

●THE TOYS。バンドの由来について本田恭章はこう語った。「今までのオレ(達)が置かれていた、"おきもの"的ポジションに対するアイロニーかな……」——そう、彼等は今、自分達の音楽に対する絶大な自信を携え、メジャー・シーンに殴り込んできた。デビュー前からの評判は相当なもので、極端なまでの反産業ROCKのニオイを漂よわせながらも、レコード会社数社の争奪戦という実績を持つ。ツイン・ドラムという、パワフルなリズム・スタイルをとるTHE TOYS。彼らの行く手を阻む者はいない。
●デビュー＝［アルバム］The TOYS('88年10月[illegible]日)
●所属レコード会社＝コロムビアレコード
●所属事務所＝ロット
●ファンクラブ＝〒[illegible]東京都目黒区下目黒[illegible]-18カーサ横河307 BOOZE CLUB☎03(490)6113

Q1 身長・体重・靴のサイズ・視力。
本田 低・軽・中・悪。
鈴木 183cm、62kg、28cm、右1.5、左0.1。
高岡 170cm、62kg、25.5cm、右0.7、左0.5。
柏原 175cm、62kg、25.5cm、右0.7、左0.5。
伊藤 179cm、55kg、25cm、左右1.0。

Q2 趣味。
本田 作曲。
鈴木 音楽。
高岡 人間プロデュース。
柏原 スキー、ドライブ。
伊藤 キノコ採り。

Q3 特技。
本田 ノーコメント。
鈴木 アクシデントを起こす事。
高岡 自分の正当化。
柏原 高速技。
伊藤 サーフィン。

Q4 今、一番欲しい物。
本田 大きなお家。
鈴木 新しい車、新しい家。
高岡 スタジオ。
柏原 フェラリー・テスタロッサ。
伊藤 じてんしゃ。

Q5 血液型。
本田 O型。
鈴木 A型。
高岡 A型。本気です。
柏原 B型。自分に合ってると思う。
伊藤 A型。

Q6 尊敬している人物。
本田 両親。
鈴木 いない。
高岡 UNCLE WALKER in YOKOHAMA。
柏原 ジミー・ペイジ（かな?）。
伊藤 マルセル・デュシャン。

Q7 最初に買ったレコード。
本田 忘れた。
鈴木 10番街の殺人。
高岡 ライブ・イン・ジャパン／ディープ・パープル。
柏原 ブルーライト横浜／いしだあゆみ。
伊藤 ラバーソウル／ビートルズ。

Q8 最初に観たライブ。
本田 アグネス・チャン。
鈴木 ジョン・メイオール。
高岡 ジェフ・ベック（真駒内アリーナ）。
柏原 バックマン・ターナー・オーバードライブ。
伊藤 わすれた。

Q9 好きな女の子のタイプ。
本田 美人！ 健康第一。
鈴木 ワンレンかきあげ、ボディコン。
高岡 いい子。
柏原 丸い子。
伊藤 好きになったらタイプもクソもねぇ。

Q10 癖。
本田 多。
鈴木 なし。
高岡 ハイになると、倒れるまで盛り上がる。
柏原 なんでも、たたいてみる。
伊藤 ………。

Q11 会ってみた人物（故人でも可）。
本田 ジム・モリソン、シド・ヴィシャス、ジミ・ヘンドリックス、マーク・ボラン。
鈴木 JOHN LENNON。
高岡 ジョン・レノン。
柏原 ジョン・ボーナム。
伊藤 コクトー。

Q12 ファンに是非やめてもらいたい事。
本田 いたずら電話。[illegible]。
鈴木 好きにやればいいじゃん。
高岡 おっかけ。
柏原 レコードも聴かずに（買わずに）ファン面する事。
伊藤 なし。

Q13 今年（'88年）最大のニュース。
本田 デビュー。
鈴木 異常気象。
高岡 …………。
柏原 デビュー。
伊藤 …………。

Q14 将来の夢。
本田 大金持ち。
鈴木 サンセット・ビーチで倒れたい。
高岡 あらゆるARTをArtする。
柏原 やっぱ、リッチじゃん。
伊藤 しあわせなゆめ。

Q15 生活信条。
本田 ノーコメント。
鈴木 そんな事考えて生きてない。
高岡 おもいっきり楽しむ事。
高岡 1日に3枚以上レコードを聴く。
伊藤 べつに酒はのみたくない。

Q16 あなたのフェイバリット・ミュージシャン。
本田 THE TOYS。
鈴木 答えない。
高岡 フランク・ザッパ。
柏原 フィル・コリンズ。
伊藤 ポップ・グループ。

Q17 最後にひと言どうぞ。
本田 ノーコメント。
鈴木 なんで、こんな事かくんだ。
高岡 本気ですので、ひとつヨロシク。
柏原 どもうありがとうございました。
伊藤 新幹線の外は、白い太陽。

NEXT scene

ROLLIE
ローリー

Q1 生年月日と生まれた場所は?
岩川 昭和42年12月2日。広島市。
藤井 昭和42年8月2日。広島市。
神田 昭和42年7月8日。広島市。
山本 昭和42年9月16日。広島市。

Q2 家族構成は?
岩川 父、母、兄ちゃん。
藤井 父、母、兄、妹、オバぁちゃん。
神田 父、母、兄、姉。
山本 父、母、兄3人、おばぁちゃん。

Q3 身長・体重・靴のサイズ・視力。
岩川 178cm、50kg、26cm、右1.5、左1.5。
藤井 175cm、50kg、25.5〜26cm。
神田 173cm、55kg、26.5cm、右1.5、左1.5。

Q4 バンド内で何と呼ばれていますか?
岩川 カス。
藤井 せいじ。
神田 神、とも。
山本 たかちゃん。

Q5 小さい頃のあだ名。
岩川 こーちゃん、いわお。
藤井 メダカ。
神田 ウルトラマン。
山本 たかちゃん。

Q6 趣味or特技。
岩川 レコード&帽子あつめ。背中でギターを弾く。
藤井 別にナシ。
神田 サッカー。
山本 料理。

Q7 今、一番欲しい物。
岩川 ありすぎてこまる。
藤井 自由。
神田 車とエンジン。
山本 服。

Q8 今、一番お金をかけているモノ。
岩川 服。
藤井 車と楽器。
神田 車と楽器。
山本 酒。

Q9 血液型&自己分析。
岩川 AB型。変な奴。
藤井 O型。ヒリヒリ。
神田 B型。マイペース。

Q10 最初に買ったレコード(それはいつ頃?)
岩川 ピンクレディー、小4くらい。
藤井 矢沢永吉のライブ。
神田 ピンクレディー、「UFO」。
山本 「およげたいやきくん」。小2、3年。

Q11 最初に観たライブ(それはいつ頃?)
岩川 兄ちゃんのブルースバンド。小5くらい。
藤井 中森明菜。中学1年。
神田 ノーバディ。
山本 忘れた。

Q12 [illegible]
岩川 猫背。
藤井 わすれた。
神田 足をスリスリ。
山本 すぐ、にやける。

Q13 好きな女の子のタイプは?
岩川 ロリコンです。
藤井 バカ。
神田 ちょっと太め。オッパイが90cm以上の娘。
山本 バカじゃない娘。

Q14 もしミュージシャンになっていなかったら?
岩川 ?
藤井 なんかしている。
神田 ぼうそう族。
山本 やきとり屋さん。

Q15 夜、眠る前に必ずする事。
岩川 かおをあらう。
藤井 あくび。
神田 電気を消す!
山本 ふとんをかける。

Q16 会ってみたい人物。
岩川 エルビスとか、ジョン・レノンとか。
藤井 昔の人。
神田 スティング。ポール(・マッカートニー?)
山本 おじいちゃん。

Q17 絶対に守りたいもの。
岩川 思いつきや衝動を。
藤井 海のさち。
神田 どうてい。
山本 今までローリーの築いたもの。

Q18 最も感動した映画。
岩川 アウトサイダー。
藤井 ローマの休日。
神田 グリース。
山本 プラトーン。

Q19 自分を動物にたとえると?
岩川 ネコ(わがまま)。
藤井 メダカ。
神田 カバ。
山本 大か馬。

Q20 最後にひと言どーぞ。
岩川 どーも、長い質問でしたね。これからもよろしく。ロックンッ!!
藤井 車はZ。ギターはリッケン。やっぱり男よ――。
神田 こんど、わしのしゅさいして下さいよ、個人のやつを。へへへへ、へへへ……。広島の友達に、バチバチ買わしてます。
山本 今からライブなんで……。

●1982年、ROLLIEは広島で産声をあげた。彼らの音楽は、ビートルズに代表されるような、親しみ易く、メロディアスなサウンドがベースとなっている。ツイン・ボーカルの強みを遺憾なく発揮する彼らは、とてつもなくゴキゲンなバンドだ!!
●[アルバム] 19 1/20の街角で('88年4月21日)、A TOUCH AND GO('88年11月21日)、[ミニアルバム] GOIN' TO PARADISE('88年6月21日)、[シングル] オールナイト・オールライト('88年3月21日)いつも通りの夜('88年8月26日)、マジカルロケット('88年10月21日)
●所属レコード会社=EPICレコード
●所属事務所=バースデーソング
●ファンクラブ=〒150東京都渋谷区猿楽町10-14代官山パシフィックマンション5099号 バースデーソング内 ローリー チアリングクラブ☎03(496)3482

尾崎豊
▼写真集『WORKS』

大増刷出来!!
スペシャル・ピンナップ2枚付!!

▼B4ハード・カバー上製本▼192ページ
▼スペシャル・ケース入り▼定価2800円
▼撮影・山内順仁

1983年デビュー以来、日本のロック・シーンに数々の衝撃を与え続けてきた尾崎豊。パチ▼パチ編集部は、この5年間、尾崎を追い続けてきた、カメラマン山内順仁氏の秘蔵作品、そしてベスト・ショットを集大成し、「今まで一度もなかった尾崎豊写真集」を制作。そして、ここについに完成。1枚、1枚の写真から伝わる息遣いをぜひ感じとってください。特別ケース入りのスペシャル仕様。フル・スケールの超豪華写真集です。そして落合昇平氏の文章もその写真たちを勇気づけています。尾崎豊の5年間がここにはあります。

NOW ON SALE

“彼女”
宇都宮隆 TM NETWORK

NOW ON SALE

▼A4ハードカバー上製本▼160ページ▼1800円

昨年の連載スタート時から大反響を巻き起こし、今年2回目の連載ストーリーも好評のうち完結。実在のロック・スター“宇都宮隆”を主人公の架空小説『彼女』。ストーリーは東京、ロンドン、ニューヨーク、東京と展開していきます。ストーリーにあわせ、東京、ロンドン、ニューヨークで特写した写真達とともに、『彼女』のラブ・ストーリーはこの本で完結します。小説+写真集。一冊で二冊分楽しめる本格派高級単行本。ついに発売!!

吉川晃司
『ZERO』 1988/K2

NOW ON SALE

▼A5ハードカバー▼240ページ▼1500円

デビュー以来の吉川晃司のすべてが、この『ZERO』に凝縮されています。自らがペンをとり連載したエッセイ『K2』も全編再録。他スペシャル・フォトセッション、書きおろし原稿etc、あらゆる角度からの吉川晃司がこの『ZERO』にいます。

バービーボーイズ
初のスペシャル・ブック『WELCOME』

大増刷出来!!

▼A4ワイド▼160ページ▼1300円

バービーボーイズ初のスペシャル・ブックは、彼らのデビュー後3年間を、パチ▼パチで一冊の本にまとめたものです。ロング・パーソナル・インタビュー、メンバーのオリジナル企画、ライブ&ツアー・レポートあり、完全データ集、こぼれ話エピソードなどなど、まさに、この一冊でバービーボーイズのすべてが知れるという、超お得なスグレ本です。まっ赤な表紙が目印。

米米クラブ

●第1回配本
暴かれた米米クラブの過去

罪と罪
▶A5変型
▶212ページ
▶1200円

●第2回配本
徹底追求米米クラブの現在

車輪の上
▶A5変型
▶248ページ
▶1200円

大増刷出来!!

氷室京介
ツアー・ドキュメントブック#1 KING of ROCK SHOW DON'T KNOCK THE ROCK

NOW ON SALE

▼A4ワイド▼128ページ▼2000円

ツアー・ドキュメントブック第2弾決定!!

▼A4ワイド▼140ページ▼2000円

氷室京介、ソロ後初ツアーを追った、ドキュメント・ブック#1『DON'T KNOCK THE ROCK』に続いて、第2弾が、発売決定!! '88年秋~'89年1月にわたって行う、ツアーの全行程を再び完全再録。㊙ライブハウスGIG~香港~東京ドーム。異国でのライブから、500人のライブ、50000人のライブと、現在実現できうるすべてのライブ・スタイルを短期間で行った氷室京介の“今”がすべて収められた、ドキュメント・ブック第2弾です。

'89年2月発売!!

BOØWY
『大きなビートの木の下で』
●感動のBOØWYストーリー

▼四六判▼280ページ▼1300円

早くも伝説となりつつある、スーパー・ロック・バンドBOØWYが、出来あがるまでの唯一のオリジナル・ストーリー・ブックが、この『大きなビートの木の下で』です。4人のメンバーの過去、そしてBOØWYとしての出会い。これは、すべてのロック・バンドにとってバイブルともいえる、ロック・ストーリーです。

▼写真集『RENDEZ-VOUS』

▼A3変型▼180ページ▼2800円

解散してしまったBOØWYのこれまでのビジュアルの集大成写真集です。すべての作品は、BOØWYと加藤正憲カメラマンとの共同作業で生みだした、ロック史上に残る傑作ビジュアルの集合体=写真集が、この『RENDEZ-VOUS』です。現在品切中。'89年、再度の増刷も現在検討中です。みんなの熱いリクエストがあれば

品切れ中!!

PATi-PATi INFORMATION

1989 1 JANUARY

パチ・パチ 1月号 1月9日発売!!

▼A4ワイド▼248P▼580円

●表紙・巻頭特集26ページ

バービーボーイズ

●2月1日、ニュー・アルバム『5』を発表するバービー。久しぶりの巻頭特集は、アルバム『5』をテーマに、パーソナル・インタビューあり、スペシャル企画、『イマサの逆襲』あり、ライブ速報ありETC。強力26ページ特集だ。両面ジャンボ・ポスターもついて大充実の内容。

●特集
米米クラブ
TM NETWORK
氷室京介
チェッカーズ
UNICORN
松岡英明
BUCK-TICK

●掲載予定アーティスト
JUN SKY WALKER(S)
レピッシュ
プリンセスプリンセス
爆風スランプ
大江千里
レッド・ウォーリアーズ
ザ・ストリート スライダース
関口誠人
ハウンド・ドッグ
LOOK
川村かおり
永井真理子
ヒルビリーバップス
岡村靖幸
東京少年
KATZE
LINE UP
カッティング エッジ
ストリートビーツ
木嶋浩史
高野 寛
江口洋介
松下里美
ETC.

●スペシャルPIN UP
米米クラブ

●ジャンボ・ポスター
バービーボーイズ

関口誠人

『ホテル』

●関口誠人短編小説集第1弾!!

▼B6変型▼232ページ▼800円

NOW ON SALE

『青春ちゃん』

●関口誠人短編小説集第2弾!!

▼B6変型▼220ページ▼800円

NOW ON SALE

『君の名を呼びたい(仮)』

●関口誠人短編小説集第3弾!!

▼B6変型▼240ページ▼880円

ロック界の夏目漱石とは、関口誠人のことです。パチ▼パチ誌上でもおなじみの連載エッセイが、『ホテル』『青春ちゃん』につづいて、いよいよ単行本化が決定。第3弾『君の名を呼びたい(仮)』は、そうです、アナタ自身が主人公です。

'89年4月発売!!

ザ・ストリート スライダーズ OFFICIAL BOOK 1988→'89

2BOOKS=1CASE

▶A4ハードカバー2冊セット
▶250ページ
▶5000円

▼予約受付中!!

パチ▼パチ&パチ▼パチ・ロックンロール共同編集でお届けする、スライダーズの1988年のすべて、そして1989年の予感。この本のため1年がかりの撮影スケジュールを敢行。極寒の北海道から~N.Y.~インド。ビジュアルと文字と立体的に、スライダーズを大解剖した、2冊で1セット。究極の立派本です。

'89年2月発売!!

BUCK-TICK HYPER BOOK

▶スペシャルポスター付
▶A4ワイド▶160ページ
▶1500円

▼予約受付中!!

急激な勢いで加熱する〝BUCK-TICK現象〟。その謎を解明すべくパチ▼パチは立ちあがった。最新パーソナル・インタビュー、最新フォトを中心に構成する、メジャーデビュー後のBUCK-TICKのすべてをこの一冊でキャッチして下さい。

89年3月発売!!

RED WARRIORS STORY BOOK 『HAPPY』

●レッド・ウォーリアーズ初の単行本/藤沢映子・著

▶B6変型
▶240ページ
▶780円

初めて明かされる事実、これはレッズの初の単行本、ストーリーブックです。ユカイ、シャケ、コンマ、キヨシそれぞれの涙と笑いの痛快ロックンロール・ストーリー。ロックとの出会い、4人の出会いで、いったん、このストーリーは幕を閉じます。

大増刷出来!!

HOUND DOG 『GOLD』

▶A4ワイド
▶160ページ
▶1500円

ロックンロールの代表選手といえば、いわずと知れた、このバンド〝ハウンド・ドッグ〟。彼らのニュー・アルバム『GOLD』にあわせて、スペシャル・ブックがいよいよ登場。アルバムをじっくり聞きこんでから、この本を読むことを、おすすめします。さて、なにが飛び出すか!?

▼緊急発売決定

'89年1月発売!!

●表紙&巻頭30ページ特集。ピンナップ付。

2 THE STREET SLIDERS特集!!

●特集

BUCK-TICK
KYOSUKE HIMURO
RED WARRIORS
UNICORN
BLUE HEARTS
TOMOYASU HOTEI
RC SUCCESSION
JUN SKY WALKER(S)
LÄ-PPISCH

●掲載予定アーティスト

ラフィンノーズ/PERSONZ/SUPER BAD/バービーボーイズ/カステラ/De-LAX/泉谷しげる/DER ZIBET/TOYS/KENZI & THE TRIPS/ANGIE/LINE-UP/筋肉少女帯/KATZE/DEAD END/THE PRIVATES/ZIGGY/小泉今日子 etc.

ロックンロール 2月号 12月27日(火)発売

▶B4WIDE
▶580YEN

MUSIC MAGAZINE *for* BAD BOYS & GIRLS ハチハチ・ロックンロール

ROCK 'N' ROLL

ロックンロール 3月号 1月27日(金)発売

▶B4WIDE
▶580YEN

SPECIAL特大号!! 大増ページ/ポスター付
保存版1989 ALL BANDデータFILE図鑑付

●特集

THE STREET SLIDERS
KYOSUKE HIMURO
RED WARRIORS
UNICORN
LÄ-PPISCH
JUN SKY WALKER(S)

●掲載予定アーティスト

ストリートビーツ/バービーボーイズ PERSONZ/SUPER BAD/ラフィンノーズ/カステラ/De-LAX THE PRIVATES/TOYS/KENZI & THE TRIPS/ANGIE 筋肉少女帯/LINE-UP/KATZE/ZIGGY and MANY MORE NEW BAND etc.

●表紙&巻頭40ページ特集&ポスター付

3 BUCK-TICK 大特集!!

おいしい話には、なぜか涙が出るほどおかしなエピソードがつきもの。

定価980円
好評発売中!

今、ワコード（若人）の間で人気者のイラストレーター"もん"が綴るイラスト&エッセイ集!
幼いころからショク物に執着し、"オナカ"をこわしてまでも体験してきた完全ノンフィクション!!
そんでもってチープでグルメなオ・ハ・ナ・シ。

- **それにつけてもおやつはカールの部**
  カールの行方／思い出のシャービック他
- **あなたにもチェルシーあげたいの部**
  給食はゴーモン／チクワの友他
- **世界のコトバ・マクドナルドの部**
  パリのカップめん／キムチの恨み他
- **ミルキーはママの味の部**
  必殺手抜き弁当／お茶漬けは大人の味他

CBS・ソニー出版
〒102 東京都千代田区五番町6-2 TEL03(234)5811

CBS・ソニー出版10周年記念企画

スーパースター、マイケル・ジャクソン初の自叙伝!!

ムーンウォーク

MOON WALK by MICHAEL JACKSON

★特異な少年時代の体験――人間として、アーティストとしての成長の過程や、思春期のコンプレックス、家族の愛情と結束、父との葛藤。
★そして、彼の音楽の背景にあるインスピレーションや、驚くべきダンスの動き、誰にも真似のできない創造性の源となっている熱情について、マイケルは率直に語る。★さらに、ダイアナ・ロス、クインシー・ジョーンズ、ポール・マッカートニー、キャサリン・ヘップバーンら、友人達との心からの交流と、名声による孤立感、整形手術、彼をとりまく目茶苦茶な噂についても、あますところなく語っている。
●ジャクソン・ファミリーの未公開写真、マイケル個人所蔵の写真、本書のために書かれた自筆の絵など、貴重な約95点を収録。★ハードカバー

マイケル・ジャクソン著
田中康夫訳
A5変型判328頁●定価1800円★好評発売中!!

完全翻訳版

CBS・ソニー出版
〒102 東京都千代田区五番町6－2

SPECIAL ISSUE

PATi·PATi

▶2大書きおろし小説

木根尚登［TM NETWORK］

宮田京子［プリンセス・プリンセス］

GIRLS MEET GIRL ―――― 落合昇平

KAZUYA／MAGUMI／延原達治／天坂晃英

大槻ケンジ／森田恭子／染谷淳一

●東京少年（笹野みちる）●

CONTENTS

SPECIAL ISSUE

PATI-PATI

OPENIG SPECIAL NOVELS

文・木根尚登

TM NETWORK

〝僕の森へようこそ。〟

◉木根尚登

少女の髪がゆれた。窓の隅においやられた花もようのベージュのカーテンも、時おりゆれている。秋の香りがする10月の風は、まだそれほど冷たくはない。小鳥のさえずりは、緑の中に、そして陽ざしは暖かくいかにも日曜の朝らしい光景だ。

少女はまだ眠っている。部屋のかべ際に横たわる小さなベッドは、うすいピンクのベッドカバーにおおわれたままだ。電気スタンドのあかりは、窓いっぱいにふりそそぐ陽光にかなう訳もなく、その存在を知らしていた。彼女はどうやら、窓際にかまえた木製の机に向ったまま、自分の両手をまくらに眠ってしまったようだ。

少女が深い眠りからさめたのは、夜が明けてから、数時間ほどたってからだった。まだ意識がもうろうとしている。自分が何をしていたかは、右手にもっていたシャープペンシルと机の上にひらいてある教科書を見て、すぐに理解することが出来た。来週から始まる中間試験にそなえて、昨夜は徹夜を覚悟でこの机に向ったのだった。彼女はあたりをゆっくりと見まわした。いつもと変わらぬ、すみなれた自分の部屋だ。机もイスもベッドも白いカベも、金属製のノブのついた茶色のドアも、たなの上に横一列に並んだ、愛敬いっぱいのぬいぐるみ達も、いつもと何一つ変っていない。でも何かが違う。少女はひらいた窓をすりぬける風と光をあびながら、もう一度、あたりを見渡してみた。するとうっすらとぼやけていた輪郭もあざやかになり、それと同時についいましがたまで見ていた不思議な夢の体験が頭の中で映像となって少しずつよみがえってきた。彼女は、自分がいるべき部屋に自分が存在する不自然さを夢を見ていたという現実をひきもどすことによって、その不思議な感覚をとり戻そうとしていた。

彼女は静かに目をとじた。そして今見ていた夢の記憶をたどりはじめた。色が見えてきた。いくつかの光も見える。しかし音はない。限りなく静まりかえっている、と言うよりまったくの無音だ。

自分が見た夢をもう一度はっきり思い出そうというのは、至福の業だ。でも彼女は一生懸命だった。

森が見えてきた。かなり大きい樹木もある。視界は一面緑におおわれている。こもれ日が目にやさしかった。

人がいる。遠くに人がいる。古い石で出来た階段の様な所にちょこんと腰をかけている。

こっちを見ている。とてもすんだ瞳だ。誰かと話をしている。とても楽しそうに。

「私だ、私と話をしている。何を話たんだろう」

少女の記憶は残念ながらそこまでだった。それ以上はどう思い出しても、せんめいにはよみがえってこなかった。

でも一つだけ思い出したことがある。それは、彼女は、森に迷いこんだのではなく、自らその森に足を運んだということだった。少女はその夢の中で、毎日ロボットの様に数字や文字を頭の中に書きこむことにいやけがさし、自分の部屋を出てしまったのである。そして家の近くをフラフラと歩いている時にこの森を見つけたのだった。

少女はとじていたまぶたを静かにあけると現実という名の自分からまるで遊離するようにその部屋をあとにした。

そして彼女は、夢の記憶の糸をたどりながら街を歩いた。いつもの見なれた風景だ。家の前の路地を出ると数十メートルに渡って商店街が並ぶ、3本目の十字路を越えると、車の修理工場が見えてくる。その先に古びた交番がある。その交番のとなりのあき地が公園になっているはずだ。この街の唯一緑のある所だ。

少女はひたすら歩いた。彼女にとっての彼女をとりまくすべての光景は長い一枚の絵にすぎなかった。もはや音も光も感じていなかった。少女は森を求めて、ひたすら歩いた。どれくらい歩いただろうか、気がつくと交番の前にさしかかっていた。そしてその交番を通り過ぎようとした時、少女は思わず足を止めた。「森だ。森がある」こんな所に森があるわけがない。少女は、森を求めていたにもかかわらず、そこにいつもある公園がなかったことに驚きのあまり、その場に呆然としてしまったのである。これはあの、俗に言うデジャブ現象なのだろうか。彼女は、人さし指で、何回も目をこすっては、その場所に視線を送った。やはり森だ。さっきまで見ていた夢に出て来たあの緑におおわれた大きな森だ。少女はその場で深く目をとじ、冷静に考えてみた。『もしかして今、私がここにいる事自体が夢なのかもしれない。一度夢からさめて、家を出て来たつもりだったけど、本当の私は、まだ部屋で教科書をおおうようにして眠っているのかもしれない』

少女はもうそんなことは、どうでもいいと思った。夢だろうが、デジャブだろうが、今ここにある目の前の現実を信じることにした。そして一歩ずつゆっくりとその森へと向っていった。

少女は時より足もとに気をつけながら、まっすぐと前を向いて歩いていった。彼女はけしてふりかえろうとはしなかった。なぜなら今ある現実を単なる夢として、その眠りからさめてしまうことを大いにおそれたからである。彼女は、一面緑におおわれた森から、けして視線をそらそうとはしなかった。

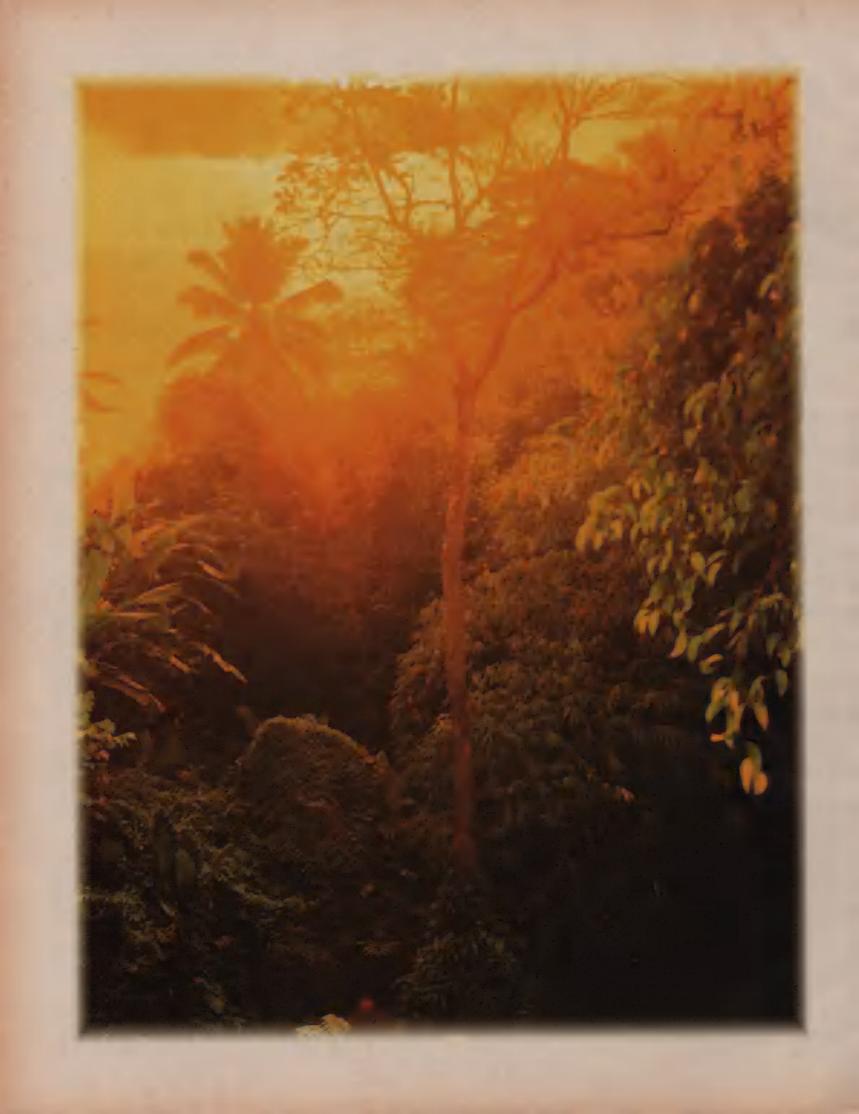
耳をすましてみた。何も聞こえてこない。小鳥のさえずりさえも…。ましては自分の歩くくつの音さえも…不思議だ、確かに一本の道はある。とても細い道だけど確かにある。でも感覚と言えばまるで宙を歩いているようだ。彼女は立ち止まってみた。まだいくらも歩いていないはずなのに、あたりはうっそうとして、その森の深さを物がたっている。もはや、西も東もわからない。

少女は樹木達のすきまをすりぬけては、ふりそそぐ、何十本ものこもれ日をたよりに、また、ゆっくりと歩き始めた。そして、ゆるやかなカーブを描いた一本道を、いくつか越えると、樹齢何百年とも思える背の高いそれでいてどっしりとした大木がみえてきた。そしてその大木をよけるようにして、彼女が進むと、そこには、やはり何百年もたっていると思われるうすよごれた白い、石でできた、[illegible]あとのような物があった。

「ここよ。この場よ、あの夢に出てきたのは、そうよ、ここよ」

少女は、小さくそうつぶやいた。もちろん声にならない声でだ。

「そうだわ。このひざほどの高さの白いかべをまわりこむようにしていくと、あの人がいるはずだわ」

少女は自分にそう言いきかせるようにつぶやくと、夢の記憶をたどるように先をいそいだ。

古くよごれたへき画、くずれおちそうな石の柱、歴史以外には何も感じることの出来ない石の数々を少女はよけたり、くぐったり時にはとびこえたりして、歩き続けた。しかし残念ながら彼女の夢の記憶はそこまでだった。彼女は近くにあった大きな石にすわりこむと両手で頭をかかえ、深くため息をついた。「もうこれ以上は先へ行けないわ。これ以上行くと本当にこの世界から出れなくなってしまうわ」

少女は心の中でそうつぶやくと今来た道を戻ろうという決心の中でスーと立ち上がった。とその時、無音であるはずのこの森に何かの奏でる音が聞えてきた。彼女は深く目をとじた。そして耳をすましてみた。

「何の音」

「なんて美しいメロディー」

「あっこれは」

少女はそうつぶやくと、音のする方へと、視線を送った。

「私の大好きなアルファンブラの思い出だわ」

彼女は、もしかして、という思いを胸にまようことなくその奏でるメロディーをたよりに、ゆっくりと歩き始めた。

歩けば歩くほど、アルファンブラの思い出が確かになっていく。

歩けば歩くほど、美しいメロディーが近づいてくる。というよりも彼女がその音に確実に近づいてるのである。

少女は突然足をとめた。まるで目の前にある光景を楽しむかのように立たずんだ。

そこが昔何んだったかはよくわからが、8段ぐらいで先が終わっている階段のようなものがあった。あたりは相変らず木々におおわれている。ここもきっとさっきと同じ城あとの一部だろう。

その階段のすみに腰をおろしてギターを弾くまねをしている一人の男がいた。

少女は一瞬目をうたがった。

「確かに私のさがしていたあの人は今ここにいるわ。そしてギターをもってアルファンブラの思い出を弾いている、でも私には、そのギターが見えない」

「とにかく、あの人のそばに近づいて、話かけて見よう」

少女は心の中でそうつぶやくと、静かに、そしてゆっくりと気づかれぬように階段の方へと歩みよっていた。

「誰だい！」

ギターを弾くその手を止め男が言った。

「ごめんなさい。じゃまするつもりはなかったの」

少女は少しはなれた所にちょこんと座り、そう言った。

「ね、私の事知ってるでしょ？」

「僕が君を？」

「ちょっと前に私ここに来たはずなの。そしてあなたとお話したはずなの」

「僕は君と会うのは初めてだよ」

男はそう言うと、もっていたギターをおくまねをした。

「そんなはずはないわ、確かに私はあなたとここで…」

少女はそう言いかけると軽くあたりを見わたした。

そしてこう続けた。

「ね、ここはどこなの」

「森さ」

「森ってどこの森」

「僕の中の森さ。うん、君の中の森でもあるかな」

「ねえ、さっきまで弾いていた曲、あれ、あなたが弾いてたの」

「そうだよ」

「ギターで？」

「ああ」

「でも私はそのギターが見えないの」

「それは僕の中のギターだからだよ」

「ねえ、あれってアルファンブラの思い出でしょ、あれ、私をここにみちびくために弾いてくれたの？」

「僕はいつもここにいる」

男はそう言うと目の前にあると思われる一輪の花をつんだ。

そしてその花の香りを楽しむようなしぐさをした。もちろん少女には花は見えなかった。

「あなたは誰？」

「君は僕を知ってるんじゃなかったのかい」

「よくは知らないわ。この辺にあなたがいるということは何となく覚えてたけど」

少女はひざをかかえなおしてそう言った。

男は相変らず一輪の花の香りを楽しんでいる。

「わかったわ。あなたはこの森の妖精ね」

「妖精というのは小さな仙女のことを言うんだよ」

「じゃあ、森の王子さま」

「僕はそんなにかっこいいもんじゃない。僕は僕。僕以外の何ものでもないさ」

「じゃあ、あなたはいったいここで何をしてるの」

少女は真顔でたずねた。

「夢を楽しんでるのさ」

「夢を？」

「そう、夢を」

「夢って」

少女が不思議そうにきいた。

「夢は夢さ。それは、自分の心の中にだけ描ける自由そのものさ」

「ふーん」

少女はよく理解出来なかった。

「君はなぜこの森へやってきたんだい」

男は右のポケットからハンカチをとりだすしぐさをしながら言った。

「私が少し前にここへ来て、見たり、きいたりした不思議な事をもう一度思い出したくてここへ来たの」

少女は一生懸命説明した。

「でもよくここへこれたね。ここへこれる確率と言ったら、広大な砂ばくで手のひらにのせたほんのわずかの砂を、それをまた、ふるいおとして指の先に残ったわずかな砂のつぶにあたいするぐらいかもしれない。

「そんなにすごいことなの」

少女はその場に立ち上がると、少し驚いた面持ちでそう言った。

「だから君がここへ現われた時は僕も少しびっくりしたけどね」

男は笑顔でいった。

「じゃあ私はとても運がよかったのね」

少女も笑顔で言った。

「ようこそ、僕の中の森へ」

「私の中の森でもあるわ」

「そうだったね。…それじゃあ、運命のこの出会いにカンパイといこう」

男はそう言うと、すかさずワインボトルのコルクをあけるしぐさをした。

「残念だけど私、まだお酒のめないの」

「おっとこれは失礼。君はまだそういう年じゃないね」

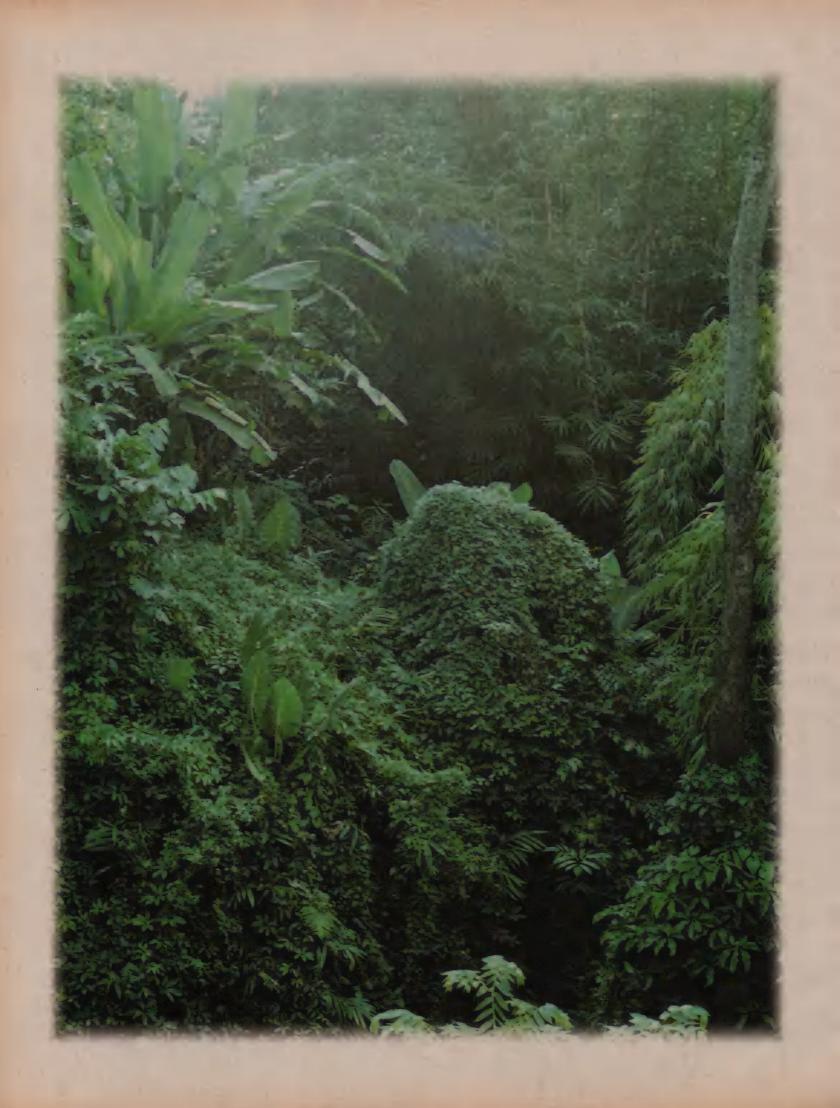
男はそう言うとグラスにジュースをそそぐしぐさをした。

「ありがとう」

少女はそうつぶやくと、右手にグラスをもつまねをして一気にのみほすしぐさをした。とその時、のどをオレンジジュースがたしかに通っていくのを感じた少女は、グラスをもつまねをした、右手をそーとひらいてみた。その瞬間、地面にグラスがおち、ガシャーンという音をたて、ガラスのはへんがちらばったかのように思えた。しかし、少女の目にはグラスは見えなかった。さっきのギターといい、花の香りといい、今のグラスといい、少女はとにかく不思議

でならなかった。
「君にももうすぐ見えてくるよ」
「私には何も見えないわ。ギターも花もワイングラスも…」
少女が不安そうにいった。
「だいじょうぶ、この森が見えてるんだから…」
男はそう言うと今度は手のひらに小鳥をのせほおづりするしぐさをした。少女にはまだ、その小鳥は見えてない。けどそのさえずりは確かにきこえる。
「君にもきこえるだろう。この美しい声が」
「ええ、よく聞こえるわ…でも…」
少女はそう言いかけると突然たちあがって、小さくさけんだ。
「あっ!!見えたわ　私にも見えた」
青い鳥だ。少女のにぎりこぶしほどの小さな鳥だ。少女は、思わずあたりを見回した。すると、さっきまで見えていなかった、ギターも花も、われたグラスのはへんも、確かにそこに実在していた。少女は少しびっくりしたが自分にも見えたことのうれしさで胸がいっぱいになった。
「だから言ったろう。君にも見えてくるって」
「でも不思議だわ」
「何も不思議じゃない。意識の中に存在するものが見えないわけがないさ。これから僕が創り出すすべてのものが見えるはずだよ。もちろん君が創り出すものもね」
男はそう言うと手のひらにのせていた、青い鳥を森にはなしてあげた。青い鳥は木々の間をうまくぬけて、空高くはばたいた。
「あの鳥はあなたが作ったの」
「僕はそんな器用な事は出来ないさ。ただ意識の中では創る事が出来る。青い鳥も、ギターも花も、すべてが僕の中に生まれた想像の世界なんだ。もちろんこの森もね」
男はそう言うと、両手をひろげ大きく深呼吸した。
「太陽の光も?」
少女は信じられないという面もちで言った。
「もちろん」
「この青い空も?」
「ああっ」
「じゃあ私は今、あなたの想像の世界にいるのね」
少女は笑顔をとりもどして言った。
「だからさっきいったろう。〝僕の森へようこそ〟って」
「じゃあなぜ、最初に見えなかったものが今になって見えてきたのかしら」
「感情移入さ」
「感情移入?」
「そう。僕が君の意識の中にそのすべてをおくりこんだのさ」
「私にも出来るかしら」
「もちろん!!やってみるかい」
「ええ」
少女はうれしそうに返事をした。男はその場にスクッと立ちあがると、ポケットから、まだ空気のはいっていない風せんをとり出してそれを自分の口もとに運んだ。そして、大きくいきを吸いこむと「フー」っと言う音をたて、その風せんをふくらまし始めた。両手いっぱいにふくらんだ白い風せんに、今度は、ポケットからとり出した糸を、その風せんの口にむすびつけた。そして人さし指と親指で糸をつまむと、大きな白い風せんはみごとに宙にまいあがった。
「さっ今度は君もやってごらん」
少女は半信半疑だったが、見よう見まねで、ポケットから風せんをとりだした。そしてそれを口もとに運ぶと、小さくいきを吸ってフーッと空気をいれた。何度も何度もいきをふきこむと風せんがだんだん大きくなり少女の顔をかくしてしまった。少女はかかえきれないほどの大きな風せんの口を指でつまむと、男がそうしたように、ポケットから糸をとりだしてそこにくくりつけた。そして少女は右の指と左の指でつまんだ糸を交互にあげると風せんは静かに宙をまった。
「出来たわ!私にも出来たわ」
少女はうれしさのあまり声のトーンを上げて言った。
「ほらっかんたんだろう」
「ねえ、もっと創りましょう、いろんな色の風せんをたくさん創ってこの森の上の空を風せんでいっぱいにしましょうよ」
「いいとも」
二人はおたがい向いあった。一生懸命に風せんを創り始めた。二つめの風せんを創り始めると、一つめの風せんが空高く舞い上がり、三つめの風せんを創り始める。二つめの風せんが宙を舞う。二人は夢中でそれを何回もくりかえした。
「ねえ、みて。すごくきれい」
少女は、風せんを創るしぐさをやめ、空を見上げて笑顔いっぱいそう言った。男もその手をやすめ空を見あげた。木々のすきまからのぞいている青空に数百個の色とりどりの風せんが舞い上がっていく。少女は、あまりの不思議さと美しさに空を見上げたまま、ぼうぜんと立ちすくんでしまった。
「さぁ、そろそろ君も自分の場所へお帰り」
空を見つめていた視線を少女にもどして男が言った。
「そうね。でも私、ずーとここにいたいわ」
「そういう訳にはいかないよ。僕の中に、長い時間はいられない。君は君の中に帰らなくっちゃ」
「私またこの森にこれるかしら」
少女が少しさみしげに言った。
「もちろん。君が君であることに少しもせのびをせず、いつどこでも君らしくいられることが出来たら、またいつでもこれるよ」
「ほんと!?」
少女はとても美しい笑顔で言った。
「またいつか会えるといいね」
男は笑顔でそう言うと、ゆっくりと階段をおりて少女の近くに歩みよった。
「私、ここにいた時間がとても楽しすぎて、この森を出る道じゅんを忘れてしまったわ」
「それならだいじょうぶ」
「ということは」
少女がたずねた。
「そう、君が僕に背を向ければ、この森は消えてしまう」
「いやだわ私。そんなのさみしすぎる」
「また会える時がくるさ。勇気を出して、お帰り」
男は笑顔でいった。
「また、きっと必ずこれるよね」
少女は自分に言いきかせるように言った。
「ああ、また会えるさ」
「今度会った時も、今日と同じようにたのしい夢を見せてくれる?」
「約束するよ」
「きっとよ」
「約束する」
「楽しかったわ。ありがとう。そしてさようなら」
少女は微笑をうかべながら、ていねいにそういい残すと、笑顔とすんだ瞳で少女を見送る男にくるりと背を向けた。とその瞬間、いままで確かに生きづいていた森や緑や鳥、そして空にあそぶ風せんまでもが、一瞬の光りとともに消えてなくなってしまった。まるで雨の中で記憶のかけらがはじけるように、そこにあるすべての想像がかきけされるようにしてしずまりかえった。
少女の髪がゆれた。窓のすみにおいやられた花もようのベージュのカーテンも時よりゆれている。秋の香りのする10月の風は、まだそれほど冷たくはない。小鳥のさえずりは緑の中に、そして陽ざしはあたたかくいかにも、日曜日の朝らしい光景だった。

“僕の森へようこそ。”

NAOTO KINE

森は、僕たちの心をまどわせる魔力が、どうやらあるようです。すぅーとひきこまれてしまう磁力もあるようです。森の中のストーリーは、いつも、メルヘンだったり、ミステリアスだったり、非日常の世界が転開されます。僕たちの心の底にある願望は、どうやら森というオブラートに包んでやると、語りやすくみたいです。森は僕らに一番近い宇宙かもしれません。

November

11月はとても忙しい月です。
…と、私はいつも"忙しい"ばかり言ってるね。よくないね。…だがしかし。

11月5日(土) 別冊ミュートマJAPAN

本番中に撮った写真。

TVKで日曜日の午後3時からオンエアされている「別冊ミュートマJAPAN」は、あの有名なマイケル"とってもいいんだ"富岡さんと、あのカワユイ森若"早口"香織ちゃんfromゴーバンズと、そしてこのアタシがMCをやっている番組です。この日のゲストはJUN SKY WALKER(S)と、PEPPER BOYS。全員スタジオにやってきて大サワギ。本番中に写真を撮ったのであんまりよく撮れませんでした…。

←とってもオチャメな"1カメ"さん。

せわしなく動くのでブレてしまったカズヤくん。

森田恭子のイケナイコトなの

ウウン、そんなコトないったら……。

SPECIAL

PATI▸PATI STYLE PRESENTS▸▸▸
©KYOKO MORITA '88
IKENAI-KOTO-NANO SPECIAL VIRSION

スペシャルだから写真つきヨ。

PHOTO by K.MORITA and Her Friends♥

Merry Christmas

お正月に見てる人はごめんね。

ゴアイサツ

ハロー。みなさん、お元気ですか?・今回はイヤー・ブック『STYLE』ということで、私は吾郷編集長に5ページもいただいてしまい、この"イケナイコトなの"をやることになっちまったってわけでさー。(へ…あんまり乗り気ではないのだけど、コレしかやることがない……)

読者のみなさんにサービス!!

11月7日に取材した尚ちゃんは ちょっぴり風邪気味にもかかわらず"新しいアルバムの話を うれしそうに してくれました。髪は切らないってサ。

もう11月はめまぐるしくて、浅香唯ちゃんのコピーを考えていたかと思えば次の日はPERSONZの取材という、わけわかんない毎日をすごす私です。いろーんな人に会って、いろーんな話を、いろーんなところでするので、アタマがクラクラしちゃう。んで、いろーんなコトをすぐ忘れちゃう。…こんなコトでいいんでしょうか。いんや。いいわけがない。でも流されるままに、またいろーんな人に会う私。せめてもの心の支えは友達と、そしてやっぱり、音楽だね。

11月6日(日) 大阪には毎週日曜日、行っています。もちろん"MUSIC…ING"の生放送のためです。毎週いろんな人が私の相手のパーソナリティをつとめに来てくれます。この日の相手は、マグミくん。自慢のドレッド・ヘアーは帽子から出てるとこだけだったのが、なんかカワイイのでした。(また来てね♥)

11月7日(月) お昼から尚ちゃんの取材…だったので、すんごく早起き(私にとっては)して新幹線にのって東京へ。夜はブドーカンライブ。もちろんUPBEATだよーん。

11月8日（火）

夜7時からレピッシュの取材でした。現ちゃんはオサイフやら免許証やらをいっぺんに失くしたとかで、ちょっと投げヤリ…なカンジは今日に始まったことじゃないんだった…。タツくんはパスばっかりするし。（パスは3回までだよ、と言ったら、ウチは5回までいいんです、だって。おもしろーい!!）

11時にQRに行って、MUSIC…ING の録音。久保田利伸クンだよーん。久保田クンは、デビュー当時から知ってるけど、そのときから今に至るまで、ゼンゼン変わんない。ずっとオンチジ。でも音楽はどんどんグレードアップしてる。もう余裕のヨッちゃんだね。ライブ見に行きたーい!!

業界用語

11月9日（水）六本木アートセンターでバービーボーイズの取材。イマサはいないけど、なんかでっかい白いイマサがいた。コンタは寝ぼけ気味。杏子もくちょっと…。でもみんなで記念撮影。

この写真をとるために、わざわざヒゲをそってくれた久保田くん。どもどもありがと～!!

'88年も終わっちゃうね

とても忙しかった'88年。引越しをした'88年。ロンドンとニューヨークで『彼女』の取材をしてクタクタになって、でも単行本ができて嬉しかった'88年。福岡さまこちゃんがお仕事をやめてしまった'88年。『別冊ミュートマJAPAN』が始まった'88年。尾崎君の東京ドームのライブに感動した'88年。あいかわらず長電話してた'88年。とーる君がLOOKをやめてしまう'88年。TVを買い換えた'88年。シブがき隊が解散した'88年……バイバイ!

ずっとおんなじ。

DANCIN' WITH THE MOON LIGHT

PATI▶PATIの編集をしなくなったので私にもヒマ――な日がたま――――にあります。そんなとき、何もやることがなかったりして、そんな自分がやになるネ……。

いちいち着換えて出て行く。けっこう盛り上がるヨ。引越し後、まだまだ足りものがあるので、ヒマな日はまた買いものに行かねば…。

スリッパとかマクラカバーとかオナベとか。

11月12日（土）“別冊ミュートマ――”の収録。レプリカと本嶋浩史くんと金山・キーター一義くんがゲスト。金山くんはトレードマークのみけんのシワに1円玉をはさむという技を公開してくれた。こんな飾りのバンドの代表者が集合。ゲストパーソナリティーの、スーパーバンドのエージくんは、本

11月13日（日）ま、このへんのことはパチパチ1月号にも書いたのですが。関西でのハートビートパレード、これはいつも盛り上がる。この日も、ビーモダンはもちろんのこと、マッドギャングやスーパーバンドが出演。夜、MUSIC…INGにも、出たなり。ラフでパワフルなカンジが新しいアルバムにも出てるゆ。

当にDJがウマイッ。各バンドを積極的に取材して、本番でインタビュー。しきってくれた。それにね、声がすんごくデカイの。

11月14日（月）12時、東京に戻ってきて、永井真理子ちゃんの取材。まりこちゃんは本当にいつも元気だけど、インタビューで思わずカが入って、涙ぐんでしまったりもする。

そんな彼女は、これからきっともっと素敵な歌がうたえるようになると思います。

午後2時から関口誠人くんの“STYLE”の取材。インタビューは久しぶりだったので、すごく時間がかかった。言いたいコトがいっぱいあるし、でも言わなくてもいいんだ、みたいな。

関口くんのスタイルは、かなりオトナっぽい。私もそうなりたい。

11月16日（水）いろんなところに書いたけど、ビーモダンが小坂井中学校（愛知県）に呼ばれてライブをやった。天坊君は、こんなによろこんでない空気の中でライブできてよかった、と言ってたヨ。

生活指導の先生は、いろいろなことの条件が整って奇跡的に中学校でのロック・コンサートが実現した、とおっしゃっていたけれど、その場所にビーモダンという、日本でも指折りの素晴らしいバンドがやってきたことに気づいていられるでしょうか。ステージの上の4人は、すごくイイ顔をしてました。ビーモダンを初めて見た1200人にとっても、ビーモダンを何十回も見てる私にとっても感動的なライブだったと思います。

ライター　森田恭子

みんな、このページおもしろいですか？オコッてないですか…。

杏子のシ・ジャ・シ・ン

いちばん右がカメラマンの加藤正憲さんだヨ。で、いちばん左が今度パチパチにきた芳賀さん。そのとなりが有名なアゴリノフ編集長。コンタのうしろは、ヘッドバッドのスズキくん。私（杏子の右側）のうしろがヘッドバッドのマエカワくん。（che のユーちゃんに似てる）いちばん前のメガネの人がヘアメイクの栗山くん。

イケナイコトなの!!

（いいきり）

11月17日(木) 久しぶりに小比類巻かほるチャンに会った。CFではよく見てたんだけどね。30分くらいでMUSIC…エンケの録音オワリ。その後同じスタジオで郁弥くんと尚ちゃんの録音。尚ちゃんは前日の夜『ほたるの墓』というアニメを見てボロボロ泣いたとかで、まぶたをはらしていた。子供ができたら"セツコ"という名前にしようかな、だって。ウエ。"ほたるの墓"の主人公の名前なんだって。

11月18日(金) 12時から、六本木スタジオでCCBの取材。新しいアルバム『信じていれば』の中で1曲詞をかいている"麻亜一花"って、アタシなんだ。…へへ。ハズカシー。

11月19日(土) "別冊—"の収録。この日はゴーバンズの森若ちゃんがライブのためにお休み。マイキーの新しいコーナー"マイケル富岡の英語教室"も始まったというのに。ゲストは岡村靖幸くんと原田真二さん。原田真二さんはデビューした頃、すっごいファンだったので、人知れず、なかなかカンガイ深かった私でした。

岡村くんもオモシロくて、ビデオの中でスキップするシーンでみんなに笑われて。"マズイナー"を連発。でもマイキーは岡村くんが好きみたいで、いくらマギが入っても、全然インタビューをやめようとしなかった。

11月20日(日) 大阪へ。この日は2本録り。翌週分の"MUSIC…ENG"を東京少年のみちるチャンと。夜は生放送で森若香織ちゃんと。ゲストで荒木真樹彦くんが来た! 背が高ーい。オススメよ!

11月21日(月) 東京に戻ってきて、夜6時から"STYLE"のためのCCBの取材。この日のインタビューは田口君と米川君。……ヨネナナなんにもしゃべんないじゃん。…コマッタナ。

11月22日(火) 原稿書かなきゃ原稿書かなきゃ原稿書かなきゃ…で日が暮れる。

皆さん歌♪
ダンコーが うまくかけないよー
あ〜きーりー
夢中になってなくちゃー
アーんだうけっぱなし のままでー
あったーしー
それをながめていた…

森田恭子の A HARD DAYS NIG-HT

11月23日(水) 11時の新幹線で広島に向かう。ウッディストリートでライブをするプライベーツに会うためです。私は徹夜明けです。新幹線の中でバービーのテープおこしをしました。そして1時→向・寝ました。プライベーツのライブは、渋谷公のときと全然ちがくて、でもそれはそれなりに、すごくよくて、カッコヨカッタ。"ジェニジェニ"とかカバーしてたヨ。夜はひとまず(みんなとゴハンも食べないで)ホテルで眠りました。夢の中で原稿を書きましたが、何にもなりませんでした。

THE PRIVATESのみなさん。

11月24日(木) 広島からフェリーに乗って松山港へ。いよいよ"バンド・チェイス"の撮影開始。→パーソナルなインタビューをしてるあいだ、他のメンバーはふざけてばっかり。かと思うと、くーくー眠ってしまったり。それでもフェリーの中では、延原くんとけっこうマジメな話もしました。内容は・ヒミツだよーん。"ラストダンスは私に"は一瞬ショーケンのカバーかと思いきや、後半は延原くんの詞。これ、すごく、いいんだ。

ディレクターの[illegible]ちゃんとA.Dのくまちゃん。仲良し★

TVK"別冊ミュートマ・JAPAN"には"森田恭子のバンドチェイス大作戦"というコーナーがあります。私がバンドの追っかけをする、みたいな内容なんですけど。今までジュンスカ、ペッパーボーイズ、ビーモダン…ときて、今回はプライベーツ。そしてローリー。も、ターイヘンなんスから。(古い。古すぎる!) 締め切りの時期だし…。

みほリンから送られてきたFAXのかたすみに書いてあったイラスト。買い物願望がよくあらわれている上手な絵です。(評)

みほりンとか久美子chanとはよく、夜中に電話するんだけど。みほりんはすんごくマジメでいつも"仕事"や"書くこと"や"インタビュー"のことを話してくれます。こんな私を励ましてもくれます。久美子chanもそう。でももうオシゴトをやめたので色恋沙汰が多い。ははは…。あと、テレビのこととかねー。(テーマになることが)

'89年もよろしくネ。がんばろ〜!!

みほリン　みこちゃん

赤いマフラー　正義のしるし

森田恭子の

KYOKO MORITA'S IKENAI-KOTO-NANO SPECIAL 1988

11月26日(土) 朝6時に、ローリーの岩川くんと山本くんの"ネオキ"を、神田くんと一緒にやったあと、飛行機で東京へ。"別冊ー"の本番の日なんだもん。夜はとうとうダウン!! ジュンスカの渋公に行けなかったじゃないかーっ。と、自分に怒りをぶつけてみる私…。

11月27日(日) 1月9日売のパチパチのバービーの取材。今度はイマサもいたよ。だって表紙&巻頭特集なんだもん。コンタのインタビューは

なんか…ムズカシカッタナー!! 夜はパワーステーションでビーモダンのライブ。ぶわっと散らばっていって、ギュッと固まるカンジ。ヨイのではないでしょーか。かと思えばジーンとさせてくれたり…。

11月28日(月) 夜、ゴーバンズのライブを見に行く。クラブクアトロにね。もうすっごい人が大勢いて、森若ちゃんの顔がやっと見えるくらい。カワイイライブでした。

11月29日(火) 5時からビーモダンの取材。'89年3月リリース予定のLPのレコーディング、がんばってねッ!!

TM NETWORK ウ、ウ、ウツが来ない…

11月30日(水) エンゲとかパチパチとかいろいろなんですけど11時30分から、タミオくん→TM→永井まりこチャン→CCBとインタビューばっかりの1日。夜はパワーステーションの関口くんのライブに行く。「紅茶色の夕やけ」しゃんなかったね…。そして放心状態で家に帰った私。

Writin' PRESENTED BY Kyoko Morita ★★★

←このロゴはトシちゃんのすごくいいアルバム"Dancin'"をマネしたの。ブルートの三井くん、どーもありがとー。

BE MODERNS

●またかと思いでしょうが、誰にでも好きなバンドがあるはず。私にだって……。

私のよーな立場の人が、こーゆーコトを言ってはいけないのかもしれないけど…。このページのタイトルを生かすためにも!! 私はビーモダンが好き、と言ってしまおー。ま、いーじゃん。ね-ね-ねね!

なんか「コンちゃんのブッツン解放区」みたいになってきた…どうしよう!!

まー、それにしても、好きなバンドや好きなアーティストはけっこう増えるもんです。'88年、よく聞いたアルバムBest5は「DATE／岡村靖幸」「ENCORE／BE MODERN」「GUITARHYTHM／布袋寅泰」「FOLK SONG／関口誠人」「1234／大江千里」かな。あ、モンキーパトロールも…!!

だおけどぉさぁ〜。コレ、こんなに書いて…書き続けちゃって…いいのかなァ。怒ってる人もいるでしょーね…。(けっこうそーゆーコトを気にするタイプ)

PRESENT FOR YOU!

11月25日(金) 松山から国道33号線にのって高知へ。途中で"四国ラーメン"など食べながら。そう!! 私は四国にやってくるのは初めてなのです!! ピース!! しかし原稿が…まだ残ってた。

しかし。原稿も、いつかは終わるもの。ハハ。と、安心したのもつかの間、この"バンドチェイス"の隠された名物"寝起き"(ホラ、田代マサシさんがやってるやつ)があるんだナー。コレをやってるときだけは"私、いったい何やってんだろ"と思うヨ。プライベーツの"寝起き"はリレー方式。ま、くわしくは1月8日の"別冊"のオンエアを見てね。見れない地域の人は、神奈川県に住む友人知人にビデオにとってもらおう。もしくは、ミュートマをオンエアしてるTV局に"別冊"もオンエアしてくれ、と頼もう。

と、ディレクターの洋子ちゃんが言ってたよ。とにかく、この朝の"ネオキ"に関しては延原くんに1本取られたのよ。くやしいです。(あ、バンドチェイスの本編は、もうオンエアおわっちゃったのよ。…と、私が何を書いてるのかわかってもらえるのか、だんだん不安になってきた。……文章かくのってムズカシイネ)

午後は"じまんと2号"に乗って高松へ。しまんと、っていうのは川の名前で、日本最古の川だそうです。川沿いに走る列車は、なかなか情緒があって、少しだけ心もなごみました。私はてっきりその川が"しまんと川"だと思ってたら"吉野川"でした。でもキレイでしょ。

高松の"クラブハウス"では、ROLL-Eがライブをやってました。彼らは毎日のようにライブをしてて、もう1ヵ月半くらい東京に帰ってない、と言ってました。ライブ終了後、"ROLL-E号"に乗って徳島へ。ホテルで撮影をして、深夜3時頃しゅうしん。おつかれさまでした?!! 26日朝、東京に帰ったヨ…!!

エレベーターの中

スーパーで買い物

かえりみち

森田恭子のイケナイコトなの。

PATi▸PATi STYLE PRESENTS KYOKO MORITA'S IKENAI-KOTO-NANO SPECIAL

そして、とうとう12月になってしまった。December ダヨ。

12月1日(木) パチパチ編集部のイケダ(エッちゃん、でおなじみ)が急に取材を入れるものだから、渋公のPERSONZのアンコールが見れなかったじゃないか…。でも永井真理子ちゃんに罪はありません。(ベストアルバムが出るんだってー)取材のあと、久々にパチパチへ行く。いろいろ仕事をすませたあと、

もう1時(深夜の、ダヨ)になってしまったのでTAXIをひろう。(これがなかなかつかまんないんだ…)で、TAXIは外苑を通って、我が家(といってもダレもいないけど)へ向かう。TAXIの運転手さんが外苑の街路樹のイチョウを見ながら、同じ東京でも、場所によって葉っぱの散り具合がチガウ、と教えてくれた。たまーに、こういうロマンチックな運転手がいるんだよね。

本当はもう12月2日になってますが気分は1日です。家に帰ってまず初めにするコトは、るす番デンワを聞くことです。聞きながらビデオを巻き戻す。るす録かけてあったでね。すっかり着換えてからビデオを見る。

「金太十番勝負」と「とんねるずのみなさんのおかげです」↓「ニューヨーク恋物語」を見る。(注 もちろん原稿を書いてます…)しかし"ノリだー"の途中で福岡くみこからデンワがかかってくる。ま、いろいろ話して…。で、パチロクを読んだり、読者の人からもらった手紙を読んだりして…

結局、朝6時。ペッパーの柴田クンが出てる"ドーナツ6"を見ながら、尚ちゃんの原稿を書く。……午後2時からレピッシュの取材。

1週間後、ホモオダホモオが復活した。

1989もがんばろうね★

というわけで、このページのためにモリタのカメラにおさまってくれた皆さん。それから勝手にいろいろ書かせてもらった皆さん。どうもありがとうございました。そして、このページには載ってないけれど、LOOKのメンバーや、KANくんや、KATZEの人たち、ペッパーボーイズ(こーゆーときの順番とかにこだわらないよーに)あとはみ――んなのスタッフの皆さん、レコード会社の皆さん、イベンターの皆さん、ロMUSIC…ZNGロのスタッフ、ロ別冊ミュートマJAPANロのスタッフ、'88年も大変お世話になりました。もっちろん、吾郷編集長はじめパチパチ編集部の皆さん、パチロク編集部、TYO編集部、それから他の出版社の皆さん、お世話になりました。カメラマンの方々、ライターの方々、どもどもありがとうございました。そして、こんなワガママな私ですが'89年もどぞどぞヨロシクお願いしますね。……11月から12月にかけて、"この1年はどんな年でしたか?"という内容のインタビューをたくさんしたのですが(もちろん編集部や番組スタッフの意向ですヨ)我が身を振り返れば"忙しくてボロボロ…"というコトでしょうネ。ついでに'89年はもう少し暇になっていろんなコトゆっくりやってみたい。それから'88年の10倍くらいDATEします。(宣言)そしてB21スペシャルはきっと売れるでしょう。'89年も、がんばろうね。約束ね。

み・な・さ・ん・へ♥

いつもお手紙をくださる皆さん。どうもありがとう。最後のビンセンに「ノリだー」を書いてくれたり、記事の感想「モリタさんらしくない!」なんて叱ってくれたり、私が「イケナイコトなの」にソリカレターなーんて書くから心配してくれたり。…励まされます。いろいろあるけど、私の書いた記事を読んでくれる人がいるシアワセを胸に、私はがんばります。それからこのページ(5ページも!)を最後まで読んでくれてどうもありがとうね!!

ではね。またね…。

Copy
illust
photo

ODDTO PRINCESS PRINCESS

[6人のプリンセス・プリンセス]

文／富田京子(PRINCESS PRINCESS)
イラスト／今野登茂子(PRINCESS PRINCESS)

私は、ひとりで夢を見ていたのかもしれない。たまに、そう思ったりもする。でも、メンバーひとりひとりの手元には、リサが最後にくれた不思議なお守りも残っているし、私がリサから借りたままになってる腕時計も、今だって、ほらっ目の前に置いてある。

I

プリンセスプリンセスは、1983年の3月に各パートごとのオーディションで選ばれたそれぞれの女の子で構成された。現在5人のメンバーの他に、当時もう1人ギタリストがいた。

それが、リサで、いつだってリサは私達と一緒だった。赤坂にあった事務所でリサに初めて会った時の印象を、今でも覚えてる。メンバー初の顔合わせに、制服のまま1番に到着した私の次に来たのがリサだった。黒いモッズコートを着て、安全靴、中折れ帽子をかぶったリサを、一瞬男の子だと思った。切れ長の釣り上がった目、少し悪い感じがしたけど、左の唇をキュッと上げて笑った顔が、なんかいい雰囲気だった。

あっこちゃんは、やっぱり当時から落ちついたリーダー格だった。見た目はヤンキー姉ちゃん風だったけど、人見知りする私にも優しかったし、人見知りしない香にも優しかった。

登茂ちゃんは、クラスにいる学級委員によくなりそうなタイプ…と思った。転校した学校で、一緒のクラスになったけど、やっぱりそうだった。担任の先生にいつも「一緒に住んでるのに」と言われ…困った。

香は、子供だった。唄うとアイドルみたいだった。良く食べ、良く話し、良く寝る、学校の保健室に張ってあるような子供だった。

加奈ちゃんは…加奈ちゃんは、ただのロック姉ちゃんだった。

II

バンドを組む事だけを目的に、集められたまったく他人の6人が、合宿を始めた。ギクシャクしながら相手を探る。新学年のクラス替え、そんなのじゃない。クラスメートは嫌いなら話さなければいい、けど私達はバンドのメンバー同志だ。イヤでも、「セエノッ」で音をださなきゃならないし、それぞれ、それがやりたくて、この生活を始めた。だから、変ないい方だけど早く、早くバンドになりたかった。友達同志になるよりも、メンバー同志になりたかった。

6人で一緒に居る事にも、いつの間にか慣れる。気が付くと皆の顔が揃ってる。もう7年近くも毎日そうしてる。ただ、今はリサが居ないけど。

リサは左利きだった。ステージ向かって左がリサのポジション。加奈ちゃんとは正反対のギタリストだ。加奈ちゃんがSG.Jrなら、リサはストラト。加奈ちゃんがキース・リチャーズ好きで、リサはブライアン・ジョーズ。全て、言い合わせたみたいに違ってた。

どんどん、バンド自体はいい味を出してきたのに、活動は情けなかった。コアラのぬいぐるみと一緒にデパートの屋上を廻ったり、全員お揃いのミニスカートで募金活動をしたり、みんないい加減、疲れきってた。

部屋に集まってビールを飲んでいる。

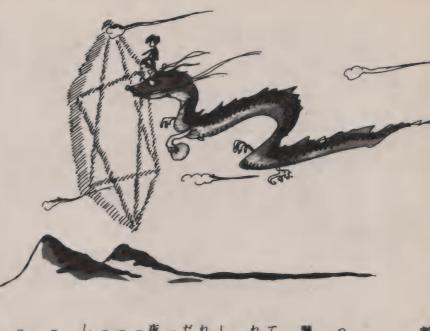
「いつまで、こんな事してるんだろう」

その日は、なぜかデパートの椀こそば大会に出場させられた。登茂ちゃんの一言に、私とあっこちゃんが頷く。2人は突然、事務所の意向で刈り上げカットになってる。解散の言葉がでてきそうな、ぐったりした夜、加奈ちゃんは、ジャニス・ジョップリンの真似して、ビーズでネックレスを作りながら何もいわない。香は、ドラエモンを抱えて、うとうとしてる。リサが話す。

「違う土地で生れて育った6人がね、何故かバンドに憧れて、オーディション受けて、合格して、集まって、これって偶然なんかじゃないんだよ。世の中に偶然なんてひとつもないの。人間の身体は確かに死ねば灰になってしまうけど、人間の魂の方は永遠に生き続けるんだよ。輪廻転生って知ってるでしょ? その魂が私達を引き合わせてくれたんだよ。何年か前、6人共、今と違う姿で出逢って、何をやろうとしてたんだろうね。その頃はきっとバンドなんて

ないもんね。何かみんなでひとつの夢を持って頑張ってた。でも、何かの理由で夢を果たせずに、死に別れてしまった。身体はなくなっても、魂は、心だけは6人で果たしたかった夢を忘れられずに、ずっと世の中に生まれ代わってくるのをまって、そしてその魂に導かれて、今6人が夢を叶えるために出逢えたんだよ」
低いハスキーな声でしゃべったリサの話は、怖くなっちゃったけど、妙に心臓にビッっときた。
「いきなりすごい本音言うねぇ」
「なんか難しいけど…」
「敗者復活戦みたいなもんだね」
「そうっそれっ。もしかしてこれで3回目、4回目かもしれない敗者復活戦だよ」
リサが言う。
「今回も負けて、また生まれ代わって同じ思いするなんて、イヤだもんね」
いつの間にか目をパッチリさせて香。
結局、その日も酔っぱらって騒いで寝てしまった。
その、リサから聞いた話を、その後あまりすることはなかったけれど、敗者復活戦に負けたくないっ、の気持ちはいつも心にあったし、何百年も頑張ってる魂のパワーの応援をいつも感じる様になった。

III

その日も、青山の紀伊国屋の角を曲がってすぐにあったドルフィン・スタジオでライブのリハーサルをしてた。私はクリスマスも目前に、付き合っている男の子に、もう1人彼女がいることが発覚してメチャクチャ落ち込んでいた。メンバーも、その事を知っていて、なんとなく腫れ物を扱う雰囲気。ライブの構成について、まるく座りながら相談する。
「1曲目は"YOU ARE MY STRSHIP"がいいんじゃない」
登茂ちゃんの提案。この曲の詩は、私がその彼と幸せ絶好調の時、書いた詩。
「私、今は"YOU ARE MY STARSHIP"やりたくないっ！」
言ってしまった瞬間、
「しまった」
と思った。
"私生活の我がままはバンドには持ち込まない"みたいな約束が無言のうちにあったからだ。きたっ！ブランド志向の彼氏の影響で、今では想像もつかないピンクハウスのワンピースに、オペラパンプスの香が立ち上がる。
「彼氏とのゴタゴタぐらいで、そんなコト言わないでよ」
幸せそうなパールピンクの爪に、分かっててもムッときた。手元にあった加奈ちゃんのディストーションを掴んで、壁に投げつけた。ついでに灰皿まで倒れた。思ったよりも大きな音。そして、思ったよりも険悪な雰囲気。登茂ちゃんはインコみたいなビックリ目。勢いで、
「私もうドラム辞めるから」
言ってしまった。…皆、黙ってる。
わざと冷静に
「それじゃあ」
スタジオを出た。
嫌気がって飛び出したものの、結局は千代田線に乗っていた。合宿所の近くの荒川の土手、ウォークマンで、RCの「EPLP」を聞きながら一緒に、「よこれた曲でこんにちは」を唄ってたらいつの間にか、リサが隣でタバコを吸ってた。
…よし謝ろう。
(こめんね、ライブ前なのに、雰囲気悪くしちゃって…私、バンド辞めるつもりなんて本当に全然ないんだ。ゴメンナサイ!!)
…言うつもりが、
「あのさあ、江の島ってね、お[illegible]過ぎるとエボシっていう青いクラゲが出てね、昔、圭太くんと泳ぎ行ったら、あいつ足のここんとこさされちゃってさぁ、大騒ぎになっちゃって、まったく、ざまぁみたいだよねぇ」
「それは、ざまあみいだわ」
とリサ。

「うん」
「きっと今年の夏も、他の女連れて行ってまたやられるよ」
「うん」
…リサが、帽子を軽く頭にのせてる。
「そのピンポンパン帽、加奈ちゃんがおととい買ったやつじゃん」
「うん、勝手にかぶってきちゃった」
「ふぅーん…みんなは…」
「渋谷で買い物して帰るって」
「ふぅーん…」
「9時には食事作っとくから帰っておいで」
時計を外して渡してくれた。
…「帰っといで」
そのまま1人でスタスタ行ってしまった。12月の川辺はすごく寒くて、もう座っていられないくらいだったけど、もう少し意地を張って、リサの腕時計が9時5分を指すのを待って合宿所に帰った。みんなは既に、火曜サスペンス

劇場で盛り上がっていた。

Ⅳ

結局ライブで「YOU ARE MY STARSHIP」は演った。香が曲の前にMCで言った。
「私は、今のところ真剣な恋愛をした事がないので、一生懸命誰かに恋してる女の子を見ると羨ましいです」
間奏のツインのギター・ソロの所は、ずっと後ろを向いて踊りながら、あっこちゃんと変な顔をして、笑かしてくれた。
予定だとクリスマスは、それぞれの彼と12人でディズニーランドへ行く計画だったのに、イブの日ついにケンカ別れした情けない私のためにキャンセルして、メンバー6人だけで盛り上がることにした。
「今年はなかなか順調だったよね。ルイードも昼の部から夜の部になったし」
「オリジナルも増えたし」
「年が明けたら、アルバムのレコーディングも始まるし」
「『STARSHIP』もアレンジ少し替えて、レコーディングしたらっていってたよ」
一升ビンワインを飲みながらあっこちゃん。
「きょんちゃん、詩、書き直していいんだよ」
やけに優しげな香。
「いいよ、あのままで」
私はスブロッカを飲んでる。
「あの幼稚加減、私好きだよ」
凍結酒の登茂ちゃん。
「誉めてんだか」
「誉めてんの」
「私だって好きだよ」
香が、飲んでたむぎ焼酎のロックを倒す。さっきの日本酒一気で、気分がハイになった登茂ちゃんが
「今晩、歌わせていただきます」
と言って、突然ボータサウンドを持ち出して〝愛の讃歌〟なんて歌い出した。バーボンストレートの加奈ちゃんは、真冬なのにキース・リチャーズの真似して切ったHARD ROCK CAFEのTシャツを着て、猫みたいな姿勢でヒーターの前、お給料の後で奮発したのか、箱入のマルボロを吸ってる。あっこちゃんは、今日作り上げた1000ピースのジグソーパズルのエンパイアステートビルを見ながら
「いつか、有名になったらN. Y.へ遊びに行こう」
って言ってる。N. Y.の景色は、ひとかけら欠けてる。かけらを掃除機で吸ったくせに、あっこちゃんに怒ってる張

本人の香は涼しい顔で、ほっけを食べてる。リサは、ズブロッカの草をビンの中から取り出してガムみたいに噛みながら、26インチの赤のラングラーのスリムの足を男の子みたいに組んで、みんなを見ながら楽しそうに笑ってる。私は、そんなリサを見てなんとなくうれしくなって、部屋で爆竹をぶっぱなして、下の階から苦情の電話をかけてこられた。その後、近所のマンションの屋上に忍び込んだ。目の前に新宿の高層ビル。ななめに左にサンシャイン60が見える。999ピースのN.Y.の夜景よりぜんぜんイカシテ見える。もう一度、ビールでかんぱいっ！

あっこちゃんが言う。

「私、サンタクロース信じたことなかったけど、神様は子供の頃からずっといると思ってるんだ」

「うんうん」

「特にこうやって高い所に来ると、いつもより神様の近くに居るような気がして、気合はいるよね」

「うんうん」

「本気で祈って、本気で頑張ってれば願い事って絶対叶うよね」

「うん」

「もう祈って4年だあ～(笑)」

「ねえ、春になって暖かくなったら山登りに行こうよ。知ってる所があるんだ」

マジな顔でリサが言う。

「山かあ」

「海の方が好きだけどナァ」

「でもこんな都心の14階の屋上で、祈るより、どかぁーんと山の頂上で祈った方が絶対効きめあるよ」

「かもね」

「うん」

「願い事かあ」

「いい曲書きたいよね」

「ドラムも上手になりたいし」

「それは練習次第でしょ(笑)」

「いい恋愛して、いい詩書いて」

「それで、みんなが喜んでくれたら最高だよね」

「どかあーんと、渋谷公会堂あたりでライブしたいねえ」

「うんうん、ジョーン・ジェットも来日した時、渋公で歌ったし」

「去年のクリスマス渋公でレベッカ見てたよね」

「バンド組んで、初めてやったライブって渋公だよね。クイーンズ・ロック・ライブとかいって…」

「やったねえ」

「渋公かぁ」

V

その年のクリスマスは、雨だった。みんな、酔っぱらってたから、平気で雨の中花火なんかして、リサはバックスキンのコートをダメにして、あっこちゃんは次の日近所のおばさんにイヤミを言われ、登茂ちゃんは年の暮れを風邪で寝込んだ。

4月がきて、初めてのアルバムレコーディングが終わった日、6人で山に登った。鞄の中に1泊するだけの軽い用意をして、電車を3回乗り換えて4時間かかって山の麓に着いた。

「あれっ、あの山だよ」

リサが指した山は連なった山の中で一番高い山。香がげっそりした顔をする。

「ピッと気合入れて、一気に登れば軽いもんだよ」

加奈ちゃんはこういう時、以外に張り切ったりする。リサは…私の好きな余裕の笑顔だ。

「いこっか」

一番イヤなくせに香が仕切る。先頭に登茂ちゃん、どんけつはリサ。リサの前をエッチラ歩きながら、話しかけた。

「どうしてこの山知ってたの」

「きょんちゃん、私ね、この山の神様なんだ」

「…!?それじゃあ、岡崎くんと別れて鎌倉の大仏さまと付き合えば(笑)」

「……」

前方であっこちゃんが滑ってころんだ。

途中まだ雪の残る道を、5時間歩き通して、やっと頂上に着いたのは6時だった。山の頂上には、大きな池と今夜泊まるの寺が建っていた。とにかくヘトヘトの6人は、お風呂に入って、ごはんを食べた。部屋の温度計は3℃なんて指してる。ラジオもテレビも何も無いから、いろんな話しをした。いつもの10倍話した。登茂ちゃんの家で飼ってるこざくらインコの話、ドミノピザの話、高橋くんの話、枝毛の話、ブルーベルベットの話、飛行機事故の話、シカゴのGパンの話、ダブルデッカーの話、いっぱい話した。お兄ちゃんの彼女の話をしてたあっこちゃんが、途中で

「どうしたの!? リサちゃん元気ないねぇ」

そういえば、会話に入ってこない。

「疲れたよ、ちょっと」

「そうだね、よし寝よう」

またまた仕切る香。

「香が一番年下なんだから、布団ひけっ」

「さすがリーダー!良い事言うね(笑)」

1人で布団をひき始めた香を、布団蒸しにして泣かせた

のは、急にはしゃいだ、リサだった。
6人で川の字、横ふたつになって寝ながら
「もうバンド組んで4年だもんね」
と登茂ちゃん。
「よくケンカするのに不思議だよね」
「うん」
「前、リサの言ってた敗者復活戦の話、成功したら、もう一度生まれ変わっても、今度は6人で何かやろうと思わないのカナ!?」
「どうだろうね」
いつもと少し違うリサが答えてみんな静かになった。

寝ついてすぐに夢を見た。山の上にある大きな池のほとりでリサがギターを弾いてる。
(リサ、こんなフレーズ弾けたんだぁ…ジミヘンみたい…)
夢の中で私、そう思ってる。
青く光ってた月が、ゆっくり六角形に変わる。
中に6つ尖りのある星が描かれてる。いつの間にか池の表面にサイケデリックな模様が現れて、うねうね動いてる。
その中から白い竜がスーッとでてきた。
リサが、竜の上に乗っかる。
竜の首はどんどん伸びて、ジャックと豆の木みたいに、六角形の月に向かって、リサを連れてく。
横を向いてるリサは、泣いてる。
泣いた所見たのは初めてだ。

いつだって強がって凛(りん)としたリサが泣いた。
「綺麗だなぁ」
切れ長の釣り上った目に、私いつも憧れてた。夢の中の私、バカみたいにボーッとしてた。
気が付くと、全てもとの通りになっていて、リサの黒いストラトだけが残ってた。私がネックの所を掴もうと手を伸ばすと、黒い猫になって…逃げた。

VI

朝、お寺の鐘で目が覚めた。なんとなく、夢の話は、口に出せずに出発の仕度をした。みんな、朝には弱いはずなのに、今日は気合がはいってる。日の出前に、和尚さんに、お礼を言ってお寺を出ると、リサがおもむろに金色の六角形を、5つ取り出して、ひとりひとりに、渡してくれた。
(あっこれ、夢の中の月と同じ。リサが向かって行った変な月)
「ナニ!?コレ」
と香。
「これ、ヒランヤとか言うんじゃない!?」
と加奈ちゃん。
「違うの、これ六本木の道端で売ってて、ホラッ、丁度六角形だし…6人で頑張ろう。みたいなお守りにいいかなーなんて思って買ったんだ」
と、リサ。
(うそだ…)
なんとなくそう感じた。
あっこちゃんは
「こういうのって、気持ち次第で、持ってるだけで安心するようになるんだよね」
なんて喜んでる。
「うん、そうだよ、いつもこれが5人を守ってるよ。全てを叫えるよ。いつも5人を見ているから……」
リサの声を消した。
「あっ太陽だっ!」
(…5人ってリサ…何言ってんの)
「リサ、何か変だよ、急にどうしたの」
私がリサに言うと、淋しそうな顔で
「私、帰らなきゃいけないから…もう5人で大丈夫だから…」
「えっリサちゃん、帰らなきゃって!?」
私、1人で慌ててる。
みんなにはリサの言ってる事が聞こえてないんだ。

「きょんちゃん、この為に山に登ったんだから、ホラッ静かにしなさい」
あっこちゃんに叱られる。リサを見る。手を合わせて、目を瞑ってる。よし私も話しはあとにして、とりあえず、祈った。
（プリンセスプリンセスがビックなバンドになれますように）
神様に届くように心を込めた。
目をあけて隣りのリサを見る。御来光を見てる。
後光を負って霧の中にうつるリサの影に光背が現れてる。すごい、これが来迎かぁ、オーラみたい。
あっ、私の影、みんなの影にもでてる。6つの影…綺麗…あれ…私の隣りの影が消えた！あーっ！
リサが、消えた！　リサが、消えた！
「ねえ！リサが消えた。今、目の前で急に居なくなっちゃったよ！」
焦ってキョロキョロしてる私を4人が笑った。
「何言ってんのきょんちゃん」
「祈ってるのかと思ったら寝てたな！ボケッ」
「だってリサが居ないじゃん」
「リサって誰!?　ちゃんと5人揃ってるじゃない」
登茂ちゃんに言われた。
ガアーン。
「5人って!?　なんで…リサを知らないの!?　これだってさっきリサが渡してくれた6人の御守り。ホラッ」
「これはさっき和尚さんがくれた御守りでしょ」
「あの和尚さん、リサちゃんて名前なんだぁー（笑）」
あっこちゃんが笑いをとる。
「そんなぁー」
「あんまり訳わからない事言ってると他にドラマーみつけちゃうよ（笑）さぁ、行こう」
香に仕切られて、私はそれからひと言もしゃべれず下山した。
その時は、まだ少し、何かの冗談かなぁ、とか思ってたんだ。そしたら合宿所に帰ってガアーンガアーン☆
リサのベッドが無い！
6人お揃いで6回払いのローンを組んで丸井で買った黒いベット5つしかない。いつもなら几帳面にお風呂場に並んでるDepの傷んだ髪用のシャンプーも、黄色の洗面器も、メイベリンのトマトヌードルも、高円寺の商店街で盗んだバヤリースの看板も、ロボットで買った黒いラバーソールも、19歳の誕生日に登茂ちゃんが書いたクレパスのリサの似顔絵も、山に行く前日に買ってたフォアローゼスも、〝時計じかけのオレンジ〟のビデオも、読みかけの〝太陽と月の結婚〟も、Boy のトレーナーも、全部全部リサの物が無くなってた。部屋に立てかけてある加奈ちゃんのSG・Jr、練習中、弦が切れてリサが分けてあげたはずの三弦、無い。リサのギターから始まってるはずの〝恋はバランス〟はドラムのフィルから始まってる。
そうだ！　リサの彼が働いてる「ローリングストーン」に電話してみる
「岡崎くんお願いします」
「ハイそうですけど」
「あの富田ですけど、リサが居なくなったの急に」
「…!?　リサってダレソレ!?」
電話…切れた。
次の日事務所へ行っても誰もリサを知らない。メンバーは心配そうな顔をして見るし、もうリサの事を口に出すのはやめた。まるで〝魔法使いサリー〟の最終回みたいだ…なんてぼんやり思いながら
「なんかここのBの所、ギター1本じゃ淋しいね。よし私がギターのフレーズ考えて弾こう」
なんて言いながらリサが弾いてたフレーズを一生懸命練習してる香を見てる。
結局、私以外誰もリサの事を覚えてなくって、リサが残していった物といえば、5つの六角形の御守りと、借りたままになってた腕時計だけ。それもリサが消えた時間で、止まったままになっていた。
きっと、リサは空から見てて知ってるんだろうな、と思いながらも、腕時計の針をくるくる廻しながらリサに報告する。
「香がね、あの彼氏と別れて501のジーパンなんてはくようになったんだよ」。
「加奈ちゃんがブギーのアンプ買うんだって」
「あっこちゃんと登茂ちゃんが、今日ケンカしたんだよ」
「きょんちゃんは好きな人ができたんだ！」
「次のアルバムのタイトルは〝HERE WE ARE〟に決まったよ」
「リサちゃんが空に帰って丁度1年目の4月17日に渋谷公会堂で演るんだよ！」
きっとリサ、今、いつもの顔で笑った。
楽屋で、ベビーローションで、お化粧を落としながら、香が言う。
「不思議なんだよ。声が聞こえるんだ。『加奈ちゃん次は右に廻るから香は左に行きな』とか、『次のサビの途中でベースの弦が切れるから間奏延ばしてあげて』とか」
「あーっ、私も今日ワンダーキャッスルの時に聞こえたよ×××」
私、おかしくってひとりで笑った。
（完）

②

COPY
KYOKO TOMITA
(PRINCESS PRINCESS)
ILLUSTLATION
TOMOKO KONNO
(PRINCESS PRINCESS)
THANKS TO
PRINCESS PRINCESS

ガールズ ミーツ ガール

文◎落合昇平

G I R L S　M E E T　G I R L

はじめに――。

この"ガールズ　ミーツ　グール"の物語は、パチ▼パチ誌上において、'87年7月号から、'88年1月号まで、合計7か月に渡って連載されたものです。そして、その物語は完結しないまま中断。今回、『パチ▼パチ読本』を作るにあたり、その完結編を加えて、物語として完成させたいと思い、落合氏に依頼。こうして1年ぶりに、5人のキュートなガールズたちの物語がよみがえることになりました。連載分は、'87年当時の彼女たちの活動とはズレがありますが、今回書きおろしの完結編まで通して読んでもらうと、中断時の1年間のシーンの流れも理解できるのではと思います。5人のガールズの、ロックとの出会い、ロックとの対峙。原稿用紙にして、約200枚の長編ストーリーです。ゆっくり、読んでみてください。　(編集部)

プロローグ――小さな子供たち

○その1　"幼稚園の講室で"

「アタシねえー　子供の頃って、やせっぽちで、学校じゃ大人しい方で、学校の帰りには必ず友達と寄り道してねぇー、お花を摘んでたの」とノッコ

学校が嫌いなノッコは、学校ではボーとしている。広げたノートは、ほんとにまめに書き込まれた落書きで埋まっている。落書きは、終了ベルが鳴るまでの退屈の証しだ。

そういう生徒にとって一番良い席は、教室の一番うしろ、しかも窓際がいい。もちろん、彼女はそこに座っている。

土曜日の4時間目、もう少しで学校が終る。今日はバレエ教室の日だ。

「そうよ、いいわよー、ノッコちゃん。その調子!」

キョーコ先生の声が聞こえてくる。学校でほめられることがない分、バレエ教室では、たくさんほめてもらえる。ほめてくれるところに子供の心は飛んで行く。踊る自分の形を、頭の中に思い描いてみる。土曜日の4時間目は、よくそうやって、やり過す。でも、はたから見た彼女は、どういう風に映っているのだろう。

「あのね、ボーッとしてただけなの!」とノッコが笑う。

終了ベルが鳴り、"大人しい子"はふっ飛んで家に帰る。そそくさと昼食を済ませると、バッグにバレエ着とシューズを入れて家を飛び出す。幼稚園の板張りの講室が土曜日だけバレエ教室にかわる。そんなだから、当然バレエ教室の看板があるはずもない。それでも、その週1回のスペースが彼女をもっとも伸びやかにさせる立派なバレエの部屋なのだ。

そういえば、その幼稚園の講室には楽しい思い出がある。それは卒園式の日のことで、そこで「白雪姫」のお芝居を演ったことだ。"イッヒヒッヒ"と笑う魔女のリンゴ売りでもなく、7人目の一番チビの小人でもなく、彼女は白雪姫だった。

「こーんな大きいリンゴを抱えてさ」とノッコは両手いっぱいに空を抱えアハハハと笑う。笑って「オレ、幼稚園の卒園式でシーラユキヒメ!!やったんだゼェーっていばったりして」

そのバレエ教室のある日、キョーコ先生が苦しそうに踊っている彼女を休ませるとこう言った。

「白鳥さんはねェー、あんなに優雅に泳いでるけど、水の下ではねェー」と先生は急に手をバタバタバタさせ「こーんなにガンバッてるのよォー。だからノッコちゃん!顔はね、苦しくても苦しい顔しちゃだめよ」

ためになる先生だった!

東京から青い電車で北へ50分、大きな鉄橋をガタンガタンと渡ったその先の街で彼女は、バレエに一生懸命でいた。

○その2　"女の子が4人集まると――"

「なにしてたのかなー、覚えてないなー」と田村"ジョータ"直美。ウームと考えこんで目をクルクルと動かすと「ずーっと眠ってたのかな」と笑いもせず言う。そして再びウーム。

「あー、本は好きだった。外では人一倍キャーキャー騒ぐんだけど、1人で本を読んでいる時間の方が長かった」

少年少女版世界名作全集が彼女の宝物だ。彼女は、その本を自分の気に入っている部屋の隅の板敷の上で読みふける。古い家のその古い板敷は黒光りしていて、冷んやりと冷たい。そこに寝ころんで物語を追いかける。

ときどきは、同い年の女の子たちが両手で人形を抱きしめて遊びにくる。ひとりは色白の女の子。1人は可愛い女の子。そしてもうひとりは、とっても大人がほめる良い子。

「女の子が4人集まると、1人は可愛くて、1人は良い子で、1人は色白で、そしてもう1人は私みたいなんだよ」とジョータが苦笑する。

遊びに来た彼女達は、それぞれの人形の世話をやいて遊んでいる。別にそれを嫌ったり馬鹿にしたりはしないけれど、ジョータは、その中には入らない。そのそばにいて、立ったり座ったりしながら、彼女達の遊びを眺めている。

ある日、父親が娘のためにお人形さんを買ってきた。足の裏に車輪があって、お人形をすべらすと歩いているように手を振る仕掛がついていた。ジョータは、そのお人形を3回動かし、それをひっくりかえして車輪をフーンと眺めると、それで飽きてしまった。

ある日は、図書館にも出かけた。学区外にあって、学区の外側の通りを横切るのは「フーン、ここが境か」と楽しかった。トコトコと歩いて、ジョータは図書館の児童図書の部屋へ入っていく。

「『赤毛のアン』が好きだったな」

東京から西へ青いストライプの新幹線で2時間10分。駅前に巨大なビルの立ち並ぶ名古屋の街中、彼女は学区外の道路に足を伸ばしていた。

○その3　"路地上の宇宙"

「遊ぶっていうと、やっぱり路地。ここから、そこぐらいまでの(と4mぐらいの幅を指さす)路地で。その道にろう石でロケットを描くの。長いロケットで、道の角を曲がって、その先をまた曲がって、表通りまで描いていくの」と高橋佐代子。

佐代子が手にろう石を持って、コンクリートで舗装された路面に白い線をひく。

「ここがロケットのエンジン!」と彼女が言う。他の子がウンとうなづく。

「それからぁー」と白い線をグイグイひいて歩く。そして角を曲がると、そのロケットの胴体に丸く部屋を描く。子供1人が遊べる広さの部屋だ。

「ここがミッちゃんの部屋ね」と彼女。ミッちんがうなづく。彼女はさらに線をつなぎ、他の友達の部屋が出来ていく。そうして車が行き交う表通りに、ロケットの鋭がった先端が突き出ている。そのロケットの各部屋をみんなが、それぞれ訪ね歩くというのが、彼女の遊びだ。

GIRLS MEET GIRL

きっと彼女のことだから宇宙遊泳の真似をして、手足をゆっくり動かしながら、その自分の姿のおかしさに笑いころげたに違いない。

学校に登校した彼女はどんなだったかというと、小学校3年のときからブラスバンドにいて、彼女はクラリネットを吹いていた。

「他にはグループを作ってて、演劇をやったり、マンガを描いたり、小説を書いたり、なんだか色々なことやってた」

「演劇？　テーマは友情／アハハハ、意地悪な子と、いじめられる子とがね、仲良しになるようなね」

「女の子って、そうやってグループ作って色々なことするの好きじゃない。アハ。でもね、私、お山の大将じゃなかったよ、本当に、全然。なにかしたりするの好きだけど統率力ないもの。私がやるとね、すぐ破滅する」

その学校のネットが張られた屋上で、彼女は友達とボールを使って遊んでいる。目の下の路地は、自分の家までつながっていて、そこには長いロケットを描いた宇宙が見おろせる。その街々の向うには、色あせたピンクと灰色の帯——高速道路とビル群が見える。

銀座からそれ程遠くない人口の少ない街で佐代子は過ごしている。

○その4　〝ヤッター／コレデヤメラレル〟

「アタシさあ、地味な子供だったよ。小学校は親が勝手に遠くの学校に決めて、試験受けさせられて、近所の友達から離れたでしょ、入学式のときには心細くて先生から『オクイ・カオリさん／』って呼ばれて、返事が出来なかった。家でね、お母さんが『オクイ・カオリさん』て言ってアタシが『ハイッ』って返事する練習やったんだけど……ダメ」

遠くの学校に通うと、1人遊びが増えてくる。学校の友達と遊ぶには電車に乗っていかなければいけないし、遠くへ行くには〝おじゃまする〟といった雰囲気がつきまとって、服も外出着に着がえなければならなくなる。

1人遊び——彼女はそれが得意になる。ピアノと「フランダースの犬」があれば、おおむね満ち足りることができた。

ピアノは、最初に母親から教わり、それから先生につくようになった。ピアノは自分が目立てる唯一のアピール・ポイントになった。教室で、学校中で、コーラスがあれば、その伴奏の役目は必ず、彼女に回ってきた。

「でも、ほら、性格がこうじゃない」

と香が笑う。

「ピアノ好きだったけど好きな曲は練習しても、嫌いな曲はさぼってた」

ショパンの「小犬のワルツ」は、とても彼女の性格に適していた。〝この早弾きの曲は、ていねいさを欠いても勢いでいける〟という風に合っていた。小学校の真ン中ころのことだ。

やがて6年になって、この彼女の性格はより形を露わにしはじめる。

「行ってきまーす」

玄関でとても伸びやかな声を出して香が出かけていく。ピアノに通う日だ。玄関を出た彼女はピアノの先生の家の方角に歩いていくが、ひょいと後を振りかえると、別の道にまがってしまう。

『教ワルッテ、トテモキュウクツダモン』と彼女。

それがばれると母親は彼女にこう言った。

「そんなだったらやめなさい」

彼女の反応はこうだった。

『ヤッター／コレデヤメラレル』

その一か月後、夕方、母親が買物に出かけるのを待って、彼女はピアノの前に立った。鍵盤に触れようと思った。が、黒い重たいフタを開けられなかった。怒った母親が鍵をかけてしまっていた。

彼女は、ピアノの上にかけられた白いレースの下をのぞいてみた。鍵は無かった。タンスの引き出しや台所の引き出しを探し額ブチの裏ものぞいてみた。鍵は鏡台の引き出しから出てきた。

重たいフタを開けると、触れなれた黒と白の鍵盤があらわれた。彼女は、その前に座り、椅子の位置を直すと、ショパンの曲を次々に弾き始めた。

「あのときのうれしさって忘れられない」と香がほおづえをつく。

都心から、青い電車で西へ10分。1人遊びの得意な彼女が、ピアノをとりもどし、それから「フランダースの犬」を100回読み返していた。

○その5　顔のスリ傷

「基本的には、ずっとこういう子。小学校のときも、中学校のときもこういう子。やんちゃな子。不良っていう言葉より、やんちゃという言葉が似合っている」とあゆみが身を乗り出す。

彼女は、女の子は弱いものだと思っている。無茶なことをしてはいけないんだと思っている。だから、男の子から山へ登ろうと提案されたとき、一緒に行くメンバーに男の子ばかりを誘った。彼女は、自分は女の子じゃないと思っている。

彼女の遊び友達といえば、男の子ばかりだ。ケンカするのも男の子とだし、ふざけあうのも、ドロンコになるのも男の子とだ。くり返して言うが、彼女は、自分が女の子だと思っていない。

それでも山に登ると、男の子には負けそうになった。斜面を登り、ハアハアと息をし、疲れきってくると、足が重くなり、よけたはずの木の根につま先をひっかけたり下りの斜面では、しっかりと踏んばれずにすべり、転んだりした。

その日の彼女の負傷は、ヒザ小僧にスリ傷1、そして顔面にもスリ傷1。

「うちの親もね、顔にケガして帰っても気にしなかった」

彼女も平気でいる。そして、女の子は弱いから、顔にケガするようなところに誘わなくて良かったと、妙な風にその日ホッとしている。

「女の子として目ざめたのは遅かった。中学のときにね、好きな男の子ができて、そのとき『アー、スカートヲハキタイナ』って思ったの」

羽田空港から西へ1時間40分、紀伊半島を越え、四国を左に見おろし、玄海灘を渡ったところ、福岡の街で、自分を女の子と思っていない女の子が顔にスリ傷を作って少し痛いなと思っていた。

G I R L S　M E E T　G I R L

◎再びプロローグ　〝Girls Meet Girl〟

1986年12月20日。その日、神宮球場ではジャパン・エイドが行われていた寒い日、渋谷のライブ・インのステージにゼルダが上がっていた。

〝'80年に結成されて以来、ガールズ・ロックのフロント・ラインに居続けるニュー・ウェイブの代表グループ〟

そのアンダー・グランドなイメージは、この6年間、よくゼルダを守りもしたが、同時に、彼女の存在をせばめてきたかもしれない。それでも、彼女達は、自分達の世界をよく開拓し、強力な磁力を発し続けてたきと思う。

ステージの中央、ピン・スポットの白い光を手のひらで半分避けながら、高橋佐代子が立っている。影になっている目が指のすきまでキラキラと光っている。ステージの中頃から、彼女の目は光を含んでいる。

毎晩　あたしに電話をちょうだい
毎日　あたしに手紙をちょうだい
夜中　朝中　一日中
寂しくてたまらないから

電話のベルが鳴り続ける
手紙はどっさり　束の山
夜中　朝中　一日中
もううんざり　たまらないけど

もしもあたしの頭が　いかれちゃったら
荷物を　一晩で　まとめあげ
あなたに面倒みてもらいたいの

(FOOLISH GO—ER)

笑いながら、どうかすると小さな女の子のあてどないわがまま顔に、彼女の表情が移っていき、エネルギーをはらむ。何故ゼルダが、女だけのロックバンドであるかが、そのときに分かる。彼女達を辿ってみると、女の子のロック・シーンのワン・サイドが透けて見えるかもしれないと、その一瞬に思った。

1987年1月2日、午後3時、僕は武道館のスタッフルームにいた。周囲の誰もがそうだったように僕も重たい表情でタバコを吸っていた。

「ノッコノ調子ガ悪イ。早メニミーティングヲシヨウ」

そう電話がかかってきて、武道館に急いだ。その日の僕の仕事は、1月3日、4日と続く〝It's Show Time〟のビデオを構成することだった。その時間に始められたリハーサルに、ノッコは登場しなかった。

ドラムの小田原が、スネアを叩きながら音色をチェックしている音が、スタッフ・ルームにも響いていた。

「どんな具合なの」とビデオ・スタッフが聞く。

「まだ詳報が入ってこなくて」とビデオ・プロデューサーが目をしばたたせる。

リハーサルも終わりという時間になってノッコがステージに登場した。とにかくやってみる、やってみてどうしてもこれ以上無理となったら、ノッコが土橋に手でバツ・マークを作って見せるということになった。

リハーサルで1曲半を歌ったノッコは、途中、タンバリンを宙に投げ、それを受けそこねていた。ステージの上をタンバリンはヨロヨロと転がった。高熱が彼女を苦しめていた。

観客に埋めつくされた武道館——その客席の電気が消え、「TIME」の音が流れ出すと、1万人が総立ちになり、そのステージにノッコが登場すると大歓声が湧き起こった。ステージから見上げるような2階席から起きる歓声は、滝のようにステージに降りてくる。彼女は、それを手を広げて受けとめる。そして「WHEN A WOMAN LOVES A MAN」、その夜の1曲目がスタートした。

うるさいママたちにだってきっと
燃えるようなロマンスあるはず
スマートボールで知り合ったパパ
それ以外は何人KISSしたの

when a woman loves a
man　恋なら
when a woman loves a
man　アダムと
　イブのくりかえし

U—Hey　不純じゃないわ

途中、ステージの上でストンと尻もちをつきながら、とにかくステージを終えた彼女が楽屋の廊下を歩いていた。その夜、彼女の身体はいつもより、やせっぽちで、小さくみえた。

「私ね、これから入院するの」

そう小さく言った。

そして、その翌日も、またその翌日も、彼女は病院から外出許可をもらっては武道館のステージに立った。その小さな身体の中の大きなエネルギーのありかを知りたいと思った。

1987年1月15日、渋谷のエッグ・マンのステージに、奥居香は立っていた。1986年の1年のステージを、そのバンド〝プリンセス・プリンセス〟は試行錯誤していた。オープニングの曲に迷い、そこから続く曲の配列に迷い、アレンジに迷い、衣装に迷い、自分達のどこが良いのかがうまく見つけられずにいた。毎月毎月ライブをしながらそれでも観客はいっこうに増えなかった。

いつもおなじ顔がまばらな客席に見えていた。メンバーの誰もが意地だけでやっていた。意地だけなら、4年間やり続けてきた自信がある。

その'86年の秋、スタッフがチェンジしてメンバーからも新曲があがりはじめてきた。「Motion—Emotion」「Sad Memories」今までうまく流れずにいた曲の配列が、それらの曲が入ってきたことで、つながりを持ち、まとまり始めてきた。

この夜、彼女達のステージは、それまで感じることがなかった熱を帯びた。ドラムとベースは、小気味よくコンビネーションが組めたし、中山のリード・ギターは、鋭角的に曲を突き上げた。歌い、ツイン・リードを弾きながら香は、客席から押し返してくるエネルギーを感じていた。それらの熱気をキーボードが大きく包んでもいた。「コレガ、バンドナンダ」香はそう思っていた。

疲れた夢の傷跡　君は見てるだけ
頭かけめぐるBeat　ちょっと体ことかんじて
今夜　フルボリュームのハートで駆けぬけてきた
　君を思いだして
空に返し忘れた夢が　胸の中輝くよ

(ヴァイブレーション)

バンドが熱を帯びはじめるとき——そこに立会える機会を持てるのは、本当に幸福だと思うときがある。かつて、ス

GIRLS MEET GIRL

トリート・スライダースのACBのステージでそれを感じて以来、そう思っている。
どういう風に幸福になるかというと、ステージでの彼女達の幸福な顔が乗り移ってくる感じだ。彼女達の行き先を見ていたいと、その時に思った。

1987年1月21日、日本青年館、その夜の中村あゆみもまた、幸福そうな顔をしていた。
〝One Heart! Two Heart!〟そう歌いながら高く上げた腕。その笑顔がくっきりと印象に残った。

もっとちがう生き方や
もっとちがうよろこびを
教えて欲しい時には悲しくさせてもいい
素直になれなくて迷った日もある
ため息を胸に眠った夜も
ONE HEART TWO HEART
ひとつになりたい

これまで、ごく限られたアーチストの原稿しか書いてこなかった僕にとって、それ以外のアーチストを見に行くということは決して多くなく、それも、すでに名の出た人となると極端に少ない。
それでも中村あゆみを見に行ったのは、よく僕の性格を知り抜いている編集者のMさんが電話の向うで、こう言ったからだ。

「イエスとしか答えて欲しく無いんですが……お願いをしていいですか?」
そして
「中村あゆみについて書いてもらいたいんです」と。

電話口で中村あゆみについてイメージしてみたけれど、遠くの方でボンヤリとしか浮かばないイメージを見ながら、僕はノーと言い、でもコンサートは見に行くと約束した。
1月21日、日本青年館のステージに立つ中村あゆみを見ていると、そのイメージは目の前にくっきりとしていて、どうやれば彼女を文字に置くことができるだろうかと考えていた。
「ねっ!」と編集者のMさんが同意を求め
「ウン」と僕は答えた。

1987年2月15日、草月ホール。そのステージに立ったショータは、荒々しくギターをかまえ、マイクにまとわりつくように歌い、時おり、声援の湧いている客席を無視していた。
彼女のステージングは、よく観客を無視している。自分が気持ちよく歌えれば、それで十分といった風だ。歌いにくい観客のときほど、観客を見るといった具合だ。

2月15日以前、渋谷のエッグ・マンで、さらにそれ以前、上京したばかりの彼女がスタジオにいるのを見かけたりしていた。
スタジオにいた彼女は、その高い天井の下でとても心もとなく小さく見えていた。エッグ・マンでの彼女は、まだうまくいかないステージングに、時おりいら立った表情を浮かべては、ドラムの宮本を振りかえって、首をかしげる仕種を見せていた。
そして、この草月ホールの日、彼女は自分の荒々しさを誰れ気兼することなく発揮していた。
ステージごとに濃くなっていく彼女のロックンロール・スピリットは、それまでのどのガールズ・ロックよりもストレートでシンプルで小気味良かった。

今夜のあんたの気分はどうだい
腰からくるような　気分はどうだい
本気になるのもたまにはいいだろう
今夜のあんたの気分はどうだい
何もかもすべてがスピードで片づいて
追いかけ続けなくちゃ　忘れちまいそうだ
(気分はどうだい?)

'86年12月30日から'87 2月15日までに出会った5人の女の子。ゼルダ/佐代子、レベッカ/ノッコ、プリンセス・プリンセス/カオリ、中村あゆみ、そして、パール/ショータ。それぞれの軌跡と、その存在の仕方は、多分ガールズ・ロック・シーンをよく伝えるように思う。このストーリーは、彼女達の昨日から今を追うために、そして、今が明日に映るように続きます。

○その6　ショータの最初のバンド

ショータは、部室にとびこんでくると、さっさとテニスウェアを制服に着がえはじめる。
ショータの後を追って3人の女の子も部室に戻ってきて着がえはじめた。
「今日は何やる?」
と1人の女の子がショータに聞く。
「I Love You OK やろ」
とショータが言う。
「それ難しい」
とドラムの女の子がいって皆がゲラゲラ笑う。
「ドラム　セットないんだから、難しいも難しくないも関係ないじゃん」
とショータが言う。
「適当にそこらへん叩いてればいいんとちゃう?」
とギターの女の子が言う。バンド中、唯一、音楽ができる子だ。
ベースの女の子は、お兄さんがベースを持っているという理由だけでベースのメンバーとして誘われた。

中学2年の文化祭で、先輩の男子達がキャロルのコピーで出演したのが、ショータをバンドに向かわせた。体育館の中央に卓球台を集めて四角いステージがつくられ、そのステージに立った先輩のバンドは、今考えればお笑いものだったにしろ、なかなかビシッ!だった。
「あたしもやろっ!」
とショータは決めた。そして、まず一番最初にやったことは、〝とにかく人を集めること〟だった。
テニス部の仲間に声をかけた。
「やろう」
とショータ。
「うん」
と誘われた子。

ギターが決まり、ドラムスも決まった。できるかできないかは、どうでも良かった。やってれば、やれるようになるとショータは考えていた。まだ決まっていないのはベースだったが、お兄さんがベースを持っているという女の子を強引を引っぱった。本人ができるできないは、あくまでも後回しのことだった。
ボーカルは、最初から自分がやることに決めていた。
「I Love You OK」をかっこ良く歌ってみせるために、バンドを作ろうと決めたのだから、ボーカルは自分に決まっていた。

4人のメンバーが決まると、テニス部の部活の後が練習時間になった。練習場所はドラムの女の子の家。
ある日、ムチャクチャなバンドのために「I Love

GIRLS MEET GIRL

「You OK」の譜面をショータは買ってきた。

「フーン」

とメンバーは譜面を感心したようにのぞきこんでいた。ショータはドラムのパートを指さした。

「ホラホラ、ここがあれ、あの足で踏むドラムの印だ」

「へーッ」

とドラムの女の子。

そうやって譜面をみんなでのぞいていると、まるでバンドになれたみたいで、楽しかった。

「バンドの名前を決めなくちゃ」

とメンバーが言った。

バンドの名前を決めると、いっそうバンドらしくなることは間違いなかったし、それもバンドの楽しみの最大のひとつだったがこのバンドには、とうとう名前は見つからなかった。そして79年3月、中学校卒業とともにショータの最初のバンドは消滅した。

○その7　大人達の中に入る

新宿駅西口から徒歩10分。自動車道路沿いのビル。地下にライブ・ハウス「新宿ロフト」がある。人気のあるバンドがステージに立つ日になると、ビルの向かい側の駐車場に人が並び、歩道にしゃがみこんでタバコを吸う奴等をよけながら、大人が行き交う風景があらわれる。

79年4月、中学3年になったばかりのサヨコが、その歩道に立って、自動車の屋根に登った男を見上げている。その男は手に自分の書いた詩篇を持ち、それも荒々しい口調で朗読していた。おおむねは意味不明の言葉の連なりだったけれど、彼と彼を囲む人間達の熱気は少人数ながら、サヨコをどきどきさせていた。

〝東京ロッカーズ〟――そういうムーブメントが、中央線沿線を中心とした若者を集めていた。

『ワタシも、自分の言葉でロックをやれるといいな』

と彼女は考えていた。

この少し早熟な女の子は、バンドがやりたくてウズウズしていた。それで、中学2年の時、ギター誌「プレーヤー」のメンバー募集のイエロー・ページに、募集の呼びかけを出した。

〝ハード・ロック〟のメンバーを募集します。「KISS」のコピーなどをやりましょう。

「KISS」が好きな中学2年の女の子は、バンド・メンバー募集で連絡をとりあった男の子達を新宿の近くにあるスタジオに集めて練習をしてみた。全くさえないバンドができあがった。それで3回練習をして、やめてしまった。

「KISS」が好きな女の子は、その次に「チープ・トリック」を好きになった。その一方で、日本のロックにも耳を傾けた。「ジャックス」「はっぴいえんど」が彼女の心にコツンと石を投げた。それから彼女はパティー・スミスを好きになり「ストラングラーズ」に出会った。

当時、ロンドンの音楽シーンを変えはじめたパンク・ムーブメントが中学2年の彼女の耳にも届いた。

そして、新宿の路上で自動車の上に乗って詩を朗読する男が目の前にいた。男が詩を読み終えるとパラパラと拍手が湧いた。

「ねえ」

とサヨコに声をかける年上の女の人がいた。

〝東京ロッカーズ〟のライブに集まる人間達は、誰もが奇抜な格好をしていたが、サヨコに声をかけてきた女の人の服装はその中でもひときわ目立っていた。

黒色の消防服に銀色のコートは、じゅうぶん彼女をまぶしがらせた。

「ねえ、ライブには良く来るの?」

と黒色の女の人が言った。

「えっ、ええ」

と彼女。

「中学生?」

「ええ」

「雑誌買わない? 私がいいと思ったバンドや音楽のことをみんなに紹介したいなと思って、〝東京ロッカーズ〟の周辺には、まだまだいいバンドがいるわよ」

その雑誌の表紙には「Change 2000」と書かれていた。サヨコは、その雑誌を買うことにした。

その雑誌の中に、バンド・ボーカル募集の広告が載っているのを彼女は目にとめた。自分の中で、それに応募してみようという勇気を貯めるのには、少し時間がかかった。夏になって、その広告に記された電話番号を回してみることにした。家からかけるのは気がとがめて、10円玉を持って電話ボックスへと走った。

「もう決まったのよ」

と電話の向こうにそっけない返事が待っていた。それでも必死に電話をしてきた中学3年生が可哀そうに思われたのか、興味をもったのか

「でも、一度お話ししましょうね」

と受話器の向こうの女性が言った。彼女の名前は小島さちほといった。

〝もう一度お話ししましょうね〟と言われてサヨコは、さっそく受話器の向こうの女の人に会いにいった。それは黒色の服の女の人だった。

サヨコは、自分の書いた詩やエッセイのノートを黒色の服の人――小島さちほに見せた。そして

「現代は、肉体的戦争がおさえられているのに比例して、精神的な戦争が急速に広がっていると思うんです」

としゃべりはじめた。自分でしゃべりはじめて、何を言おうとしているのか良くわからなくなりながら、沈黙がこわくてしゃべり続けてしまった。

「ヨク分カラナイ子ダワ」

と小島さちほは腕組みをした。

○その8　ゼルダの出発

ここで、少し長くなるけれど、サヨコと小島さちほ＝ゼルダの話をする。この7年以上に渡って活動を続けているバンドは、おそらく、女の子のロック史の中でも、重要なポジションを占めているし、女の子に限らず、ロック・シーンの中でも、その独特な世界を築きあげている点でも、やはり重要になるだろう。

〝東京ロッカーズ〟の一群に位置していたバンドを見に来ていた女の子4人が、ライブの終わった後、片づけ始めたステージに上がって楽器に触れてみた。怒られないのをいいことに、ドラムズ、ベース、ギター、ボーカルとそれぞれのポジションに真似っこで立ったところ、それがとても絵になったので、さっそくバンドを始めることにした。このバンドの名はボーイズ・ボーイズ。シングル一枚を出したバンドだった。このバンドがレコードを出す前に脱退したベースが小島さちほだった。

そして少しのブランクの後、ゼルダの結成に向けて動き出す。サヨコが79年4月に見たバンド・メンバー募集がこれだった。

○その9　チャンス!

'80年3月30日の新宿ロフトのライブを前にして、小島さちほは悩んでいた。突然、ボーカルが抜けてしまったから

GIRLS MEET GIRL

だ。代わりのボーカルを探さなくてはいけなかった。

もし正式のボーカルが見つからなければセッションでボーカルに入れてみてもいいかもしれないとも思った。

「あの中学生！セッションだったらやってみてもいいかもしれない」

そう考えた。

サヨコの家の電話が鳴った。階下から母親の呼ぶ声がして、彼女が電話に出ると小島さちほがあっさりとした声で言った。

「ボーカルが抜けたけど、今度の新宿ロフトのステージで歌ってみる？」

サヨコは、うれしさにとびあがって

「ヤル！」

と答えていた。

いつか、あの新宿ロフトのステージで歌うぞと彼女は決めていた。ライブを見にいくたびに、こっち側ではなく、あっち側のマイクの前に立つんだと思っていた。だから、このめぐってきたチャンスは、絶対に生かさなければいけなかった。「ヤルッ」と即答した自分の大胆さに、それまで人前で一度も歌ったことがなく、自信もないのにヤルと決めた自分に、彼女は驚いていた。

それでも、初めての練習日、東中野にある練習スタジオへ行くときは心細かった。ゼルダのメンバーは、昼間はそれぞれ仕事をしていたから、練習は、いつも夜だった。

東中野の駅は、新宿近くの駅の中では、最も暗くて静まりかえっている。その暗いホームの階段を上がり降りして改札に近づくと、そこのベンチにゼルダのメンバーでギターの鈴木ヨウコと野沢クニコが座っていた。サヨコは半分ホッとし、半分新たに緊張しながら「コンニチワ」とあいさつした。消え入りそうな小さな声に自分で情けない気がした。

スタジオで練習した曲は、パティー・スミスの「グローリア」他、ゼルダのオリジナル。サヨコは、前のボーカルが残していった詩とメロディーを自分なりにアレンジしはじめていた。

はたから見ると怒っているようにしか見えない顔が、実は緊張からくるものだとメンバーは後で知ることになるが、そのときは風変りな子が来てしまったと思った。

サヨコはサヨコで、時おりきつい目をしたり、ボンボンと言葉を吐く大人の小島さちほを恐れてもいた。

「本当に分からない子だったの」

と、小島さちほは今でも言う。

'80年3月30日、新宿ロフト

'80年4月6日、六本木アトリエ・フォンテーヌ

2度のステージに立った。セッション・ボーカリストとしての役目は、そこで終った。

「もし、私がボーカルとして合格なら、このままゼルダのメンバーにしてもらえませんか」

ステージが終るとサヨコはそう言った。小島さちほが首を振った。他のメンバーがじっとサヨコを見つめた。

「あなたは、年が離れ過ぎてるわ。たとえば、同じ20代なら5歳離れていても、それは変わらない。でも10代と20代の間の5歳は違い過ぎる」

そう言われてサヨコは、あらためて社会人のメンバーを見つめた。そして言った。

「でも、それは音楽には関係のないことです」

沈黙が続いた。小島さちほが、他のメンバーに目を向けると、

「どう？」

と聞いた。

「私はいいと思うけど」

鈴木ヨーコが言った。

「私も、サヨコがボーカルをとるのはいいと思う」

と野沢クニコが言った。

小島さちほが、「うーん」と唸った。そして言った。

「もう少し考えてみるわ」

サヨコが正式メンバーとして迎え入れられたのは、それからまもなくだった。小島さちほはヤレヤレと思った。「ライブ・スケジュールを組立てるのに、社会人だって結構大変なのに、さらに、高校1年生まで入ってくるとは」と。

一本の電話が、中学3年生の女の子を突然ロック・シーンに引っぱり出してしまった。そして"ゼルダ"というバ[illegible]ンドが完成した。'80年3月のことだ。そして高校に入学、学校に行くかたわら、新宿や渋谷のライブ・ハウスに出演。さらに[illegible]大学、横浜国立大学、神奈川大学、慶応大学、法政大学などの学園祭のステージに立ち、その年、22本のステージをこなした。

○その10　それぞれの'79年4月

'79年、サヨコはいちはやく、自分のロックの形を見つけ出し、ステージへのキッカケをつかんだ。

ショータは、テニスとキャロルのコピーごっこを両立。楽しい遊びは、遊びのまま消滅し中学を卒業。高校に入学して再びバンドを組もうとしている。ショータが今のショータになるためには、まだもう少しの時間が必要だ。

4月、ノッコもまた高校に入学。依然として彼女の心をとらえているのはバレエだ。兄貴の部屋から聞こえてくる、"デープ・パープル"は、そのときのノッコにはまだ"うるさいなーっ"だったのだ。

プリンセス・プリンセスのカオリは、中学校に入学。音楽室にそろえられているシンセサイザーやドラム・セットを発見することになる。

そして中村あゆみも中学へ。彼女はまだ男の子を意識することもなくやんちゃのままでいる。

○その11　ねえ、女の子だけのバンドやろう！

東京の私立高校も受けたけれど、そこは試験に落ちて、地元の県立高校に入学した。

「まあ、金もかかんないことだし、これも親孝行ってもんか」

とノッコはケロリとしている。

東京の土地の高騰と、都心へ向かう交通機関の発展で、千葉、埼玉、神奈川といった東京都の隣接県には、東京からの移住者が増え、人工が増加していた。その結果、生まれるのが新設校。

ノッコの通うことになった高校も、そんな新設校の一つだった。荒川の土手沿いに、その新しい校舎はあった。"土手と学校"と言えば、これは青春ドラマの舞台そのもの。ラグビー部が汗くちゃで、かけ声をかけながらランニングしている。呼び出した奴と呼び出された奴が帽子を投げ捨ててケンカをする。誰れかが川に向かって大声を出している。その向こうに夕陽がある。

ノッコといえば、その青春の舞台には、いっさい関係しない。どうも青春というものに興味が湧かずにいる。

そんなだから、彼女は自分を"帰宅部"と呼んで部活に参加もしない。友達はみんなテニス部でネット越しに白球を叩いているけれど、彼女はそれを眺めているだけだ。

といっても、汗なんか嫌いだとひねくれているわけでもない。単純に球技は苦手だった。クラス対抗のバレーボール大会があれば、ここ一番というところで自分にサーブがまわってくる。

「ここでちゃんと入らないとゲームセットだわ。どーか、うまくいきますように！」

そうやって、バシッとはたいたボールはユルユルと飛んで、ライン・オーバーになる。

「モーッ！デンチャン!!」

と仲間は腰に手をあててノッコをにらむ。

〝デンちゃん〟という仇名は、ノッコの家がデンキやさんだからだ。

「ワリイ、ワリイ」

とノッコは退場する。

球技が苦手だ。だから、仲良しがいてもテニス部には入らない。仲良しとは、学校のバス停前にある小さな店で買い食いを楽しんでいればよかった。

それよりもなによりも、彼女には、まだバレエがあった。

〝買い食い〟といえば、そのバス停前の小さな店〝ゴセキヤ〟では、カップ・ヌードルが飛ぶように売れていた。誰れもがおなかを空かしてその店に駈けこんできては、カップ・ヌードルをすすった。

ノッコに、いつでも自由に買い食いできるお金はなかった。

「すいません！1000円ください」

と言えば、母親は、

「うちにはお金がありません」

と気持ち良く言い放ってくれる。

「そこをなんとか」と頼めば、「自分でバイトしなさい」とアドバイスがかえってくる。

そこで彼女は生まれて初めてバイトをすることにした。バイト先は、近所のゴルフ場のレストラン。

河川敷のゴルフ場は、もとより名門ゴルフ場であるはずもなく、客といえば、まあ〝オッサン〟だった。ダスターでテーブルをふき、水の入ったグラスを置いて「イラッシャイマセ」と言う。メニューをくまなく読むあいだを横に立ち、あげく、カレー・ライスとビールの注文で、彼女はていねいに復唱して頭を下げる。

『ワタシハ、ナンテ、ケナゲナ女ノ子カシラ』と思った。

思ったらばかばかしくなって、そのバイトをやめた。バス停前の〝ゴセキヤ〟で買い食いするぐらいのバイト代が手元に残った。ちなみに、このゴセキヤは、それまでほこりをかぶって眠っていたような店だったが、となりに新設校が建ったおかげで、無限大の胃袋を相手に商売をすることになり、3年後には立派に建て替えるまでになった。看板代ぐらいはノッコも貢献したかもしれない。

自称〝帰宅部〟のノッコが家へ帰ってくると、兄貴がバンドの練習に行くという。

「へえー、見に行ってもいい？」と聞くと、

「来いよ」と言う。

駅前の楽器屋の貸しスタジオで、兄貴達のバンドが集まっていた。セットされたドラムは威厳があった。ノッコはハイハットを爪先で弾いてみた。チンと音がして爪先に金属の硬い感触が残った。

アンプがONにされ、ベースを中心にチューニングが済むと、演奏が始まった。それは、よく兄貴の部屋から聞こえてくるうるさいロック・ナンバーだったけれど、目の前で皆が楽しそうに演奏しているのを見ると、とても素敵な音楽に思えた。

『イイナ、イイナ。アタシモヤリタイナ』

そうノッコは思った。

高校2年になると〝帰宅部〟に入部する仲間が増えた。その仲間は、いずれもスカートの丈が少し長かったり、髪にパーマがかかっていたりした。そんなファッションの仲間だったけれど彼女は、それをとくに気にもしなかった。普通の丈のスカートを自分ものばしてみようとは考えなかった。クセッ毛の髪だけは、パーマみたいだったけれど。

その〝帰宅部〟仲間はゴセキヤに集まっていた。アイスクリームは太るという実感を持った頃、近くにケンタッキー・フライド・チキンがオープンした。

「チキンなら太らないわ」と誰れかがしたり顔で言って、毎日毎日、そこでフライド・チキンを食べた。皆がしっかりと太ってしまっていた。

彼女達のタイプは、学校では少数だった。どこにでもいる真面目なタイプは置いといて、他にいるタイプは異性積極派。スカートを短めにはき、ブラウスを大人びたデザインのものにすると、そのままOLにも短大生にも見えた。そして、そんな彼女達を迎えに学校の近くには男の子のシティーやカローラやシャレードが並んでいた。

「ねえ、友達とおしゃべりする以外に学校になにがあるの？」

とノッコが聞けば

「えーっ、勉強があるじゃない！」

と真面目な子から答えが返ってくる。

「あっ、そーか！」

とノッコはすっとぼける。

男友達を作るわけでもなく、学校生活を熱心に送るわけでもない。〝帰宅部員〟達は、夜に集まっては酒を飲んでみたり、タバコを吸ってみたり、好奇心だらけなのか、さめているのかよく分からない暮し方をしていた。それでも結束の固さだけは、校内で一等賞だった。

パーマの検査があれば、ノッコはクセッ毛の自分の髪を抜いて仲間に渡した。薬品検査用に、パーマの彼女達がノッコの髪を、自分の毛を抜いたふりをして先生に渡すというわけだ。

スカート丈の検査があれば、彼女達は予備の普通丈のスカートにはきかえロング・スカートをノッコにあずけにくる。ノッコには検査の手が及ばないからだ。

しかし、なんといっても結束の固さが最もあらわれるのが試験のときだった。

シンと静まった教室、誰もがせっせと答案用紙に向かって鉛筆を走らせている。その中でノッコは〝ウーム〟と考えているフリをしている。目の前には仲間の背中がある。仲間の中では成績がいいやつだ。その彼女がさらさらと答えを書きこんでいる。彼女のせわしない手の動きがピタリと止まると彼女は自分の書きこんだ答案用紙を後手にノッコの机の上に置く。その手にノッコは自分の答案用紙を渡す。彼女の手が再びサラサラと答案を埋めていく。ノッコは試験はこれでオーケー。仲間が渡してくれた答案用紙に自分の名前を記入すればいいのだ。

『友情ダヨナーッ！』とノッコは思う。

「うちには、お金がありません！」

とさわやかに言ってのける母親のおかげで、彼女は相変わらずアルバイトをしていた。

学校が終ると、市内にある新聞発行所の発送の仕事に駈けこんだ。新聞とはいっても、株式の動向、中小企業のゴシップに近い情報を組んだ、いわゆる総会屋にとても近い筋の新聞だった。その新聞を折り、帯をかけて、そこに宛名を刷りこむのが彼女の仕事だった。

時給600円。4時から6時までの2時間を働き、1200円になった。手早く仕事の終ったときは、6時になるのを待つために、後片付けをゆっくりしていねいに行った。

GIRLS MEET GIRL

5時59分に終了したとしても、時間は1時間分しか支払われないのだから、これは当然のことだった。

ノッコがバレエをやめた。理由は、たぶん、ふたつある。ひとつめはケンタッキー・フライド・チキンがやめられず、太ったこと！

もうひとつは、バレエに夢を見るには、世の中がリアルに見えはじめたこと。

バレエを一生懸命やることが生活の中心で、それを中心に美しい遠近法で描かれていた生活像が、ここへきてチグハグになっていた。バレエが夢の色を失って、学校では、うまくなじめずにいた。バイトは、ただの生活の要領にしか過ぎず、学校を卒業して、こんなOL暮しをしなきゃいけないかと思うとゲップが出そうだった。

授業中の時間潰しに広げたノートいっぱいにイラストを描けば、イラストレーターになるのもいいなと思った。リアリティーを持たない夢ならたやすく見れた。そしてたやすく消えた。

休日になると兄貴のバンドの練習について行った。

「アタシも入れて！」

と彼女は言った。キーボードで参加することになった。彼女は借金をして、〝ボーナー〟のピアネットを買った。それで、〝TOTO〟の「Hold The Line」を練習した。何度か練習に参加したが、秋の修学旅行から帰ってくるとバンドをクビになっていた。

「お兄ちゃん………ずるいヨ！」

そう言った途端、涙がこぼれ始めて、泣き終ると、〝4万円もしたピアネットだぞ〟と言って見たかった！

考えてみれば、バンドに参加したと言っても、ミソっかすだった。ノッコとは呼ばれず〝××の妹〟と呼ばれていた。

それでステージにあがろうものならメンバー紹介でそのまま「キーボード、××の妹！」と言われそうだった。ミソっかすの[illegible]なところといえば、貸しスタジオ代の頭割りから逃げられるぐらいだった。自分のバンドがやりたいと思うようになってきた。

高校3年になって、自分の生活を見ていると、うだつのあがらないOLにしかなりようがないのかなと思い始めた。「アー・イヤダイヤダ、コンナジャ、ヤダナ」真底ブルーな気分だった。そして、様々なものとうまく馴じめずにいるのは、たぶん、自分にやることがないからなんだろうと考えた。自分にやることがあれば、色々な事が変わる気がした。

バンドをやりたいと思った、女の子だけのバンドをやろう！

高校3年、その教室の中には、なにかやりたくてうずうずしている人間は必ずいる。何かになりたくて、何になれるのかが分からなくて、とくにかく何かであればやっちゃおうという人間がいる。

ノッコのとなりの席に座っているPもそうだった。

「ねえ、バンドやろう。女の子だけのバンド！」

そうPに言うと、それはなんだか魔法の言葉にみたいだった。Pの目もノッコの目も、それで熱気をはらんだ。Pがキーボードをやることになった。一級下の女の子がドラムスで参加することになった。友達伝いに、他の学校から、ギターとベースが参加してきた。

コピーできる曲なら、何んでもコピーした。技量的にできる曲が少ないのだから、いちいちこだわってなんかいられなかった。

81年10月、そのバンドが初ステージを踏んだ。バンド名は「DOLL」ステージ衣装は全員がバニー・ガールという大胆さだった。ステージの前の晩、彼女は、自分が長年着てきたバレエのレオタードを引っぱり出した。

それを広げて見た。かつて、自分の夢の遠近法を描いていた衣装だ。今は、それが、バンドという夢中の遠近法の衣装になる。

ノッコは、レオタードのお尻の部分に丸いウサギの尻尾をくっつけた。そして衣装は完成した。

埼玉県は浦和を中心に70年代、80年代を通してロック・バンドの良く出てきた街だ。

それは〝浦和ロックン・ロール・センター〟が中心となって、イベントを続けてきたことによる。この〝浦和ロックン・ロール・センター〟のムーブメントの中から、いくつものバンドが出てきたし、ミュージシャンも出てきた。

そのムーブメントも終束し、この81年10月のコンサートが、次の世代による初めてのコンサートになった。

が観客動員といえば、ステージ前のベンチに座っているのは、出演バンドの友人関係だけという有様。そんなだったから、「DOLL」が出演したときには皆がこう言った。

「あれは〝××の妹〟のバンドだ！」

とにかく、これでノッコの世界は大きく変化しはじめた。何が変りはじめたかといえば、それまで、それなりの努力で防いできた赤点がいっぺんに4個になったこと。頭の中がバンド一色に塗りつぶされているのだから、赤点なんて恐くなかった。

日曜日ごとに練習を重ね、渋谷や池袋のライブ・ハウスに出演した。高校生の女の子が、街中にやってきて、バニーガールに衣装を変えてステージにあがる。学校生活と、そのステージとのギャップは思いっきり大きくて、それはとても楽しいことだった。

世界も、化粧品も、いっぺんに10倍にふくらんでいた。

それから――「DOLL」の初ステージの日、客席から「××の妹のバンドだ」と言った何人かの中には、レベッカのオリジナル・メンバーがいた。この日、彼女には、もうひとつの世界が広がりはじめていたけれど、まだ、それが実感になるのは、少し後のことになる。

○その12 それぞれの夏の1日。

'87年、7月、ノッコは新曲の作詩をしている。詩人はつらい。それからポツンと穴の開いた虫歯のために歯科医院に通っている、そして炎天下で行われることになるだろう、いくつもの野外コンサートのために体力を作っている。プールに通い、それからアリナミンの粒々を口に放りこむ。

7月のあゆみは、ロックンロールが優等生の音楽になってきたと、早口でしゃべっては呟いていた。FM番組の収録と、雑誌のインタビューの間に30分程会えたときのことだ。

そろそろ、別のどっかへ行かなくちゃと言う。それが〝どこなのか〟ゆっくり聞く時間もそのときにはなかったけれど、きっと8月31日の東京・読売ランド・イーストでのコンサートは彼女の中の結節点になるだろう。

7月のショータは、全国のライブハウスツアーのピリオドを東京・九段会館で終えた。そして、ニュー・アルバムのレコーディングにと突入した。

GIRLS MEET GIRL

レコーディングを始める前のスタジオのソファーに座り、ピンクの大学ノートと水色の大学ノートを広げ、そこに書かれた詩の一節一節に自分の世界を再度、透かしている。

横にいる宮本が

「今日はどんな風にレコーディングを進めるの」

と聞けば

「何んも考えとらん」

と笑っている。

「レコーディングは楽しいよ」

と真顔で言って、スタジオの中に入っていったショータは、次のパール像を描くことに懸命でいる。

7月の奥居香は、ANB系のテレビ番組「ビデオ・ジャム」の収録に、NHK・ハイビジョン・テレビのための収録にと、今は、テレビ中心の動きを見せている。

ポップス・オール・スターズというプロジェクトの一員としてレコーディングした新曲「世界でいちばん熱い夏」のビデオの製作も、浜松の砂丘で熱風に吹かれながら撮り終えた。

昨年の夏、たった30人程の観客で行っていたライブも、今は800人の動員にこぎつけた。

「ねえねえ！」

と道端で会った彼女が目をクルクルさせて言う。

「9月3日、芝浦インクスティックでアンコール・ライブをやることになったんだ」

うれしそうな顔で彼女はいる。

7月のサヨコは、涼し気な顔をして神宮外苑のカフェ・テラスでアイス・ティーを飲んでいた。飲みながら、パール兄弟の佐伯クンと音楽誌の対談を行っていた。

サイズ、くじら、シオン、パール兄弟らとニュー・クリエーターズ・ムーブメントを担う彼女は、そのようにして自らの役割を果たしている。

○その13　とんでもない新人女子生徒

「ひとつのとこにじっとしているのがダメで」

とあゆみが言う。

それは中学時代の教室での過ごし方を聞いたときの彼女の答えだ。

「それじゃ今と変わらない」と言うと、

「そうなのよ」と彼女が笑う。

どう変わらないかというと、彼女は今、自分のロックのポジションから、別のロックのポジションに行きたがっていて〝もうあきたんだ〟とこの頃盛んに口にしているからだ。

「みんなが不良のふりした良い子のためのロックになったからね、もうアタシは、そこにいたくないのよ。それが流行でそうなるなら、歌謡曲と変わらないじゃない。別に歌謡曲もいいんだけど、わたしは、うまくいったり、いかなかったり、どんどん変わっていけるロックを選んだんだからね、もう、今のロックには失礼しなくちゃ」

そう彼女は言う。どう変わるのかは、彼女にも言葉にできる程にはっきりしているわけではない。そんなだから、彼女が歌い出してから、もう一度変化を感じてみようと思っている。今のロックに、どう〝お先に失礼〟をするのかをそこに見てみようと思う。

ところで彼女は笑いながらさらに、こう言葉をつけ足した。

「そう思ってるんだけど、でもね、本当はあきっぽいのよ。同じことできる性格してないんだよね。人の話も、聞いているうちにあきちゃうし」

じっとしているのがダメで、人の話を聞くことがダメ。聞いている途中であきてしまうという。中学生の頃からそうだという。自分を意識するようになったときには、もうそういう性格だったのだろう。まあ、人の性格というのは、頼もしい程に変わらないものだ！

それでも、全部が全部、人の話を聞かないわけではない。

中学校に入学してすぐのことだ。彼女は失恋した友達の悩みをジッと聞いている。昼休みの学校の廊下だ。あゆみは廊下の壁にもたれ、腕組みをしてフンフンとうなづいている。

聞いていると失恋といったセンチメンタルな問題ではなかった。悪知恵の働く先輩男子が、新入生の女子を口グルマにのせて、SEXをするという目的を果たすと、あっさりサヨナラをしたというのが話しの要約だった。つまりセンチメンタルな問題ではなく許せない問題だった。

「分かった」

とあゆみは言い、廊下をスタスタと歩いて去った。失恋したと思っている女の子は、あゆみが何を分かったと言いスタスタと消えてしまったのか、よく分からずに見送った。

「ちょっとMさんいる?」

3年生の教室に入っていくと彼女はダベっている男子をつかまえて聞いた。ダベっている男子が

「オイM！女が来てんぞ」

と大声を出すと

「なんだよ」

とMがあらわれた。

「あんた、どういうつもりなのよ」

「なにが?」

「Y子よ」

「おまえに関係ねえだろ」

「ちょっとやり方が汚いんじゃない」

「だから、なんなんだよ」

男子生徒がしゃべれたのはそこまでだった。男子生徒は、顔面に星が飛び散ってしまったからだ。彼女の握りこぶしが男子の顔の真ン中でガツンと音をたてていた。

その後、立ち上がった男子生徒と彼女はさらにとっくみあいを演じ、処分は停学一週間となった。

どっちが?

むろん、話し合いという民主的なルールを破った彼女がである。入学式から、わずか一週間目で一週間の休みを貰ったわけだ。

○その14　暗いエスケープ

こうして、彼女の中学校の生活はスタートした。彼女にとって学校とは〝友達〟と〝体育〟と〝図工〟のためにあった。他の事に関しては、その過ごし方が良く分からなかった。

たとえば数学の授業中とか、歴史の授業中とか、とにかく、教室のシンとした空気の中に座っていると、もう時間が停まっているとしか思えなかった。

それで、彼女なりに、そうした時間の過ごし方を見つけ出した。〝ESCAPE〟という方法だ。

学校の塀を乗り越えて、公園に出かけてしまうというのが、彼女のエスケープだった。

その公園は大通りに沿って歩道を兼ねて作られた公園で、絶えず人や自転車がベンチで寝っころがっている彼女に視線を投げては通り過ぎていった。

彼女はベンチに仰向けになり、空を見上げたり目をつぶったりしていた。

彼女の寝っころがっているベンチの近くで主婦が集まって井戸端会議をしていた。

自分の亭主は、家に帰ってくるなりすぐ眠ってしまうと

G I R L S　M E E T　G I R L

GIRLS MEET GIRL

か、亭主づらするならもっと稼いでからにしろとか、急に帰りが遅くなったのは他に女がいるのかもしれないというおせっかいなアドバイスとか、とにかく、そんなことやらで、目をつぶって話を聞いていた彼女は、胸クソが悪くなっていた。

寝っころがったからといって気分が晴れるわけではなかった。いやなことが多いから、彼女は、そうやって止まってしまっているのだ。止まっていて気が晴れることは何もない。

「アー、ナンカ夢中ニナレルコトハナイカナ」そう考えるときがないでもなかったが彼女はベンチから起き上がるとこう言った。

「あーっ、腹減った。パン買いに行こっ」

そうやって過ごした後に学校に戻れば、めんと向かって怒られることはないものの校内で起きた犯人不明の事件は、彼女のせいにされることがままあった。

そんな時、教師と彼女の会話はこんなだった！

「おまえ、やっただろ」

「今日はあたしじゃないわよ」

いずれにしろ帰りのホーム・ルームで、彼女は、よく居残りの命令を下された。それでもベンチで寝っころがるのはやめられなかった。

「今、考えると、勉強した方が良かったのかな」

と彼女は言う。今、一生懸命だからそう考える。そのときはやっぱり、そうは思わない。そんなもんだ。

彼女は、大阪の街が嫌いだという。それは、たとえば大阪弁であったり、緑の少なさであったり、夏の猛暑であったりという具体的なものではないようだ。離婚した両親の母親の方での暮しが福岡、父親の方での暮らしが大阪だった。屈折だった。群れて遊ぶことを選ばず、一人でベンチに寝っころがっている、どちらかといえば暗い福岡の屈折だった。

ベンチで寝っころがっている自分。見上げた空の色。大阪というよりも、自分の心象風景が好きになれずにいた。彼女を夢中にさせるものが、彼女を育てるものがそこに見つかっていれば、彼女は今頃、大阪は好きな街だと言っているかもしれない。

「自分を満たしてくれるものなら何んでもいいと思ってた。もちろん〝歌がそれだ〟なんて思ってもみなかった。何んでも良かったのよ」

彼女は中学の後半に、再び母親のいる福岡に戻った。

○その15　ヤッテミナキャ、分カラナイ

福岡の中学に入ると、そこは彼女を知らない人間ばかりだった。それは、大きなチャンスだった。

『嫌イナ自分ガ捨テラレル』

それは言い換えれば

「人ニ好カレル自分ニナロウ」

むろん、だからといって優等生に変わるというわけではない。あくまでも彼女流の変わり方だ。

「ヨシ！男の子にもてる女の子になってやろう」

それまで彼女が使っていた言葉といえば大阪弁。それを京都弁に切り替えれば、いかにも男の子受けする女の子の出来あがり。

「乱暴はいかんよし」と眉をひそめればよかった。

それでも、ぶりっ子になるわけではない。チヤホヤしてもらったら、もうそれで十分だった。手紙を貰ったり、家へ訪ねてくる男の子を見たら、気は済んだ。

こういう勝手さは――ずるい。しかし自分を中心に置いてみたい欲は誰にでもあるし、見られていたい欲もある。自分がいつも外側に置かれて、振り返られないよりも1000倍も10000倍も、その方がいいに決まっている。やがて、彼女が人を愛するようになれば――愛されるだけではなく人を愛そうとするようになれば、それらはチャラなのだ。

中学3年から高校1年と、彼女はとてももてた。男の子にまざって、小・中学校と男の子よりも男の子っぽく、自分は女の子とは違ってると山登りしたり、とっくみあいの喧嘩をしたりしていた彼女は、この時期に、ひどくぶきっちょなやり方で、そして不自由なエゴの振りまき方で女の子になりはじめていた。

それでも、ぶりっ子がそうであるように男友達を増やして女友達を失うという風ではなかった。

男の子は話にはアクビの方が多かった。女の子は、よくかばった。友達は女友達だった。でも何よりも、やはり彼女は、自分は1人だと思っていた。

男の子でも女の子でも、彼女を〝君ハコウイウ奴ナンダ〟とか。〝アナタッテ、コウナノヨネ〟と決めてかかれば、彼女は、それを右から左へと聞き流した。

「アンタナンカニハ分カラナイ」

意固地になってそう思っても、じゃあ本人が本人を良く分かっているかといえば、それはまた違う。自分については、彼女はいつもこう思っている。

「ヤッテミナキャ、分カラナイ」

自分がどんな人間かは、自分を色々なところに放りこんでみなきゃ分からないということだった。

高校1年生の半ば、彼女が東京に出ることに決めたのは、やりたい事が決まっていたからではない。自分を放り込んでみることがいいと思ったからだ。たとえば、東京へ出て、学校へ行き、そのかたわらで生活するために働くとする。実際そのようにするのだけれど、その仕事が自分に生理的に合わないものであったとしても、一生懸命やればそれはそれで自分に対してひとつの結論が出るものだ。そう、彼女は考えていた。彼女は東京へ出ることを決めた。

○その16　トーキョーへ

高校1年の夏休みの10日間を、東京の知り合いの家で過したのが彼女の上京のきっかけとなった。福岡でもなく大阪でもなく、自分の居所を、その居方（いかた）を試みられれば――そう思ったら、彼女にはもう福岡はつまらない街になった。

母親は、怒ったり心配したが、娘の頑固にはあきらめが良かった。出発の日――それは夏の終りの夜だった――福岡空港に母親は見送りに来なかった。彼女は、さばさばと1人でいた。

女友達が2人、見送りに来た。

「本当に行っちゃうの？」

と友達は言った。言ったそばからグズグズと泣いた。

「アー、アー、泣イチャッテ……泣カレルトツラインダヨネ」

と彼女は男みたいなことを思ってしまう。

「でもあたしがいなくなったら、学校中で一番もてる女の子になるじゃない！」

とあゆみはおどけて女友達に言う。

女友達は涙を浮かべたまま笑って――「うん、頑張る！」と答えた。あゆみも、笑った。

○その17　ネオンとポリバケツ

トライスター機がエンジン音をくぐもらせながらゲートをゆっくりと離れはじめる。

機体から離れた運行スタッフ達が機に向かって手を振る。

〝無事航行ヲ祈ル〟と言っているように見えた。

彼女はウォークマンのイヤーホーンを耳につけた。

機は滑走路の端に辿り着き、いったん停止すると、急激にエンジンを吹き上げた。彼女はウォークマンのボリュームを上げた。彼女の身体がシートに押しつけられた。機体が細かく震え、車輪から伝わってくる振動がゴンゴンと彼女をつきあげた。そして機体をフッと浮かせると、夜の空にグイグイと上昇して行った。

ウォークマンからは、グローバー・ワシントン・Jrが流れていた。

窓の下を見ると、その街は思いがけず小さく、その明かりを灯らせていた。彼女は、自分の心が滑り出しているのを感じた。聞いていた音楽は、後に彼女が歌うようになるロックンロールではなかったけれど、そのとき彼女の心を滑り出させたのは微かに音楽だっただ。

街の光がみるみる遠ざかって、窓の下が真っ暗になると――そこは筑紫の山並のだが――彼女は目をつぶった。

「導ビカレテイル」そんな気がした。

東京上空も、やはり雲ひとつなく、眼下には、コンビナートの灯りや、街の灯りがキラキラ光ながら、ずーっと広がっていた。

彼女の心はとても弾んでいた。キラキラした光り達は「コッチへオイデヨ」と言ってるみたいだった。

「でもね、その時は「コッチへオイデヨ」と言っていたのは音楽とかそんなものじゃなかった。だって、まだ、「アー、原宿へ行ってみよーかな」とか、そんなことしか考えなかったもの」そう彼女は言う。

空港で手荷物を担ぐと、到着ロビーを抜けて、タクシー乗り場に向かった。ガラスの自動扉が開くと、街のドロンとした空気の匂いが彼女を包んだ。彼女は眉をしかめた。その後、街は何度も彼女に眉をしかめさせるのだけれど、でもこの街はあそこへ行きたい、あそこへも行きたいという彼女の心を鈍らせはしなかった。その夜、彼女は走るタクシーの窓から見た六本木の街のネオンに、本当に心をときめかせていた。

「なんて素敵な街!!」

その夜、六本木からそう遠くない知人の家に泊まった彼女は、翌朝さっそく六本木へと散歩に出かけた。

ネオンの瞬いていた街を早く自分で歩いてみたい気持ちだった。住宅街を抜け、坂を上がると、そこが六本木だった。彼女を魅了したメイン・ストリートに辿り着くとそこにあったのは、倒れたポリバケツと色あせたビルの壁面と、いやな匂いを放つ路地だった。

「ココガ自分ノヤッテ来タトーキョーナンダ」そう思うと、情けなかった。新宿の夜と朝も見た。道の角に並べられたポリバケツは、いつでもいやな匂いを放ち、電線が幾重にもたれさがり、その向こうで超高層ビルがかしいで見えた。

ネオンの洪水は、もう彼女を夢のように誘うことはなくなった。あっけないもんだった。

「さあ」と彼女は言った。

「働き場所を探さなきゃ。そして、歩きながら行く学校も」

彼女は、夜間の高校を決めた。その近くに仕事場を決めた。それは、ちゃんとした就職だった。アルバイトはしない性分だった。毎月毎月、キチンとした収入を得ないと生活が崩れるというのが彼女の考え方だった。

朝7時に起床し、8時30分には出勤した。

〝その仕事が生理的に合わないものであったとしても、一生懸命やれば、それはそれで自分に対してひとつの結論が出る〟

そのように、彼女はキチンキチンと仕事をした。5時に仕事がおわると、5時30分には学校に駆け込んだ。そして授業が終わるのが9時。

「9時に学校が終わって、そして夜明けまでが自分の時間。学校からまず行くところはね〝ミスター・ドーナッツ〟。アハハハハ。そこで友達としゃべりながら11時までいるの。その後はね、色々なところへ行く。

居酒屋や屋台や、はしごをして朝までやっている飲み屋に辿り着いて、そこで朝を迎えるの。それから家に駆け戻って、少し寝て、朝7時に起きて会社へ行って、毎日そんなだった。エッ?　お酒?　ほとんど飲めないんだ、これが」

○その18　ミッドナイト・キッズ

午前4時、彼女は、男友達のアパートの扉を叩く。ドン・ドン・ドン・ドン。指の背で叩くのではなく、握りこぶしでドンドン叩く。

「ねえ、寝てないで遊びに行こうよ」と彼女は言う。

寝呆け顔で男友達が出てくる。

「エーッ、どこへ遊びに行くんだよ。もうじき朝だぜ」

彼女は言う

「行こうよう、オートバイあるじゃない。乗せてよ、オートバイ。行きたい行きたい！どっか連れてってよ」

そう言い出したら、彼女はもうとまらない。彼はそのことを知っているからあくびをしながら台所の水道の蛇口をひねって顔を洗い出す。

彼女を後に乗せたオートバイが路地を抜け、水銀灯とナトリウム灯が並ぶ環状7号線を走り、さらにいくつかの道を抜け、環状8号線から東名高速道路の用賀インターを駆け上がる。

箱根へ行こうというのだ。東名高速を小田原新道へ左折して突っ走るとやがて山を巻きながら登っていく箱根ターン・パイクに入る。

オートバイは、コーナーを車体をかしがせては抜けていく。

「ヘルメット脱ぎたい！」と彼女は言う。

「エッ?」と彼が言う。

「ヘルメットが脱ぎたい！」と再び言う。

やはり彼に聞こえない。ロウ・ギヤーのエンジン音は高く、頭全体を包みこんだヘルメットの奥まで彼女の声は届かない。

「ヘルメット脱イデ、髪ヲ風ニナビカセタラ、モット気持チイイノニ」

朝、昇った太陽の光が少しづつ地面の草をあたためるころ、彼女は草の上に転がってグーグーと眠っている。その側で、彼もグーグーと眠っている。目を覚ませば彼女はこう言うはずだ。

「マクドナルドへ行きたい」

そして、こうも言うはずだ。

「会社へ電話しなくちゃ、有給をとるしか手がないわ。ところでアンタは仕事にちゃんと行くのよ。休んだりしちゃだめヨ」と。彼はヤレヤレと首を振る。

それから、一週間も経つと、再び彼女は彼のアパートの扉を叩く。ドン・ドン・ドン。「ねえ、遊びに行こっ。横浜へ行こっ。横浜の埠頭で海を見ようよ」

そして、彼は水道の蛇口をひねって顔を洗う。あくびを

GIRLS MEET GIRL

かみころしながら。

夜を精いっぱい遊び、そして昼間はガムシャラに働く、彼女流のミッドナイト・キッズというわけだ。

「大人だろうと、子供だろうと、ちゃんと自立してなきゃ」

そう、彼女は言う。

○その19　それぞれの春、'82年

'82年春の5人の主人公達について語る。

中学3年でライブ・ハウスのステージに立ったサヨコはこの春で高校3年。その後も全国ツアーを含むライブ活動を続け、レコード・デビューの話も持ちあがっていた。ゼルダ・ファッションと呼ばれる、サヨコの黒い帽子姿をコピーした女の子達が、都内の様々なライブ・ハウスに出入りしていた。アンダー・グラウンドでの彼女達の存在は、強力な磁力を放っていた。

ノッコは、高校を卒業。女の子だけのバンド「DOLL」が、自然消滅に向かい、レベッカのメンバーとしての活動が本格化した。といってもバンドだけの〝プー太郎〟ぐらしをするわけにもいかず、彼女はビジネス・スクール通いと、アルバイト暮らしに生活の大部分を費しはじめていた。

ショータもまた高校を卒業。名古屋の街でいくつかのロック・バンドに出入りしながら、高校の下級生でドラムスの宮本を引き入れ〝パール〟の結成を目前にしていた。

あゆみは、まだ音楽をやることになるとは思っていない。誰とも同じように、ウォーク・マンを持っていて、そこにはグローバー・ワシントン・Jrのテープが入ったりしていた。福岡の街で高校に入学したところだ。彼女はまだ自分の心を奪いとるものが何なのか知らずにいる。

○その20　バンドに夢中

そして〝プリンセス・プリンセス〟の鳥居香も、高校に入学した。

彼女は浮かない気持ちでいる。小・中学校と勉強はできたし、快適なお嬢様学校暮しを送ってきたぶん、このパッとしない規則だけは厳格なミッション・スクールに入学すると気分は落ちこんだ。

〝まあ、勉強しなかったんだからしょうがない〟そう自分に言い聞かせている。

たしかにバンドに夢中になったから勉強机に向かうなんて苦痛でしかなかった。夢中になったら、もう、そのことしか頭に入らないのが、香の長所で短所。もっとも、たいていの誰もが、そんな風なのだが。

たとえば、香にラケットを持たせれば、彼女はたちまちプロのテニス・プレーヤーを夢見て練習に打ち込むようになる。

あるいは、絵筆を持たせれば、画家になる自分を思い描いている。

つまり熱心ということだ。親はヤレヤレと思っているのだが。

中学2年のとき、YMOのコピー・バンドを組んで学園祭に参加した。ステージは音楽室に作られた。その教室は階段教室になっていて、ステージに立つと見に来た人間の顔全部が正面で良く見えた。演奏が始まって、観客が手拍子をするのを見たとき、その顔に笑顔を見たとき、その一瞬から、彼女はバンドの虜になった。

その朝までは、本気で、プロテニス・プレイヤーになるつもりでいたのにだ。

バンドの魅力にとりつかれると、彼女はキーボードが物足りなくなってしまった。身体が動きたがっているのに、キーボードの前から離れられないのはつまらなかった。

「バンドやるなら前へ出なくっちゃ！」

と彼女は策を考える。

『ギターは弦が多すぎて難しそうだから単音でいけるベースにしよう』

結論を出すのに10秒はかからなかった。

彼女が、自分の学校をほめるとすると、一番に音楽室をほめる。何故なら、そこには、シンセサイザーやギターやドラムが置いてあって、むろんベースもあったからだ。

そこへいけば、バンドの練習が出来た。さっそく、彼女は、ベースの練習を開始した。

ベースを修得すると、RCサクセションのコピーをやっている男の子バンドに参加した。背は小さいけれど、よく動き回るベーシストだった。

いくつものバンドに参加した。キーボードはもちろん、ベースも、ドラムスも出来たから、あちこちのバンドから参加要請が来た。どれもこなしながら、彼女は喜々としていた。

「あー忙しい！大変、大変！」と練習するのが楽しくてしょうがなかった。

で、勉強のことはコロリと忘れていた。

「いい加減になさい！」

と母親が言ったときには、成績は無残なものだった。

「高校入学もあるんでしょ。バンドなんかやめなさい」

中学3年の学園祭が終わったら一生懸命勉強するという約束で、バンドを続けた。しかし学園祭が終わって、勉強のために部屋へとじこもると参考書を広げたまま放心していた。

バンド以外のことでは、頭の歯車はピクとも動かないみたいだった。それで彼女は小さい音でRCサクセションやイーグルスのレコードを聞いては溜息をついていた。

○その21　いらっしゃいませ。なんにしますか？

パッとしない高校に入ってしまったが、それでも新入学のお祝いをなにかしようと親戚のおじさんがやって来た。

「何か欲しいものを言ってごらん」

といわれて彼女はこう言った。

「ベースが欲しい」

母親はヤレヤレと首を振った。

バンドは友達の紹介で男の子バンドにベース・パートで参加した。貸しスタジオが練習場所だった。それまで多くが音楽教室での練習だったから、街のスタジオで練習するというのは、なかなか良い気分だった。ベースを収めたソフト・ケースを肩にかけ、同じようにギターのケースを抱えたメンバー達と街のなかを歩いていると——

『やったー！バンドみたいだ！』

と思えて笑いたい気持ちだった。

楽しいスタジオだったが、問題は、そのスタジオ代だった。月々3000円の小遣いでは、スタジオ代にも不自由した。

バンドにいい顔をしない親に小遣いの増額を要求すれば、聞きたくもない小言を山程言われそうでとても切り出せなかった。

そこでアルバイトをしようと決めた。アルバイト万歳！

といえばこれは街のマクドナルドかケンタッキー・フライド・チキンだった。

自分の住んでいる街のマクドナルドをのぞいてみた。「いらっしゃいませ、ポテトはいかがですか?」ならすぐに出来そうだった。雇ってもらうためには、どう話を切り出せばいいのか迷ったけれど思い切ってカウンターの前に立った。

案の定、女の子が万全の笑みを浮かべて言った。

「いらっしゃいませ、なんにいたしますか?」

彼女は言った。

「アルバイトをお願いしたいんですが」

支店長が出てきて言うには〝15歳は雇えない〟――だった。それで彼女は電車で一駅離れたとなりの街へ足を運んだ。その駅前のマクドナルドに飛び込むと〝アルバイトをしたいんですが〟と言った。無論、年齢は16歳と答えた。そのための生年月日もエトもちゃんと言えるように、電車の中で練習を済ませておいた!

履歴書に、彼女はアルバイトの理由を書きこんだ。〝学費のことで家に負担をかけたくないため〟というのが、その理由だった。〝家が貧しくてけなげな子〟なら断わられないだろうと思ったからだ。

親が知ったら逆上するところだが、むろん親には内証だった。大好きなおばあちゃんと、忠実な弟には万が一を考えて、その店の電話番号を教えておいた。

制服が支給された。靴だけは自前だった。ズックが規定になっていたので、彼女はこれも投資と購入した。ただし、バンドでも使えるようにとピンクの色にした。

「ねえ奥居クン」

と店長が彼女のピンクのズックを見て言った。

「ズックの色は白と決められているんだ」

彼女は、困ってしまった。せっかく投資と思いきって買ったのに、もう一足を買うには、親から前借りをしなくてはならなかった。

店長は気の毒そうな顔をした。

「君んちは貧乏だったよね。買えないんだろ。お金、貸そうか?」

彼女は首を振った。

「だいじょうぶです。すいません」

思いがけないところで、嘘のリアクションが出てきて、「イケナイ、イケナイ」と彼女は汗をふいた。

学校帰りのわずかな時間のアルバイトだったけれど、収入は月に2万円になった。その半分をスタジオ代に置いておくことにして、残りの半分でジーンズとベースの弦を買った。新しいベースの弦を張るのは気持ちが良かった。それも自分のお金で買ったのだから。もっと気持ち良かった。

バンドの男の子達にそのことを言うと、彼らは〝そんなの、ワァワァ言うことでもない〟とあっさりしたリアクションが返ってきた。

好きなバンドをやるために自分で稼いだうれしさがうまく伝わらないのは残念だった。

「親に嘘ついて働くのも大変なんだぞ!」

と心の中で思った。

その嘘もあっさりとばれた。夕方の忙しい時間をカウンターであくせくしていると電話が入っているという。走って電話をとると弟だった。

「おねえちゃん、まずい。早く帰ってきて」

と声をひそめている。

「どうしのよ」

「早く! 今すぐ帰ってきてよ、絶対」

と言って電話が切れた。

帰ると玄関口に母親が立って腕組みしていた。

「許しません!」

というひと事でアルバイトは終ってしまった。15歳という年齢は、母親のにらみ顔の前では、まだ不利かもしれない。

○その22　頭が半分に割れてしまう

学校はつまらなく、バンドは楽しかった。まあ、たいていそんなのものだ。'82年も、もうすぐ終りという頃、彼女は楽器店のポスターの前に立っていた。女の子だけのロック・バンドのオーディション・ポスターだった。各パートごとの募集で、キーボード、ギター、ベース、ボーカル、ドラムスという編成になっていた。年齢制限をみると16歳以上だった。締切日を見ると、その日の2日後だった。例によって15歳は、みそっかすだった。

年齢についてはマクドナルドの実績があった、黙ってれば良かった。本選の2月下旬までには誕生日が来て、16歳になっている。「それなら嘘にはならないわ」というのが彼女の結論だった。本選に残るつもりでいたのが後から考えるとおかしかった。

締切りの当日、彼女はオーディションの主催である赤坂の今はないレコード会社の受付をたずねて応募書類を提出した。

「たくさんの応募が来てますか」

と彼女が聞くと、受付の女性が

「とってもたくさん」

と答えた。

どのパートで応募しようかと悩んだ末にやはりベースで応募した。ドラムスは、たぶん自分よりうまい人間がいそうな気がした。キーボードは、女の子だけに倍率は高くなるはずだった。やっぱりベースだった。

'83年2月中旬に書類選考を通過したという電話がかかってきた。母親がその電話をとらなくてラッキーだった。そのために学校からまっすぐ帰ってきて、電話のベルにいつでも走り出せる準備をしていたけれど。

2月20日がスタジオ・テストの日だった。当日、普段着のまま家を出た。少しはおしゃれをして見栄えよくしたかったけれど、それで親にどこへ行くのかと聞かれたら、ドギマギして嘘をつけなくなるような気がしていた。

行くと、やっぱりどの子もおしれをしていた。化粧をしてミニスカートをはいている女の子とすれ違うと、〝私は受付のバイトの子みたい〟と情けなかった。

同じベース・パートのテストを受ける女の子の中に渡辺敦子がいた。プリンセス・プリンセスのベースになる人間だ。

ミニのタイト・スカートにセーターを着て、髪をソバージュにしていた。

「名前なんていうの」

と彼女が横に立って香に聞いた。

「オクイ・カオリ」

と答えた。

「いくつ」

「16」

「若いのね」

と彼女は言った。

渡辺敦子、19歳。彼女も若い。サイド・ギターとしてオーディションに受かる。

ベース・パートのテストは、キーボード・パートの次になっている。香は早く家へ帰らないと怒られるので、イライラしながら、キーボードのテストを見守っていた。キーボードの4人目は、ミスカートにきれいな足をのぞかせて

GIRLS MEET GIRL

いる女の子だった。
今野登茂子、17歳。キーボードとしてオーディションに受かる。
その足のきれいな女の子に向かって香は内心でこう叫んでいた。
「早く終われっ！」

香のテストの順番が来た。ベース実技は覚えたてのチョッパーをバキバキとならした。今、思い出すと笑えるベースだったが真剣だった。
ボーカル力もテストされた。
「ピアノがあったら自分で弾きながら歌いたいんです」
と彼女は言った。
「ない」
と言われた。
「せっかくのオリジナルをやれるチャンスだったのに」と内心舌打ちをした。テストでの目立ち方をよくこころえている奴だった。
「じゃあ、そのカラオケでいいです」
と前の人間が歌ったカラオケを無造作に歌った。松田聖子だった気がする。
そして質疑応答。彼女は思いきって審査員にこう質問した。
「もし、私が音楽的に水準に達していないならあきらめます、でも、もし私の体型で落とされるなら、そういってください。やせてみせますから」
審査員がゲラゲラ笑って
「10kgやせろといったら?」
と言った。
「もちろんやせます」
と答えた。

「その当時、あたし本当に太ってたの。今もやせてるとは言えないけど」と今、香は笑う。
「よく言ったわよね、10kgでもやせますなんて」
この審査で奥居香はベースとして合格。
他のメンバーは、ギターに中山加奈子19歳、ドラムスに富田京子18歳。

その合格の電話を受けたとき、彼女はうれしさと困惑とで頭がリンゴみたいに半分に割れてしまった。親に内証で受けていたからだ。
「商品のハワイ行きなんですが」
と電話口の男が言う。
「エッ、ハワイ? ドウシヨウ」
「3月5日までに返事をください」
といって電話が切れた。1週間のあいだに結論を出さなければいけなかった。

○その23　たった1回のチャンスかもしれない

「一体、どういうことなの?」
と母親が言った。父親はムッと黙りこくったままだった。
「だから、ゴメンナサイってあやまっているの。嘘ついてオーディション受けてゴメンナサイ。でも、どうしても受けてみたかったの。自分の実力がどんなだか知りたかったし」
そう香は、両親を前に話した。
「それで、プロになりたいって言うの?」
と母親は否定の言葉を後に用意して聞いた。
「なりたい」
と香は答えた。
「あなたはいつもそうなんだから。テニスを始めればプロになりたいと言って、それですぐあきて」
「音楽は違うの、ほんとに好きなのよ。それでもオーディション受けたときは、まだプロになりたいって、そんなに思ってなかったのよ。受かったらね〝あー、これが自分の1回だけのチャンスかもしれない〟そう思ったの。それで、このチャンスを逃がしたら、もうないかもしれない。そう思うとね、やりたいって思ったの」
「だめっ、あなたの学校は、そういう活動をしたら退学でしょ」
「知ってる……」
と香は黙った。そして母親と父親の沈黙の前で再びしゃべりはじめた。
「学校なんかいらない。このオーディションで受かって、私がプロにならなかったら次点の人が代りにバンドをやるの。ある日テレビを見ていて、そのバンドが出てきて、〝あー、本当だったら、ここにアタシがいるのに〟って思うの。そんなのたまらない。
ここにチャンスがあったら、そのチャンスを逃がしたくない。学校なんかどうでもいいのよ。お願い、バンドをやらせて！」

香が必死にたのんで、親は条件を出してその願いを許可した。〝高校だけは、ちゃんと卒業すること〟が条件だった。高校2年、の春、彼女は転校した。そして、プロとしてのバンド活動を開始した。
それがプロと呼べるものでないことをすぐ後で知ることになるのだが、その女の子5人のバンドは、テレビといえば早朝の娯楽ワイド・ショー、コンサートといえば日曜日のデパートの屋上、タイアップが決まったといえば、子供向けアニメの主題歌といった活動に入った。彼女が知っていたロックとは、どれもが違っていた。

転校した教室で、机に向かっていると、クラス・メートの女の子がやってきて向い側に座っていった。
「香、バンドやってるんでしょ?」
と彼女がいった。
「そうよ」
と香は言った。それがバンドと呼べるものではないことは知っていたけれど、言いよどむにはプライドが許さなかった。
「アタシもさ、ロックやろうと思ってさ」
と彼女は香に笑いかけた。
中村あゆみ――それが彼女の名前だった。
「ふーん」と香はこたえていた。

○その24　フンフンフン

名古屋の街、その繁華街を歩きながらショータは鼻歌をフンフンと歌っている。フンフンと歌ってみると悪くないメロディーだった。その続きはどんなだろうと思った。するとそれはスルスルとでてきた。
「コレハイケル、忘レナイウチニ家へ帰ラナクテハ」
ショータはパッときびすを返すとすっとんで家へ帰った。家へ帰ると、そのメロディーを反復しながら、ギターでコードを探した。それから、そのメロディーにつける詩の一部をノートに書きこんだ。そこで、彼女はフーッと息をついた。
「ヤレヤレ、コレデモウ忘レズニ済ム」

このフンフンという鼻歌で、彼女はいくつも曲を思いついてきた。鼻歌が彼女の作曲法だった。人のライブを見ながら突然新しいフンフンが出てくるし、色々なところにいて、自分の皿が周囲から遠く離れたポッカリした感覚に襲われると、鼻歌が出てきた。それを忘れないようにするのが大変だった。忘れたら、どう頭をひねっても2度と出てこなかった。

そうやって出来た歌を、彼女は道を歩きながら歌った。市内の栄という繁華街をそうやって歩いていたら、並んで

GIRLS MEET GIRL

歩いていたドラムの宮本が言った。
「初めて鼻歌で歌える歌が出来たね」
ショータはニッタコリ笑い返した。後にファースト・アルバムに入れることになった「ブルー・キャップ・マン」だった。

'85年春、ショータは、オーディションやコンテストに出てみようと思った。いくつかのオーデションを受けたそのステージの後のことだった。

ショータ達が楽屋に戻ると、審査員をやっていた名古屋市内でライブ・ハウス「エル」を経営している〝ジゲさん〟が訪ねてきた。
「もし良かったら」と彼は言った。
「エルに出てみないか?」

この頃、ちゃんと演奏の出来るオリジナルは、まだ2曲しかなかった。それでもショータは、出してくださいと答えた。急いで作ればいいのさ、と彼女は軽くうなづいていた。

6月に入って、彼女達、ステップは初めてライブ・ハウスのステージに立った。持ち時間は20分、福岡から全国のライブ・ハウスに進出しているパンキッシュなバンド〝アンジー〟の前座だった。

そのステージに立つことになって、彼女達4人のメンバーは、チケットを手売りして歩いた。メンバーの1人は証券会社に勤めるOLだった。チケットを買ってくれる職場環境ではなかった。もう1人は大学生だった。ポツポツとチケットが売れた。ショータも宮本もがんばって売ってはみたがやはりポツポツだった。初ライブの観客は店の中にパラパラだった。

ステージに立ったショータは天井を走っている配水管を見上げた。ビルの地下の天井に走っているのは下水管だった。
「キッタネーナ」と彼女は顔をしかめた。

ショータは、いくつかのコンテストのステージにステップを出すことにした。コンテストに出ることの意義は、まず名前を知ってもらえること。そしてライブの告知ビラがまけること。その結果、手売りのチケットに苦労しなくても済むだろうというが彼女の考えだった。プロになることは考えてなかった。とてもかしこい考えだった。
「エルがいっぱいになるといいね」
と宮本が言った。
「名古屋で一番になれるといいね」「なろうよォー」
と証券会社のOLが言い、学生のメンバーが言った。

それが彼女達の夢だった。バンドを楽しむこと。それがショータのモットーだった。

チケットを売ることも楽しかったし、ギターを抱えて歩くのも楽しいことだった。

名前が売れ、チケットが売れるために出場したオーディションのひとつSDオーディションで、ステップは注目されていた。東京から来た、シンプ・ジャーナルの編集長は、ショータの詞曲、ボーカルに丸をつけた。〝あんまり〟という声も混じりながら、ステップは話題になっていた。東京での決選では賞こそ獲得しなかったが、プロとしてレコード・デビューの誘いはやって来た。

「プロになる気持ちはありません」
とショータはキッパリと言った。
「シールドひとつちゃんと巻けないのがプロになってどうする」というのが彼女の考え方だった。それに断る理由はもうひとつあった。
「自分だけがデビューするなんて、バンドがやりたいのに」

レコード・デビューの誘いは、ステップではなくて、ショータにだった。バンドで東京へ来いと言われたなら、彼女にも考えることが出来た。だから、彼女は何度目かの誘いにこう答えた。
「行くんだったら、バンドで」と。

レコード会社のスタッフが言うことは、分からないでもなかった。バンドとしてはまだ上手くないというのが理由だった。そういったことを、メンバーに伝えるのはいやだった。

レコード会社のスタッフと話をする度に、その成り行きをメンバーに伝えるのが苦痛だった。自然、伝える言葉は口ごもりがちで、そのことが、ショータとメンバーの間に不信感を生み、それは少しずつ広がっていった。
「バンドでなければ東京へは行かない」とレコード会社には伝えながら、その一方でバンドはグラグラしはじめていた。

○その25　ひとりになって

'86年に入って、ショータは、バンド1人ずつのパワー・アップをはかろうと考えた。ドラムのパワー・アップ、ベースのパワー・アップ、ギターのパワー・アップ、その順番で、レコード会社のスタッフに見せながらバンドとしてのOKをとりつけようとショータは考えた。

「エル」のステージに立ち、客席の中で耳を澄まし、目を光らせているスタッフとショータは向かいあった。ドラムスの宮本にOKが出るかどうかのライブだった。祈る気持ちでショータはギターをガーンと鳴らした。

宮本にOKが出た。プロになりたいと思っていた宮本は喜んだ。その次のライブはベースの番だった。

このオーデション・システムを思いつきながら、それでもショータはまだプロになる決心がついていなかった。グラグラしている彼女は、練習スタジオでひとりごちた。
「なんでこんなに焦ってうまくなんなきゃいけないんだ!」

宮本ともケンカになったし、ギターともケンカになった。ギターはバンドを辞めて去った。ショータは自分でバンドをグイグイと引っぱってきて、そのことでバンドを壊してしまった。

1人で酒を飲んで、1人で荒れてみるしか手はなかった。

8月に入って、ライブハウス「ワンワン」のイベントのステージにステップは立った。ギターが去って、ステップはもう「名古屋で一番になろうね」と夢見るバンドではなくなっていた。ベースのオーディションのライブだった。客席で、スタッフは黙って首を振った。

ステップのメンバーの気持ちはそれぞれ食い違ってしまった。バンドをやめてまでプロになりたいという宮本、バンドを続けたいというベース……。

プロになることについて、ショータはひとりになって初めて考えはじめた。バンドという楽しみ事を失って、ひとりに戻ってもう一度、自分の作ってきた歌たちのことを思った。その歌たちは、今は出口を失っていた。それらの歌を歌いたいのか歌いたくないのか?。歌いたかった。それにスタッフのショータ・コールは日に日にうるさくなっていた。

東京へ行ってみようかと思った。誰も知らない人間の前で歌を歌ってみようかと思った。それがプロになることなのかどうかは良く分からなかったが、納得がいかなかったら、その時はさっさと帰ってくればいいのさと考えた。そして、宮本を連れていこうと思った。

夢にたよって
　ただそれだけでいいのかい
傷つくだけならまだ何もしちゃいない

GIRLS MEET GIRL

勝てやしないのさ　現実とのギャップにゃ
夢をいくら積みあげてみても
1人　夜ふけに頭をかかえても
誰も気づかない　叫ばなきゃ届かない
あたえられた24時間
　いったい誰が押しつけた
迷うばかりで　あきらめていちゃだめさ

（GOLD　RUSH）

○その26　アスファルト・リバー・シティー

'87年8月の終りに、ショータは、宮本と一緒に、スタジオにいた。広いスタジオだった。スタッフが選んだギターの青年とベースの青年が一緒だった。

宮本は、ドラム・セットを前に、スネアのチューニングに神経を張りつめていた。ボーカル・ブースに入って、そこから宮本の姿を見ていると、ひどく緊張しているのが分かった。

冗談のひとつも言ってやりたかったけれど、それを口にしようと思ったとたんに喉が乾くほど緊張している自分に気がついた。スタジオの中の空気が急に張り詰めていくのが分かった。

宮本が自分を見た。ショータは口の端で笑ってみせた。それがやっとだった。

9月に入って、渋谷の公園通りを登りきったところにあるライブ・ハウス「エッグ・マン」のステージに、パールは立った。

そのライブ・ハウスの通りの向かい側は渋谷公会堂だった。エッグ・マンの小さなステージに立ち、それからいくつものステップを踏みこえて、通りの向かい側に建つ渋谷公会堂のステージに立つ。それは、何人もの、何組ものアーティストが実現し、あるいは実現出来ずに終る。

このストーリーで言えば、渋谷公会堂のステージに立ったのは、レベッカ、ゼルダ、中村あゆみ。この11月（87年）には、パールもそこに立ち、プリンセス・プリンセスがあと1歩のところにいる（88年4月17日実現）。10メートルちょっとの道をはさんで、そこにロック・シーンがある。

そのステージに立ったショータをよく覚えている。黒の皮のパンツに白いシャツを着、その上に黒の皮のベストを着ていた。歌うショータの表情は固く、客席をにらむ彼女の目は行き場を失って、ときおり宙を見つめていた。それでも、額を汗で濡らしながら、前列の客に笑いかけたとき、その思いがけない温かな表情に、もう一度彼女のステージを注視し直した。彼女のステージは本当に張り詰めていた。

体中の神経を　一瞬であつめて
いけるのか！　やめるのか！
決めないと　ほらつぶされる
泣いていたあの娘は　つかれて別の街へ
逃げられるものなら　どこへでも行くがいいさ

（アスファルト・リバー・シティー）

'87年1月21日、パールは『パール・ファースト』でデビュー。そのアルバム・クレジットに、Thanksとして旧メンバーの名前が記されていた。

○その27　'87年10月、それぞれの風景。

ひどい土砂降り雨の日にショータはインタビューにやって来た。雨の日の彼女は不機嫌だ。ギターを肩に、ビニールの傘を無造作にさし歩く彼女の顔色は、いつもより青ざめて見えた。

プリンセス・プリンセスの奥居香は、ニュー・シングルとニュー・アルバムの曲をまとめるために八ヶ岳山麓にある別荘地に泊まりこんでいた。

明け方近く、彼女は突然、ベッドの上でポータブル・キーボードのスウィッチを入れる。そしてヘッド・ホンを無造作につけると、それまでのアレンジを変えてみようとする。たった1か所のブルー・ノートの使い方のために、彼女の頭の中にスウィッチが入り、飛び起きる。

ゼルダの高橋佐代子は、朝まで台風が吹き荒れた日比谷野外音楽堂のステージに立っていた。

女だけのロック・バンドとして、ワンマンで日比谷野外音楽堂に立ったのは、ゼルダが初めてだったはずだ。彼女は、クラリネットを持ち、アバンギャルドなフレーズをその夜の強風に舞わせ、歌い続けてきた詞達を、夜の空によく解き放っていた。

ノッコはスタジオにいて、ニュー・アルバムのレコーディングをしていた。

深夜に、その日の仕事を終えて、スタジオのロビーで土橋や他のメンバーと少し疲れた顔で冗談を言いあっている。彼女は体力の続くかぎり、いつも好奇心でいっぱいだ。どんなに疲れていても、目の前にビデオ撮影用のカツラが置かれていて、その色が彼女の気をひけば、それをかぶって周囲におどけてみせる。そして再び疲労に目を伏せる。

あゆみは、東京での5日間のコンサートの真っ最中だ。ロス、ニューヨーク、ハワイと、休暇を過ごしてきた彼女は、その中で見つけた自分の歌に夢中でもいる。

○その28　ずうっとこのままもなぁ……

〝よく働き、よく遊ぶ〟朝まで仲間と一緒にいても短い睡眠の後、仕事に出かける。当り前のことだけれど、このルールは大切だった。誰れひとり頼る人間のいないこの街で自分を守るには、自分に言い聞かせるルールが、ほんのささいなものであっても必要だった。

〝よく働き、よく遊ぶ〟それは、自分の自由とその責任の形だった。

「あきたなー」

それでも、ある日、あゆみは溜息を漏らした。何に飽きたのかといえば、街に飽きた。新宿の路地を歩き、六本木の交差点に立ち霞町まで足を伸ばしても、もうその町並みの中に自分を驚かせてくれる意外性はなかった。3000円の町の歩き方、10000円の町の歩き方、正しく点滅するネオン達。いつ見ても甘ったるいファンシー・グッズみたいにこの街は奥行きがなくなった。

街もそうだけれど、自分にも奥行きがなくなっているみたいだった。

『仕事も落ち着いて、給料もらって、そこそこの楽しみ方もして……　でもこれでずうっと続くのもなぁ』

そう思うと、なんでもいいから無我夢中でいれたらいいのにと彼女は思った。

○その29　泥棒がくれたもの

中央線　中野駅。その駅を核にして南北に賑やかな商店街、飲食街が広がっていて彼女の行きつけの店も、その中にあった。

その店にいるTさんが彼女の話し相手だった。口やかましい姉さんといったタイプだったが、世話やき口をきかされても不思議にうっとうしさはなかった。他に仕事を持っ

GIRLS MEET GIRL

ていて、それは音楽や俳優やらのマネージメントといった仕事らしいと聞いていたが、そうやって母親の店の手伝いをしている世話やきのTさんを前にしていると、もうひとつの仕事をしている姿はうまく想像できなかった。

その店に、あゆみは向かっていた。半泣きの気持ちだった。とにかくどうしていいものやら、相談がどうのこうのでなく、まずは泣いてみるとか言ってみるとかしたかった。

「部屋へ帰ったら鍵がかかってなくて、中に入ったらひき出しやら全部開けられていて、泥棒が入ったの。生活費の11万円が盗られたの。家賃もガス代も電気代も水道代もこれから全部払わなきゃいけないのに」

店の近くまでくると、前を歩いている男の背中が目に入った。スタスタと同じ方向に歩いていて、その背中は彼女の入ろうとしている店の扉に消えた。続いて彼女も店に入った。

「泥棒に入られちゃった！」

とTさんに向かって言った。言ったら涙が出てきて、今度は悔しい気持ちになって、泣きたいやら腹立しいやら、自分の感情がいっせいに吹き出してしまった。

酒が飲めれば酔いでまぎらわせることもできるのだが、飲めない彼女は、とにかくTさんに聞いてもらうことが唯一の感情を鎮める方法だった。

「まぁー！」「あらららら」「ふーん」とTさんは合づちを打ち、顔をしかめ、あゆみの気分を落ち着かせた。

「金の無い者同志で金の盗りあいをするのが世の中なんだから、いやになる」

とあゆみは言った。

「大変だったな」

と隣の男が言った。店にくる時、前を歩いていた男だった。

「そう、頭にきたわ」

と彼女の口調はすでにさばさばしていた。

「それにしても、君の声って変わってるね」

と男は突然言った。

「……？」と彼女。

「そこにあるカラオケで歌ってみない」

と男はいった。

「いいよ」

彼女は"変な奴"と思いながら、それでも自分の好きな歌をリクエストした。

杏里の「悲しみがとまらない」だった。

「君の歌のいいところは、前ノリのところだね。フレーズに入ってくるとき、キッパリと入ってくる。カナシミガトマラナイというところで頭の"カ"にアクセントがある。普通だとふわっと入ってきて"シ"にアクセントがくるんだけどね。ロックに向いてるよ、君の歌い方」

と男は言った。男は高橋研といった。時々、その店の隅で詞を書いていた。"何してんの"と聞けば"詞を書いてるの"とボソッとした返事。

「アルフィーの詞なんだ」と彼。

「ふーん」と興味ない彼女。

その高橋研が言った。

「少しレッスンしてみないか？ 僕がピアノを弾いて君が歌う」

「おもしろそうね」

そして連れていかれたのがレコード会社の一室。ピアノがあって、お茶とお菓子が出てきた。

「お客様みたい」と喜ぶ彼女。苦笑する彼。

レッスンは面白かった。どういう風に面白かったかというとピアノの伴奏で歌うというのが、まるで幼稚園生みたいで笑えた。

「ジョニーへの伝言」「ガラスのジェネレーション」その他のロカビリー・ナンバーを彼女は歌った。そうやって3回程リハーサルに通うと、高橋研が言った。

「じゃあ、君の曲を書くから、デモ・テープ作りを始めよう」

つまり、デビューしようということらしかったが、何が始まっているのか彼女にはうまく事態が呑みこめなかった。"楽しそうだからいいか"というのが、彼女の気持ちだった。それにしても泥棒に入られて店で泣いて、そのとき高橋研と知り合った。泥棒が入ってなかったら、彼女の事態はこういう風には進まなかった。盗られた11万円は惜しかったけれど"運命の手付け金"みたいなものだった。おかしなもんだった。

胸ポケットのBroken hearts
　かくし切れずに
ネオンライトのカケラの中に
　まぎれて行くよ

Tonight――100万$の夜空を
舞い降りるみんな傷だらけのエンジェル

Midnight Kids 街中に
Goodnight Kiss捧げたら
It's alright愛し合うだけさ

（Midnight Kids）

'84年9月21日、シングル「Midnight kids」10月21日、同名のアルバムで中村あゆみはデビューした。17歳だった。

「あたしは歌えればいいと思っていた。何かしていられればいいと思っていて、それが歌ならもっといいと思った」

○その30 本当のデビューは？

「ファースト・シングルがどれぐらい売れたかって？ たしか最初に8000枚がプレスされて、それから追加が3000枚ぐらいだったかな。たいした数字じゃないね。でもジワジワ売れていて、これは演歌みたいな売れ方だなと思った。

徐々に地方をコンサートで回りはじめて、東京やマスコミの中で増幅された"中村あゆみ"とね、実際、地方ではそこまで大きな影響力を持てていない"中村あゆみ"を知ったんだけれど。

様々な要素と経路を通してアーチストって力を持ったり伝わったりするでしょ。でもね、最後はあたしの力。良くても悪くてもね。それぐらい思ってないとやってられない。だからね、ステージが、私の夢の場所なの。その夢の場所があって、一番の場所があって、私を囲む現実に立ちむかえるの」

"もし 俺がヒーローだったら
悲しみを 近づけやしないのに……"
そんな あいつの つぶやきにさえ
うなづけない 心がさみしいだけ

Ohhh……翼の折れたエンジェル
あいつも 翼の折れたエンジェル
みんな 翔べない エンジェル

（翼の折れたエンジェル）

「「ツバサ」はね、レコードにしたくなかった。スタジオでは歌いたくなかった。自分が気に入った服はね、自分の前だけで楽しんでいたいと思うみたいに、でも、あたしが好きなもんは、みんなも好きだったんだわ。売れちゃった。

歌いたくなかったけれど、レコーディングしたら、割り

切れた。小さい頃にね、好きなものをひとり占めしていたかったのに、母親がAちゃんにあげなさいと言われて、気持ちはこんがらがってるのに、あげなきゃしようがないと割り切って"じゃあ、あげる!"って笑ったのと似てた」

「売れたとき? 何んでみんなこんなに愛想がいいのかな、と思っていた。その中で"あたしはアイドルなんだ"って思った。"アイドル・中村あゆみ"は私の思っていたアイドルとは違っていた。私はクラス・メートのアイドルで良かった。でも周囲が違っていた」

「歌えていれば済んでた子だったんだけど、食い違ってくれば、歌ってるだけじゃ済まなくなる。闘ったり、従ったりしていては自分が潰れていくだけ。それで『ツバサ』が売れて、その後色んな人が出てきて、そして自分が沈んだ。右往左往するリアルな音楽を選んだんだから、アイドルではなく、自分のやりたいことをやろう、そう思って"抱きしめたい"のツアーをやったの」

'86の末を、中村あゆみはツアーした。彼女は終わったと噂される中でのツアーだった。

「客はそんなに入ってなかった……。でも、人が満員になることを期待して、色々なことを期待して、それが実らなくてその責任を人に押しつけるのはノーだって思ったの。素直になろう。ストレートに自分を出そう。そう決めたの」

「この次は客を増やしてやろうとか、そう考えてステージにあがるのはイヤ。思った分だけ自分がイヤになる。ステージにあがって歌い出せば、たいていのことはどうでもよくなるのよ」

「自分を捨ててたとこある。これでダメだったらもう終りだと決めていた"抱きしめたい"が終って、レコード会社と事務所に行って、これで後は何やっていいのか分からないから辞めます。そう言ったの。でもね自分を捨てて、分りはじめたところがある。これから、もっと分かるし、すごくなるんじゃないかな。身体がそう感じるの。'84年の9月にデビューしたけど、本当のデビューはね、ついこの前に迎えたばっかりなのよ」

'87年12月、彼女は"Rolling Ages Review II"のツアーの最後にいる。

○その32　ゼルダを続けたい

'80年3月30日、中学3年生のサヨコをボーカルにしたZELDAが東京・新宿にあるライブ・ハウス「新宿ロフト」でデビュー・ライブを行い、その年に22本のライブを行った。翌'81年には地方ツアーを含む43本をこなした。

「地方ツアーといっても、夜は、そのライブ・ハウスの主人の家とか、その地方のムーブメントをやっている人達とかの家に泊めてもらって、回っていたの。はじめてホテルに泊まったときは、すごくうれしかった」

とサヨコが言う。

リーダー、小島さちほが、働いている他のメンバー、高校に通うサヨコのスケジュールをにらみながら、地方ツアーをこなすのは大仕事だった。小島自身も、様々なところに原稿を書いて自分の生活を支えていたことを考えあわせると、アマチュアリズムの最大の強さである"好き"が、"力"だった。ツアー先では、必ず古着屋をのぞき、観光をかかさなかった。そうした彼女達に、地方のロック・ムーブメントにかかわる人間達が手を差しのべて、ZELDA初の全国ツアーが行われた。京都、大阪、仙台、名古屋、富山、前橋、筑波、静岡、宇都宮、松本と、それらを2回も3回も回る素晴らしく活発なツアーだった。そのツアーの中、6月に行われた新宿ロフトはZELDAのワンマン・ステージで、しかも入場できない人間達が出るようになっていた。

'80年10月に自主制作シングル「アシュラ」をリリースしていた彼女達にメジャー系のレコード会社が注目をしはじめたのも、この'81年だった。

'81年代後半、桑名正博、チャー、ツイスト、原田真二、サザンオールスターズ、RCサクセションが、新しい音楽シーンの予告のように活躍していた。ロックンロールの憧景から生まれてきたアーティスト達がメジャー・シーンを賑わすようになって、メジャー系レコード会社は、ライブ・ハウスに出演するバンドを、矢継ばやにデビューさせていた時代だった。それは"青田刈り"の風景だった。当然、ZELDAもメジャー系から注目され、デビューのはなしが持ち込まれる。

この当時、日本のロック・シーンで活動を続けている女性バンドは2つしかいない。1つがZELDAで、もうひとつが水玉消防団だった。共にアバンギャルドな要素を色濃く持っていたが、「水玉消防団」の過激性に比べて、ZELDAは、ボーカルが"ゴウコウセイデカワイイ""メンバーモ容姿端麗""歌ノ内容ハ良ク解カラナイガ　受ケルカモシレナイ"といった点で、メジャー系からの引き合いは多かったし、そうした理由からの引き合いゆえに小島さちほは安易にデビューしなかった。

「水玉消防団」が出てきたので、ここに彼女達のことも書き加えておく。結成はゼルダより一年は早かったと記憶する。"ヒューマン・リレーションとしての女の場を"といった活動をしていた。可夜、天鼓らを中心に結成されたバンドでパンク、ニューウェーブの影響をいち早く受けながら、バンドとして、またユニットとして自主製作アルバムのリリースを行いながら活動をしてきたバンド。アマチュアリズムの持つ良さ——マイペース、楽しければ良い——という強さから、現在も断続的ではあるが、さまざまなところで活動を続けている。ZELDAとは同じステージに立っていたし、バンドに興味を持ち始めた頃のノッコも彼女達のステージに触れている。

そのZELDAも'81年末、アルバム・デビューに向けて、レコーディングを開始した。レコード・デビューに慎重だっただけに、このアルバムの方向性をめぐってメンバー陣とプロデューサー陣はたびたび対立、何度もの中断をくり返しながら、'82年8月、ファースト・アルバム『ZELDA』としてリリースされた。

この当時のロック・シーンを支えるマスコミについて触れる。ロック誌は、ロッキン・オン、プレイヤー、ロック・ステディー、ヤング・ギター、ロッキンf。これらの雑誌が洋邦のロック・シーンをあわせて扱う中、日本のロックが細々と支えられていた。歌謡曲のフィールドに組みこまない限り、日本のロック・ミュージックのアルバムは最大10万枚が限界という時代だった。

慎重にデビューしたZELDAだったが、パブリシティー面では、きちんとした評価媒体の絶対量は少く"メジャーに"というレコード会社の思惑は、彼女達に朝6時からの子供向けワイド・バラエティー番組をブッキングしてくるといったものになった。"自分達だけを頼りにする"という情況が彼女達に訪れ、しかし、その中で、ドラムスの野沢久仁子が「経済的に苦しい」と脱退。OLを辞めてデビューにそなえた彼女が再び就職していくのを"確かに苦しい"とメンバーは見送った。そして、その半年後、ギターの渡辺洋子がZELDAを去っていった。レコーディングをめぐるプロデューサーとの衝突、事務所もマネージャーもないまま、全てを背負う負担から洋子は精神疲労を訴えての脱退だった。"確かに疲れる"と、小島さちほとサヨコは彼女を見送った。

GIRLS MEET GIRL

小島さちほとサヨコは、顔を見合わせてZELDAの存続が不可能に近くなったことを互いの顔に読みとっていた。

「これからどうする？」

さちほのアパートにサヨコが訪ねて、2人は向きあった。オランダ政府招待のヨーロッパ7か所ツアーが、洋子の脱退で断念することになったのも、その2人の失望感を強めていた。

「とにかく続けたい」

とサヨコは言った。

そのことが、さちほに、マネージャー役と生活者とバンド・リーダーの3役を背負わせることは知っていた。が、サヨコは、ここでZELDAをあきらめたくはなかった。さちほは、サヨコに続けようとうなづいたが、それは弱気な悲しい気持ちの再スタートだった。

○その33　ロスへの行き方

この'82年、高校を卒業したノッコは、女の子だけのバンド「DOLL」のかたわら、兄の友人のギタリスト木暮武彦に誘われて「レベッカ」に参加、活動を広げた。「レベッカ」は浦和を中心に活動を開始、やがてレコード会社からのデビューの話が持ち込まれてきた。が、木暮武彦の方向性とレコード会社のプロデュース方針が折り合わず、話しはこじれる方向にあった。

その間、ノッコは、ビジネス・スクールに通い、筆記を習っていた。ひとつは〝親の手前〟もうひとつは、〝何かと便利かもしれない〟。

が、レベッカのレコード・デビューが難行する中、海外デビューを思いつく。木暮武彦とノッコはデモ・テープを抱えてロスアンゼルスのキャピタル・レコードを訪ねる。

結果はNO。帰国。

○その34　'83―'84　ゼルダとレベッカ

'83年のZELDAは、新メンバーを加えてスタートすることになった。新メンバー募集には、たくさんの人間が受けに来たが、男が多く、女は少なかった。弾ける人も叩ける人も少なかった。そうした中で、それまでテクノ系のバンドでパーカッションとギーボードをやっていた小沢亜子がドラムスとして参加。続いてハード・ロック系を好みとしていた石原富紀江がZELDAに参加して、セカンド・アルバムのレコーディングがスタートした。この年のZELDAのツアーは47本、年末には新宿ロフト2DAYSを埋めることになった。'83年11月5日セカンド・アルバム『CARNIVAL』をリリース。

この'83年、1月、ノッコをボーカルとしてギター木暮武彦、ベースに高橋教之というレベッカが活動を再開。ライブ・ハウスの小さなステージに立ちはじめる。8月、ドラムスに小沼達也が入って、CBS・ソニーとレコード契約。さらに、キーボードに土橋安騎夫が参加してこの年の暮れからレコーディングを開始した。

'84年4月21日、レベッカ、シングル「ウェラム・ボートクラブ」でデビュー、5月21日ファースト・アルバム『VOICE PRINT』をリリース。全国のライブ・ハウス、イベント、公開録音を、観客数、その内容を問わず渡り歩く。11月21日、セカンド・シングル「ヴァージニティー」、セカンド・アルバム『Nothing to lose』をリリース。年末、12月6日のパルコ・パートIIIのライブは、入場しきれない人間が集まってライブ動員を伸ばす。'85年に入って、リーダー木暮武彦とドラムスの小沼達也が脱退。音楽性の違いからがその理由。ポップなメロディーをワイルドにあるいはルーズに消化していく木暮のセンスは、後にレッド・ウォーリアーズとして先鋭的な形を生むことになる。抜けていった木暮武彦に替ってギターに古賀森男、小沼達也に変って小田原豊が入って、現在のレベッカが形作られることになった。4月にリリースされた「ラヴ・イズ・Cash」がスマッシュ・ヒット、10月に出した4枚目のシングル、「フレンズ」が大ヒットとなって、レベッカ、ノッコがメジャーシーンに踊り出ることになった。

この'84年、ZELDAは小島さちほの産休(出産休暇)を9月から12月にはさんで、20本のツアー、ステージを行う。

「チホの産休のあいだはアルバイトをしてたの」

バンドから離れても好奇心旺盛なサヨコがいる。

「学校へも行ってみたかったから、〝セツ・モード・セミナー〟に通ってみたけど、面白いとは思えなかった。バイトは面白かった。ウェイトレスとか、人の中にいるのもいいなと思って、そのお店には自分を知っててくれる人がいたりで楽しかった。でも、ある日、有線から爆風スランプの曲がかかってきて、ハッとしたの。爆風は、一緒にやったこともあってその彼らの曲が流れてきたでしょ。あー、頑張ってる。私、こんなことしてる場合じゃない！　そう思った。それでバイトは3か月で終り！」

'85年に入って、それまでのレコード会社との契約が終了、子供を育てる小島さちほを眺めながら、ZELDAの2度目の倦怠期を迎えることになる。

○その35　プリンセス2へ向けての脱走

深夜のレンタル・スタジオに、奥居香をはじめとするバンド・メンバーが入ってくる。JR池袋駅に近い地下のスタジオ「ペンタ」だ。それぞれの給料のやりくりの中からさかれるスタジオ代だから、深夜の割引き料金はリーズナブルだ。が、それにも増して、深夜は彼女達が手に入れられる数少い自由の時間でもあった。昼間は、アイドル・バンドなりに、そのスケジュールで縛られていた。深夜に、彼女達はアイドル・バンドから解き放たれる。

女の子だけのバンドを売り出そうという企画から出発したパート別オーディションで人為的に集められた5人だったが、それゆえに互いに顔を合わせれば、自分達のやりたい音楽をやろうという気持ちがどんどん強くなっていた。それはロックンロールの夢というものより、もっと切実なものだった。日曜日のデパートの屋上で、張りつけたような笑顔を浮かべて演奏する自分達から脱走すること。マネージャーが決めた、にやけたフィフティーズの曲目表から脱走すること、どうやったら脱走が可能になるんだろう？

「自分たちのオリジナルを持つこと」――メンバー達は、それぞれに明快な解答に辿り着き、深夜のレンタル・スタジオに集まっていた。

当時、メンバー達の給料は6万円。月の楽器ローンをそこからマイナスして残るお金は2万円。そこから食費とスタジオ費を捻出する。洋服代は、もちろん絶望的だ。午前0時にスタジオに入り、午前5時にスタジオを出る。それぞれにギターや、ベースや、キーボードを抱えて、始発電車の待つ駅へと向かいながら、心の中に、うれしさと悲しさを合わせ持っている。それと、もてあます空腹と。それでも、そのスタジオから、後にセカンド・アルバム『テレポーテーション』に収められた「So Long Dreamer」の原曲となる「Band Girl」が生まれたし、「Vibration」の原曲も生まれてきた。

「Band Girl」には、男の子よりもバンドの方が好きだという彼女達の想いが込められていたし、〝ナントカシテヤルゾ、コノヤロウ〟というハードな気持ちが、ハードな音に込められていた。

'84年の夏、それらのオリジナルが初めて人前で演奏された。いきなり演奏したステージそでマネージャーが驚きの表情を浮かべていた。

「いつ作ったんだ」とマネージャー。

「夜中のスタジオで」と香。

「へェー、おいしいとこばっかり集めたな」とマネージャ

GIRLS MEET GIRL

GIRLS MEET GIRL

ー。

その言葉に香はカチーンと来る。
『冗談ジャナイ！』

そのようにして、深夜のスタジオで生み出してきたオリジナルに彼女達は愛着を覚えてきた。それは、同時にバンドへの愛着でもあり、人為的に集まった5人が再び出会い見つけ合うことでもあった。

'84年のクリスマス、念願の全曲オリジナルによるライブが実現した。しかし、高校の期末テストと、朝5時起きで入る早朝の生番組、出演が重なってのライブとなったため、そのステージはボロボロの結末となった。そのステージ評価をめぐってディレクターと衝突。'85年、これをきっかけに当時のレコード会社と互いにサヨナラを言い合うことになった。

『イツカ、彼等ヲ悔シガラセヨウ。イツカ、彼等ガヒックリカエルヨウナ、カッコイイバンドニナロウ』メンバー達が顔を合わせてはそのことを誓うようになった。

'85年、それまでのアイドル・バンドの柵を飛び超えた彼女達は、それまでの反動のまま毎日をスタジオの練習で費した。メンバーの今野は、親からお金を借りて、キーボード機材を増やした。ふとした気まぐれからバンド・オーディションを受けた今野が、今はバンドに意地を注ぎこんでいた。スタジオで、ギターの中山がくり出す3コードに合わせて、全員がパット・ベネターのコピーを伸び伸びと出来たとき、やりたいことが出来ている喜びが湧いていた。

'85年春、彼女達は、静岡県浜松の女子校に招かれ、その体育館でライブを行うことになった。彼女達が以前に出したアニメ主題歌のレコードから、学校側があたりさわりのないバンドと踏んだのだろう。しかし、そこに登場したのはアニメの可愛イコバンドではなくロックンロールに向けて、奮闘中のエモーショナルなバンドだった。体育館の生徒達は椅子を立ち、熱烈なアンコールの拍手を彼女達に送った。その日、香は、バンドが持つエネルギーを初めて肌で覚えることになったが、同時に、それは学校側からの生徒達への警告を引き出すことになった。

「バカヤロー！　おまえら席を立ってどういうつもりだっ！」

警告の言葉だった。体育館の中に気まずい沈黙が生まれた。香は生徒達の前に立ってこう言った。

「今日は、ごめんなさい。私達のせいでみんなが怒られてしまって。でも、今度は学校の外で会えるといいね。また浜松に来るから、その時会おうね。それまで私達のこと覚えててください」

しかし、彼女達は、そのバンド名「赤坂小町」を脱ぎ捨て、「ジュリアン・ママ」というバンド名に変え、それも捨ててしまう。そして「プリンセス・プリンセス」という名前に辿り着く。'85年から'86年にかけての一年だ。それは、浜松で感じたバンドをやることの素晴しさに支えられた。しかし混乱の月日でもあった。'86年5月21日、プリンセス・プリンセスとして新たにレコード契約、4曲入りミニ・アルバム『Kissで犯罪(クライム)』で、再デビューを果したが、レコードは売れず、月1回の渋谷でのライブも、観客動員数は25人を超えなかった。毎回、衣装を変え、自分達のビジュアルに悩んだ。そのステージも、ハードに走ったり、メロディアスなものを中心にしたりと、空席の客席に向かって右往左往をくり返した。'86年末、彼女達にとって最後の変動が起きる。それまでのマネージメント・オフィスを変わることだ。混乱の中で煮詰まった人間関係を離れる中で、メンバーから新曲が生まれはじめていた。「Motion-Emotion」「Sad Memories」、今まで核の無かったステージにそれらの曲が入って、ステージの上で淀んでいた時間がスーッと動き始めた。

'87年1月15日、渋谷のegg manのステージで、プリンセス・プリンセスは、バンドの熱を滞びていた。ドラムの富田京子とベースの渡辺敦子は、幾度も視線を交わしながら、リズム・パートとしてのコンビネーションを確認していた。奥居香と中山加奈子のツイン・リードがからみあい、それと今野登茂子のキーボードが大きく包みこんでいた。客席からステージに押し寄せてくるエネルギーを香は感じとっていた。

『アア、バンドナンダ』そう思うと、歌いながら急速に晴れていく気持ちを感じていた。どこまでも高く昇っていける気持ちがあった。

5月26日、4回目で渋谷egg manのステージはSold Outを迎えた。観客の動員数は40人から80人、80人から160人、160人から320人と、面白い程、倍々に増えていった。ステージでの笑顔とボルテージも倍々に増えていった。観客に負けないために練習量も増やした。

その春からスタートしたANB系ビデオ番組『ビデオ・ジャム』のレギュラー司会も彼女の顔を、プリンセス・プリンセスの存在を伝えはじめていた。

○その36　PEARL―絶え間ない変容

'87年1月21日『PEARL FIRST』でデビューしたPEARLの立ちあがりは順調だった。2月から5月にかけて全国ライブ・ハウス・ツアーを2回、合計20本をこなし、6月8日にはホール・ツアーをスタートさせた。

しかし、その間、ショータが陽気でいたかといえば、決してそうではなかった。宮本とショータの2人に、オーディションで参加したベースとギターの2人の男とのバンドとしてのコンビネーションは、バンドとしての緊密さにはまだ欠けていた。自身で詩曲を作りながら、頭の中で鳴っているバンドの音がある。そして自分は、そのバンドのボーカルでいる。

インタビューでこう答えるショータがいた。「こいつの（カズヤ）ギターは嫌いだって最初に思ったんだよ」

そして、その横で苦笑するカズヤがいた。パールがバンドとして形を作っていく中で、互いをのぞきあい、バラバラの人間関係として認め、そして再び寄りそいあうという過程がリフレインする。'87年、ライブ・ハウスからスタートし、11月17日の渋谷公会堂にステップアップする約40本のステージの上で、ショータは、それをリフレインした。

ライブ・ハウスからホールへと駈けあがりながら、ショータの気持ちは同じ気持ちでいた。気持ち良くロックンロールすること、観客と向きあうこと。しかし、現実は、ライブ・ハウスのPAの音とホールのPAの音は違っていた。足元のPAから戻ってくるバンドの音は、音がうずまくライブ・ハウスのそれとは違っていて、どう自分の音に乗っていけばいいのか分からない日があった。

全てがガラガラと変わっていく中でショータとカズヤはぶつかり続けていた。ときとしてそれはセカンド・アルバムを含めて、いいものを生みはしたものの

「ヤメル」――「ヤメナヨ」
「ヤメロ」――「ヤメナイ」
「ヤメル」――「ヤメルナヨナ」

というケンカの無い穏やかな日が続いた。そのケンカが続き、それから、ケンカの連続だった。

そんなある日、カズヤがのんびりとした口調でショータにこう言った。

「ケンカしたり、色んなことあったよね」

その時、ショータは、あー、これで終わりなんだなと思った。ここまでなんだと。

「2度目のお別れでしょ。上京してくるときにメンバーと別れて。でもね、今はハッキリしている。互いをつきつめて、じゃあ一緒にやれる、じゃあ一緒にやれないじゃん。やりたいことをやるためにはハッキリしている。カズヤは、ちゃんと自分のやりたいことを持っている。それが全ての解答！」

'88年6月、カズヤ脱退、7月、フル・サード・アルバム・レコーディング・スタート。8月中旬、ロスアンゼルスにてレコーディング終了、10月21日『Century Toys』と、タイトルされてリリース。10月28日、新メンバー栗田こうじを加えて渋谷公会堂のステージに立つ。〝絶え間ない変容〟それがショータのロックンロールの考え方だ。

再びPEARLが動き始めている。

○その37　武道館へ行こう！

'87年5月29日、大宮にあるライブ・ハウス「大宮フリークス」のプリンセス・プリンセスを僕は見に行った。その狭いステージに立った彼女達は、それまで見せていた以上の輝きを放っていた。彼女達がステージに立つと、空気の色が変わるようだった。その音は、とてもシンが強く、つややかだった。見ていてうれしさが止まらなくなっていた。それで、彼女達の演奏を見ながら今の彼女達がどれぐらいのステージの大きさを、この輝きで満たせるかを想像してみた。芝浦インクスティックのステージ幅をそこにあてはめてみた。そこを彼女達ははみ出していた。日本青年館のステージをあてはめてみた。まだはみ出していた。渋谷公会堂をあてはめてみた。それもOKそうだった。でも、まだ広そうな気がした。武道館は？　と考えてみた。瞬間だったけど、それを満たせる輝きが確かに見えていた。目をこする思いで何度も、その大宮フリークスのステージ上の彼女達を空想の武道館ステージに置いてみた。それは、とてもピタリとはまっていた。

「ねえ、武道館まで行こう。絶対できるよ」

まるで青春学園ドラマのラグビー教師みたいに笑えるセリフを、てんで生真面目に楽屋で汗をふく彼女達に伝えた。

「ギャーッ！」

が彼女達の第一声だった。来ないかもしれない夢物語を、彼女達は飛びあがって喜んだ。

「本当に？」とメンバーが聞く。本当は、本当なんて分からない。それでも答える「本当に」。

観客動員のこれまでの倍々ゲームの先を計算してみた。320人が640人に、640人が1千280人に、1千280人が2千560人に、そこが渋谷公会堂。2千560人が5千120人、そこが日比谷野外音楽堂、5千120人が1万240人に、それで武道館がやってくる。

「あと2枚のアルバムを急いで作って、来年の終りになったら、武道館ができる」

嘘のような予告だったが、言ったら後に引けない所に僕自身を引きずり出したかった。そして、その武道館を信じようとする彼女達のエネルギーの強さに、これは、本当だと自分自身で改めて思い込みを深めることになった。

その夜、東京へ戻る埼京線のシートで香が言った。

「私達絶対売れると思う。大丈夫」

'87年6月29日東京・芝浦インクスティック。動員数約450人。同年9月3日芝浦インクスティック動員数約600人。同年11月29日恵比寿ファクトリーII、600人、即時SOLD OUT。

'88年1月22日、23日恵比寿ファクトリー2DAYS、SOLD OUT。'88年2月26日、サード・アルバム『Here We Are』をリリース。同年4月17日の渋谷公会堂コンサート、即時Sold Out。4月29日PITコンサートも即時Sold Out。8月31日、横浜米軍基地内ノースピア1万3000席、Sold Out。同年11月21日、サード・アルバム「Let's Get Crazy」リリース。12月4日渋谷公会堂即時Sold Out。そして、'89年1月23、24、25日の武道館3DAYS即時Sold Out。さらに発表された2月9日の武道館追加公演も即時Sold Outとなる。

ずっと　だまってた事がある
誰も知らない　スゴイものが　5つだけあって
秘密の場所に　この時まで　かくしてた　とびきりの
スゴイものを　私　私持ってるんだ

ハダカにされても　乗ってた飛行機が落ちても
地震がきても　これがあれば　きっときっと大丈夫
どっかの誰かが　ナイフを持っておそってきても
返り討ちだよ　へっちゃらだよ

（へっちゃら）
作詞・奥居香
作曲・中山加奈子

○最後に〝Girls meet Girl〟

男女の愛を歌うことだけを要求されていたように思えた。たとえば長い歌謡曲の歴史の中で女の子が一体どんな歌を歌ってきたかを思い出してもらえればいい。あるいは歌わされてきたのかを。

そうしたワクから飛び出している人も、むろん僕達は知っている。ユーミンや中島みゆきや他にもいる。

〝マインド・ミュージック〟という言葉が僕は好きだ。ニュー・ミュージックとかロックンロールというジャンル分けには知らんぷりをして、〝マインド・ミュージック〟かそうではないのかを、いつも気にしている。ロックンロールはとても好きだ。人の中に起こる様々な感情、怒りや、笑いや、いじけや、正義感や、悲しさや、エゴのみにくさや、その開き直りや、様々なものをロックンロールは、そのアナーキーな勢いで表現してくれる。ロックンロールは、そういったマインドの形にうまくあっている。むろん、それは、ロックンロールを好きで、そこに言葉を乗せる努力をした人間達がいたから、ここまできたと思う。佐野元春、尾崎豊。あるいは、ストリート・スライダーズ、レッド・ウォーリアーズ、RCサクセション。それにブルー・ハーツ。まだまだいる。表現が多様化すればする程、僕等の心幅を広げてくれる。あるいは僕らが広くもしていける。

〝Girls meet Girl〟それは、女の子がロックンロールで女の子に出会うという意味でつけたタイトルだった。女の子が男と女の愛の歌を形式通り歌うのではなく、そこにもっとある様々な感情をロックンロールというフリー・フォームの中で生み出しはじめたことを、そして、そんな愛のことだけではなく、もっと色々な気持ちを歌いはじめたことを、この最後に書き足しておきたいと思った。そしてこの企画の中には、もっと他の人も入れたかったことを、スペース的に時間的に欲ばれなかったことも残念に思っています。たとえば、山下久美子、白井貴子、渡辺美里、シーナ、他にもバービーボーイズの杏子、そして、今、生まれつつある新しい人達。

そうした、時間と人の流れに従って、〝Girls meet Girl〟がもう一度、書けるようになるといいなと思っています。

'88年12月9日プリンセス・プリンセスは長野市にいます。中村あゆみは酒田市にいます。ゼルダは東京にいて、12月19日の渋谷公会堂のリハーサルに入ろうとしています。レベッカは同じく東京にいてレコーディング中。パールは、再び動き出そうとしています。'89年が、それぞれの頭上に流れてこようとしています。

（終）

G I R L S　M E E T　G I R L

大募集!!

クリエイタ〜の遊び場。
[パチ・パチ読本(仮)]('89年創刊予定)で最優秀作発表!!

●どっか〜んとミンナの作品の応募を待ってます。パチ・パチでは、クリエイターの遊び場として、様々な表現が集合した新しい雑誌を現在企画中。そこで新しい才能を求めます。そのためのオーディションです。チャンスです。

■応募のきまり

●いずれの部門も応募作品は必ず未発表のオリジナルなものに限ります。
●小説部門——400字の原稿用紙に最低20枚以上、上限はありません。
●コミック部門——①枚数　原則として15〜31枚。(4コマ、ギャグetcは15枚以内でも可)②ケント紙か厚での上質紙に黒インクか、墨汁で描くこと③タイトル、セリフはエンピツで書き、必ず各ページ右上に通しナンバーを記入してください④絵のわく線（サイズ）はタテ27センチ×ヨコ18センチです。わく線からの絵柄のはみ出しは、なるべくないように。
※最終ページの裏に、名前、住所、電話番号、年齢を書いてください。
●イラスト部門——とくに制限はありませんが、あまり大きなサイズのものは困ります。イラスト部門は、ひとつの応募封筒に作品をいくつ入れてもOKです。(その他部門はひとつの応募封筒に必ず作品ひとつのみにしてください。多数応募される方はそれぞれ別の応募封筒で送ってください)。
●自由作品部門——その名のとおりとくに制限はありません。
●各部門、最優秀作、優秀作は'89年創刊予定『パチ・パチ読本（仮）』で発表します。ただし、応募作品をもとに新たに制作してもらう場合もあります。
●掲載分には当社規定の原稿料、ギャランティーをお支払いします。
●応募のあて先——〒154東京都世田谷区千歳郵便局私書箱25号　CBS・ソニー出版　パチ・パチ『パチ・パチ読本』作品応募係まで。そして部門を必ず朱書きしてください。
●しめ切り——4月末日消印有効。
●編集部へ直接原稿を持ちこむことは原則としてNOです。
●問い合わせ——パチ・パチ編集部☎03-234-7906。応募待っています。

第1回 PATi▸PATi オーディション 作品

プロ・デビューめざせ!!「パチ▸パチ読本」へみんなの作品を大募集します!

①小説部門

●小説部門は①音楽ジャンル②一般ジャンルにわけます。形式その他はすべて自由ですが、400字原稿用紙で最低20枚以上とします。上限はありません。どんな長編でもOK。文章、行間から音楽が聞こえてくる（難しい）ようなもの、ストーリー転開がおもしろいものetcがいいナ。アーティスト論、音楽そのものへの文章は、自由作品部門で応募して下さい。

②コミック部門

●コミック部門も①音楽ジャンル②一般ジャンルにわけます。音楽ジャンルは、あるアーティストをモデルにしたものでもかまいません(たとえばBOØWYの「大きなビートの木の下で」をコミック化するとかetc)やっぱりどこか、ロックンロールを感じるものであってほしいですネ。とはいえネタ、キャラクターのおもしろさも重要な要素。もちろん4コマ漫画もOKです。

③イラスト部門

●イラスト部門は特別な項目はありませんが、イラストなので似顔絵はNOです。似顔絵は、自由作品部門で応募をしてください。応募作品は、必ずカラー原稿でお願いします。とはいえあまり気を入れず、キミの思いついたユニークで可愛い、キャラクター、マークでもOKです。

④自由作品部門

●自由作品部門は本当に無制限、制約いっさいなしのフリー・ジャンル。上記3項目以外の表現、作品ならなんでもOKです。アーティスト論、音楽論、似顔絵、ショート・エッセイなどなどは、この自由作品部門で応募をしてください。表現は形にこだわらないもの。新しい発想、感性の発表をお待ちしてます。

新進ロック・バンドのボーカリストさん大集合～の『読書感想文』大会です。
ウ～ン、それにしてもヘンな企 画だ。まあ、読んでちょうだい。

イラスト▶狂市(LÄ-PPISCH)

読書感想文

「明日があるなら」を読んで
KAZYA
JUN SKY WALKER(S)

「明日があるなら」を読んで
——J. S. W. KAZBON——

ある日、母親の突然の自殺により、その平凡な彼女は鬼となる。その町の黒幕に、会社社長の母親はつぶされて死んで行った。彼女は復讐に立ちあがったが、その町は全て黒幕に仕切られいつの間にか彼女は刑務所送りとなってしまう。しかし、狂い出しそうな刑務所の中で彼女はいつも自分に言いきかせた。「明日があるなら」

刑務所を出た彼女は自分を苦しめた全ての男達を一人ずつ残らず血祭りにあげた。そして彼女はまた、普通の女として社会復帰を試みた。しかし一度レッテルを貼られた彼女に仕事はなく、いつの間にか彼女は行き場をなくし、本物のどろぼうになってしまう。世界を渡り歩き、ありとあらゆる富と地位を手に入れるが、仮面をつけた彼女に愛する男性はいなかった。また、人々に裏切られてばかりで人を信じられなくなっていたのだ。

しかしある日、自分が大嫌いだった詐欺どろぼうの男に心を動かされ、最後に大どんでん返しの仕事をふたりでやり遂げ、足を洗う事になる。そして、最後のシーンで〝これからはもう陽のあたる所で生きていける。愛する人とふたりきりで〟と思いながら飛行機に乗り込む。しかしその飛行機のとなりの席には、前に計画を立ててこねた、アメリカ一の大金持のカモが座っていたのである。

——終り——

復讐ものは、僕はとても好きだ。シドニィ・シェルダンの作品には『ゲームの達人』とか復讐ものが多い。

この『明日があるなら』は、最後彼女はまた詐欺師の仮面をつけるのか、それともはずすのかふたつの別れ道で幕を閉じている。考えさせる終わり——。これはとても後味の悪い素晴しい終わり方だ。

しかし、これが続きで二作目が出来たりすると、その価値は落ちる。これが僕の最近読んだ本です。

シドニィ・シェルダン作
超訳
明日があるなら
IF TOMORROW COMES
BY SIDNEY SHELDON

◀『明日があるなら』—シドニィ・シェルダン（アカデミー出版サービス発行）

「ピノキオ」を読んで思う事

MAGUMI
LÄ-PPISCH

昔、小学校の二年生あたりのころ、ピノキオの映画を観た記憶があります。あのころはなんでピノキオはそんなウソをつくの、ゼペットじいさんに迷惑ばかりかけてと、最後のラストシーンでは涙しながら観たものでした。しかし童話などではよく読んでいくと昔では気がつかなかった残酷な裏にある時代背景や社会問題、などと水面下でドロドロとしたものが、ただの作り話しでは終らないような物や、強力なメッセージを含んだ物、はたまた予言書まであったりで、ただ昔の記憶に閉じこめておくだけではもったいないと、そこで今回私くしは本屋さんで、いかにも甥や姪などに買ってあげるような顔をしてディズニー名作絵話『ピノキオ』を購入し新たな気持で読み返して思った感想をのべたいと、ここでペンをとったしだいです。

まずはゼペットじいさん、この人ピノキオの父さんであり、作った人です。見た目には六十才位の人でしょうか。人形作りの職人さんみたいですが、奥さんは亡くなったのか、いないのかわかりません。もしこの年まで一人で暮らしていたとしたらそうとうの変わり者です。さてピノキオは女神様に命を入れられる訳ですが、いきなり欠陥商品を作ってしまいます。普通、初めて学校に登校するのに、いきなり寄り道してサーカスに売られるような子供いません。半分は命を入れた女神様のせいです。人にとやかく言う資格ありません。まあこれは余談ですがピノキオをだまして、サーカスに売っちゃうのはキツネとネコですが、キツネが人をだますキャラクターであり、動物であるとゆうことは、日米共通である事に気付きます。しかしアメリカ人はイカ、タコ、クジラ食べません。ハイ、その後ピノキオは糸のないあやつり人形とゆう事で人気がでますが、ロフト満パイはもちろん、LIVE・INNワンマンできる位の動員はあったと思われます。その時ピオノオは逃げられないように鳥かごに入れられますが、BEASTIE・BOYSのツアーで、でかい鳥かごの中になやましい女性が踊り狂ってる姿を見たのは記憶に新しい事です。しかしこの二つは同じ条件ではない事は頭に入れておきたいものです。そこで、神様がピノキオを助けにきます。

「あなたはなぜここにいるの」

と女神が聞きます。

「キツネとネコが、無理に連れてきたのです」

ハイ、助けに来た人にウソを言ってはいけません。かわい気がありません。そこでピノキオは鼻がのびてしまいます。そうみなさんもほど良くウソをつけば鼻は明日からアメリカ人です。私としては中条きよしの〝ウソ〟位がほどよいうそだと思うところです。まあ結局ピノキオは逃がしてもらいますが、ピノキオには相談役のジミニーというコオロギがいまして、車の名前に似てると思ってるのは私だけでしょうか。しかしピノキオは前回ではこりず、楽だった事も子供をロバにして売っていたというストリーで分かります。何もない所からは火はたちません。さてゼペットじいさんは、ピノキオをさがしているうちにクジラに飲みこまれてしまいますが（こんな奴もめずらしい）ピノキオもおじいさんを助けるために飲みこまれてしまいます（これもまためずらしい）そこで脱出のためにクジラのおなかの中で焚火をします。そこで焚火のけむりでたまらなくなったクジラがくしゃみをしてはきだされて助かるというストリーです。はっきりいって今こんな事をすると動物愛護協会に怒られてしまいます。オリビア・ニュートン・ジョンもカンカンです。

と、色々あって結局ピノキオも人間になり、ベム・ベラ・ベロと違い、倖せに暮らしたという事ですが、ここまで書いたとおり童話で泣いたり笑ったり素直な目で見る心をやしないましょう。

◀『ピノキオ』―ディズニー名作童話館（講談社発行）

「人間失格」を読んで

延原達治
THE PRIVATES

恥の多い生涯を送って来ました、と救いようのない暗いトーンで書きだされるこの本を初めて読んだのはいつだっただろうか。片っ端から乱読した書物の中の一冊としてその時は特に自分にとって重要な意味をもたぬまま読み過ごしたような気がする。当時（たしか十五才ぐらいだったと思うが）は、武者小路実篤の『友情』などに心引かれていたのだから我ながら奥ゆかしきロマンチストだったのだなぁと感心してしまう。

だいたい太宰治という名前からは『走れメロス』しか連想できなかったような記憶があるのだ。それから約十年という時間が経過し『人間失格』を読んだ。もちろん読みたくて読んだわけではなく、旅の時間つぶしにと何気無くカバンに入れておいただけだった。話が進むにつれ、いいようのない不快感を味わった。この主人公の葉蔵という男のキャラクターが、まるで自分のことのように感じられたからだ。もちろん全部自分そのものの訳はないが、ところどころ文章のすきまから自分の現在の姿がかいまみえるようで気分が悪くなった。少し大袈裟に言えば、初めてこの本を読んだ時は特に何も感じなかった訳だから、自分はこの十年で人間失格への道を少しづつ歩んできてしまったのだろうか。一例を取り上げて比較してみよう。主人公は、ひたすら無邪気の楽天性を装い、自分を日常生活の中で道化としてもう一人の自分、他人の目に映る自分を演じ切り完成させていくのだ。ただしその完成度をもう一人の自分がいつも冷静に監視しているのだ。そして道化を演じているということが、第三者にばれることはないかと常に恐怖心を抱いている。家族すらだませていると思っている矢先に、いままで鼻にもかけていなかった竹一というクラスメートに見破られてしまうのである。それは大変な事件だ。不安と恐怖が突然いままでの数倍の勢いをもって葉蔵をおそうことになる。このくだりだが、自分は十五、六の頃にこんな事を考えたこともなければ、恐怖心なんぞも味わったこともない。ところが二十五才となった今、この主人公の葉蔵と同じように、道化を完成させようとする自分と、そのツメの甘さに不安になる自分とが心のどこかに同居していることに気付かざるを得ないのである。自分でも、ぎょっとするほどの陰惨な自画像を心の中で秘かに肯定しながらも、その絵は決して他人には公開せず、あくまで陽気に他人を笑わせ、道化としてふるまう。この葉蔵の姿は現在の自分ではないかと思わずにはいられなかったのだ。

又、マルクス思想の友人に連れられるがまま、自らの思想とはまったく関係なく政治活動を始めてしまう。なんの興味もないくせにもち前のサービス精神からか、行動隊長のようになってしまう。いやサービス精神からではなく、すべてがなりゆきまかせで結果ばかりが、一人歩きして行ったということだろう。どうだろうか、この一節も自分に置き変える事が出来ないだろうか。いや置き変えるというより、自分の生活能力の不足はこのように成り行きまかせで結果を待っている所にあるんではないだろうか。いやはや気が滅入っていくばかりである。なんだか、反省文のようになってきてしまって申し訳ないが、この本を読んだ後での一番大きな感想は、この本の登場人物やストーリーへの感想というよりは、この本を現在の自分との照らし合わせへの感想のほうが大きなウェートをしめるということだ。もちろん不快を味わいながらも自分と比較したりする余裕があるという事はまだまだ人間失格への道は遠いのかもなぁ……。

と最後に格好つけた文章を書く自分に不安を感じつつ、迷路のような夜は過ぎていくのでした。チャンチャン。ああ……虚しい。

◀『人間失格』—太宰治（角川文庫）

「キリマンジャロの雪」を読んで

天坂晃英
BE MODERN

ヘミングウェイとの出会いは中学のときだった。〝読書とは再読することに意味がある〟というが、ヘミングウェイの作品にはこの言葉がピッタリあてはまると思う。彼の作品で最初に読んだ〈老人と海〉は今でも読めば読むほど物語のスケールの大きさと人間の尊さ、偉大さ、人生の素晴らしさを知る。

今回は、〝キリマンジャロの雪〟という作品の感想を書くことになった。まずこの作品の簡単なあらすじを書くと、主人公は小説家（といっても、いまはなにも書いていない）で、金持ちの妻とともにアフリカに来ていて、狩猟中の負傷から壊そにかかり救助の飛行機を待つことになる。そのあいだに、彼は夢うつつのなかで過去を回想する。最後は意識が消えて夢の中で、救助された飛行機の窓からキリマンジャロの輝くいただきをみて自分が行こうとしているのはここだと知る。妻のほうは、夜にハイエナの泣き声で起き夫の死を知る。主人公が、昔から今までに自分や妻に対して思ったこと、してきたことなどが、ヘミングウェイの持つ技法の枠を凝らして書かれている代表的短編だ。

人間は生まれてきたときは〝まっ白だ〟という人もいるけれど僕はそうは思わない。生まれてきたときに、すでにそれぞれの色を持って生まれてくると思ってる。そして成長するにつれていろんな色がそれぞれの経験などによって、はっきりしたものになってゆくのだと思う。

今、この国はとても自由だし平和だ。（そういうことにしておこう）そして、いろいろな生きかたが尊重されている。社会の歯車に組み込まれて、一つの部品で一生を終えてしまう人もいれば、ドロップアウトして新宿あたりで生活している人もいるし、ロックミュージシャンをやっている奴もいる。どの生き方がいいのかはわからない。大人になるにつれて、白か黒かはっきりできないことは増えてくるものなのだと思う。そして社会を形作るものが、どんどん複雑になっていく中で、ぼくらはもっと深く強く真実をこの手の中に掴んでいなくてはいけない。

この物語の主人公は、おとなになり小説家となった。若い時は情熱と夢を持っていただろう。しかし彼は駄目な男になり金持ちの女の夫になった。彼はアフリカの大地の上で、追ってくる自分の死の気配のなかでこんな風に思うことになる。「自分が嘘によって生きてきたのなら、嘘によって死ぬようにすべきなのだ」。妻と言い合いの後「おれは何も残してゆきたくないんだ」とも書かれている。こんな寂しいやりきれない生き方は、いやだけど今の世界には結構こんな風な人生が多いのかもしれない。だれもがまぎれもなく、苦しさやりきれなさのなかで生きているのだと思う。

ところで自分が軽蔑するような人間になったと、彼は思っているが決してそうではなく彼がまだ書きたい欲求があることは、この物語のいたるところででてくる〝書こう〟とか〝書かない〟という言葉のおおさで明確だ。金持ちの妻との生活の中で、切り捨てた自分と切り捨てられない自分が揺れ動く。それはよくある大人の姿でもあるけれど、ヘミングウェイはここでは肉体的にも精神的（常識的にはそうなっている）にも人間の本当の最後をもってきて、彼は切り捨てられない自分のなかで過去を回想する。人は生まれつきなにかしらの欲求を持っていてそれに正直でいるべきだし、正直ではいれらなくなったらそこには歪みができてしまうだろう。

ヘミングウェイの小説のなかには死について書かれた物がいくつかある。死の捉え方についてはこの世界に生まれてきた人数分の考え方があるのだろう。

今年の二月に可愛がっていた犬が死んだ。原因は二年程まえにした手術がうまくいってなくて今頃になって苦しみ出し死んだ。「見知らぬ人の死より、身近にいた犬や猫の死のほうが私は悲しい」とだれかの言葉にあったけどまったくそのとおりだとその時思った。愛していたものが死ぬということは、残されたものにとっては、つらい事であり、何度あってもやはりやるせないし、それに慣れることは決してないのだ。

死ぬ本人にとってはそれはどういうものなのか？ ありったけのイマジネーションを使えばなんとか想像できる。でも実際はこの世界に住んでいるものでそれはどういうものなのか。

この物語のなかでは、主人公が最後に（死ぬ時に）眠りのなかでキリマンジャロの四角い頂きが、陽光をうけて信じられないくらい純白に輝いているのを見て、自分がいこうとしているのは〝あそこだ〟と知るという、ちょっと抽象的な終わり（つづきなのかもしれないが）となっている。取り方によっては宗教的ともおもえるけれど、それがどういう意味なのか？

人生には必ず結末があり結果があり答えがあると思う。そこへ辿りつくにはとてもたいへんだったり、道のりがとてつもなく長かったりするのかもしれない。時には濁ってたり、正しくなくても辿りつくときもあるとおもう。

僕はどこへ辿りつくのか？ それはまだわからない。

どこへたどりつきたいのかもわからない。

今日を生きることで精一杯だ。

そして、どこかへ辿りつくための明日がやってくる。

▲「キリマンジャロの雪」―ヘミングウェイ短編集（新潮文庫）

「パノラマ島奇談」を読んで

大槻ケンジ

筋肉少女帯

いわゆる「私の人生を変えた一冊」ってやつですこの物語は、もし小学校五年生の冬休み、クリスマスイブのあの夜、この本に逢うことがなかったら、大槻は今ごろ、クソつまんねー会社員でもやってただろうなァ。

この物語の主人公、人見広介は、まだこの世を経験しない先から、すでにこの世に飽きはててしまった男で、いつも頭の中は、夢想のユートピアを創造して、見果て夢と現実の貧乏生活のギャップにため息をつきながら、生きるでもなく、死ぬでもなく、日々をうろっている。「ダメな奴」でした。そんな彼が大富豪の青年と瓜ふたつであった！という恐しい偶然（アハハ、好きだなァこーゆーの）を利用し、富豪になりすまし、巨万の富を得た彼は、M県S郡の南端にある直径二里たらずの小島の中に、彼の脳髄中に創造されていた理想郷にその人達の晩年の様子なども見えたりします。彼らは大体、僕には無関心だけど、時おり気がむいたのか、話しかけてきて……。

やめた、大槻は薬やってるぜぇとか言われたくないからね。もし、もっと話を聞きたい奴がいたら、取りあえず筋少のレコード聞いて理解してね。

「うつし世は夢　夜の夢こそ真実」乱歩の名言です。う――ん、なんという、なんという美しい台詞だろうか!!聡明なる読者諸君ならお気づきでせふ。この言葉こそが大槻の座右の銘であります。さらに言うなら、人類にとっての真理！　太古の昔、全ての物がビッグバンから生まれたように、人間の脳髄はまさに夢というビッグバンを媒介とした理想郷を創造するための製造機にすぎず、言うなればそれはっ、マリアのそのだから、なんだあれだよ、話がでかくなりすぎて自分でも何言ってんのかわかんなくなっちまっただよ、オロロ～ン！　つまり江戸川乱歩の「パノラマ島奇談」は、世界でも類を見ない恐しくも美しい小説だから、みな心して読みなさい！　先生の言いたいことはこれだけだ！

以上！「起立！　礼！　着席！」

▲『パノラマ島奇談』―江戸川乱歩（角川文庫）

東・京・少・年の夢

TOKYO・SHONEN

東京少年。トウキョウ・ショウネン。突然現われた僕の友達。カンケリ遊びをしてた頃の、なつかしいアノコ。友達だから、僕の気持ちをわかってくれる。友達だけど、キミの事は何も知らない。フシギな緊張感。

PHOTO by MASAFUMI SAAMOTO
COPY by MITIRU SASANO(TOKYO SHONEN)

TOKYO-SHONEN

東京少年の夢

東京少年。トウキョウ・ショウネン。
誰かがポツンと、一人で歩いている。

このまま行こうか、横にそれようか……。
悩みながらも、足は勝手に前へ踏み出されていく。
私の夜長に　一人歩きしてた
夢もないのに　追っかけようとしてた
一人ぼっちで　つまづいて　ころんだ
でも
消えていくのは　いやだから
ただ　Day and Day
　　　to Walk and Walk

車がせわしなく往来し、雑然とした街のはざまを
無数の影が動き続ける。

誰もが誰もに　無関心を装い、
誰もが各々　楽しむ街を持ち、
且つ、
不気味な程に強く、微動だにしそうもない。

——怖い——
——通じない——

まわりばっかり　[illegible]いて映った
人目を避けて　ひっそり歩いた
いつ頃からか　おびえだし[illegible]った
でも
消えていくのは　いやだから
ただ　Day and Day
　　　to Walk and Walk

そのまま　ポツポツ一人で歩くうちに、
僕には僕の空間があり、
そこだけは絶対にゆずるものかと　何度も思い、
思い込ませたのだけれど、
本当はどうしようもなく　誰かに訪ねて来てほしかった。

どうにも　疲れてきた。
歩きながら　涙が出てきた。

なんで　こんなとこまで　来たんだろう。
どうして　こんなにまでして歩いてなくちゃいけないんだろう。
早く　どこかへ　着きたいのに
早く　何かに　ふれたいのに

街はぼやけて　光だけがちらつく中を
そんな一心だけで　歩みを早めた。
もう　これ以上　こらえきれなくなったときに、
ふと、横を見た。

あれ？

遠い向こう側に、僕の足どりと、全く平行にして
同じように歩くヤツの姿が見える。

誰だろう？

女だろうか、男だろうか。
何も持っていないようだ。

前傾姿勢で　必死に胸を張りながら
うんうん歩いているヤツだ。

いや？　あれは少年だ。
ただの、一人の、少年だ。
自分の空間だけを抱えて、さっきからずっと
並んで　歩いてたんだ。

そこだけが唯一、「意志」のある空間のように見えた。

あ！

少年と、目があってしまった。

"え！"

少年も　同時に　気がついた。
二人はしばらく、目と目が　離せなかった。

すると、とたんに少年の表情がほころんで、

僕の方に駆け出して来た。
僕も夢中で　駆け寄って行った。

"やあ…"
「君は…」
"僕らは…今、本当に　うれしいんだよね"

僕らは、ずうっと背丈のままで　歩き続けてきて、
たまたま、ここで、こうして出会い、
これからも　友達同志であることを確認し、
続けて、少年はこんなことを　言った———

"そうとも。どこへ行こうが僕らは、その時々の
背丈を抱えて歩くのさ。
伸びていって、やがては縮んでいくのだろう。
でも、僕らは、すぐに見つけあえるよ。
君が君で、僕が僕ならね。
————さあ、そろそろ行かなくちゃ。
きっとどこかでまた会おう。　気をつけて———"

そう言い残すと、少年は元気よく向こう側へと戻って行った。

そして僕も、こちら側でゆっくりと歩き始めた。
一歩一歩、確かめるようにして。

「すぐにわかるさ。だって、僕らはどこにいようが
背丈のままだもの……さあ、行こう。もう大丈夫———」

こうして僕らは、再び雑踏の中で平行に歩き始めた。

ときどき、ちらっと目をあわせながら———。

東京少年（笹野みちる）

東京少年
TOKYO-SHONEN

東京少年

ALBUM LINER NOTES ALL WRITTING BY TOKYO SHONEN

ジョギング シンガー

北風がビュンビュン吹いてる　[illegible]
柿の木がビリビリ揺れてる　寒いな
[illegible]にカバンを放り投げたら
すぐにデッキを回すんだ。
人知れず鏡に向かって歌い出す

だけど5分後　テープを止めた
外がそろそろ暗くなるころ
だからジョギング　先にすまそう
僕はエネルギッシュなシンガーだから

トレパンをクルクルクルリと巻き上げて
寒空にブルブル震えて　飛び出した
人に言わせりゃそこそこうまい
ボーカリストの僕だけど
一つだけ　悩みがあるんだ　ないしょだよ

だからジョギング　かかさないんだ
僕はスターになりたいから
だからジョギング　さぼらないんだ
僕に足りないのは　体力

いっせえので　ダッシュ
いっきに　坂道走るよ
いっせえので　ダッシュ
足がもつれて　星が飛び散る

だからジョギング　かかさないんだ
僕はスターになりたいから
だからジョギング　さぼらないんだ
僕に足りないのは　体力

いっせえので　ダッシュ
いっきに　坂道走るよ
いっせえので　ダッシュ
足がもつれて　動かない
いっせえので　ダッシュ
自動車に追い抜かされても
いっせえので　ダッシュ
子供に笑われても　止まらない

いっせえので　ダッシュ
いっきに　坂道走るよ
いっせえので　ダッシュ
目の前かすみ　星が飛ぶ
いっせえので　ダッシュ
息切れしようが走るぞ
いっせえので　ダッシュ
[illegible]り　1年越しの文化祭まで

秋の夜長に

秋の夜長に一人歩きしてた
夢もないのに追っかけようとしてた
一人ぼっちでつまずいて　ころんだ
でも　消えていくのはいやだから
ただ　Day and day
　　to Walk and walk
まわりばっかり輝いて映った
人目を避けて裏通り歩いた
いつごろからか怯えだし　迷った
でも　消えていくのはいやだから
ただ　Day and day
　　to Walk and walk

時は流れてこんなになった
知らないうちに　おとなにさせられた

町の空き地の片隅で　歌った
意味もないのにくりかえし歌った
人が通りで振り返り　笑った
でも　消えていくのはいやだから
ただ　Day and day
　　to Walk and walk

時は流れて小雪が舞った
胸を張ろうとひざをたたいた
ああ　輝いた日　取り戻してみせよう
ああ　駆け抜けた日　取り返してみせよう

もしも　君が　今
そばに　いたらな
どんなに　無鉄砲なことも
できただろうな
今は　ひとりで　握り締めてる
君の分まで

時の波間に流されようとしてた
一人去っては　また一人降りてった
冷える心に鍵をかけ　おさえた
そう　消えていくのはいやだから
ただ　Day and day
　　to Walk and walk

時は流れて大人になった
夢を探ろうとひざをたたいた
ああ　輝いた日　取り戻してみせよう
ああ　駆け抜けた日　取り返してみせよう
ああ　輝いた日　取り戻してみせよう
ああ　駆け抜けた日　取り返してみせよう

道の上

けものみちが　あったよ
ひょろりと細くて長い道
ぼうぼう　お山かきわけて
つるりと　道が通ってた

女の子が出てきたよ
ちょこんと黄色のベレー帽
てくてく　小道かけながら
元気に　おてて　ふってたよ

ランラン　ララ
そして道の上には
ランラン　ララ
黒い影法師ふたつ
ランラン　ララ

けものみちが　とだえたよ
ふわりとお帽子とんでった
びゅうびゅうお山に消えてく
あわてて　はっぱちぎったよ

ランラン　ララ
そして　道の上から
ランラン　ララ
ひとつ影法師消えた
ランラン　ララ

ランラン　ララ
だけど　暗くなるまで
ランラン　ララ
ずっと　はっぱちぎったよ
ランラン　ララ

ハイスクール ディズ

Just too late too sad
君ともう会えない
Just too late too sad
二度と戻れない
Just too late too sad
時を待とうか
Just too late too sad
そんなこと何度も考えた　lonely day

宿題に手がつかず　胸騒ぎの夜
やりきれず　外に出て　月をながめてた
忘れてたはずの思いが　胸をよぎる
思い出すのはなぜかあの日———
so, High school days

一時間目のベルが鳴り終わる
Rin gon Rin gon
階段をかけて来る足音　いつも君
ろうかで立ち話
休み時間のベルが鳴り終わる
Rin gon Rin gon
遅刻寸前　いつまでたっても終わらない
君との立ち話

君からの手紙　久しぶりにひらいて
一つずつ読み返し　時をなぞってた
断ち切ったはずの思いが　胸をよぎる
君のこと信じてたあの日———
so, High school days

6時間目のベルが鳴り終わる
Rin gon Rin gon
相談事に毎日来ては　悩んでた
二人で　遅くまで
卒業の日のベルが鳴り終わる
Rin gon Rin gon
これからも友達でいようと誓ったのに
心から誓ったのに

Just too late too sad
君ともう会えない
Just too late too sad
二度と戻れない
Just too late too sad
時を待とうか
Just too late too sad
そんなこと何度も　思った夜

15 to 16

国道沿いのいつものお店
僕らのたまり場
カバンからタバコを取り出して
こっそりふかした

ヨシオと２人いつものお店
僕の好きな店
放課後になりゃいつでもいるよ
僕らだけの店

ah スリル満点
先生に見つかったらどうしよう
“どうも”ってな具合で
全駅で逃げ出してやろう
ほら横のヨシオは
このごろびびり出してきた様子
いいよ僕は一人で15才でいるからね

受験地獄のいつもの授業
まるで聞く気もない
ある日ポツリとヨシオが言った
“俺は医者になる”
あ一僕もそろそろ
“未来”を決めなくちゃいけないかな
遠い未来のことがすぐ目の前に運ばれる
どうも大学なんて
あんまり僕にむいてそうもない
いやだ僕はまだまだ15才でいるからね

ああ　いつの間にやら
一人ぼっちで取り残されたよ
“どうも”ってな具合で
素直に加われそうもない
そうかといって
別に特技が何かあるわけでもない
いいよ　夢を探して16になるからね

少年の夢

一番になりたかった　負けたくなかった
一番になりたかった　負けたくなかった
一番になれないってわかったとき
全てがウソをついていると思った
Oh, No Oh, Boy Oh, God
No,こんなはずない
全てがウラをかいていると思った
Oh, No Oh, Boy Oh, God
とんだ昔のできごと

一番になれなかった　負け犬になった
一番になれなかった　負け犬になった
あきらめるしかないってわかったとき
全ての意味が消えていくと思った
Oh, No Oh, Boy Oh, God
No,こんなはずない
全ての意志が消えていくと思った
Oh, No Oh, Boy Oh, God
とんだ昔のできごと

一番になりたいなんて　思わなくなった
一番になりたいなんて　思わなくなった
そんな自分の気持ちに吐き気がして
全てにウソをついていると気づいた
Oh, No Oh, Man Oh, God
No,こんなはずない
全てのウラをかいていると気づいた
Oh, No Oh, Man Oh, God
とんだ最近のできごと

とんだ昔のできごと
とんだ昔のできごと

性差別

百も承知だ　百も承知だ　性差別

時代は移り　戦後も遠く
男女平等と騒がれて
晴れて女子大　主席で卒業
"よっしゃやるぞ" と思ったら———

上っ面だけ雇用機会均等法
でるクイはすぐ打たれてしまうの
tomboy
ワクにおさまるタイプじゃないのよ
sorry
"女だから" とバカにしないでよ
Let's go Tomboy
Go go go!

"強い女の代名詞ね" と
言われ続けて　22年
夢は大きく　一流企業
みごとパスした暁は———

アホな男がどんどんスピード出世
だけど私は毎日お茶くみホステス
スケベ上司に付きまとわれても　忍耐
ああ　私やっぱり差別されてるわ
Let's go Tomboy
Go go go!

あろうこともこの私めが
不倫の波に巻き込まれ
いかに今まで "女" の文字に
甘えてきたかわかったの———

"原始、女は太陽だった" と　らいてう
だけど彼女も男で挫折よ　論外
[illegible]するのも悪くはないけど
Hey girl
尽くすばかりじゃいずれは挫折よ
Let's go Tomboy
Go go go!

百も承知だ　百も承知だ　性差別
百も承知だ　百も承知だ　負けちゃだめよ

空の下

空の下

青い
高い
遠い
白い空

いつも
僕の
前に
見える空

気持ちだけを頼りに
空の下でおどろう

青い
高い
遠い
白い山

いつも
僕の
前に
見える山

気持ちだけを頼りに
山の上でおどろう

青い
長い
深い
白い川

いつも
僕の
前に
見える川

気持ちだけを頼りに
川の中でおどろう

気持ちだけを頼りに
空の下でおどろう

れんがの学校

はねっかえりの小さな僕
いつも君のそばにいたっけ
とびっきりのやり手のきみ
いつ見ても輝いてたっけ

お昼休みは　人だかり
密かな　孤独がはじまる

負けん気だけの強気な僕
いつも君を気にしてたっけ
あまのじゃくな　僕のあいづち
いつも君は　聞いてくれたっけ

日増しに君は　人気者
密かなあせりがはじまる

毎日朝がつらかった
君と会うのがつらかったけれど
今日こそ素直に話しかけてみるぞ

れんがづくりの学校
日だまりポカポカ僕の場所
君と出会えた学校
そこから僕らは歩いてた

あせりながらも　目立ちたくって
わざと飛び出しグループ作った
君をよそ目にはしゃぎまわって
なぜかポッカリさびしくなった

それでも君は　自然体
密かな悔やみがはじまる

毎日朝がつらかった
君と会うのがつらかったけれど
許してほんとは友達でいたいよ

れんがづくりの学校
日だまりポカポカ僕の場所
君と出会えた学校
そこから僕らは歩いてた

ムーミン

押し寄せてくる波に　負けそうなときは
そっと僕に　耳打ちしてね
どんなになさけない　弱音だろうと
僕でよければ　聞いてあげる

いろんなことがある
いろんなことがある
いろんなことがある
でも
僕と君は　ここにいる

歩き疲れて一人　泣きそうな夜は
そっと僕に電話をしてね
どんなに凍えそうな言葉だろうと
僕でよければ　聞いてあげる

泣きたくなる日もある
泣きたくなる日もある
泣きたくなる日もある
でも
僕と君は　ここにいる
僕と君は　ここにいる

タッチ交代

たまらなくつまらない女の話はもうたくさん
いきつかない汗かかない
てんでばらばら燃え尽きない
夫婦げんかもいい加減
どうせやるならパッとやりな
やる気もなけりゃ腕もない
どうしようもなきゃやめちまえ

たまらなくつまらない
野郎の話はもうたくさん
ものも言わなきゃ知恵もない
黙りこくっただるまさん
女も欲しいが毛もほしい
今日もぬります 不老林
やるせない やりきれない
こんなの人生じゃない

僕らは一番星だ　タッチ交代　今から本番
君らも加わらないか　タッチ交代
まかせちゃだめだぜ
僕らは一番星だ　タッチ交代　今から本番
君らも加わらないか　タッチ交代
びびらずやろうぜ

たまらなくつまらない 金の話はもうたくさん
意味もない意志もない 気持ちよければいいじゃない
右にならえで並んでる 僕も私も皆兄弟
くさります くたばります
どうでもいいんじゃないの

たまらなくつまらない たまらなくつまらない
たまらなくつまらない たまらなくつまらない
たまらなくつまらない たまらなくつまらない
たまらなくつまらない たまらなくつまらない！

僕らは一番星だ　タッチ交代　今から本番
君らも加わらないか　タッチ交代
流れちゃだめだぜ
僕らは一番星だ　タッチ交代　死ぬまでやろうぜ
君らも加わらないか　タッチ交代
タッチ交代　タッチ交代　うまくやろうぜ

東京少年
TOKYO-SHONEN

▼東京少年ファンクラブ〝東京ants〟会員募集中。☎03−499−7009（HIP LAND F、C、PRODUCTS）

PROFILE

東京少年（笹野みちる）　1967年10月30日京都府向日市で生まれる。3歳の時、ピアノとバイオリンのお稽古開始。イヤイヤながらも高校3年まで続けてしまう。6歳、自宅茶室の土壁全面にウルトラマンを描いてきつく叱られる。13歳、中学1年、あだ名は「ツル」。ビートルズにのめり込み音楽に開眼。文化祭バンド「タムム・ボム」結成。ビートルズ、デュラン・デュラン、P−L等のコピーで校内1の人気バンドとなる。19歳、大学1年。同志社大学経済学部に入学。「タイム・ボム」U2のコピーバンドに変身。ライブハウス出演中、スカウトされる。バンド「東京少年」に参加。20歳、単身上京、11月21日アルバム『東京少年』でデビュー。バンドメンバーは、手代木克仁（G）、中村英夫（B）、水上聡（Key）、ドラムスはサポートで矢壁アツノブが参加している。

SOMETTI
'S ROUGH

think about SoMETTI'S
DRAWING and GODHAND
BUHIBUHI
BUHIBUHI
PATIPATI
ROUGH!
patipat
Welcome
ミクロペン
〈油性·極細〉
KORE GA NAI to
SHIGoto GA DEKINAI!!
by SoMEｻｻI © 1988-9
Tombow

STYLE
THE STYLE
BLACK CATS EYE!
ROCK
SOMETTI
STYLE

HEAD BUTT INC
PHONE
FAX
486 5857
I'd like to make
sept.

ART DIRECTOR
HEAD

SPECIAL ISSUE

PATI▼PATI 読本

『パチ▼パチ読本』いかがでしたか？　楽しんでいただけたでしょうか？『パチ▼パチ読本』はクリエイターたちの真面目な、遊び場です。自由な発想、自由な表現を応援します。今回はその一部分だけ。小説あり、イラストあり、落書き、漫画だってありのなんでもあり。じゃあ、また、いつかお逢いしましょう。

以心伝説

I KNEW IT RIGHT AWAY BY TELEPATHY

1988の伝説・希望を唱えるパワーが同じ波長をあわす者同士であれば、言葉にせずとも思いが伝わる事がある。そんな古い言い伝えが、実は本当に身近に起きるという事に、多くの少年・少女が気付いてしまった。その「以心伝心」を習得して以来、人はとても、素直になったという。

PHOTO●NAOTO OHKAWA　GORO IWAOKA　ATSUSHI UEDA　COPY●KYOKO SANO

HIDEAKI MATSUOKA

LONG INTERVIEW

松岡英明にとって88年は忘れることのできない年になったはずだ。

「色々あったけど、良い年でしたって、言えちゃうんだよね、やっぱり」

という彼の振っ切れた笑顔は、[illegible]身につけていることを[illegible]している。その過程は、これから先読んでいただくとして、私が彼に抱いた一年の印象はこうだ。

礼儀正しい悪戯小僧、[illegible]現る

〔初日の出・成人[illegible]〕

「1月1日、初日の出を拝みに富士山に登りました。親戚のお兄ちゃんがね、車で連れてってくれた。山で初日の出を見るのは生まれて初めて。しかも富士山だなんて縁起がイイこと、イイこと。その御利益で88年は良い年になったんじゃないかな」

1月15日、成人の日。

「結局、成人式には出られなかったんだけどね。当日は、たしか、『ミュートマ』のビデオジョッキーの仕事が入ってたんだよね」

成人式、出席してみたかった？

「うん。行きたかったよー。だって、横浜は文体（文化体育館）なんだもん。おまけに、いんぐりもんぐりのコンサートがあったらしいし。彼らとは昔っから仲良しだから」

晴れて成人になった感想は？

「ちょっと、その時期の取材によく訊かれたんだけど、あんまり実感ないんだよね」

これで堂々とお酒が飲めるとか。

「うん。だけどその前から僕、とがめられなかったから（笑）」

でも、お酒も煙草もやらない。

「なんとなく、好きになれないの。ウチの親はウルサかったんだけどね」

そして1月には「VIRGIN TRIANGLE」ツアーを東京・名古屋・大阪の3ヶ所で開催。

「あのライブのときから、歌をうたうことを真面目に考えるようになった。それまでは、ライブ自体のことで頭がいっぱいだったんだけど、[illegible]ってことに目覚めちゃってね。つまり、音楽の基本を身体で実感したってこと」

そのきっかけは何だったんだろう。

「逆に言えば、ライブの最中に、アッ、歌を忘れてる、って気づいたからかもしれない。フッと気がついちゃった」

88年のテーマは何だったか。

「今年こそ[illegible]しないこと、積極的にテレビに出ること。売れたい、ってことよりメジャーな存在感を身につけたかった」

ファースト、セカンドである程度確立した松岡英明の世界と、実際彼が目指すところの世界が微妙にズレてきているような漠然とした不安感もあったらしい。

「もっと自分の力を出していきたいという欲求と、今の自分の実力との葛藤に悩んでいた時期だったかもしれない。それで、いまは吸収する時期なんだって思うようになった」

「87年の12月に出した『VIRGINS』が、イメージとしてついてまわってくれるのは、自分としても嬉しかったし、色んな人が『VISIONS of BOYS』に続く名作ができたね、って言ってくれて勇気づいたというか。『ヨシッ！』っていう気分でスタートできたのもそのせいかもしれない」

〔甘いバレンタイン・デイ〕

「バレンタインデイにあんなに沢山チョコレートもらったの、初めてだったし、なんかこそばゆいような幸せのような……」

ちゃんと食べた？（笑）

「ちゃんと全部食べましたー」

甘いモノ、好きだったけ？

「1、2個なら好きだけど、でも、全部食べた」

ホワイト・デーのお返しは？

「ホントは、2月14日に好きな相手にチョコレートを[illegible]お返し、し[illegible]だけど、僕、ファンのコに沢山もらったから、テレビの公開番組に来てくれたコにアメ作[illegible]お返ししたよ。自腹切って、いっぱいアメを買い込んじゃって」

優しいんだー。

「うん（笑）」

〔ジャスト・ポップ・ステップ・アップ〕

「うん、3月はアルバム用の曲作り期間でもあったんだ。そういえば」

そして、4月から放送が開始した『ジャスト・ポップ・アップ』のナビゲーターとして起用されることが決定し、撮影が開始される。

「確か、去年の12月に『VIRGINS』で『ヤングスタジオ101』に出演したとき、NHKのスタッフの人が新しい音楽番組を作りたいって言ってたんだよね。どうも、そのときから候補には挙がってたらしくて。スタッフの人達、僕のことチェックしてたみたい。なのに一人でパクパクしてたんだよね（笑）」

その頃は、いまに比べてテレビ・カメラにも慣れていなかった。

「少年隊なんてカメリハもポンポン終わっちゃうのに、僕だけ『スイマセン、もう一回お願いしまーす』（笑）僕って、そんなに下手なのかなあ、内心落ち込んでたりして」

『ジャスト・ポップ・アップ』はNHKということもあって、全国ネットでオン・エアーされるメジャー・プログラム。そのレギュラーとなれば、一挙に知名度もUP！

「やっぱり、今年初日の出に誓いをたてたことが叶ったわけだから、かなり嬉しいものがあったよね。でも、アーティストとしての方向性を考える上で不安はあったんじゃないかな。僕は手離しで喜んだけど、僕のスタッフはそうでもなかったかも（笑）」

テレビという媒体で自分をどうアピールしていくか考えていたのだろうか。

「そう、僕って、実戦主義だから、頭の中でこんなことしてみよう、こんなカッコイイことやってみようって考えても、いざ現場になると全然別モノなんだよね。1回目のときは、さすがに緊張しちゃったしね」

「ただ、レギュラーだったから、自分のイメージをうまく連動させていくのには良かったと思うんだ」

彼の役割は単に司会・進行役に留まらず、ミュージシャンへのインタビューもこなさなければならない難しい側面もあった。

「番組の内容自体、前例のないものだったしね。でも、僕のしたことって、ほとんどアフ

以心伝説
I KNEW IT RIGHT AWAY BY TELEPATHY
HIDEAKI MATSUOKA

以心伝説

I KNEW IT RIGHT AWAY BY TELEPATHY

HIDEAKI MATSUOKA

LONG INTERVIEW

このノリで自分がきいてみたいことを素直にきいてただけなんだよね。まあ、僕が聞き役なのに反対に突っこまれちゃったこともあったけど(笑)」

それにしても、ミュージシャンなら誰にでもできるというものではないはずだ。そこが彼のキャラクターの強味でもある。

「廻りの人が、本番前の雑談だろうと思ってたら、シッカリ本番だったりしてね(笑)そういうノリのオシャベリが随分ありましたね」

〔ワープロ・横浜フラッシュ〕

●

いよいよ始まったサード・アルバムのレコーディング。詞がなかなかできなくて、思いっきり煮つまっていたが、その突破口になったのが一台のワープロ。

「買った日付まで覚えてるもん。それから、僕にとって人生を変えた一大イベントがあったんだよね」

それは、光と映像のイベント“横浜フラッシュ”。

「その日、家に帰って『以心伝心』ともう一曲をワーッと書き上げちゃったというくらい。もう一曲はまだ発表していないんだけど、スタッフによると『以心伝心』の100倍良い曲とウワサされてる(笑)今度、出しますから、お楽しみに」

件のイベントにワープロ購入ではずみがついて、実際詞が書けるようになった。ノートサイズのワープロは、彼にとって「即戦力の機材」である。

「パッと思いついたとき、入力できるっていうメリットが大きいよね。書くスピードや詞の内容そのものは変わんないけど、電車の中でもどこでも思いつくのはイイな(笑)自分の趣味と実用が上手くシンクロした例でしょうね」

とはいえ、まだ打つスピードは遅いし、使える機能も半分位しか知らない。

「普通の人はマニュアルどうりに使いこなすんだろうけど、僕って自分が使うことしか覚えようとしないタチでね。計算機とか図形とか色々使えるらしいんだけど」

〔ストロベリー・パフェには目がない〕

「自分の音楽に対する長期的なビジョンを考えさせられた時期でもあったから、スタッフともいっぱいケンカしたね」

アーティストにとって三枚目のアルバムは、ターニング・ポイントになる場合がままある。すでに“新人”というわけではないし、次のステップに踏み出せるか否かの重要な分岐点といえるのだ。

「例えば、ストロベリー・パフェがいますごく食べたいとするじゃない。だけど、もってるお金がギリギリしかないとしたら、今無理して食べるよりも、ちゃんとお金もってる時に食べたいという考え方。そこでけっこう葛藤があったんだ。僕食べたくてしょうがないから気がそっちにいっちゃってたんだろうね」

いまはその時期じゃない、ということに気がついた。焦りは禁物ということだ。

「それって当り前なんだ。お金もってないから食べれないのは当然なわけ。だから、今回は食べられるだけのお金を貯めるための何かをしようと。結果、正解だったと思うけどね。そのときは気持ちばかり先走ってたから、悩んだり、ぶつかったりしてたんだ」

“ジャスト・ホップ・アップ”で、新しいファンも急増。状況は良い方向に進みつつあった。時の運に乗ることも必要なときだった。

「僕の基本は何度リフレインしてもしすぎってことはないんだと思った。新しく僕のファンになってくれた人のためにもね」

『以心伝心』というアルバム・タイトルがいま考えれば象徴的ではある。

〔ロンドンのピーターパン〕

レコーディングが終了したのが5月3日の午前5時。その日の午後、ロンドンに旅立ったのだから、まさにギリギリ・セーフ。

「さすがにもうロンドンはムリかなって思ったもん。だって前日にまた最後の詞、書いてたし……」

瀬戸際の強さというか、背水の陣のパワーが彼には備わっている。

ロンドン行きはジャケット撮影のためというのが“表向き”の目的だったが、ブリティッシュ・ミュージックの息吹を受けた彼に一度本場を見せてあげようという“親心”が働いたのも事実。

「いまだから言うけど、皆はとっくに知ってたのに僕にだけ秘密にされてたの。5月にデビューして初めてお休みがもらえることは知ってたんだけど、スゴクイイことがあるよ、としか教えてくれないんだもん。意地悪でしょ」

番組収録のため一週間の短い旅ではあったが、長い間思いを馳せてきた憧れの地だっただけに感激もひとしお。南廻りのハードな日程だったとはいえ、得るところが大きかったようだ。

「一番思い出に残っているのは、ケンジントン・パークにあるピーターパンの像へひとりで行ったことと、日本に帰る日の朝、タクシーに乗ってやっと辿り着いたときは、何か大冒険をしたような気分でした」

ドーバー海峡の近くにある古城でのフォトセッションも楽しかった。

「撮影を予定してた場所にはなるべく早く行かなきゃダメだってことも“吸収”しました。だって、門番の人、自分が早く帰りたいもんだからさっさと閉めちゃうんだもん」

デュランデュランの初コンサートが行われたハマースミス・オデオン、ロンドンのラフォーレ“ハイパー・ハイパー”、キングス・ロードにウエスト・エンド。大好きなブリティッシュ・ミュージックの匂いを伝える街だった。

〔以心伝心・全国を駆け巡る〕

ニューアルバム『以心伝心』のプロモーションのために、全国キャンペーン。どの街へ行っても、目ざといファンに声を駆けられる状況になってきた。

「“ジャスト・ホップ・アップ”の反響を肌で感じたというかね。だけど、今だって堂々と電車に乗ってるけどね」

アルバムの完成と渡英で、それまでの漠然とした不安が雲が切れるように晴れたという。

「ひとつひとつ形にしていくうちに不安も減

以心伝

I KNEW IT RIGHT AWAY BY TELEPATHY

HIDEAKI MATSUOKA

キュートにポップにやっていく。ずっとね、きっとね。

ATSUOKA SMILE

こだわりって人間を輝やかせる。夢でも何でも捕まえて、

1988 HIDEAKI M

AM
HELLO & GOOD BYE
YELLOW BRICK ROAD
以心伝説
I KNEW IT RIGHT AWAY BY TELEPATHY
HIDEAKI MATSUOKA

LONDON DRE

今年日本を脱出した人の数は、またも新記録を達成したとか。そしてまつぼーも、初体験したのです。5月3日(火)から8日(日)までのロンドン旅行…何故英国まで行くのにたった6日しかないの…賢明な読者諸君なら、ピンとくるだろう。毎週月曜日、彼はカメラに向って「ジャスト ポップ アップ」と顔を撮らなければならないのだ。そのため、たった6日…しかも南回わり、片道23時間もかかる。アーティストがこんなメに会うのはわりとめずらしいかもしれない。(笑) しかしそれでもロンドンはロンドン、楽しいロンドン愉快なロンドン、である。うかれ集(つど)ったのはカメラマン大川直人氏、エピック湯川宏一氏、マネージャー(当時)野村達也氏、そしてパチ▼パチ山崎恵理子。そう、つまりたった5人の6日間ロンドン南回わりの旅だった。

今日は、ここにあの日あの時のウラ話を披露しようと、湯川氏と野村氏がやってきてくれました。さて。半年前のあの興奮の1週間を、再現!!

[illegible]材を運ぶために借りた荷車に乗って、喜ぶまつぼー。

5月3日 11：30エピック集合

湯川　朝までトラックダウンしてたんだよね。

野村　アルバム『以心伝心』。危うく『発売延期』ってタイトルになるところだった…。(笑)

山崎　でも成田にはえらい早く着いちゃったんだよねぇ。

湯川　そうそう、それでごはん食べた! 俺肉うどん喰ったー! で、まず香港行きました。

山崎　湯川さんと大川さんビール飲んでたね。

湯川　そ、日本円で買えた。

山崎　あ、そうなの?

湯川　そ。そこから始まってもう、飲む飲む飲む。

山崎　で、次が、

野村　バーレーン。そこでトランジットカード失くしたのが…

湯川　俺だ俺(笑)。夜中にバーレーンに着きました。もうフラフラ状態、機内清掃するから出てください…で、オレンジ色のトランジットカード貰って外に出ました。そしたらバーレーンのお土産がすごい。なんと「金」(笑)

山崎　壁にかかってる写真が砂漠!

湯川　警備員、機関銃持ってる!

ロンドンのマクドナルドでも、もちろん笑顔でビッグマック。

山崎　なのにまつぼーひとりでトイレ行った。

湯川　そんでしばらくして飛行機戻ろうとしたら、湯川トランジットカード失くした!

I'm sorry I lost…all right?って…。

(笑)

This is my passport!!(笑)

よく通してくれたよね。

野村　撃たれなくてよかったですね。(笑)

湯川　今でも持ってんだ、見る? ホラ。(ファイロファックスから取り出す)あのあとズボンのポケットから出てきたの。

山崎　いかに緊張していたかがわかります。

▼機中では、いろいろな飲み物が選べます。「Milk」と言ったまつぼーに、まっかなトマトジュースが手渡された時は、さすがに笑うしかなかった。「[illegible]んだことない。だってトマトも嫌いだもん」

読者プレゼント用に、撮ったポラロイドにコメントを書く。

5月4日 ロンドン着

湯川　ひと悶着。

山崎　そう、税関!

野村　通れない人がいた!(笑)

山崎　5人中3人(笑)

湯川　私が言いましょう。松岡のその時の格好言いましょうか。赤のコート、サングラス、ウォークマンで首は完全にリズムをとってる。そのまま、税関進みます。相手はブリティッシュ・イングリッシュでなんとかかんとかあなたは何をしてる人ですかッ! 松岡こっち見る、わかってない。HELP ME状態。

湯川　その時まさに通ろうとしてる…松岡ウォークマンしたまんま。その途端にベルが押されて係員が大[illegible][illegible]らを取り囲んでしまいました。君はいくら持っている? TC120万ありました。いつ帰る? …3日後。3日で120万使いきるんですか? …ンー。(爆笑)

▼その時まつぼーのウォークマンに誰のテープが入っていたのか、彼は決して口を割りませんでしたが、心なしか[illegible]が赤くなっていたみたいし。

5月5日 郊外ロケ

朝8：00ロビー集合。遅刻者なし。

ロケバスはまずマクドナルドを目差し、それから一路「BODIAM城」へ向かいます。

5月8日成田にて、旅の終わりのハイ・ポーズ!! お疲れ様。

野村　高[illegible]道路にそって羊が放牧されてた…。

山崎　いい天気。

湯川　で、ボディアム[illegible]いたら駐車場に大型バス4台!

山崎　フランスから来てた修学旅行。

湯川　あとおばあちゃん達。でもまあ、午前中で帰るだろうって言われて、機材をお城の中に運んだんだよね。耕[illegible][illegible]みたいなの貸してくれて。

山崎　でもお堀があって、もしかしたら機が落ちるかもしれないって言われたから。カメラだけ降ろしてもらったんだよね。万が一の事考えて。

野村　まつぼーと。(笑)

野村　そこで発電機まわすまわす。ブルブルブルブル。

湯川　それで野村さん衣装にアイロンかけた。

野村　そうそう、ロンドンまで行ってアイロンかけるとは…(笑)

湯川　一生残るでしょう。(笑)

野村　で、あっちこっちで撮ってから、ドーバーの海へ…あっ、思い出した。まつぼードーバーで3歳位の子供泣かしたの。

山崎　何したの。

野村　単にあやしたら怖がって…。

湯川　あ、俺も思い出した。ドーバー港がストしてたの。トラックが5km位ずらーっと並んでて、あんなの生まれて初めてみた。

ビデオを撮っているのはアクマくんこと、野村マネージャー。

LONDON DREAM HELLO & GOOD BYE YELLOW BRICK ROAD

以心伝説

I KNEW IT RIGHT AWAY BY TELEPATHY

HIDEAKI MATSUOKA

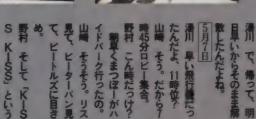
山崎　きれーだったよねぇ。
湯川　そんで菜の花畑に、陽が落ちる前にって、急いで行って撮ってた。
野村　そしたら鉄砲の音!!（笑い
湯川　ダーンッ!!（笑）
野村　恐いしくさいしで、スタッフもうロケバスに逃げの体勢。
湯川　でも大川厳しい。まつぽー、もっと奥行け、もっと奥行け！ ひとりで畑の中に入っていったら…
野村　ダーンッ！（笑）
湯川　鉄砲の音。まつぽー置き去り状態。間違って撃たないで!!（笑）

ロケが終って、今日の夕[illegible]メニュー[illegible]英語だよ。

5月6日
市内ロケ、10時半集合。まつぽー11時登場。
山崎　まずはロンドンの原宿、コベントガーデンへ。
湯川　着いた途端、みんなの表情が変わった。撮影しだしたけど…。
山崎　オーゲーもういい。買い物TIME。1時間後にここに戻って来よう。（笑）
湯川　1時間後、ひとり大荷物。
野村　誰だ？

一面の菜の花畑。人もいない。空気が冷たい。少し不思議。

俺だよ。いやぁ店の人と仲良くなっちゃって。何やってる人かって聞くから「アイムロックミュージシャン！」って。
湯川　この人、マネージャーです。（笑）
山崎　で、お昼ごはんにしたの。
湯川　スパゲッティ。注文してる間に銀行に行ったの。
山崎　まつぽーといっしょに。

全ての取材が終わって記念撮影。オールキャストでキメてみた。

湯川　まつぽー換金する時、もう出す出す。お金出す。パスポート出す。
山崎　なんで？
湯川　しゃべんないの。
山崎　あ、そ。で、キングスロードに次、行きました。まず「KIMWILDE」のポスターの前で撮りたーいってお坊ちゃまが言って。
▼交差点でワープロを打っている写真が7月号にありましたが、あれはキングスロードとビューフォートストリートの交差点。
湯川　5時頃終って、7時にホテル集合で解散。
野村　まつぽーと僕は、キングスロードに残って買い物してました。
▼この時にまつぽーが買ったくつが、「以心伝心TOUR」ではいていた黒と白のまあるいおデコぐつ。その他えらい大きなジーンズのジャケットとパンツ、セーラーカラーのシャツ等を買い込んだ帽子。有名レコード店「Virsin」もチェック。

本当に国際電話してます。ディレクターと打ちあわせ中。

もう■とは帰るだけだよーん。23時間かけてだけどさっ…。

湯川　そして夜はミュージカル「FOLLIES」みんな感激、満足しまくり。
山崎　終わったあと、最後の夕食。日本食「一休」ってお店へ行きました。
湯川　オーダーストップ寸前に行って大量に頼んだから、来る来る。
野村　納豆、さしみ、盛りあわせ。まずかったなぁさしみ。黒いの。
湯川　黒鮪（笑）
山崎　あるかそんなもん。（笑）
湯川　で、帰ります。歩いていたら、いっしょにいたコーディネーターが友達にばったり。「ヘイ!! 近くでパーティやってるから来ない？」
山崎　行きました、ディスコ。
湯川　YMCAの地下もと体育館。選曲バッチリ！
山崎　まつぽー即座に踊る踊る！
湯川　サングラス状態。
山崎　でもあんまりいませんでした。帰ろうとしたけどタクシーはなくて、ピカデリーサーカスからバス。
野村　ヘンなニオイ！
湯川　そうそう、ヘラヘラ笑ってる奴がいる。
野村　煙モクモク

湯川　で、帰って、明日早いからそのまま解散したんだよね。

5月7日
湯川　早い飛行機だったんだよ、11時位？
山崎　そう。だから7時45分ロビー集合。
野村　こん時だっけ？ 朝早くまつぽーがハイドパーク行ったの。
山崎　そうそう。リス見て、ピーターパン見て、ビートルズに目ざめ。
野村　そして「KISS KISS」という名曲を生みました。

大川直人カメラマン、妥協を許さない指示がとびます。

HIDEAKI-MATSUOKA

僕は若きサンタクロース。今年はいったい何をきみにプレゼントしようかずっと悩んでたんだけど、今年は、このお話を贈ることにしたよ。タイトルも、もう決ってるんだ。タイトルは

100年後のきみに

(これは遠い未来、そう、今から100年も先のお話です)
今日は12月23日。X'masEVE EVE。クリスマスに備えて、[illegible]は世界の各地をいろんなプレゼントを集めにソリに乗って飛びまわっていた。最近めっきり子供たちの[illegible]が増えて、背中にしょった白い袋もかなり重くなっていたんだけど、なんともそれが皮肉にも文字通りの命取りになってしまったんだ。僕は誤ってバランスを崩し、今日[illegible]げたばかりのきみへの贈り物を入れた例の白い袋ごと、この青い空を真っ逆さまにダイビングを始めてしまった。[illegible]は今、地上10000メートルの上空にいる……。

「あーもう、まいったなぁ。今年はいったい何をプレゼントしよう?」
ひとりの少年が、骨董品屋の中をうろちょろと歩きまわっていました。
「何かお探しかな?」
いつの間にか少年の目の前に白いひげをはやしたおじいさんが立っていました。
「ええ、女の子にあげるクリスマス・プレゼントなんですけど、どんなものがいいかわからなくて」
その時、突然。光の粒子が彼を包んだかと思うと少年は、いつの間にか自分のベットの上にいました。そして、目の前には、さっきの白いひげのおじいさんがまだ立っていました。
「これはいったい、どういう事? 僕、どうしちゃったんだろう? 夢を見てるのかな?」
「…夢とは、いつの間にか始まり、けれど、いつか必ず終わってしまうものじゃ。反対に、欲望は、その最初はあっても、果てしがない」
「あっわかった。おじいさん、もしかして、サンタクロースでしょ?」
「おお、よくわかったな…。そうじゃ、きみに今日はプレゼントを持ってきたんだ。気に入ってもらえるといいが?」
「わぁ、すごい。素敵な時計……。そうだよ! サンタクロース。僕が探してた彼女へのプレゼントは、まさにこれだよ」
「おいおい、これはきみにプレゼントするんだぞ。それに聞いて驚いちゃいかんぞ。この時計は魔法のグランド・ファザークロック(むこうでは大きな柱時計のことをグランド・ファザークロックと呼ぶ)と言って、願い事を言うと、この時計が止まる時に、その願いをかなえてくれるんじゃよ。でも、長いこと待つんじゃないかなんて心配はご無用。この時計は、もう[illegible]いこと働いてきて、ちょうど今日でぴったりと止まってしまうんじゃからな。願いはすぐにかなうってわけじゃ。さて、何を願う?」
「え一本当?………でもやっぱりいいや。夢は自分でつかみたいし、それに、さっき、おじいさん言ってたじゃない。欲望は果てしがないって。だから、ひとつお願いしだしたら止まらなくなっちゃうか[illegible]しれないし」
「わしが言うの[illegible]なんじゃが、変わったやつじゃな、本当に何もいらんのか?」
「うん。だって、この時計くれるんでしょ?だったら充分さ。あってもやっぱり、[illegible]願いしたい事がひとつだけあった。この時計、別に魔法なんかなくていいから、女の子にプレゼントできるように『今日で止まっちゃう』っていうのを、どうにかして欲しいな」
「なんじゃ、そんなことぐらい簡単じゃよ。思いきってきみが生きてる間ずっと動き続けるようにしてやろう……」

「お客さん、お客さん、こんなとこで寝られちゃこまります」そう言われて少年はやっと目[illegible]ました。「あれ? ごめんなさい。[illegible]、いつの間に眠っちゃったんだろ?」
「あの、何か[illegible]探しですか?」
「あれ? さっきのおじいさんは?」
「……うちには年配の店員はおりませんが」
「……あ、そうですか……あのう、女の子にあげるようなクリスマスプレゼントを探してるんですけど」
「それでしたら、とっておきのがございますよ。どうですか、この時計なんですけど」
「あ、これ、さっきの時計」
「!?」
「いや、何でもないです」
「これはですね、お客さん、ちょっとした値打ちもんなんですよ。いや、[illegible]に値段は高くないんですけど、この裏に、作られた日が彫ってありまして……1967年の12月24日。ちょうどクリスマスなんですよ。で、ですね、本当か嘘かはあれなんですけど、英語で100年間動き続けるっていうことが書いてあるんです。すごいでしょ、だから、まぁ、あとだいたい80年ぐらいは動いてくれる計算になりますね」
「あっ、じゃあこれをください……。まったく、夢の中ではくれるなんて調子のいい事言っといて、結局は買わなきゃいけないなんて……でも、ありがとう! サンタクロース」

このあと少年は、時計をプレゼントした女の子と一緒に、なんと100歳まで幸福に包まれながら暮らしました。
そして、ちょうど100歳のクリスマス、グランド・ファザーズクロックは静かに目を閉じました。少年は少年というには白いひげをはやしていましたし、年をとりすぎていましたけれど、その年老いた少年は、目を閉じた世界の中で、少年の夢だったサンタクロースの姿になって80年も前の、そう、本当の少年だった頃の自分のもとへとソリを走らせました。もちろん背中の白い袋の中には、本当の少年に最高のプレゼントを入れて。なぜって老いた少年は、本当の少年が一番欲しいものを誰よりも知っていましたから。

[illegible]スピードを加速してものすごい速[illegible]で[illegible]下していた。なんせ10000メートルだからね。やっぱりちょっと怖い。5000メートル、2500メートルと落下して、僕はついにドシンと音をたててダイビングを終えた。でも……[illegible]は無事だった。あんな高いところから落ちたにもかかわらず、だ。きっと場所がよかったのだろう。そう、[illegible]落ちたのは……僕のベットの上だった。
そして僕は白いプレゼントでぎっしりの袋ではなく、白くて大きないつもの枕を背中にしょっていた。
若きサンタクロースから100年後のきみに、メリークリスマス!

1888年12月24日　サンタクロース

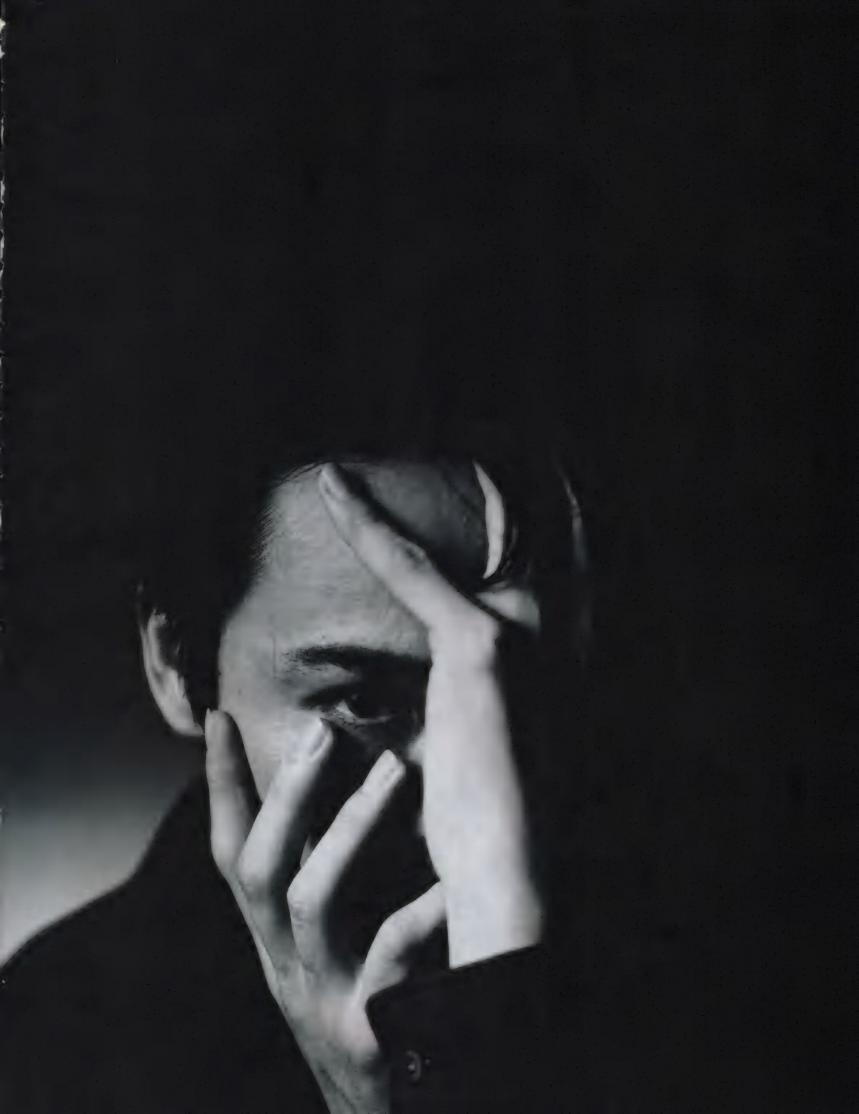
今年は一体、何をきみにプレゼントしようか、ずっと悩んでるんだ。もし、僕が何でも願い事をかなえるって言ったら、きみは、何を願う? それじゃ僕からも、100年前のサンタクロースに、そして、今のきみに、メリークリスマス!

1988年12月24日　松岡英明

HIDEAKI MATSUOKA

NOT FOR SALE

SPECIAL

MONOPHOBIA
KYOSUKE HIMURO

88年365日。氷室京介にとってもっともドラスティックな年が終わりを迎えようとしている。BOOWYから氷室京介へ。バンドという形態からソロに…。が、それはたんに、全体から一にあるということ以上の意味を持っている。"ひとり"それは、孤独という最も人間にとって苛烈な運命と友になることだ。88年。それは氷室京介の孤独とのひたすらクールな戦いのオープニングイヤーだ。

PHOTO●YOSHIAKI SUGIYAMA　COPY●TATSUYA MIZUMURA

MONOPHOBIA
KYOSUKE HIMURO

〝ひとりになることを恐れてはいけいない〞という。言うはやすし、行うは難しというのはこういうのを言う。〝MONOPHOBIA〞精神的な病気の一種で、日本では〝孤独恐怖症〞と呼ばれている。ひとりになることができない。ひとりでいることがとにかく不安になる。だが、人、それぞれに我に立ち返り、我をかえりみた時、〝ひとりでいることが、何もかもすべてが楽しい〞人などいない。それぞれがそれぞれの生きる営みの中で〝ひとりであること〞とささやかな戦いを繰り広げている。彼、氷室京介は、その〝孤独〞を友とする生き方を選んだ。その孤独は、あらゆる孤独の中でもっとも勇気に満ちた道を選んだものだけが勝ちとることのできる崇高なる輝きに満ちている。

MONOPHOBIA

KYOSUKE HIMURO

MONOPHOBIA

KYOSUKE HIMURO

MONOPHOBIA
KYOSUKE HIMURO

MONOPHOBIA
KYOSUKE HIMURO

PHOBIA
HIMURO

　氷室京介という新人シンガーと、彼が'88年に行なった様々な活動（や作品）について解析してみる、というのがこの原稿のテーマだ。
　誰かが一年間に渡ってやってきたことを、たったこれだけのスペースで語ろうとするなんて、かなり無理がある行為なのはわかっている。まして、相手は氷室京介である。日本の音楽シーンにかつてない形でひとつの頂点を極めたバンド、BOØWYを４月に解散。その事実を背景に、ひとりのシンガーとして新たにスタート。しかも、こちらの予想を遙かに上回るスピードとエネルギーで、彼はその後の活動を行ってきた。月並みな表現だけれど、氷室京介にとっての'88年は、まさに〝激動の年〟だったと思う。正確に言えば、ソロ第一弾のシングル「ANGEL」のリリースが７月21日だから、たった半年弱の出来事でしかないとはいえ、この中味の濃い時間をたったこれだけのスペースで……やめておこう。僕の行為がいかに無謀なものか、これ以上言いわけを書き連ねても意味がないよな。とにかく、始めてしまったのだから、続けてみることにする。サブ・タイトルをつけるなら「孤独の王は高らかに笑う」なんていうのがふさわしいんじゃないかと思っている。
「ANGEL」を始めて聴いたとき〝あ、こういうことだったのか〟と思った。ソロ活動に入る前、氷室京介にインタビューを行なっていた。その時彼は、最初のシングルは思いっきりシンプルでストレート。飾りの少ないプリミティヴなビート・ナンバーをやりたいと語っていたのだ。「ANGEL」はそうした彼の意志が、理想に近い形で具体化された楽曲だと思った。曲の中で重要なポイントを握っているギターにはチャーリー・セクストンを起用。これが、この楽曲のイキの良さに大きく貢献していると思うのだが、氷室はデモ・テープを作った段階で〝チャーリーあたりに弾いてもらえたなら……〟と考えていたという。スピーディーなリフを、独自のソリッドな音色で重ねてゆくチャーリーのギター。BOØWY時代にはそれほどでもなかったシンセサイザーが、ここではリズムのアクセントをつける重要な役割りで登場。押し寄せるビート感のようなものがBOØWYとは微妙に違う、タメとハネ方を持ったダイミナズム溢れるロックンロールに仕上がっている。おそらく、そのあたりを読んでチャリーを起用したのであろう、氷室のセンスはさすがということになる。
　もちろん、そうしたサウンド面の充実ぶりだけでなく、氷室自身の歌と言葉にもソロ第一作目にふさわしいものを感じることができる。〝臆病なオレを見つめなよ　ANGEL　今　飾りを捨てるから〟と、まるで決意表明ともとれるフレーズを、シャープな切れ味と独特有の色っぽさに溢れたシャウトでリフレインするサビのパートなど……。「ANGEL」は、氷室京介が〝ただ者ではない〟ことを早くも見せつけてきた、音楽シーンへのジャブのような作品に思えた。もちろん、セールス的にも大成功。チャート誌で初登場から連続で第一位という、圧倒的な強さで支持されることになる——。
　「ANGEL」のリリースからわずか４日後の７月25日。氷室京介は早くもオーディエンスの前に姿を現わす。
　彼の新しいコンセプト〈KING OF ROCK SHOW〉の第一弾。全国５ヶ所での、野外イベント・ライヴ〝DON'T KNOCK THE ROCK〟が、この日の札幌・真駒内陸上競技場公演を皮切りにスタートしたのだ。
　正直なところ、最初、僕にはこのイベント・ツアーが不可解なものに思えた。ソロになってからの作品はまだ「ANGEL」しか発表されていないのだ。もちろん、冒険的かつ積極的な活動として前向きに捉えることもできるし、もしくは〝夏・野外〟といった要素からもっと気軽に「お祭りみたいにヒムロックのライブで楽しめりゃいーじゃん」なんて捉えることだってできる。
　けれども、彼は（前記した活動に入る前のインタビューで）今度のステージは、かなりエンターテインメント色の強いショーをやってみたいと語っていた。結成から間もない新らしいツアー・バンドで、そうした展開はどこまで可能だろうか？　ハリウッド的（ディズニー的といってもいい）な意味でのエンターテインメント・ショーということなら、彼自身だけでなく演出、音響照明、効果といったスタッフワークの部分でも高度な水準のアイデアや技術を要求されることになる。まして、天候の良し・悪しが大きく影響する野外でのステージなのだ……。そうしたことを考えると、かなり無謀なツアーなのでは？　という懸念が湧くのも当然のことだろう。
　この夏のイベント・ツアーに関しては、僕はそのほとんどに同行させてもらった。そのプロセスや結果については、ドキュメント・ブック『DON'T KNOCK THE ROCK』の中に長いルポルタージュとして書いているので、ここで繰り返し述べるのは気が引ける。もし、詳細について知りたいと思っているなら、そちらを読んで下さるようお願いします。（って宣伝してるみたいだな。いや、ハッキリ言って、そうです。同じくＣＢＳソニー出版から発売されていますので……）
　強引に結論めいたことを言ってしまうとすれば、夏祭りとして捉えるなら最高でスリリングな刹那性を楽しむことができるライブだったと思うし、エンターテインメント・ショーとして捉えるならまだまだ荒けずりで完成度的には課題を残すものだった……ということになると思う。もちろん、ほとんどの公演地で雨にたたえられるという不運もあった。さらに言えば、氷室京介自身が〝いきなりこれまで

MONOP

KYOSUKE

とはまるで違ったパフォーマンスを見せつけてやろう！”というアプローチでこのイベント・ツアーにのぞんだというより、やはり夏祭り的な楽しさの中に、少しづつ新らしいスタイルを導入してみるといった形をとっていたということもある。

まだソロ・アルバムがリリースされていない以上、どうしてもBOØWY時代のナンバーがハイライトにならざるを得ないのは事実だった。しかし、それと同等・あるいはそれ以上に「MONY MONY」「SAFFRAGET CITY」といったカバァー、「ALISON」「Dear Algernon」といったナンバーで〈さらに広く・深くなった氷室京介〉を体現してみせたのも事実だった。

そして9月1日。いよいよアルバム『FLOWERS for ALGERNON』がリリースされた。これも結論めいたことから言ってしまえば、期待を裏切ることのない優れたボーカル・アルバム、というのが僕の率直な感想である。“期待を……”という部分を強調したのは理由がある。というのも基本的に『FLOWERS——』は、彼がBOØWYで培ってきた様々な〈音楽的財産〉を尊重して作られた作品だと思うからだ。これまでとは180°違う実験的なアプローチを行なったり、シュールなものやマニアックさに走ったりするのではなく、極めてオーソドックスなボーカリストのアルバムに仕上げている。もちろん、別の意味で“氷室京介の新境地”を感じさせる作品もあるわけなのだが。前記した通り「ANGEL」もそのひとつだし、（シンセによる）ホーンやストリングスを大々的にフィューチャーした「ALISON」「Dear Algernon」などのサウンド、そしてその中で見せる、より解放感を強くした彼の歌などがそれである。しかし、それにも増して僕が驚かされたのは、氷室の詩人としての非凡なセンスだ。たとえば「ROXY」。軽快なシャッフル調のリズムにのって、まず“ぬすんだ車で　シケた夜をブッ飛ばす”というフレーズが歌われる。ここだけをとれば、28歳の大人が作ったものとしては、およそリアリティに欠けると決めつけてしまうことだってできる。ところが、その後このフレーズに対をなす形で“狂ったフリして　シャレたピエロ演じるぜ”という一節を登場させているのだ。あくまでも“狂ったフリ”であり、決ってヒーローなどではなく“ピエロを演じる、というのだ。この曲は別にリアリティを追求するものではなく、あくまで“夢の中へ逃げ込む”イキなフィクショナル・ストーリーなのだ。絶妙に〈演技〉であることと、実は大人である〈テレ〉を挿入することで“ぬすんだ車——”の一節は作り話しとしてのリアリティを持ち、がぜん輝き始める——。さらに「TASTE OF MONEY」。これは氷室が一貫して持ち続けている矛盾したシステムへの憎悪と、それゆえのアイロニー感覚——この2つが見事、洗練されて形になった作品だ。リクルート疑惑を持ち出すまでもなく、献金・賄賂はあたりまえ。政治家みずから『正直者はバカを見ていなさい』と“言って下さって”いる時代である。氷室はあの事件を題材にこの曲を作ったわけではないだろうが、“ありがたい話だぜ”“だんだん〜〜〜アタマにくるぜ”と歌われるこのナンバーは実にタイムリー。1988年という年を象徴するような“印”が入った曲として、僕の記憶に強くインプットされそうだ。

さて、そんなアルバムを引っさげて氷室京介は同タイトルの秋のツアーに突入した。10月4日・福岡国際センター、10月30日・新潟産業会館などで彼の新らしいライブを観ることができた。ある種の緊張感をともなった、オブジェとフィルムとＳＦの合体によるオープニング——。夏のイベント・ツアーのオープニングは、とにかく元気で・明るく・派手なものだった。この幕開けを見ただけで、秋のツアーが夏のライブとはまた違ったテーマやコンセプトのもと展開されようとしているのは明らかだった。

ステージ・セットはディテールに渡って綿密に組み立てられた、モダン・ホラー・オペラ風のもの。さらにスケール・アップした舞台や演出の中で、氷室と彼のバンドも確実にひと回り大きくなっていることを感じさせるステージを展開。『FLOWERS——』からのナンバーもすっかりコナれている上、観客たちにも楽曲が浸透したことで、それが可能になったといえそうだ。ただし、大阪公演などでは友森昭一のエフェクターにトラブルが発生。そこからバンド全体がアンサンブルを乱してしまい、悪戦苦闘を強いられるなど、メンバーとしては納得のいかない公演があったのも確かだ。メンバーやスタッフの満足度と、観客の反応の良し・悪しが必らずしも一致しないところが、生のやりとりの難かしいところかも知れない。

僕には氷室京介が“孤独の王”に写る。別にネガティブな意味ではない。彼が増々気力を充実させているのも、極めて優れたスタッフたちに支えられているのも、僕は認識しているつもりだ。孤独というのは、彼の日本におけるポジションのことなのだ。彼の圧倒的な知名度やセールスは、いわゆるシステム・メディアの力の外で（ほとんど無縁に）、ひとり彼が確立しているものだ。

たとえば、オリコンやＴＶのベストテン番組に彼の名前がある時、やはり氷室京介という存在は浮いている。なにしろ、実際彼はそうしたフィールドで活動を行なってはいないのだから。その一方で、現在の彼は単にロックンローラーというワクを越えた、新しいタイプのエンターティナーとしてその存在を広げつつあるのも確かなのだ。とすると、彼の〈場所〉はどこなのか？

彼の選択した道は極めて孤独だ。けれども、もし、その場所へたどり着けたなら、そこにはまだ誰も知らない快楽があるはずだ——。

misato

camera shy

●88年の美里の活躍ぶり、すごかったね。でも、そのすごさの中にいても、あいかわらず、彼女は、昔の彼女のままだ。少しあきれてしまうくらい、やっぱり美里は、いつもの、今までの…そして、これからも美里のまんまなんだろう。だから素敵に信じたい。

PHOTO●YORIHITO YAMAUCHI
COPY●HIDEAKI WATANABE(EDITOR)

正直。不器用
ドキドキ。一生懸命
だから、好き。

misato
camera shy
misato

camera shy

■ひとつの風景の断片の中で

「カシャッ…」

「カシャッ…」

「カシャッ、カシャッ、カシャッ」

「……」

「カシャ、カシャ、カシャ」

88年某月某日、東京・西麻布にある山内順仁写真事務所にて、パチ▼パチ6月号渡辺美里撮影ページの撮影が始まっている。

美里は、一部にまんまるく穴のあいたシルクの布ですっぽりとかぶって、撮影の低位置にいた。

彼女の首の位置を起点にして、サテンの布は、ゆるやかな弧を描いて床へと流れている。

目をすこし細めて見ると、それは、富士山のなだらかなスロープの頂上線上の火口から、彼女が、ちゃっかりと顔を出しているようでもあり、また、[illegible]のいっぷうかわった"でるでる坊主"のようでもある。

「あれ？　なんかおかしいですかぁ」

と美里一言。

「いや、ちょっと思い出し笑い」

と編集。

「ん―、なんでしょうね―」

と美里。

いけない、いけない。あらぬ想像(?)が撮影の妨げになっては…。

「カシャッ、カシャッ」

「カシャ、カシャ、カシャ」

3秒、4秒、5秒。その間、まったくシャッターが切られないかと思うと、突然、1秒に2、3度、フィルムが送られてゆくこともある。彼女のとても優しく緩やかな表情を求めての、お互いの戦いの空間と時間がそこにある。

そして、その間が、2・3・4・5秒…と長びいた時、それは、彼女の意識が何かにとらわれてしまっている時だ。

編集者は、その"とらわれの時"を彼女の"くちびる"に見い出す。

「美里さん、くちびるが少し固いです」

と編集。

「ハーイ」

と美里。

言うまでもない。彼女は先刻御承知なのだ。

美里が自分自身の自意識をコントロールして、その"とらわれ"から脱出する。

「カシャ、カシャ、カシャ、カシャ」

彼女の表情を追い求めてシャッターが機関銃のような音をたてる。

が、それもつかの間、美里のくちびるが固くなる。

「恥ずかしがり屋さん」

などと美里の前でいったら、きっとプリプリ、なんて感じておこってしまいそうなので、この場で言ってしまう。

そう、何を隠そう、そうなんです、美里さんは。カメラを目の前にして照れてしまうんです。もう何年も写真を撮られてきているというのに、まったく。

でも…だから、素敵にカワユイのだ。

■保育園にて。

保育園の勤務時間は、朝の8時から、夜の9時。保育園の経営を円滑に運ぶのは、なかなかにしてこわい。毎日の中で埋まっていると、ほらまた園児の声を聞く。

"園長先生、三浦さんと渡辺くんが、けんかを始めてしまって、とまらないです。助けて下さい"

「あー、またやってんのあの2人。しょがない子ね。今すぐ行きますよ」

と美里先生。

「すみません、よろしくお願いします」

と新任先生。

やれ、やれ、大変。しょうがない子―。

―美里先生の悩みはつきない。だけれど、今日は、いつもとはちょっと違うのだ。お昼をすぎると、園長先生は、変身してしまうのだ。

「先生、これからコンサートがありますから、皆さん元気にしていてくださいね」

「ハーイ！　園長先生、いってらっしゃーい」

「行ってきまーす」

というわけだ。なにが、というわけか。

美里は、今、保育園をつくろうとしているのだった。そして、保育園の先生として活躍し、またアーチストとしてもがんばってしまおう、というわけだ。

そんな、とっても夢のある夢に彼女は夢中だ。

だけど、そんな話の途中で時として美里が現実の我に少し返りかけると、彼女のくちびるがいっきに固さをとりもどす。

"ちょっと恥ずかしい"でも絶対に保育園やりたい"

それ、だから美里は素敵に優しい。

●夜のヒットスタジオ―PART I

夜のヒットスタジオは大変だ。ON AIRは夜だけど、その準備の為にアーチスト達は、お昼ごろテレビ局入りする。

日が少し傾きかけたころ、編集者はフジテレビへと向かう。正面入口ではなく、あまり目立たないサイドの楽屋へと通じる入口を抜ける。

そこは、いわゆる華やかなテレビ局のうら手だ。ヘア・メイクを終え、これから本番の舞台に向かうアイドル女性歌手、コメディ番組の舞台が終わって、額の汗をぬぐいながら、安どの表情を浮かべて通りすぎてゆくお笑いタレント。そして、多分いろんなコネとかつてとかをたよって局の中に入れてもらったのであろう18・19歳の女の子達の群れが、自分達の好きな歌手やタレントを見つけては、あっちへソロソロ、こっちへソロソロと集団移動をする。そんなグループをしたがえた歌手達は、ちょっぴり誇らしげだ。

そんな、周りの風景に目をやりながら、もうひとつの目的であるひとつの部屋をめざす。

"あった"

camera shy

部屋のドアには、ラフな字で「國府田美里様」と書かれた白い画用紙が無雑作にセロテープではられていた。
「失礼します。パチ▼パチですが」
と編集。
「ハーイ」
と元気な彼女の声。
「入っていいですか？」
と編集。
「どーぞ」
と彼女の声。
どんな時でもそうだが、女性アーチストの控室に入るというのは、とても緊張してしまう。何か迷惑をかけてはいけない、と思いながら、ソッとドアを開ける。
ドアを開け、開けた視界に彼女の姿はなかった。
すぐに視線を左に向けると、彼女が一人鏡台に向かっていた。
ヘアはブローを終え、薄く化粧をし、けい光灯の光でより白く見える肌に、口紅の赤がつややかに加えている。
美里本人と顔を合わせたわけではなかった。彼女は背を向けたまま、鏡台の鏡を通して、目が合う。
「きれいーですね」
本人と直接向き合っていないせいだろう。なにか、美術品を見るようにして、ついそんな言葉が出てしまった。
「あれっ？　あれっ？」
美里は、そう一言言って首を少し傾けて微笑みを返してきた。それは、別世界にいる美しい女性ではなく、みんなといつも一緒に歩いている美里ちゃんの表情だ。その表情に会って、とてもリラックスした自分は、「なーんちゃって」と言う余裕ができていた。
でも、彼女が「あれっ？　あれっ？」と言った時、やっぱりほんのかすかにくちびるが固くなっていた気がする。
美里は、いつも誰の言葉でも体全体で受けとめている。そして、一見とても強そうに見えて、実は、ガラスのような心で、その言葉たちを受けとめて傷ついていたりする。そして、その傷は時に波を打って心全体に拡がり、それは、キラキラ輝く破片となり彼女を悲しみの淵へと追いこむ。その破片は、あまりに純粋で、時にその反射光によってこちらの目までつぶしてしまいそうな勢いを持っている。しかし、その破片はもう、セロテープなどではとてもくっつきはしないほどこなごなになってしまっていて、それを両手ですくい上げてみると、かかえきれないほどの小さなダイヤモンドが手の平に残るだけだ。

●夜のビット・スタジオーPART2

編集部で夜、仕事をしていた。時計は、9時をさしている。
帰ろうか、帰るまいか悩んでいた。早く帰りたかったけれど、帰ってしまうと小田急線の経堂と成城学園の間ぐらいで、彼女の電波が自分の上を通り越していってしまって、永久に遭遇できなくなってしまう。
結局、会社に残って、彼女の電波をキャッチすることにした。
2人の司会と彼女一人がいた。
か…
が…
ちがった。
そこにはいつも彼女がいなかった。
そこには、まるでデビューしたての新人歌手が、右も左もわからず、緊張してちぢすくんでいる姿に似ていた。
なんて、不器用なんだろう。
そう思った。司会者のそれほど深刻とは思えぬ質問にまじめに答えようとして、言葉を探し、あえいでいる。
もう、話の内容なんかどうでもよくなって、ああ、そんなこと、ニッコリ笑っててきとうに答えておけばいいのに、とじれったくなるが、相い変わらず彼女は一生懸命た。けど違った。決定的に違った。
彼女は、自分の伝えたいことを、司会者の問いの中で、必死に探そうとし、そしてあがき苦しみ、傷ついて、言葉が違った意味をもって発せられ、それは結果として司会者のえがいていた答とズレたものとして、不器用な照れを伝えたにすぎなかった。
けれど、彼女は歌い始めた。そこには、3分間の中で、これだけのことを伝えたいんだよ！というすさまじいばかりの気持ちがあふれていた。
MCのズレとは対照的に、彼女から発せられた電波は、TVのブラウン管という凶器をもって、こちらの胸の中に深く沈んだ心に、眠りからさめるよう、ゆさぶりをかけてきた。
彼女のくちびるは、とんがっていた。たけど、それは、ほんとのとんがりだった。ウソのないとんがりだった。斜めにかまえて簡単に批評するものではなかった。
それは素敵にきびしい表情だった。
放送が終わり、控室でメイクを落とすとすっぴんの美里が自分の荷物を「よっこらしょっ」といったかんじでかかえて出てきた。
「ほっぺったが赤いですね」
と編集。
「そう、そう」
と美里。両手でかかえていた荷物を片手にして、もう片方の手をあおいで頬っぺをあおがせる。
「フゥー」
と一息つきながら、スタッフのみんなにほっぺを見られているとわかると、ほほはら始まった。
くちびるが明るくなったよ、美里さん。

●そして次の風景へ

この原稿をみんなが、冬休み、こたつに入りながらでも読んでいる頃、美里は、もう次の風景の中に自分の身を置いていることと思う。彼女はデビュー以来つねにそうだったし、これからも、ひとつの場所にましてとどまることなく、次の風景を探し続け、歩み続けてゆくことと思う。
編集者は、これからも、そんな風景の断片をひろいあげ、つなげ合わせて、みなに伝えていくんだろう。これから、どんなシーンにめぐりあうか、見当もつかないけど、彼女は、やっぱりひとつひとつのシーンを真剣に受けとめてゆくだろう。そして、これもわかっているんだ。あと何年しても、カメラを向けると美里は、くちびるをきゅっと結んでしまうことを。
だから、これからも美里を信じたいんだね。

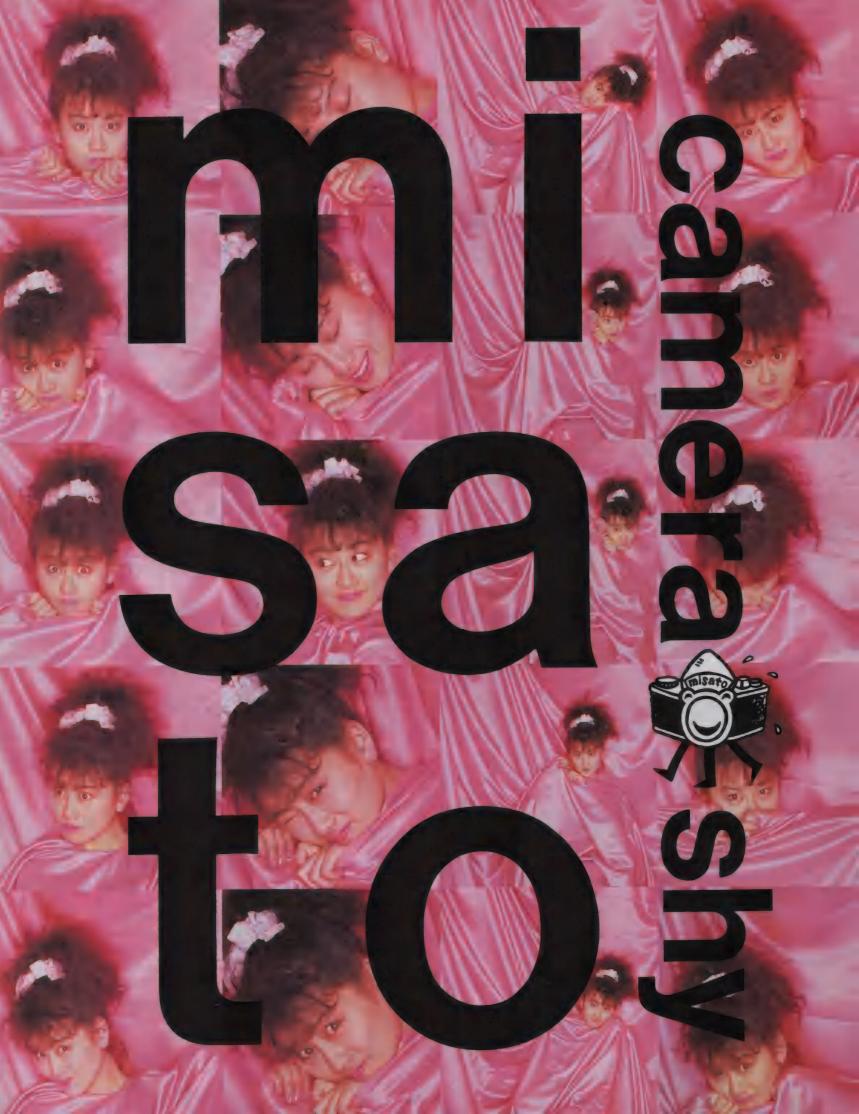
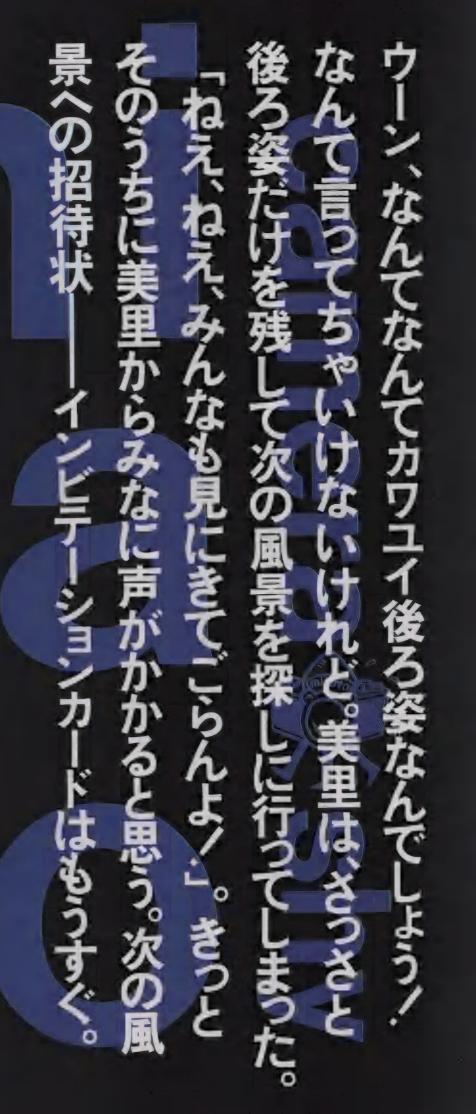
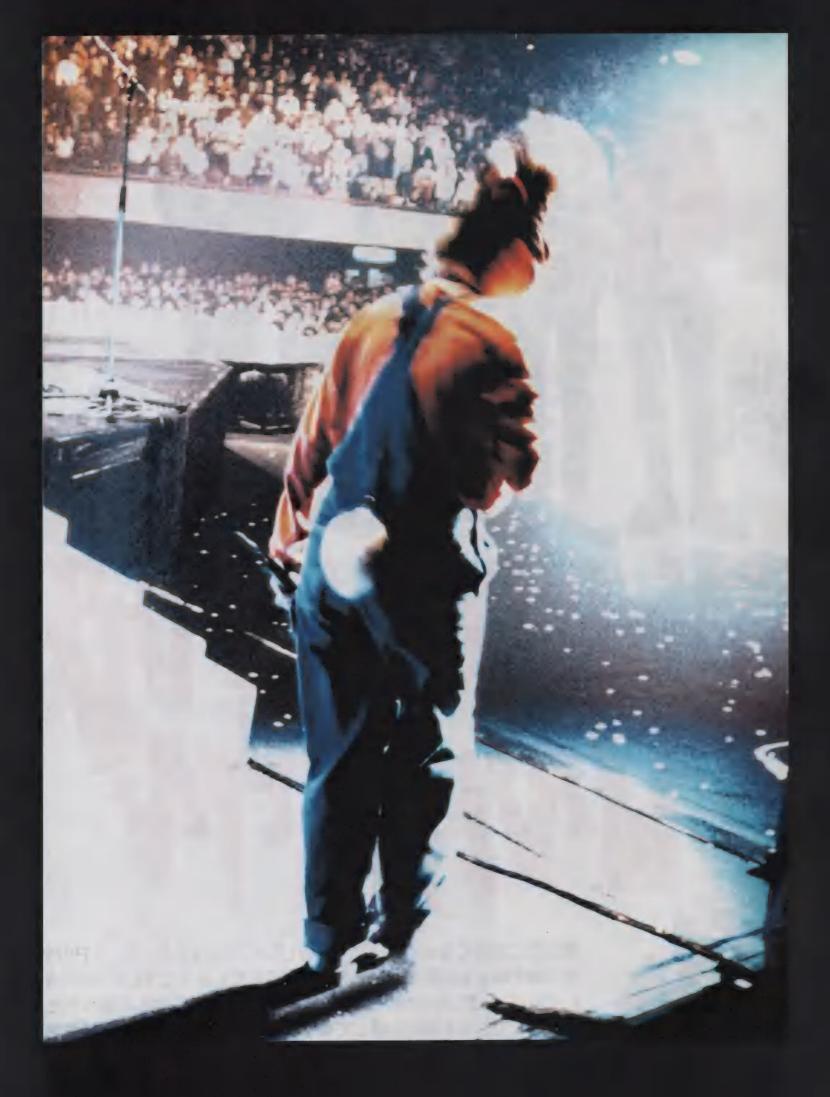
camera shy

misato

misato
camera shy
misato

ウーン、なんてなんてカワユイ後ろ姿なんでしょう！
なんて言ってちゃいけないけれど。美里は、さっさと
後ろ姿だけを残して次の風景を探しに行ってしまった。
「ねえ、ねえ、みんなも見にきてごらんよ！」。きっと
そのうちに美里からみなに声がかかると思う。次の風
景への招待状――インビテーションカードはもうすぐ。

THE PANIC '88 UNICORN

見るまに大きくなっていった今年のUNICORNであった。LPのタイトルそのままに見ている側もPANICしてしまった'88。メンバーそれぞれに、このPANIC　YEARの10大NEWSを教えてもらった。すごろくでこの1年を体験してもらうこともできるぜ。(㊙DATA付き)

PHOTO●SHINYA INOUE　HAIR&MAKE-UP&STYLING●MIYUKI SANO

Tamio 10大NEWS

1 UNICORNが実在していた事件

2 ロンドンに行って、バーガーキングの黒人ねーちゃんに、Where are you from? ときかれて、「日本」と言った。

3 となりの部屋からドリルの音がきこえてきて、アベが包丁持って来た。

4 後半のアベのダッシュをふりきり、TESSYが今年のMVPを取ってしまった事件。

5 マネージャー「仮面デチュー」の最[illegible]指切りげんまんね 事件。

6 中田っち「[illegible]」事件。本気で怒ってなぐり込み、スカッとした事件。

7 あのエビもやはり人の子だったんだなあ事件。

8 アベBが長崎でウンコふんだ勢いで、おいしい事件。

9 アベB髪型まねしてまゆげ目立つ事件。

10 いろんな雑誌で同じようなコメント書きまくる事件。

TESSY 10大NEWS

1 7月21日、レコード出る。

2 9月某日、レーザー、ビデオ、アンプ、スピーカーなどAV[illegible]がほとんどそろう。これで怖いものはない。

3 10月1日、ついに引っ越す。晴れて一人暮らしとなる。

4 STINGのコンサートに行く。[illegible]に楽しい1日を過ごす。へへへ。

5 引っ越した家のベランダに、鳥の卵があった。—困った。

6 秋のツアーで足をねんざ。とても不幸な2日を過ごす。

7 9月に遊びまくる。近年ないくらい幸せな日々だった。

8 精神的にまいった日々も多く、しばしば、一人で物を破壊する日がある。

9 親しらずを全部（4本）抜く。非常に辛く人間技とは思えぬ体力が実証される。これで悩みもなくなった。ハハハ。

10 4月、マーシャルのアンプを買う。長年の願いが叶う。同時に音も段違いに良くなったのでした。

1 浦和でチンピラに追いかけられた。たまげた、たまげた。

2 九州を旅した。

3 レコーディングで歌を歌った。(注・もちろん、PANIC ATTACKの中の"ペケペケ")

4 レコーディングで笛を吹いた。(もちろん、PANIC ATTACKの中の"ツイストで目を覚ませ")

5 STINGを見た。

6 セカンド(LP)が出た。

7 阿部Beeが入った。

8 引越しした。(注・ちなみにエビくんが引越したのは、8月末のことでした)

9 結婚式で演奏した。

10 オリコン(チャート)に入った。

Kawanishi 10大NEWS

1 ドラムが新しくなった。

2 髪型が変わった

3 かぜをひいた

4 歯が痛くなった

5 右足の親指の爪がこわれた。

6 うまいラーメンをみつけた

7 ドラム以外の楽器をマスターした。（注・リコーダー「PANIC ATTACK」で全員が吹いていましたね）

8 3年ぶりにころんだ。

9 ラジオをやることになった。（注・広島FM・12月よりTAMIOくんからバトンタッチ）

10 30歳まで365日を切ってしまった。（注・最年長のカワニシさん。1959年10月20日の生まれです）

1 UNICORNに入ったため、良くも悪くも人生が変わった。

2 引っ越したのはよいが、となりの人の音がもれるので、ショックを受けた。

3 サイパンに行って一気に焼きすぎて、全身が痛くて眠れなかった。

4 前の家の前にいたずらされて、警察が来てしまった。おかげでとなりの家の人と仲良くなった。

5 うちのマネージャーが指きりしていることが判明した。

6 エ[illegible]米[illegible]は[illegible]えったのね事件

7 ツアーで山形へ行くことができなかった。注・御存知、バンド内で唯一の山形出身者です。

8 私の大切にしていた車を売ってしまった。

9 TAMIO大阪で私にかりを作る事件。

10 広島、長崎で原爆資料館を見て本当に涙を流した。

TOP SECRET OF UNICORN

TAMIO

▼**持っている楽器**――エレキギター×3 エレアコ×2（イバニーズ×2）ベース×1（エビの） JUNO-106×1 TR626 etc
▼**お気に入りのくつ下の色**――アーガイル
▼**本を読む時好きな場所**――トイレ
▼**一生のうち読みたい本**――10冊
▼**最も尊敬しているアーティスト**――ジョンのれん
▼**話せる外国語**――広島弁
▼**尊敬している身近な人**――ディレクターのマイケル鼻血
▼**今いちばん好きな人**――ゴーバンズの森若さん
▼**持っている帽子の数**――10個
▼**1日のうち音楽をきいている時間**――10時間
▼**1日のうち音楽のことを考えている時間**――2分
▼**ガールフレンドの数**――ミューズホール2DAYS分
▼**月に料理をする回数**――回
▼**好きな野菜**――昔のトマト・セロリ
▼**好きなお酒**――ビール
▼**夏の1日に飲むビールの量**――無限
▼**定期的に読む雑誌**――㊙ファミコン
▼**いちばん好きな乗り物**――きれいどころ
▼**特技**――なんと作曲ができる
▼**好きな朝食**――みそする（千昌夫氏風に）
▼**教えられる限りのトップシークレット**――教えないのがトップシークレットだがアベBは中学1年生だ
▼**この1年で最も楽しかったこと**――レコーディング
▼**この1年で最も悲しかった日**――アベB加入の日
▼**この1年で最も眠かった日**――川西さんのデモテープをきいた日
▼**いちばん好きな言葉**――テキトー

TESSY

▼**持っている楽器**――ギター3本、アンプ1コ、エフェクトラック1コ、フットスイッチ1コ
▼**睡眠時間**――12時間
▼**月に見る映画の数**――ビデオを3〜5本
▼**いちばん好きなクツの種類**――スポーツシューズ類
▼**好きなお酒**――なし（ジョージアのコーヒー）
▼**いちばん好きな作曲家**――ジョージ・マイケル
▼**'88で最も感動したライブ**――エリッククラプトンLIVE
▼**今、いちばん好きな人**――みんな。まわりの人々
▼**生まれてからこれまでの引越しの回数**――4〜5回
▼**最も好きな野菜**――レタス
▼**どれくらいの割合で美容院に行くか**――1年に1回
▼**行きつけのお店**――ない
▼**小学校のころ好きだった学科**――体育
▼**1日のうち音楽をきいている時間**――4時間
▼**ガールフレンドの数**――無数
▼**1日に吸うタバコの数**――2箱
▼**いちばん好きな乗り物**――歩くこと
▼**特技**――なんでもやること
▼**演奏したい楽器**――ピアノ
▼**持っている帽子の数**――1コ
▼**本を読む時、好きな場所**――ベッド
▼**'88年、行ったライブの数**――7〜8回
▼**この一年で最も楽しかったこと**――GBで京都を回ったこと
▼**この一年で最も眠かった日**――きのう
▼**年に手紙を書く回数**――3回
▼**持っているサングラスの数**――1コ
▼**一生のうち読みたい本**――3さつ
▼**いちばん好きな言葉**――自分はかわいい

EBI

▼**持っている楽器**――（ベース）イバニーズ、MC（アンプ）マーシャル
▼**音楽を演るキッカケとなった曲**――バン・ヘーレン、ユーリアリーガットミー
▼**睡眠時間**――8時間
▼**お気に入りのジーンズのメーカーの種類**――BIG JOHN 黒のスリム
▼**お気に入りのくつ下の色**――黒
▼**いちばん好きなクツの種類**――ブーツ、ラバーソール
▼**持っているサングラスの数**――10コぐらい
▼**好きなお酒**――日本酒。でもあまり飲まない
▼**いちばん好きな作家**――筒井康隆
▼**本を読む時、好きな場所**――ベッドの上
▼**'88で最も感動したライブ**――スティング
▼**尊敬している身近な人**――親
▼**月に料理を作る回数**――1回
▼**小学校の頃、好きだった学科**――体育
▼**1日のうち音楽を聞いている時間**――1時間
▼**1日のうち音楽のことを考えている時間**――24時間
▼**ガールフレンドの数**――あんまりいない
▼**いちばん好きな乗り物**――車
▼**好きな朝食**――パン
▼**この1年で最も楽しかったこと**――旅
▼**この1年で最も眠かった日**――レコーディング
▼**最も好きな野菜**――レタス
▼**好きなファミコン**――究極ファミリースタジアム
▼**今、いちばん好きな人**――秘密です
▼**演奏したい楽器**――ギター、ピアノ
▼**東京でいちばん好きな街**――渋谷
▼**教えられる限りのトップシークレット**――広島出身です
▼**いちばん好きな言葉は**――信

KAWANISHI

▼**持っている楽器**――ドラム、ベース、計算尺、尺八、琴、タブラ、ボンゴ、コンガ、ホルン、ザット、鍵盤
▼**睡眠時間**――3h
▼**月にレコード店に行く回数**――30回
▼**月に映画を見る回数**――30本
▼**いちばん好きなクツの種類**――セッタ
▼**持っているサングラスの数**――82コ
▼**好きなお酒**――ワイルド・ターキー
▼**本を読む時、好きな場所**――ホテルのへや
▼**一生のうち読みたい本は**――百万一冊
▼**'88で最も感動したライブ**――ボー・ディドリー&ロン・ウッド
▼**'88年、行ったライブの数**――50本
▼**いちばん好きな画家**――シャガール
▼**いちばん好きな作家**――中田研一
▼**尊敬している人**――グリヤン（ボス）
▼**生まれてからこれまでの引越しの回数**――10回
▼**月に料理を作る回数**――10回
▼**好きな野菜**――パセリ
▼**とっておきのおまじない**――なきにしもあらず
▼**1日のうちで音楽をきいている時間**――8h
▼**1日のうちで音楽のことを考えている時間**――24h+3h
▼**ガールフレンドの数**――ない
▼**1日の吸うタバコの本数**――23本
▼**いちばん好きな乗り物**――車
▼**好きな朝食**――なんでもいい
▼**あなたのおすすめのレコード**――ダイヤーストレイツのMONEY FOR NOTHING
▼**夏の一日、飲むビールの本数**――1本
▼**美容院に行く回数**――月に12回
▼**小学校の頃好きだった学科**――数学
▼**バチ▼バチを読んだ回数**――10回

ABE.B

▼**持っている楽器**――オーバーハイム（Matrix-12）イーミュー（E-max）ヤマハDX-7 シーケンシャルサーキットProfet-600 フェンダアーローズ ローランドD-50 エフェクターとモンターシステム ギター、ベース、QX-3、シンク、BOXなど書ききれないよー
▼**いちばん好きなクツの種類**――ブルーオンピンク
▼**好きなお酒**――アーリータイムス
▼**本を読む時、好きな場所**――飛行機
▼**'88年で最も感動したライブ**――スティング
▼**'88年見たライブの数**――6本ぐらい
▼**最も尊敬しているアーティストは**――デビットフォスター、笹路正夫
▼**いちばん好きな画家**――ムンク
▼**今、いちばん好きな人**――浅香唯
▼**最も好きな香辛料**――ガーリックパウダー
▼**最も好きな野菜**――ピーマン
▼**小学校の頃好きだった学科**――音楽、美術
▼**1日のうち音楽をきいている時間**――眠っていない時間
▼**ガールフレンドの数**――たくさん
▼**定期的に読む雑誌**――ビックコミックスピリッツ
▼**話せる外国語**――山形弁
▼**いちばん好きな乗り物**――自分の自転車
▼**東京でいちばん好きな街**――13号地
▼**教えられる限りのトップ・シークレット**――03（×××）××××
▼**この一年で最も楽しかったこと**――熊本
▼**この一年で最も眠かった日**――ウノを朝までやった日
▼**この一年で最も悲しかった日**――ユニコーンに入った日
▼**いちばん好きな言葉**――そのままでいいのさー

注・特に指示のないところへ止まった時は。自分の順番がきたらサイコロを振って出た目の数だけ進む。

おじゃまじゃなければ SPECIAL

●スペースが少なくて、思うようにゲストに出てもらえなかった"おじゃまじゃなければ"のスペシャル版。PSY・Sのチャカさんとライターの森田恭子さん。そしてレコードのディレクター、マイケル河合氏の登場

CHAKA PSY·S

KYOKO MORITA

マイケル河合

CHAKA・PSY・S

『PANICATTACK』に好きな曲が何曲かあって、ストレートでメリハリがあっていいアルバムだと思うようになりましたね。

初めて会った時はラジオでタミオくんとだけ。巨人の呂選手が好きだという話をしていたら、「オレとこのバンドのドラムが呂に似てるから紹介するよ」とか言って。次にメンバー全員と会った時、「早くドラムの人紹介しなさい」と言ったらなんかラッコみたいな人がヒョコヒョコ出てきて。顔がツヤツヤなんだよね。（笑）で、パッと横見ると、もっと呂選手に似てるイヤにマジメな人が、「どうも、ユニコーンのテシマです」って。アベBはニタニタ笑ってて、エビちゃんはカモシカのようにスッと立ってて、我関せずという顔で…。これはあまりにも5人5様でオイシイぞと思いましたね。私はその時ワイヤレスウォークマンで何となくグルグル踊ってたんですけど。（笑）

私はけっこうどんな人とも共演したいと思うんですけど、UNICORNと演るのは想像しづらいですね。もしジョイントする話がきたら悩むと思いますね。……ということは彼らやっぱりすごく個性があるんじゃないかな。……あでもタミオくんがまっじめに書いたラブソングの詞とか歌ってみたい気がしてますね。で、そのプロモーションビデオで私とエビちゃんがヌレ場演じるみたいな考え方もある。（笑）向こうにも選ぶ権利はありますけど。（笑）

「ユニコーンが好きだ」とか言うと「タミオくん?」ときかれたりしますが、一人一人のファンとかじゃなくて音楽のファンだったりするんですけど。バンドも上手ですよね。音楽についてすごくマジメだし。

え、中田さん（UNICORNの事務所の人）がテッシーのファンだと言ってた? いらんこと言わんでよろしい。最近は西川大輔です。（笑）……テッシーは、どこがカッコいいかということに自分で気付いてないところが好きですね。

KYOKO MORITA

●TVKの『別冊ミュートマJAPAN』の第1回目のゲストは、爆風スランプと、UNICORNのタミオくんでした。TV独特の雰囲気を待ったスタッフと、メイン司会者のマイケル富岡さん、会場に集まったファンの人達。……私にとっては、けっこう異次元の世界でした、ウン、あの頃はね。でも、"最初のゲストはこの方です。"と紹介され、マイキーと私の間にヒョコンと座ったタミオくんは、そのとき初めて会ったにもかかわらず、不思議と、私をホッとさせてくれました。そのときのことはよーく覚えてる。でも、ホッとさせてくれたのもつかの間、次にラジオで会ったときは、なーんか態度デカくてー。ははは。思わずピクピクしたのも今はいい思い出。いちばん最近会ったのは、やっぱりラジオで、（実はまだ1回も雑誌の取材をしたことがない）ちっょとヤセたんじゃないかなータミオくん。男っぽくなってた、なんか。で、あとのメンバーの方たちとは、まだ2回しか会ったことなくて、"EBI"と"アベB"ってチョットまぎらわしいよね、でも関係ないか、って感じで、あのライブのパワーと、音楽性のクオリティーの高さ、おまけにポップ、UNICORNは素晴らしいバンドだと思います。今やビジネスと化した日本のロックに、充分コマーシャルな部分を持っていながらも、ガシガシ前向かっていく感じが、カッコイイ。ライブ見に行くのが楽しみ☆

マイケル河合

ユニコーンが売れると私の出世になる。冬にしては暖かい、そんな日々が続いています。ニューアルバム制作を目指して、作曲三昧のメンバーも、ものすごくとっちらかった良い曲をそれぞれ持って来ます。コツをつかんだみたいだな、奴ら。顔が浮かんで来るようなのばっかりになってきた。"金持ちにしてやりたい！"……たまに贅沢させてくれねえかなあ。俺うまいのに。今度は「バンドっぽく」なんて、くだらないことは言いっこなしで思い切りゴージャスにいきたいなあ……。で、売れる。今までおごった分、全部ごちそうしてもらう。所★つくりものだもの。才能もない心意気よりテクニックよ。才能もないのに、努力している人が多い今のロックシーンの中で、今僕は幸せです。

そうそう、新しいアルバムの話。海外レコーディングのフリをする（行かないのに行ったような顔をする）という説は却下になりました。でも、ソ連をテーマに男女の愛を叙おう説や、ジギーのコピーをやろう説はまだ生きているらしいです。ジャケットもとんでもなくかがわしいのを相談しておりますし、こんなことをして売れたらヒドイと思いますが、面白いからしょうがない。楽しみにしててね。民生はプリプリの盛り上がりに「飼い犬に手をかまれた」（ちなみにプリプリも私の担当）と言ってましたが、来年は頑張ってプリプリの太腿でもなめてやって下さい。ユニコーンも一杯裏切ってね、私の業績。

お待たせ、UNICORNラジオイラスト

●すみません。たいへんたいへんお待たせした、"ラジオイラスト"（タミオのDJきいてる姿をかく）の発表です。写真も送ってもらったけど、あまり面白いのがなかった…。似顔絵じゃないぶん難しそーね。

◀東京都　アオザキ（17歳）
足に貼られているバンソコウがいーね。

◀福岡県　中下さおり
かわいいタッチ。夢までカーイーねっ。

◀北海道　川村玲麻（14歳）
なかなか個性的なタッチに色使いがヨイ。

▲群馬県　福井みつ子（16歳）
ラジオがかーいー。16歳で酒だと？

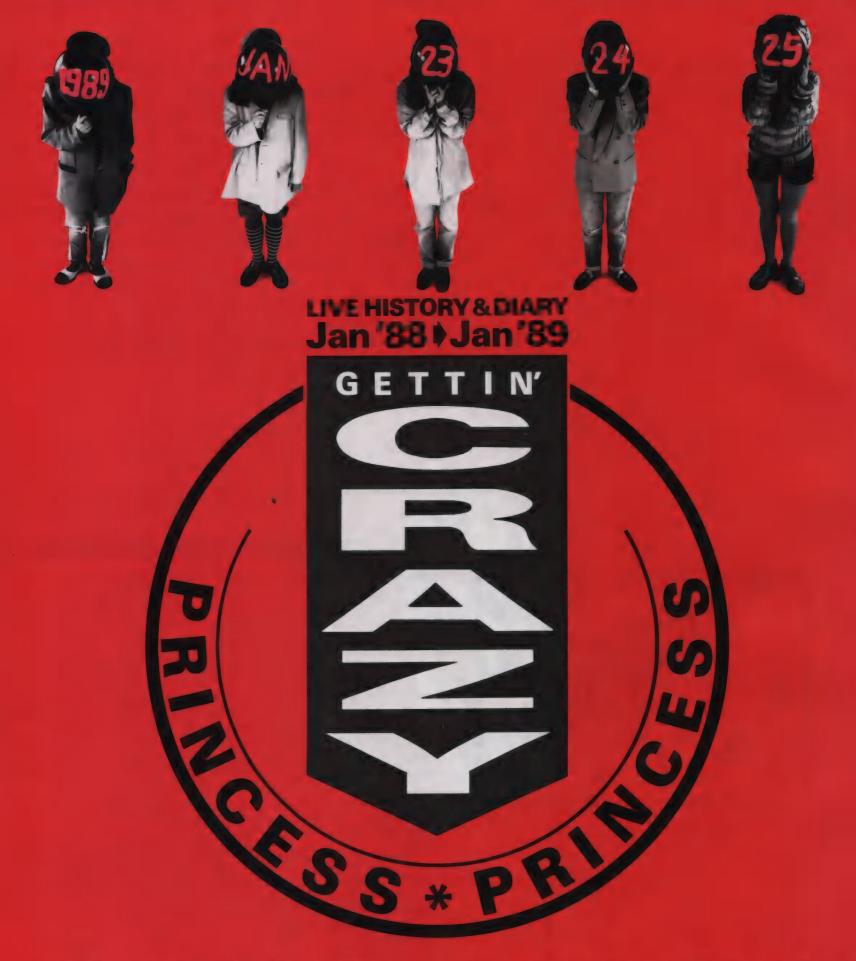
▲埼玉県　間宮紀子（16歳）
UNICORNが大好きだって伝わるね。

▲愛知県　江口由子
社会人の"根性の3部作"にじむ根性。

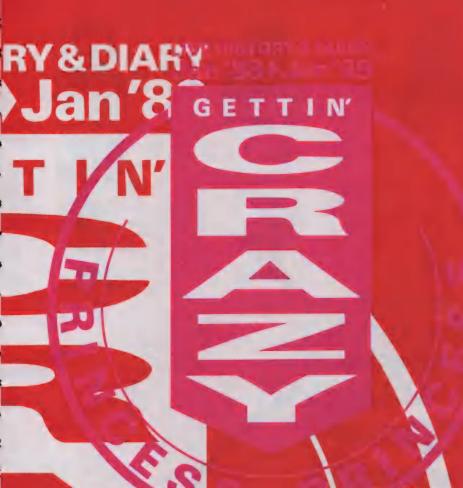
▲[illegible]県　平田礼子（16歳）
お手紙の内容がノリが出ていて良かった。

▲千葉県　武藤寿美（1[illegible]
なんとなくセリフが特徴あって面白い。

▲愛知県　ベケベケ女（17歳）
ギンギンッになってる目が雰囲気出てる。

イラスト●浅見カヨコ

'88年のプリンセスプリンセス。その大きくなり方といったらまさにクレイジー。頼もしすぎるぐらい頼もしくて、まぶしすぎるぐらいまぶしい今の5人。女の子バンドの大成功はなんだかとても嬉しくなること。そばにいるとその輝きが自分にもうつってきそうな嬉しさだ。彼女たちのクレイジーな活躍ぶりをライブメモリーで、奥深さをAtoZで感じてください。

PHOTO▶MASANORI KATO　TEXT▶MAYUMI TAKAYAMA　STYLING▶ERIKO HIGUCHI　HAIR&MAKE-UP▶NAOMASA SATO

'88年の初めには、恵比寿ファクトリーというライブハウスでライブを演った。大きくなり始めたプリンセスプリンセスの、でもこれは、ほんの始まりにすぎなかった。だって4月には、渋谷公会堂で演ってしまったのだから。そしてもっともっと広いPITのライブ、もっともっともっと広いノースピアでのライブ……。[illegible]の大きさと共にプリンセスプリンセスのスケールもおっきくなっていった。もちろん学園祭も荒らし回ったし、もちろん、全国各地、どのライブも楽しんだ。どの会場でも心を思いきり、[illegible]れさせてくれた。ライブの思い出をそれぞれに語ってもらいながら、プリンセス²の'88を追ってみる。'89年の武道館のこと、何だかワクワク待ちながら。

「恵比寿からはちょうど一年経つんだけど、その頃ってそろそろプリプリが盛り上がって来て、初めてSOLD OUTっていう状態が起こったの。それまではライブハウスをやってても、ワンマンだとまだやっとっていう感じで、いっぱい入るのは不思議だった頃だから。でも少しずつ盛り上がってるなっていう手応えは9月の"ナオンの野音"あたりからあったんですよ。けっこう注目されはじめてるなっていうのは。

なんか初めてね、お客さんが本当に恐いと思ったのがね、恵比寿だったのね。二日間ていうのが初めてだったし、自分たちだけのためのステージも初めて作られたでしょう。だからスゴイ恐かった。あんなにいっぱいお客さんが入ったのも初めてだったし。いままでの中で一番緊張したライブっていうのは、私にとって恵比寿の二日目。

で、最初に「YOU ARE MY STARSHIP」歌うでしょ。あれの♪チャカチャンチャ〜ていうのがトモちゃんのシンセの曲だったのね。それをボンボンって出したのね、それが変なチャイムみたいな音が出ちゃったの。(笑)それでみんなが緊張している中でそれが出ちゃったもんだから、すごく[illegible]して、その時に初めて「GO AWAY BOY」をライブで演奏したんだけど、私はすっごい失敗をしてしまったの。もう[illegible]と味の[illegible]いことったらなかったですよ。

その時はちょうど渋公が次のライブだって決まってたから、じゃあ渋公を見ててくださいってなことを打ち上げで言ったの。ものすごいライブをしちゃったから、香ちゃんと加奈ちゃんと帰るに帰れなくて、3人で飲みに行こうかって飲んだんだけど、すごいガックリ肩が落ちちゃってね、あれほどいや〜な思いをしたライブはなかったね。でも、その割りにはすごいキッカケになったライブだったと思うから。はじめてSOLD OUTみたいな現象が起きたしね。

で、ちょうど「HERE WE ARE」のレコーディングをやってる最中で、だから「19 GROWING UP」とかを書いていた時なんです。でもまさか、暮れになって自分たちがこうなっているとは予想もしていなかったから。普通だったら女の子が主役の時って結婚式だったりするでしょう？　それがほとんど毎日でしょう。5人いるけどそれぞれが主役だし。だからそういう[illegible]いっぱいできるし、とにかく極端ですよね。ホラ。それぞれのTREASURE ISLANDが現実に変わって行く。って本当はさりげないことだったのが、いまではこんなにも大きくなっちゃったでしょう。だからあの歌詞をね、恵比寿の頃に書いていたのがすごく良かったなって思う。いま書くと、なんかイヤミったらしいでしょう。(笑)でもそれを、あの頃に書いていたのはすごくいいタイミングだったと思う」

富田京子

22、23　JAN '88　EBIS FACTORY LIVE

LIVE HISTO

Jan '88

17 APR '88 SHIBUYA KOKAIDO LIVE

渡辺敦子

「ロックバンドはね、必ず渋谷をやってまたひとつ大きく成長するっていうジンクスをみんな信じてたんだよね。なぜかみんなそう信じてた。本当は上を見ればキリがないんだけど。(笑)で、ロックバンドはみんなやるんだ! みたいなノリで渋谷を絶対にやりたいっていう[illegible]はすごく大きくなっていたから、[illegible]えた時の感激っていうのは、いままでにないものがありましたね。

だから[illegible]はすごくしてました。私たちはプロの立場としては、100%っていうピークがあるとしたら80%はいつも出せると思うのね。逆に100%っていうのはめったに出せないと思うの。だけどその時は、60%の力しか出せなかったと思う。自分たちとしてはね。お客さんが一緒になってガンバローって一体感はすごくあったの。私たちとお客さんとの間で。だからお客さんにも助けられたし、ライブとしてはもっとPITのほうがいいだろうし、ノースピアのほうができはよかったと思うけど、でも思い入れが強いぶん[illegible]いうものがひとしおだった。

本当に終わったあとも、涙が出ましたよ。アンコールが終わって帰る時、もう「ワーッ」って。(笑)まあ、リーダーとしての[illegible]があったといえばあったけど、すぐ泣くといえば泣くんですが。(笑)

でも、この一年は大きかったからね。いままでの6年間ていうのがあって、それでここで一つ区切りがついて渋谷をやりました。これからは渋谷を土台にまたひとつ大きくならなくちゃいけないっていう、プリンセスにとってはそういう[illegible]な一年だったよね。まだこれからも飛躍はあると思うけど、この一年があったから、今後またより一層発展できるっていう感じだよね。これからは、いまのパワーを持続させて、より一層大きくしなくちゃいけないって思ってる。

よく20本とか30本とか、40本てだんだんコンサート回数が増えちゃってみんな多少飽きてしまうみたいなことってあると思うんだ。だからつまらないことで、[illegible]たくないんだよね。いつまでもステージに立つうえでの緊[illegible]みたいなものは持っていたいしね。いつも必ず100%じゃなくても、80%でも満足させられるパワーを出していきたいよね。これからも。

5人でひとつの音を出す時のパワーはやっぱりすごいなって自分ながら思いますね。それはきっと技術の面よりも5人の気持ちの問題なんだと思う。それができなくなったら、バンドとして魅力がなくなるんだろうし、やっててもおもしろみがなくなっちゃうんだろうし、そんな時は[illegible]なるのかな〜って時々考えることもある。でも、昔の栄光を引きずるような人にだけはなりたくないんだ。そういうふうにだけは絶対になりたくない。やっぱりいつでも前を向いていて、もおちょっとでもダメだなって感じたらその時はいさぎよく散りたいっていう感じなの、全員がね」

BY ATSUKO WATANABE

中山加奈子

「渋谷が終わったあと、けっこうすぐにPITがあったんだけど私なんか本当はPITってすごく[illegible]が[illegible]くて[illegible]。私なりの順番、ていうか"格"で考えると、渋谷が終わって武道館なんです。で、その間にノースピアがあってってね。でもみんなは"渋谷が終わってPIT"って、PITを入れるからね。PITってそんなにすごかったのかなって思っちゃう。

(笑)すごいことですか?

でもまあ、プリンセスプリンセスにとってはスラーッて通りすぎたステップのようなものだったと思う。大阪厚生年金とか、福岡都久志と同じようなものだと思う。渋谷とか武道館が入ると"エッ?"とかって思っちゃうんだけどね。あっそうか、でもPITは追加があったんだよね。追加できるほど私たちって規模が大きいのかな、そんなの平気なのかなって思った。そしたらすぐ売り切れちゃた。

えっ? ちょろかったかって? でも、ちょろくはなかったですね。(笑)うん、渋谷よりキャパが多いってことでね、自分たちがやる直前にSIONをPITに見に行ったんですよ。SIONをいちばん後ろから見て、ゲェーッ、ここは広いって思った。左右がけっこう広くてスピーカーの前に行けるようになってたのを見たら。側まで行ったらステージもすごく高かったしね、SIONのでも。これはヤバイって思って翌日スタジオに言って"香、これはヤバイッ!"って。[illegible]あれじゃ「ワンダーキャッスル」の[illegible]に動くハバが足りないとかって言って、急に集まって相談したんだ。そしたら、じゃあどうしようっていうことになって、[illegible]は当日に会場に行ってから決めようっていうことになって、けっこうそういうことが多かった。

で、[illegible]に会場に行って、やっぱりステージの横ハバが広かった。[illegible]が長いと、うちは「ワンダーキャッスル」ではハジからハジまで走るっていうのがあるんで、その時のことを考えなくちゃいけないんだけど。ま、それだけなんだけど香[illegible]ちゃんと私と3人で走るから、♪タラッタッタ〜っていうそれの回数をいつもより増やして5回にしたんだ、PITは。普通は3回なんだけどね。それでちょうどピッタリだった。

でも、すごく盛り上がったんだけど、私の中ではそんなにスゴイって思っていなかったからね。ほら、ライブってわからないもので、自分ではすごい間違ってシマッタ、と思っても、みんなは盛り上がって異常に良かったよ〜って評価されることがあるでしょう。渋谷だと、あとからジワジワと私はやったなっていうのが、来たんですよね。立ってる時もウワーッていうのがあって、終わってから、私たちは渋谷をこなせるクラスのバンドに初めてなったんだって思った。それで、たぶん渋谷のあとPITから肩の力がけっこう抜けて、勢いがついたのかもしれない。自然に」

BY KANAKO NAKAYAMA

29 APR '88 PIT LIVE

31 AUG '88 NORTHPIA LIVE

「ノースピアはね、みんな当日になったらそんなにプレッシャーはなかったんだ。ただ、その数にね、目の前にした人数の驚きっていう感じはあったよね。あの、1万何人か集まる前に、こんな大きな所に人はちゃんと入るんだろうかっていう不安があったの。そうしたら埋まっちゃったでしょう。(笑)それに対する驚きっていうか、感動的なものが結構あって、目の前にいる人間の数字にけっこうビックリしましたね、その場で。ただ、やっぱりプレッシャーはあった、こんなこと言っても。(笑)多少はあったよね、充分に緊張していたと思う。

渋公が終わってPITの追加公演があって、なんか勢いに乗ったっていうのがあったよね。その勢いに乗っているんだっていうのを確実に実感できた、決定的なものだね、ノースピアは。でも、走り抜けて来たっていうんじゃなくて、本当に一つづつやって来たっていう感じだけどね。ステップを登って来たっていう感じのほうが強いな。こうやって振り返るとね、アッいう間だったなっていうのはあるんだけど。でも本当にいつも目の前のものしか見てなかったから。

あのね、ノースピアは野外だったし、何もないところに会場を作ったでしょう。だから今までコンサートをやったことがない所でどうなるのかっていうのがすごい心配だったんだけど、ただ当日はお祭さわぎをしようってミンナで言ってたのね。それ自体はすごい成功したと思う。1万3000人と私たちとでお祭さわぎができたと思う。

ただ、ちょっぴり計算外なのは、悪天候状態っていうの？　天候だよね。天気は良かっただけど、風がすごい吹いちゃってて、場所によってはすごく音が良かったっていう人もいたんだ。風で流れてしまって。だからPAが最高だったっていう人もいれば、悪かったっていう人もいて、本当に同じお金で一番前で見ている人もいれば、遠くで後ろで見えなくて音が悪いっていう最悪の人もいて、そういうの考えると、やっぱり空間として広すぎたのかなっていう気もするけどね。

ただ、絶対にそれで後悔なんてしてないし、あの日のライブが失敗だなんて思ってない。(笑)やって良かったと思う。やっぱり自信が持てたよね。PITのあとにいきなり渋公だったらすごく不安だったと思うのね。だからノースピアがあって自信がついたっていうか、そういうのって多分にあると思う。私なんか、あんまりステージのフロントに出ないけど、ノースピアの時に初めてショルダーを持って前に出たのね。1曲だったけどハジからハジまですごく広いなーて思って、私にとっては初めての冒険だったわけね。それでお客さんと面と向かえたっていうか、そこでライブっていうものを感じたっていう、そういう新しい発見が私はあったんだ、ノースピアは」

今野登茂子

BY TOMOKO KONNO

BY KAORI OKUI

「あのね、静岡っているのはプリプリにとっては因縁の土地なんだ。(笑)すごいくやな思い出もあるんだけど、でも実は私たちがライブっていうのはこういうもんだっていうのを初めて体験したのも静岡なんだ。それは浜松にある高校の、卒業生を送る会かなにかのことで4年くらい前に呼ばれて行ったんだけど、その時にはじめてこれがライブっていうライブをやったんだよね。

で、今年行った静岡の学祭っていうのはひさしぶりにライブやったなっていう気がしたんだ。静岡なんとかホールっていう会場でもやったんだけど、静岡にはあんまり行かないから、みんな待っててくれたみたいなんだ。で、基本的にはうちはアンコールは1回しかやらないのね。それはアンコールって、もうお決まりになってて、本当の意味のアンコールっていうのじゃなくなってるでしょう。だから本編が終わって1回しか決めないの、いつも、だけど静岡の時はお客さんもすごい盛り上がってて、すごく楽しかったのね。

Wアンコールが来て。アナウンスもかかってるんだけど、全然拍手が止まないの。で「本日のコンサートは……」とかってアナウンスやってる時に「やろうかー？」とかって言って、で、スタッフもいいていうんで「ヤロー!」って、とっさにやることにして出て行ったのね。そうしたら警備の子たちがもうロープとかを片付けた後だったから、出ていったお客さんが戻って来てステージの前まで来ちゃって、椅子に座って見ている子もいれば真ん前にかじりついてる子もいてデコボコ。それがスゴイ楽しかったの、もうメチャクチャで。(笑)これがライブだーって、ひさしぶりの感じで燃えた。

やっぱりホールなんだよね。ホールになるとなんとかしてお客さんとの距離を縮めようとするじゃない。こっちも向こうに近付くし、向こうもこっちに近付いてくるっていう感覚でライブは成り立ってると思うのね。でもその静岡の時は、最後は完璧に両方が手をつなげたような感覚だったんだ。

本当に見に来てくれた何千人の人、一人一人とバッチリ手をつないだっていう感じはすごいよ。最近はそれでけっこうライブハウスが恋しいんだ。ああいう近さっていうのが。

学祭って非常に難しいと思うの。ホールのコンサートって、もう何カ月も前からチケット買って待っててくれるでしょう。でも学祭っていうのは安いし、最近TVで盛り上がってるからとか、あんまり知らない、でもなんでもいいから見に来る子もいると思うの。だから私たち自身は、これでちょっとでも惹かれてくれたら、きっと次にコンサートに来てくれた時にはまた大きい何かをもって帰ってくれるんじゃないかっていう。そういう気持ちでやっているの。そういう意味では、学祭で一人一人と手をつなぐっていうのは難しいから、それができた静岡っていう土地はインパクトあったね」

奥居香

1 NOV '88 SHIZUOKA SHIMINKAIKAN LIVE

JAN
25
23
198
24
23、24、25 JAN '89 BUDOKAN LIVE

S U P E R V I S E R

KAORI OKUI | TOMOKO KONNO | ATSUKO WATANABE | KANAKO NAKAYAMA | KYOKO TOMITA | PRINCESS PRINCESS

PRINCESS PRINCESS ABC→

プリンセスプリンセスの初心者にも彼女たちのことがよくわかる、ABC辞典。監修は彼女たち自身。だからプリンセスプリンセスのノリがわかってしまう。（解説者は色別されています。上の色分けを参照してね）

A ALCOHOL

メンバー一同大好きなもの。生きていると、いろいろ備ってくるものがあるじゃん。それを消費するんだよ。それに、大切な物をとっておきたいじゃん。やさしい気持ちにしておくんだ。最近は[illegible]ったけど（個人的にね）

B BASS

命の次に大切な物は？ と聞かれたらBASSと言えるのは嘘かもしれない。でも、物質の中では一番大切な物は？ と聞かれたら勿論BASSだ。重低音に魅かれ、BASSを好きになって7年目。きっとBASSがあったから、今の私、プリンセス プリンセスの渡辺敦子がいると言っても過言じゃないだろうな。

C COSTUME

衣装って不思議だ。生身の私達を何倍も、何十倍もかっこよく、より大胆に変身させてしまう。女の人って髪型ひとつで、見た感じも気分も変わるでしょう、それとよく似てて衣装ひとつで、自分にもわからない可能性や魅力がひき出されるんだろうね、きっと……。
でも、衣装って不思議だよね。

D DISNEY LAND

はじめてディズニーランドへ行ったのは男の子とふたりで行った。すごく晴れた日で幸せだった。2度目に行ったのはテレビの仕事でメンバーといっしょ。3度目はP²対SHOW-YAさんの秋の遠足（？）で行った。でも人数が増えても誰と行っても、はじめて[illegible]いつと行った時の想いがよみがえるのよね。これから先100回行ってもその度思い出すと思う。

E ESCAPE

最近忙しいので、ゆっくり晴れた日に海でゴロゴロしたいナーなんてすごく思う。夜遅く帰っても、車でブーンと海まで行っちゃうときもある。仕事の合間も晴れた日だとぬけだして屋上へ行ってボーッとしてる。RCの"トランジスタラジオ"の気分で……

F FIVE

5人の女の子って、電車のなかでみかけると、ものすごく多人数に見えるけど、私たちは5人で1つ。1人いないとなんかさみしい。

G GIRLS

近頃メキメキと増えてきている女の子のファンの人達を見てると"自分の彼女が会うたびに可愛くなっていくの見ている彼氏って、こーんな気分なんだろうな"って思う。プリンセス プリンセスを見に来る女の子達が、見るたびに どんどんオシャレで可愛くなってると思う。私達も負けずにステキな女性にならないと…ね。

H HORSE

ねぇ、ねぇ、知ってる？ 今"カオリ プリンセス"って馬がいるんだよ！ それが初のレースで、皆の期待を思いっきり裏切って7馬中6位ぐらいだったんだけど、次のレースでまた、皆の期待を裏切って今度は1位だったんだって。で、たまたまその馬券を買ってたファンの人、万馬券で大もうけだって！ 今度、ニンジン1箱でもプレゼントしようかな。

I INDIA

インドに行きたい。きっと近い将来（？）メンバー全員で行くと思う。なんか、ひかれる魅力のある土地。タジマハールホテルにとまりたい。そこはトイレだけで12じょう位あるんだって、アクセサリー買いまくりたい。

J JAZZ

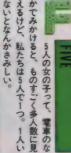
一年前ぐらいから良くきくようになった。好きなドラマーのアイドルがジャズのドラマーだったりけっこうするんですよね。難しくって自分ではやろうとは思わないけど……

K KEYBOARD

こいつが私の人生をささえるKEYだったなんて、幼い頃は思ってもみなかったたな。ピアノの発表会ではいつもあがりっぱなしのドジ子だったのにね、先生。仕事といえども趣味感覚、楽しくやろうって決めてるんだ。

L LET'S GET CRAZY

みんなに"Let's get Crezy A-RIGHT?"って聞いたら大きな声で答えてね。

M MANAGER

マネージャーって、色んな意味ですごく大変な仕事だと思う。場合によっては好かれたり、嫌われたりしなければならない立場だと思うし、やさしいだけじゃやっていけないだろうし。でも、マネージャーって、精神力も勿論だけど、やっぱり体力も必要だよね。うちのマネージャー市やんは、なんていったってタフのひと言に尽きるでしょうね！

N NAME

私の名前は、姓名判定の先生につけてもらったんだって。その時こうほが3つあって"加奈子"の他に"佐知子と佐和子"があったらしい。よかった加奈子で。別に意味はないけどなれちゃったからね。

O ORIGINAL DRUM SET

GET CRAZYツアーから新しいドラムセットになりました。黄色と黒のかっこいいニューセット、苦労しました。これでますますパワーアップだ！ あっそうだ、きょんちゃんのちょっと前まで使っていたドラムのピンク色がもうすぐパールドラムから"プリンセスピンク"という名前がついて発売されるのです。ドラムを買いたいと思っているドラムキッズのみんな、こうごきたい。待っててね。

P PET

インコ→シマリス→ゼニガメ→ダチョウ→こい→中ぐらいのカメ→熱帯魚→柴犬→インコ、私が23歳になるまでに、こんなにたくさん飼ってたのにねぇ、今、家に居るのは、小桜インコのツルちゃんとカメちゃんだ。親はこの名前を気に入っている。（まだヒナなんだよ。でもすぐ鳥になっちゃうんだよね）

Q Q-Chan

私、オバQに似てるって言われる。近頃は、自分でも似てると思う時がある。でも、ホントはQちゃんより、ユーコちゃんに似てるって説が、近頃広まっている。困ったなぁ。

R RELIGION

宗教にはこだわらないけど、神様っていると私は信じているんだ。だって私達がずっと昔、まだまだヘボい頃、夢のまた夢の話だったけど、その頃から武道館で必ずコンサートをやる、出来るって信じてたんだ。確かにここまでながかったけど、神様は私達の願いをかなえてくれたんだもんね。夢じゃなくて現実に武道館に立ててるんだ、1月に……。

S SLEEP

私はLIVEの翌日など、たまに20時間ぐらいねるんだよ。ねるの大好き。すっげー晴れた日にカーテンあけたまま、ネコとねるのが最高。レコーディングとかであんましねれないと、きげんがわるくなる。やっぱりすいみんが活力の源だと思うね。

T TELEPHONE

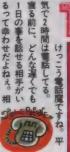
けっこう電話魔ですね。平気で2時間は電話してる。寝る前に、どんな遅くても1日の事を話せる相手がいるって幸わせだよねぇ。相手が男の子でも女の子でも…大切にしたい。「LET'S GET CRAZY」に入ってる「STAY THERE」の9つであなたに…の9つは、電話番号の[illegible]のことなのだ！ P・S 近頃見知らぬ人からの電話が多くてメンバー一同[illegible]一歩手前です。ヤメテネ×××

U USA

今回のツアーが終わったら、ドォーンと行くぞォ。この目で、この鼻で空気をいっぱい吸いこんでくるんだ。

V VOCAL

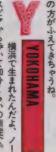
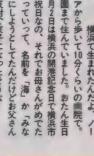
ここ2年ぐらいで、歌がホントに大好きになった。ギターも大好きだけど、歌はもっと好きになった。でも、この1年、みんなが私の歌を好きだって言ってくれるようになったもんだから、もっと、もっと自分の歌が好きになったんだぁ。

W WHITE

プリンセス プリンセスを色に例えればなに?って聞かれると、白って答えてしまう私だけど、白って何にでも染まる色でしょう。私達の曲のイメージも、時には赤、青、その他色々あると思うけど、私達自身メンバー5人も、個性バラバラのように、それぞれの色に変わると思うし、5色にネ。でも一番大切なのは、土台である白が、真っ白に輝いている事だヨネ。

X X'MAS

もし今、サンタさんがいて何かたのむとしたら、プレゼントはいらないから死んだ人を武道館に1日だけ招待したいな。絶対見てほしかった人がいたからね。大人になるとそういう悲しい事の方がふえてきちゃうね。

Y YOKOHAMA

横浜で生まれたんだよ、ノースピアから歩いて10分くらいの病院で。幼稚園まで住んでいました。おたん生日の6月2日は横浜の開港記念日で横浜市民は祝日なの、それでお母さんがめでたい！っていって、名前を「海」か「みなと」にしようとしてたんだけどお父さんの大反対で京子になったそうな…

Z ZERO

ZEROからスタートしたプリンセス プリンセスは、もう2度と、ZEROにはもどらない。へへーんだっ

ABC↓ PRINCESS PRINCESS

ILLUSTRATION● SAORI HAMANAKA

BREAK OF DAY

UP-BEAT

日本武道館でのコンサートを無事終え、オフに入ったUP－BEAT、今年を振り返ってみて、一番印象的だった、長崎の取材。とるにたらない、でも淡い想い出になるんだろう。ささいなできごと。そんなUP－BEATとの2日間。

PHOTO●KENJI TSUKAGOSHI (P231-235), FUJI TOGAWA (P236)
COPY●HIDEAKI WATANABE (PATi▸PATi)

■機内風景の中で

'88年9月7日、午前7時、羽田空港カウンター。万一寝坊をしてしまっては大変だ！　と用意周到、前日会社の仮眠ベッドで寝たのはいいが、下のベッドで寝ていた社内のKのいびきで、かえって寝れず、ボケツを掘った編集者。そして、いつもながらの淡々とした表情ながらも、目は微笑みを忘れないカメラマンの植田氏。二人は、それぞれの想いを抱いて、日本エアシステム361便長崎行きに搭乗したのでした。

二人の想い！　一刻も早く寝むりたい！　それは、ターミナルビルを離れてから5分もするかしないかで実現。機上はかっこうのベッドと化していた。

午前9時35分、気がつくと、飛行機はもう長崎空港に着陸してタクシーウエイをターミナルに向かってノロノロと進んでいる。

「植田さん」

と編集者。

「はい」

と植田氏。

「じつは今、転寝していたんですけど」

とぼく。

「ええ」

と植田氏。

「UP－BEATが海に落ちていた」

とぼく。

「はあ!?」

と植田氏。

「いや、よくわかんないんですけど、UP－BEATのメンバーがなぜが海の中に落ちていて、助けを求めているんです!!」

と声を低く、ささやきかける編集者。

「そんな、縁起でもない。たかが夢でしょ」

と植田氏。

「いや、違うんです。ぼくの夢ってけっこうあたるんです」

とより低音の編集者。

「ハイハイ！　わかりました」

と植田氏。

「へへへへへ」

と肩に乗ろうとする編集者。

こら、こら、背後霊じゃないっつうの。

東京のくもり空と違って、長崎は快晴。さっきのちょっぴり嫌な予感もなんのその。バスは空港から長崎市内へ向かっている。

UP－BEATは、『TO THE LASTING BLIND』ツアーの真最中。この時期は、九州シリーズというわけだ。

パチ■バチは、そんなツアーの合い間を抜って取材を行なおうとしている。

バスの中で、撮影候補地を地図をたよりに探すが、あまり名案が浮かばない。とりあえず、ホテルへチェックインして、その時、また考えることにする。今日一日は、ロケハン日としてとってあるから、時間は充分にある。あせらない。あせらない。

■海！

「そうですね。大波止がいいんじゃないですか？」

「大波止？」

「ええ」

「それって？」

「ああ、海ですよ。海」

「ウ…ウ－ウ…」

「そうですけど、何か？」

「イヤ、別に」

「いいですよ。ホテルから車で5分とはからないし、撮影場所はいっぱいあるからいろいろな写真が撮れるし、問題ないと思いますけど」

「はあ、そうですか」

「じゃ、取材の撮影は大波止の海で、ということで…」

「よ…よろしくお願いします」

「こちらこそ」

これ、地元のイベンターの人と編集者の会話。当初、山の上の方の観光名所で撮ろうか、という話もあがっのだが、あまりに有名すぎて、まるで外国人アーチストが京都を訪問して、お茶を立ててる図、となんだか似ているような気がしてやめてしまう。

が、その時、いきなりの〝海〟のふり。

しかし、まさか、夢で見たので、それはやめたい、とは言えず、結局、少ないスケジュール時間の中では、それがベストに思えて、OKしてしまった。ウルウルウル。

このOKが、あとで、ささいな、でも超あせりまくり事件をひきおこすことになってしまうのだが……。

BREAK OF DAY ? UP-BEAT

BREAK OF DAY
?
UP-BEAT

TAKEHIKO HIROISHI

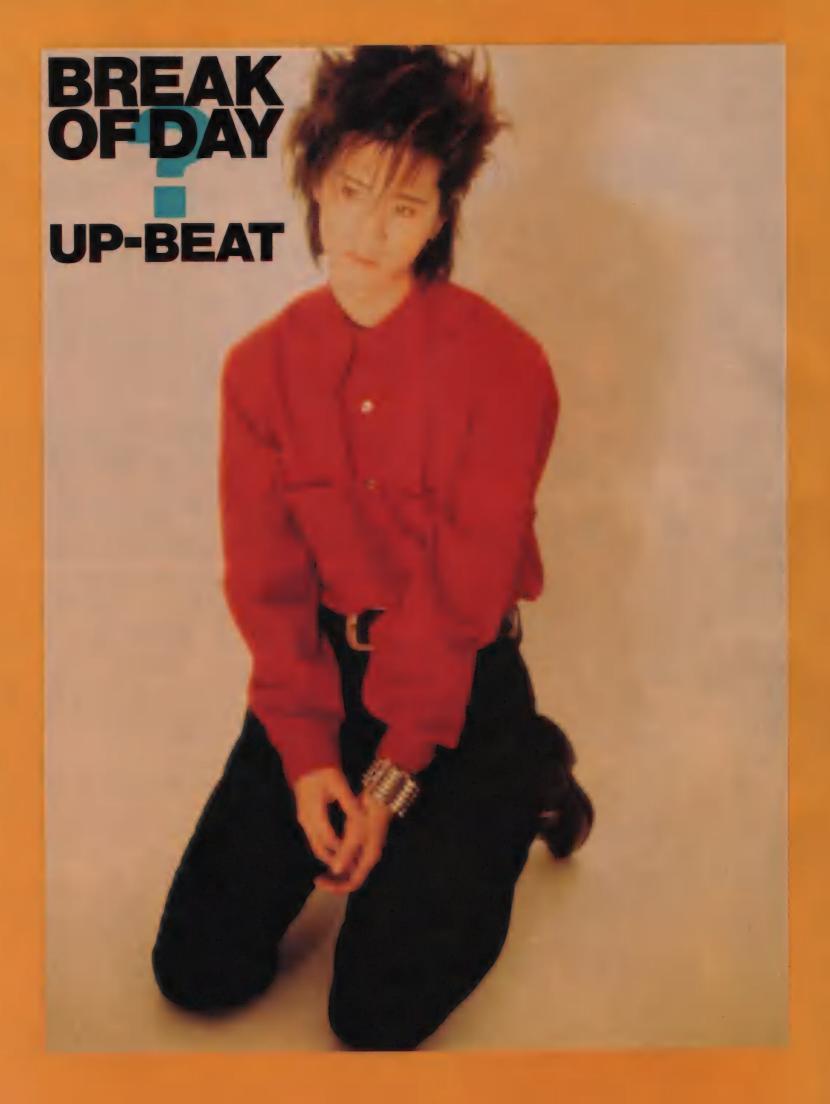
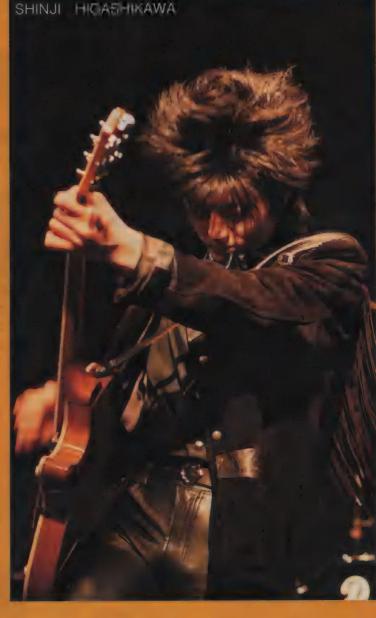
YUICHI SHIMADA

SHINICHIRO MIZUE

BREAK OF DAY UP-BEAT

■ガラス越しの風景

9月8日、浜屋という長崎にあるデパートのサテライトスタジオで、UP-BEATのメンバーと合流した。

が対面は、ガラス越し、何を考え、何をしゃべっているのかは、まったくわからない。

この日、午後から、このガラスばりのスタジオで、FM長崎の公録が行われようとしていた。

メインゲストは、広石武彦と東川真二だ。一枚のガラスを隔ててはいるものの、アーチストを身近に見ることができる機会はそうない。

熱心なファンの女の子達が100人近く、スタジオを遠巻きにして、2人が現われる瞬間を心待ちしている。

「キャーッ」

「ウー、ウソー」

「……」

2人が現われると、一人一人の反応が千差万別で、それを見ているとけっこう、おもしろい。

ガラス越しの広石武彦は、きれいだった。100人以上の女の子がガラスの向こうで、マイクに向かって熱心にしゃべっている彼を眺めている図は、彼には失礼かもしれないが、ショーウインドウの向こうに飾られた装飾品を眺めているような趣きがある。

が、ひとつ、決定的に違うのは、彼は、こちらにこびようとは絶対にしない、ということだ。

たぶん、あの端正な顔立ちだ。目の前のファンに、笑顔のひとつでも見せた方がいいんだろうに、彼は、淡々とラジオのおしゃべりをこなしている。

そういえば、時に同じような仕事をしている人から、〝あのAというアーチストはなまいきだとか、それならBの方が上〟などという呟きを聞くことがあるが、それは、大抵取材時の態度がよくないということに起因していることが多い。だけど、少し冷静になってみると、アーチストにとってはやはり、レコード作りとステージが本業なのであって、程度の問題はあれ、取材というのは二次的なものになるのは当り前という気がする。

話が横にズレたけど、広石は、そんな悪びれを見せることなく番組収録を終えて立ち上がる。瞬間、目と目が会うが、彼は気づいたのかどうか、まったくこちらを無視する形でガラスの箱から出て行った。少し残念だが、その方がカッコイイぜ、と一人で呟いていた。

■そして海!!

海での取材は、きわめて順調に進んだ。いくつもいくつもいいカットがとれた。ここにして正解だった。と思った。

最後のカットを船の上でとった。岸壁から10cmほど離れて船がロープでつながれてとまっている。メンバーとカメラマンは、その10cmの海をまたいで船上の人となる。

編集者は、その撮影の風景を見ていたくて、あくまで陸の人でいた。

撮影開始後30分。そろそろ終了だなと思って、ふと足元を見つめると、〝10cmの海〟が〝3mの海〟になっていた！

「ゲ！　船が離岸してしまった！」

あわてた。どうしよう！　こうしよう！　ああしよう！冗談言ってる場合じゃない。

他のスタッフは、撮影に夢中で気づかない。ここは勝負時だった。小学生時代、クラスのつなひきで優勝した自分を思い描いた。腰に力を入れて、唯一のたよりであるロープをぐいと引いてみる。すると、どうだろう！　確かな反応があるではないか！重さ何十トンという船を動かしてしまう自分に、編集者は、ひたすらよった。自分がこの世のすべてを動かしているのではないか？　そう思った。

撮影が終わるころ、船は見事に接岸していた。夢は、なんとか夢で終わってくれた。

長崎の夜、みんな楽しくやっていた。あるカメラマンの写真のとり方がおかしいと言って、みんなで盛りあがっていた。

ささいなことがすべておかしい。みんなガキにもどっていた。

〝船の力持ち事件〟秘話をぼくは少し自慢気に広石に話した。彼は『この世に、いったい夜明けは訪ずれるのだろうか？』と言った。人は、あきれかえると笑いさえ出ないらしい。

'88年12月、UP-BEAT、OFF。そして、'89年春の息吹きを充分に吸収して新たなUP-BEATが現われる。心待ち。

BREAK OF DAY ?

UP-BEAT

'89年のUP－BEAT。春から始動する。じっくりとOFFの中から、'89年の自分達を創り出そうとしている。まったく生まれ変わった彼らの姿を早くみてみたいと思う。さらなる飛躍の予兆の中で、体の震えを押さえながら。

英雄伝説

どうなの？ BAKU・PATi 秋の大運動会総集編。

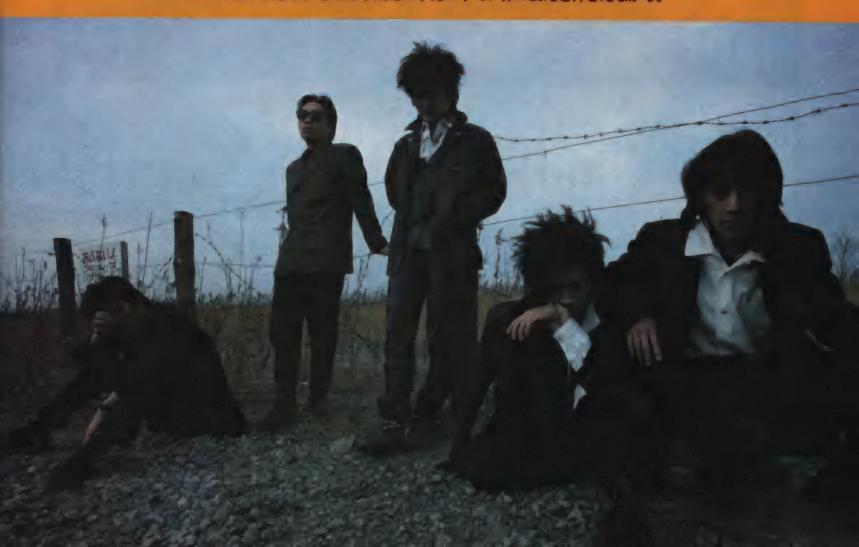
BAKUFU SLUMP

●世界広しといえども運動会ができるロックバンドはBAKUFU-SLUMPだけ！ ひどく暑かったような気がするBAKUFUのこの一年。ひとときたりとも休むことなく走り続けて、だけどなんだかとっても熱いものを私たちにくれた我らがBAKUちゃん。BAKU▶PATi大運会企画総集編と、"あの感激よもう一度"成績発表付運動会思い出話。プラス本人によるAtoZだ。

撮影●豊浦正明、植田敦、ハービー山口、山内順仁、井之上伸也　文●佐野郷子　スタイリング●相馬智

BAKUFU SLUMP

原宿の仮面男。企みはすでに……

2月。企みは秘かに始まっていた……

元はといえば、BAKUFUが面白すぎるのがイケナカッタ。その上、彼らはナゼカ（ナゼカは余計だが）人望が厚い。ルックスはこうだが（各自の判断にまかす）チャーミングな人柄が揃っている。そして、大のお祭り好きときている。もう、決定的だ。何の迷いもありゃしない。

BAKUFUとパチパチで何かできないだろうか――始まりはそれだった。

昨年末、BAKUFUが中心になって繰り広げられた一大セッション"究極のロックオーケストラ"を覚えているだろうか。有名ミュージシャンがズラリと揃ったあの企画、彼らの人好きの成せる技以外のナニモノでもない。企画力ではニッポン一のこの4人のことだから、叩き台に上った案も強力に面白かった。

出身県別勝ち抜きバンド合戦、ミュージシャン一斉知能テスト、喫茶マイアミ・コーヒー一杯耐久レースなどなど、実現不可能とはいえ、笑いには事欠かないアイデアが出る、出る。これに気を良くした我々は、読者をオルグしながら、さらに前進することを決意したのであった。

メンバー自らの命名で"どうなの"企画スタート

読者参加可能なイベント――営利目的ではなく、BAKUFUと読者が楽しめて、しかも安上りなお祭り。先ずは、メンバーがこんな案を出してきた。

全国伝言ゲーム。そっくりさんコンテスト。東京〜大阪障害物駅伝。日曜日の竹下通り走り抜けレース。CBSソニー出版オーディションつーのもあったし、ノン・ジャンルの"目立てば勝ちッ！"大会なんて無責任な企画も出た。優勝者は世界のCBSソニーグループの[illegible]会に出演できるというオイシイオマケ付き!? とまあ、読者をもて遊ぶような企画ばっかり。4月号から、読者の企画を募集することになったわけだ、題して、"どうなの!?"

5月号からBAKU▼PAT-I企画、ついに本格的にスタート。

計6日間の新宿厚生年金を大成功させ、BAKUFUの底力をまざまざと見せつけてくれた折も折、全国からさまざまな企画が届けられた。千葉県柏市（P河合の出身地）の"町起し"、100人一組のムカデ競争、こおりオニなどなど、一通一通の企画案はときに驚倒され、ときに翻弄されながらも彼ら4人の目を通して育まれていった。

そして、大勢が参加できて、なおかつ楽しめるイベントは、やはり大運動会しかない、という結論に達したのであった。

恵比寿に移転しても"代官山プロ"の社長、新田よろしく(笑)一郎氏はあのとき確かにこう言ったのだ。

「東京ドームでドカンとブチかまします」

と、さあ、皆さん、ご一緒にどーぞ。

「ウソつきぃ!!」――スッキリしたところで、先に進もう。とにかく、BAKU▼PAT-Iは全国七大都市の大運動会イベント決行のために動き出した。もう誰にも止められない。会場整備も東京ディズニーランドから清水の舞台まで挙がったが、東京ドームの夢と共に消えて行った。（涙）

タイトル"どうなの"に決定！

読者から寄せられた企画で絶賛されたのが、北海道の松山優子が考えた"ホラ、アホになる大会"だ。BAKUFUの名怪奇ナンバー「ホラ、アホになる」にノって、参加者がどれだけ自己を解放できるかを競うというトンデモナイゲームだ。この話は大いに盛り上って、各地の優勝者を来年1月の武道館のコンサートに招待して、ステージで踊ってもらおうということになった。その名も"Go-Go-AHO-DANCER"!! これはミック・ジャガー公演に感激したサンプが言い出したことだった。

これを機に、企画を運動会の種目に渉ったのはイイが、秋の大会に向けてこのときから早くもメンバー同士の闘いの火蓋が切って落とされていたとは!?

"お前の企画はバーツ"。審査員だ。

運動会に備え、なんと体力測定までやった。

「オレはバスケをやってたからね」と、河合は言ったが、高一で退部してから裕に10年以上。末吉は体操部だったが、部員は二人だった。元陸上部の中野、元バスケ部のほーじんと、体力には自信はあると言ったものの十代の頃に比べると……？ というわけで、一時はハウンド・ドッグに対向して"人間ドッグ"に入るという説も出たが、体力測定という無難なセンに落ち着いた。

"DO！スポーツ・プラザ"での測定に備えて、特に名を秘すところのP君が、ダイエットに励んでいたという事実が明るみに。中野に禁煙競争で負けたという悔しさが彼を駆り立てたのは言うまでもない。

決戦当日。"もやしダイエット"の努力は報われなかったものの。4人共トレーナーに"標準以上"のオスミツキをもらい、とりあえずホッ。ステージで鍛えあげられたパワーのタマモノでしょう。測定結果に一喜一憂するその姿は、高校男子そのもの。思えばこのときから、ほーじんはリードしていたっけ。

「体力の配分はしても出し惜しみはしないバンド」であるという自負が、さらにBAKUFUをパワー・アップさせていくのだろうか。身体を動かすとアドレナリンの分秘で気分がハイになるという説は、BAKUFUのステージで証明済みだ。

いーよ、いーよその企画、いーよ。

たくさんの企画の応募 グラッツェ、グラッツェ

フォークダンスに甘酸っぱい青春をかみしめたあの頃、サンプラザ中野は「涙の陸上部」で槍投げの選手だった。体育館の隅から好きな女の子ばかり見ていたパッパラー河合。二人きりの体操部をつぶしてしまったファンキー末吉。同じバスケ部の後輩と毎日手をつないで帰ってたほーじん。

それぞれの、クラブとそれにまつわる思い出は、胸にチクリと痛いBAKUFUの歌にも似たものだった。そんな彼らだから

BAKU▼PAT-I大運動会が終わってからゾクゾクと届いた参加者たちからのハガキ。実際に参加した側からの感想を一部紹介します。

●[illegible]でしたが、BAKU▼PAT-I大運動会に参加させていただきました。ロックバンドがファンと一緒に運動会をやってしまう……、この一見、異様な催しも、それがBAKUFUとなると違和感もなくうなずけてしまうのはなぜでしょう…。そして当日、何の混乱もなく無事に楽しく運動会は行われてしまう……。よく考えたらすごいコトですね。当日は、参加したみんなは、本当に楽しそうで、――こんなに出場する人がニコニコしている運動会は初めて見た――観ているだけの私たちも思わず笑顔になってしまいました。そして最後には"握手会"までやっていただいて…遠路静岡からやって来た甲斐があった！というものです。この光景はひどく感動的ですらありました。"運動会"なんて、私の年齢位になると"昔のコト"でしかなくなっていたけれど、こうゆう形でこれからもやっていただけるのなら、"ドッチボール"も"綱引き"もまたできるんだなって… しみじみ思いました。今度は是非出場したい！（静岡県 堀治あい子）

●とてもとても楽しい一日でした。大好きなBAKUFU-SLUMPと一緒に運動会ができるなんてっ、こんな嬉しいことやってくれるのは[illegible]以外ありません。そこで私が本当に感じたのは、"いっしょに走った♡"ということでした。コンサートではメンバーの人たちの方が、私たちより何倍も動いてるでしょ？ でも今回は私たちも一生懸命走れたから本当に嬉しかったです。こんな楽しい運動会はもうできないと思うけど、これからも私はBAKUFUと走り続けたいです。やっぱりBAKUFU-F

BAKUFU SLUMP

この日に賭けていた河合さん。

センタクものの匂いがなくても。

盛り上がる大運動会。血が騒いだ。

札幌ではリレーにすごく時間が…

どうなの？

BAKU▶PATi企画のすべて

●運動会に明けて、アホダンサーに暮れていったような'88年のBAKUFU-SLUMPとPATi▶PATi。すべては秋の大運動会実現へ向けて動いていた。……いやはやしかし、やりました、いろんなこと。企画会議からリレーエッセイ、体力測定までもやってしまってくれた我らがBAKUちゃんであったのだ。そして、大運動会の大成功！　全国7会場の興奮が今、よみがえる。

こそ。運動会というイベントが何の違和感もなく似合ってしまうのだろう。やっぱり、他のバンドじゃなかなか考えられない。BAKUFUだからイイわけだし、実現を可能にしたのだといまさらながら思う。

運動会の競技種目も沢山の企画が寄せられた。ゲタのマイム・マイム、スライム・バトン・リレー、ミュージック・カルタ（LPジャケットをカルタにした、イントロ当てゲーム）、アメ喰い競争のアメの替わりにメンバーの顔を埋めてみるとか、メンバーとの"肌の触れ合い"を楽しむ人間おくりなど。PAT²i読者のレベルの高さに感心、感心。1人で何十通も書いてきたコもいたし、ワープロでキレイに清書したコも、全校中の署名と8ミリビデオを同封してきた努力モノのコもいた。みんなの企画案を読んでいると、BAKU▼PAT-i運動会に賭ける意気込みがヒシヒシと伝わってきた。ウ、ウレシカッタよーぉ。

種目も出揃い、各地の会場も決定しつつあった頃、当のBAKUFUは、アルバムに先駆け、「ひどく暑かった日のラブ・ソング」をリリース。サンちゃんが出演したビデオ・カメラのCMも好評だったし、夏のイベントでもBAKUFUは大物の貫録を見せつけたのだった。

ついに大運動会は実現。ますますデカクなるぞ。

ニューアルバムのレコーディングを終了して、10月1日からいよいよ大運動会が始まった。企画募集から半年。無謀とも遠大とも思われたこのイベントが開催されたことは、我々の誇りである。参加者と一緒に競技し、汗を流し、笑ったBAKUFUが『HIGHLANDER』という素敵なアルバムを作ったことが何より嬉しかった。

色モノだのとホザいてるような見る目のないヤツらを蹴散らして、堂々とタップリ濃いアルバムを発表しちゃったBAKUFU SLUMP。シリアスだけど肩ヒジを張らない柔軟な姿勢が、もののミゴトに彼らの音楽スタイルになっていることをカタチにしてくれた。

「このアルバムでミュージシャンとして一歩高みに昇れた」という彼らの志の高さが作りあげたアルバムというべきだろう。

6月からエンエン続いている"CIRCLE GAME"ツアーも終盤に近づいている。3年ぶりの武道館を目の前にした4人の顔はより一層晴れやかで、誇らし気だ。

しかし、ひとつだけ心配がある。

運動会で選ばれたあのGo-Go-・AHO DANCERSが、大きな玉ねぎの下で踊ることを想像すると……。

イヤ。彼らはやって見せるはずだ。メンバーもそう固く信じている。どうか温く見守ってやってほしい。それとも一緒になってアホになりますか？

デッカクなってもエバラない、いつまでも運動会と青春が似合うBAKUFUでいてほしい、なんてマジでお願いしたい。

ANはやめられません。本当に好きになって良かったです。（三重県　松本徳子）

●ハチ▼パチの皆様！　この度は爆風スランプ秋の大運動会という夢のような企画を実施してくださいまして、本当に本当にありがとうございました!!　あんな近くで大好きな爆風のメンバーたちと一緒に叫んだり走ったりした10月18日の夜のこと、私は一生忘れません。今思い出しても夢だったのかと思えるような楽しい夜でした。とにかくありがとうでした。（東京都　相田照美）

●中野さん、河合さん、末吉さん、芳仁さんも考えられないくらい近くで動いていた、嘘みたいだった幸せなひとときでした。（広島県　袖木淑恵）

●BAKU▼PAT-i秋の大運動会は最高でした。バンドのメンバーがリーダーとなって運動会をやってしまうなんてBAKUFUじゃなきゃできないはずですよね。

私は河合氏のチームだったんだけど、"負けても勝つ"という言葉と、河合氏がやたらあぶない行動を起こしてしまうこと、次の走者がよくわかるよう、体育館の端から端までを行ったり来たりする姿…　etc　河合さんってやさしいわっと感激してしまいました。（群馬県　西村雅美）

●私、学校の体育大会でもあんなに燃えたことありません。それぐらい一生懸命になれたのです。"ここにいる人はみんな同じ気持ちなんだ、仲間なんだっ"って強く感じました。まわりの人から見たらバカかもしれない。でもそういうバカに、一生懸命になれるのってやっぱりすごいと思います。BAKUFUだからやれるんです。勝っても負けても喜べる、ひとつになれる。私とっても感激しました。（愛知県　高中晴代）

●閉会式の後、メンバーと握手できたでしょ。あの時のほーじんさんの手、しっかりと握手してくれたんだよ（愛知県　堀田和子）

BAKU KU BAKU

発表! 大運動会の成績

輝ける総合優勝はほーじんチームだっ

10.4 OSAKA 守口市民体育館
1. 中野チーム
2. ほーじんチーム
3. 河合チーム
4. 末吉チーム

10.2 SAPPORO 真駒内アイスアリーナ
1. ほーじんチーム
2. 中野チーム
3. 末吉チーム
4. 河合チーム

10.1 SENDAI 多賀城市総合体育館
1. 中野チーム
2. ほーじんチーム
2. 末吉チーム
4. 河合チーム

9.3 NAGOYA 名古屋市露橋スポーツセンター
1. ほーじんチーム
2. 末吉チーム
3. 中野チーム
4. 河合チーム

そして総合成績
1. ほーじんチーム
2. 中野チーム
3. 末吉チーム
4. 河合チーム

10.18 TOKYO 夢の島総合体育館
1. 末吉・本田チーム
2. ほーじん・黒石チーム
3. 中野チーム
4. 河合チーム

10.14 HIROSHIMA 広島サンプラザホール
1. 河合チーム
2. ほーじんチーム
3. 末吉 チーム
4. 中野チーム

10.8 FUKUOKA 福岡中央体育館
1. ほーじんチーム
2. 末吉チーム
3. 河合チーム
4. 中野チーム

メンバーと一致団結。走った踊った感動した。

作戦会議が優勝の秘決? 強い。

「世界広しといえ、運動会のできるロックバンドはBAKUFUしかいない!」

彼らの所属する事務所代官山プロ社長は、キッパリ言い切った。さすが元スペクトラムのリーダー。度胸が坐っている。運動会でも当然、司会・進行役を務めたが、それはギョーカイの一部で囁かれている"出たがり"ゆえの行動ではない。

体育館のフロアでメンバーの登場をいまか、いまかと待ち受けている体操服姿のうら若き乙女達から「新田さーん!」と声援を受けてまんざらでもなさそうなようすに、ギョーカイのウワサを一瞬信じた私だった。

受け付けで配られた番号順にチームが分けられ、リーダー入場。コンサート以外で間近に彼らと会えるチャンスも少ないというのに、一緒になって遊べるなんてめったにあるもんじゃない。チーム・リーダーという立場上、あたかも"若き部活の顧問"といった風情ではあったが、競技が始まると、つい一生懸命ムキになってしまうところがホホエマシイ。リーダーの性格がそのままチームにダイレクトに反映されて、ガッツでは他の追随を許さないほーじん、ノンビリムードのほのほの河合は勝負にはやや不向きだった。しかしながら、「負けても勝つ!」という意味不明の合言葉で、他チームを威嚇。ついに広島で、初優勝を果したときは「本気で嬉しかった」そうだ。

ゴーゴーアホダンサーの候補だっ。

競技メニューは①サバイバル・ドッジボール——一度当てられたら中には戻れない、コートの人口密度は満員電車並みだった。

②イタイ・イタイ・かご負い玉入れ——リーダーがコート中央にかごを背負って坐り、チームメイトが玉を投げ入れる。髪の毛のない御両人にはけっこうツラかったゲーム

③力と力! 引っぱりずもう——各チーム腕に自信がある者同士で競う。女の意地を見せつけられて、ギャラリーはア然とした。

④Go—Go—AHO—DANCER——健全な運動会で唯一倒錯的な種目。フロアをのたうちまわり、バク転、前転、側転にコサック・ダンスを披露してくれたが、その光景は一種異様なものが……。勇猛果敢でとくとその雄姿をごらんあれ。

⑤大綱引き大会——通常の綱引きと同じだが、人数が多すぎて綱を握り切れない者も。

⑥全員リレー——各チームおよそ百人の、時間にして20分にも及ぶロング・リレー。アンカーはメンバー4人。マジで白熱したレース展開になり、コーフンはピークに。

時間にして約2時間。しかし、ホントにアッという間の楽しい充実したひとときだった。少数ながら男子の奮闘、父兄の頑張りも印象に残った。

最初のうちは、ちょっとぎこちなかったり、照れていた参加者も、ラストの全員リレーが終わると、一目散でチーム・リーダーの元に駆け寄っていった。正直言って、ワタシなんか目頭熱くなっちゃったもん。すごく良い光景だった。アー、運動会やって良かったなあと思った。もしかしたら、学校の運動会じゃ、もう、ああいうさわやかな感動って失われているのかもしれない。本来の運動会の楽しさを、みんなが感じてくれたとしたら幸いだ。

「体育の先生の気持ちになる」と、メンバーも言っていたけど、それはやっぱり人柄のセイでしょう。一緒になって楽しんじゃえる童心とチームをまとめる統率力つーもんがBAKUFUの4人にはあるということだ。

コンサートのコミュニケーションとどっか近いような気もする。

「BAKUFUにしかできない」運動会とBAKUFUにしかできない音楽は同じ一本の線に並んでいる。だから、BAKUFUってカッコイイんだと思う。

大爆風事典
BY BAKUFU-SELF

ハヒフへほーじん

A 味の素ホンダレーシング
今年はチャンプになれず…。ガンバレ。

B バイク
もう11年目。3年前に1度入院。ギプスしてコンサートやったな──。

C センターピン
爆風は全員動き回るのでピンスポットの人はいつも大変だそうです。

D ドングリ河合
ライブハウスの時の彼の名前。

E E[illegible]
もう誰も言ってない。

F FUNK
パンクではない、ＦＵＮＫ。パンクよりメジャーな音にするのは、この私の使命です。

G GSX-R
いまのガンマの前のバイク1万kmでオシャカ。ゴメンヨ…！　新製がホシイ!!

H HOJIN
本名です。兄キはけーじんです。

I INF
もちろんＩＣＢＭだってなくしてくれ!!

J ジョーダン
僕のは東京の人に通じないのが多い。

K コリア
とてもいい国だと思う。南北問題をなんとかして…。

L LSI
こいつのおかげで今やデジタルサウンドだらけ。便利なのか…な？

M ミュージック
そう。一番大事な物のひとつ。これだけは一歩もひけないぞ。

N No!
やっぱり言いすぎは良くないけど、言う時はハッキリね。

O 大阪
大阪生まれです。

P プリアンプ
もう7年間アレンビックです。

Q キュー
エンベロープフィルターについてるつまみ。

R レース
いつか出てやる、ゼッタイ出てやる。出るからには勝つ!!

S Sサイズ
特にＴシャツはね。

T ツーリング
秋が最高！

U UCCヤマハ
全日本チャンプおめでとう。

V VHF
僕はベータしか持ってない。

W ワイヤレス
ライブの定番。僕はレクサーを愛用してます。

X X'マス
X'マス。あんま好きやないなー。

Y YZR
分かる人に分かればよい。世界最速のバイクです。

Z ZOO
年に一度は行く。サイが好き。

NEWファンキー末吉

A 愛
すなわちＢＡＫＵＦＵ-ＳＬＵＭＰ。みなぎる活力。

B BAKUFU-SLUMP
Ｂから始まる名のバンドはビッグになるというジンクスがある。ＢＡＫＵＦＵもＢから始まる。

C チャーシューメン　黒石
パッパラー河合先生から授かったうちのサポートメンバー(sax)黒石正博のステージネーム。

D だんほんだ
サンプラザ中野先生から授かったうちのサポートメンバー(key)本多たけしのステージネーム。

E えん会
Newファンキー末吉の生きがいである。町を歩いて居酒屋の店員に声をかけられたら一人前。

F FUNKY末吉
髪の毛を切って、Newファンキー末吉になった。

G give up
自慢じゃないが[illegible]はステージでgive upしたことはない。何があったとてへこたれない。

H 平和
すなわちＢＡＫＵＦＵ-ＳＬＵＭＰ。かさばる迫力。

I 一等賞
今だかってＢＡＫＵＦＵは華々しい一等賞をとったことがない。いつかNo.1になってやる!!

J joke
[illegible]で冗談で言ってたことが、本当にステージのネタになるから恐しい。武道館をお楽しみに。

K 根性!!
Newファンキー末吉の一番愛する言葉。いや信条、いや性格そのもの…。

L Lap-Top （けいたい用コンピュータ）
Newファンキー末吉は旅には必ずこれを持ち歩く。重い!!　みんな必ずバカにする。

M マンション
長年アパート暮らしの末吉はボチボチマンションにひっこそうとたくらんでいる。

N 新田一郎
我々の所属する代官山プロの社長。昔スターだったと本人は言う。涙もろく、いい奴である。

O 大きくってすいません号
我々がアマチュアのころ全国のライブハウスを回ったバス。30万円で買ったが浜松で煙をふいた。

P パソコン通信
Newファンキー末吉が最近こりはじめた。彼の唯一の趣味。

Q quarter
オレたちは4人でひとつだと思ってがんばってる。するって～と、ひとりは1/4か？

R rental record
貸しレコード店行くな！　オレタチのアルバムは買って初めて良さが分かるぞ！

S 幸せ
すなわちＢＡＫＵＦＵ-ＳＬＵＭＰ。みなぎる体力。

T tension
オレたちのテンションの高さは日本一、いや世界一の自信はあるぜ！

U USA
アメリカのようだが、実はうちの母親の実家なのだ。高知県宇佐市、文句あっか…。

V voice トレーニング
中野がずっと通ってるが、最近なんと末吉が「オレも通うぞ!!」と宣言して人を驚かせている。

W wife
うちのバンドでこれを持ってる人は一人もいない。まだ俺達は世間的に一人前ではないらしい。

X スーパーラップX
パッパラー河合が初めて作詞・作曲・リードボーカルをとった名曲。『ＪＵＮＧＬＥ』のＢ－１。

Y 代々木国立競技場
本当は今回ここで2ＤＡＹＳやろうと思ってたが、冬はスケートリンクになってて不可能だった。

Z 全力疾走
年をとっても相変わらずステージで河合が全力疾走をする、というＢＡＫＵＦＵが私の夢である。

GREAT-SLUMP DICTIONARY BY BAKUFU-SELF

サンプラザ中野

A **apple**
今年中野が買ったコンピュータ。

B **B-type**
中野と河合の血液型。

C **cancel**
公演中止にならないように祈る私。

D **DEVO**
ＵＳＡの大好きなバンドの名前。

E **earthworm**
ミミズ。[illegible]ミミズのラブソングという曲を歌っていたぞ。

F **future**
未来。明るいといいなと祈る私

G **goverment**
政治学科だった私。

H **happy**
しあわせ？

I **identity**
ロックボーカリストなのよ私。

J **jealousy**
けっこうしっと深い私。

K **kiss**
これが上手いと女にもてる。

L **laugh**
さぁLet's laugh Let's laugh！

M **mannerism**
うーん、人生はこれとのたたかいだな。

N **Nakano**
中野のこと。

O **octave**
５オクターブの声が出る私。[illegible]

P **pajamas**
パジャマでねる私。

Q **QUEEN**
ＵＫの好きなＢＡＮＤ。

R **RUNNER**
ＮＥＷＳＩＮＧＬＥ。

S **Sunplaza**
俺のこったい！

T **tabacco**
俺は一年以上前にやめた。みんなもやめなさい。

U **unbelievavle**
しんじられないという。女子大生のような単語。よく使う。

V **vegetable**
野菜はあまり好きでないので食べなくてはいけないと思っている。

W **Waseda**
大学。

X **x-ray**
放射線。

Y **yellow**
黄色人種だよーん！

Z **zebra**
どうも失礼しまうま。

パッパラー河合

A **アリナミンA**
必要な人になりたくない。

B **B.S**
最近衛星放送Ｂ．Ｓといい、ＢＡＫＵＦＵ-ＳＬＵＭＰもＢ．Ｓ。まぎらわしい。

C **オロナミンC**
自動販売機で買う自分が情けない。

D **D.N.A**
とっても不思議なもののひとつ。

E **エンターティナー**
なってみたい。(めざしているわけではない)

F **first**
子供のころから一等に縁がない。

G **Giants**
巨人軍はベンツばっかだ。

H **heart**
人の心ほど不思議なものはない。

I **インテリジェンス**
生きていくには必要であろうか。

J **Japan**
なぜ日本をJapanというのでしょうか？

K **Kawai**
茨城県の水郡線に「河合」という駅があります。

L **let it be**
小学生のころラジオから流れてきて「ＬＰ」のＣＭだと思ってた。

M **マリリン・モンロー**
幸せそうで、かわいそうでもある人

N **ニナリッチ**
なぜこんなにブランド、ブランドと言うのだろうか。私にはわからん。

O **O次郎**
Ｑ太郎の弟。どんどん家族がふえる。不思議

P **パッパラー**
５年目にしてやっとなれてきた。

Q **クオリティー**
今の世の中これは[illegible]視される。

R **route-6**
国道６号線は子供のころになれ親しんだ道路。

S **silver**
銀製品ってカッコイイと思う。(アンアン[illegible])

T **テニス**
大金を出してまでやるものであろうか？

U **ユニットバス**
ゆっくりつかれないので[illegible]い。

V **ボイジャー**
今どこにいるんでしょう。

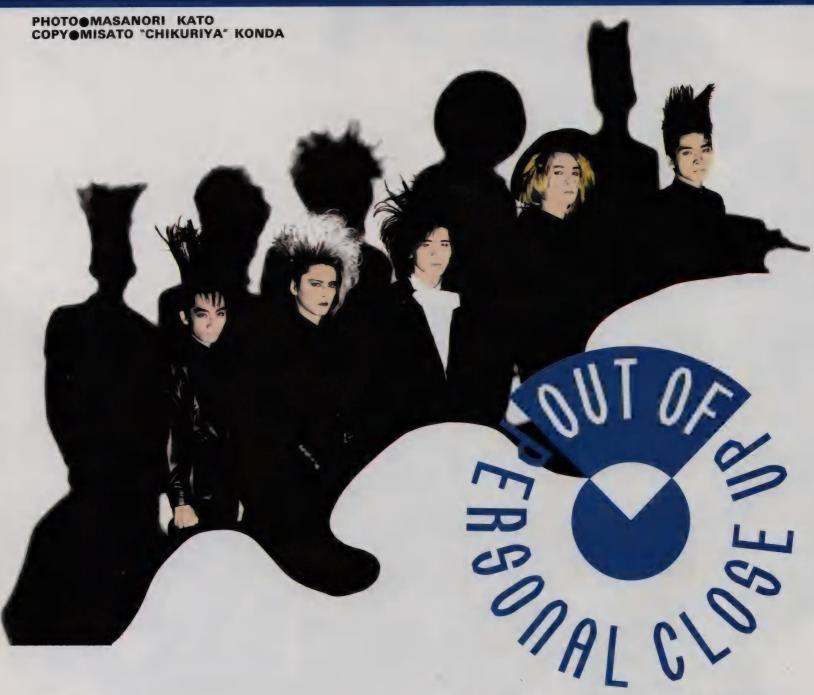
W **world**
世界をほしがる人はどんな神経をしているのかな？

X **X'mas**
ここ10年はパーティーなんてやったことはない。

Y **yesterday**
大好きな曲。

Z **zoo**
ひさびさに行ってみたい。

BUCK+TICK

PHOTO●MASANORI KATO
COPY●MISATO "CHIKURIYA" KONDA

●今年後半、ロック・シーンにおける流行語No.1は、なんといっても、あの〝重低音がBUCK-TICKする〟であろう。桜井敦司本人のMCはもとより、彼等をとりまくミュージシャン達までが、それぞれのステージで、取材で、そのパロディを演じる程の隆盛ぶり(?)であった。うふふ……やっぱり彼等はヘンだ。

〔ギャップ〕

この1年で、彼ほどイメージが変わった人はいない。天と地の差ぐらいは変わったであろうか。こんなにも〝いいヤツ〞だとは思わなかった。いや、別に彼が大っぴらにワイ談をするようになったからっつーわけじゃない。でも、その部分が大きかったりはする(笑)。

個人的な話になるけれど、私は桜井敦司がずっと苦手だった。インタビュー以外は、ほとんど口をきけなかった。仮にも〝カリスマ〞と言われた人である。その美しい容姿は、間違ってもジョークを言ったりするタイプではなかった(と、かたく思い込んでいた)。

それが、どうだ。

例の「重低音がぁ〜」発言に代表されるように、大阪弁で「ほないこか」と言うわ、夏のイベントで「あちぃのはヤダァー〜ッ」とダダをこねるわ、「お楽しみちゃうかぁー」と何気にエッチ発言にもっていくわ、とにかくぶっちぎりで笑いをとりまくるではないか。

「以前は、肩意地はってツッぱってたから」

ええかっこしいをやめても、つまりは人間くさいところを見せるようになっても、彼は充分魅力的だ。

「今の方がラクといえばラクだね。やっぱり」

そういえるようになった桜井君の方が私は好きだ。社交辞令ではなしに、カッコイイと思う。でも、「男の方がロマンチストなんだよ」などというキザなセリフが似合う桜井君も、やはり捨てがたい、と思ったりなんかする。

〔ボ――――――――――――……〕

ある日のインタビューの時のこと。

私「じゃあ次は星野君、今度のツアーについて何かコメントを」

星野「……」

私「[illegible]星野君ってば」

星野「今までよりも動きのあるステージにしていきたいなと」

私「それ、さっき今井君がいったことと同じじゃん（笑）」

星野「[illegible]（笑）」

私「[illegible]じゃあ困る（笑）。何か言って」

星野「……カンベンして下さい（笑）」

私「…………」

オイオイ（笑）。

どこに取材中に「カンベンして下さい」なんて言うヤツがいるんだよ（怒）。まったく、星野君という人は、マジでこんなことをやらかしてくれる人なのだ。そりゃあステージでギターを弾いてる時はカッコイイけど、ひとたびギターを手離せば、ただのぼのぼの……いやいや、失言。（でも、半分はマジだ）

なんだかんだといっても、この１年で男っぽくなった星野君。その分、急激にファンの数がふえたようだが、だからといってあっちゃんがMCしている最中にピックを投げるのはどうかと思う、なんつって（笑）。秘かに自己主張をしはじめつつある星野君が、一体どこまで饒舌になるのか――それが今のところ私が一番気になっていることである。

〔　　　　　がんばる　　　　　〕

「これからも一生懸命がんばらなきゃいけないなって思います」

デビューした時、ＰＩＴでライブをやった時、アルバムをリリースした時etc.ユータの口から、この言葉が出なかった日はなかったように思う。ただでさえ堅実な性格なのに、バクチクが加速度的に大きくなっているからよけい彼は慎重に、かつ、努力の人にならざるをえないのかもしれない。

あと、ユータといえば忘れられないのはなんといっても、その"気配りぶり"だ。かつてここまで他人に気を使うミュージシャンがいただろうかと、業界内でウワサになっただけのことはある。撮影の時、いち早く着換えとメイクをすませ、他のメンバーの準備ができるのを待っている私達の話し相手になってくれたり、帰り際にスタジオのスリッパを片付けたり、飲み物のオーダーをとってくれたり、時には話の進行役をしてくれたり。まったく"まだ若いのに、よくできた人"である。

でも、これはあくまでもシラフの時だってことを覚えておいてほしい。ここだけの話だが、(とはいっても、ここは公の場だったな)ユータは酒グセがワルイ（笑）。一緒に飲んだ人は「酔払うとカワイイ」と口をそろえて言うが、ホントにそうらしい。ちなみに、そのへんの詳細は、レピッシュのマグミがよく知っている（笑）。来年も、"おいしいお酒"が飲めるようにがんばってほしいと思う。

〔　　エライ　　〕

今井寿のビックかアニイのスティックか、といわれるぐらい、ライブではガンガンとスティックを投げまくるアニイ。この間は、ステージ上から客席を"写るんです"を使って撮影するっつーことまでやってみせるなど、ビジュアル・ドラマーとしてのポジションを着々と築き上げているようだ（笑）。

まっ、冗談はさておき。

この5人の中で、特にポピュラリティについて貪欲なのがアニイだ、と私は思う。キャロルにしてもピストルズにしても、充分ショッキングでアナーキーな存在でありながら、その一方でしっかりとポピュラーだった。そんなバンドをフェイバリット・アーティストにあげたかと思うと、"俺、ユーミン好きだよ」とヘーゼンとした顔で言ったりする。そして、「将来はビートルズのようになりたい」という夢を持っている。守りに入った上での売れ線であることを否定し、攻撃的な姿勢のまま好きな音を追求した結果、"売れて"しまう道を選ぶ。CM出演やレコード大賞新人賞も、すべては音楽をやっていく上での付加価値にすぎないが、バクチクの持つポピュラリティを如実に反映しているわけで、この図式はアニイの描くバンド像に近いような気がするのは私だけだろうか。

何事につけても現実的なアニイは、バンドの将来を絵空事として捉えていない。それでいて弱音をはかない彼の姿勢は、とてもたくましく頼りになる。

BUCK-TICK

TOLL YAGAMI
HIDEHIKO HOSHINO
HISASHI IMAI
ATSUSHI SAKURAI
U-TA HIGUCHI
BUCK+TICK

UND DOG

GOLD HO

PATi▸PATi & GREY HOUND PRESENTS!!

[いざ、立ち上がらん、ハウンド・ドッグ!]

ハウンド・ドッグ結成以来、初めてのニューヨーク・レコーディング。
6人が、それぞれの想いを描いてケネディ空港へ降り立った。
アメリカ人プロデューサーのもとでの初の音創り。
それぞれの自己主張が火花を散らし、天高く華麗に飛翔する。

PHOTO●JUNICHI TAKAHASHI

[ゆけ!ゆけ!ハウンド・ドッグ。]

音創りのコンセプト? そんなものは何もなかった。
ただ、日々6人が感じとっていた熱い気持ちを吐き出していた。
だから、このアルバムにはこれっぽちの嘘もない。とびっきりのやつ。
『GOLD』全10曲の煮えたぎるような情熱がおしよせる!!

GOLD HO

PATi▸PATi & GREY HOUND PRESENTS!!

UND DOG

パチ▸パチ編集部、ハウンド・ドッグのファンクラブ"GREY HOUND"の茶ぐま、㈱マザー取締役宣伝部長佐藤ノリノリ庄平。そして、ドッグの某メンバーが飲めや歌えやのどんちゃんさわぎ!! ついに、そのさわぎがピークに達した時、"ノリノリ"が言った。

GOLD HO

PATi▸PATi & GREY HOUND PRESENTS!!

[見よ!この勇姿!なんというりりしい姿だ!!]

「よーし! アルバム発売を記念して、スペシャルブックを作るぞ」
「えい、えい、おう! やりー、ヒューヒュー。ゲロゲーロ!」
というわけで、ハウンドッグのスペシャルブックを作ることになった。へんなの。でもいいか、お祭りだぜー!いえー、いえー!

●A4変形●150ページ予定●予価1,500円

PATi▶PATi & GREY HOUND PRESENTS!!

HOUND DOG G O L D

'89年1月下旬発売予定!!

[さあ、すましてないでみんな買おう。]

SPECIAL EDITION

➲というわけで、(何がというわけかようわからんが) ハウンド・ドッグのスペシャル・エディション『GOLD』がでる！
➲さて、さてその中味だが、いまだに決まっとらん。みんな、"あんなことやりたい！　こんなことやりたい！"と企画ばっかりいっぱい出ているが、そのうちのどれを選んでいいものやら、スタッフは悩んでいるが、一部決定分を紹介すると、
➲ハウンド・ドッグ『GOLD』スーパービジュアル！　アルバムイメージをもとに最高の写真集を届けてしまうぜ！
➲母は語る――聞くも涙、話すも涙　メンバーそれぞれのお母さんが息子を赤裸々に語る！　秘話が満載！
➲メンバー・パーソナルスケジュール！――なんとメンバーのプライベートスケジュールが載る。こんな事していいの？
➲ハウンド・ドッグ『OVERLAND』ツアー珍道中日記――ツアーに出るといろんなことがおきるわけだ。はてさて？
➲あーあ、これだけでも何分の1も紹介できん。ウル、ウル。まあ、そんなわけで楽しさいっぱい感動いっぱいの本だよ！

キリトリ線

HOUND DOG SPECIAL EDITION GOLD

▶CBS・ソニー出版

●書店(番線)印	●注文伝票(注文は書店で)		年　月　日
	HOUND DOG/GOLD　●'89年1月下旬発売予定　●予価1,500円		
	●住所		●TEL
	●お名前	●年齢	●職業
書籍扱い	〒102 東京都千代田区五番町6-2　TEL.03-234-5811　CBS・ソニー出版		

※書店様へ：このカードがまいりましたら、台帳にお控えの上、お取引の販売会社へお早めにご注文ください。
※この注文伝票は、コピーしたものでも構いません。

RED WARRIORS KINGS '88

1000円▶3000円王様たちの'88

ENCORE VERSION

●とてもいろんなことをやってくれた彼らです。そしてもちろん、とても素敵だった、'88年の彼らです。どういうわけだか、バチ×バチでは、RED WARRIORS vs 藤沢映子女史のインタビュー、バトルロイヤルは必ずユーモアあふれるものになってしまったのだけれど…、毎号毎号、書き足りないと嘆いていた女史に、その要求不満部分全て出してもらったら…

PHOTO●YORIHITO YAMAUCHI KENJI KIMURA RYUZO MINEMURA

KING'S EPISODE '88

ゴジラとたわむれた。

「レッド・ウォーリアーズ」は、'87年はインテリ、無口でいる」
という話らしい。
「バカなこといったり、何でもやるのは'88年だけさ」
ともいっているらしい。
これにかんして、私は、大いに[illegible]。なんたってもはや彼らはビッグ・バンドである。そんなバンドがた[illegible]オリンピックに影響受けたからといって次のレコーディングはバルセロナにの、カラオケ暴露話で足の引っ張りあいするなの[illegible]と、[illegible]あいやん。
まったくこの1年、ほんまに笑かしてくれたもんだ[illegible]。[illegible]のあの奇妙[illegible]インタビューの数[illegible]数は、断じて私の[illegible]ではない。[illegible]。すべては、彼らの身から出たサビである。
しかし、[illegible]は、[illegible]。ならば、この場で、1年間の[illegible]洗い落としてしまったほうがいい[illegible]、この1年間、スペースの都合上カットされ[illegible]を一挙大公開することにした。
さ、さ、みなさん、気分をリラックスさせて、高笑いしても人に変な目で見られない場所を探して、[illegible]ん、レッド・ウォーリアーズ、'88年度の笑い納め！（ただし、マジなのもあるので、あまり期待しすぎないように）。

〈パート1〉 時は'88年1月16日、武道館を終えたばかりのシャケとユカイにインタビュー。誌面には、シャケのフランスパン好きのこと、武道館の感想、夢の6ケ年計画などが載った。

ユカイ （かなり唐突に）そういえばさぁ最近、みんな老けたよねぇ。
——ハァ、メンバーが？
ユカイ ウン。この間さぁ、スタジオで撮影してた時、みんなの顔みて思わず吹き出しそうになっちゃったよ。
——どうして？
ユカイ しぐさとか見てるうちにさぁ、"あー老けたなぁー"とかさ、"考えてみたらもう大台に近いヤツもいるんだなぁ〜"なんてことが浮かんできて、可笑しくなっちゃったんだよ。（とひとりでニタニタ）
——よくわかんない・・・・
ユカイ やっぱね、いちばんしぐさが変わったのは、シャケなんだよ。（ニヤニヤ）昔のしぐさと違うんだよな。
シャケ なんだよ、それって！（半分笑って半分怒ってる）
ユカイ なんかさ、メンバー見てるとき、最近可笑しいんだよ。
——（アナタのほうがよっぽとオカシイけとなぁ）
ユカイ オレ？ オレはそんな変わってないけど、シャケがさぁ・・・・クックックッ・・・・
シャケ なんだよ、自分のことだけ棚にあげて、変なヤツだなぁ。
ユカイ だって、シャケ、昔はこういう革ジャン嫌いだったもん。（わりとフツーの黒の革ジャン）もっとさぁ派手なカッコしてたじゃない？
シャケ これからするんだってばぁー、いちいち人の服でうるさいなぁー。（笑）
ユカイ （それでもしつこく）でも、しぐさが違うんだよね。
シャケ そんなこというんだったら、オレだっていっちゃうよ。武道館の楽屋のこといっちゃうよ。
ユカイ えぇー！ それだけはいいっこナシだよぉー。（急に目がマジになる）
——ナニナニ（全員興々として身を乗り出す）
シャケ ひどいんだぜぇー（笑）
ユカイ やめようよぉー
シャケ 武道館のステージが終わってからさぁ、楽屋に戻ったらさぁ、なんかユカイくんがステージで使ったくつ下をドライヤーで乾かし始めたんだよ。ほら、ドライヤーの口んとこにくつ下履かせてゴーンってやると、くつ下がホワーって足の形になるじゃん？ アレ、アレ。そしたらさぁ、臭いが楽屋中にフワーンって広がってさぁ（一同、食事中にもかかわらず大爆笑）
ユカイ 食ってる時にこんな話やめようよぉー
シャケ でさ、よくよく見たら、そのドライヤー、オレのなんだよ。（笑）
——あのゴーカな武道館の楽屋でねぇ。
シャケ そうだよ。ビートルズだって使った楽屋がだよ。くつ下の臭いにうめつくされたんだよぉー（全員体をよじって笑い転げること数分間）
ユカイ 食ってる時にする話じゃないよぉー
シャケ 黒くてちっちゃいくつ下がぶらんぶらんしてたよ。（笑）
ユカイ そんなことバラすと、オレ、どんどん"ゆかい"なイメージになっちゃうよぉー
（ウム、さすがにワタシも武道館の興奮さめやらぬあの時期にコレを書くのを控える節度はありました。ま、今となっては時効ですが・・・・）
——ところでRED'Sのなかで詞の占める割合というのはどのくらいあるのですか？
シャケ わかんないなぁ・・・・
ユカイ 昔はぜんぜんなかったね。最近は強くなってきたね。
シャケ ウン。でてきたね。
——そうなると、シャケの作る詞とユカイクンの作る詞とで、歌う側、演る側それぞれの違和感のようなものは出てこないですか！
シャケ わかんないよ・・・・
ユカイ いや、なくはないけどね・・・・「ルシアンヒルの上で」の時は、最初入り込めなかったから・・・・ま、あれは、上手く歌えなかったというアレもあったしさ・・・・ボソボソッ
シャケ だって、あんときユカイくん、練習しないんだもん！（笑）
ユカイ アッ、それいっちゃダメだよぉー
——あーあ、ナサケナや。しかし、[illegible]の作る詞に関しては、ノータッチなの？
シャケ うん。
ユカイ うそだぁーわりというじゃん！
シャケ そっかなぁ、オレっていう？
ユカイ "ここはこうしたほうがいい"っていうじゃん。（笑）
シャケ あぁ、それはさ、メロディーにのるのらないのっていう部分でいうだけだよ。
——ガンコですねぇ。そのシャケは、ユカイクンの作る「WILD&VAIN」のような詞の世界はどうとらえてる？
シャケ ロッキーホラーショウみたいな狂気というか…
ユカイ あれは、アリス・クーパーなんだよ。
シャケ でも、フツーはああいうことは書けないよ。や

KING'S EPISODE '88
TRIUMPH

YUKAI変装シリーズ……。

り始めたばかりのアマチュアバンドかさぁ、超一流バンドか、どっちかだよね。（笑）
ユカイ　それ、どういうことだよぉ
シャケ　だってアレさぁ、オムニバスのイベントかなんかで、あんましオレらのこと知らないヤツが聞いたりなんかしたら、"こいつらバカじゃねぇか"とおもうよね。"何ほざいてるんだ"になるよね。（笑）
ユカイ　ほぉかな？
──まあ、それがRed[illegible]らしいともいえますが………
（ここで話は転換）
シャケ　そういえば、武道館のとき、オレ落っこちそうになったんだよね。アレ落っこちてたら中断してたかも知れないよ。
ユカイ　シャケってホントに落っこちるんだよ。名古屋の時落っこちたもん。
シャケ　そういうことはいわなくていいんだよ！
ユカイ　なんかフラフラッとしてるなぁとおもってたらフッとステージからいなくなってしまってた。（笑）
シャケ　いや、前へバァーといったらさぁ、止まんなくなってさぁ、こりゃこのまま必死に耐えても無理だな、と思ってホロッと落っこちたんだよね。（笑）
ユカイ　てさあ、前の席のほうにいた、いかにもバンドやってそうなヤツらが、それまではクールにシャケのプレイ見てたのに、落ちた瞬間、指さして笑ってるの。だってさぁ、シャケってさ、普段から風が吹いただけでフラフラしてんだもん。（笑）
シャケ　そんなことないよぉー。なら、ギター弾きながらああいうふうに動いてみろよ。
ユカイ　いや、オレはいいよ。ほら、歌に集中しないといけないし、いろいろとやることも多いしさ。ハハハッ
──互いに自分の立場を守ろうとして必死です。（笑）

〈パート2〉　時は2月14日、聖バレンタイン・デー。3作目のアルバム制作中のシャケとユカイにインタビュー。シャケ初ボーカル作「Seakin' Funky Night」の話をしきりとテレながら語った部分をメインに記事は構成された。しかし、このインタビューと銘打ちながら、誌面に載らなかった部分は………。
（まずはホンネトークに）
──アルバム制作にあたって、プロデューサーをたててみたいということはない？
シャケ　今はまだいいんだけど、いずれやってもいいなとは思ってるんだよね。次とか、その次とかに。今は、その前にやりたいというのがあって………
──自分達でどこまでできるか試してみたいんだ。
シャケ　ウン。でも、プロデューサーつけるってことは、ケッコー常識的なことだから、拒絶する気はない。やってみたいって気もすごくあるし。
ユカイ　どうせだったらさ、刺激のあるプロデューサーがいいよね。
シャケ　そうなんだよ。だからさぁ、そこが問題なんだよ。日本人で刺激的な人っている？
ユカイ　いないんだよね。
──なら、海外の人は？
シャケ　向こうのプロデューサって印税で金を取ってるワケじゃない？　だから、有名なプロデューサーなんかは、マーケットの小さい日本でやってくれないよ。だってさぁ、アメリカでＬＰ300万枚売れる可能性ある仕事が、日本では、どうがんばってみても、30万枚じゃん。そんなワリの合わない仕事を本気でやるかなぁって思うんだよね。
ユカイ　あと、歌詞が分からないっていうのもあるよね。
シャケ　ま、やってみないと分からないけど………とりあえず、今日目の前にあることが先決だから。
（ここで話は転換）
──このレコーディングが終わると、しばらくオフ？
シャケ　の予定だったんだけどさぁ、それがとんどん削られちゃってさぁ、最後のツメが甘んだよ。喜びと悲しみは、背中合わせだから（笑）
ユカイ　キリギリスタンだからさぁ
──でも、[illegible]
ユカイ　まあね、楽しみなことは楽しみだよね。
シャケ　オレ、このバンド始めて、毎年思ってるよ。"こんな楽しい年なかったなぁ"って。
──それはスゴイ、[illegible]
ユカイ　今年はいくよ。カッとびたいね。
──[illegible]
シャケ　他のバンドとかって、オレらカンケーないもん。たまたまその中に混ざってるだけで、あんまり共通点なんてないと思うよ。オレら、香港のようなバンドじゃない？
──香港？
シャケ　東洋にある、イギリスの植民地っていうか……
ユカイ　なんでもありの、チープでリッチな雰囲気。
（再度、話は転換）
ユカイ　今回のアルバム聞くと若返ると思うよ。ホント、シワが10本くらい取れるよ。（笑）
──[illegible]の顔見ていうことないでしょ！誰だってシワくらいあるよ！
シャケ　あるよオレだって。ないなんていってないよ。（笑）
ユカイ　シワのばしやってる？そのトシになったらエステティックいったほうがいいよ。
──大きなおせわ！
シャケ　今更行ってもかわんないんじゃない？（笑）でもさぁ、女って、いろんなことするじゃん？毎年やたら高い化粧品買ったり。オレなんてベビーオイル塗ってるだけだぜ。なのに高い化粧品いっぱい使ってる女の肌とそんなにかわんないんじゃない？
──[illegible]
ユカイ　かわる人はかわるんじゃないの？（笑）
──[illegible]内面が[illegible]いれば
ユカイ　まあね、ものはいいようだね。
──[illegible]、今度のアルバムは、シワが10本取れるとかなんとかをキャッチコピーかなんかにして、通信販売でもなんでもすればいいんだよ。

[illegible]という、またしても大人気ない会話で[illegible]スペースがきてしまった。ワーン。一年分の決算をしようと思っていたのに、たったの2ヶ月分しか[illegible]。あの単行本「HAPPY」のトップだってあったのに………。
やむない。この最後の少ないスペースのなかで、今年の彼らの活躍を駆け足列記しておこう。1月、アルバム「KINGS」発売。チャート2位に踊り出る。7月、初の西武球場コンサート。11月、ユカイ・ケン主演の映画「TOKYO POP」全国公開。
￥1000コンサートやら、全国公開が危ぶまれた映画やらいろいろあったけど、結果はいつもラッキーばかり。大言壮語も実力のうちっつうことなんですかねぇ。

大人たち RED WARRIORS を語る。

RED WARRIORSに深くかかわっている大人達。ビジュアル、イメージコピーなどのプロデュースをデビュー以来手がけているクリエイター後藤繁雄氏。"今月の出たがり"でもおなじみプロダクション、マザーエンタープライズの佐藤庄平氏。そして我らが藤沢映子女史。(年齢的には)レッキとした大人3人が、RED'Sを語ると…

SHIGEO GOTO
SHOHEI SATO
EIKO FUJISAWA

これだからRED'Sは楽しくってやめられない!

庄平　そうですね、やはり、ロック、発生以来35年の歴史の中でロックの地図を塗り替えた偉大なるテーマですね。
藤沢　どうやって塗り替えたんですか?
庄平　ペンキとねー、ホラで塗り替えた。(笑)"フェイント一等レッズ"ですね。でもオレたち藤沢さん以上におもしろい話知らないからなー。
藤沢　よく言うよー。最初から一応人間対人間の会話しているお2人なのにー。私なんか、言葉の会話してない。
庄平　がぁーっとか…(笑)
藤沢　……えー、話を戻してお2人はレッドウォーリアーズに初めて会ったのは、いつどこででしたか?
庄平　いつだっけ? EGG MAN? かな……
藤沢　それはひょっとして、尾崎くんが踊りながら客席から"キヨシー"って叫んでいた時ではないでしょうか?
庄平　そうそう。ベースの小川サンに呼ばれて行ったんです。"ちょっとインディアンバンドやってるから来て"と。
藤沢　そのころはケンキョに。(笑)半信半疑でしたか?
庄平　そう半信半疑。まーたキヨシがしよーがねーって。
藤沢　あたしなんか最初は庄平さんに"会わない方がいい"ってずっと言われていたのよ。……で後藤さんは?
後藤　初めて見たのは神戸のチキンジョージだったかな。あ一武道館できるなーみたいな感じで、もう最初から。"スゴイ"と思ったよ。女でもめててさー、あの頃。(笑)"救われるなーこいつら。あーっ良かった"って。
藤沢　(笑)。でもよく後藤さん一緒にライブ見てて、"化けたなー"とか"笑いが止まらんなー"とか言われますよね。

後藤　そうそう、見ててさ、"うまく化けたなー"なんて感きわまって思わず泣きそうになってしまうわけね。だけどやっぱさ、想像を越えてるところあるよね。計算よりも上いっちゃうからさ、だから面白いんだよ、てそれがスゴイと思うよ。はじめはダイヤモンドだか、川口(埼玉県川口市)の石ころだか分かんなかったと思うけど、磨いたらさ、ほんと宝石になるんだよ。自分で光ってく。

庄平　予想のつかないところに転がってくっていうの、あるよね。化ける速度もすごいけど、付随していろんなものが出てくるじゃん。役者の田所とか。楽曲にしても"ええこんなことできるの"みたいな。ビックリ箱ですね。

藤沢　それはインタビューしてても感じますね。どうしてこっちへ話が転がってしまうんだろってのはっかり。どう書こうかと悩んでそのまま書いたら一番うけた。(笑)ところであーゆーバンドのタイプというのはどうです?

後藤　ま、スタイルとしてはあったけど……。でも表面的な、お金にならないイメージというのとは全然違う。

藤沢　メジャー感とアイドル性はあると思いますが。

後藤　すごい、力強く言ってますね。――だけどね、俺思うけどね、これからがオリジナルだよ。今までのアルバムは前座だと思うの前戯。今まではさ、だまし。

庄平　だましとなぞりってんだよ。

後藤　シャケはどんどんシャケっていうものになってる。田所は天才になっていったんだよね。どんどん天才に。

庄平　やっぱ天才だったんだーっていうのになってったんだよ。だから天才が、日本人じゃないですね。

藤沢　日本人じゃなーい!　地球人じゃないかもしれない。あれほど実生活に役に立たなさそうな人間はいない。

庄平　あのわけわかんなさは変わんないんだけど、今そのわけのわかんない天才がうける土壌が広がってきてる。

後藤　あの一、あんまり考えたことないんですけどー、田所くんには喜怒哀楽は存在してるんですか?

藤沢　おー、すごい発言だ!(笑)いや落ち込んでる時とか体の調子の悪い時に限ってちゃんと話をします、で、絶好調の時は、全く違う方向へ飛んでってしまいます。"どうだっていいじゃないそんなくだらないこと"というような事でうだうだ悩んでて、すごい大変なことが、ちっとも感じていないっていうことをよく感じます。

後藤　天才ですねー。でもそれは全員に共通しているような気がするよね。"やばいよな"っていうのは全然気にしないんだよね。単行本で直し入れるところも写真もそう。

庄平　西武(球場)とか武道館の時そうだったじゃない。一番おかしかったのはさ、普通みんなぶっとんであがっちゃうじゃない?　でも冗談なんか言って全然あがってなかったんだよね最初。で、何か途中からさ、なんかの曲の時に突然、きれだしたの。で、きれたまんま戻ってこなくて、ステージ終わって打ち上げになってもそのまんま武道館のステージに立ってたという感覚的には。テーブルの上で演説してました田所は、打ち上げ会場で。

藤沢　そうそう西武の時も、はじめはすごい不ユカイ。落ち込んでたの。"昨日寝てないんだ"。家のまわりに暴走族がいっぱいいて"えーっそれ何なの?""いや、ファンかもしれない"ってもう、誇大妄想してんの。

庄平　それが、終わったらそのまんま気分はKINGSなの。で、シャケはたった一回のギタートラブルでもうただの暗いやつ。しまいには誰も近付けなかった。

藤沢　"一生に一度のことだったのに"って大げさなの。みんなが"イヤー良かった"って言ってたら、シャケが"ほんといいなー、みんなそんなに楽しかったんだ"(笑)

後藤　おめーのコンサートだろうって。(笑)

庄平　その頃田所そこら中の奴と記念撮影してました。(笑)

藤沢　"世界中にオレのこと知らないヤツはいない"って。(笑)

後藤　でもいつも一緒にいてね、この人たちの現実感はいったいなんなんだろうとは思うね。

藤沢　けっこう夢みる夢子さんですよね。

庄平　猫にしてもね、マリリン(ユカイくんが拾った猫)取材に連れてきて、ジョークかと思ってると全然マジ。マリリンと一緒に写ることは今日は大事なんだみたいな。

藤沢　なんかフワフワと雲の上歩いているようですね。

後藤　だからデビューして以来、裏切られたことない。

藤沢　そうそう。で下世話じゃない。あとインタビューでも社会状況と周りにいる友人の話は一切ない。"パン焼

き機買ったからどうやってツアーに持って行こう"とか。

後藤　ロンドン行った時もね、メンバーの行方がわからなくても心配じゃないの。なんとかなるって感じで、"ハーイシャケー"なんて金髪の人気者になってたり。

藤沢　日本のツアー先でもそう。夜は何してるか全然わかんない。RED'Sに限ってね。で朝はちゃんといるの。

後藤　仕事にしても"オレらってさー、遊んでて金もらってんもん"って。シャケはどうやって大きくなったんでしょうってオレいつも思うよ、結構ね。

庄平　大雨の日びしょぬれで事務所に来て"野球やってたんだよ。ドライヤー借して"って乾かして帰った。(笑)

後藤　いい話。(笑)でも思うんだけどね、RED'Sの可能性っていうか、それがなかなか出せてないと思うんだよ。

藤沢　私も"こいつはとんでもなくすごい"ってわかっても、どうやって人に知らせたらいいかわからない。大きくなればなるほど本領を発揮していく感じもある。"BIG EGG、やっていいの?うれしーなー"みたいなさ。

庄平　ユカイが自分でフィルム作りたがってるし。

藤沢　本とか映画とか貪欲に勉強してますよね。そのわりにあのボキャブラリーはなかなか。(笑)語彙が誤異。(笑)

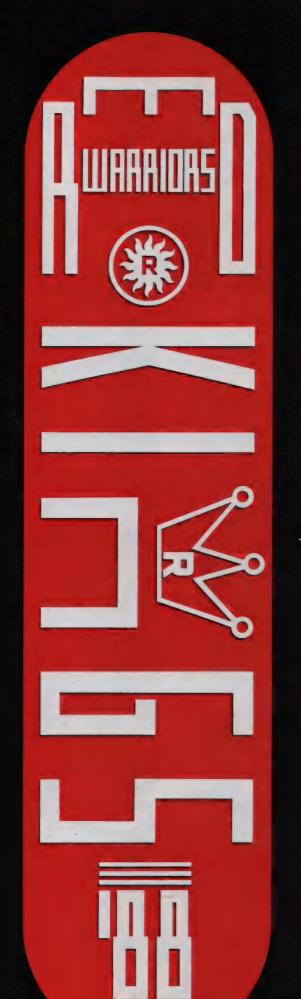
後藤　オレね、あのクレイジーでファンタジーのようなものを人に知らしめたい。ファンタジーだよRED'Sは。ミッキーマウスがスケベな女のかっこしてるような。(笑)アメリカンドリームの、大成功して、高速ですっとばしてる時には、死んじゃう感じ、そういうの感じるね。

藤沢　そっかー、一緒に飛行機乗るのやめよ。(ボソッと)

後藤　だからね、RED'Sのこと考えてると楽しいよね。

藤沢　うん。楽しい。それはもうふり回されてるってことかもね。ふり回されてる自分を楽しんでるとこもある。

後藤　そういうの、おばさんっていうんでしょうね。(笑)

YUTAKA "DIAMOND–YUKAI" TDOKORO
TAKEHIKO SHÄKE" KOGURE
KIYOSHI OGAWA
TATSUYA "COMMA" KONUMA
▼

PERSON TO PERSON

●88年12月。C－C－Bは、アルバム『信じていれば』のレコーディングをちょうど終えたところだった。一種の放心状態の中にいる4人だけれど、それぞれが、今年の最後のリリースとなったこのアルバムの中に自分自身の"今年"を見い出していた。

PHOTO●SHINJI TAGUCHI (P267, 272), YUKIO FUKUZATO (P268-271)　COPY●KYOKO MORITA

C-C-B 米川英之

HIDEYUKI YONEKAWA

小さなテープレコーダーに、次々にビートルズのナンバーが吸い込まれていく。米川君は、何も言わないで黙ってる。〝どうして?〟そんなひと言が言えなくて、ただ彼の言葉をじっと待っていた。喫茶店のBGMは、いつしかビートルズから、クリスマス・キャロルに変わっている……。

——どんな年でした?

「……。けっこう、忙しかったです。まだ自分の好きなことをやってる時間が多くなったんじゃないでしょうか」

——自分の好きなことって、たとえば?

「……エ?」

——好きなことってどんなこと?

「レコーディングやってたり、とかね」

——あとは?

「……」

今回のインタビューを正直に再現しようとしたら〝……〟ばかりになってしまう。彼が何も言わないのは、それだけ彼がこのインタビューに誠実に臨んでくれた結果だろうか。うわべばかりをつくろって、当たりさわりのない答えをするのは簡単だから。それとも。……本当のところは、彼にしかわからないことだけれど、私はせめて、少なくともこの日の〝……〟を、私なりに書いてみたいと思っている。

——あんまりいい年じゃなかった?

「ウンッ(キッパリ)」

——それは、どうして?

「いろいろと」

——迷ってる、ってこと?

「迷うって?」

——仕事のこととか、自分のことととか、音楽のこととか。

「ああ……。今でも迷ってますね」

——岐路というか、曲り角……?

「すごくそう思います」

——音楽的なこと?

「……自分自身のアイディアはいっぱい出てくるけど。……それを出せる出せない、ってあるでしょ」

——状況的なこと?

「……ウン」

——いろいろ、難しいと

「……」

——そういうこと?

「……僕はね、作曲者は作曲者、作詞者は作詞者って分ければいいと思ってたんですが。結局、世の中は、その人の主張として受け取るじゃない。なんでそんなとこで主張しなきゃなんないの。別にいいじゃん、曲作れば」

——まぁ、言葉ではないけれど、米川君が曲を作ったり、アレンジしたりすることも、ある意味では主張しているわけでしょ。

「ウン。でもそういうふうにとってくれる人が少ないの。だから……そんなことまで考えてたら、音楽活動できなくなっちゃうんじゃないかな。……詞がどーのこーのってさ、そんなとこまで考える余裕ないもん」

——それは周りでいろいろ言われるから?

それとも自分の中で?

「ウン。感じちゃうんだろうね。……被害妄想かもしれない。……今年は厄年だと思い込んでね、やってるわけですよ」

——厄年なの?

「知らない。……24だよ」

——納得いかないって感じ?

「……今年って主張するバンド、みたいなのがあるでしょ。別にね、悪いとは言いませんよ。ただ、僕には納得できないとこがある。……だから、オレのやってることって、たぶんロックじゃないんじゃないかな。最近は〝あーそうか、オレはロックやってるんじゃねぇよな〟って思えるし。もうやめた、みたいな感じだね」

——ふぅん。でもそれは逆に言うと、別にロックじゃなくても、人がロックと言おうが違うと言おうが、自分がやりたいことをやりたい、ってことでしょ。

「そそそ。……自分でこだわってたものって、音でのロックであってさ。それだけだったから……やっぱ、ロックってそういうもんだったのかなぁ、って」

——スピリット?

「そうそうそう。オレ、そんなこと何も考えないでやってきたから」

——詞については、いつも全然関知してないの?

「わりと、人任せですね。アイドルっぽいのかもしれない、もしかしたら」

それでも最後に、米川君は作って初めてシングルになった曲「信じていれば」は、とてもスムーズに完成したんだ、と彼は嬉しそうに話してくれた。

そんな米川君の顔を、いつもいつも見ていたい、と思うのだけれど。そして〝ジャンル分けしたくない〟[illegible]の音楽は、だからこそ大きな可能性を秘めている——。

PERSON TO PERSON

この時期になると決まって〝1年を振り返って〟というテーマの取材が増える。しかもYEAR BOOKともなれば、いたしかたない。がしかし。相手は渡辺英樹である。去年も〝振り返る〟か〝振り返らない〟かを、必要以上に話したことを覚えている。……アタマガイタイ。

「また振り返らせるのかよ」

——そう。去年も聞いたんですけど。

「でも、そんなときにもオレは言ったはずだよね。オレは振り返らないぞ、って」

——そうでした。

「……でも、そういうことではないんだよね……(笑)」

——ウン。スゴイ、やっぱオトナになったじゃん、去年より。(笑)

「いや、だんだん、そういう仕組みがわかってきただけの話」

——で、振り返ってみて、どうですか？

「今までは、1年を通して、というより、たとえば季節ごとに部分部分、活動してたみたいなところがあったと思うのね。でも今年は、いちばん初めに『ラブレター』ってシングルを出して、それまでは明るいっていうイメージでばかり見られてたのを、〝こういうとこもあるんだよ〟っていうのをさ、みんなに聞いてほしかったんだけれど。それで『走れ☆バンドマン』っていうアルバムを作って、まぁ、あの頃はいろんな試行錯誤があったりして。それから今度は『信じていれば』ってアルバムをさ、出して。それも相変わらず、バラバラな要素の曲が入ってるんだけど。(笑)〝ひとつのバンド〟というイメージで、あのアルバム自体を見てもらえたという感じがするのね。だからそういう意味では、ずーっと1年を通して、けっこう〝統一感〟みたいなものがあったんじゃないかな」

——大きな流れがあった、と。でもTVだけでしかC-C-Bを知らない人達にとっては、今年はちょっと変わったな、という印象はあるかもしれないね。

「ウン。それは決して変わったっていうのではなくって、今までも持ってた部分なんだけど、そういうとこを出すことが可能になったっていうかさ」

——ライブの本数が今年はいつもより少なかったけど、それについては？

「ウン。少ないというより、少なすぎると言った方がいいくらい。オレとしては、その部分ではすっごい不満が残るのね。反省点っていうかさ。……まぁ、いろんな意味で、そういうことも含めて、収穫は多かったと思うんだけれど」

——アルバムは2枚出したしね。

「約束どおりね(笑)」

——シングルの傾向は少し変わってきた？

「変わった、っていう言葉は嫌いかもしれないけど。いや、嫌いではないかもしれない。最近はね(笑)」

——〝オリジナル〟ということに、こだわってますか？ もう、筒美京平さんの曲とか全然やってないけど。

「こだわってるっていうのとも違うんだよね。でも、オレ達の中から出てきたメロディーの方が、よりストレートに感情移入ができるんじゃないかな、という気はする」

——個人的には、どんな1年だった？

「大阪でずーっとラジオを、10月までやってたんだよね。ちょうど1年間。あれをやったことで、すごくまた違う考え方っていうかさ。何もすべて、シカメッ面をして、マジメなことばっかりを喋るだけが、大切なことを伝えるコミュニケーションの手段ではないな、っていうのがわかったような気はするね。そういう意味では、オレ自身にとってはプラスだったな」

——またやりたい？

「そうだね。今度はまた違う形でね」

——来年はどんなことやりたいですか。

「また、今度は抱負かい？」

——そう。

「抱負、っていってもさ……。オレは結局、そういう計画性がないんだろうね。(笑)来年は、こういう質問にもちゃんと答えられる人間になりたい……とか？(笑)」

——(笑)

「でもねぇ、抱負よりもね、あっちの(ショーウィンドゥの)のレアチーズケーキ、見た？」

——見てない。

「見てごらん。焼き豆腐みたいだから、本当に(笑)」

——本当？

「ウン。〝抱負〟より〝豆腐〟の方がおもしろいだろ」

某ホテルの2階にあるコーヒーハウスのレアチーズケーキは、彼の言うとおりだった。たとえそれが〝よくあるシャレ〟だったとしても、彼の'89年の〝レアチーズケーキ〟は隠れたパワーに満ちている。

渡辺英樹
HIDEKI WATANABE

笠 浩二

KOJI RYU

笠君にとって、'87年は試練の年だった。入院して、退院後もハードなスケジュールをこなすのは、かなりつらかったに違いない。そして'88年。もしかしたら今、C-C-Bの中でいちばん元気なのは、彼かもしれない。

「今年はねぇ、前半がエンジンかかんなくて、後半になってやっとかかってきたのにもう終わっちゃうの、って。そんな感じかな(笑)」

——前半は、きつかった？

「やっぱりね、病気を引きずってる部分があったから。最近は全然もう……。これからだろうな、って」

——そうなってきたのは、何かきっかけがあったの？

「夏にハワイに行ったでしょ。ファンの人達とかと、ツアーみたいなやつ。ハワイから帰って来てぐらいかな。……外国行くと必ずおナカこわしたりとかしてたんだけどね。でも、そういうこともなくて、それにあんなにファンの人達が集まるとは思わなかったしね。"もっとがんばらなきゃ"っていうかね。」

——じゃ、けっこう励まされたんだ。

「ウン。それはすごくあった。いくら好きとか言っても、ライブやるわけじゃないし、お金も高いしさ。でも大勢来てくれて、ビックリしましたね。嬉しかった」

——で、帰って来てから、イベントとかに出たりツアーもやったりして、レコーディングに入ったわけだけど、ずっと快調？

「でもやる気になってきた反面、アルバムちょっと呆気なかったですよ。どうしてもやりたいことが全部似てきちゃうっていうかね。今回、自分の中で決めてたことは、曲を作るのもそうだし、詞も作りたかったのね。それができなかったのは、悔しかった。曲は、本当にできなかった。今まではけっこう楽にできたのね。フレーズとかだったらストックもいっぱいあるし。その部分では、いわゆるスランプなのかな」

——本当に、これから、って感じだね。

「でも、だから最近、このアルバムができあがってからは、逆になんて気がスッキリして。こういうときに限って、曲ができるもんなんだよね。だから、次、だね。コツコツとやってるんだ」

——前向きですね。

「今までがね、なかなか思うように動けなかったような部分があったり、甘えてたところもあったと思うんだ。だから、もうちょっと自分から進んで何かをやりたいよね」

——ライブに関しては、どう？

「それも前半はけっこうつらかったんだけど、最近はもう……。体が覚える、ってあるじゃない？ そういう方向に持っていけると思ってる。自分でもいろんな意味で楽になってきてるから」

——この前、C-C-Bにはめずらしいオール・スタンディングのライブを神戸（フィッシュ・ダンスホール）でやったでしょ？

「最初はね"なんか汗かきそうだな"って思ってて、そのときは本当にアがるなんて全然考えてなかったのね。で、ドラムがいい音で、張りのある歌をうたえて、盛り上がるだろうなーとか思ってて。それで実際始まって、いやぁ、飛ばしましたよ。(笑)もう思いっきり叩いてたし。で、いちばん最初のMCがあって、その後、思いっきりアガッちゃったんだよね」

——急に？

「ウン。それまでちょこちょこ米川君の方を見てて、あ、アガッてるー、と思ってたの。ミスッたりして、今まであんまりしないようなテレ笑いしてたから。(笑)それで、っていうのかどうかわかんないけど、自分も急にアガッてきた。だから大変でしたよ。それをね、忘れるまで。田口君のMCになったとこぐらいから、少し落ち着いた。田口君が今度はめちゃくちゃアガッてたからね、MCで。すごい飛んでるMC(笑)」

——またやってみたい？ そういうライブハウス的なノリのところで。

「ウン。すごくやりたい。でっかいホールの方が絶対にやりやすいし、冷静にできるってとこがあるけど。でも逆にそうやってアガッてるとこも、そのまんま見せちゃうところとか、お客さんへの伝わり方とかがやっぱり違うじゃない。間違ったとしても、関係ねぇや、気持ちいいから、って部分がおもしろいし、みんなにも伝わると思うのね。みんなもそう思ってくれるだろうし」

——じゃ、89年の抱負は？

「もう、笑顔でがんばりますよ、僕は」

"昔は、ドラムを叩いてメシ喰えるようになるためにいろいろ悩んでたけど、去年とか今年の前半は、その何倍も悩んだ。……それって、なんか不思議だよね"——笠君はそんなことを言った。だけど、その重い空気を抜け出して、彼は、今、パワフルに動き始めた。(声も、力強かった。)

PERSON TO PERSON

C-C-B

田口智治

TOMOHARU TAGUCHI

——'88年を振り返って、どうでしたか？

「自分なりに、自分の個人的なことだけど、音楽に対して、音楽っていう漠然としたものに対してね、自分と音楽とのかかわり合いっていうことを、マジに考えられたと思うんだよね」

——それは具体的に言うと、どんなこと？

「たとえば、レコーディングのときに、[illegible]面をきちんと書いてきて、それをちゃんと弾ければそれでOKか、っていう、そういう問題じゃない、っていうこと。たとえば途中でちょっとトチッちゃったんだけど、自分の中ではすっごく気持ちよく弾けたな、とかさ、なんかそういう、音楽にどれだけ自分が素直になれるかってこと……」

——いつ頃から、そう思うようになったんですか？

「前からある程度、思ってたとこはあったんだけど。今回のレコーディング（アルバム『信じていれば』）のとき、ふとそう感じたりとか。レコーディングの回数が重なるたびに」

今まではメジャーな曲ばかりを書いていた田口君が、最新のアルバムでは、マイナーなバラードを書いている。

彼の、みんながイメージしている彼のキャラクターから言えば、メジャーなコード展開で作られたポップな曲、というのが合っているのかもしれない。でも、聞いてみてわかる。彼の最新作は、もしかしたら、もっとも彼の内側を表わしているとも言えるのだ。そのゆるやかなメロディーも、やさしいピアノの音も。

「今年いちばん印象に残ってるのは、やっぱり今回のレコーディングかな。音楽のことをいろいろ考えながらやれたから。ライブとは違うよね。ライブは勢い、っていうか。そういうところを見せたいしね」

——今年は、例年に比べてライブの本数が少なかったよね。

「ウン。でも、イベントとか学園祭とかがいつもより多かったよ」

——そこでもMC担当？

「そう。ヒデキ君みたいにうまくないけどね（笑）」

——今年、いちばんウケたMCは？

「そうだなぁ……。〝抱きしめたい〟の前に、自分のことじゃないけど、なんか、たまたま寒かったんで、女のコと抱きしめ合っていれたら、あったかいですね、っていう。（笑）それでは「抱きしめたい」を聞いてください〟って、とんでもないMCをしてる、っていうね（笑）」

——（笑）

「なかなか、曲に持っていくのが大変なんだよねー（笑）」

田口君は、いつも明と暗を両方持ち合わせている人。その転換のしかたは、最近とみにめまぐるしくなってきたように思う。彼の中で、何かがフツフツと変化している。どうやらそれは、本当のことのようだ。

——'89年の抱負は？

「…………ウーン……」

——リード・ボーカルやりたいとか。

「あ、それはない。……でも、歌いたいなって気持ちはあるよ。……気持ちだけ、聞いてください、って（笑）」

——ほんの気持ちだけ？

「気持ちは歌いたい人です。でもなかなか……。（笑）……そうだなぁ、来年の抱負は、なんかじっくり考えたいな」

——何を？

「音楽。自分に関わってるすごく重要なもののひとつだし。今までは、けっこう仕事的な感覚でね、やってきちゃったところもあるんだけど。来年はもうちょっと、音楽に関してマジメに考えるよ。結局、オレは歌がうたえないから、どうしてもメロディーとかアレンジとか、そういうところで自分のやりたいことを表現してる、っていうのがあるから。メロディー・ラインがね、詞の代わりになれたらいいな、っていう」

——ナルホドネ。

「オレはすごく、言葉が苦手だから。日本語がうまくない、ってよく言われるんだけど。（笑）だからけっこう自分の言いたいことが誤解されちゃったりとか……言葉を使うと、意外とそういうとこがありまして」

——言葉って、不便なとこ、あるよね。

「知らない間に、自分はそんなつもりじゃないんだけど、人を傷つけちゃったり、とか。でも、音楽は、人を傷つけることは、絶対にないと思うんだ」

彼は音楽を心から愛し、そして信じている。それを実感できる幸福も、既に手にしている。でも、両手で抱え込んだ大切な大切な彼にとっての〝音楽〟は、彼自身が見つけ出したものでもある。田口君はまた素敵なメロディーを生み出すに違いない。

PERSON TO PERSON

1988年はC－C－Bにいろいろなことを感じさせ、考えさせたんだろうと思う。PERSON TO PERSON。一人一人のインタビューの中で、一人一人は、楽しそうだったり、少し悲しげだったり、少し遠くを見ていたり、近くのはい皿を見つめていたりした。88年は、きっとC－C－Bの"熟成"の年だったんだろう。さて'89年に、どんなふうに開花するかな？　楽しみ。

C-C-B

予約しなさい。
スライダーズの
ニューアルバム。
SCREWDRIVER
1989·1·21RELEASE◆The Street Sliders
予約特典するぜ▶年内に予約すると、すっくと大型贅沢ポスターがもらえる。急げ、レコード店へ。
ライヴするぜ▶1989.2.18(SAT)「武道館をおくれよ」INFO.☎03-239-9900DISK GARAGE
▶▶▶▶ ファンクラブ会員へ、ちょっとお話。◀◀◀◀
EPIC/SONY RECORDS.

PATi▸PATi DEATH MATCH"THE DAN KAI"＋となりの芝生は黒い‼
みほりんの恋はしょうがないSPECIAL＋エコちゃんのそぼくなギモンSPECIAL＋ジンオフスキー業界の鉄則 そぼく
涙の読者スタッフ＋プレゼント付QUIZ DE 100MON NO 攻撃‼

PATi PATi STAFF DEATH MATCH the dankai

●スタイル"BUHi♡BUHi"恒例のパチ▶パチスタッフ・デスマッチ。1年中で一番忙しい時期に行われるこの企画。そして今年はパチ▶パチ編集部員全員で今年を振り返ろうってワケなのだ。さて、ただでさえ忙しいこの時期、全員徹夜続きで頭がボーッとしているのに、果たしてまっとうな話が展開するのでしょうか？　ああ、沈黙が怖いワタシです……。

●昼間より人口密度が高いと評判の真夜中のパチ▼パチ編集部。期待に応えて（応えたくないわい！　そんなモン）今夜も全員徹夜体制。

なにしろスタイルの入稿が大幅に遅れ、あおりをくった本誌2月号の入稿も遅々として進まず、加えてトドメは年末進行の4文字。

ああ……まさしく修羅場とはこのこと。

ハガ　本日はみなさま御多忙のトコロ、お集まりいただきましてありがとうございます。

ナベリノフ　バカモノ！　御多忙だから集まってんだろーがっ！（と、言いつつ入稿作業の手は止めない）

ハガ　あ、そぉですね。スイマセン。

エッちゃん　えーっと。年末恒例の座談会をやりたいと思います。

ヨシダヨシミ　いや、だからそれはわかってるから、早く始めて欲しいんやけど…。（と、言いつつ作業の手は止めない）

エッちゃん　はい…。

ヤマザキエリコ　で、なんについて話せばいいの？　テーマは？（と、言いつつ作業の……とにかく全員話だけに専念してる余裕はナイ！）

エッちゃん　えっと…それは…つまり……。

ナベリノフ　もしかして決めてないとか……？

エッちゃん　ハァ…。

全員　ゲゲッ！

エッちゃん　まぁ、とりあえず今年を振り返って頂くというか、'88年のまとめをするということで…。

ヨシダ　[illegible]安直やねんね。

ハガ　去年までの"DON対談"に代わる企画とゆーことで、編集部全体で今年のまとめをする企画なんですよ。

ナベリノフ　え～。"DON対談"にすれば良かったのにぃ。そーすればアゴウさんとソメッチと2人でやれば済んだのにぃ。

エッちゃん　だってアゴウさんがやだって言うんだもん。

ハガ　[illegible]だよ。エッちゃんたらねぇ、セッティング悪いから、やってるヒマなくなっちゃったんだもん。

エッちゃん　ええ～ウソぉ！

ヤマザキ　そー言えば、他にも時間がなくて企画ひとつ減らしたんじゃなかった？

エッちゃん　ウソ、ウソ！

ハガ　でも彼氏と電話してる時間はあるんだよねぇ～♡

エッちゃん　ハガさん!!

ハガ　ボク知ってるもん。ワセダのラグビー部の○○サン。

エッちゃん　えぇ～ウソ、ウソ！　だって電話がかかってきちゃうんだもん！（嘘じゃないじゃんかぁ～!!）

ヨシダ　[illegible]ええねぇ、とにかく早く今年を振り返っちゃおーよ、忙しいんだから。

エッちゃん　そぉです。じゃ、気をとり直して、やりましょう。（って、とり直すのはアンタだけだってば）じゃあ　まずヤマザキさんから。

ヤマザキ　えっ！　どーしてワタシに振るの!?

エッちゃん　だって今年一番重大ニュースなのは、やっぱりヤマザキさんの…

ヤマザキ　言っちゃダメ！　言ったらもぉ口きかないからねっ!!

エッちゃん　えっ、どーしてですか。

▲見よ！　この汚いデスク。ここからパチ▶パチは毎月生まれるのデス。

ヤマザキ　だってこれ載るんでしょう。全国的に発売されちゃうんでしょう。やだぁ、ワタシ…。

ヨシダ　え、ずるい。じゃワタシも言ーわない。

ナベリノフ　オレも。"特にナシ"って書いといて。

エッちゃん　え、困るぅ。

ハガ　お願いしますよヤマザキさん。先に進まなくなっちゃうからぁ。

ヤマザキ　……わかったワ。言います。ワタシことヤマザキは、なんと今年……（テープⒶ面終了）

〈intermission ①〉

▼11月号をもってモリタさんがパチ▼パチの編集から離れてしまったのも今年の大きな（ちょっと寂しい）話題デシタ。

そのモリタさん[illegible]の巻頭特集となったのが、5月号のバービーボーイズ、「BIG GAME」。スタッフ全員で撮った写真から、取材の現場の雰囲気を感じてもらえたかな？

カメラのセッティングは、大川直人氏によるもの。もちろん中央の大川さんにピンが合ってたのは言うまでもない。数十カット撮った中から大川さんが一番気に入ったモノが使われたとか……。

ヤマザキ　……さんなのです。

エッちゃん　えっえっ！　ヤマザキさん、もう一回。今テープ交換してたから入ってないんです！

ヤマザキ　いやだもーん。ワタシちゃんと全部言ったもーん！

エッちゃん　ええ、でもぉ……。それじゃあ次はワタナベさん。（立ち直り早い早い！）

ナベリノフ　え、ワタシですか？　ワタクシは……ないですねぇ。

ハガ　だからそぉじゃなくてぇ。

ナベリノフ　でもないものはないわけでぇ。

エッちゃん　本当にないんですか？　彼女とかできなかったんですか？

ナベリノフ　うん…まぁ…。

エッちゃん　それじゃ、"春を待つ"って本当のことだったんですか？　楽しいことなかったんですか？　30歳なのに。（キツイ）

ナベリノフ　いや…忙しかったし…。尾崎の写真集とか…本誌も…出張だって多かったし……。

エッちゃん　ええ、それは言い訳だと思う。（攻撃の手を緩めないヤツ）

▲㊙色違い表紙。本物の3月号と見比べてみよおっ!!

ナベリノフ　うぅ…。

エッちゃん　寂しいんですね、ワタナベさんて。（トドメ）

ナベリノフ　……（無言）。

ヤマザキ　あー、エッちゃんがワタナベさんを泣かしたぁー。

エッちゃん　なにも泣かなくても、じゃワタシが彼女になってあげましょーか？

ナベリノフ　お情けで彼女になんかなって欲しくないやいっ!!

〈intermission ②〉

▼ここにある2枚の表紙。どちらも発売されたパチ▼パチとは少しどこかが違うみたい。

そう、この2枚はどちらもボツパターンなわけだ。バックナンバーと比べてみてネ。なに！　持ってないだと！　不心得者めっ!!

ところでその尾崎の10月号。

今年の秋、雨続きで大変だったのは覚えていると思うけど、その時期のロケ撮影ということで、担当ナベリノフは毎晩電話で天気予報チェックをしていたのダ。写真集用に出され

となりの芝生は黒い!

●なにかと、一緒に仕事をする事が多いレコード会社の方々に集まってもらい、今年1年を振り返ってもらった。イヤー、タメになる。

司会（以下同） まずは自己紹介を。
エピックの湯川（以下Y）です。渡辺美里、ストリート・スライダーズ、マッBOWを担当しています。
同じくエピックの小柴（以下K）です。TM、バービー、岡村くんなどの宣伝をしています。
バップの大谷（以下O）です。ジュンスカ、筋少などをやっております。
東芝EMIの野津（以下N）です。氷室京介、布袋寅泰、佐木伸誘他モロモロをやっております。一応、私は芳賀さんの夜を担当しております。
ビクターの清水（以下S）です。バクチク、ストリート・ビーツの宣伝をやっております。
コロムビアの山口（以下Y2）です。レッド・ウォーリアーズ、山下久美子などを手掛けております。
司 仕事の面で、今年を振り返ってみていかがですか？
O 今年は、ジュンスカに振り回され続けて、めまぐるしい1年でした。
N 僕は、RCの日比谷野音が一番印象に残ってますね。
Y スライダーズが、ズズの交通事故でツアーをキャンセルしたんですが、見事復帰できてよかったな、という事と、美里のアルバムが100万枚というセールスで、パーティーをやったんですが、その時、美里にバラの花600本をプレゼントしたら泣き崩れちゃって、彼女も普通の22才の女の子なんだなぁって思いました。
K ウッの『彼女』のオッカレサマ会の仕切りが悪くて、申し訳なかったな、と。
S セールスマンからプロモーターに変わって、忙しい毎日です。おかげ様でバクチクも破竹のイキオイで、大変ながらも楽しくやれました。
Y2 ルースターズの解散があったり、レッズがガーンときたりですね。
司 今年の音楽業界全体の印象は？
Y やっぱ、バクチクでしょう。あれは見事だった。ただね、バンドブームみたいなのがあって、誰れでもデビューできるような状況があって、だからと言って、プロモーター泣かせなバンドはもういらないぞ、と。やるなら根性入れてやって欲しい。
N 確かに、実力のないバンドが多過ぎる。造り物でもいいから、それなりにパワーのあるバンドの出現を是非、期待したいですね。
S 最終的には、アーティスト自身のパワーっていう事ですよね。
司 自慢話とかってあります？
N ユーミンのアルバムがブッチギリで、実売数が公称枚数を超えてしまって、（全員爆笑）ガハハ…笑いが止まらない。
O レーベルである、TOY'S FACTORYが順調で、これなら来年も行けるゾ、と。
S バクチクの武道館2DAYS完売でしょう。ここまで速く成長してくれるとは思わなかった。
Y あっ、オレ思いだした!! こないだチャック・ブラウンに握手してもらっちゃった。
K あっ、この業界に入って、プリンスのチケットが簡単に手に入った。
Y こいつ昔、ファンクラブの会長をやってました。
Y2 レッズがね……担当アーティストが初めて西武球場をやったってのが、やはり、くるものがありました。
司 最後に、パチ▼パチにひと言。
O いい意味で、新しいアイドル誌だと思う。
N ファンのりのライターはやめて欲しい。もっと勉強しなきゃ。
Y 賛成。音先行じゃなきゃ、レコード会社なんて、いったいなんだ？になっちゃう。
S 確かに。発行部数、ビジュアル面ではダントツだからね。
Y2 企画に振り回されたくないなぁ。
K 個人的にエピックの担当の芳賀さんには、もう少しライブ会場へ足を運んで欲しいな、と……。
Y そうだ、もっと言えっ!!

YONKOMA MANGA

今日のアゴリノフの巻

ぼくアゴリノフ
パチ▼パチのへんしゅうちょうダヨ
てつやのお供はいっつもちくわ
もぐもぐ
しごとだってはやい
深夜の個人タクシー待ちはつらいなぁ…
でも

たスケジュールも、何回雨で流れたことだろぉ…。ひょっとして〝雨男〟がいたのかも。
ハガ 次はヨシダさんですね。
ヨシダ えっ、ワタシですか…そうやねぇ……特に……。
エッちゃん それはダメなんですよ。
ヨシダ ちょっと最近プライベートなことでショックがあったんで……。
ハガ えっなんですか？
エッちゃん 失恋ですかぁ？

▲スタッフ総出演。しかしシャッターを押したスタジオさんだけが撮れなかったの

ハガ ゲ！ そんな直接的なきき方しちゃダメでしょ。
ヨシダ いや、そーゆうんやったらええんやけどねぇ……実はサイフを落としてしまって…。
全員 エッ!?。
ヨシダ いや、久々にお休みの日に、原宿行ったんよ。で、サイフ手に持ってたんだけど、ホーム歩いてて、で気がついたらないんよ。
全員 ……。
ヨシダ あわてて戻ったんだけど、なくって。
ハガ いくら入ってたんですか？
ヨシダ 12万円。
全員 ゲゲッ!!
ヤマザキ ヨシダさんいつもそんなに持ち歩いてるの？
ヨシダ いや、その日はたまたま。コートを買おうと思ってて……
ハガ 12万円のコート買っちゃったんですね、目には見えないヤツ。
ヨシダ そう…。
エッちゃん ワタシ12万円も落としたら泣いちゃう…。
ヨシダ でも見つかったんよぉ、サイフ。
ハガ ホントですか？ 良かったじゃないですか。で中身は？
ヨシダ もちろんなかったけど。残り度数10位しかないテレホンカードとか。金目のモノは全部なくなってた。
ナベリノフ 悪質だなぁ。
ヨシダ でも領収書とかは残ってたから嬉しいワ♡

PATI-PATI

▲これも秘写真違いバージョン。どっち向いてても尾崎はりりしい。

〈intermission③〉

▼11月号の米米クラブ巻頭特集。撮影は葉山にある郊外スタジオで行われた。一軒屋式のスタジオで大がかりに行われたこの取材、運良く天候にも恵まれ、なんと言ってもまわりはリゾート。忙しくってもリゾート。時間がなくってもリゾート。なにはともあれリゾートということで、心はしゃいだスタッフなのでした。
　ところでこの企画。犯人は一体誰だったんでしょーねぇ……？

ハガ あ、アゴウさんだ。お帰りなさーい！
アゴリノフ なにやってるの？
エッちゃん スタイルのブヒ♡ブヒに入る座談会です。アゴウさんどこ行ってたんですか？
アゴリノフ ん…とね、ゴハン食べに行ってたの。
ハガ あ、ズルーイ！ ボクもお腹すいてたのにぃ。
エッちゃん 何食べたんですか？
アゴリノフ えっとね、カレー。
エッちゃん いいなぁ。ねぇハガさん、ワタシたちもカレー食べてこようよ！
ハガ え、でも座談会が…。
エッちゃん そうだけどぉ、お腹すいちゃったんだもん。
ハガ でも、アゴウさんにも今年を振り返ってもらってから……。
エッちゃん じゃアゴウさん、なにかありますか？
アゴリノフ …とねぇ…今年も忙しかった。
ハガ それだけですかぁ？
アゴリノフ うん、いつも仕事してたもん。
エッちゃん じゃ来年の抱負とか？
アゴリノフ 特にナイ。だってきっと忙しいもん。……あ、ある。
ハガ え、なんですか？
アゴリノフ 来年は新人の2人を鍛える。
ハガ・エッちゃん ゲゲッ!!
アゴリノフ 決めた。シゴクぞぉ〜。なんと言ってもキミ達の肩にパチ▼パチの未来がかかっているんだから。じゃ、さっそくガンバってネ♡
ハガ え…アゴウさんは？
アゴリノフ ん…ちょっと昼休み。
ハガ・エッちゃん わ、ズルイ。
ナベリノフ ハラが減っては戦ができぬ。オレも食ーべよっ。

▲「スタッフはしゃぎまくる」の図。11月号撮影のついで、って言うんですか？

みほりんの恋はしょうがない。

メリー・クリスマスっつーわけで、トキメキの12月24日、25日、みなさんは何をして、そして誰と一緒にいるんでしょーか。まさかバチ♥バチ・スタイルをそそくさと買って、自分の部屋で一人ページをめくったりはしていないでしょーね。ダメよ、アイドルを好きになっても所詮は偶像。虚しいだけだからおよしなさい。

などと他人にはエラそーに言っておきながら、ワタクシ、宇都宮美穂もこんなふーにアイドルの写真ばかりを並べております。大人のくせッ、やんなっちゃうね、カーにさっ。だけど好きなんだよーん。

……非常に読みづらいレイアウトですが、みなさん無事に読み進むことができてますか？ これは右から左、そして下へと移るんですよ。右から左、そして下へ。ワタシは、原稿書くときにわかんなくて上から下に書くんだとばかり思ってたの。プロがこうですからね、シロウトのみなさんにはかなりむづかしいんじゃないかと。

前説が長いですが。えーと、そう、この"恋はしょうがない"は、実はなんの前ぶれもなく12月号でもって

ブッツリやめてしまったのね。飽きっぽい性格なんで、ついつい「もうやめる！」なんて編集の吉田さんに言っちゃったの。今までゲストとして登場してくれた人の名前を挙げると、大沢誉志幸さん&エンリケ、バービーの杏子嬢、ユニコーンの民生くん、PSY・Sのチャカ、Be-Modernのヤック、チェッカーズのマサハルくんの以上でありました。みなさんお忙しいところくだらない取材にていねいに答えてくれてサンクス・ソー・マッチ。どの人の恋の話もたいへん興味深かったですが、特に民生くんの「人生綱渡り」発言は賛否両論を巻き起こしたよーでした。無責任&無感覚なアイドルとして、アイドル界の新境地を行く人です。私個人としてはチャカの正々堂々としたまっすぐな感じの恋と、マサハルくんの透明な感じの恋が聞いてて好きだった。恋の話をさせるとその人のキャラクターというか、その中で特に飾らない部分が見えるんですよね。だから私は恋の話を聞くのが好き。

さて、ここからがこの"恋はしょうがないスペシャル"の本題。つまり私自身の恋についてってことなんですが、やー、照れるなぁ。フフフ。

かつて"恋愛体質"なる言葉があるのを知ったのは、アレはチェッカーズのフミヤくんのインタビューをしていたときです。「オレは恋愛体質よ」——彼はエバったかのように こうキッパリと言ってのけたのでした。私はそのとき頭の中で鐘が思いっきり鳴っていたのを忘れません。そして胸の中で思いました。「恋愛体質、そんな言葉があるなんて。恋愛って、恋愛って、体質なの——!?」

よくアレルギー体質とかって言うでしょう。アレと同じで恋愛もかかる人とかかりにくい人と体質があるんだってさ。それまで私は恋愛は信じるココロと勇気と運だと思ってて、でもとりあえず神様は公平にしてくれてると思ってたわけ。でも考えてみたら私って、昔から恋愛すると（というか気持ちが♥になった時点で）気持ちが悪くなっちゃうのね。好きな人のことを考えてる段階はまだいいんだけど、いざデートなんかすると苦しくなっちゃう。緊張で体がつめたくなってきて、ノドがカラカラになったりして。みんなはそういうのってない？ 私はたいていそう。そんなふうじゃなくなるにはものすごーく時間がかかるから、恋愛のペースも妙に間延びするっていうかね。要するにその恋愛体質ってヤツじゃなかったわけで、でも今までぼんやりとしか感じてなかったものをシッカリと言葉にして説明されるとちょっとショックだったんだよね。ま、いいけどさ。なんとなく子供の頃にどうしてもできなかった鉄棒のさか上がりのことなんか思い出しちゃってさ、まいったな。

あのね、このページに載ってる写真の人々はみんな私のアイドルなの。ホントは他にもいるんだけど、スペースの都合で載せられなかったんだ。こうやって並べてみると私ってなんてひどい趣味してんのと思わず反省しそーになりますが、なんだろーね、ただこういうルックスが好きなのか（それじゃあんまり）[illegible]人ぽい人が好きなのか。んーと、そーだ、精神性で共通してるところはあるかもしれない。みんな媚びないタイプで、もしも大人側、子供側っていうのがあるとしたら子供側にいる人達かな!?

そーいえば、私が最近恋愛で思うのは女の子のデリカシーのなさ。岡村くんじゃないけど、乗ってる車とか大学の名前で男の子を判断するなんてつまんないよ。本当に大好きな人と巡り会えるとするじゃない？ そうしたらその人がいることで心の中にダイヤモンドを1個持ってるような気持ちにきっとなれるのに。ま、それもこれも恋愛をしてこそのことですが。ところで私のクリスマスはどーなっているんでしょう。神様たしけて。

SPECIAL

みなさんの"恋"は、どんな具合ですか？ 嬉しい"恋"、悲しい"恋"、きっとイロイロあると思います。ひとを想うって気持ちは、なんだかとてもくすぐったくて、優しくなれたり、怒りっぽくなったり、私たちの心をとても不安定にしてくれるね。でも、ひとつ言えることは、みんな"自分を大切にする"っていうこと。たとえ恋やぶれてもくじけずに、どんどんステキな人をみつけて、ステキな恋をし続けて欲しいな。

エッちゃんのそぼくなギモン。SPECIAL

●最近、とみにドジが多くなった。土曜日と日曜日を間違えて、約束をすっぽかしそーになったり、徹夜明けでイキナリ、ド寝（注・思いっきり眠ること）してしまい遅刻しそーになったり、といったことがたび重なっている。クラスにもいるでしょ、遅刻してニンジャのごとく席に座るコ。しかも一番前だったりして目もあてられないってコ。私ってそーゆーコだったのよ、学生時代。まぁ、低血圧だからーなんてのは理由にならないわヨネ。今ハヤリの〝朝シャン〟を心がけてみたらいいかもしれないネ。朝はヨワイって人はやってみたらいーんじゃない？（アタシは〝朝シャン〟のまわしではない）冬は寒いのが当たり前なんだからして、がんばってちょーだいな。

というわけで、今回『そぼくなギモンスペシャル』ダッ！ 今回は何人もの人から同じ質問が届いたりしてるものを中心にお答えしちゃうよ。ファンクラブのあて先のお問いあわせは、目次に載っているのでしっかり見るよーにね。プロフィールの質問もいいけど、面白いギモンもどんどん送ってくれよ――!!

Q いきなり髪の毛をおろした桜井あっちゃんを見ておどろいた私は今井くんのファンです。ところで『JUST ONE MORE KISS』で〝AHAHONEMOREKISS〟って今井くんが言ってる時あっちゃんが何やら言ってることばをどうか今井くんファンの私におしえて下さい。（三重県 氷室さんごめん♡）

A この質問はイガイにも多かった。最近ヒットチャートをうなぎのぼりに上っているBUCK-TICKに関するギモン!? はっきりしないようだね。実はコレ、〝AHA-ONE MORE KISS〟って言ってるンだって。なぁんだ、なんて言わないでよぅく聴いてごらん。ホラ、やっぱりそうだったでしょ、ネッ。

今年の音楽界は、まさにBUCK-TICKの年、だったよね。CDラジカセのCMでガッツ～ンと市民にカツを入れたかと思ったら、レコードは飛ぶように売れるわ、コンサートホールは満杯になるわ、の大騒ぎ。来年の1月18日には、あの日本武道館でやっちゃうっていうんだから、大したたまげた。BUCK-TICK旋風はまだまだ続きそーだなぁ。

Q お願い。絶対おしえて下さい。尾崎豊さんの愛用ギター（7月号で彼が抱いているギター）は売っているのですか？ THE HEARTの井口くんも使っていたと思います。できればエレキギターも教えて下さい。エレキを買いたいのでどうかおしえて下さい。（奈良市 恋人がいても尾崎さん）

A 尾崎クンが抱いているギターといえば、写真集の告知ページでもよく見かけたよね。（〝WORKS〟もう買ってくれた？ え、まだだってェ!? ダメダ、書店に急げや急げ！）なかなかシックで味のあるデザインだけど、この音色がまた素晴らしいンダ。これは、スーパーアダマスの12弦ギター。アコースティックだヨ。値段約100万YEN。ちょっと手が届かないかな？ THE HEARTの井口くんも使ってることを知ってるなんて、キミは目が早い。実は井口くんの使ってるギター、尾崎クンから譲り受けたものなんだよ。もとは尾崎クンが買ったものなんだけど、「使わないンだったら譲ってくれィ」というワケで井口クンのもとにあるというモノ。THE HEARTのサウンドにピッタリマッチしてるよね。井口クンの使っているギターは、他にギブソンのレスポール、YAMAHAのカスタム6弦（15万円）、Moonのカスタムテレキャスター（特注）があるヨン。

Q 10月21日にデビューしたばかりのKATZEについていろいろ教えて下さい。四人の身長、体重、生年月日、血液型、足のサイズ、好きな女の子etc。お願いします！（石川県 おのchan）

A 人気急上昇のKATZEだけど、プロフィールの質問はかなりいただきましたっ。詳しくはこの『パチ▼パチスタイル』KATZEのページ、を見てね！

KATZEの事務所〝インターフィニックス〟の社長サンが4人を抜てきしたのは、今から2年くらい前の話。下関で、バンド活動していた彼らが音楽界にデビューするまでをちょっぴり紹介しよう。去年の11月、KATZEのサウンドに何かを感じた社長サンは4人を東京につれて来たの。初めの9ケ月ぐらいは4人で一戸建ての家に住んでいたんだけど、7月を過ぎた頃から4人ともバラバラで暮らしてるんだって。4人の性格をカンタンに説明すると、ボーカルの中村クンは、めっぽうヤンチャで明るく、ギターの尾上クンは美形で男っぽい。ベースの高山クンは、女泣かせの二枚目で弟の靖則クン（Dr）はスゴク優しくて子供好きなんだって。

Q はじめまして！ いきなりですが、私は松岡英明くんの新米ファンです。松岡くんのこと1から10まで全部知りたいんだけどとりあえず、デビューのきっかけをくわしーく教えて下さい。お願いします。（秋田県 高橋ゆう子）

A 『CATCH』も好評の松BOW、彼のルーツはいかに!? といったところだけど、実は2年前の11月1日にデビューしたんだよね。横浜にエピック・ソニーのビデオコンサート〝BEE〟を見に行った時にスカウトされ、〝BEE・STAR アーティスト募集〟に応募して、見事に優勝をキメたわけなのだ。その時の歌は、モチロンデビュー曲の〝VISIONS' OF BOYS〟。このBEEが一般に公募したのは初めてのコトで、松BOWは〝BEE STAR〟の記念すべき第一号となったワケ。

Q HOUND DOGのギターリストの西山サンがステージで使っているエフェクターの種類と弦を教えて下さい。おねがい!!（静岡県 高林修）

A 西山サンが使っているエフェクターの種類ですネ。ハイハイ、お答えしましょう。BOSSのOD-1、YAMAHAのOD-1、ROLANDのSIDE-1000、BOSSのCE-3、YAMAHAのD-1500、以上であります。

ちなみにギターの種類もお知えちゃおう。フェルナンデスのFST-80×2（両方赤）、フェルデンデスのFR-55×2（赤×1、黒×1）。フェルナンデスのNISHIYAMA ORIGINAL MODEL×3（ピンク×1・白×2）。さっすがに数も多い上に種類も豊富。〝ONLY LOVE〟で音楽界を沸かせているHOUND DOGのギターリストだけあるなァ。最近はヒットチャートをにぎわせつつ全国ツアーに忙しいメンバーだけど1月11日には待望のNEW ALBUMもリリースされちゃうよ。その名も『GOLD』。これからは、HOUND DOGの時代さっ。いつも笑顔の西山サン、ハードスケジュールで身体だけはこわさないで欲しいよネ。みんなのお願いっ。

今年に入って、この質問コーナーも私で三代目。一代目のナンシー森田、二代目の福岡くるめちゃんに続く大役を仰せつかい、今後とも力の限り頑張りたいと（甲子園じゃないっつうの）思う次第であります。これからも楽しい質問いっぱいちょうだいネ。

YONKOMA MANGA

がんばるナベリノフの巻

ぼくナベリノフ 独身貴族だよ

カワイイ

こっ夜の入稿だって へっちゃらさっ!!

尾崎の写真集は自信作だョ

WORKS

もう1ヶ月も寝てないよ

業界の鉄則'88

ブボモゴンゴ、ブホイッ!! 一年間、このオープニング・クライを考えとりました。ワテがジントフスキーだんねん。いや、ホンマに長かったで。初めての人もおるんやね。怖がることはあらしまへん。こんな言葉遣いのワテやけど、漫才やってまへんし、息子もおりまへんよー。ほな、まいりまひょかブモンブ。

業界の常識 1

●ウソツキ、いうたら悪の始まりやね。せやけど、業界内ではなかば公然とウソが横行してますねん。ちょっと説明しようか。

ウソにも2種類あるわけですねん。1つは、人を傷つけ陥れるウソ。もう1つは、人を盛り上げる美しいウソだす。ま、ウソにもベッピンさんがおるわけだす。

前者は、もう許されへんがね。例えは、こんなウソや。

「あ、原稿もうちょっとであがります。あと5行です。30分でFAXします!」

これや!! ライターにこれ言われて朝まで徹夜や。おっかしいなぁと電話すると、もう不通。何回かけても不通や。怒るでぇ、ほんま!! この高等戦術を使う人は、限られとる。佐野量子、関陽子、紺待人、水村達也が東西の両横綱やろな。他にも、「あ、原稿ですか。もう書きましたよ。ほら……あ!! あの喫茶店に忘れてきた!!」とか、「原稿は成田のJALのカウンターにあずけた」とか。こんなもん、すぐバレますがな。こっちは右往左往ですわ。結局、書いてまへんのです。あと、こんなケッサクもありましたよ。「熱が出てうなされている」とか言って電話口でハーハー言うてたヤツがその夜カップルで外タレのコンサートに来て、バッタリコン。いやぁ、あきまへんな。

ここまで書いて、思い出しよりました。その昔、パチ▼パチ創刊当時に最悪のバイトくんがいよりました。ま、ウソつくつく! あんまり休むんでいっつも怒っとったんですよ。そしたら、ある朝「母が危篤なんで休ませてください」言うて電話してきましてん。びっくりこきましたわ。そら、大変や。もちろん「休んでええよ。気ィ落としたらあかへんで」言うて元気つけたんや。そしたらその1時間後や、彼の実家から電話がかかってきたんや。ワテ言いました。「いや、大変なことで…」あっち、「ハ?」言いよりますねん。「いやいや、お母さんが大変で…」言うたら、「あのー、私が母なんですけど、私が何か…」。ぴんぴんしとりまんがな。ワテ、彼の将来考えて、ぜーんぶ言うたりましたよ。ちょっとそれたね。

ほな、本題の美しいウソとは、どんなんか言うたら、こんなんでっか。

▼取材がダブルブッキングの時

「会社の会議がありまして…」とか言うたほうがええ。正直に"誰々の取材があってそちらの方が大切で"なんちゅうこと言うたら、こら、おしまいになってしまいまんがな。

▼コンサートがつまらなかった時とか、ページ数が減った時とか、取材がオンボロのスタジオの時とか…の場合、美しいウソをつき、みんなでハッピーにならんとあかんわけだす。

業界の誘惑 2

●パチ▶パチもなみさんのゴッツイ支援のもと("メジャーな雑誌"ちゅうんですか)になりよりました。しかし編集者には魔の手が…。

世の中を騒がしとる「リクルート」なんちゃら」やないけど、パチ▼パチの編集者にも、あの手この手で迫ってくるヤカラが、ほんま、多いんですわ。せやけど、「されど、アゴリノフ」ちゃうんですか、編集長以下パチ▼パチは誘惑に強いっちゅうのが業界に広まっとりま。そういう体質でっさかいに、例えばだす、あるプロダクションの人と飲んでおごってもらうとしますわな。"ま、ひとつどうぞ"とか言うて酒を飲みかわすわけですわ。ここからが大事ですねん。パチ▼パチの人は、知らーーん顔しです。あとは、飲みっぱなしです。プライベートはプライベート、仕事は仕事。アゴリノフの10か条のひとつですわ。せやけど、これはケチなんやありまへんよ。パチ▼パチもその後で、ちゃあんとお返しするわけだす。いや、ホンマ、大人のつき合いちゅうんですかな。美しいでんな。てなことでパチ▼パチはごっつうヘルシーなんやけど、業界内でささやかれている「誘惑」を列挙すると、

▼ただゴルフ▼美女のいるクラブ▼人気のある人を取材させるかわりに…ちゅうようなバーター▼わざと麻雀に負ける▼信じられへんような贈り物▼これは、あくまでもウワサなんやが、シングルのB面に作詞させる…なんちゅう信じられへんウルトラ誘惑テクもあるんやと。

なんとバッチイ、なんとキタナイ。こんなヤツは、業界にいてもろては困ります。ワテ、ジントフスキー、そんなヤツに出おうたら、ブモモンゴォーーいうて怒ったりますわ。

ワテら業界人は、読者の代表でアーティストに会い、読者の代わりにその場を共有しとるということ忘れたらあきまへん。誘惑に勝つ強い心を養わなあきまへん。そういうワテも負けそうになることもありまっけど、そないな時は、宝の山に祭ってある「アゴリノフ碑」の前にヒザまづいとるんです。そこにはこう書いたります。「強い心はチクワの心」。

業界CHECK 3

●さて、ここまでの話にも負けへんあんたの"目指せ業界"魂。よっしゃ、ひとつワテがその根性、チェックしたりまひょ。

さて、10コのチェック項目で、アナタの"業界度"を調べよう!

- ・夜でもためらわずに「おはよう!」と言える。
- ・睡眠は量より質だ。1時間眠ると、24時間起きていられるぞ。
- ・もちろん眠る場所は問わない。
- ・食事は短時間、粗食にも耐えマス。
- ・健康にも自信アリ。生まれてこのかた、病気とは縁がないの。
- ・ワープロ、パソコン自由自在。ギャラ伝打ち込みなんて楽勝ョ。
- ・動揺が顔に出ない性(タチ)だ。
- ・わがままなヤツにも笑顔で対応。
- ・一度会った人は忘れない。もちろん名前だってスラスラ出てくるゾ。
- ・"〆切り"という字に"ゼッタイ"とルビがふれる。

〈採点〉●4点～6点▼まぁ、普通の人でんな。努力次第で業界人やね。●7点～9点▼結構やりまんな。未来は明るい。●10点▼やった満点! 今すぐ業界で通用する資質の持ち主。●3点以下▼向き不向きを考えまひょ。

目指せ立派な業界人

どうだす? 誘惑だらけのこの業界に、あんたの道はありそうでっか? 将来みんなの中から、立派な業界人が生まれることを願っとります。もし、困ったことがあったら、西の空に向かって叫んどくれや。「ブンモブボッホーイッ!」

涙ペ読者STAFF

●パチ▼パチ編集部の切り札。それが彼女達"読者スタッフ"さん。梱包、発送、あて名書き、テープ起こしに届けモノ、八面六臂の大活躍。Ⓢのイジメにもしっかり耐えて、その源動力はパチ▼パチへの"無償の愛"よね、やっぱり……?

伊藤亜希

▲'68.4.20生、現在20歳(大人ネ♡)。大学近くの厚木にある学生ハイツに住み、帰りはいつも門限ギリギリ♪

▼あー、自己PRですか。……。どうもすみません、ライブに行くとどーも自己を見失ってしまうよーで。別に暴れてるわけじゃありませえん。あ、自己PRでしたね、うーん……。私、O型の楽観主義者なので、あまり苦しい思いをしたことは…ない…ような…気がする…け…ど。ライブには神出鬼没なので迷惑をかけたらごめんなさい。(何が言いたいんだか)

霜田　桂

▲'70.3.6生、見かけによらず18歳。「尚ちゃん…♡」と熱っぽいハズの言葉を淡々と語るアンニュイ娘。

▼すごぉく太ってしまった、のね。ん〜、別にだからどうしたと言うのは、ないの。…悲しいだけ。
だからやせるの。'89年は、絶対にやせるの。別にだからどうした、何て言わないで。どうせ誰も読んでないの、こんなトコ。でもやせるの。だからイイの。でも読者スタッフやってると太る…。嘘だけど。でも、いいの、よく分かんないけど。

竹内美穂

▲'68.5.29生。彼女はスタッフさんではなく、パチ▶ロク編集者修業中の20歳。通勤片道2時間がドゥーッ。

▼やっぱり人生、水戸黄門のテーマソングですよ。♪人生楽ありゃ苦ばかりさぁ〜♪あっ、ちょっとちがうか。近頃ですね、精神年齢は若くなっているのに、外見が追いついていかないのを感じる。特にライブに行くと、ドゥ——ッなので困る。あっ、そんなこと聞いてない!? およびでない…およびでないネ…こりゃまた失礼いたしましたっ!!

田中弥寿代

▲'68.7.16生、余裕の20歳。長い髪、女子大生。"お嬢サマ"の素質は十分だけど、忙しくてそれ所じゃナイ。

▼ところで書けない。やっぱり書けない。あたしは書けない。書けないんだったら。あっ、でもあたしはほのぼのじゃなくってブレーリードッグなんです。でもホントはスヌーピーの方が似てるんだけど。ところで、まゆ毛の事を書きたいの。あたしのまゆ毛はいつも困ってるけど、実はホントに困ってるの。あー、頭が腐ってて何も書けなかった。ドウー…。

大庭利恵

'69.11.27生、19歳ホヤホヤ。愛称は"ハニーちゃん"。でもHONEYじゃないの、"埴輪"なの。うるうる♪

▼えっ。何書いてもいいんですか。じゃあ、私がJ(S)Wのどんでん小林君が好きだって事も書いていいんですか。じゃあ、じゃあ、今年19才になったのに、高校生に思われているっていうのもいいですか……なんて。
今年も、いいライブがたくさんあったね。又、来年も、ライブづけの生活を楽しむ事になりそうな私です。

▶左から、青山恭子さん(18歳)・宮野志子さん(19歳)・広末葉子さん(20歳)・江頭優子さん(20歳)・成田雅美さん(18歳)・小田則子さん(18歳)。彼女達も働き者! 読者スタッフさんは他にもいっぱいいるの、写真載せられなかった人達、ゴメンネ♪

▼ってなことで私Ⓢは、イジメつつも彼女達にすっかり頼りきってる今日この頃。みんなガンバってネ♡

エッちゃんの巻 by はがP

あたしエッちゃん。パチ・パチ読者よ。

あたし電話の声が小さいの…
ボソボソ

それから…帆風さんに写真入れちゃうし
PHOTO
帆風
うちわウケ

でも、小さいコトにはこだわらないの

YONKOMA MANGA

HOW TO TENSHOKU?★ ハガP大いに語る。

そこのキミたちっ!! 将来就職をしても、絶対に転職など考えてはイカンぞっ!! 既に働いている読者諸君は、「あ〜あ、なんか最近、つまんなぁ〜い」、なんていう考えは、今スグ捨てろっ!!

転職するとなぁ……今まで親しくしていた周囲の人間が、急に冷めたくなるしなぁ、ボーナスをあてにして組んでいたローンはアウトだしなぁ、親兄弟には叱咤されるしなぁ、あちこちに挨拶状だの、電話だのたいへんだしなぁ、[illegible]の件数は増えるしなぁ……とにかく、イイコトなんてひとつもないのだ。

……と、キバってみたが、かくいう僕は転職をしている。

学生時代のアルバイトを含めると、かれこれ4年間レコード会社の宣伝を務めていた僕だが、やはり僕には、あの業種は不向きだったのかもしれない。(……とは、誰れも言ってくれない)なにか、切ない想いが急にしてきて、「オレは、もう限界だ。これ以上自分をダマして仕事を続けられない」と、感じたとたん、アッという間に仕事に対する情熱が薄れてしまった……などというカッコイイ理由で転職を考えたワケでもない。

そんななぁ、ひとのことはどーでもいいんだよ。大きなお世話だ。と、開き直る前に、どーしても今の仕事がイヤでイヤでしょーがない、という人達のために、「転職の心得」なるものを伝授しよう。

まず、転職ってのは勇気が必要なのだ。今まで勤めた会社の上司に、辞意を表明する勇気。新しい世界へ飛び込む勇気。なにかと勇気が必要なのである。

次に、何かしらを、捨ててしまわなければならない辛さだ。今までのキャリアなど、新しい世界では関係ない。一からやり直しだ。僕の場合、今まで関わってきたアーティスト達との別れが一番辛かった。まぁ、バクチクや、ストリート・ビーツなどは、現在パチ▼パチの編集部員として担当できてる点が何よりの救いではあるが、それでも、もし全く違う世界への転職であれば、それもかなわぬ事となってしまうのだ。

そして、社会的信用の問題だ。悲しいかな現在の日本では、仕事をコロコロ変えるようなヤツは信用されない。フリーターなる存在が市民権を得てきた昨今ではあるが、それでもやはり、世間の風は冷たい。

しかし、そんな障害を乗り越えてでも、目標を持って、前向きに転職を考えるのであれば、僕はあえて反対しない。なぜなら、僕は転職をして本当によかったと思っているからだ。別に以前の会社がつまらなかったというワケではない。フタをあけてみなけりゃわからないっていう事よっ!! 確かに仕事量は倍増してるけど、今、何より嬉しいのは、以前と比較して、より純粋に"音楽ファン"でいられるという事だ。

自分の未来は、自分で築けっていう事だよな。(うん、カッコイイ)

TENSHOKU? KISHOKU?★

今年で3回目と、すっかり年の終りの恒例となった(と思ってる)『パチ▸パチ・スタイル』いかがでしたか？「パチ▸パチ読本」という新企画も仲間に加わり、ど〜んと大増ページ、大ボリューム（定価そのまま）でお届けしました。フーッ、たいへんだったんだから（メチャ)。とか言ってるうちに、いろんなコトあった1988年ももうすぐ終り。そして新しい年1989年がやってきます。“いつだって一生懸命”を合言葉に、パチ▸パチも、1989年に、創刊5周年を迎えます。(ヤッタネ、ぱちぱち) 当然、いっぱいいっぱい新企画を今から考えてます。お楽しみに。じゃあ、また。

ART DIRECTION : JUN'ICHI SOMEYA
=HEADBUTT
DESIGNER : JUN'ICHI SOMEYA
KAZUO FUKUDA
TOSHIHIRO MORI
"YOU"ICHI SUZUKI
MASAKI MAEKAWA
YOSHIHIRO SHIMIZU
MASAHITO KOIWA
MUTSUMI ITO
=HEADBUTT
EDITORIAL DIRECTOR : TERUKI AGO
EDITOR : TERUKI AGO
HIDEAKI WATANABE
ERIKO YAMAZAKI
YOSHIMI YOSHIDA
TAKASHI HAGA
ETSUKO IKEDA
HIRONA SUZUKI
ALL WRITERS : KYOKO MORITA
MIHO UTSUNOMIYA
KYOKO SANO
AKIKO ADACHI
KUMIKO FUKUOKA
MAYUMI TAKAYAMA
TOMOMI NONAKA
TATSUYA MIZUMURA
MISATO KONDA
EIKO FUJISAWA
HIDEKI TAKE
TAKAO NAKAGAWA
PHOTOGRAPHERS : YORIHITO YAMAUCHI
MASANORI KATO
NAOTO OHKAWA
HIDEO CANNO
GORO IWAOKA
HISAKO OHKUBO
SHINYA INOUE
YUKIO FUKUZATO
SHINJI TAGUCHI
ATSUSHI UEDA
FUJI TOGAWA
KENJI TSUKAGOSHI
FUMIO NAKAGAWA
YOSHIAKI SUGIYAMA

OPENING COMIX : MIEKO HARA
ILLUSTRATORS : JUN'ICHI SOMEYA
KAYOKO ASAMI
ASSISTANT : AKI ITO
YASUYO TANAKA
KATSURA SHIMODA

pati-pati style

パチ・パチ増刊 スタイル

1990年1月10日発行

発行人▼吾郷輝樹
編集人▼吾郷輝樹
発行所▼株式会社CBSソニー出版
〒102 東京都千代田区五番町6-2
電話03・234・7986[編集] 03・234・5811[販売] 03・234・5051[広告]

雑誌コード 62935－50 定価1,010円(本体981円) 印刷 凸版印刷株式会社